

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四十七冊

成 重 遺 跡 I

第一分冊

2004. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日 本 道 路 公 団
香 川 県 土 木 部

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四十七冊

成 重 遺 跡 I

第一分冊

2004. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日 本 道 路 公 団
香 川 県 土 木 部

序 文

四国横断自動車道（津田～引田）は、県内の高速道路網の完成を目指して、平成5年度の施工命令後継続して建設が進められ、平成13年春に完成いたしました。

この高速道路建設に先立ち、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは平成8年度から路線内の埋蔵文化財の発掘調査を香川県教育委員会の委託を受けて実施してまいりました。また、発掘調査と並行して、平成11年度から出土品の整理および発掘調査報告書刊行業務も香川県教育委員会の委託を受けて実施しております。

このたび「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十七冊」として刊行いたしますのは、東かがわ市白鳥に所在する成重遺跡についてであります。

成重遺跡は、弥生時代から江戸時代までの遺構・遺物が確認されています。中でも弥生時代の集落では、中期から後期にかけての多く竪穴住居跡や掘立柱建物跡が確認され、弥生時代を通じて継続する拠点的な集落であったことが解りました。

本報告書が、香川県の歴史研究に広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理に至るまでの間、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元関係各位に多大な御援助と御協力をいただきました。

ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年 3月

財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター
所 長 中 村 仁

例 言

1. 本報告書は、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県東かがわ市白鳥（調査時は大川郡白鳥町白鳥）に所在する成重遺跡（なりしげいせき）の報告を収録した。本報告では調査区中央部を縦断する国道318号より東側の調査区（Ⅰ区・Ⅱ区）全体と、国道318号より西側調査区（Ⅲ区・Ⅳ区・Ⅴ区）の古墳時代以降について『成重遺跡Ⅰ』として報告する。西側の調査区（Ⅲ区・Ⅳ区・Ⅴ区）の弥生時代の報告については『成重遺跡Ⅱ』として別途報告する予定である。

2. 発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団・香川県土木部から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3. 発掘調査の期間および発掘調査担当は以下のとおりである。

予備調査 期間 平成9年2月～3月

担当 中西昇、北山健一郎、吉田智、住野正和、松本和彦、福西由美子、森川歩

本調査 期間 平成9年4月1日～平成10年3月31日

担当 長元茂樹、西岡達哉、森格也、池田道雄、多田愼、松岡宏一、豊島修、信里芳紀、長井博志、乗松真也、森澤千尋、徳永（東条）貴美、香川直孝、山坂浩樹

期間 平成10年4月1日～平成11年3月31日

担当 長元茂樹、森格也、多田佳弘、多田愼、信里芳紀、松本和彦、森澤千尋、香川直孝、大屋敷慶子、藤澤正則

期間 平成11年6月1日～平成12年3月31日

担当 片桐孝浩、多田佳弘、溝渕大輔、長井博志、多田歩、正山泰久

4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

香川県土木部横断自動車道対策総室、香川県長尾土木事務所横断道対策課、白鳥町横断道対策課、白鳥町教育委員会、四国横断自動車道白鳥町成重地区対策協議会、地元自治会、地元水利組合

5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の執筆・編集は森、信里、長井が担当し、分担は目次に付したとおりである。

6. 報告書の作成にあたっては、下記の方々の御教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

田中清美（財団法人大阪市文化財協会）、中西克宏（東大阪市立郷土博物館）、林部 均（奈良県立橿原考古学研究所）

7. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標第IV系の北であり、標高は東京湾平均海面（T. P.）を基準としている。

また、遺構は下記の略号により表示している。

S B 掘立柱建物跡 S D 溝状遺構 S F 焼成遺構 S H 竪穴住居跡 S K 土坑
S P 柱穴 S R 自然河川 S T 埋葬遺構 S X 不明遺構

8. 本遺跡の報告にあたっては、下記の方々に鑑定、分析を依頼した。

別府大学 本田光子（赤色顔料分析）香川大学 谷山譲（石材鑑定）独立行政法人文化財研究所
奈良文化財研究所 松井 章（骨鑑定）株式会社古環境研究所（樹種鑑定）パリアーヴェイ株式会社
（花粉分析・放射性炭素年代測定）安来市体育文化振興財団 村川義行（鉄滓分析）

9. 遺物観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1998 年度版』による。

10. 本報告書の石器実測図の網目は摩滅痕を、輪郭線の周囲の実線のうち矢印のものは摩滅・擦痕、使用痕の範囲を、実線の先端部が矢印でないものは敲打痕の範囲を示している。

11. 遺物観察表の中での残存率は、図化した部分についての残存率であり、遺物全体に対するものではない。

12. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高を示している。

13. 本書で使用する「第1面」「第2面」の用語は、調査時における検出面の意味で、正確な遺構面ではない。

14. 本書で使用する測地系は、「日本測地系」である。

本文目次

第1分冊

第I章 調査に至る経緯と経過

- 第1節 調査に至る経緯…………… (森) 1
- 第2節 調査の経過…………… (森) 5

第II章 地理・歴史的環境

- 第1節 地理的環境…………… (信里) 9
- 第2節 歴史的環境…………… (信里) 16

第III章 検出された遺構・遺物

- 第1節 I・II区基本層序…………… (信里) 23
- 第2節 I区の調査…………… (信里) 30
- 第3節 II区の調査…………… (信里) 109
- 第4節 III区の調査…………… (森) 240
- 第5節 IV区の調査…………… (長井) 255
- 第6節 V区の調査…………… (森・長井) 305

第2分冊

第IV章 まとめ

第1節 自然科学分析

- 1. 成重遺跡出土の赤色顔料…………… (志賀・本田) 1
- 2. 成重遺跡出土製鉄関連遺物の分析調査…………… (村川) 4
- 3. 成重遺跡における樹種同定…………… (古環境研究所) 15
- 4. 成重遺跡における花粉分析及び放射性炭素年代測定…………… (ハ°リ)・サーヴ°エイ) 20

第2節 調査成果のまとめ

- 1. I・II区の遺構変遷…………… (信里) 25
- 2. III～V区の遺構変遷…………… (長井) 32
- 3. 東讃地域の弥生集落の動態…………… (信里) 36
- 4. 古墳時代の土器…………… (森) 48

写真図版

C D

出土遺物観察表

遺構対照表

挿図目次

<p>第1図 遺跡位置図 1</p> <p>第2図 四国横断自動車道（津田～引田）路線図・ 埋蔵文化包蔵地..... 2</p> <p>第3図 調査区割図と旧調査区割図（1/4000） 6</p> <p>第4図 遺跡周辺の地形面の概略 10</p> <p>第5図 周辺の遺跡分布 17</p> <p>第6図 10 cm等高線による現地表面の微地形 11.12</p> <p>第7図 遺構検出面と東西方向の土層図 13.14</p> <p>第8図 遺構配置図（第1検出面） 19.20</p> <p>第9図 遺構配置図（第2検出面） 21.22</p> <p>第10図 土層断面 その1 24</p> <p>第11図 土層断面 その2 25</p> <p>第12図 土層断面 その3 27</p> <p>第13図 土層断面 その4 28</p> <p>第14図 土層断面 その5 29</p> <p>第15図 I区 遺構配置図 31.32</p> <p>第16図 I区 埋積谷遺物出土状況図 34</p> <p>第17図 I区 埋積谷出土遺物実測図 35</p> <p>第18図 I区 SH01 平・断面及び出土遺物実測図 35</p> <p>第19図 I区 SH02 平・断面図 36</p> <p>第20図 I区 SH02 出土遺物実測図 37</p> <p>第21図 I区 SH03 平・断面及び出土遺物実測図 38</p> <p>第22図 I区 SH04 平・断面図 40</p> <p>第23図 I区 SH04 炭化材出土状況図 41</p> <p>第24図 I区 SH04 出土遺物実測図 その1 42</p> <p>第25図 I区 SH04 出土遺物実測図 その2 43</p> <p>第26図 I区 SH05 平・断面及び出土遺物実測図 44</p> <p>第27図 I区 SH06 平・断面図 45</p> <p>第28図 I区 SH06 出土遺物実測図 46</p> <p>第29図 I区 SH07 平・断面図 47</p> <p>第30図 I区 SH07 出土遺物実測図 49</p> <p>第31図 I区 SB15.20 平・断面図 50</p> <p>第32図 I区 SB19 平・断面図及び出土遺物実測図 51</p> <p>第33図 I区 SE02 平・断面図及び出土遺物実測図 その1 52</p>	<p>第34図 I区 SE02 出土遺物実測図 その2 53</p> <p>第35図 I区 SE03 平・断面図及び出土遺物実測図 その1 55</p> <p>第36図 I区 SE03 出土遺物実測図 その2 56</p> <p>第37図 I区 ST01 平・断面図及び出土遺物実測図 56</p> <p>第38図 I区 ST02～05 平・断面図及び出土遺物実測図 58</p> <p>第39図 I区 SK21.23～25.34.35 平・断面図 59</p> <p>第40図 I区 SK40.53.58.56.60.65 平・断面図 61</p> <p>第41図 I区 SK88～90 平・断面図 62</p> <p>第42図 I区 SK 出土遺物実測図（弥生時代） 63</p> <p>第43図 I区 SD42.43.51 平・断面図及び 出土遺物実測図 その1 65</p> <p>第44図 I区 SD51 出土遺物実測図 その2 66</p> <p>第45図 I区 SX09.10.12.13 平・断面図及び 出土遺物実測図 68</p> <p>第46図 I区 SB01～04 平・断面図 70</p> <p>第47図 I区 SB05～08 平・断面図 72</p> <p>第48図 I区 SB09～11 平・断面図 74</p> <p>第49図 I区 SB12～14.16 平・断面図 76</p> <p>第50図 I区 SB17.18 平・断面図 77</p> <p>第51図 I区 SB 関連出土遺物実測図 78</p> <p>第52図 I区 SE01 平・断面図及び出土遺物実測図 その1 79</p> <p>第53図 I区 SE01 出土遺物実測図 その2 80</p> <p>第54図 I区 SE01 出土遺物実測図 その3 81.82</p> <p>第55図 I区 SE01 出土遺物実測図 その4 83.84</p> <p>第56図 I区 SE01 出土遺物実測図 その5 85</p> <p>第57図 I区 SE01 出土遺物実測図 その6 86</p> <p>第58図 I区 SK09.10.16.17.20.28 平・断面図 87</p> <p>第59図 I区 SK46.47.61.98.62 平・断面図 88</p> <p>第60図 I区 SK68～71.76～78.83 平・断面図 90</p> <p>第61図 I区 SK 出土遺物実測図（古代～近世） 91</p> <p>第62図 I区 SD01 他平・断面図 93</p> <p>第63図 I区 SD 出土遺物実測図 95</p>
--	--

第 64 図	I 区 SX01 ~ 04 平・断面図及び出土遺物実測図	97	第 89 図	II 区 第 2 検出面 SH09 平・断面図及び 出土遺物実測図.....	126
第 65 図	I 区 SX05 平・断面図及び出土遺物実測図.....	98	第 90 図	II 区 第 2 検出面 SH10 平・断面図及び 出土遺物実測図.....	127
第 66 図	I 区 SX06.07 平・断面図及び出土遺物実測図	99	第 91 図	II 区 第 2 検出面 SB01 ~ 04 平・断面図.....	129
第 67 図	I 区 SX14.15 平・断面図及び出土遺物実測図	100	第 92 図	II 区 第 2 検出面 SB05 平・断面図及び SB02.05 出土遺物実測図	130
第 68 図	I 区 SP 出土遺物実測図 その 1.....	102	第 93 図	II 区 第 2 検出面 ST01 ~ 04 平・断面図及び ST04 出土遺物実測図	131
第 69 図	I 区 SP 出土遺物実測図 その 2.....	103	第 94 図	II 区 第 2 検出面 ST05 平・断面図及び 出土遺物実測図.....	132
第 70 図	I 区 遺構外出土遺物実測図 その 1	104	第 95 図	II 区 第 2 検出面 SE02 平・断面図及び 出土遺物実測図.....	133
第 71 図	I 区 遺構外出土遺物実測図 その 2	105	第 96 図	II 区 第 2 検出面 SK09.12.33 平・断面図及び 出土遺物実測図.....	135
第 72 図	I - 4 区 東部上層遺構平面図	106	第 97 図	II 区 第 2 検出面 SK34.35.39.41 平・断面図及び SK41 出土遺物実測図	137
第 73 図	II 区 第 2 検出面遺構配置図.....	107.108	第 98 図	II 区 第 2 検出面 SK47.48.60 平・断面図及び SK47 出土遺物実測図	138
第 74 図	II 区 第 2 検出面 SH01 平・断面図及び 出土遺物実測図.....	110	第 99 図	II 区 第 2 検出面 SK66.69.73 平・断面図	139
第 75 図	II 区 第 2 検出面 SH02 平・断面図及び 出土遺物実測図.....	111	第 100 図	II 区 第 2 検出面 SD06 他平・断面図及び 出土遺物実測図	141
第 76 図	II 区 第 2 検出面 SH03.04 平・断面図及び SH03 出土遺物実測図	112	第 101 図	II 区 第 2 検出面 SP 出土遺物実測図	142
第 77 図	II 区 第 2 検出面 SH04 出土遺物実測図.....	113	第 102 図	II 区 第 2 検出面 SX01 上層平・立・断面図	144
第 78 図	II 区 第 2 検出面 SH05 平・断面図	114	第 103 図	II 区 第 2 検出面 SX01 上層遺物分布図	145
第 79 図	II 区 第 2 検出面 SH05 石器分布図.....	115	第 104 図	II 区 第 2 検出面 SX01 下層 SE01 平・断面図 及び遺物分布図	146
第 80 図	II 区 第 2 検出面 SH05 出土遺物実測図 その 1	116	第 105 図	II 区 第 2 検出面 SX01 上層出土遺物実測図 その 1	147
第 81 図	II 区 第 2 検出面 SH05 出土遺物実測図 その 2	117	第 106 図	II 区 第 2 検出面 SX01 上層出土遺物実測図 その 2	148
第 82 図	II 区 第 2 検出面 SH05 出土遺物実測図 その 3	118	第 107 図	II 区 第 2 検出面 SX01 上層出土遺物実測図 その 3	149
第 83 図	II 区 第 2 検出面 SH06 平・断面図	119	第 108 図	II 区 第 2 検出面 SX01 下層 SE01 平面図及び 出土遺物実測図	150
第 84 図	II 区 第 2 検出面 SH06 出土遺物実測図.....	120	第 109 図	II 区 第 2 検出面 SX02 平・断面図.....	152
第 85 図	II 区 第 2 検出面 SH07 平・断面図及び 出土遺物実測図.....	121			
第 86 図	II 区 第 2 検出面 SH08 上層平・断面図	122			
第 87 図	II 区 第 2 検出面 SH08 下層平・断面図及び 上層住居出土遺物実測図.....	123			
第 88 図	II 区 第 2 検出面 SH08 下層出土遺物実測図	124			

第 110 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX02 遺物分布図及び 下層遺構平面図	153	第 130 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX08 出土遺物実測図 その 1	175
第 111 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX02 出土遺物実測図 その 1	154	第 131 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX08 出土遺物実測図 その 2	176
第 112 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX02 出土遺物実測図 その 2	155	第 132 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX08 出土遺物実測図 その 3	177
第 113 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX02 出土遺物実測図 その 3	156	第 133 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX08 出土遺物実測図 その 4	178
第 114 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX03 平・断面図	157	第 134 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX08 出土遺物実測図 その 5	179
第 115 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX03 遺物分布図及び 下層遺構平面図	158	第 135 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX08 出土遺物実測図 その 6	180
第 116 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX03 出土遺物実測図 その 1	159	第 136 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX08 出土遺物実測図 その 7	181
第 117 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX03 出土遺物実測図 その 2	160	第 137 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX08 出土遺物実測図 その 8	182
第 118 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX04 平・断面図及び 遺物分布図	161	第 138 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX08 出土遺物実測図 その 9	183
第 119 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX04 下層遺構平面図	162	第 139 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX09 平・断面図及び 出土遺物実測図 その 1	185
第 120 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX04 出土遺物実測図 その 1	163	第 140 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX09 出土遺物実測図 その 2	186
第 121 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX04 出土遺物実測図 その 2	164	第 141 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX12.14 平・断面図及び 出土遺物実測図	187
第 122 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX04 出土遺物実測図 その 3	165	第 142 図	Ⅱ区 第 2 検出面上の微地形	188
第 123 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX05 平・断面・遺物分布図 及び下層遺構平面図	166	第 143 図	Ⅱ区 第 2 検出面谷 1 断面図及び 遺物分布図	189
第 124 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX05 出土遺物実測図	167	第 144 図	Ⅱ区 第 2 検出面谷 1 出土遺物実測図 その 1	190
第 125 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX06 平・断面図及び 遺物分布図	168	第 145 図	Ⅱ区 第 2 検出面谷 1 出土遺物実測図 その 2	191
第 126 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX06 出土遺物実測図 その 1	169	第 146 図	Ⅱ区 第 2 検出面谷 1 出土遺物実測図 その 3	192
第 127 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX06 出土遺物実測図 その 2	170	第 147 図	Ⅱ区 第 2 検出面谷 2 断面図 その 1	194
第 128 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX07 平・断面・遺物分布図 及び出土遺物実測図	172	第 148 図	Ⅱ区 第 2 検出面谷 2 断面図 その 2	195
第 129 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SX08 平・断面図	174	第 149 図	Ⅱ区 第 2 検出面 SK27 平・断面図及び 谷 2.SK27 出土遺物実測図 その 1	196

第 150 図	Ⅱ区 第 2 検出面谷 2 出土遺物実測図 その 2	197	第 177 図	Ⅲ区 第 1 面 S H 01 平・断面図	243
第 151 図	Ⅱ区 第 2 検出面谷 3 断面図及び 出土遺物実測図	198	第 178 図	Ⅲ区 第 1 面 S H 01 遺物出土状況	243
第 152 図	Ⅱ区 第 2 検出面落ち込み 1.2.3 断面図及び 出土遺物実測図	199	第 179 図	Ⅲ区 第 1 面 S H 01 出土遺物 (1)	244
第 153 図	Ⅱ区 遺構外出土遺物実測図 その 1	200	第 180 図	Ⅲ区 第 1 面 S H 01 出土遺物 (2)	245
第 154 図	Ⅱ区 遺構外出土遺物実測図 その 2	201	第 181 図	Ⅲ区 第 1 面 S H 02 平・断面図、出土遺物	247
第 155 図	Ⅱ区 第 1 検出面 遺構配置図	203.204	第 182 図	Ⅲ区 第 1 面 S H 03・04 平・断面図	248
第 156 図	Ⅱ区 第 1 検出面 SH01 平・断面図及び 出土遺物実測図	205	第 183 図	Ⅲ区 第 1 面 S H 03・04 遺物出土状況	248
第 157 図	Ⅱ区 第 1 検出面 SB01～03 平・断面図	207	第 184 図	Ⅲ区 第 1 面 S H 03 出土遺物	249
第 158 図	Ⅱ区 第 1 検出面 SB04～07 平・断面図	209	第 185 図	Ⅲ区 第 1 面 S H 03・04 出土遺物	249
第 159 図	Ⅱ区 第 1 検出面 SB08～10 平・断面図	210	第 186 図	Ⅲ区 第 1 面 S H 04 出土遺物 (1)	250
第 160 図	Ⅱ区 第 1 検出面 SB11.12 平・断面図	211	第 187 図	Ⅲ区 第 1 面 S H 04 出土遺物 (2)	251
第 161 図	Ⅱ区 第 1 検出面 SB 関連出土遺物実測図	212	第 188 図	Ⅲ区 第 1 面 S K 01 平・断面図、出土遺物	253
第 162 図	Ⅱ区 第 1 検出面 ST01～07 平・断面図及び ST05 出土遺物実測図	216	第 189 図	Ⅲ区 第 1 面 S X 01 平・断面図、出土遺物	254
第 163 図	Ⅱ区 第 1 検出面 ST08～17 平・断面図	218	第 190 図	Ⅲ区 第 1 面包含層出土遺物	254
第 164 図	Ⅱ区 第 1 検出面 ST18～25 平・断面図及び ST20 出土遺物実測図	220	第 191 図	Ⅳ区 新旧調査区対照表	255
第 165 図	Ⅱ区 第 1 検出面 ST26～32 平・断面図	222	第 192 図	Ⅳ区 第 1 面遺構配置図	256
第 166 図	Ⅱ区 第 1 検出面 ST33～42 平・断面図	225	第 193 図	Ⅳ区 第 1 面 SH01 平・断面図、出土遺物	258
第 167 図	Ⅱ区 第 1 検出面 ST43～49 平・断面図及び ST44.45.49 出土遺物実測図	228	第 194 図	Ⅳ区 第 1 面 SH02 平・断面図、出土遺物	259
第 168 図	Ⅱ区 第 1 検出面 ST50～54 平・断面図及び ST51～53 出土遺物実測図	230	第 195 図	Ⅳ区 第 1 面 SH03 平・断面図、出土遺物、 遺物出土状況拡大図	260
第 169 図	Ⅱ区 第 1 検出面 SK02.04.09.30.32.33.42 平・断面図及び出土遺物実測図	232	第 196 図	Ⅳ区 第 1 面 SH04 平・断面図、出土遺物、 遺物出土状況拡大図	261
第 170 図	Ⅱ区 第 1 検出面 SK44.47.52 平・断面図	234	第 197 図	Ⅳ区 第 1 面 SH05 平・断面図、出土遺物	261
第 171 図	Ⅱ区 第 1 検出面 SD12.13.17.18.24.55 平・断面図及び出土遺物実測図	235	第 198 図	Ⅳ区 第 1 面 SH06・S H 06 - S K 01、S K 02 平・断面図、出土遺物	262
第 172 図	Ⅱ区 第 1 検出面 SX01 平・断面図及び 出土遺物実測図	236	第 199 図	Ⅳ区 第 1 面 S K 01 平・断面図、出土遺物	264
第 173 図	Ⅱ区 第 1 検出面 SP 出土遺物実測図	237	第 200 図	Ⅳ区 第 1 面 S K 02 平・断面図、出土遺物	265
第 174 図	Ⅱ区 国道トノ部分平・断面図	239	第 201 図	Ⅳ区 第 1 面 S K 03 平・断面図、出土遺物	266
第 175 図	Ⅲ区 新旧調査区割図	240	第 202 図	Ⅳ区 第 1 面 S K 04 平・断面図、出土遺物	266
第 176 図	Ⅲ区 第 1 面遺構配置図	241.242	第 203 図	Ⅳ区 第 1 面 S K 05 平・断面図	267
			第 204 図	Ⅳ区 第 1 面 S P 01～03 出土遺物	267
			第 205 図	Ⅳ区 第 1 面 S A 01 平・断面図	267
			第 206 図	Ⅳ区 第 1 面 S A 02 平・断面図	268
			第 207 図	Ⅳ区 第 1 面 S B 01 平・断面図	268
			第 208 図	Ⅳ区 第 1 面 S B 02 平・断面図、出土遺物	269
			第 209 図	Ⅳ区 第 1 面 S B 03 平・断面図	270
			第 210 図	Ⅳ区 第 1 面 S D 01・02 断面図、出土遺物 ……………	271

第211图	IV区	第1面S K 06平・断面图、出土遺物	271	第249图	IV区	第1面S D 05断面图	290
第212图	IV区	第1面S K 07平・断面图、出土遺物	272	第250图	IV区	第1面S D 06断面图	290
第213图	IV区	第1面S K 08平・断面图	273	第251图	IV区	第1面S K 29平・断面图	292
第214图	IV区	第1面S K 09・10平・断面图	273	第252图	IV区	第1面S K 30平・断面图	292
第215图	IV区	第1面S K 11平・断面图、出土遺物	273	第253图	IV区	第1面S K 31平・断面图	292
第216图	IV区	第1面S K 12平・断面图	274	第254图	IV区	第1面S K 32平・断面图	292
第217图	IV区	第1面S K 13平・断面图	274	第255图	IV区	第1面S K 33平・断面图	292
第218图	IV区	第1面S K 14平・断面图	274	第256图	IV区	第1面S K 34平・断面图	294
第219图	IV区	第1面S K 15平・断面图	274	第257图	IV区	第1面S K 35平・断面图	294
第220图	IV区	第1面S K 16平・断面图	274	第258图	IV区	第1面S K 36平・断面图	294
第221图	IV区	第1面S K 17平・断面图	274	第259图	IV区	第1面S K 37平・断面图	294
第222图	IV区	第1面S K 18平・断面图	276	第260图	IV区	第1面S K 38平・断面图	294
第223图	IV区	第1面S K 19平・断面图	276	第261图	IV区	第1面S K 40平・断面图	294
第224图	IV区	第1面S K 20平・断面图	276	第262图	IV区	第1面S K 39平・断面图	295
第225图	IV区	第1面S K 22平・断面图、出土遺物	276	第263图	IV区	第1面S K 41平・断面图	295
第226图	IV区	第1面S K 21平・断面图	276	第264图	IV区	第1面S K 42平・断面图	295
第227图	IV区	第1面S K 23平・断面图	278	第265图	IV区	第1面S K 43平・断面图	295
第228图	IV区	第1面S K 25平・断面图	278	第266图	IV区	第1面S K 44平・断面图	296
第229图	IV区	第1面S K 26平・断面图	278	第267图	IV区	第1面S K 45平・断面图	296
第230图	IV区	第1面S K 24平・断面图、出土遺物	278	第268图	IV区	第1面S K 46平・断面图	296
第231图	IV区	第1面S K 27平・断面图	279	第269图	IV区	第1面S P 08～11出土遺物	296
第232图	IV区	第1面S K 28平・断面图	279	第270图	IV区	第1面S T 01～04平・断面图	299
第233图	IV区	第1面S P 05～07出土遺物	279	第271图	IV区	第1面S T 05～08平・断面图	301
第234图	IV区	第1面S B 04平・断面图	280	第272图	IV区	第1面S T 09平・断面图	302
第235图	IV区	第1面S B 05平・断面图	281	第273图	IV区	第1面S T 10・S T 11平・断面图	302
第236图	IV区	第1面S B 06平・断面图	282	第274图	IV区	第1面包含層出土遺物(1)	302
第237图	IV区	第1面S B 07平・断面图	283	第275图	IV区	第1面包含層出土遺物(2)	303
第238图	IV区	第1面S B 08平・断面图	283	第276图	IV区	第1面包含層出土遺物(3)	304
第239图	IV区	第1面S B 09平・断面图	284	第277图	V区	新旧調査区割り图	305
第240图	IV区	第1面S B 10平・断面图	284	第278图	V区	第1面遺構配置图	307.308
第241图	IV区	第1面S B 11平・断面图	285	第279图	V区	第1面1・2号墳配置图	309
第242图	IV区	第1面S B 12平・断面图	287	第280图	V区	第1面1号墳土層断面图	310
第243图	IV区	第1面S B 14平・断面图	287	第281图	V区	第1面1号墳墓壇平面图	311
第244图	IV区	第1面S B 13平・断面图	288	第282图	V区	第1面1号墳平・立面图	313
第245图	IV区	第1面S B 15平・断面图	289	第283图	V区	第1面1号墳遺物出土狀況图	314
第246图	IV区	第1面S B 16平・断面图	289	第284图	V区	第1面1号墳棺配置推定图	315
第247图	IV区	第1面S D 03断面图	290	第285图	V区	第1面1号墳出土遺物(1)	317
第248图	IV区	第1面S D 04断面图	290	第286图	V区	第1面1号墳出土遺物(2)	318

第 287 图	V 区 第 1 面 2 号填土层断面图	319	第 318 图	V 区 第 1 面 S K 04 平·断面图、 出土遗物	337
第 288 图	V 区 第 1 面 2 号坟墓填平面图	320	第 319 图	V 区 第 1 面 S K 05 平·断面图、 出土遗物	338
第 289 图	V 区 第 1 面 2 号填平·立面图	320	第 320 图	V 区 第 1 面 S K 06 平·断面图、 出土遗物	338
第 290 图	V 区 第 1 面 2 号填遗物出土状况图	321	第 321 图	V 区 第 1 面 S K 07 平·断面图、 出土遗物	339
第 291 图	V 区 第 1 面 2 号填出土遗物	322	第 322 图	V 区 第 1 面 S K 08 平·断面图、 出土遗物	339
第 292 图	V 区 第 1 面 S K 01 平·断面图、 出土遗物	323	第 323 图	V 区 第 1 面 S K 09 平·断面图、 出土遗物	340
第 293 图	V 区 第 1 面 S K 02 平·断面图	324	第 324 图	V 区 第 1 面 S K 10 平·断面图、 出土遗物	341
第 294 图	V 区 第 1 面 S P 01·S P 02 出土遗物	324	第 325 图	V 区 第 1 面 S K 11 平·断面图、 出土遗物	341
第 295 图	V 区 第 1 面 S A 01 平·断面图	324	第 326 图	V 区 第 1 面 S K 12 平·断面图	342
第 296 图	V 区 第 1 面 S A 02 平·断面图	325	第 327 图	V 区 第 1 面 S K 13 平·断面图	342
第 297 图	V 区 第 1 面 S B 01 平·断面图、 出土遗物	325	第 328 图	V 区 第 1 面 S K 14 平·断面图	342
第 298 图	V 区 第 1 面 S B 02 平·断面图	326	第 329 图	V 区 第 1 面 S K 15 平·断面图	343
第 299 图	V 区 第 1 面 S B 03 平·断面图	326	第 330 图	V 区 第 1 面 S K 16 平·断面图	343
第 300 图	V 区 第 1 面 S B 04 平·断面图	327	第 331 图	V 区 第 1 面 S K 17 平·断面图	343
第 301 图	V 区 第 1 面 S B 05 平·断面图	327	第 332 图	V 区 第 1 面 S K 18 平·断面图	343
第 302 图	V 区 第 1 面 S B 06 平·断面图	328	第 333 图	V 区 第 1 面 S K 19 平·断面图	343
第 303 图	V 区 第 1 面 S B 07 平·断面图	328	第 334 图	V 区 第 1 面 S K 20 平·断面图	345
第 304 图	V 区 第 1 面 S B 08 平·断面图	329	第 335 图	V 区 第 1 面 S K 21 平·断面图	345
第 305 图	V 区 第 1 面 S B 09 平·断面图、 出土遗物	329	第 336 图	V 区 第 1 面 S K 23 平·断面图	345
第 306 图	V 区 第 1 面 S B 10 平·断面图、 出土遗物	329	第 337 图	V 区 第 1 面 S K 22 平·断面图	345
第 307 图	V 区 第 1 面 S B 11 平·断面图	330	第 338 图	V 区 第 1 面 S K 24 平·断面图	346
第 308 图	V 区 第 1 面 S B 12 平·断面图	330	第 339 图	V 区 第 1 面 S K 25·26 平·断面图	346
第 309 图	V 区 第 1 面 S B 13 平·断面图	331	第 340 图	V 区 第 1 面 S K 27 平·断面图	347
第 310 图	V 区 第 1 面 S B 14 平·断面图	331	第 341 图	V 区 第 1 面 S K 28 平·断面图	347
第 311 图	V 区 第 1 面 S B 15 平·断面图	332	第 342 图	V 区 第 1 面 S P 03·04·06 平·断面图 S P 03~10 出土遗物	348
第 312 图	V 区 第 1 面 S B 16 平·断面图	333	第 343 图	V 区 第 1 面 S P 11~16 出土遗物	349
第 313 图	V 区 第 1 面 S B 17 平·断面图	333	第 344 图	V 区 第 1 面 S P 17 平·断面图、 出土遗物	351
第 314 图	V 区 第 1 面 S B 18 平·断面图 S B 18 内 S P 01 出土遗物	334			
第 315 图	V 区 第 1 面 S B 19 平·断面图	334			
第 316 图	V 区 第 1 面 S D 01 平·断面图、 出土遗物	335			
第 317 图	V 区 第 1 面 S K 03 平·断面图、 出土遗物	336			

第345图	V区 第1面S P 18平·断面图、 出土遺物	351	第374图	V区 第1面S K 42平·断面图	373
第346图	V区 第1面S P 19平·断面图、 出土遺物	351	第375图	V区 第1面S P 20平·断面图	373
第347图	V区 第1面S X 01平·断面图、 出土遺物	352	第376图	V区 第1面S P 20出土遺物	373
第348图	V区 第1面S X 02·03平·断面图 S X 02出土遺物	353	第377图	V区 第1面S P 21平·断面图、 出土遺物	373
第349图	V区 第1面S X 02出土遺物	354	第378图	V区 第1面S X 05平·断面图、 出土遺物	374
第350图	V区 第1面S X 04平·断面图	355	第379图	V区 第1面S X 05·06出土遺物(1)	375
第351图	V区 第1面S B 20平·断面图	356	第380图	V区 第1面S X 06出土遺物(2)	376
第352图	V区 第1面S D 02~06断面图 S D 02出土遺物	357	第381图	V区 第1面S X 07平·断面图、 出土遺物	377
第353图	V区 第1面S F 01平·断面图、 出土遺物	358	第382图	V区 第1面(旧G 1·2区) 包含層出土遺物	378
第354图	V区 第1面S K 29平·断面图、 出土遺物	359	第383图	V区 第1面(旧G 3区)包含層出土遺物	378
第355图	V区 第1面S K 30平·断面图、出土遺物	360	第384图	V区 第1面(旧G 4区) 包含層出土遺物(1)	379
第356图	V区 第1面S K 31平·断面图	360	第385图	V区 第1面(旧G 4区) 包含層出土遺物(2)	380
第357图	V区 第1面S K 31出土遺物(1)	361	第386图	V区 第1面(旧G 4区) 包含層出土遺物(3)	381
第358图	V区 第1面S K 31出土遺物(2)	362	第387图	V区 第1面(旧G 4区) 包含層出土遺物(4)	382
第359图	V区 第1面S K 31出土遺物(3)	363	第388图	V区 第1面(旧G 4区) 包含層出土遺物(5)	383
第360图	V区 第1面S K 31出土遺物(4)	364	第389图	V区 第1面(旧G 4区) 包含層出土遺物(6)	384
第361图	V区 第1面S K 31出土遺物(5)	365	第390图	V区 第1面(旧G 4区) 包含層出土遺物(7)	385
第362图	V区 第1面S K 31出土遺物(6)	366	第391图	V区 第1面(旧G 4区) 包含層出土遺物(8)	386
第363图	V区 第1面S K 32平·断面图	367	第392图	V区 第1面(旧G 4区) 包含層出土遺物(9)	386
第364图	V区 第1面S K 32出土遺物	368	第393图	V区 第1面(旧G 5区)包含層出土遺物	387
第365图	V区 第1面S K 33平·断面图、 出土遺物	369	第394图	V区 第1面(旧G 6·8区) 包含層出土遺物(1)	387
第366图	V区 第1面S K 34平·断面图	369	第395图	V区 第1面(旧G 6·8区) 包含層出土遺物(2)	388
第367图	V区 第1面S K 34出土遺物	370			
第368图	V区 第1面S K 35平·断面图	371			
第369图	V区 第1面S K 37平·断面图	371			
第370图	V区 第1面S K 36平·断面图	371			
第371图	V区 第1面S K 38平·断面图	372			
第372图	V区 第1面S K 39平·断面图	372			
第373图	V区 第1面S K 40、41平·断面图	372			

第 396 図	V区 第1面 (旧G7区) 包含層出土遺物 (1) ……………	389
第 397 図	V区 第1面 (旧G7区) 包含層出土遺物 (2) ……………	390
第 398 図	赤色顔料写真 ……………	3
第 399 図	調査資料の外観 ……………	11
第 400 図	資料の顕微鏡観察組織 ……………	12
第 401 図	資料の顕微鏡観察組織 ……………	13
第 402 図	資料の硬度測定圧痕観察 (荷重 50 g) ……………	14
第 403 図	成重遺跡の炭化材 I ……………	16
第 404 図	成重遺跡の炭化材 II ……………	17
第 405 図	成重遺跡における各地点の模式柱状図および 試料採取位置 ……………	21
第 406 図	成重遺跡花粉分析プレパラートの状況写真 ……	23
第 407 図	I・II区遺構変遷図 その1 ……………	26
第 408 図	I・II区遺構変遷図 その2 ……………	28
第 409 図	I・II区遺構変遷図 その3 ……………	30
第 410 図	I・II区遺構変遷図 その4 ……………	31
第 411 図	III～IV区 第1面遺構変遷図 (1/1000) ……	33.34
第 412 図	遺跡分布図 ……………	37
第 413 図	成重遺跡周辺の中期後半段階住居群 ……………	38
第 414 図	東讃地区における弥生後期後半から 古墳時代初頭土器編年 ……………	41
第 415 図	原間遺跡における弥生後期後半から 終末期の住居配置 ……………	42
第 416 図	原間遺跡における住居群の変遷 その1 ……	44
第 417 図	原間遺跡における住居群の変遷 その2 ……	45
第 418 図	後期後半から終末にかけての 集落と墓地の分布状況 ……………	46
第 419 図	大庭寺遺跡出土土師器 その1 ……………	52
第 420 図	大庭寺遺跡出土土師器 その2 ……………	53

図版目次

図版 1	1. 遺跡遠景 南から 2. 遺跡遠景 東から
図版 2	1. I-1区全景 北から 2. I-2区全景 北東から

図版 3	1. I-11区南半部全景 西から 2. II-4区第2面 全景 東から
図版 4	1. II-6区第2面 全景 南西から 2. II-5区第2面 全景 東から
図版 5	1. II区第2面SX01上層検出状況 北から 2. II区第2面SX01上層 全景 北から
図版 6	1. II区第2面SX01上層 全景 西から 2. II区第2面SX01上層 全景 南西から 3. II区第2面SX01上層の礫群 東から 4. II区第2面SX01断面 東から
図版 7	1. II区第2面SX01断面 南から 2. II区第2面SX01断面 東から 3. II区第2面SX01上・下層間の堆積層 南から 4. II区第2面SX01上層と下層の礫群 南から
図版 8	1. II区第2面SX01下層SE01検出状況 南から 2. II区第2面SX01下層SE01検出状況 南から 3. II区第2面SX01下層SE01上層断面 西から 4. II区第2面SX01下層SE01下層断面 西から
図版 9	1. II区第2面SX01下層SE01全景 西から 2. II区第2面SX01下層SE01全景 南から 3. II区第2面SX05全景 西から 4. II区第2面SX05断面 北東から
図版 10	1. II区第2面SX05断面 北から 2. II区第2面SX06・07全景 南から 3. II区第2面SX06上層 全景 南から 4. II区第2面SX06下層検出状況 西から
図版 11	1. II区第2面SX06下層 全景 南西から 2. II区第2面SX06下層 全景 西から 3. II区第2面SX06下層断面 南から 4. II区第2面SX06下層断面 東から
図版 12	1. II区第2面SX06完掘状況 西から 2. II区第2面SX07全景 北から 3. II区第2面SX07断面 東から 4. II区第2面SX08検出状況 北から
図版 13	1. II区第2面SX08全景 北西から 2. II区第2面SX08全景 東から
図版 14	1. II区第2面SX08礫集中部 東から 2. II区第2面SX08礫集中部 南から

3. II区第2面S X 08 断面 南西から
4. II区第2面S X 08 断面 東から
- 図版 15 1. II区第2面S X 08 断面 南から
2. II区第2面S X 08 遺物出土状況 北から
3. II区第2面S X 08 遺物出土状況 西から
4. II区第2面S X 08 遺物出土状況 南から
5. II-6区北壁断面 南西から
6. II-5区北壁断面 南から
- 図版 16 1. II-8区北壁断面 南から
2. II-2区北壁断面 南から
3. II区第2面谷3断面 南から
- 図版 17 I-1.2区全景
- 図版 18 1. I-2区西半部全景
2. I-5区全景
- 図版 19 I-11区全景
- 図版 20 1. I-3区全景 北から
2. I-4区全景 南から
- 図版 21 1. I-5区全景 南西から
2. I-6区全景 北西から
- 図版 22 1. I-7区全景 東から
2. I-11区北半部全景 西から
- 図版 23 1. I区SH 01 全景 東から
2. I区SH 02 全景 西から
- 図版 24 1. I区SH 03 全景 西から
2. I区SH 04 全景 西から
- 図版 25 1. I区SH 04 炭化材検出状況 南から
2. I区SH 04 断面 北から
- 図版 26 1. I区SH 05 全景 西から
2. I区SH 06 全景 西から
- 図版 27 1. I区SH 06 断面 南から
2. I区SH 07 全景 西から
- 図版 28 1. I区SH 07 断面 南西から
2. I区S B 19 全景 南から
- 図版 29 1. I区S E 02 全景 西から
2. I区S E 02 断面 南から
3. I区S E 02 遺物出土状況 北から
4. I区S E 03 全景 東から
- 図版 30 1. I区S T 01～03 全景 南から
2. I区S T 04 全景 西から
3. I区S T 05 全景 西から
4. I区S T 05 断面 南から
- 図版 31 1. I区S D 51 全景 北から
2. I区S B 02 全景 北から
3. I区S B 03 全景 北から
4. I区S B 14 全景 南から
- 図版 32 1. I区S E 01 遺物出土状況 南から
2. I区S E 01 全景 南から
- 図版 33 1. I区S E 01 上層断面 東から
2. I区S E 01 下層断面 南から
3. I区S X 03 全景 北から
4. I区S X 02 全景 東から
- 図版 34 1. I区S X 04 全景 南から
2. I区S X 06 全景 西から
3. I-3区 埋積谷全景 北から
4. I-2区 北壁断面 南から
- 図版 35 1. II-1.2区第2面全景
- 図版 36 1. II-4区第2面全景
- 図版 37 1. II-5区第2面全景
2. II-6区第2面全景
- 図版 38 1. II-7.8区第2面全景
- 図版 39 1. II-9.8区第2面全景
- 図版 40 1. II-1区第2面全景 南から
2. II-4区第2面全景 南西から
- 図版 41 1. II-6区第2面全景 東から
2. II-7.8区第2面全景 東から
- 図版 42 1. II-8.9区第2面全景 北から
2. II-10区第2面全景 南西から
- 図版 43 1. II区第2面SH 01 全景 東から
2. II区第2面SH 02 全景 東から
3. II区第2面SH 02 炭化材検出状況 東から
- 図版 44 1. II区第2面SH 03.04 全景 東から
2. II区第2面SH 04 断面 東から
- 図版 45 1. II区第2面SH 05 全景 東から
2. II区第2面SH 05 断面 東から
3. II区第2面SH 05 中央炉断面 南西から
4. II区第2面SH 05 石器出土状況 南から

- 図版 46 1. II区第2面SH 06 全景 東から
2. II区第2面SH 07 全景 西から
- 図版 47 1. II区第2面SH 08 検出状況 北から
2. II区第2面SH 08 断面 東から
- 図版 48 1. II区第2面SH 08 全景 西から
2. II区第2面SH 08 全景 北から
- 図版 49 1. II区第2面SH 09 検出状況 北から
2. II区第2面SH 10 検出状況 西から
3. II区第2面SH 10 断面 東から
- 図版 50 1. II区第2面SB 01 全景 北から
2. II区第2面SB 03.04 全景 南から
- 図版 51 1. II区第2面ST 01～04 全景 南から
2. II区第2面ST 03 断面 西から
3. II区第2面ST 01 断面 西から
4. II区第2面ST 02 断面 西から
- 図版 52 1. II区第2面ST 05 全景 南から
2. II区第2面ST 05 全景 東から
3. II区第2面ST 05 断面 東から
4. II区第2面SE 02 全景 北から
- 図版 53 1. II区第2面SX 02 全景 東から
2. II区第2面SX 02 遺物出土状況 西から
3. II区第2面SX 02 断面 南から
4. II区第2面SX 02 断面 西から
- 図版 54 1. II区第2面SX 03 全景 東から
2. II区第2面SX 03 断面 南から
3. II区第2面SX 03 断面 南東から
4. II区第2面SX 04 全景 北から
- 図版 55 1. II区第2面SX 04 断面 北西から
2. II区第2面SX 04 断面 北から
3. II区第2面SX 09 断面 北から
4. II区第2面SX 09 全景 北から
- 図版 56 1. II区第2面谷1 全景 東から
2. II区第2面谷1 断面 南から
- 図版 57 1. II区第2面谷1 遺物出土状況 南から
2. II区第2面谷2内SK 27 全景 南から
3. II区第2面SK 12 断面 南から
4. II区第2面SK 41 全景 北から
- 図版 58 1. II区第2面SK 60 全景 東から
2. II区第2面SK 66 全景 南から
3. II区第2面SK 69 全景 南から
4. II区第2面SK 69 断面 南から
- 図版 59 1. II - 1.2区第1面全景
- 図版 60 1. II - 4区第1面全景
- 図版 61 1. II - 5区第1面全景
2. II - 6区第1面全景
- 図版 62 1. II - 7区第1面全景
2. II - 8.9区第1面全景
- 図版 63 1. II - 1.2区第1面全景 南から
2. II - 4区第1面全景 東から
- 図版 64 1. II - 4区第1面全景 南から
2. II - 5区第1面全景 西から
- 図版 65 1. II - 6区第1面全景 南から
2. II - 7区第1面全景 西から
- 図版 66 1. II - 7.8区第1面全景 東から
2. II区第1面SH 01 全景 北から
- 図版 67 1. II区第1面SB 03 全景 東から
2. II区第1面SB 04 全景 南から
3. II区第1面SB 08 全景 南から
4. II区第1面SB 12 全景 東から
- 図版 68 1. II区第1面ST 09～18 全景 南から
2. II区第1面ST 05 全景 北から
3. II区第1面ST 19 全景 南から
4. II区第1面ST 19 断面 西から
- 図版 69 1. II区第1面ST 20 全景 南から
2. II区第1面ST 23 全景 西から
3. II区第1面ST 27 全景 北から
4. II区第1面ST 29 全景 北から
5. II区第1面ST 33 全景 南から
- 図版 70 1. II区第1面ST 34～39 検出状況 北から
2. II区第1面ST 34～39 全景 北から
3. II区第1面ST 34.35 全景 東から
4. II区第1面ST 39 断面 北から
- 図版 71 1. II区第1面ST 43～51 全景 西から
2. II区第1面ST 49 全景 南から
3. II区第1面ST 49 断面 東から
4. II区第1面ST 49 断面 南から

- 図版 72 1. II区第1面 S T 50.51 全景 東から
2. II区第1面 S T 52～54 全景 西から
- 図版 73 I区 S H 02.04 S E 02.03 S T 05 出土遺物
- 図版 74 I区 S K 68 S D 51.66 S X 01 出土遺物
- 図版 75 I区 S X 01.02 出土遺物
- 図版 76 I区 S X 02～04 出土遺物
- 図版 77 I区 S X 05.06 出土遺物
- 図版 78 I区 S X 06、II区第2面 S H 05.06、II区第2面 S T 05 出土遺物
- 図版 79 II区第2面 S K 41、S X 04・08 出土遺物
- 図版 80 II区第2面 S X 08 出土遺物
- 図版 81 II区第2面 S X 08 出土遺物
- 図版 82 II区第2面 S X 08、谷1 出土遺物
- 図版 83 II区第2面谷1、谷2内 S K 27
II区第1面 S T 05 出土遺物
- 図版 84 I-2区下層埋積谷、S H 02.04、S E 03、S K 40
遺構外出土遺物
- 図版 85 I区遺構外 II区第2面 S H 03～05 出土遺物
- 図版 86 II区第2面 S H 05・09、S E 02、柱穴(1581)
出土遺物
- 図版 87 II区第2面 S X 01～06 出土遺物
- 図版 88 II区第2面 S X 06～08 遺構外出土遺物
- 図版 89 II区遺構外出土遺物
- 図版 90 III区第1面北半部全景(南から)、III区第1面南半部全景(南西から)
- 図版 91 III区第1面 S H 01(北から)、III区第1面 S H 02(東から)
- 図版 92 III区第1面 S H 03・04 全景(南東から)、III区第1面 S H 03 遺物出土状況(東から)
- 図版 93 III区第1面 S H 04 遺物出土状況(東から)、III区第1面 S K 01(東から)
- 図版 94 III区第1面 S H 01 出土遺物、III区第1面 S H 03・04 出土遺物
- 図版 95 III区第1面出土遺物
- 図版 96 III区第1面出土遺物
- 図版 97 III区第1面出土遺物
- 図版 98 III区第1面出土遺物
- 図版 99 III区第1面出土遺物
- 図版 100 III区第1面出土遺物
- 図版 101 IV区第1面全景
- 図版 102 IV区第1面(旧F2区西)全景、IV区第1面(旧F2区東)全景
- 図版 103 IV区第1面 S H 01 完掘状況(北から)、IV区第1面作業風景
- 図版 104 IV区第1面 S H 02 完掘状況(南から)、IV区第1面 S H 03 完掘状況(東から)
- 図版 105 IV区第1面 S H 03 遺物(14)出土状況(南から)、IV区第1面 S H 03 遺物(15)出土状況(南から)
- 図版 106 IV区第1面 S H 03 南北土層断面南半部(東から)、IV区第1面 S H 03 南北土層断面北半部(東から)
- 図版 107 IV区第1面 S H 04 遺物(17・18)出土状況(南から)、IV区第1面 S H 05 完掘状況(南から)
- 図版 108 IV区第1面 S B 01 全景(南から)、IV区第1面 S B 02 全景(南から)
- 図版 109 IV区第1面 S K 06 土層断面(南から)、IV区第1面 S K 07 遺物(58)出土状況(南から)
- 図版 110 IV区第1面 S K 07 遺物(62)出土状況(東から)、IV区第1面 S K 07 遺物(70)出土状況(東から)
- 図版 111 IV区第1面 S K 09～11 完掘状況(北から)、IV区第1面 S K 28・S D 01 完掘状況(南から)
- 図版 112 IV区第1面 S K 28 土層断面(東から)、IV区第1面 S B 12 完掘状況(南から)
- 図版 113 IV区第1面 S B 13 完掘状況(南から)、IV区第1面 S B 14 完掘状況(南から)
- 図版 114 IV区第1面 S K 29 土層断面(南から)、IV区第1面 S K 31 土層断面(南から)
- 図版 115 IV区第1面(旧E3区)全景(北東から)、IV区第1面 S T 01～04 検出状況(東から)
- 図版 116 IV区第1面 S T 01 土層断面(南から)、IV区第1面 S T 01～04 完掘状況(東から)
- 図版 117 IV区第1面(旧F2区東)全景(南から)、IV区第1面 S T 05～07 検出状況(東から)
- 図版 118 IV区第1面 S T 05 土層断面(南西から)、IV区第1面 S T 06 土層断面(南西から)
- 図版 119 IV区第1面出土遺物
- 図版 120 IV区第1面出土遺物

- 図版 121 IV区第1面出土遺物 1面2号墳基底石検出状況(東から)
- 図版 122 IV区第1面出土遺物 図版 143 V区第1面2号墳墳丘土層断面(南から)、V区第1面2号墳墳丘土層断面(南から)
- 図版 123 IV区第1面出土遺物 図版 144 V区第1面2号墳墳丘土層断面(西から)、V区第1面SK01検出状況(南東から)
- 図版 124 IV区第1面出土遺物 図版 145 V区第1面SB15(北から)、V区第1面SB16(西から)
- 図版 125 IV区第1面出土遺物 図版 146 V区第1面SB17(南から)、V区第1面SB18(北西から)
- 図版 126 V区第1面(旧G1・2区)全景 図版 147 V区第1面SB19(南から)、V区第1面SK06土層断面(南東から)
- 図版 127 V区第1面(旧G3区)全景(北から)、V区第1面(旧G4区)東半部全景(西から) 図版 148 V区第1面SK08礎出土状況(東から)、V区第1面SK10礎出土状況(北から)
- 図版 128 V区第1面(旧G4区)西半部全景(南西から)、V区第1面(旧G5区)全景(南東から) 図版 149 V区第1面SK12土層断面(南東から)、V区第1面SP03遺物出土状況(南から)
- 図版 129 V区第1面(旧G6区)全景(南東から)、V区第1面(旧G7区)北半部全景(北から) 図版 150 V区第1面SP04遺物出土状況(南から)、V区第1面SX01遺物出土状況(西から)
- 図版 130 V区第1面(旧G7区)南半部全景(北から)、V区第1面(旧G8区)全景(北西から) 図版 151 V区第1面SX01遺物(114・115)出土状況(西から)、V区第1面SX02遺物出土状況(北西から)
- 図版 131 V区第1面1号墳・2号墳全景 図版 152 V区第1面SX02土層断面(東から)、V区第1面SX04完掘状況(南から)
- 図版 132 V区第1面1号墳検出状況(南から)、V区第1面1号墳全景(南から) 図版 153 V区第1面SF01(東から)、V区第1面SF01竈部(西から)
- 図版 133 V区第1面1号墳遺物出土状況(北から)、V区第1面1号墳遺物出土状況(南から) 図版 154 V区第1面SK27・36～39(南東から)、V区第1面SX05・06(西から)
- 図版 134 V区第1面1号墳玄室遺物出土状況(西から)、V区第1面1号墳遺物出土状況(西から) 図版 155 V区第1面出土の古墳時代遺物 V区第1面1号墳出土遺物(20・21)
- 図版 135 V区第1面1号墳玄室遺物(10・11)出土状況(東から)、V区第1面1号墳玄室遺物(5・人骨)出土状況(東から) 図版 156 V区第1面1号墳出土遺物(20・21)
- 図版 136 V区第1面1号墳玄室遺物(20・21)出土状況(東から)、V区第1面1号墳羨道遺物(7・石器)出土状況(西から) 図版 157 V区第1面出土遺物
- 図版 137 V区第1面1号墳1次礎床検出状況(南から)、V区第1面1号墳1次礎床検出状況(北西から) 図版 158 V区第1面出土遺物
- 図版 138 V区第1面1号墳基底石検出状況(南から)、V区第1面1号墳床面検出状況(南から) 図版 159 V区第1面出土遺物
- 図版 139 V区第1面1号墳基底石検出状況(東から)、V区第1面1号墳基底石検出状況(西から) 図版 160 V区第1面出土遺物
- 図版 140 V区第1面1号墳墓城検出状況(南から)、V区第1面2号墳検出状況(北から) 図版 161 V区第1面出土遺物
- 図版 141 V区第1面2号墳全景(南から)、V区第1面2号墳遺物(32)出土状況(西から) 図版 162 V区第1面出土遺物
- 図版 142 V区第1面2号墳耳環出土状況(西から)、V区第1面2号墳検出状況(北から) 図版 163 V区第1面出土遺物
- 図版 143 V区第1面2号墳墳丘土層断面(南から)、V区第1面2号墳墳丘土層断面(南から)
- 図版 144 V区第1面2号墳墳丘土層断面(西から)、V区第1面SK01検出状況(南東から)
- 図版 145 V区第1面SB15(北から)、V区第1面SB16(西から)
- 図版 146 V区第1面SB17(南から)、V区第1面SB18(北西から)
- 図版 147 V区第1面SB19(南から)、V区第1面SK06土層断面(南東から)
- 図版 148 V区第1面SK08礎出土状況(東から)、V区第1面SK10礎出土状況(北から)
- 図版 149 V区第1面SK12土層断面(南東から)、V区第1面SP03遺物出土状況(南から)
- 図版 150 V区第1面SP04遺物出土状況(南から)、V区第1面SX01遺物出土状況(西から)
- 図版 151 V区第1面SX01遺物(114・115)出土状況(西から)、V区第1面SX02遺物出土状況(北西から)
- 図版 152 V区第1面SX02土層断面(東から)、V区第1面SX04完掘状況(南から)
- 図版 153 V区第1面SF01(東から)、V区第1面SF01竈部(西から)
- 図版 154 V区第1面SK27・36～39(南東から)、V区第1面SX05・06(西から)
- 図版 155 V区第1面出土の古墳時代遺物 V区第1面1号墳出土遺物(20・21)
- 図版 156 V区第1面1号墳出土遺物(20・21)
- 図版 157 V区第1面出土遺物
- 図版 158 V区第1面出土遺物
- 図版 159 V区第1面出土遺物
- 図版 160 V区第1面出土遺物
- 図版 161 V区第1面出土遺物
- 図版 162 V区第1面出土遺物
- 図版 163 V区第1面出土遺物
- 図版 164 V区第1面出土遺物
- 図版 165 V区第1面出土遺物
- 図版 166 V区第1面出土遺物

图版 167 V区第1面出土遗物

图版 168 V区第1面出土遗物

图版 169 V区第1面出土遗物

图版 170 V区第1面出土遗物

图版 171 V区第1面出土遗物

图版 172 V区第1面出土遗物

表 目 次

第1表	四国横断自動車道（津田～引田）埋蔵文化財包蔵地一覧（1）	3
第2表	四国横断自動車道（津田～引田）埋蔵文化財包蔵地一覧（2）	4
第3表	調査体制一覧	7
第4表	Ⅱ区第1面土壙墓一覧	214
第5表	分析結果一覧表	2
第6表	資料明細	4
第7表	化学成分分析値（wt%）	9
第8表	鉄滓の調査結果まとめ	9
第9表	樹種鑑定表	19
第10表	成重遺跡の放射性炭素年代測定結果	22
第11表	成重遺跡の花粉分析結果	22
第12表	遺跡動態表	36
第13表	墓域が確認された遺跡一覧	45

付 図 目 次

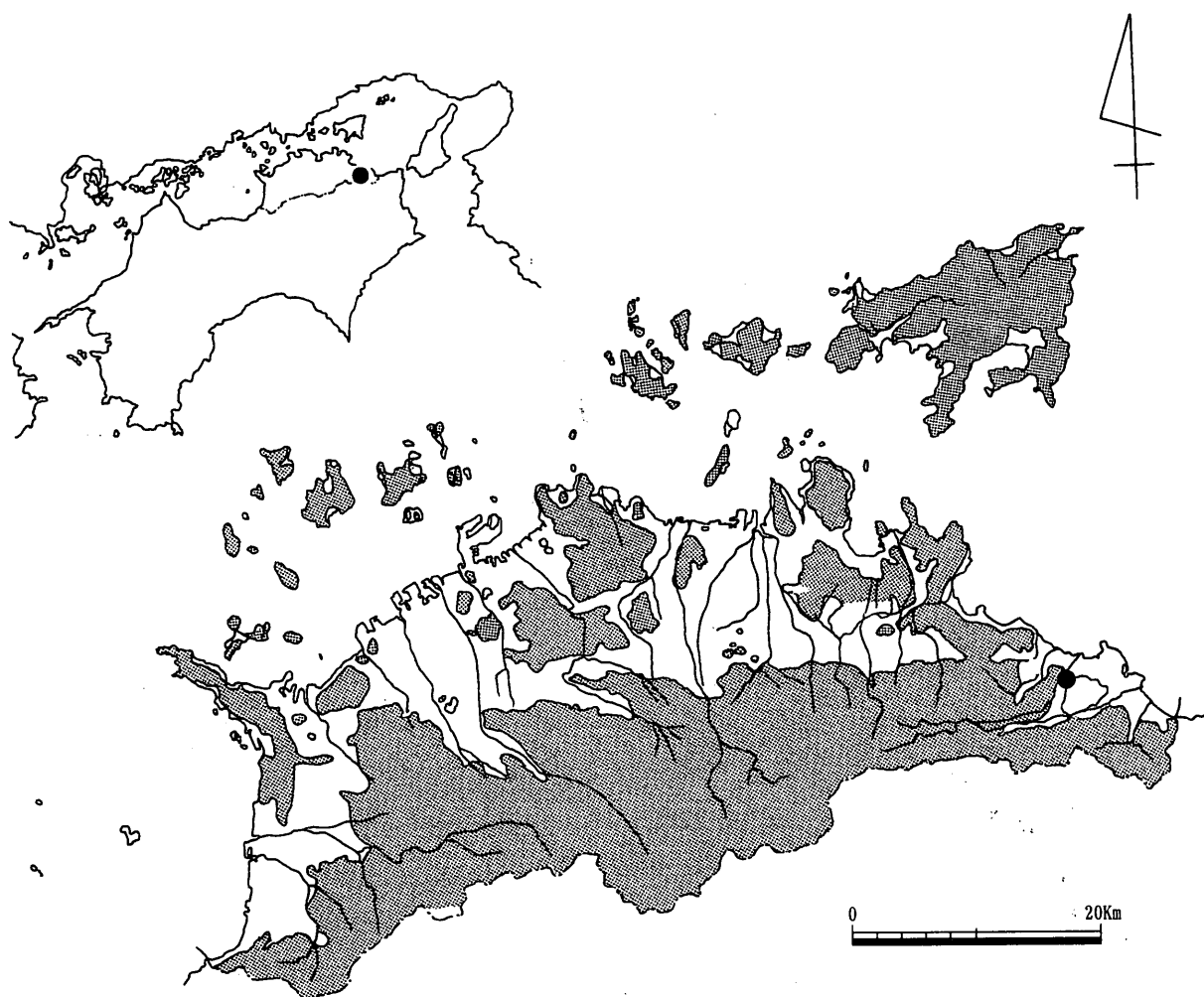
1. I区平面図その1(1/200)
2. I区平面図その2・Ⅱ区第1検出面平面図その1(1/200)
3. Ⅱ区第1検出面平面図その2(1/200)
4. Ⅱ区第2検出面平面図その1(1/200)
5. Ⅱ区第2検出面平面図その2(1/200)
6. Ⅲ・Ⅳ区平面図(1/200)
7. V区平面図(1/200)

第1章 調査に至る経緯と経過

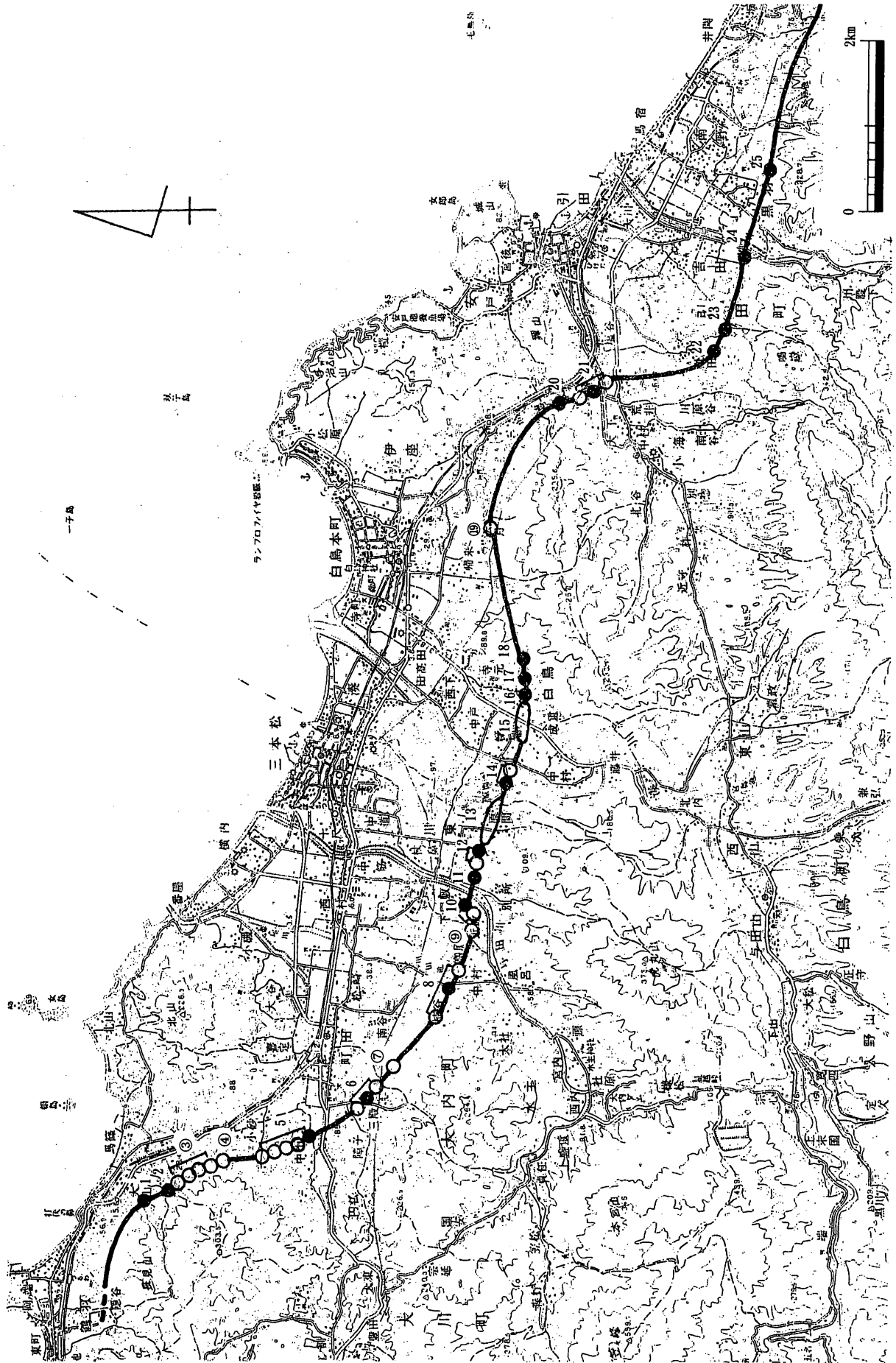
第1節 調査に至る経緯

四国横断自動車道津田～引田間の建設については、平成元年2月の基本計画決定、平成3年12月の整備計画決定を経て平成5年11月に建設大臣（現国土交通大臣）から日本道路公団総裁に対して建設の施工命令が下され、平成6年度には路線発表と路線の中心杭の打設が行われた。

これに伴う埋蔵文化財の保護については、平成4年度から香川県教育委員会と日本道路公団高松建設局との間で事前協議が開始された。そして平成6年度末に、香川県教育委員会文化行政課が行う公共土木工事計画の照会により、日本道路公団から四国横断自動車道津田～引田間の事業の回答があった。これを受けて香川県教育委員会ではより具体的な事前協議を開始し、平成7年6月・7月には路線内の分布調査を実施した。その結果、津田～引田間では22地区について埋蔵文化財の保護措置が必要である旨を日本道路公団に通知した。日本道路公団は香川県教育委員会からの通知を踏まえ、平成7年10月に文化庁と協議を行った。その結果、平成8年1月に文化庁から「工事の実施に先立ち発掘調査を実施すること」とする回答がなされた。これを受けて平成8年4月に香川県教育委員会と日本道路公団との間で埋蔵文化財発掘調査についての委託契約が締結され、さらに香川県教育委員会を調査主体、財団法



第1図 遺跡位置図



第2図 四国横断自動車道（津田～引田）埋蔵文化財包蔵地

遺跡名	地区名	所在地	調査面積 (㎡)	調査期間	遺構	遺物	備考
1	中谷	さぬき市津田町鶴羽	518	8.10.1 ~ 9.1.31	中世：柱穴 弥生：溝、中世：柱穴・土坑・溝・土塚墓	瓦器、土師器	平成14年度整理
2	大山	さぬき市津田町鶴羽	2,113	8.10.1 ~ 9.1.31		弥生土器、瓦器、土師器	平成14年度整理
3	馬篠	大川郡大内町馬篠	620	9.7.1 ~ 9.8.31	(予備調査)		平成9年度概報で報告完了
4	小砂	大川郡大内町小砂	100	9.6.1 ~ 9.6.30	(予備調査)		平成9年度概報で報告完了
5	坪井遺跡	大川郡大内町中山	6,556	10.9.1 ~ 11.3.31	奈良：掘立柱建物跡	刻印須恵器、土師器、黒色土器	横断道報告第40冊
6	三殿出口遺跡	大川郡大内町三殿	135	11.7.1 ~ 11.7.31	(予備調査)		
			6,370	11.4.1 ~ 11.6.30	近世：砂糖甕	弥生土器、須恵器、土師器	
7	町田	大川郡大内町町田	69	10.9.1 ~ 10.9.30	(予備調査)		平成10年度概報で報告完了
8	桶谷遺跡	大川郡大内町水主桶谷	1,000	11.3.1 ~ 11.3.31	(予備調査)		平成11年度概報で報告完了
			1,578	9.7.1 ~ 10.3.31	弥生：掘立柱建物跡・溝・河川	弥生土器	
			460	8.12.1 ~ 8.12.31	(予備調査)		
9	高原	大川郡大内町水主高原	11	9.9.1 ~ 9.9.30	(予備調査)		平成9年度概報で報告完了
10	金毘羅山遺跡	大川郡大内町水主下屋敷	446	8.11.1 ~ 8.11.30	(予備調査)		
			100	10.3.1 ~ 10.3.31	(予備調査)		
11	塔の山南遺跡	大川郡大内町川東杖の端	3,600	10.4.1 ~ 10.8.31	弥生：竪穴住居跡・土器棺、古墳：竪穴住居跡	縄文土器、弥生土器、土師器、玦状耳飾	横断道報告第36冊
			1,300	11.1.1 ~ 11.3.26	弥生：土器棺・竪穴式石槨	弥生土器、青銅鏡	平成14年度整理
12	西谷遺跡	大川郡大内町川東西谷	15	9.9.1 ~ 9.9.30	(予備調査)		横断道報告第36冊
			2,092	9.6.1 ~ 10.3.31	弥生：墳墓群	弥生土器、土師器	平成9年度概報で報告完了
13	原間遺跡	大川郡大内町川東原間	500	9.2.1 ~ 9.2.28	(予備調査)		横断道報告第39・42冊
			19,254	9.4.1 ~ 10.3.31	弥生：竪穴住居跡・掘立柱建物跡、古墳：古墳	弥生土器、須恵器、土師器	
14	桶端遺跡	大川郡白鳥町西藤井	24,243	10.4.1 ~ 11.3.31			
			3,590	10.12.1 ~ 11.3.31	弥生：墳墓、古墳：古墳	弥生土器、須恵器、耳環、鉄鏃、青銅鏡	横断道報告第43冊
			1,647	11.9.1 ~ 11.10.31			

第1表 四国横断自動車道（津田～引田）埋蔵文化財包蔵地一覧（1）

遺跡名	地区名	所在地	調査面積 (㎡)	調査期間	遺構	遺物	備考
15 成重遺跡	成重	大川郡白鳥町白鳥	1,500	9. 2. 1 ~ 9. 2. 28	(予備調査)		本書 平成15年度・16年度に「成重遺跡Ⅰ・Ⅱ」として報告書刊行予定
			14,650	9. 4. 1 ~ 10. 3. 31	弥生：集石遺構・方形周溝墓・竪穴住居跡・壺棺、古墳；竪穴住居跡、中世：掘立柱建物跡	弥生土器、石器、土師器、鉄器、耳環、玉類、陶磁器	
			6,543	10. 4. 1 ~ 11. 3. 31	掘立柱建物跡		
16 谷遺跡	谷	大川郡白鳥町白鳥	111	10. 7. 1 ~ 10. 7. 31	(予備調査)		
			2,741	11. 9. 1 ~ 12. 3. 31	中世：掘立柱建物跡、近世：陶器窯	陶磁器	
17 善門池南遺跡	池の奥	大川郡白鳥町白鳥	3,566	9.11.17 ~ 10. 3. 31	弥生：竪穴住居跡、古墳；	弥生土器、石器、須恵器、土師器、備前焼	
			2,500	10. 4. 1 ~ 11. 3. 31	竪穴住居跡、中世：掘立柱建物跡		
18 池の奥遺跡	池の奥	大川郡白鳥町白鳥	1,050	11. 7. 1 ~ 11. 8. 31		弥生土器、石器、磨製石剣	平成14年度整理
19 天王谷遺跡	法月	大川郡白鳥町帰来	510	10. 1. 1 ~ 10. 1. 31	(予備調査)		平成9年度概報で報告完了
			1,200	11. 1. 22 ~ 11. 3. 24	中世：掘立柱建物跡・瓦窯	土師器、瓦	横断道報告第45冊
21 川北遺跡	堀屋	大川郡引田町小海	1,475	11. 7. 1 ~ 11. 8. 31	奈良：掘立柱建物跡	土師器、須恵器	
			6,038	10. 8. 1 ~ 11. 3. 31	(予備調査)		
22 迹田石垣遺跡	迹田	大川郡引田町引田	554	10. 4. 1 ~ 10. 5. 31	(予備調査)		横断道報告第44冊
			2,300	11. 4. 1 ~ 11. 6. 30	中世：掘立柱建物跡	土師器、陶磁器	横断道報告第44冊
23 迹田谷川下池遺跡	迹田	大川郡引田町引田	1,450	10.12. 1 ~ 11. 1. 29	弥生：竪穴住居跡	弥生土器、石器	横断道報告第44冊
			310	9. 7. 1 ~ 9.10. 31	(予備調査)		
24 鹿庭遺跡	鹿庭	大川郡引田町吉田	3,800	10. 4. 6 ~ 10. 8. 31	弥生：土坑、中世：掘立柱建物跡	弥生土器、石器、須恵器、土師器	横断道報告第44冊
			3,978	9.10. 1 ~ 10. 3. 31	弥生：竪穴住居跡・土坑	弥生土器、石器	横断道報告第36冊
25 庵の谷遺跡 合計	黒羽	大川郡引田町黒羽	145,724				

※「横断道報告」は「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」の略で、冊数は善通寺～豊浜間からの通算の冊数である。

第2表 四国横断自動車道（津田～引田）埋蔵文化財包蔵地一覧（2）

人香川県埋蔵文化財調査センターを調査機関として両者の間に「埋蔵文化財調査契約」を締結し、これらに基づいて条件の整った地区から順に調査が開始された。

一方、香川県教育委員会では、明石大橋開通に合わせた津田～引田間の高速道路の整備が香川県の緊急かつ重要な課題であることから、平成8年度と9年度に文化財専門職員を新規に採用し、調査体制の充実を図ることで対応した。

津田～引田間の22地区の調査対象地について、平成8年度から具体的な遺跡の内容を把握するために、用地買収等の進捗に合わせて予備調査を実施し、本発掘調査の範囲と面積を確定した。

白鳥町内には調査対象地は5地区あり、このうち本書で報告する成重遺跡は大川郡白鳥町白鳥に所在し、国道318号を挟み東西に広がる。路線の南側に隣接する部分では県営ほ場整備事業に伴い香川県教育委員会による試掘調査が平成8年度に実施され、弥生時代を中心とする埋蔵文化財包蔵地が確認され「一支部南遺跡」として周知（後に「成重遺跡」に名称変更）されている。このことから路線内に遺跡が広がることが予想された。そして平成9年2月に予備調査を実施したところ、弥生時代以降の遺構・遺物が検出された国道318号を挟んだ東西450mの部分について、成重遺跡として周知し本発掘調査を実施するに至ったのである。

第2節 調査の経過

(1) 発掘調査の経過

予備調査の結果を受けて、平成9年4月から調査事務所の建て上げや発掘作業員の雇用などの条件整備を行い、用地買収が終了した部分から発掘調査を開始した。調査は2班体制（1班は調査員3名）で開始した。成重遺跡は調査面積が広いことから、作業の効率化・迅速化を図るために国道318号より東側の調査区を担当する班については、工事請負方式による調査を実施した。国道より西側を担当する班については直営方式で調査を行った。調査開始後まもなく、国道のすぐ西側のⅢ区で弥生時代の土器を含み、礫を盛り上げて塚状になった集石遺構を2基検出した。墳墓の可能性が高いとして「集石墓」として調査を行った。この集石遺構は検出や図化に手間がかかり調査に困難を極めた。そして隣接する調査区のⅣ区でも次々と同様な集石遺構が検出された。この集石遺構に対応するために10月からさらに1班を加えて合計3班体制とした。この集石遺構に加えて方形周溝墓や竪穴住居跡、さらに横穴式石室を持つ古墳までが検出されるなど、多種多彩な遺構が所狭しと検出された。このため可能な限りの調査員を投入し、多いときには14名もの調査員が成重遺跡の調査を担当した。また調査の迅速化のため航空測量に加えて集石遺構の写真測量による図化も導入した。

このような状況のなか、弥生時代の集石遺構が墳墓の可能性が強く、他に類例の極めて少ない貴重な遺構であるとして、香川県教育委員会は日本道路公団に対してこの集石遺構の保存を要請した。その後、文化庁鑑査官と調査官に成重遺跡に来ていただいて御指導を賜った。そして香川県教育委員会と日本道路公団との度重なる協議の末、平成10年度6月には日本道路公団の協力によりこの集石遺構が集中するⅢ区とⅣ区の部分を従来の盛り土工法から橋脚工法に変更して集石遺構の保存を図ることとなった。これに伴いⅣ区は橋脚が建つ部分のみの調査に変更となった。Ⅳ区は保存協議を開始してから上面の検出にとどめた。そして保存が決定された後は、橋脚建設部分以外の遺構の上面を砂で保護した後に埋め戻した。

第3図 調査区割図と旧調査区割図 (1/4000)



香川県教育委員会文化行政課								
	平成9年度		平成10年度		平成11年度		平成14年度	
総括	課長	菅原良弘	課長	小原克己	課長	小原克己	課長	北原和利
	課長補佐	北原和利	課長補佐	北原和利	課長補佐	小國史郎	課長補佐	渡邊勇人
	副主幹	渡部明夫	副主幹	渡部明夫	副主幹	廣瀬常雄	副主幹	大山眞充
総務	係長	山崎 隆	副主幹兼係長	西村隆史	係長	中村禎伸	主任	香川浩章
	主査	松村崇史	係長	中村禎伸	主査	三宅陽子	主査	須崎陽子
	主事	打越和美	主査	三宅陽子	主査	松村崇史	主任主事	亀田幸一
			主査	松村崇史				
埋蔵文化財	文化財専門員	木下晴一	係長	西村尋文	係長	西村尋文	主任	片桐孝浩
	技師	塩崎誠司	主任技師	塩崎誠司	文化財専門員	森 格也	文化財専門員	古野徳久
					主任技師	塩崎誠司	文化財専門員	佐藤竜馬
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター								
総括	所長	大森忠彦	所長	菅原良弘	所長	菅原良弘	所長	小原克己
	次長	小野善範	次長	小野善範	次長	川原裕章	次長	渡部明夫
総務	副主幹兼係長	田中秀文	副主幹兼係長	田中秀文	副主幹兼係長	田中秀文	副主幹	野保昌弘
	主任主事	西川 大	主査	新 一郎	係長	新 一郎	係長	多田敏弘
調査	主任文化財専門員	大山眞充	主任文化財専門員	大山眞充	主任文化財専門員	大山眞充	主任文化財専門員	眞鍋昌宏
	主任文化財専門員	長元茂樹	主任文化財専門員	長元茂樹	文化財専門員	片桐孝浩	文化財専門員	西岡達哉
	文化財専門員	西岡達哉	文化財専門員	森 格也	文化財専門員	多田佳弘	文化財専門員	森 格也
	文化財専門員	森 格也	文化財専門員	多田佳弘	主任技師	溝淵大輔	主任技師	信里芳紀
	文化財専門員	池田道雄	文化財専門員	多田 慎	技師	長井博志	主任技師	長井博志
	主任技師	多田 慎	技師	信里芳紀	調査技術員	多田 歩		
	主任技師	松岡宏一	技師	松本和彦	調査技術員	正山泰久		
	技師	豊島 修	調査技術員	森澤千尋				
	技師	信里芳紀	調査技術員	香川直孝				
	技師	長井博志	調査技術員	大屋敷慶子				
	技師	乗松真也	調査技術員	藤澤正則				
	調査技術員	森澤千尋						
	調査技術員	東条貞美						
	調査技術員	香川直孝						
	調査技術員	山坂浩樹						

第3表 調査体制一覧

平成10年度当初は3班体制で調査を行ったが、保存が決定し調査面積の縮小に伴い7月からは2班体制で調査を行った。平成11年度には6月から1～2班体制で調査を行い、平成12年3月31日に成重遺跡のすべての調査が終了した。全期間を通して、本体工事と調査工程との調整、横断道建設に付帯する国道318号改良工事、ほ場整備、排水路工事、町道改良工事との協議・工程調整の連続であった。

この間、平成9年7月と平成10年4月の2回、現地説明会を開催したのに加えて、地元白鳥町の広報誌に毎月成重遺跡の調査速報を連載した。また町内の小・中学校の体験学習の場としても活用していただいた。

(2) 整理作業の経過

成重遺跡の整理作業は合計42月の予定で、平成14年度から開始した。平成14年度には通年で2名の調査員が、10月からさらに1名の調査員が整理作業を実施した。平成14年度には国道318号から東側の調査区であるⅠ区・Ⅱ区についてのすべてと、国道318号より西側のⅢ区～Ⅴ区の前古墳時代以降について報告することで作業を行った。またⅢ区～Ⅴ区の前古墳時代の弥生時代については平成15年度まで整理作業を継続し、平成16年度に『成重遺跡Ⅱ』として報告書を刊行する予定である。

(3) 発掘調査及び整理作業の体制

平成9～11年度の発掘調査及び平成14年度の整理作業の体制は第3表のとおりである。また、整理作業には以下の者が従事した。

整 理 員 西桶右子・西山佳代子・山地真理子
整理補助員 若山淳子・市川孝子・岡野雅子・前田好美
整理作業員 池内妙子・乃村恵美・満岡稔恵・山田昌代・門脇範子・岡本基公美・西野裕子・信里里美・
松下美抄穂・磯崎福子・馬場聡子・森澤千尋・中村文枝・米田静恵・田井景子・柴垣智
美

第Ⅱ章 地理・歴史的的環境

第1節 地理的環境

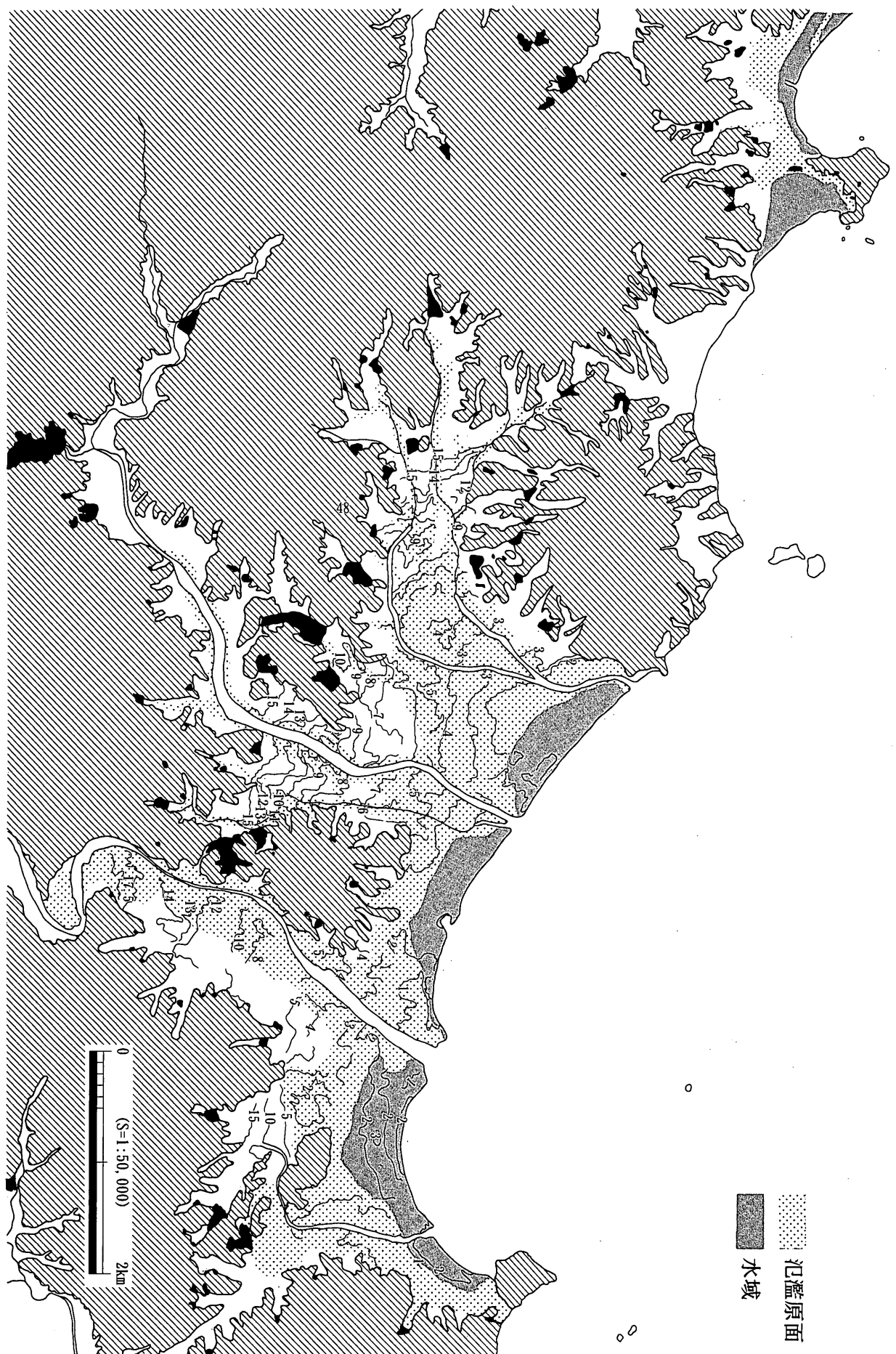
成重遺跡は、香川県東部地域である東かがわ市白鳥町に位置する。この白鳥町は、南側に徳島県域と接する阿讃山脈と、北側は瀬戸内海に接し南北に細長い町域を呈する。白鳥町を初めとして、東西に隣接する大内・引田町のそのほとんどが阿讃山脈から派生する丘陵によって占められる。また、これらの丘陵を開析する小規模河川によって形成された矮小な谷底低地と海岸部に浜堤が見られ、河川の両サイドと浜堤の後方には氾濫原面が広く形成されている。全体的に谷底低地の部分は、周囲を山塊と瀬戸内海によって遮断されることによって生じた完結した一つの地域としての印象を受ける。この氾濫原面の形成時期について時期的な手がかりはないが、近年の河川改修によって流下位置が固定される以前は、現在の湊川の部分を越えて、かなり面積が冠水する状況も多く見られ、不安定な堆積環境下にあったようだ。

谷底低地内には、湊川によって形成された自然堤防状の微高地が幾つか点在して見られる。調査対象地は、湊川下流域東岸の氾濫原面との境界付近に存在する自然堤防状の微高地部分から、東側の扇状地の部分までの幅約70m長さ約500mの範囲となっている。また、現状で大内町・白鳥町域に確認される条里型地割の大部分は、この氾濫原面に多く分布する。現状では、この氾濫原面の形成時期は明らかではないことから、条里型地割の施工年代についても注意が必要であろう。

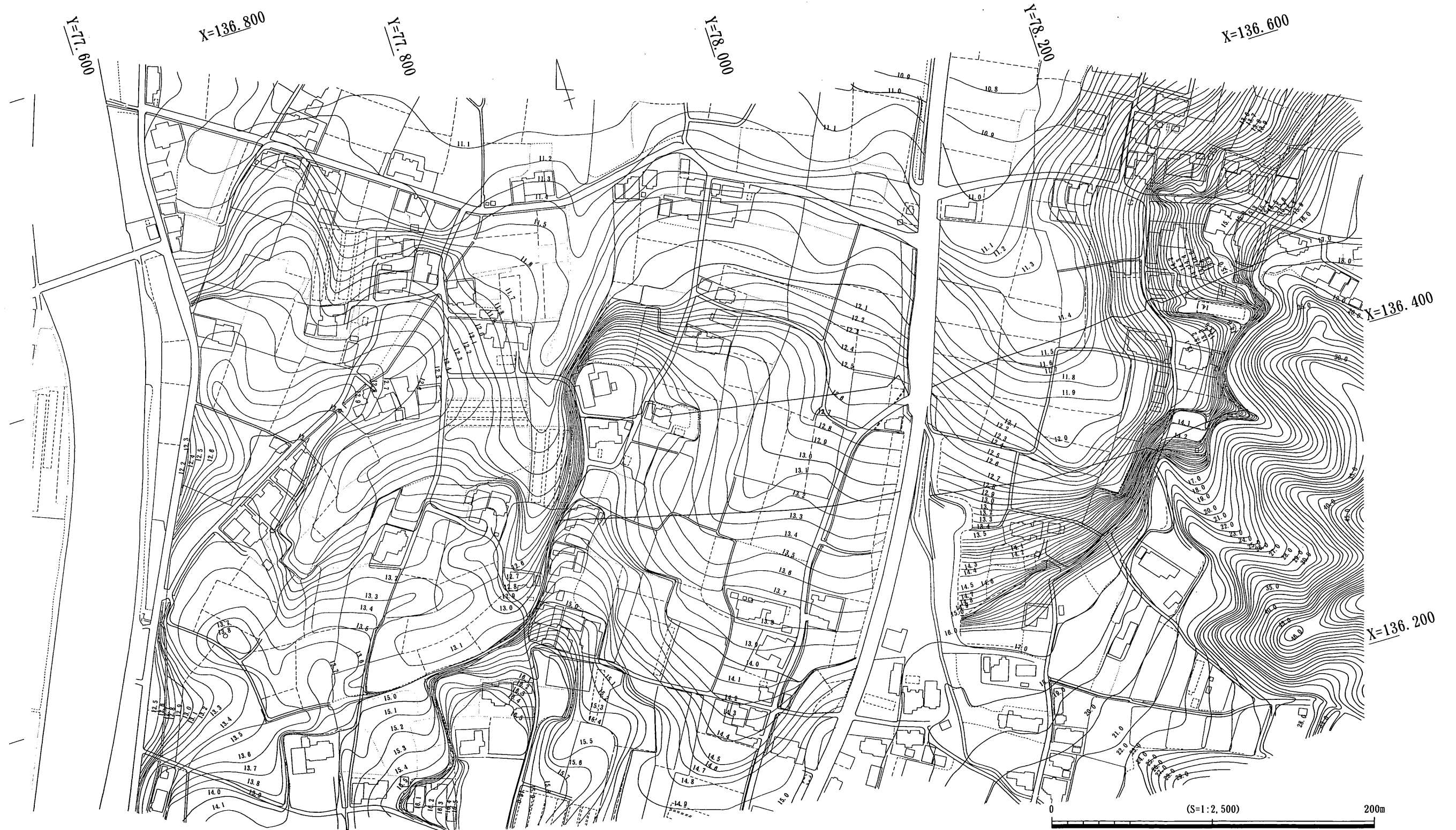
現地地表面に現れた起伏を追いかけることにより、調査区の微地形を検討する。第6図には、工事用図面を利用し、現地表面の10cm等高線図を作成している。調査区西端のⅣ区東側には、南西方向から北東方向にかけて等高線の間隔が密になる部分が存在する。この部分は、現湊川によって形成された氾濫原面と、段丘面を画する明瞭な段丘崖と思われる。段丘崖西側の氾濫原面では、複数の旧河道が明瞭に確認される。予備調査トレンチの成果では、この氾濫原面に遺構・遺物は確認されておらず、厚い洪水砂の堆積が確認できるのみである。段丘崖西側のⅣ区部分は、湊川の流下方向に沿って南北に延びる自然堤防状の明瞭な高まりと認識できる。更にその東側のⅢ・Ⅳ区の境とⅢ区東側には北東方向に伸びる谷状の地形の存在が想定できる。Ⅲ区とⅡ区の境には、国道318号線が所在しており、これに伴う比較的近年の盛土によって、旧地形が不明確になっているが、Ⅱ区東側及びⅠ区では比較的傾斜がきつくなっている点が指摘できる。南東方向側の丘陵との関係で見ると、Ⅰ・Ⅱ区部分は丘陵に付着する扇状地の地形面となっていることが予想される。

次に現地表面に残る微地形に加えて、発掘調査で確認した土層断面図により、地表面下の微地形を検討したい。しかし、現地での各調査区間の層序対比を行えた訳ではない。ここでは、遺構検出面の様相を中心に検討する。土層断面図は、Ⅰ区～Ⅳ区までの調査対象地北壁より作成したものを使用する。

現地表面は、標高14m程を測る自然堤防状の微高地であるⅣ・Ⅴ区から、東へ向かうにつれて標高が低くなる。最も標高が低いⅡ区東半部では12m程を測り、Ⅳ区との比較では2m程の比高差となっている。後述するように、このⅡ区東半部には複数の谷筋が確認されており、先の現地表面の起伏にもそれが現れている。遺構検出面は3面設定されており、下層から弥生中・後期検出面、弥生後期検出面、古墳時代～中世検出面となっている。



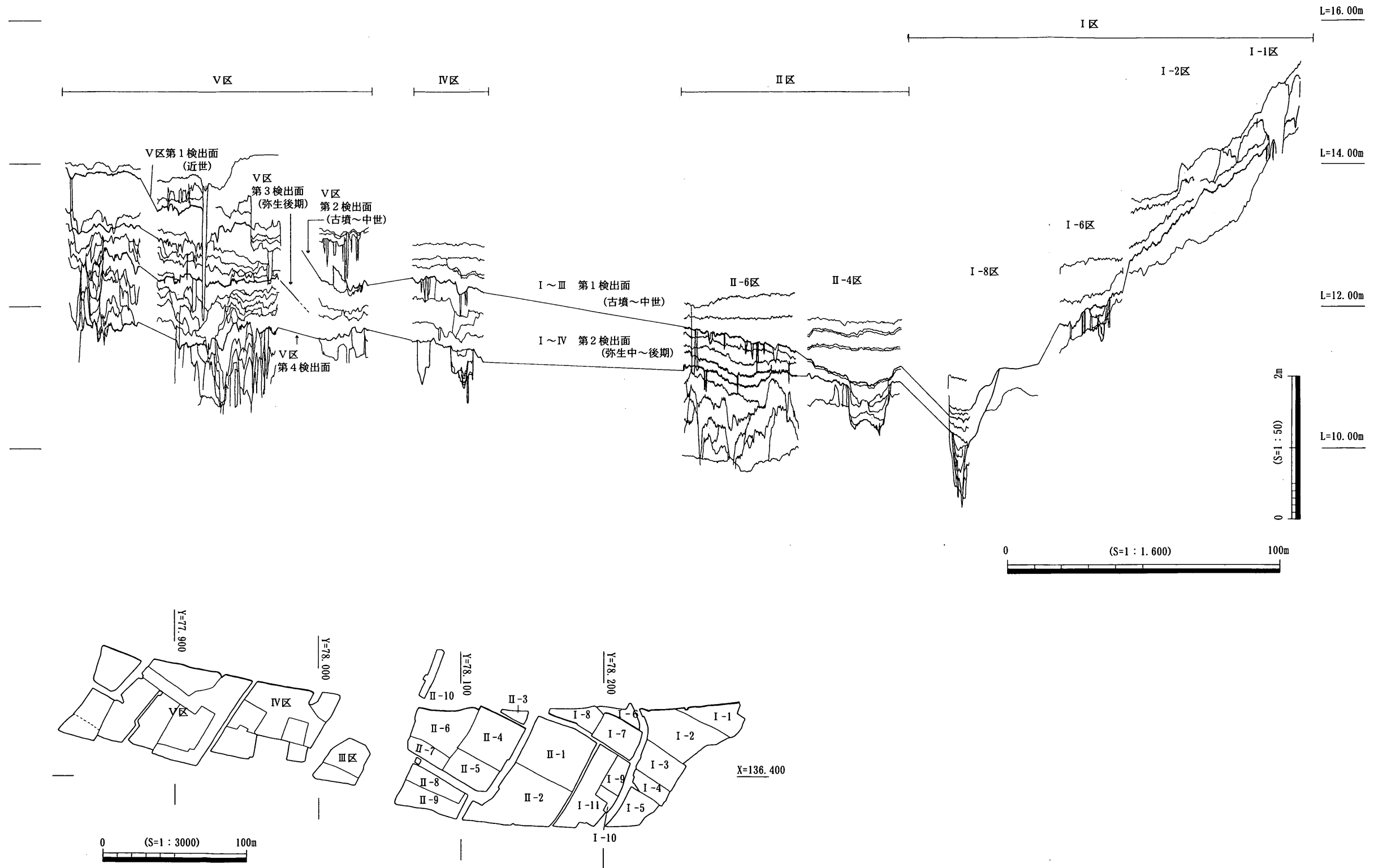
第4図 遺跡周辺の地形面の概略



第6図 10cm等高線による現地表面の微地形.

西

東



第7図 遺構検出面と東西方向の土層図

弥生中・後期検出面

本検出面は各調査区で確認しているが、基盤層の状況は必ずしも一様ではない。基本的な状況としてⅠ区扇状地部分を除き、旧中州と考えられる礫層と、その上面を覆う黄灰色系のシルト上面で当該期の遺構を確認している。また、一部には土壌化の痕跡が認められた。検出面の標高は、Ⅴ区では標高11.7m程に確認でき、Ⅳ区ではやや低くなる。本検出面の段階には、既にⅤ区全体が微高地となっていたものと考えられる。Ⅱ区では、更に低くなり11m前後で検出面が認められ、下位の砂礫層の凹凸が影響した複数の谷地形が確認できる。Ⅱ区東半部には、最も深い谷1が所在し、東側のⅠ区は丘陵に付着する扇状地の地形面となっている。また、Ⅰ区では弥生中期遺構は希薄であり、弥生後期を中心とした遺構を確認しているが、谷底低地に相当する他の調査区と異なり、ほぼ同一面で古墳時代～近世の遺構を確認している。

弥生後期検出面

弥生後期の単一時期の検出面は、唯一Ⅴ区西半部で確認されている。標高12.7m前後において竪穴等の居住遺構を検出しているが、弥生中期検出面との間には細砂～粗砂を主体とした自然堆積層を介在させている。しかし、調査年度が異なるⅤ区東部とⅣ区部分では、単一の検出面で弥生中・後期を確認しており、Ⅴ区西半部の検出面との対応関係に齟齬が生じている。Ⅴ区西半部は、現地表面においても自然堤防状の微高地となっているが、隣接する調査区間でもあまりにも様相を違えている。Ⅴ区東半部とⅣ区部分に関しては、弥生中・後期検出面の上位に、弥生後期単純の遺構面に存在していた可能性が高い。

古墳～中世検出面

本段階の検出面は、調査区間でかなり様相を違えている。面的に遺構が確認された調査区は、Ⅴ区東半部・Ⅳ区・Ⅱ区・Ⅰ区である。Ⅴ区東半部～Ⅳ区では0.5m、Ⅱ区では0.3m程の細砂～シルトによる自然堆積層を確認しており、Ⅰ区扇状地に近づくほど堆積層が薄くなる。Ⅴ区西半部では、下位の弥生後期検出面が層厚0.4mほどの細砂～シルトによる自然堆積層で埋没しているが、本段階に対応する遺構の広がり確認できなかった。また、Ⅴ区部分は、下位の検出面に比べて更に堆積が進行することにより、より明瞭な微高地となっている。

また、Ⅴ・Ⅳ区では上位に後述する近世段階の洪水砂が確認できるものの、下位の弥生期の検出面に比べて遺構の時間幅が長く、全体的には安定した堆積環境へ変化したことが検出遺構の時間幅に現れているものと考えられる。Ⅴ区東半部の埋没古墳2基は、本検出面上で確認されている。

近世検出面

Ⅴ区からⅣ区にかけて、古墳時代～中世検出面の上位に0.5～1m程の洪水砂と考えられる粗砂層が見られる。Ⅴ区西半部では、18c後半～19c頃と考えられる土坑や砂糖竈を確認している。これ以外の調査区では、現在までつづく耕作土が連続して確認され、面的な調査は実施していない。Ⅴ区は、下位の古墳時代～中世の検出面で既に微高地上を呈していたが、本段階の洪水砂層によって、より明瞭なものとなっている。

第2節 歴史的環境

1. 旧石器・縄文時代

発掘調査によって確認された当該期の遺跡は極めて少ない。大内町側では、与田川採集遺物に尖頭器等が含まれることから、今後新たに遺跡が確認されることが予想される。縄文期にも遺跡分布は振るわない。県道建設に伴う原間遺跡の調査では、谷底低地を形成する弥生期以降の基盤層から、縄文中・後期の深鉢片が出土しているが、住居等の定住施設は未確認である。金毘羅山遺跡では、弥生期以降の基盤層となる下位の砂層中から、突帯文土器段階の深鉢・浅鉢等の土器類が比較的多く出土している。これらの二次的な移動を受けている遺物の多くが谷底低地を形成する土層中から確認されていることから、当該期に谷底低地の形成が進んだことと、かなり深い地表面下に当該期の遺跡が埋没している可能性や丘陵等の比較的安定した山間部に集落が存在していた可能性がある。

2. 弥生時代

弥生前期には、谷底低地を中心に遺跡が展開していく。当該期の遺跡分布を列挙すると、大内町所在の落合・小僧遺跡、白鳥町側では善門池西・成重遺跡が挙げられる。これらの遺跡では、包含層や流路、二次的混入の形で弥生前期土器が出土しているが、落合・小僧遺跡の出土状況からはかなり近接した位置に住居群を想定できる。しかし、細かな時間幅での編年では、前期前半期に遡るものは見られずその大半が前期後半～中期初頭段階の所産である。

中期前葉段階も遺跡の実態が不明確である。本遺跡では当該期の住居を数棟確認しているが、遺構密度・遺物量ともに少なく、集落の全体像を把握しにくい。西谷・原間遺跡では当該期の遺物の出土が報告されているが、前期段階と比較して遺跡数自体はやや減少している傾向が窺われ、集落規模の拡大も想定できない。中期中葉には、住居数棟をまとまりとした集落像が明確に把握できる状況になる。特に成重遺跡から池の奥遺跡までの、主に湊川東岸地域に集落のまとまりが見られる。地形的には、湊川の沖積作用によって形成された谷底低地内の複数の微高地と、谷筋に面した緩斜面地に住居2・3棟を1単位とした住居群が7基程度点在する景観が想定でき、中期後葉段階まで並存して営まれる。池の奥遺跡では、伐採・加工斧等の磨製石器類の出土量が他の遺跡の群を抜いている。本遺跡の磨製石斧類の出土量が極めて少数に留まることと、組成的に伐採斧を著しく欠落させている状況から複数の住居群から構成される「遺跡群」とも呼べる地域内において、立地を活かした木材の伐採や粗加工等の生業活動を展開したものと見られる。

後期前半には、中期後半段階の遺跡が縮小・移動する。遺物の出土に限っても、積極的に集落の存在を想定できない状況にある。この状況は、後期中葉以降に一変する。中期後半段階の集落が同一地点で再び営まれる本遺跡を始め、新たな地点に住居群が造られる原間遺跡など、本地域で弥生遺跡として周知されているその殆どが後期中葉～終末期にかけてのもので占められるようになる。また、原間遺跡では点在する各微高地や丘陵裾部に同時併存で2～3棟程度の住居が確認でき、遺跡全体で8～9棟程度の住居群が想定されている。また、後期後半～終末期には、鍛冶関連資料を伴出する住居群が見られる。

本段階の墳墓関係資料も充実している。丘陵部を中心に台状墓(墳丘墓)を頂点とし、土槨墓・木棺墓・壺棺墓が見られ、これらが集団墓地を形成している。槨端墳丘墓や金毘羅山1号墓には、木棺を安置する竪穴式石郭が既に採用され、水銀朱の使用も見られる。讃岐内の他地域では、丘陵上の墳丘墓に加



第5図 周辺の遺跡分布

えて集落内の住居群に隣接して土器棺墓が多く見られるが、本地域ではあまり確認できず、隔絶した丘陵上に凝集して壺棺・土壙墓群が造られる点が特徴的である。

古墳時代

弥生終末期段階の集落は、すべて古墳初頭には継続せず前期古墳そのものも見られない。前期末段階には大日山古墳を初めとした前方後円墳が築造された後、若干の空白期を経て後期まで断続的に原間遺跡周辺に地域首長墓の造営が確認できる。出土遺物からTK 216段階と推定される原間6号墳は直径30m程の円墳であり、主体部構造には木郭が採用されている。出土遺物には三累環頭太刀が見られ、精巧に鍛接された鉄斧類など、主体部構造も合わせて韓半島の要素が取り入れられている。また、その一方で三角板革綴短甲など、畿内政権から配布された威信材と見られる奢侈品を副葬していることから、被葬者は広域における海上を主とした物資流通に深く関与し、畿内政権とも一定の繋がりをもった地域首長と推定される。その後、MT 15型式まで首長墓が造営されるが、前方後円墳は造られなかった。また、近年の調査で中期以降の地域首長の基盤となる集落またはそれを暗示する事例が増加している。布留4式併行期の遺跡として、仲善寺・金毘羅山・小僧・成重・城泉遺跡が確認でき、これらは原間6号墳とほぼ同時期の集落と考えられる。成重遺跡では竪穴住居を数棟確認しているが、竈を伴わない方形住居である。須恵器出現後のTK 208～23型式併行期では、原間遺跡で住居群が確認されている。住居遺跡ではTK 10～TK 47型式の竈をもつ住居群が密集して確認されており、地域首長墓の造営と集落の検出例が合致した展開を見せている。

古墳時代終末～古代

MT 43型式併行期の段階の原間7.9号墳の築造後、若干の空白期を空けてTK 209段階の原間2号墳、TK 217段階の原間1号が見られ、断続的に古墳が造られる。原間遺跡では再び集落が営まれており、掘立柱建物群が山裾に展開する。建物主軸は、真北方向かこれに直口するものであり、後の段階で見られる条里型地割の方向とは合致していない。白鳥廃寺は白鳳期創建とされる古代寺院で、一町四方の寺域が推定されている。高松廃寺は二次的な移動を受けて畑地中に現存する礎石周辺に白鳳期・平安期の瓦が散布している。また、矮小な谷部に立地していることから、寺域の具体的な復元は成されていない。また、出土古瓦の示す時期差から隣接する白鳥廃寺の瓦を平安期の創建に際して再利用した可能性も想定されている。

本地域の律令期には、大内郡が置かれ南海道の存在が推定されている。現状で明確な推定ルートは確認できないが、大内町域の低地部では現状で真北から7°東偏する条里型地割が広範囲に遺存している。また、この条里型地割の一部に11m程度の余剰帯が確認できることから、南海道の敷設と条里の関係も視野にいれておく必要がある。しかし、この条里型地割の大部分が氾濫原面に分布していることから、施工時期については検討を要する。原間遺跡の調査では、11～12c段階の機能・埋没が想定される現状地割に合致する溝や、これに主軸方位をほぼ揃える掘立柱建物が確認されている。西谷遺跡においても後続する13cの掘立柱建物も条里型地割に合致する状況が見られることから、遅くとも11～12c段階までに条里地割が施工された可能性が高い。しかし、分布する地形面の年代と合わせてその上限と面的な広がりについては今後の調査・検討に委ねられるものである。



第8図 遺構配置図 (第1検出面)



第9図 遺構配置図 (第2検出面)

第三章 検出された遺構・遺物

第1節 I・II区基本層序

基本層序の説明として各調査区の壁面土層図を使用するが、必ずしも適切な位置で作成できている訳ではない。これは、用地取得の完了した部分より調査を完了させていったことから、複数の小規模な調査区に分断されたことによる。南東・東側から北西方向へ傾斜する地形面を考慮し、東西方向の壁面土層図を使用し説明する。

1. II-6区北壁

本調査区は、谷底低地内の微高地と低地部分に相当する。弥生中期検出面下位には、谷底低地を構成しラミナが多く確認できる粗砂～砂礫層(18～28層)と、その上面を覆い微細な水平ラミナが見られるシルト層(10～17層)が堆積している。これらは無遺物層であり、便宜上地山と呼称する。粗砂～砂礫層は凹凸を残しながら堆積しているが、中央部で顕著に窪み東半部では盛り上がる。結果的には、盛り上がった部分が弥生中期以降の微高地に、窪んだ部分は上層がシルト層によって埋積され、後述する谷地形3とした窪地に対応するものとなっている。北壁には、中期後半～後期前半の遺物を含む谷地形3最上層の埋没土は確認できないが、少なくとも弥生後期段階までの微地形には、これら地山下位の堆積状況が深く影響を与えている。

弥生中期～後期後半段階の遺構は10層上面で検出しているが、本来的な遺構面(生活面)は9層上面の可能性が高い。事実、壁面では9層上面から穿たれたピットを確認している。古墳中期～中世期の遺構を検出している第1検出面までの間には、6～8層とした堆積層が見られるが、図右側に見られる8層上面から掘り込まれるピットを確認していることから、未確認の遺構面が存在する可能性が高い。また、8層は顕著なラミナは認められないものの、粗砂粒の貫入状況から自然堆積層と判断されるが、6層は下場の状況を観察すると人的攪拌を受けた耕作土の可能性もある。第1検出面は6層上面で設定しているが、これより上位は近世～現代までの耕作土が連続することから、上面は完全に削平を受けている。

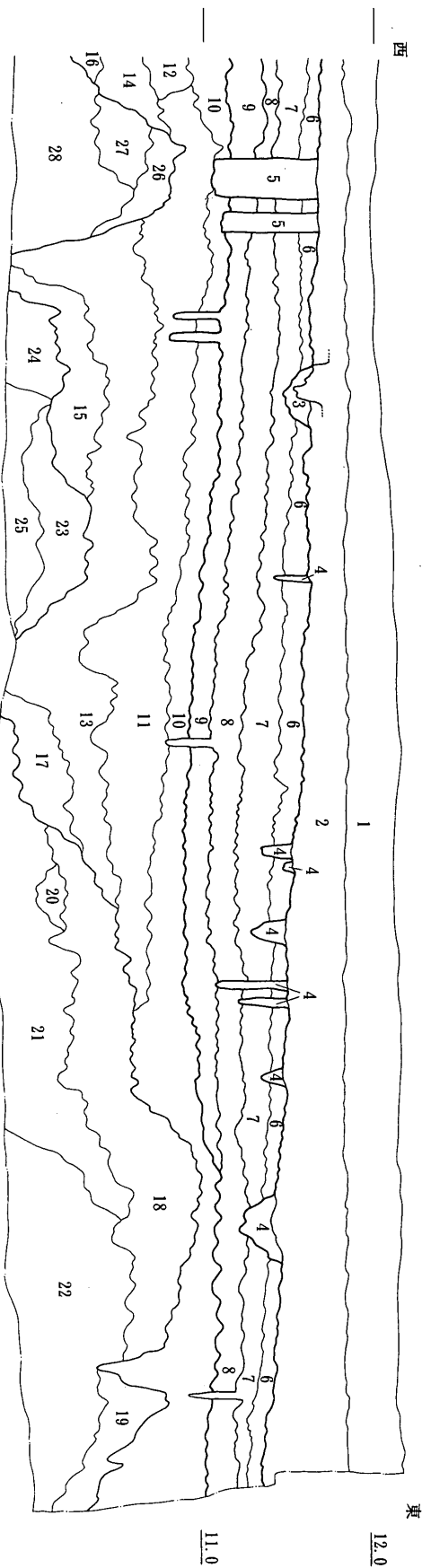
2. II-4区北壁

本調査区は、西側にII-6区から続く微高地と、中央部に谷1、東側II-1区に跨る微高地が存在する。地山層は22層とした微高地の基盤となる砂礫層とその上面を覆う21層としたシルト層から成る。谷1には弥生後期以降の遺物が含まれるが、埋積土に顕著な流水状態が見られないことから、下刻によって生じたものではなく基盤層である砂礫層の凹凸が谷1の形成に深く関係していたものと推測できる。弥生期の遺構が確認される第2検出面は21.22層上面、古墳時代以降の遺構が検出される第1検出面は、9層上面である。他の調査区に比べて検出面間の堆積層が薄いのは、本調査区の大部分が微高地上に位置していることによる。谷1埋没土は、上・中・下層に大別される。下・中層には弥生～古墳中期の遺物を含み、上層には古代～中世前半の遺物が見られる。また、第1検出面基盤土となる9層が上・中層間に貫入することから、周辺の微高地上面の埋没が進行しながらも中世前半までにはほぼ埋没していたものと思われる。

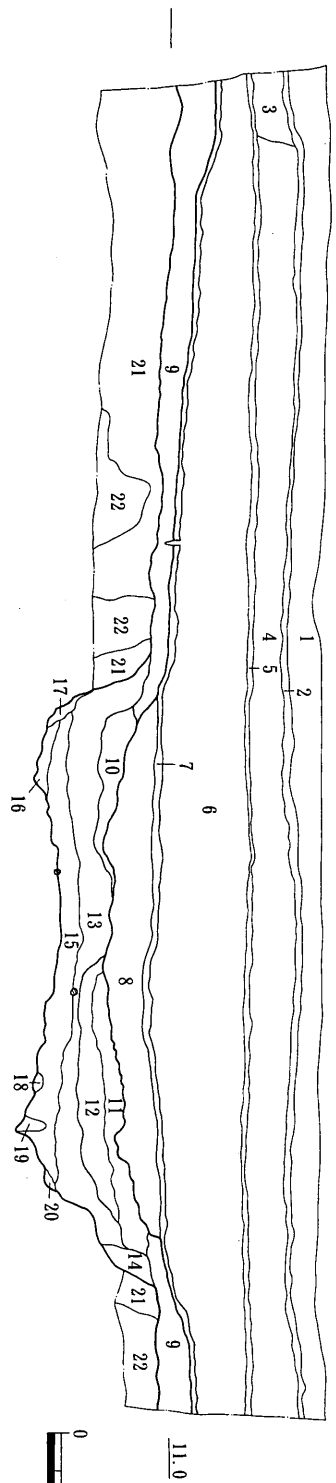
3. II-5区北壁

本調査区は微高地上に位置し、中央北半部にはII-4区から続く谷1が所在する。無遺物層である地

II-6区北壁

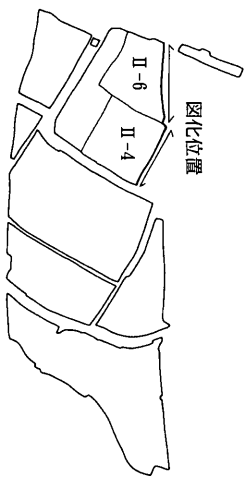


II-4区北壁



- II-6区北壁
- 1 粘土
 - 2 7.57/1 黄褐色粘砂質土(埋蔵する状態?の粘土層)
 - 3 7.57/1 黄褐色粘砂質土(SD12.13)
 - 4 KN/埋砂色粘砂質土(第1面遺構埋土)
 - 5 10R/2 灰褐色シルト(地山塊多含む)面遺構埋土
 - 6 10R/2 灰褐色シルト(地山塊多含む)面遺構埋土
 - 7 2.57/3 灰褐色粘砂質土(埋蔵層?)
 - 8 2.57/3 灰褐色粘砂質土(埋蔵層?)
 - 9 2.57/2 灰褐色粘砂質土(埋蔵層)
 - 10 2.57/2 灰褐色粘砂質土(第2面<遺構土)
 - 11 2.57/6 埋砂色粘砂質土
 - 12 2.57/6 埋砂色粘砂質土
 - 13 2.57/4 に近い黄褐色粘砂質土
 - 14 57/4 灰褐色粘砂質土
 - 15 NI/灰砂中砂(クミナ有D)
 - 16 57/6 灰褐色粘砂質土
 - 17 57/4 灰褐色粘砂質土
 - 18 57/1 灰褐色粘砂質土(クミナ有D)
 - 19 2.57/1 黄褐色粘砂質土(クミナ有D)
 - 20 2.57/8 黄褐色粘砂質土(クミナ有D)
 - 21 2.57/2 灰褐色粘砂質土(クミナ有D)
 - 22 2.57/4 に近い黄褐色粘砂質土(クミナ有D)

- II-4区北壁
- 1 10R/1 埋砂色粘砂質土(埋蔵土)
 - 2 10R/4 に近い黄褐色粘砂質土
 - 3 木屑混成黄褐色粘砂質土
 - 4 10R/1 埋砂色粘砂質土(埋蔵土)
 - 5 10R/1 埋砂色粘砂質土(埋蔵土)
 - 6 埋蔵土(埋蔵土)の埋蔵土(木屑混)
 - 7 10R/1 埋砂色粘砂質土(第2層、地山塊含む)
 - 8 2.57/4 埋砂色粘砂質土(第1面遺構埋土)
 - 9 2.57/4 埋砂色粘砂質土(第2層)
 - 10 10R/2 灰褐色粘砂質土(第2層)
 - 11 10R/2 灰褐色粘砂質土(第2層)
 - 12 砂層(第2面遺構埋土)
 - 13 10R/1 埋砂色粘砂質土(第2層)
 - 14 10R/2 灰褐色粘砂質土(第2層、地山塊含む)
 - 15 2.57/1 黄褐色粘砂質土(第2層)
 - 16 57/1 灰褐色粘砂質土(第2層、地山塊含む)
 - 17 7.57/1 黄褐色粘砂質土(第2層)
 - 18 2.57/1 黄褐色粘砂質土(第2層)
 - 19 灰褐色粘砂質土(第2層)
 - 20 2.57/1 黄褐色粘砂質土(第2層、地山塊含む)
 - 21 10R/6 灰褐色粘砂質土(第2層)
 - 22 砂層(第2面遺構埋土)



0 10m
(縦S=1:40、横S=1:200)

第10図 土層断面その1

山層は31～45層までのラミナが顕著に見られる粗砂～砂礫層と、その上面を覆う26～29層としたシルト層から成る。ここでも地山層中の粗砂～砂礫層の起伏が、弥生以降の微高地に形成に影響を与えている。弥生期の第2検出面は26.28層上面、古墳中期以降の遺構が見られる第1検出面は4層上面である。微高地上面ということもあり、各検出面間の堆積層は薄い。谷2は本調査区で途切れ、埋没土が恒常的な流水状態が想定できない粘土層によって埋没していることから、微高地を構成する粗砂・砂礫層堆積時の窪みが主要な形成要因と考えられる。本調査区では、第1検出面の基盤土が谷2上面を覆うように堆積しており、Ⅱ-4区で見られた古代～中世前半の堆積土は見られない。ここでも第1検出面から上位には、近世～現代の耕作土が連続して見られることから、第1検出面上面はかなりの削平を受けている。

4. Ⅱ-8区北壁

本調査区西半部は谷3が所在する低地部分、東半部がⅡ区中央部を南から北へ延びる微高地部分に該当する。地山層は、27～44層までの明瞭なラミナが認められる粗砂～砂礫層、22～29層までのシルト層から構成される。第2検出面を設定した22.25層上面は、東から西へ緩やかに傾斜し、東西両端で0.3m程の比高差が見られる。谷3が所在する部分は、微高地と低地との変換点付近であり、その下位には地山を構成する粗砂～砂礫層の窪みが看取される。谷3には、中期後半～弥生後期後葉の遺物が含まれるが、古墳時代以降の遺構が確認される第1検出面では、完全に平坦化している。西側の低地部分では、第1・2検出面間の堆積層が厚く、10.11層は後述する土器・礫群の集中的な廃棄が見られるSX08に対応する堆積層である。また、14.15層が土坑上面に土器・礫群が集中的に廃棄されるSX06に対応する埋没土である。

5. Ⅱ-2区南壁

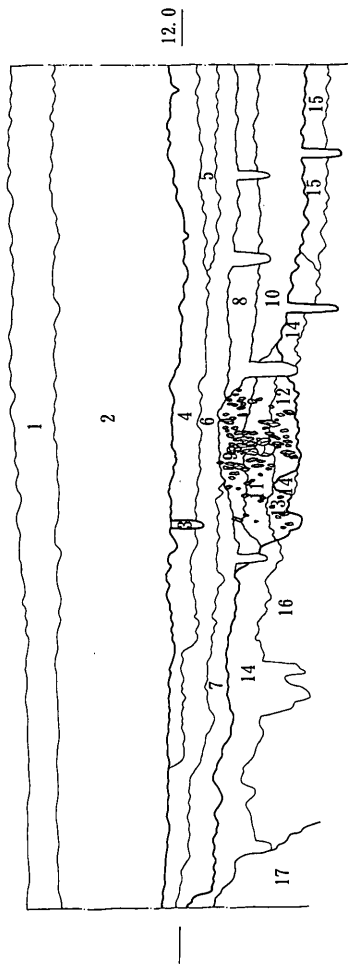
本調査区は、Ⅱ-8.9から続く微高地の東側斜面に相当する。地山層は微高地を主体的に形成する17層の砂礫層とその上面を覆う14～16層までの粘土層から構成されている。西側の微高地から東側の低地までの比高差は0.4m程を測る。14.15層上面に設定した第2検出面では、弥生中期から後期の遺構を確認しており、微高地から低地へ傾斜する途中の窪みに土器・礫群が集中して廃棄されるSX04が存在する。9層中には弥生後期後半、下位の11.12層には弥生中期後葉の土器が含まれることから、2時期にわたって微高地縁辺部の窪地に土器・礫群の廃棄遺構が形成されていることになる。第1検出面は本来的には4層上面に対応するが、調査段階では7.8層上面において遺構検出を実施している。よって、4層上面から穿たれた遺構は把握できていない可能性が高い。また、古代期の所産と考えられるST19～21の土壇墓は8層上面から穿たれたものである。

6. Ⅱ-2区北壁

本調査区の大部分は、Ⅱ区微高地とⅠ区扇状地間の低地部に相当する。14層より下位が地山層に該当するが、微高地下位で見られた砂礫層は確認できない。また、調査区中央に南東から北方向へ抜ける旧河道(11～13層)が存在する。未掘であることから形成時期は不明であるが、この旧河道上面で弥生中期～後期の遺構を確認していることから、それ以前の形成時期が想定される。また、この旧河道の延長上に谷1が存在するが、その具体的な関係は定かではない。古墳時代以降の遺構を確認している第1検出面は5.7層上面に設定しているが、微高地寄りの調査区西側では層厚0.1m程の堆積層しか介在させていないことから、本来的には第2検出面の遺構も同一面で確認できた可能性が残る。

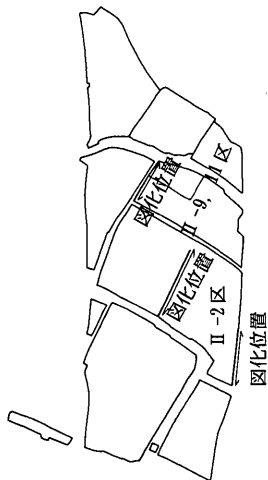
II-2区南壁

東 13.0



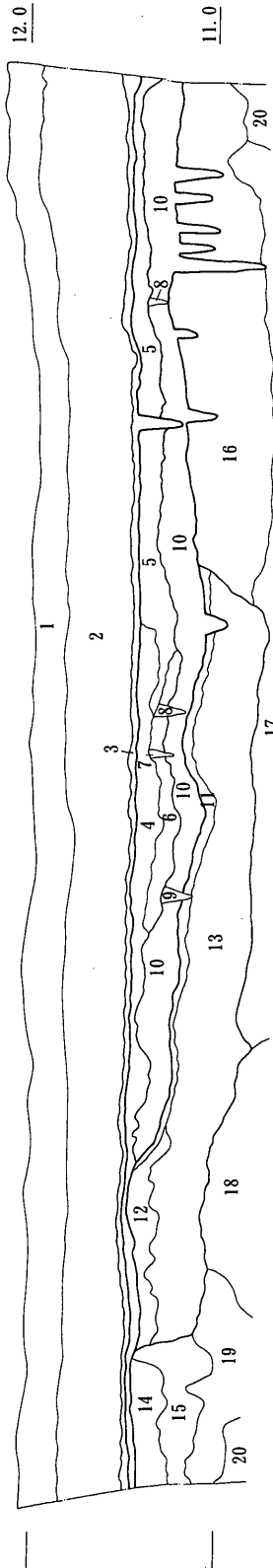
II-2区 南壁

1. 耕作土
2. 灰土及び道転する田耕作
3. 灰白色粘質土(第1面基礎層)
4. 灰白色粘質土(第1面基礎層)
5. 灰白色粘質土(第1面基礎層)
6. 灰白色粘質土(第1面基礎層)
7. 灰白色粘質土(第1面基礎層)
8. 灰白色粘質土(第1面基礎層)
9. 灰白色粘質土(第1面基礎層)
10. 灰白色粘質土(第1面基礎層)
11. 灰白色粘質土(第1面基礎層)
12. 灰白色粘質土(第1面基礎層)
13. 灰白色粘質土(第1面基礎層)
14. 灰白色粘質土(第1面基礎層)
15. 灰白色粘質土(第1面基礎層)
16. 灰白色粘質土(第1面基礎層)
17. 砂礫層



II-2区北壁

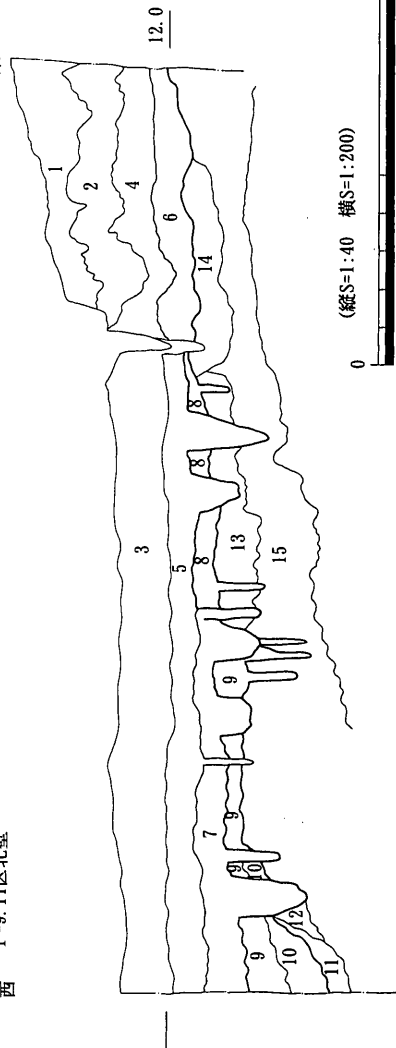
東 12.0



- II-2区 北壁
1. 耕作土
 2. 灰褐色粘土
 3. 灰褐色粘土(0m 沈積)
 4. 暗茶色粗砂粘質土(0m 沈積, 第1面基礎層)
 5. 暗茶色粗砂粘質土(0m 沈積, 第1面基礎層)
 6. 暗茶色粗砂粘質土(遺構面)
 7. 暗茶色粗砂粘質土
 8. 暗茶色粗砂粘質土
 9. 暗茶色粗砂粘質土
 10. 暗茶色粗砂粘質土(遺構面)
 11. 暗茶色粗砂粘質土(未掘の下層道路, 上面が第2面)
 12. 暗茶色粗砂粘質土(未掘の下層道路)
 13. 暗茶色粗砂粘質土(未掘の下層道路)
 14. 暗茶色粗砂粘質土(第2面基礎層)
 15. 暗茶色粗砂粘質土(第2面基礎層)
 16. 暗茶色粗砂粘質土(第2面基礎層)
 17. 暗茶色粗砂粘質土
 18. 暗茶色粗砂粘質土
 19. 暗茶色粗砂粘質土
 20. 褐色砂

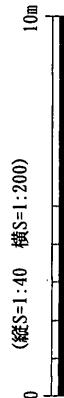
I-9.11区北壁

東 12.0

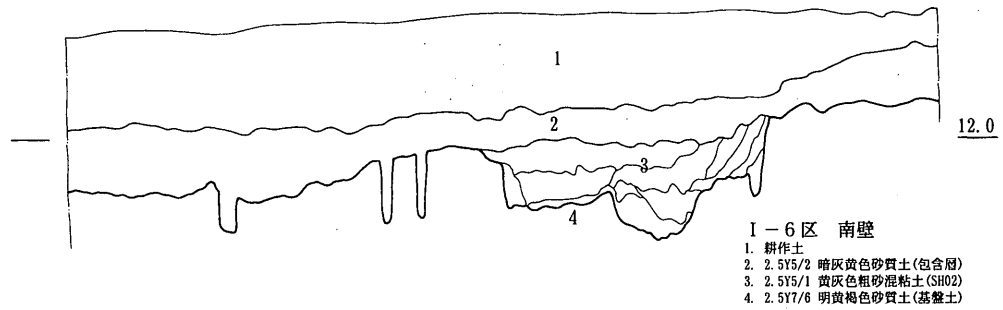


I-9.11区 北壁

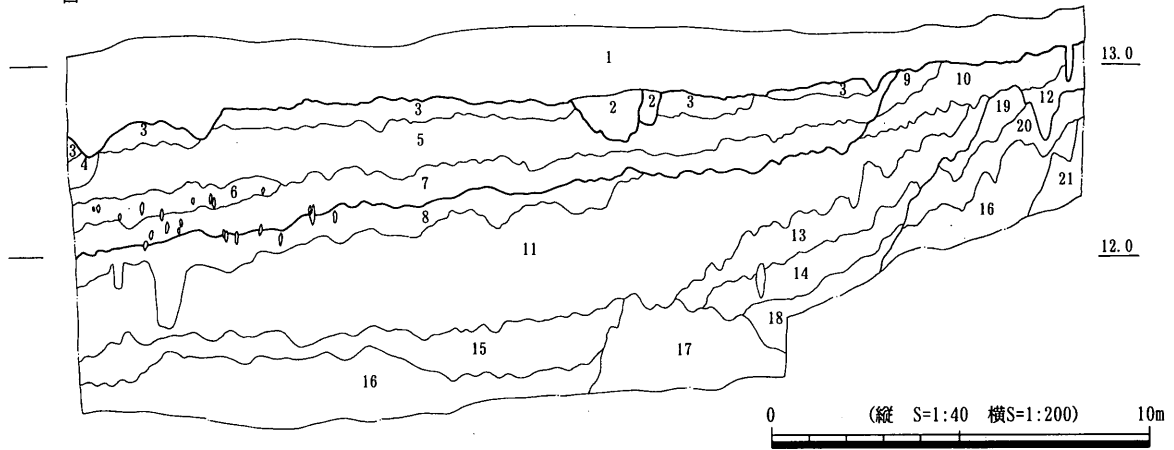
1. 造成土
2. 造成土
3. 耕作土
4. 耕作土
5. 灰褐色粘質土
6. 灰褐色粘質土(遺構面)
7. 灰褐色粘質土(遺構面)
8. 灰褐色粘質土(遺構面)
9. 灰褐色粘質土(遺構面)
10. 灰褐色粘質土(遺構面)
11. 灰褐色粘質土(遺構面)
12. 灰褐色粘質土(遺構面)
13. 灰褐色粘質土(遺構面)
14. 灰褐色粘質土(遺構面)
15. 灰褐色粘質土(遺構面)



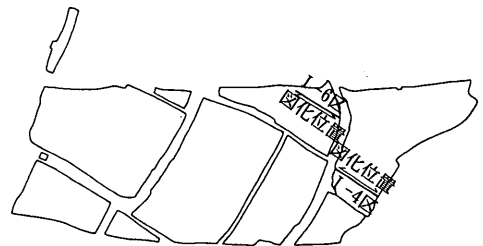
第12図 土層断面 その3



I-6区 南壁
 1. 耕作土
 2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土(包含層)
 3. 2.5Y5/1 黄灰色粗砂混粘土(SH02)
 4. 2.5Y7/6 明黄褐色砂質土(基盤土)



I-4区 北壁
 1. 耕作土
 2. 5Y6/1 灰色粗砂(第1面SD01.02)
 3. 2.5Y6/1 黄灰色砂質土(第1面基盤土)
 4. 5Y5/1 灰色粗砂混粘土
 5. 2.5Y5/1 黄灰色砂質土
 6. 5Y6/2 灰オリーブ色シルト(弥生土器・礫集中)
 7. 5Y7/2 灰白色粗砂混シルト
 8. 2.5Y7/4 浅黄褐色粗砂混粘土(第2面基盤土)
 9. 2.5Y8/4 黄褐色粗砂混粘土(第1・2面基盤土)
 10. 2.5Y8/6 黄褐色粘土
 11. 2.5Y7/6 明黄褐色粗砂混粘土
 12. 2.5Y7/6 明黄褐色粘土
 13. 2.5Y8/6 明黄褐色粗砂混粘土
 14. 2.5Y8/4 にぶい黄褐色粘土
 15. 2.5Y8/4 淡黄褐色粘土
 16. 2.5Y8/6 黄褐色粘土(花崗岩風化土)
 17. 2.5Y8/4 淡黄褐色礫混粘土
 18. 2.5Y5/4 黄褐色粘土
 19. 2.5Y7/4 浅黄褐色粘土
 20. 2.5Y6/8 明黄褐色粘土
 21. 花崗岩盤



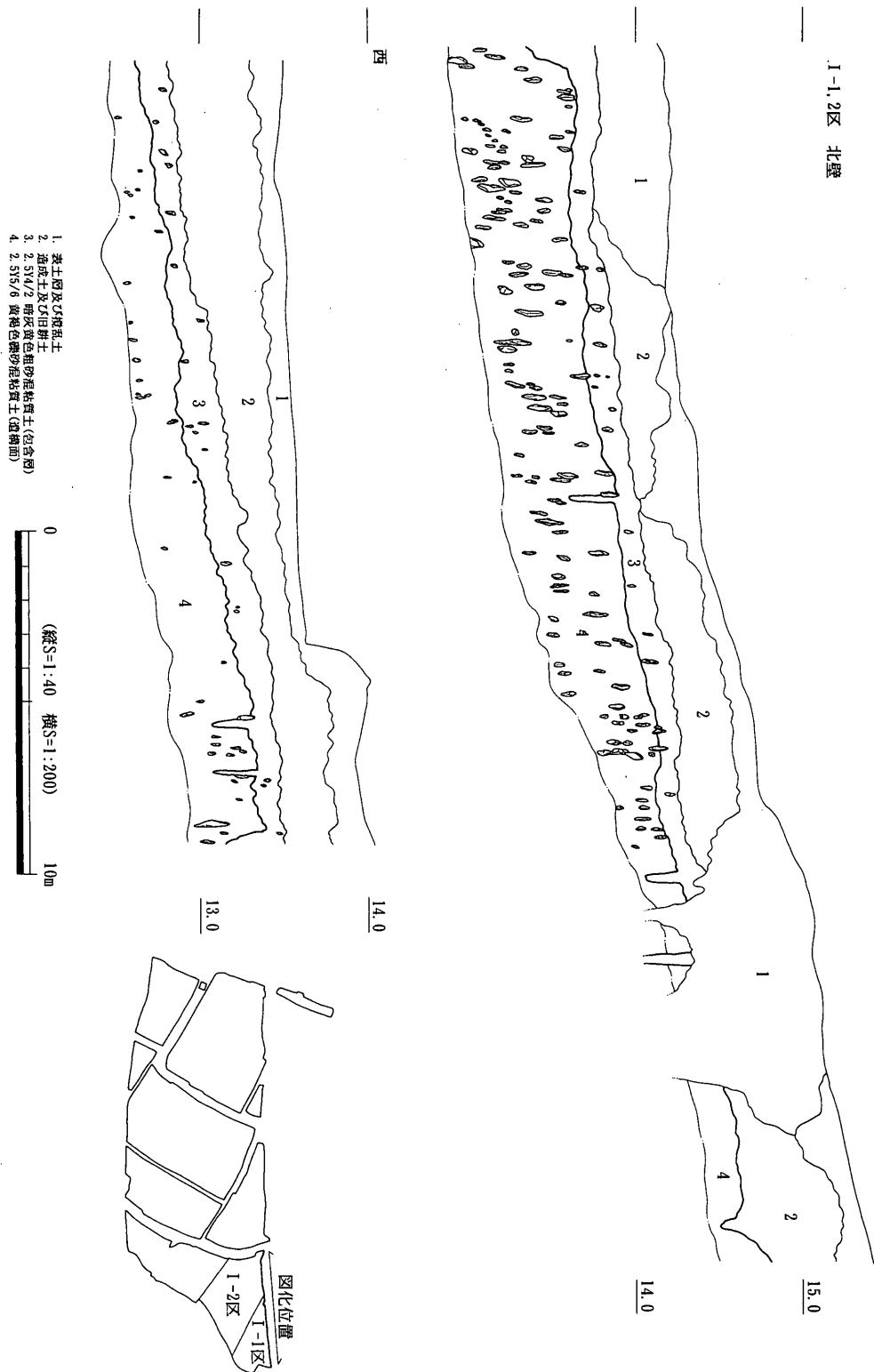
第13図 土層断面 その4

7. I-9.11区北壁

本調査区は東から西へ傾斜する扇状地斜面に相当する。扇状地は11～15層の粘土層から構成されており、壁面西端では、II-1.2区の低地部分に対応する傾斜面が確認される。遺構検出は11～14層上面と9.13層の2回に分けて実施しており、概ね上面には古代～近世期下位からは弥生期の遺構が確認されているが、下位の検出面においても上位の9.13層上面から穿たれたと考えられる遺構が多く存在することから、報告に際しては単一の検出面としている。

8. I-6区南壁

本調査区は東から西へ傾斜する扇状地斜面部に位置する。地山層は、砂岩礫を多く含む4層とした粘土層とその下位の5～6層までの砂質土から構成されている。この内、6層中には微細な炭化物を含んでおり、放射性炭素同位体分析の結果、BP 6600 ± 50の結果を得ている。また、東側に位置するI-2区の4層下位から縄文後・晩期の所産と推定される石器類が出土していることから、縄文期を通じて扇状地の形成が進んだものと見られる。遺構検出は4層上面にて実施しており、I区SH02他弥生後



第14図 土層断面 その5

期以降の遺構が確認できることから、弥生期には扇状地形成がほぼ完了していた可能性が高い。4層上面には弥生～中世段階の遺物を包含する2層が存在するが、4層上面の遺構埋没土と類似することから本層上面での遺構検出は不可能であった。

9. I-4区北壁

本調査区は扇状地斜面に位置する。地山層は、19～21層の花崗岩盤・同風化土と、砂岩礫を多く

含む8～18層の粘土層から構成されている。遺構検出は3層上面と8層上面の2回に分けて実施している。3層上面の第1検出面では近世～現代、8層上面の第2検出面では弥生期の遺構を確認している。また、同じ扇状地斜面に位置するI区の中では、検出面間の堆積層が比較的厚いことから、本調査区が浅谷状の地形面に相当する可能性が高い。

10. I-1.2区北壁

本調査区は、扇状地斜面に相当し現地表面・地山層ともに東から西へ緩やかに傾斜する。検出面は4層上面に設定した1面であり、弥生～近世期の遺構を確認している。4層上面に若干の遺物を包含する3層が存在し、I-2区東半部では、4層下位に相当する層準から、摩滅の著しい土器片・緑色片岩製の磨製石斧片・サヌカイト製の打製石鏃、楔形石器が出土している。これらの遺物群は、縄文後・晩期の所産と推定されることから、縄文期に形成の進んだ扇状地斜面に弥生期以降安定的に遺構が形成されているものと考えられる。

第2節 I区の調査

1. I区の概要

I区は調査対象地の東端に位置し、地形的には扇状地部分に相当する。0.3m程の表土層下には、0.1～0.2m程の弥生時代～中世期までの遺物を交える黒褐色系砂質土が見られ、その下層に基盤層である黄褐色粘質土が現れる。部分的には、これより下位の花崗岩風化土が露出する箇所も見受けられる。基本的に調査では、遺物包含層である黒褐色砂質土上面において一端遺構検出と記録を行い、その後基盤層である黄褐色粘質土まで掘り下げて再度遺構検出を行う2枚の遺構面に分けて実施した。しかし、整理作業の結果、上層段階で検出可能な弥生期の遺構や、下位で検出した中世段階の遺構も存在するなど、一部齟齬を来していることが判明した。薄い遺物包含層を介在させているものの、弥生・中世遺構も同一面から掘り込まれている可能性が高いことから、報告書作成では合わせて1枚の検出面として報告することにしたい。また、包含層中の遺物は、元来遺構出土のものである可能性が高い。

弥生時代の主な遺構では、後期後半を中心とした竪穴住居7棟、掘立柱建物3棟、井戸等の集落関連を検出している。包含層中には、弥生中期に遡るものが存在するが、明確な遺構として当該期のものは確認できていないことから、本遺跡中の後期後半段階における集落内の一つの単位と見られる。中でもSH02・04等の直径10m近い円形の竪穴住居を中心に構成されているが、SH05などの方形住居も僅かながら見られる。SB19は、これらの住居群と同時併存する1×3間(3.2×10.2m)の柱構造をもち床面積が32.64㎡を測る掘立柱建物であり、規模的には大型の部類に属する。一辺が0.5mの方形掘り方をもつ柱穴や床面積から、倉庫としての機能が推定される。

古代では、柱穴出土遺物の中に10c代と思われる両黒の黒色土器碗やほぼ完形の土師器甕を埋置した遺構(SX06)も存在するが、明確な建物等を検出していない。中世段階には、I区北東部で13～14c段階の集落を掘立柱建物を中心に多く検出した。掘立柱建物は密集せずに散在する様相が見られる。また、これら建物に伴って、土師質土器と銭貨を埋置する遺構(SX01～05)も多く検出している。また、I区南東部では、直径4.5m深さ2.0m以上の井戸(SE02)中に、凝灰岩製の五輪塔と宝篋印塔が投げ込まれた状態で出土している。井戸廃絶時に投棄されたものと推定されるが、寺院等に関する遺構は見られない。



第15図 I区遺構配置図

1. 縄文時代

I区北東部下位堆積層出土遺物

I区北東部の弥生～中世期遺構を調査中、混入した状態で縄文期の所産と考えられる打製石鏃ややや風化の進んだ剥片類の出土を確認したことから、下位の遺構面の有無と堆積層形成年代の確認を目的とした調査を行っている。また、この確認行為は調査期間等の諸条件から、I-2区東半部しか行っていない。

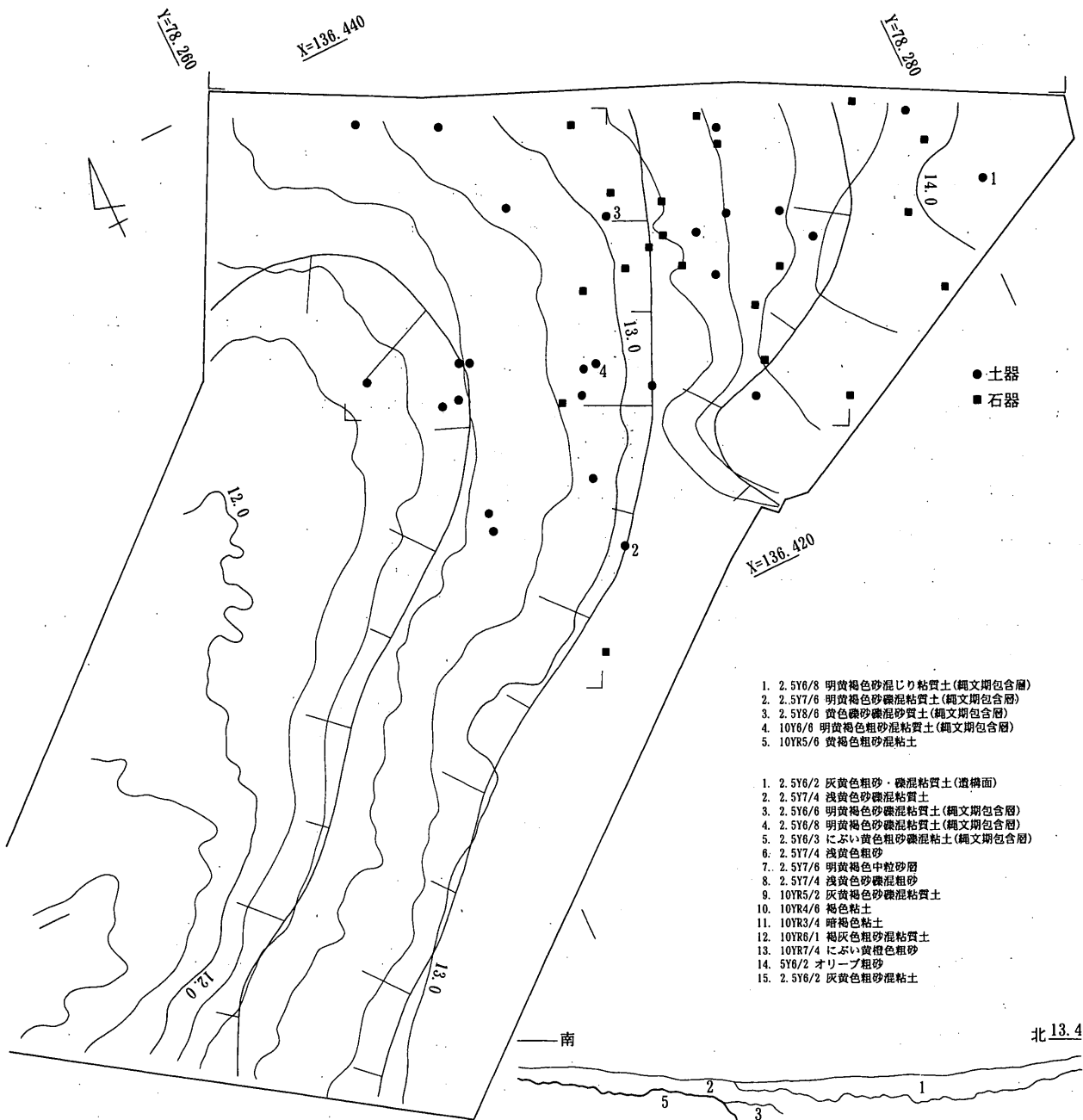
扇状地に相当するI区弥生～中世段階の諸遺構は、砂岩礫を多く含む粘土層(図16. 1～3層)の上面で検出している。下層への掘り下げによって土器・石器片等遺物の包含が確認できたのは、黄色粘土層(4～6層)においてである。また、調査区東側では、丘陵部を構成する花崗岩ないし同風化粘土層上面(10～15層)から遺物の出土を確認した。第16図の平面図は、遺物の包含が認められた6層までを除去した段階で作成しているが、地形面は北東から南西へ傾斜する浅い谷地形を呈している。必ずしも地形面に合致した断面図の作成は出来ていないが、トレンチ北壁の断面では遺物包含層を含めた1～8層が、地形面と同様に北東～北西方向に斜面堆積している状況が見受けられる。

遺物の垂直分布を点検すると、堆積層とほぼ同様に北東から南西方向へ傾斜ながら分布する状況が確認できる。また、複数の層準から出土していることや、一定程度の集中が認められないことを考慮すると、扇状地が形成される過程において二次的な移動や上下動を受けていると見ることが出来る。

時期決定可能な土器片を確認することは出来なかったが、緑色片岩製の磨製石斧基部片(1)から推測すれば縄文後・晩期の所産の可能性が高い。

位置的に離れるが、I-5区の弥生～中世遺構の基盤層(1～3層)下位砂層から出土した炭化物に対して放射性炭素年代測定を実施しており、BP 6600 ± 50の結果を得ている。分析試料が1点という問題があるが、年代的には縄文前期頃を示すものであり、本調査区との層位的な関係は明らかではないが、縄文期を通して扇状地の形成が進み、それが完了した弥生時代以降に安定的に遺構が形成されていると考えられる。

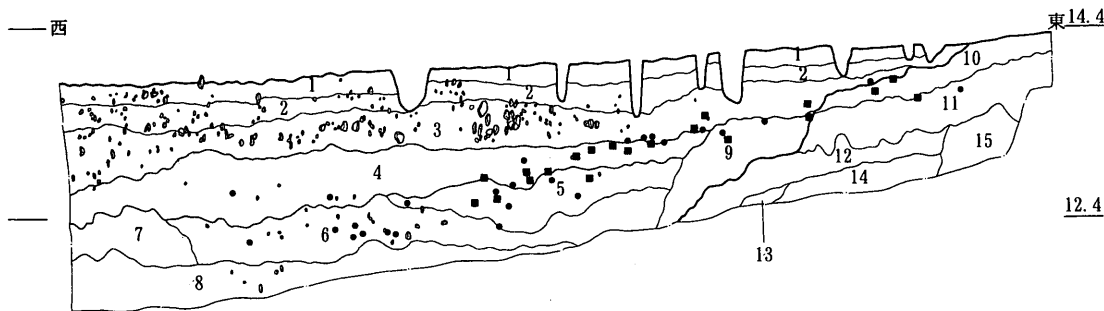
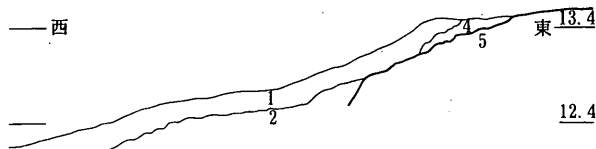
第17図1～4は図化可能な出土遺物である。土器片も数点取り上げているが摩滅が著しく図化できない。胎土中には細かな砂粒が多く見られ、黒化層の発達した比較的脆い焼成状況から、縄文土器片と推定される。1は緑色片岩製の乳棒状磨製石斧基部片。断面形は円形であり、全体に敲打調整痕と基面を中心として研磨による線状痕が見られる。2はサヌカイト製の打製凹基無茎式石鏃であり、側縁を中心とした細かな調整により素材面はほぼ取り込まれている。3. 4は上下縁に顕著な潰れ痕が見られる楔形石器またはその削片である。



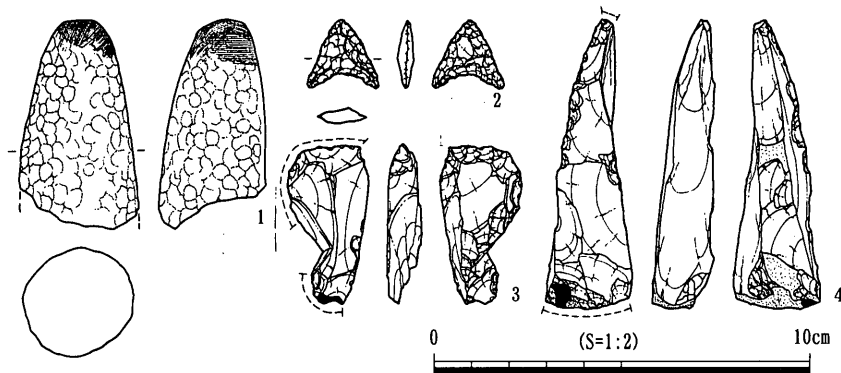
1. 2.5Y6/8 明黄褐色砂混じり粘質土(縄文期包含層)
2. 2.5Y7/6 明黄褐色砂礫混粘質土(縄文期包含層)
3. 2.5Y8/6 黄褐色砂礫混粘質土(縄文期包含層)
4. 10Y6/6 明黄褐色粗砂混粘質土(縄文期包含層)
5. 10YR5/6 黄褐色粗砂混粘土

1. 2.5Y6/2 灰黄色粗砂・礫混粘質土(遺構面)
2. 2.5Y7/4 浅黄色砂礫混粘質土
3. 2.5Y6/6 明黄褐色砂礫混粘質土(縄文期包含層)
4. 2.5Y6/8 明黄褐色砂礫混粘質土(縄文期包含層)
5. 2.5Y6/3 にぶい黄褐色粗砂混粘土(縄文期包含層)
6. 2.5Y7/4 浅黄色粗砂
7. 2.5Y7/6 明黄褐色中粒砂層
8. 2.5Y7/4 浅黄色砂礫混粗砂
9. 10YR5/2 灰黄褐色砂礫混粘質土
10. 10YR4/6 褐色粘土
11. 10YR3/4 暗褐色粘土
12. 10YR6/1 褐灰色粗砂混粘質土
13. 10YR7/4 にぶい黄褐色粗砂
14. 5Y6/2 オリーブ粗砂
15. 2.5Y6/2 灰黄色粗砂混粘土

0 (縦S=1:80 横S=1:200) 10m



第16図 I区 埋積谷遺物出土状況図



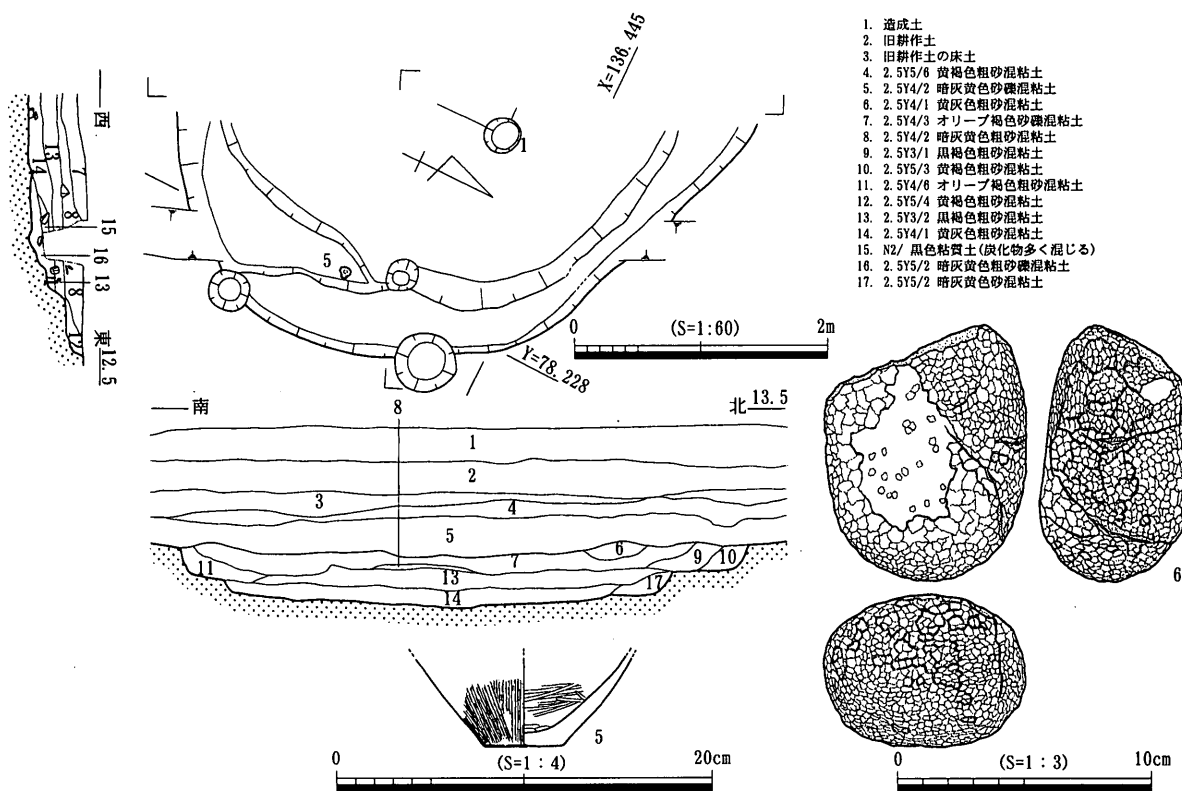
第17図 I区 埋積谷出土遺物実測図

2. 弥生時代

I区SH01

I-2区西部のX=136.445 Y=78.228付近で検出した竪穴住居である。住居西半分が現道下位の未調査となるが、現状で直径約4.5m深さ約0.4mの円形を呈する竪穴住居である。床面上では径0.2m深さ0.15mの柱穴を確認しているが、調査範囲の制約から支柱穴と認定するまでには至らない。残存深度が0.4mと良好であり、壁面の立ち上がりは階段状を呈する。この部分をベッド状遺構と考えることもできるが、床面と比較して平面プランに若干の差異が見られることから、2時期にわたって住居そのものが拡張された可能性がある。

5.6は出土遺物である。共に床面直上から出土している。5は小型の甕あるいは鉢の底部片である。6は砂岩製の敲石であり、ほぼ全面に敲打痕が見られる。良好な出土遺物は見られないが、5の底部形態から本住居は弥生後期後半に廃絶したものと推定する。

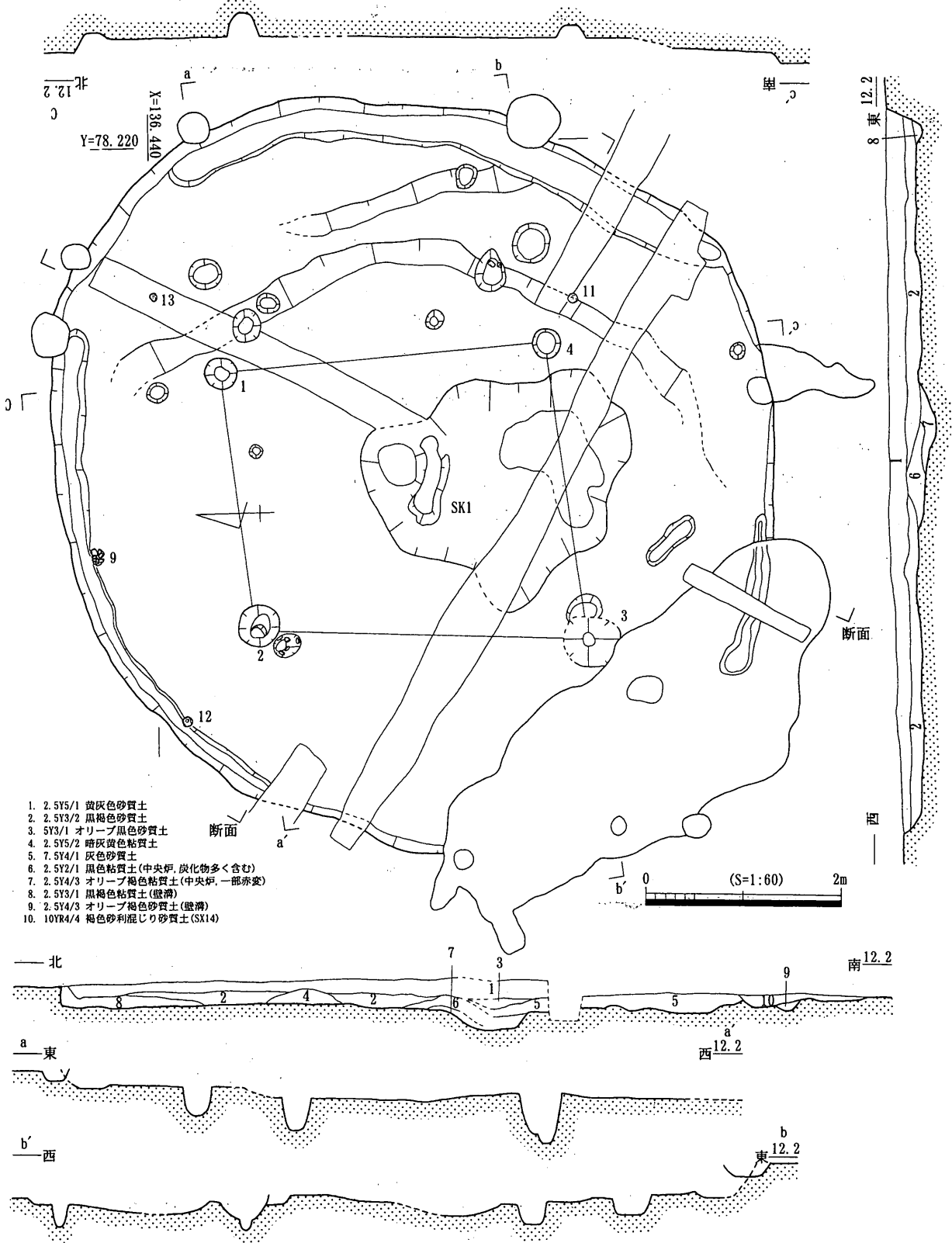


第18図 I区 SH01平・断面及び出土遺物実測図

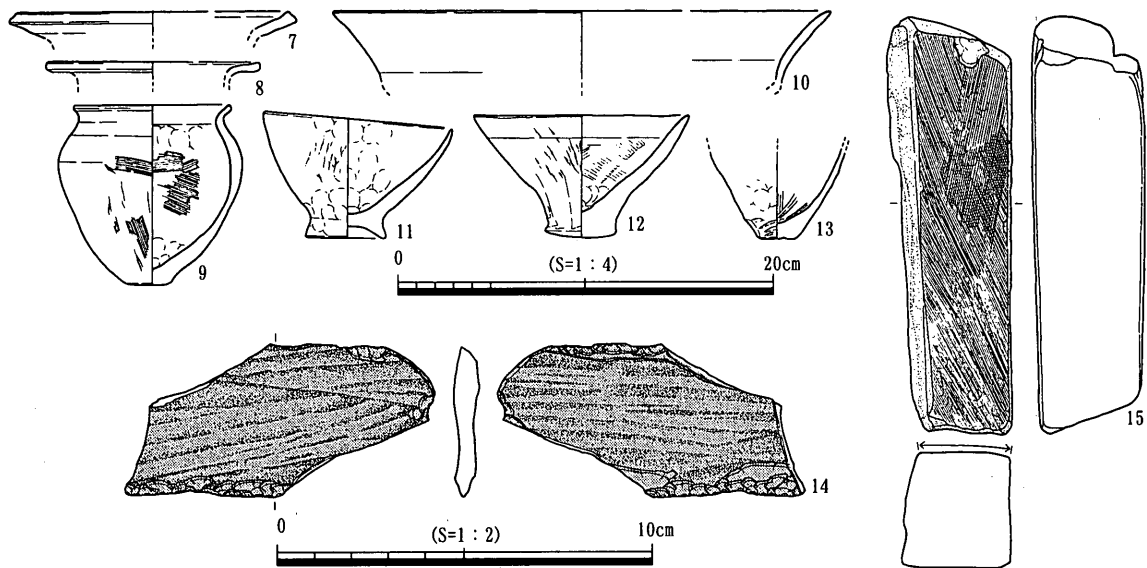
I 区 SH 02

I -6 区東部の X = 136.440 Y = 78.220 付近で検出した直径 7.2 ~ 7.6 m の円形の竪穴住居である。東から西へ緩やかに傾斜する緩斜面に形成されており、南側部分は、中世期の SX 14 によって破壊されているが、東側 0.3 m 西側で 0.2 m ほどの残存深度を測る。

床面は概ねフラットで地山層をそのまま利用し、住居東側から北側にかけては高さ 0.1 m 幅 1.2 m 程



第19図 I 区 SH02平・断面図



第20図 I区 SH02出土遺物実測図

の削り出しによるベット状遺構が確認される。壁溝は全周せず、部分的に検出するに留まった。主柱穴は図に示すとおり4穴であり、近接する位置に柱穴が重複するものがあることから、立て替えないし屋根材等の上部構造の補修が行われた可能性がある。

中央炉は2.2×2.5mの歪な楕円形を呈し、土手状の掘り残し部分を介して南北両側が窪む。底面には顕著な被熱痕は確認できないが、北側の窪みは深度が浅く、炭化物を多く混じえる6層が、炉の掘り方を越えて集積されていた。

遺物は主に床面直上から出土しており11.13が東側のベット状遺構直上、9・12が西側の壁溝際の床面直上よりほぼ完形の状態で出土している他は、埋没土中から検出されたものである。

7.8は長頸壺口縁部。9は小型の甕であり、内外面に丁寧なハケ調整が見られる。10は高杯口縁部であり、口縁部はやや発達気味の大きく外反する。11～13は小型鉢。11は脚台様の底部をもち、外面に絞りを多く止める。12の底部は凸状を呈し古相を示す。

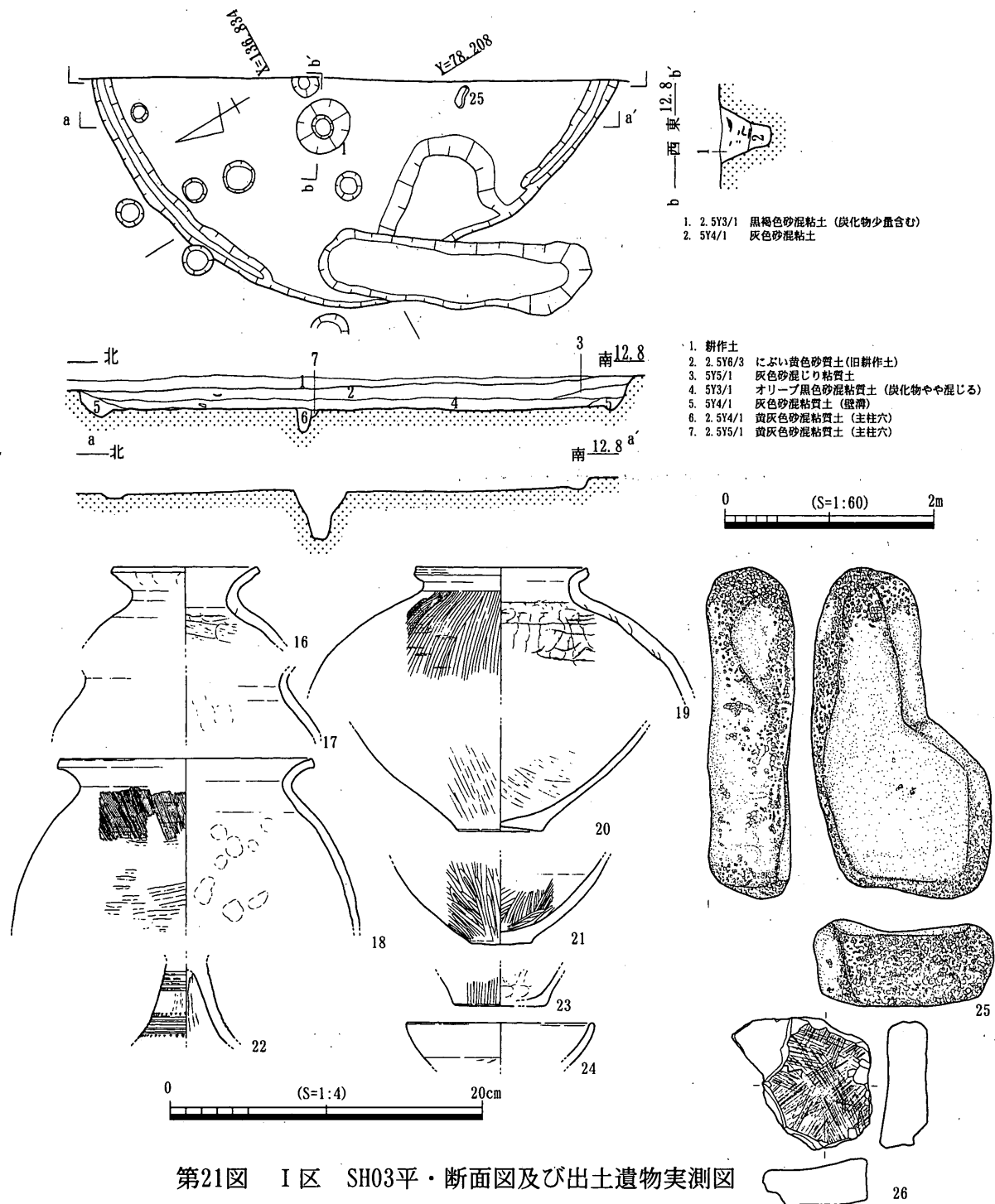
15は砂岩製の砥石である。現状で確実な使用面は1面であり、その断面形は直線的になるとともに、線状痕が側縁に対して斜交するものである。14は紅簾片岩製の打製石庖丁である。一側縁に抉りを止め、刃部は両側から調整されており、ほぼ全面に磨耗痕が観察される。

本住居の帰属時期に関しては、11.12の小型鉢の底部形態から、弥生後期後葉と推定することができる。また、小型化した鉢の低部形態から後期後葉段階でも古相に位置づけられる可能性が高い。

I区SH03

I-10区西部のX=136.384 Y=78.208付近で検出した竪穴住居である。半分が現道下位の未調査部分となるが、検出状況から直径5m程の円形の竪穴住居に復元できる。概ね東から西へ傾斜する花崗岩盤を掘り抜いて構築されているが、後世の削平を受けており0.2m程の残存を留めるに過ぎない。床面は基盤層である花崗岩盤ないしその風化土をそのまま利用している。

壁際で幅0.2m深さ0.1m程の壁溝が見られるが、住居西側の基盤層が台状に掘り残されている部分で途切れる。現状の床面中央には6基ほどの柱穴が見られるが、P1は直径0.5m深さ0.4m程を測り主柱穴と考えられる。東半部が未調査となるものの、検出範囲におけるP1の位置関係から見て、2基の主柱穴を推定することができる。



第21図 I区 SH03平・断面図及び出土遺物実測図

また、現道を挟み東側の I -5 区 S D 51 は位置関係から見て、本住居の周溝である可能性も考えられるが断定はできない。

床面上には出土遺物は見られず、1～8がP1の埋没土中より、9の小型鉢が東壁の住居埋没土中から出土している。

16は小型の広口壺であり、肩部内面には横方向のケズリが明瞭に見られる。17～19.23は甕の口縁部・底部片である。18は胴部外面に平行タタキが見られ、肩部には縦ハケによってタタキ目を消去する。19は頸部が窄まるやや厚手の甕であり、胴部外面には密な縦ハケによって消される平行タタキが僅かながら確認され、内面には粘土帯積み上げの接合痕が明瞭に見られる。

20は平底を留める壺底部片であり、内面には縦方向のケズリ調整が見られる。23は胎土中に雲母・

角閃石を多く含み、高松平野あるいはその周辺からの搬入品の可能性がある。21は外面に密な縦ミガキを施す壺底部片である。22は外面に横方向のヘラ描き沈線と細かな刺突による列点文が見られる高杯脚部片である。24は外面に絞り痕を留める小型鉢の口縁部片である。

25は砂岩製の敲石であり、図下面を中心に敲打痕が見られる。26は安山岩製の砥石であり、砥面はU字状に窪み研磨痕と考えられる線状痕が見られる。

出土遺物の様相は、鉢あるいは小型鉢の存在や明瞭に平底を留める甕底部などから弥生後期後半を中心とする時期を示すことから、本住居が同時期に廃絶したものと推定したい。

I区SH04

I-10区X=136.393 Y=78.203付近で検出した竪穴住居である。直径が8.0m程の円形の平面プランを有し、主柱穴は4穴を採用する。東から西へ傾斜する緩斜面に構築されていることから、北西方向の床面はほぼ水平であるが、東西方向は若干傾斜するものとなっている。

最深部で0.3m程の残存深度が確認できるが、埋没土中位には、地山塊を多く交える貼床層(主として11.14層)が見られることから、機能時には、最低一回の床面更新が行われたと見られる。この貼床層は、周囲の段状の部分より内部で見られ、住居拡張時に施された可能性が高い。当初の床面は地山をそのまま利用しているようだが、この段階に伴うベット状遺構として指摘できるのは、主柱穴2.3西側に部分的に見られる高さ0.1m程の地山削り出しによって成形された箇所だけである。

中央炉は2基確認され、SK01は床面更新後の2次床面から穿たれている。主柱穴は1～4の4基から構成されているが、P1,P2はほぼ同じ位置に先後関係にある柱穴を認めることから、主柱穴の配置を維持したまま床面更新を行っているものと見られる。

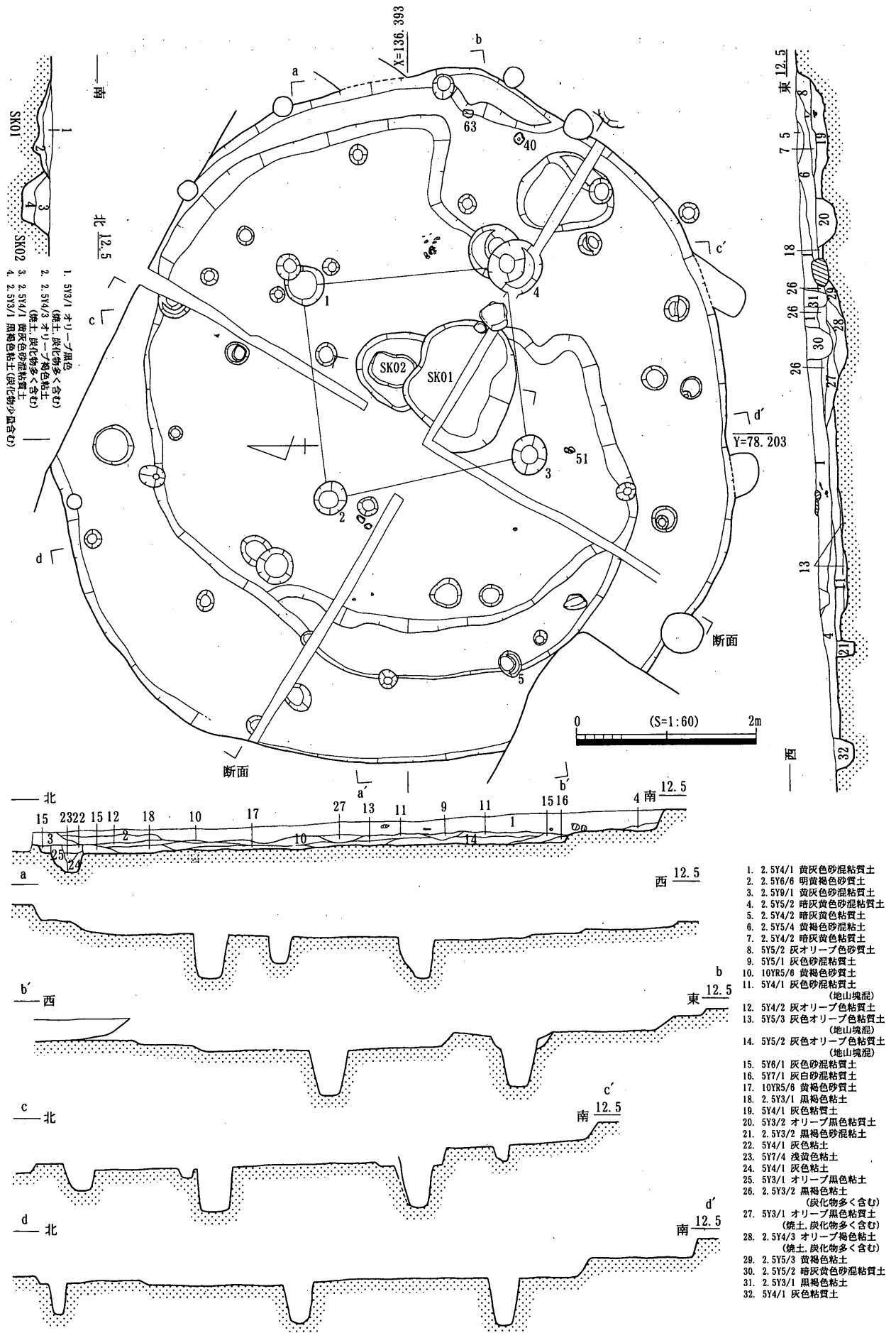
また、二次床面検出作業中には、第23図に示す様に住居南半部を中心として炭化材が多く見られた。炭化材は直径0.15～0.2m程のものが多く、住居中心部へ向かって終息するように出土した。樹種鑑定の結果、これらの炭化材はツブラジイ・ミズキ属・トリリコ属・マツ属複雑管束亜属と判明している。

27～46.56～58.62～64は二次床面上からの出土遺物である。27～29は広口壺。27は直立気味の頸部に拡張される口縁端部をもち、本遺跡出土資料中に類例を見ないものである。29は短く屈曲する口縁部をもち、外面はミガキ締められる。30は広口壺胴部片と見られ、外面には平行タタキを多く残す。サイズの中形品であろう。31～34は甕口縁・体部片である。

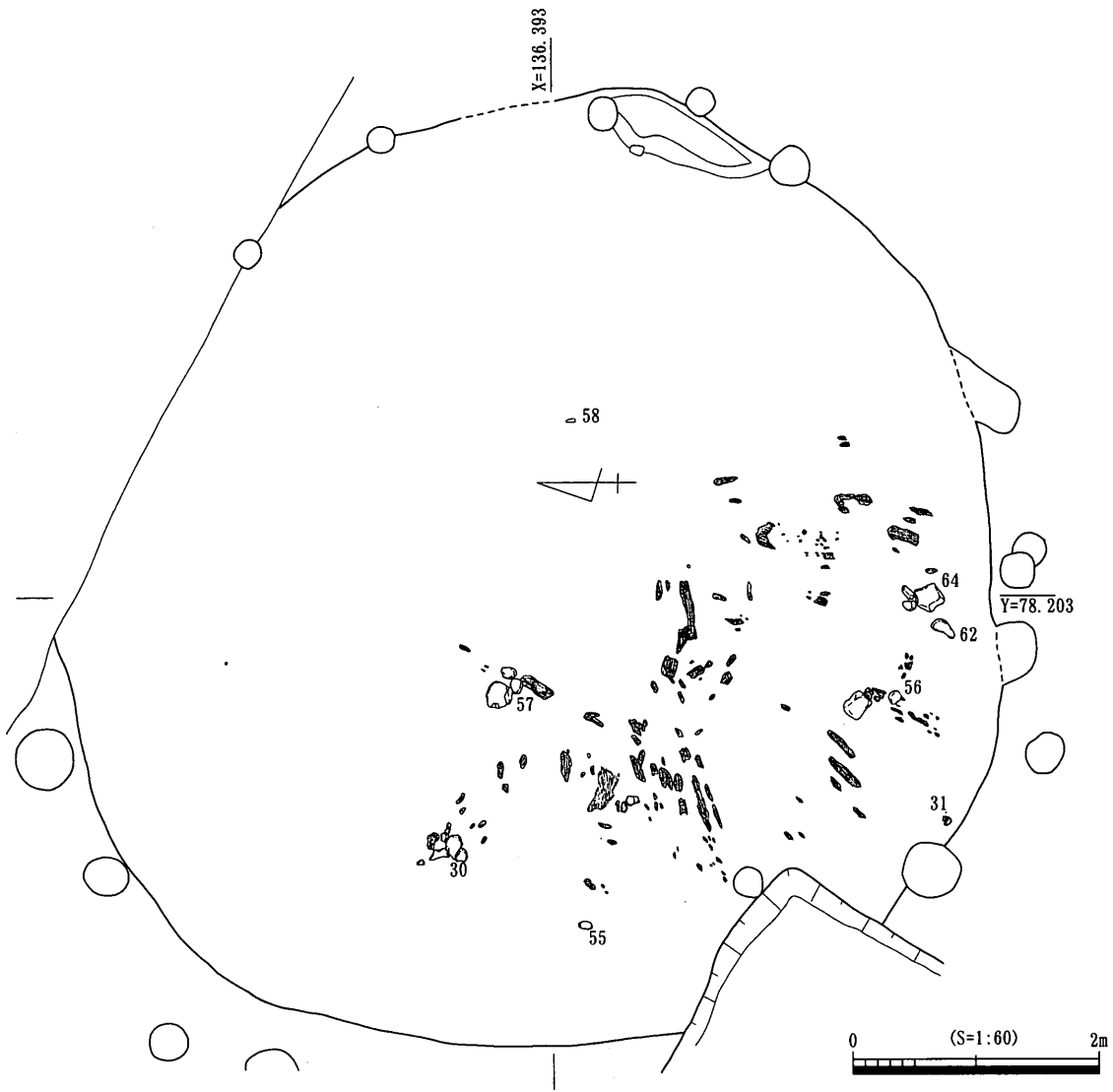
33は胴部外面の平行タタキを縦ハケによって消去し、脚台様の底部をもつ。35～39は高杯の口縁・脚部片である。35～37は、胎土・調整から見て高松平野北東部からの搬入品と見られる。40～46は小型鉢である。

55は安山岩質斑岩製の敲石。上下面に敲打痕が見られるのに加えて全体が磨耗していることから、磨石転用の可能性がある。57は砂岩製の敲石。ほぼ全体に敲打痕が見られるが、線状に観察される箇所も存在する。58は圭頭斧箭形式の鉄鏃。先端部を欠損しているが、全体的に厚みが均質であることから、鑿切りによって製作された可能性が高い。62.63は砂岩製の敲石。63は全体的に熱変を受ける。64は砂岩製の置き砥石。砥面は1面であり、僅かに窪む。

47～52.59～61は下層床面に伴う遺物である。47～49は甕口縁部。47は口縁部下が段状に仕上げられていおり、本遺跡出土資料中では異形品である。50～52は高杯口縁・脚部片である。50.52は胎土・調整から高松平野北東部地域からの搬入品と見られる。53は甕底部片。54は椀形の小型鉢底



第22図 I区SH04平・断面図

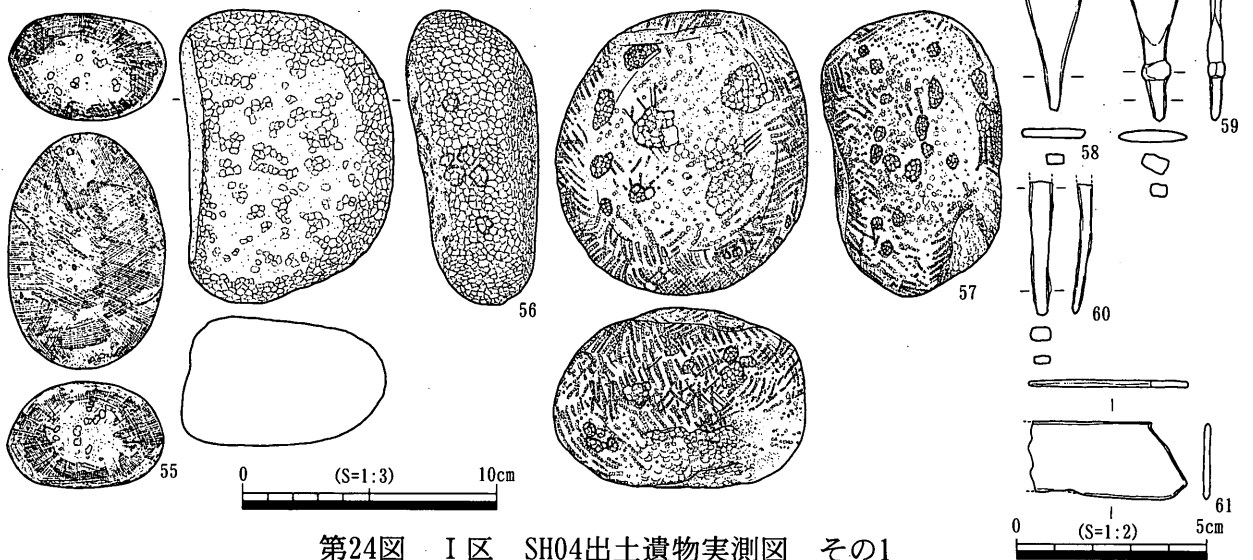
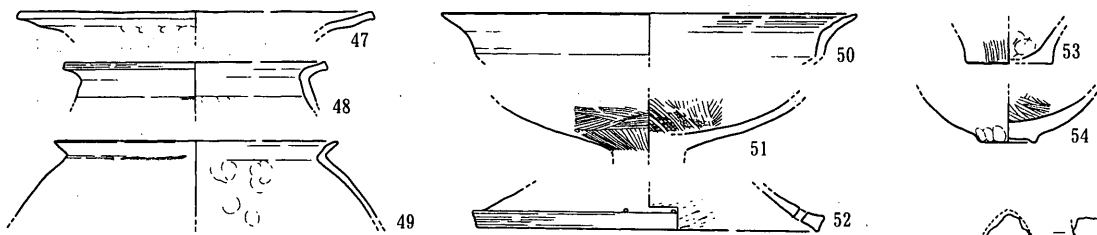
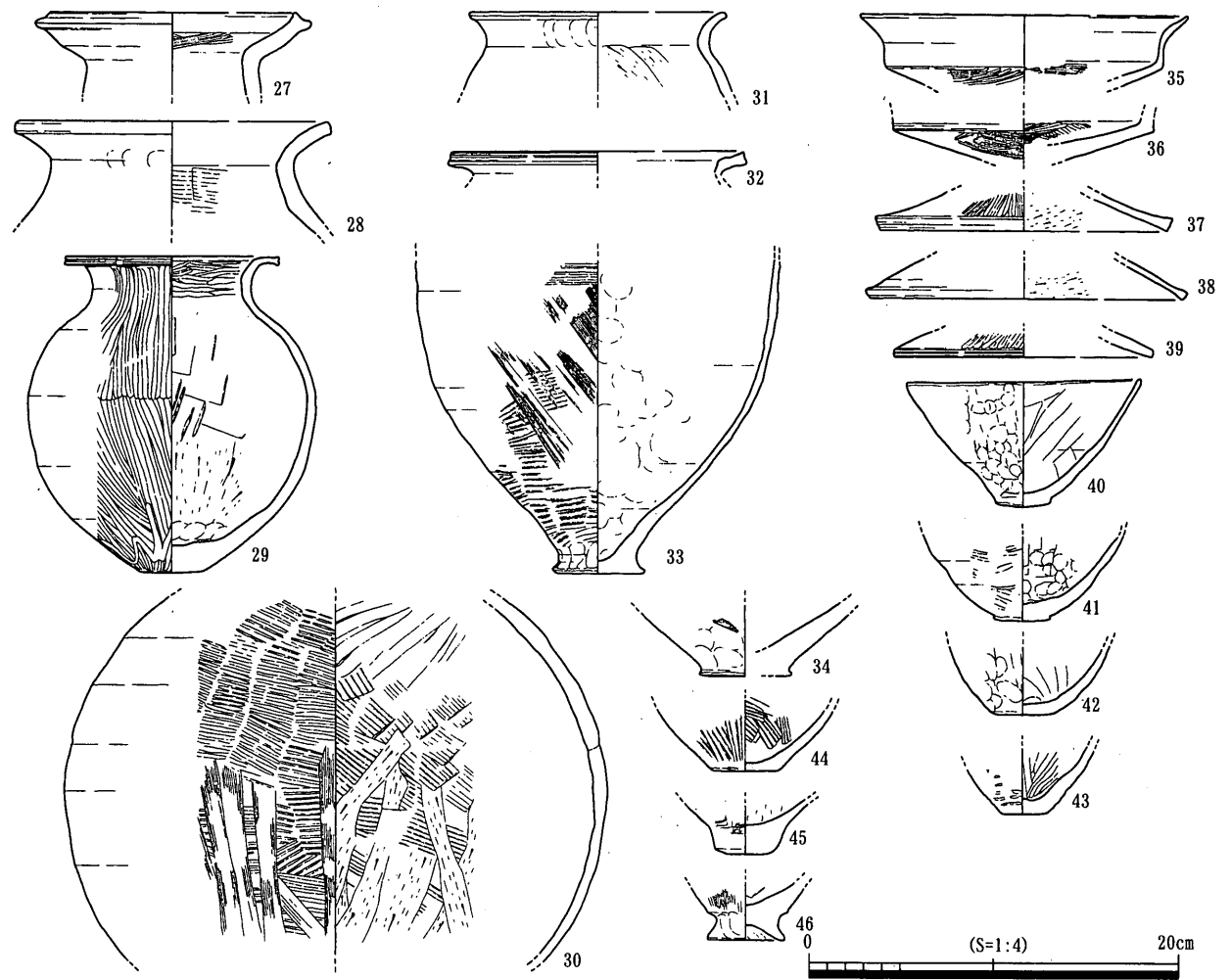


第23図 I区 SH04炭化材出土状況図

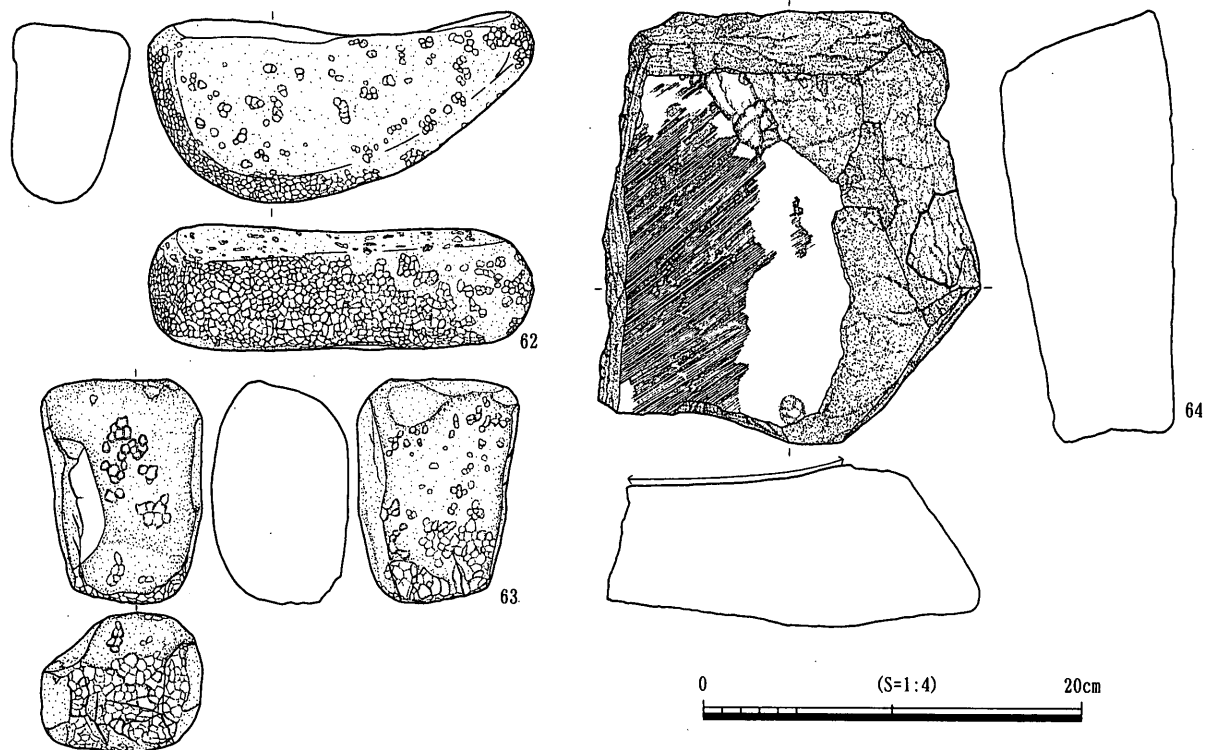
部片である。

59は圭頭斧箭形式の鉄鏃である。基部には篋被様の隆帯部が作出され、身部と厚みが異なることから、一定程度の鍛打技術を要して製作されたものと思われる。60は、一見鉄鏃の基部のように見えるが、厚さや形状に違和感があり、不明鉄器とする。61は鉄片である。両側は発掘時に折損してしまったが、これ自体定形器種としては認定できない。

出土土器は、甕・鉢の底部形態などから弥生後期後葉段階に比定されるものと見られる。また、41.42の鉢底部の形態から、後期後葉でも新段階に属する可能性が高い。



第24図 I区 SH04出土遺物実測図 その1



第25図 I区 SH04出土遺物実測図 その2

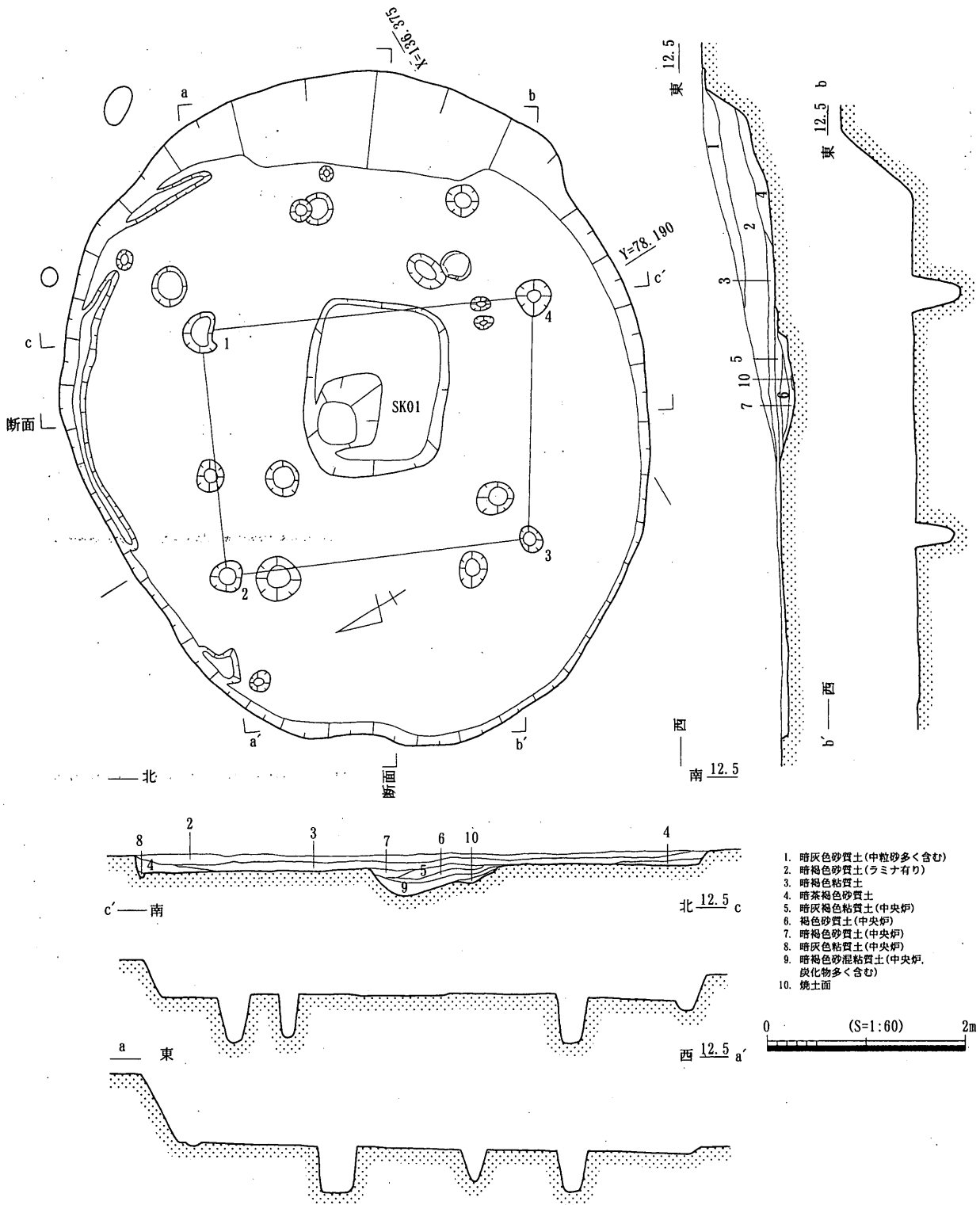
I区SH05

I区南半部のX = 136.385 Y = 78.200付近で検出した竪穴住居である。北側に隣接するSH04と切り合い関係があり、本住居が後出する。平面形は3.7 × 5.4 mの歪な隅丸長方形を呈するが、住居南辺は斜行し必ずしも整ったものではない。削平を受けているものの、西から東へ向かう緩斜面の花崗岩盤ないしその風化土を掘り抜いて構築されており、上位の住居東側で0.25 m下位の西側では0.1 m程の残存深度を測る。

床面は、概ねフラットであるが、明瞭でないものの南半分の床面が段状にやや高い。埋没土は砂質土を基調した単層であった。床面は基盤層である花崗岩盤ないしその風化土を使用しており、壁溝・中央炉等の施設は確認できない。床面上で9基の柱穴を確認しているが、位置関係から見て図示する4基の柱穴が支柱穴と考えられる。また、I区の斜面地では本住居が唯一の方形住居である。床面から明確な遺物の出土は見られず、大半が埋没土中から出土している。

71～74は高杯の杯部・脚部片である。71.72の強く外反する口縁部内面に見られる凹線や内面の分割横ミガキ、73.74の脚部内面のケズリ調整から見て高松平野かその周辺地域からの搬入品の可能性が想定できるが、胎土中には雲母・角閃石が多く見られない。65は短く外反する広口壺の口縁部片である。67.68は甕底部片であるが、67の底部外面にはハケ目状の調整痕が認められる。75は凸底を呈する小型鉢の底部片である。69は精良な胎土をもつ小型の無頸壺である。66は外面肩部の縦ハケや口縁部の強い横ナデ調整、内面の指オサエから見て高松平野からの搬入品であり、胎土中には雲母・角閃石を多く含む。70は大型壺の肩部片と思われ、外面の縦ミガキによって消去される平行タタキが明瞭に観察できる。

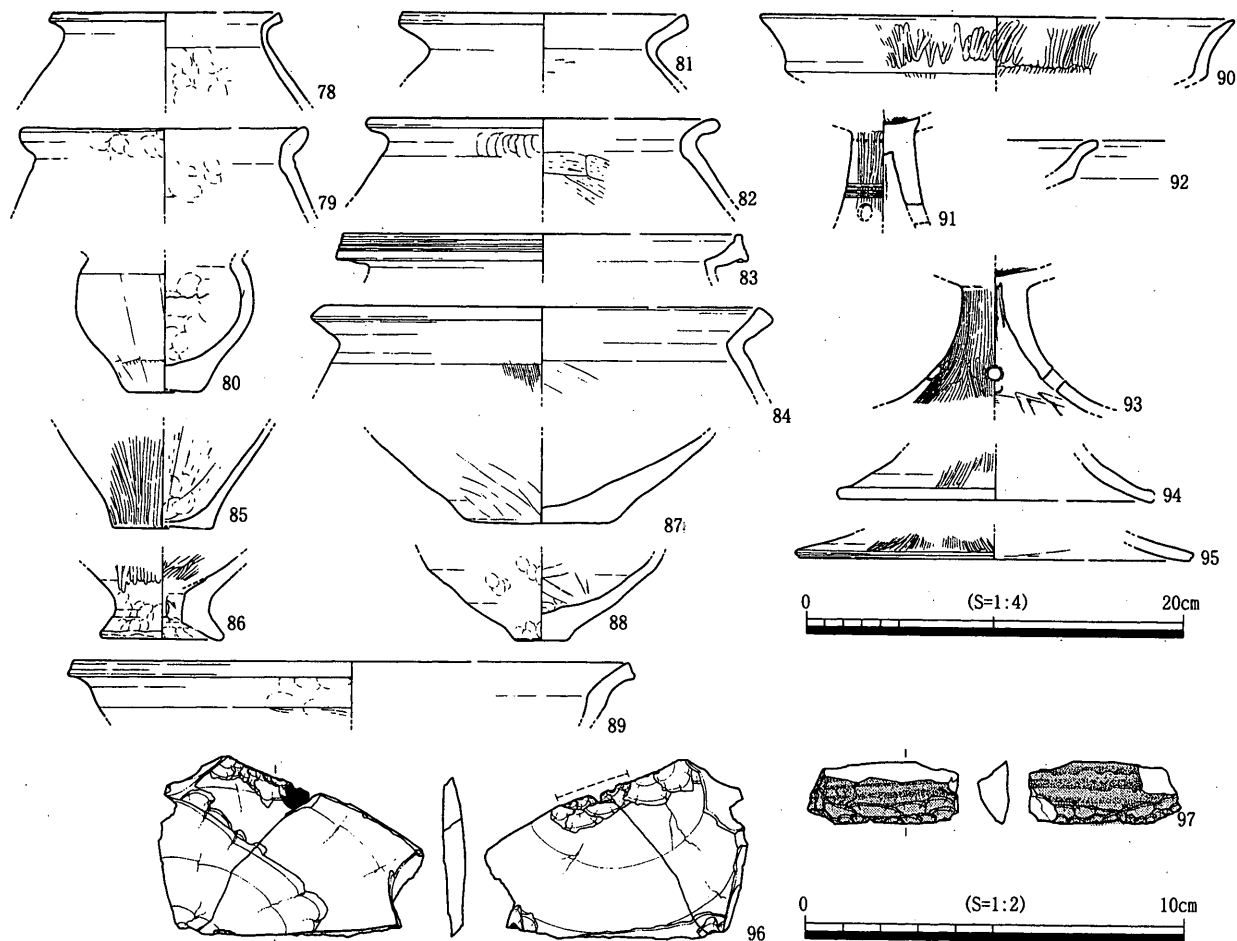
76は有茎三角式鉄鏃である。茎部を一部欠損するが、全長5.6cmとやや大型であり、身部と茎部の厚さは5 mm前後とほぼ同じであることから、鑿切りによって製作された可能性がある。77は上下面



に敲打痕が見られる安山岩質斑岩製の敲石であるが、全体的に磨耗痕が確認できることから磨石転用の可能性がある。

I区SH06

I-11区南部のX = 136.375 Y = 78.190付近で検出した竪穴住居である。直径6.0～6.5m程の楕円形の平面プランをもつ。概ね東から西へ傾斜する花崗岩盤を掘り抜いて構築されており、斜面上位に位置する住居東側の深さは0.5mを測るものであった。下位に位置する西側では0.1m程の残存し



第28図 I区 SH06出土遺物実測図

は見られないが、住居上面が後世に階段状に削平を受けていることに起因すると思われる。主柱穴は中央炉であるSK01の周囲に4穴確認できる。SK01の底面には炭化物を多く交える埋没土が見られ、部分的に底面が赤変している箇所も見受けられた。床面は概ねフラットであり、地山をそのまま床面としている。SK01東側の主柱穴4付近の床面には、長さ0.3m厚さ0.15m程の台石が置かれていた。壁溝は住居北側に部分的に見られるに留まる。

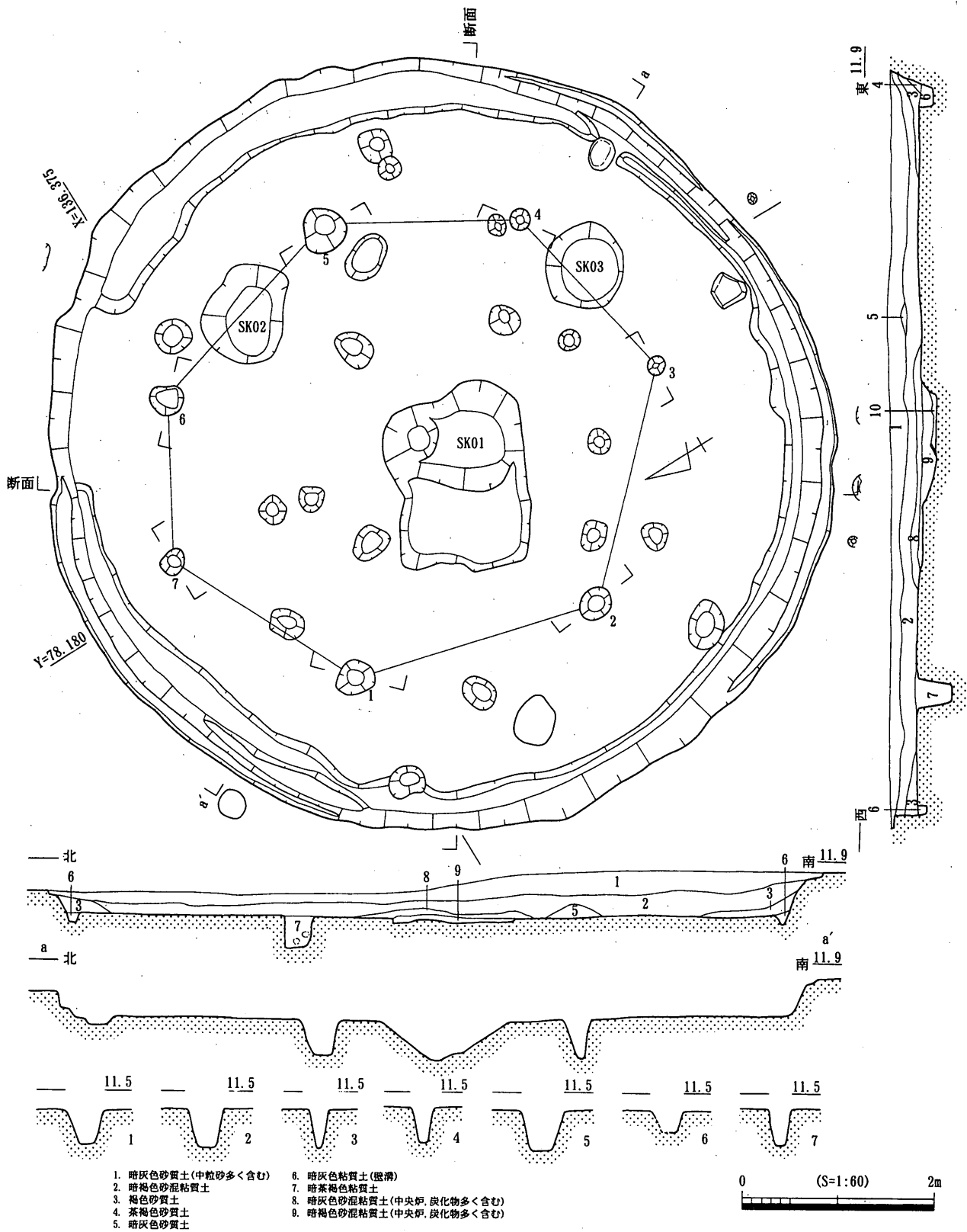
出土遺物は、取り上げ時の情報が記されていないことから、位置・層位の特定は不可能である。78.79.81.82は甕口縁部。83.84の甕口縁片は、口縁端部を拡張する形態のもので後期は後葉でも古層を示すものと考えられる。80は小形甕の胴部完形品。85の甕底部片は中期後葉段階の混入品と思われる。86は脚台付の鉢底部片。87は壺底部片。89は口縁部が短く屈曲する鉢口縁部である。90～95は高杯口縁・脚部・脚端部片である。90の内外面には往復運動による縦ミガキが密に施される。

96は上縁に潰れ痕が認められる楔形石器と思われ、左右2片が折れ面で接合したことから、機能時に下縁とともに折損したものと考えられる。97は紅簾片岩製の打製石庖丁の刃部片である。

これらの出土遺物は、後期後葉の中でも古層に位置づけられるものと思われる。

I区SH07

I区南半部の竪穴住居が集中するX=136.375 Y=78.180付近で検出した大型の竪穴住居であり、平面形は東西軸8.0m南北軸で8.3m程の正円形を呈する。隣接するSH03～06と同様に、東から西へ傾斜する緩斜面に構築されており、上位の東側で0.3m下位に位置する西側で0.25m程の残存深



度を測る。埋没土は壁際のものを除き大別して2層に分層される。後世の削平を受けているものの埋没土は、斜面地上位に位置する東側が厚いことから、この部分から埋没が進行したことが窺える。床面は概ねフラットであり、張床層が見られないことから、基盤層をそのまま利用している可能性が高い。床面上では26基の柱穴が見られるが、位置関係から見て図に示す7基の支柱穴を想定できる。また、図示した支柱穴に隣接する位置に柱穴が見られることから、最低1回程度の建て替えを想定できる。床面上には、中央炉であるS K 01以外に土坑が見られる(S K 02.03)。掘り込み面の確定ができないことから本住居に伴うものかどうかは確定できない。

床面中央には0.2×1.3m程で隅丸長方形を呈する中央土坑が見られる。埋没土中に炭化物を多く交えるが底面に明瞭な被熱痕は見られず、東側の部分が0.1mほどやや深い。壁際には幅0.2～0.4m深さ0.15m程を測る壁溝が見られるが、南東部の台石が存在する部分と北側で途切れる。この台石は全長約0.3m厚さ0.3m程の扁平な砂岩製であり、上面には作業痕跡を留めるような箇所は見られない。

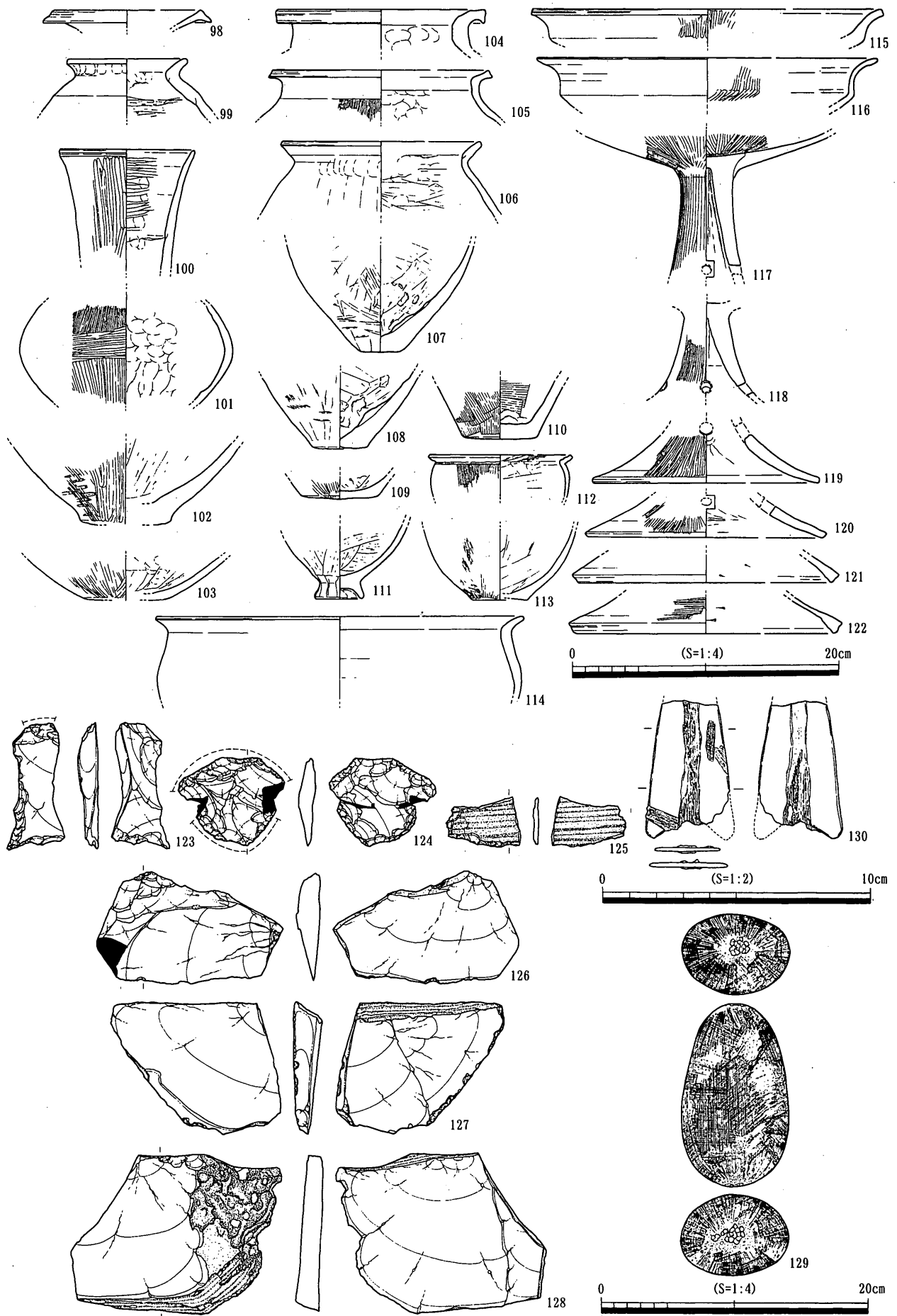
図化した出土遺物の内、位置が判明するものはS K 01(112)、S K 02(102.105)、S K 01・02 遺構間(117)、S K 03(101.126～128)がある。これ以外のものについては埋没土中から出土したものと思われるが、ラベルに層位が記されていないことから、厳密な層位・出土位置は不明である。

98は壺の口縁部片であるが、形態から見て弥生中期後半段階の混入品と思われる。99は口縁部が短く屈曲する壺であり、内面には明瞭な接合痕と横方向のケズリが見られる。100は細頸壺の口縁部であり口縁部下には1条沈線を認める。101は胎土中に雲母・角閃石を認める細頸壺の胴部片である。102.103は壺底部片であるが、103は調整と形態から弥生中期後半段階の混入の可能性がある。104の甕は、断面肉厚の口縁部をもち、本遺跡出土資料中に同様のものは見られない形態のものである。105は強い横ナデ調整と胎土中に雲母・角閃石を認める高松平野ないしその周辺地域からの搬入品である。106は内面中位に横方向のケズリ調整が見られる甕である。107～113は小型の甕底部片である。108はやや厚手であるが、内面に僅かにケズリ調整が見られる。109は小片ながら底部外面にも及ぶミガキ調整と内面のケズリ調整から高松平野かその周辺からの搬入品と考えられる。111は脚台状の底部をもつ小型甕であり、内外面にケズリ調整が見られる。115～122は高杯である。115は口縁部の外反が顕著ではなく、内面には往復運動による縦ミガキが確認できる。116は115の高杯と比較して口縁部の外反が顕著であるが、口縁端部が短く屈曲する。117は杯部との接合部を留めるものであり、円盤充填技法と内面のケズリ調整は見られない。118～120は比較的スムーズに収める脚端部をもち、内面には絞り痕と横ハケ調整が確認できる。121.122はやや拡張される脚端部をもち、内面には横方向のケズリ調整が看取される。胎土と形態、調整技法から高松平野かその周辺地域からの搬入品と考えられる。

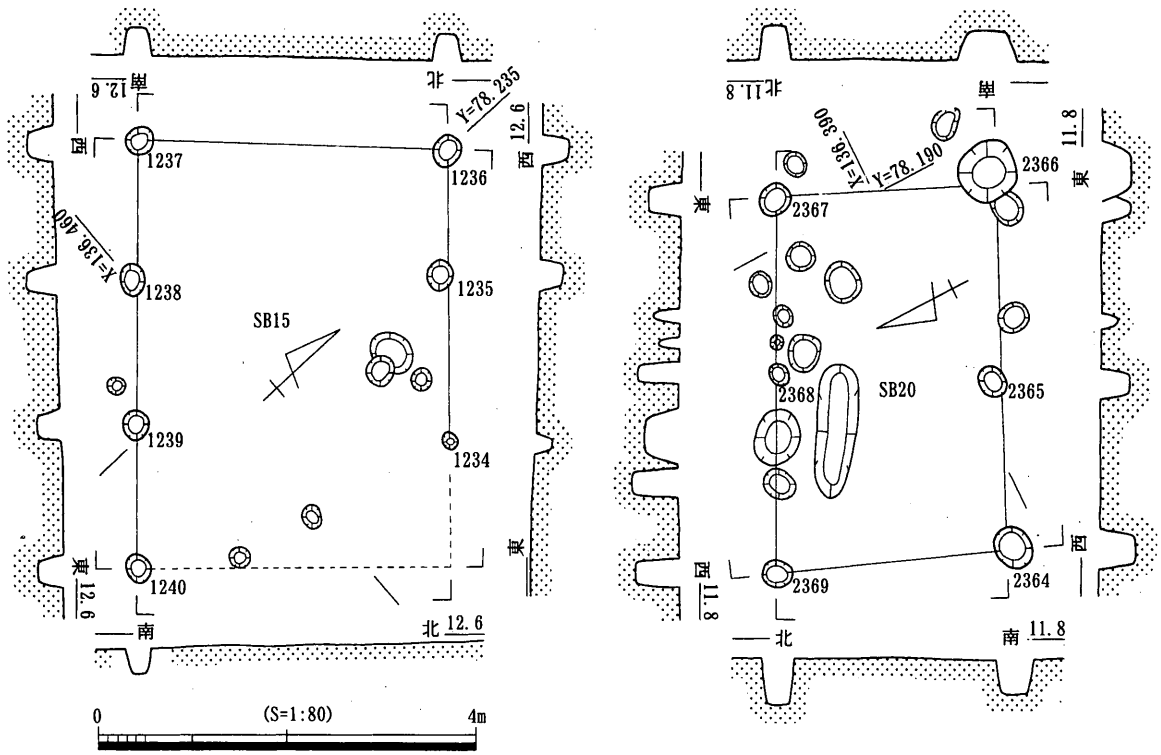
123.124は楔形石器である。125は紅簾片岩製の打製石庖丁片。126は剥片であるが、二次加工は加えられていない。127.128は素材分割片である。129は安山岩質斑岩製の敲石であり、上下面には敲打痕が見られるとともに、全体的に磨耗していることから磨石転用の可能性がある。

130は先端とその周辺を欠損するが5cm程の全長を確認できるやや大型の無茎三角式鉄鏃である。表裏の身部には矢柄固定用と見られる木質痕及び繊維質の残存が確認できる。全体的に3mmと平板な厚さと形態から、鑿切りによって製作された可能性を想定できる。身部には、現状で矢柄固定用の孔は確認できない。

出土遺物の様相は、後期後葉段階を示すものと思われる。小型鉢の底部形態や細頸壺の形態から、後



第30图 I区 SH07出土遺物実測図



第31図 I区 SB15. 20平・断面図

期後葉でも古い段階に帰属するものであろう。これらの出土遺物の帰属時期から、本住居の廃絶時期を後期後葉と推定しておく。

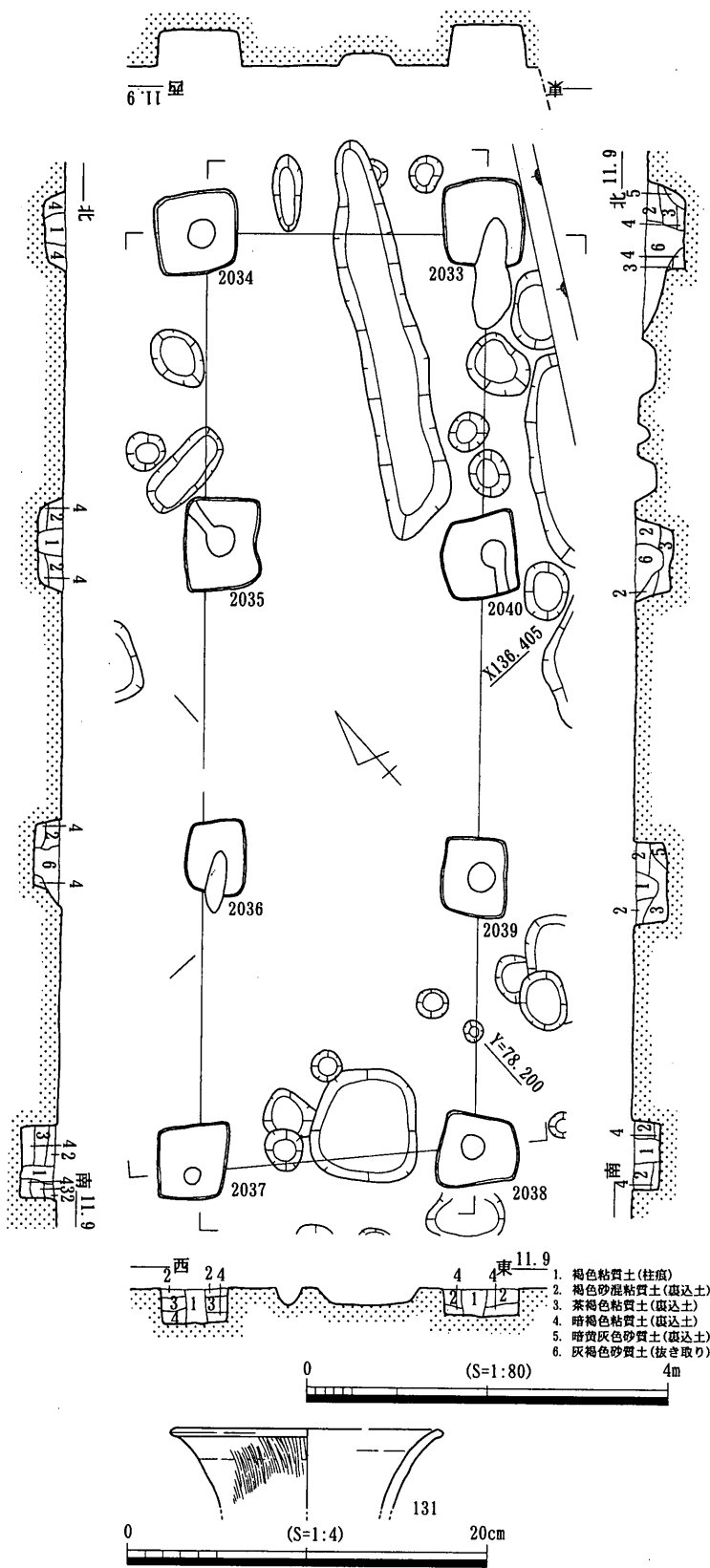
I区SB15

I区東部の $X = 136.460$ $Y = 78.235$ 付近で検出した 1×3 間 (3.3×4.3 m)の柱構造をもつ掘立柱建物である。建物主軸は座標北から東へ 48° 振った東西棟である。後世の削平により北側の桁行の隅柱を欠損するものの 14.19 m^2 程の床面積が想定される。柱穴はいずれも直径 0.14 m残存深度 0.16 m程の比較的小型のもので構成され、柱痕は明確ではない。柱穴掘り方を見ると、桁行方向の柱通は良く、柱穴底面のレベルもほぼ一定したものとなっている。上部構造を窺い知る手がかりは皆無であるが、柱穴規模や床面積から比較的簡易な上部構造をもつものと推定されよう。

時期決定可能な出土遺物は見られないが、柱構造や梁間寸法からII区第2検出面において確認したSB01・03・04との共通性が指摘できることと、周辺遺構の状況から弥生後期後半段階の所産と推定しておく。

I区SB19

I区中央部の $X = 136.405$ $Y = 78.200$ 付近で検出した 1×3 間 (3.2×11.4 m)の柱構造をもつ掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 43° 西へ振ったもので、想定される床面積は 36.48 m^2 と本遺跡に見られる弥生期の掘立柱建物中では大形の部類に属するものである。柱穴の掘り方は一辺が約 1 m程の隅丸方形であり、残存深度 0.4 m程を測る。北東の隅柱に該当する柱穴2033と西側の桁行の柱穴2036以外には、現状で直径 0.2 m前後を測る柱痕が残存している。桁行の柱間は芯々間で 2.4 m前後と一定しており、柱通りも良い。柱痕下場のレベルにはややバラツキがあり、柱穴底面まで到達してい



第32図 I区 SB19平・断面図及び出土遺物実測図

るものと、その下位に整地土が貫入するものが見られる。柱痕の両サイドには概ね2層の裏込め土も確認できる。

出土遺物は柱穴 2038 の裏後め土から、131 の弥生後期後半段階の広口壺の口縁部が出土しており、当該期か若干これより後出する段階に構築されたものと見なす。

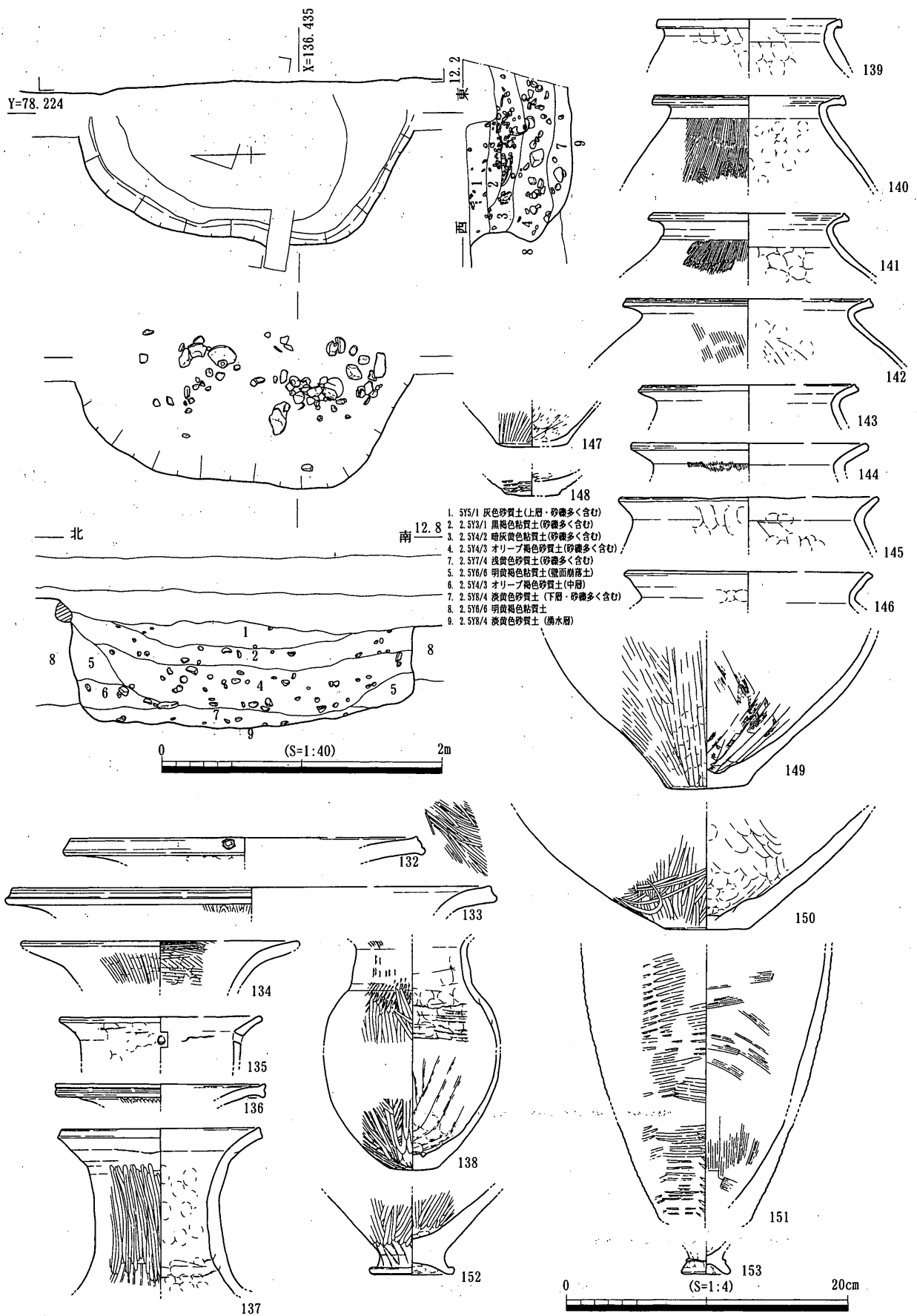
I区SB20

I区南半部の X = 136.390 Y = 78.190 付近で検出した 1 × 2 間 (2.6 × 3.6 m) の柱構造をもつ掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 64° 西偏し、柱配置から想定される床面積は 9.36 m² と小型の部類に属するものである。柱痕は明確ではないが、直径 0.4 m 残存深度 0.3 ~ 0.4 m 程の柱穴から構成されており、南西隅柱は上位からの中世ピットにより切られている。

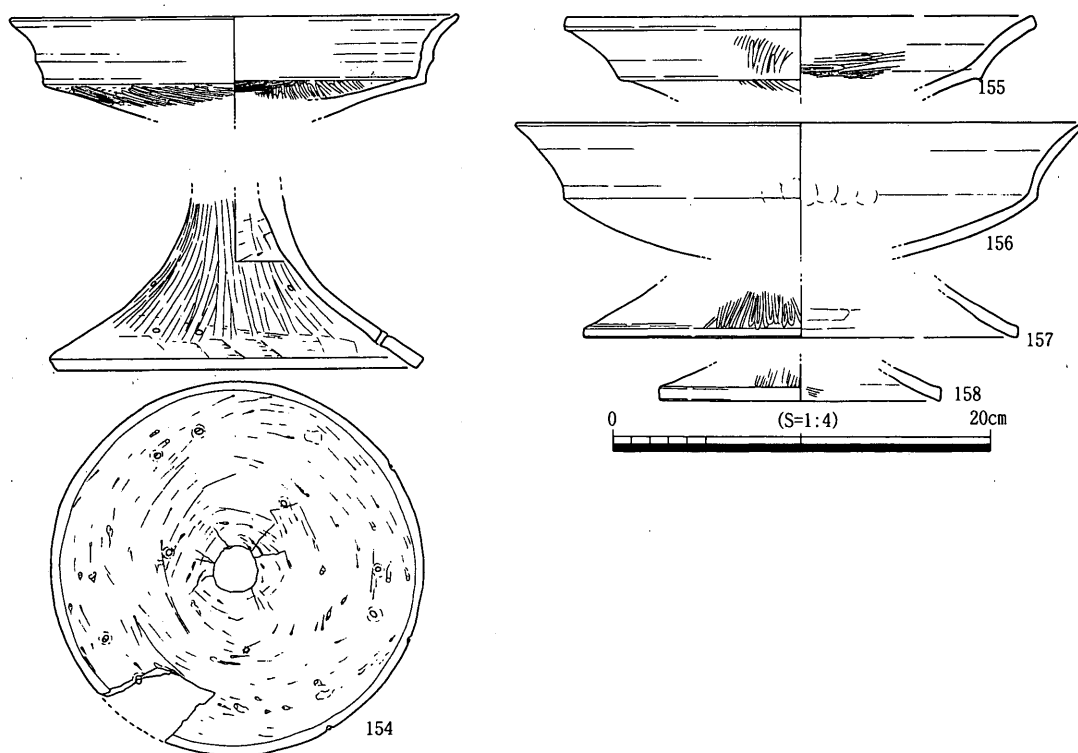
時期決定可能な遺物は出土していないが、埋没土の特徴が弥生期のものに類似することと、各柱穴より弥生土器碎片が出土していること、また周辺遺構の状況から弥生時代後期後半段階の所産と推定する。

I区SE02

I区北半部の X = 136.435 Y = 78.224 付近で検出した井戸である。東半分が現道下位に位置することから、未調査部分となるが、現状で長軸 2.4 m 短軸 2 m 程の楕円形を呈し、残存深度 0.9 m を測る。断面形は方形ないし逆台形であり、一部にオーバーハングする箇所が見受けられる。基盤層である黄褐色粘土を掘り下げており、底面はその下位の 8 層とした砂礫層まで到達する。現状での湧水状態は確認できないことから、この砂礫層が透水層であるかどうかは断定できないが、断面形状や壁面が



第33図 I区 SE02平・断面図及び出土遺物実測図 その1



第34図 I区 SE02出土遺物実測図 その2

崩落した痕跡を一部に留めることから井戸として報告する。底面付近に堆積し層厚 0.1 m 程を測る機能時の埋没土と思われる 7 層を除いて、大半が地山層に認められる砂岩礫を多く含む同一層と考えられる埋没土で占められることから、穏やかな自然埋没は想定できず一気に埋め戻された状況が想定できる。出土遺物には、弥生後期後半段階の完形に近いものも多く見られ、そのすべてがこの埋め戻しと見られる土層から出土している。埋没状況から、出土遺物の一括性は非常に高いことが想定されよう。

132～135 は広口壺の口縁部片で、132 の口縁端部には円形浮文が見られる。133 は緩やかに外反する広口壺の口縁部片である。135 の口縁部下には蓋受け用の穿孔が確認できる。137 は長頸壺であり、外面には密な縦ミガキが見られる。138 は口縁端部が欠損する小型の長頸壺であり、胎土・調整技法の類似から同一個体として図示した。139～146 は甕の口縁部片、147.148 は同底部片である。139 は口縁部が短く屈曲するもので比較的小型である。140～142 は、強い横ナデ調整と肩部外面の縦ハケ、内面の指オサエ等の属性と胎土中に雲母・角閃石を多く含むことから、高松平野かその周辺地域からの搬入品である。143.144 の口縁部にも横ナデ調整が認められるが、顕著なものではない。145.146 の甕口縁部には口縁部折り曲げ時の指オサエが残存する。147 は胎土調整から見て、高松平野かその周辺地域からの搬入品である。148 は鉢底部の可能性が残るが、外面には平行タタキが明瞭に観察される。149.150 は形態や外面調整から、広口壺の底部片と判断できる。151 は長胴形の鉢胴部片であり、外面には平行タタキが明瞭に見られる。152.153 は短い脚台をもつ鉢底部片である。153 の底部と脚台の境には矮小な突帯を 1 条付与している。154 は接点は見られないが、器形と胎土的な観察から同一個体とした高杯である。口縁部内面には横ナデによる凹線、杯部内外面には分割横ミガキが見られる。ハの字状に開く脚部には上下 2 段で合計 9 個の透かし孔を認め、下段が 2 孔一対上段が 1 孔単独で施されている。胎土中には雲母・角閃石が多く見られないが、器形や調整から見て高松平野かその周辺地域からの搬入品と思われる。155 は口縁端部を確実に面取りする高杯である。156 は大きく外反する口

縁部をもつ高杯である。157.158 は高杯の脚部片と見られる。

これらの出土遺物の様相は、142 の甕口縁部の屈曲が強いが鉢形土器が確実に組成している点と、長頸壺の形態から見て、弥生後期後半の古段階を大きく下るものではないと考えられる。また、出土状況から時間幅の比較的短い土器群であり、これらの出土遺物の様相から本遺構は弥生後期後半の古段階に廃絶したものと推定する。

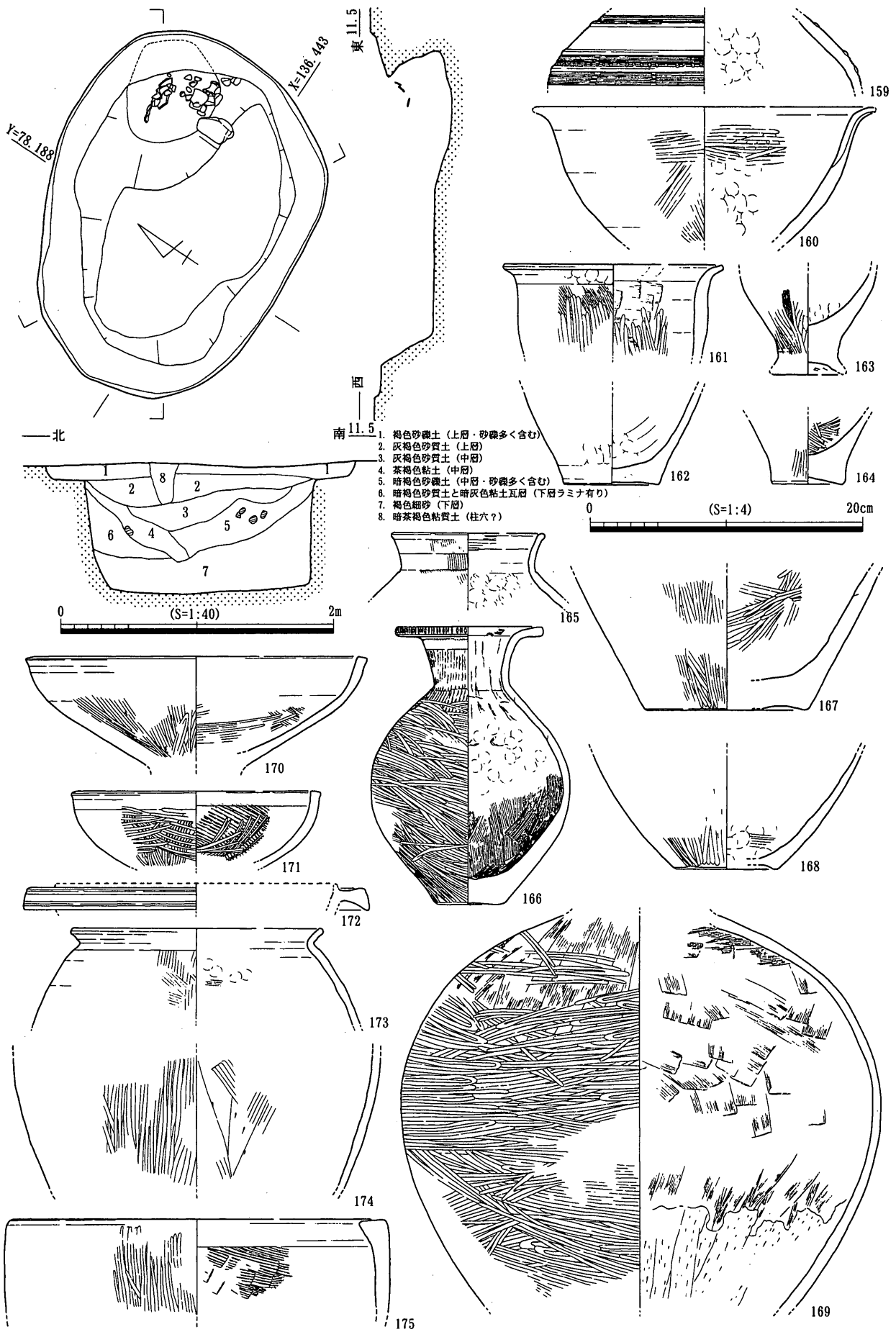
I 区 S E 03

I 区北西部の X = 136.443 Y = 78.188 付近で検出した井戸である。平面形が長軸 2.6 m 短軸 2 m 程の楕円形を呈し、約 1 m の残存深度を測る。断面形は、長方形ないし逆台形を呈する。また、上面から深さ 0.1 m 程の位置にテラス面をもち、北壁面の立ち上がりは明瞭にオーバーハングする。この北側部分の底面は 0.2 m 深く、土坑状に 0.2 m 程更に深くなっている。埋没土は概ね 3 つに大別され、下層の埋没土は基盤層に酷似する砂質土から構成され、細かなラミナが確認できることから、壁面の崩落土を含んだ機能時に堆積したものと推定される。中層には、完形に近い土器群と砂岩礫が投棄された状況が窺えるが、埋没土にブロック状のものが見られないことから、完全に埋め戻された状況は想定できない。上層の埋没土は、中層が堆積した後の窪みに漸移的に堆積したものと推定される。

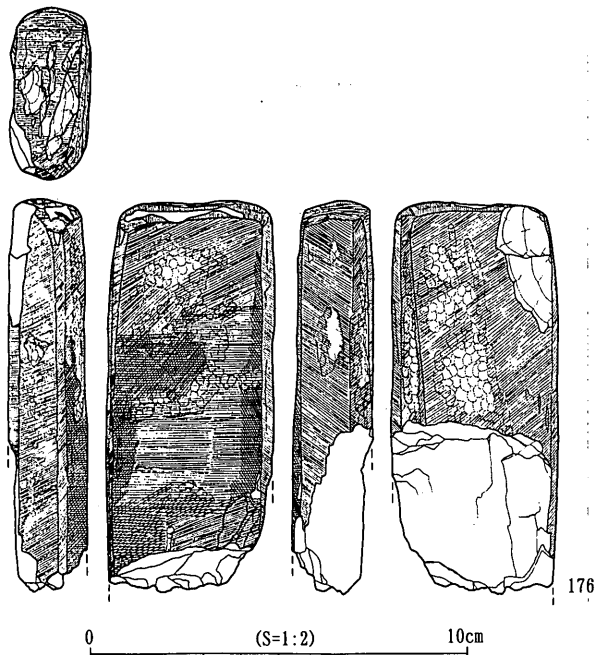
透水層を掘り貫いているかどうかの確認はできていないが、断面形と堆積状況から井戸と判断するものである。

遺物は中層を中心にして出土している。160.163 は上層、164 は下層、159.161.171.172 は出土層位不明であり、他のものはすべて中層から出土している。159 は胴部外面に 3 帯の櫛描直線文と上面を刻む 1 条の貼り付け突帯が見られる。160 は口縁端部の一部を欠損するが、内外面に密なミガキ調整が看取される。162 はやや厚めの底部をもつ甕であり、163 は脚台をもつ無頸壺の底部ないし鉢であろう。器形や施文等の属性から、159 ~ 164 は弥生中期前葉の所産と捉えられる。164 は厚い底部をもつ甕であり、弥生中期中葉の所産と見られる。165 は直口壺の口縁部片であり、内面のナデ調整下位には縦方向のケズリ調整が若干確認できる。166 は、ほぼ完形の広口壺であり、胴部外面をミガキ締める。167.168 は壺底部片であり、外面の縦ミガキの下にケズリ調整が確認できる。169 は、口縁部と底部を欠損するが、器形から見て広口壺の胴部片と考えられる。170.171 は台付鉢であり、171 の外面には、分割による横ミガキが見られる。172 は垂下口縁をもつ高杯であり、口縁部内面に 1 条突帯が口縁部下には 2 条の凹線文が確認できる。173 は口縁部があまり屈曲せず、胴部が張る甕である。174 は甕の胴部片である。175 は口縁部内側を肥高する鉢である。176 は緑色片岩製の柱状片刃石斧の基部片である。前・後主面と両側面には、研磨痕に切られる成形時の敲打痕を留め、基面は直線的であるが中央がやや窪む。使用時の衝撃によって基部中程で折損したものと思われるが、側面の一部には成形時の研磨痕を切る剥離が観察できることから、折損後の再加工の痕跡を示すものかもしれない。

159 ~ 163 のような弥生中期前葉の所産のものを含むが、下層出土の 164 の甕底部や支配的な中層の土器群が弥生中期中葉の凹線文出現期に比定されることから、本遺構の廃絶時期を弥生中期中葉と推定する。



第35図 I区 SE03平・断面図及び出土遺物実測図 その1

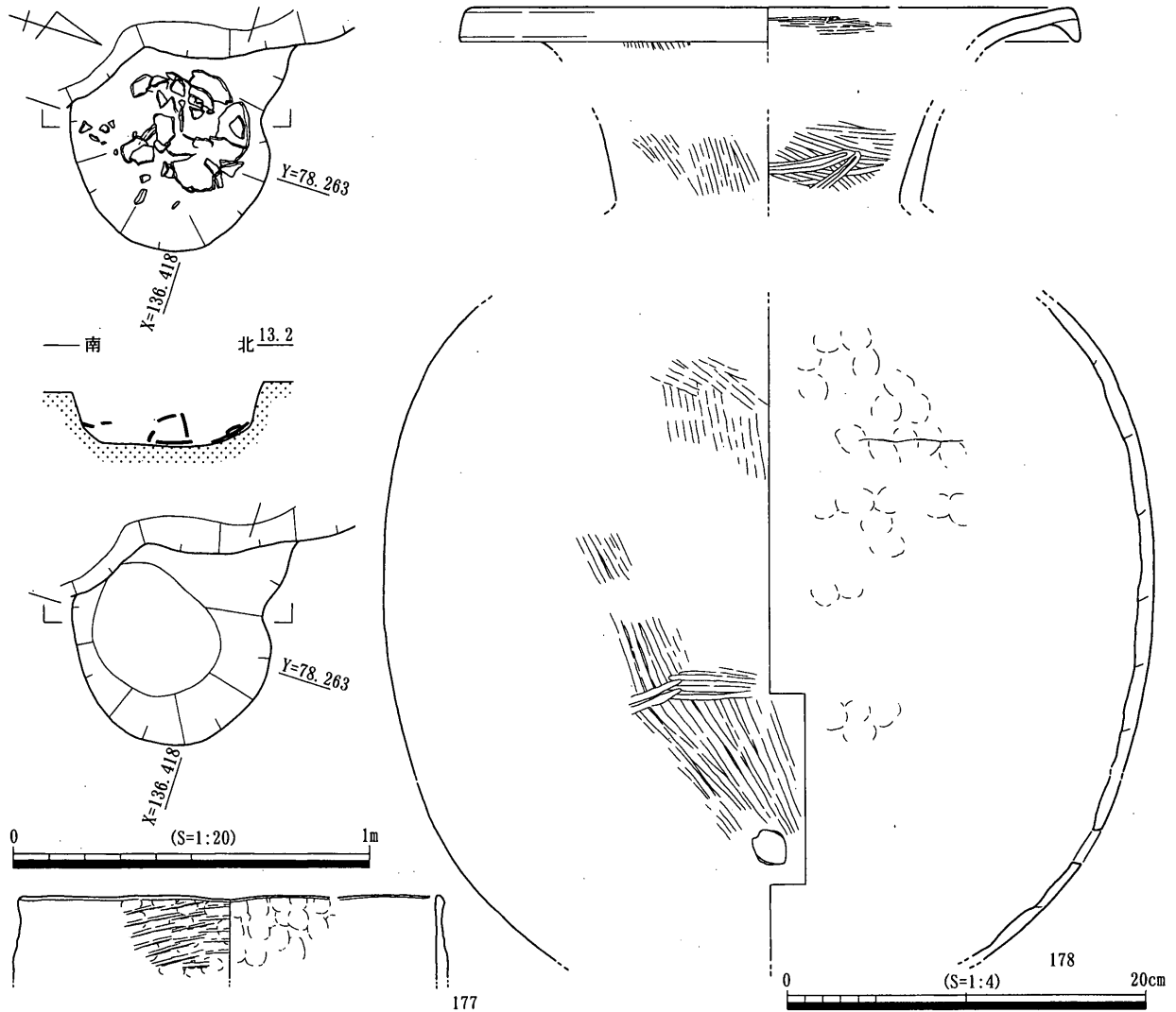


第36図 I区 SE03出土遺物実測図 その2

I区ST01

I区北東部で検出した壺棺墓である。直径0.6m残存深0.25m程の円形を呈する掘り方に対して大型壺を埋置し、壺棺墓とする。また、ST02と切り合い関係をもち、本遺構が先行する。かなりの削平を受けていると見られ、水平方向に埋置された大型壺の大部分を欠損した状態で検出している。底面に密着した状態で出土しているが、胴部下半から肩部までの部分と頸部と口縁部の小片を確認するに留まった。小片ではあるが、177の鉢口縁部片が存在することから、元来蓋として使用されていた可能性が考えられる。

177は直立する口縁部をもつ中型鉢であり、外面には平行タタキが見られる。小片であるが、



第37図 I区 ST01平・断面図及び出土遺物実測図

サイズの見た目でも蓋として矛盾はない。178の大型壺は、寸胴形の胴部から緩やかに開く頸部をもち、口縁部は垂下するものである。また、胴部下半に穿孔が1箇所見られる。胎土中に、2～3mm程の粒径が粗い角閃石を多く含む点や、垂下口縁など形態の特徴から生駒西麓産の搬入品と考えてよからう。おそらく、後期初頭～前葉の所産と考えられる。

I区ST02・03

ST01に接して $X = 136.417$ $Y = 78.262$ 付近で検出した木棺墓である。ST02は、ST01を切り込む形で検出しており、長軸2.3m短軸1.3m残存深度0.4mを測る。断面形は逆台形であり、底面中央には、長軸1.8m幅0.5m深さ0.1m程の窪みを確認しており、木棺固定用の掘り方と思われる。南半部では、底面からやや浮いたレベルに砂岩礫をやや集中して検出しており、当初上面に置かれたものが落下したものと思われる。また、本遺構に切られる形でST03を検出している。ST03は、長軸1.2m短軸0.5m以上残存深度0.2mを測る土壙墓である。埋没土は灰褐色砂質土の単層である。西側底面には4石程の砂岩礫が据えられていることから、この石材を木棺固定用とするならば木棺が据えられていた可能性も考えられる。

ST02・03共に出土遺物は見られないが、埋没土の特徴やST01との切り合い関係から、ST01に近い弥生後期前半の所産と推定しておく。

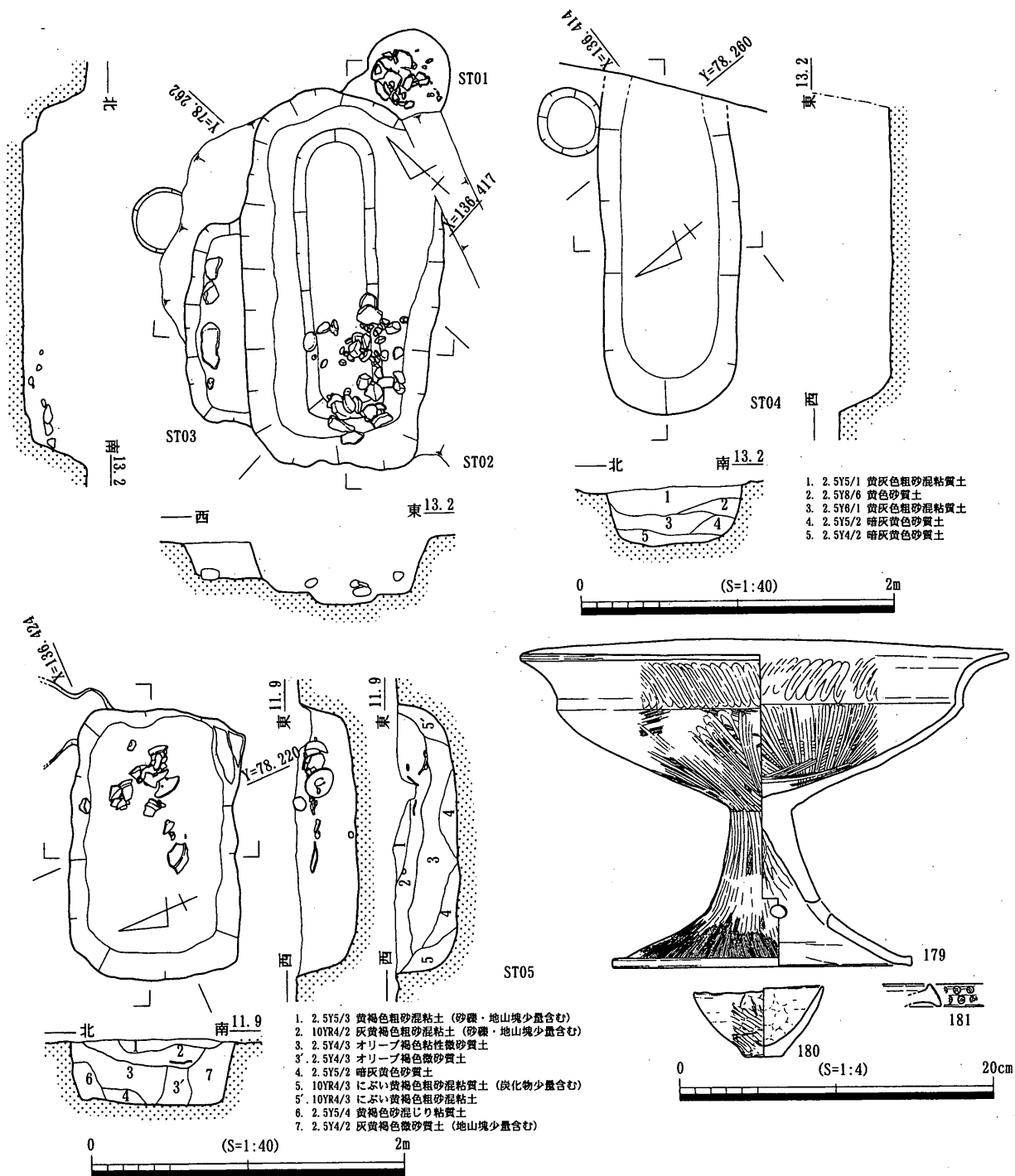
I区ST04

I区北東部のST01～03の南側 $X = 136.414$ $Y = 78.260$ 付近で検出した土壙墓である。東側の一部が調査区外となるが、現状で長軸2m短軸0.95m残存深度0.4mを測る。断面形は逆台形であり、底面はフラットとなっている。埋没土は5層ほどに分割され、木棺等の痕跡は確認できないことと、形態から土壙墓の可能性が指摘できよう。出土遺物は見られないが、埋没土の特徴やST01～03との位置関係を考慮し、弥生後期前半の所産と推定しておきたい。

I区ST05

I区中央部 $X = 136.424$ $Y = 78.220$ 付近で検出した土壙墓である。長軸1.7m短軸1.1m残存深度0.4mの規模を測る。断面形は長方形であり、埋没土は粒径が10～20cm程の砂岩礫を多く含む上層と砂質土が主体の下層に大別できる。平・断面形から土壙墓の可能性が高い。また、断面において痕跡を確認出来ていないが、上層には完形に復元される高杯・鉢が固まって出土しており、これらを含む1.2層を木棺の腐食による落ち込みによって生じたものと解釈すれば、木棺墓としての想定も可能であろう。

179は完形の高杯。口縁部内外面に往復運動による縦位のミガキが見られる。180は同時期の小型鉢。181は外面に竹管による列点文が見られる広口壺の口縁部片。高杯・小型鉢の形態から後期後葉段階に位置づけられる。これら出土遺物の帰属時期を援用し、本遺構が後期後葉段階の所産と推定する。



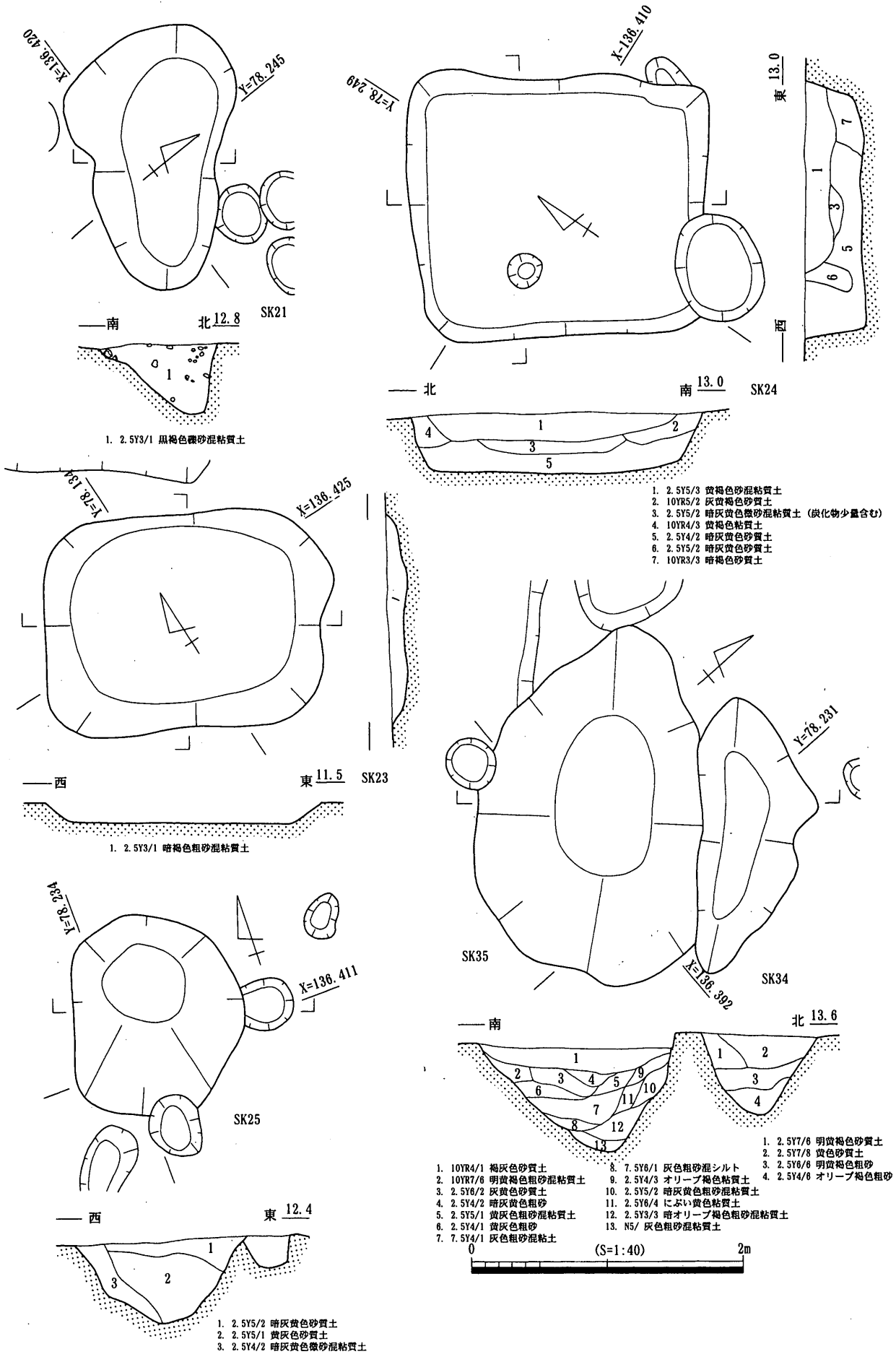
第38図 I区 ST02~05平・断面図及び出土遺物実測図

I区SK 21

I -2区 X = 136.420 Y = 78.245 付近で検出した土坑である。平面形が長軸 2.0 m 短軸 1.2 m ほどの歪な楕円形を呈し、深さ 0.5 m を測る。埋没土は単一層であり、後期後葉段階と思われる甕肩部片 191 が出土している。周辺にはほぼ同時期の SH 01 が存在するが、他に居住域に関係した遺構は見られない。

I区SK 23

I -2区 X = 136.425 Y = 78.143 付近で検出した土坑である。2.1 × 1.6 m 程の歪な隅丸長方形を



第39図 SK21. 23~25. 34. 35平・断面図

呈し、0.2 m程の残存深度を測る。出土遺物に後期後葉段階の甕胴部片 195.196 が見られる。196 は形態・胎土から判断して、高松平野北東部からの搬入品と見られる。

I 区 S K 24

I -3 区 X = 136.410 Y = 78.249 付近で検出した土坑である。2.2 × 1.9 m程の隅丸長方形を呈し、残存深度 0.4 mを測る。断面形は逆台形であり、砂質土を中心とした埋没土に若干量の炭化物が含まれる。出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴から弥生期の所産と推定する。

I 区 S K 25

I -3 区 X = 136.411 Y = 78.234 付近で検出した土坑である。長軸 1.5 m短軸 1.2 m程の楕円形を呈し、0.6 m程の残存深度を測る。断面形はU字形を呈し、出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴から弥生期の所産と推定する。

I 区 S K 34.35

I -4 区 X = 136.392 Y = 78.231 付近で検出した土坑である。S K 34 は長軸 2.1 m短軸 0.8 m程の楕円形を呈し、残存深度 0.6 mを測る。S K 35 は長軸 2.6 m短軸 1.4 m程の歪な楕円形を呈し、0.7 m程の残存深度を測る。平面図では前後関係を示唆するように図示しているが、断面観察では切り合い関係は見られない。S K 35 に関しては、規模・深度から井戸である可能性を考えたが、透水層に到達していないことから土坑として報告する。両遺構ともに時期決定可能な出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴や検出面の様相から、弥生期に属する遺構と考えられる。

I 区 S K 40

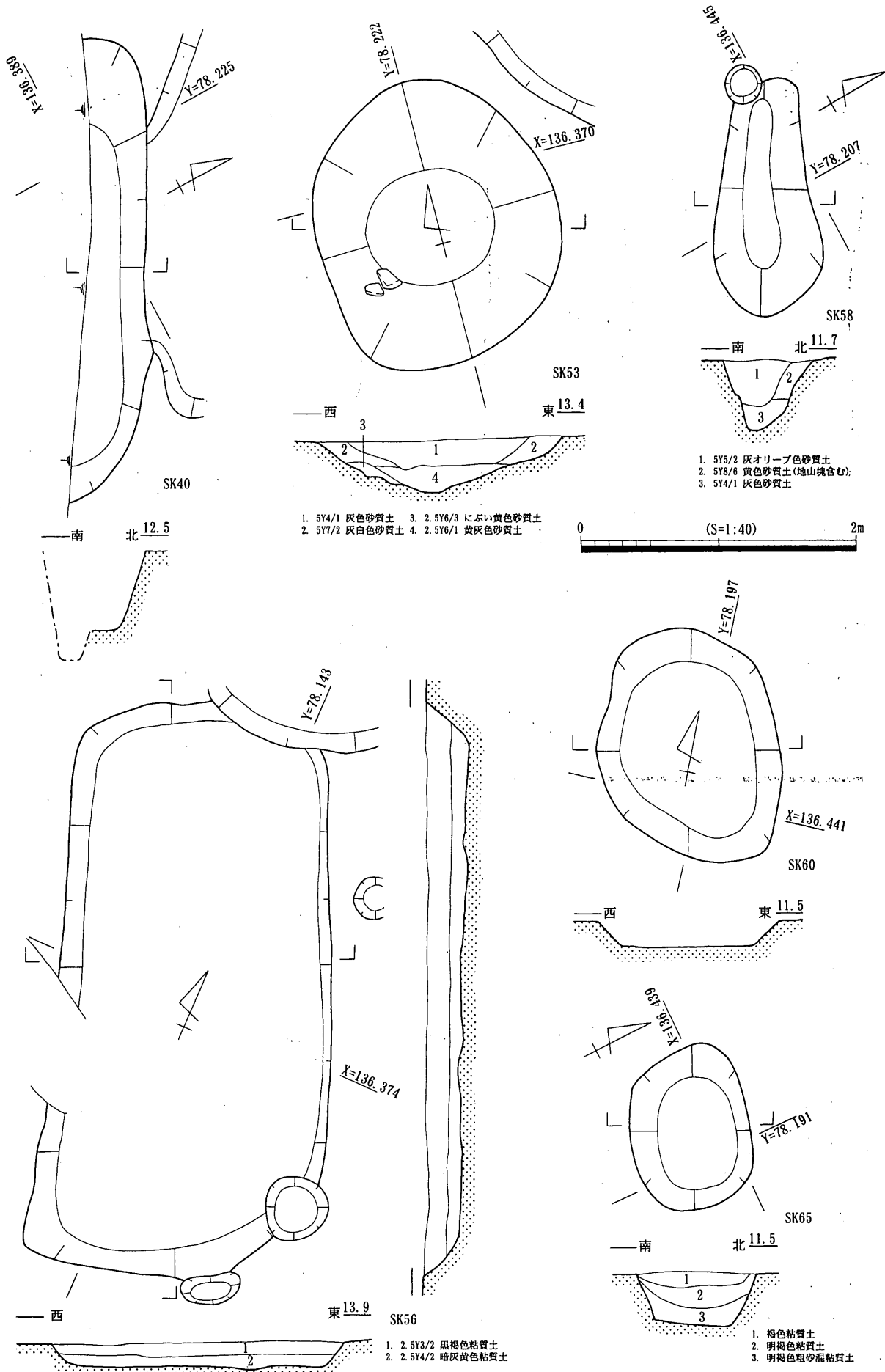
I -4 区 X = 136.389 Y = 78.225 付近で検出した土坑である。南側を側溝によって破壊してしまっているが、長軸 3.2 m短軸 0.5 m以上の舟形を呈し、残存深度 0.6 mを測る。出土遺物には、紅簾片岩製の打製石庖丁 201 がある。一側縁を欠損し、両刃の刃部を中心して磨耗痕が発達している。時期決定可能な土器片は見られないが、本遺跡で紅簾片岩製の打製石庖丁が後期後葉段階に多く確認できる点を考慮し、本遺構の帰属時期を同時代に推定しておく。

I 区 S K 53

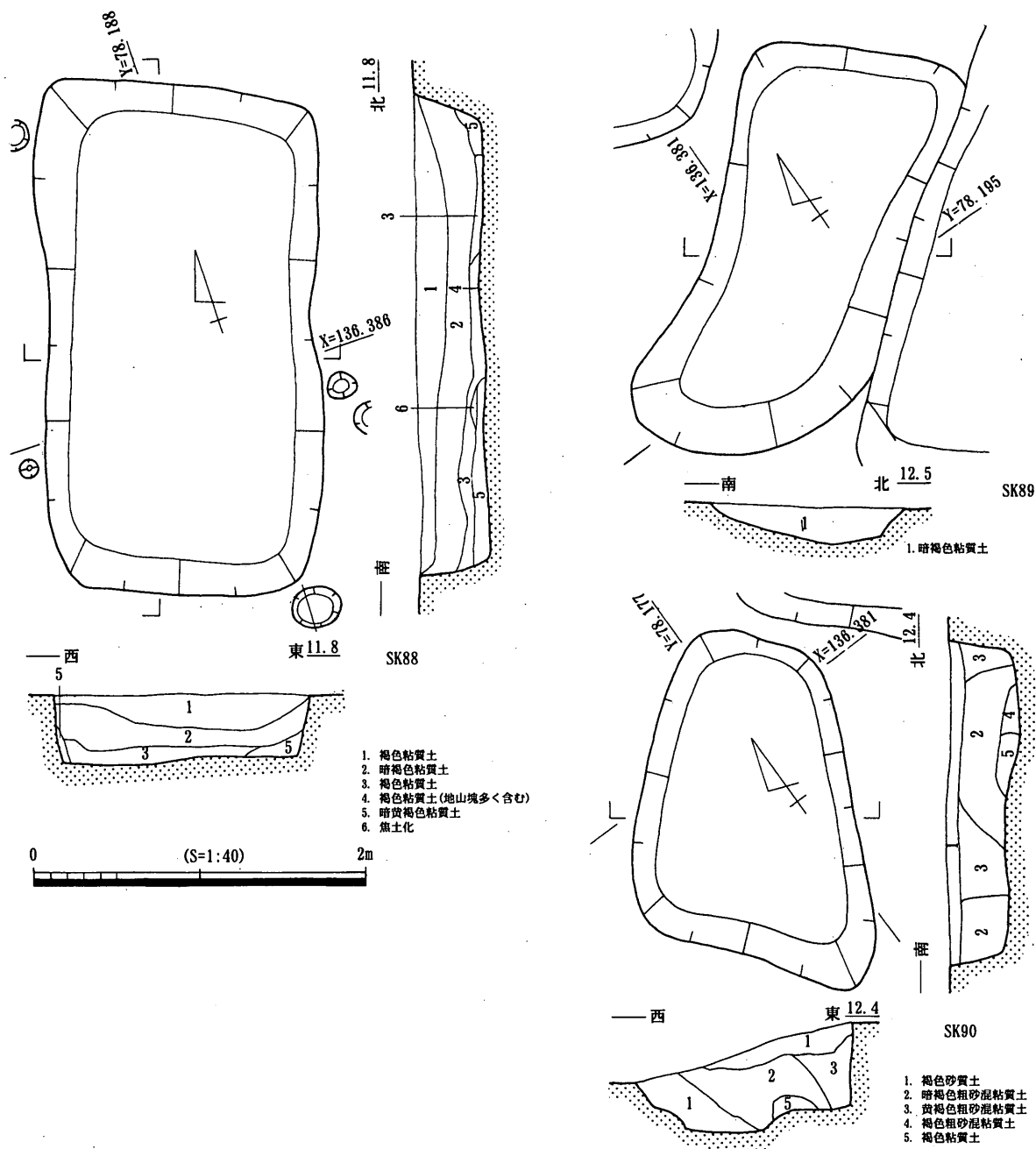
I -5 区 X = 136.370 Y = 78.222 付近で検出した 2.0 × 1.8 m程の円形を呈する土坑である。残存深度は 0.4 m程であり、断面形はU字状である。南西部の底面に砂岩礫が見られるが、時期決定可能な土器片は見られなかった。埋没土の特徴から、弥生期の所産である可能性が高い。

I 区 S K 56

I -5 区 X = 136.374 Y = 78.143 付近で検出した 4.1 × 2.1 mの隅丸長方形を呈する土坑であり、不定形な落ち込みである S X 13 を切り込む。残存深度は 0.2 m程を測り、断面形は逆台形を呈する。下層から弥生後期後葉段階の高杯 200 が出土した。小型で中実の脚部をもつことから、弥生後期後葉でも後出する段階の所産と思われる。



第40図 I区 SK40. 53. 58. 56. 60. 65平・断面図



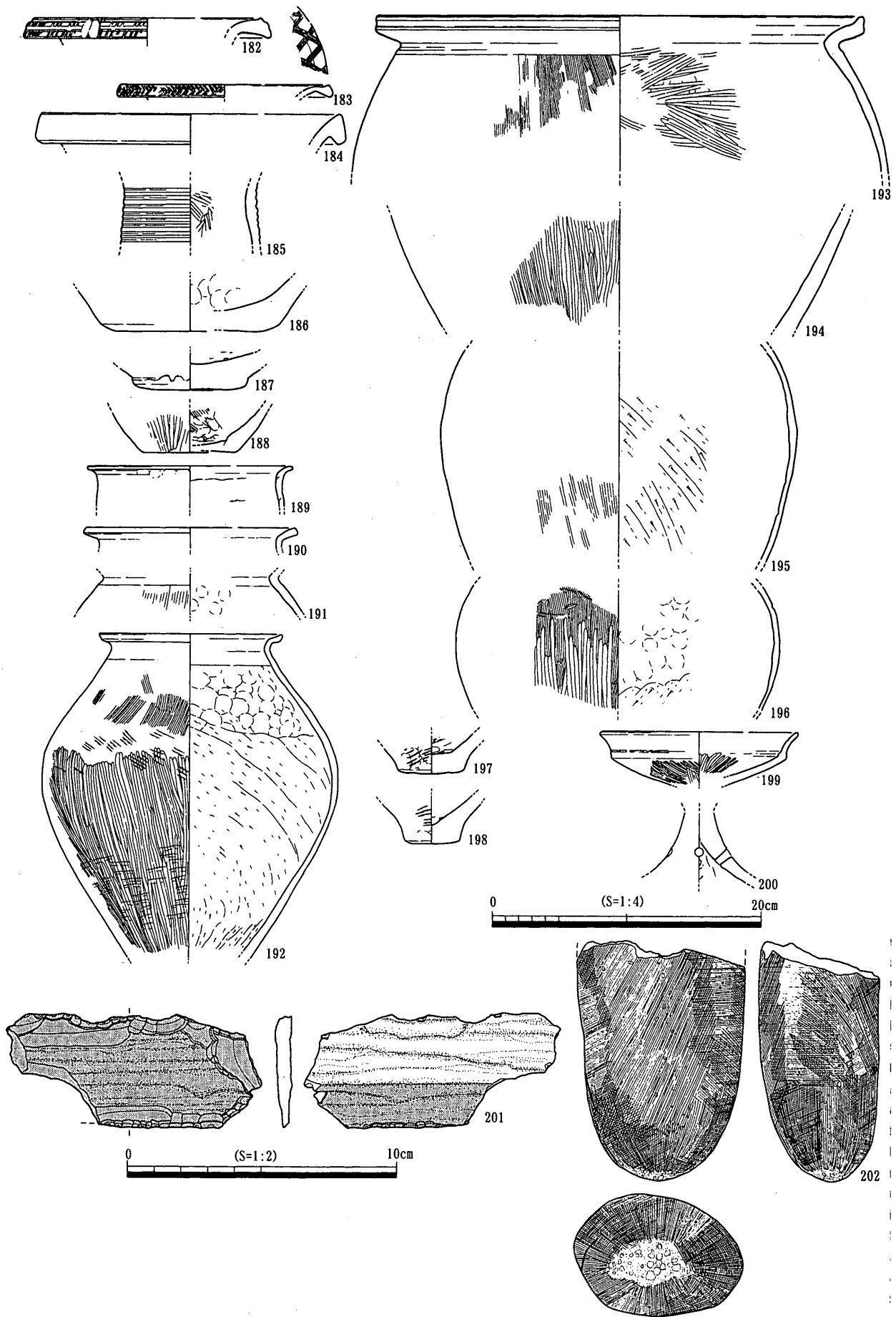
第41図 I区 SK88~90平・断面図

I区SK 58

I-6区X=136.445 Y=78.207付近で検出した長軸1.7m短軸0.8m程の舟形を呈する土坑である。残存深度は0.5m程であり、断面形はV字に近い。時期決定可能な土器片は見られなかったが、埋没土の特徴から弥生期に属するものと判断しておく。

I区SK 60

扇状地の末端部分に該当するI-7区X=136.441 Y=78.197付近で検出した長軸1.7m短軸1.2mの楕円形の土坑である。断面形は逆台形を呈し、埋没土は黒褐色粘土の単一層である。下層より弥生中期中葉段階の甕193が出土している。



第42図 I区 SK出土遺物実測図(弥生時代)

I 区 S K 65

I -7 区 X = 136.439 Y = 78.191 付近で検出した、長軸 1.2 m 短軸 0.9 m 程の楕円形土坑である。断面形は逆台形であり、0.4 m 程の残存深度を測る。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴から弥生期の所産と推定される。

I 区 S K 88

I -9 区 X = 136.386 Y = 78.188 付近で検出した 3.1 × 1.7 m の隅丸長方形を呈する土坑である。断面形は箱形であり、0.4 m 程の残存深度を測る。埋没土中位から後期後葉段階の高杯 199 が出土している。位置的には、S H 03 ~ 07 等の後期後葉段階の住居群に隣接することから、何らかの関連をもつ遺構であるが、機能は特定できない。

I 区 S K 89

I -9 区 X = 136.381 Y = 78.195 付近で検出した 2.5 × 1.5 m 程の歪な隅丸長方形を呈する土坑である。切り合い関係があり、S H 05 に後出する。時期決定可能な出土遺物は見られなかったが、S H 05 の帰属時期である後期後葉以前の所産と思われる。

I 区 S K 90

I -9 区 X = 136.381 Y = 78.197 付近で検出した土坑である。長軸 1.9 m 短軸 1.0 ~ 1.3 m 程を囲る台形様の平面形をもち、箱形の断面形に 0.4 m 程の残存深度を見る。埋没土は幾層かに分層されるが、地山塊をやや多く含むものである。埋没土中位から中期初頭段階の安定した平底をもつ大型壺底部片 186 出土している。

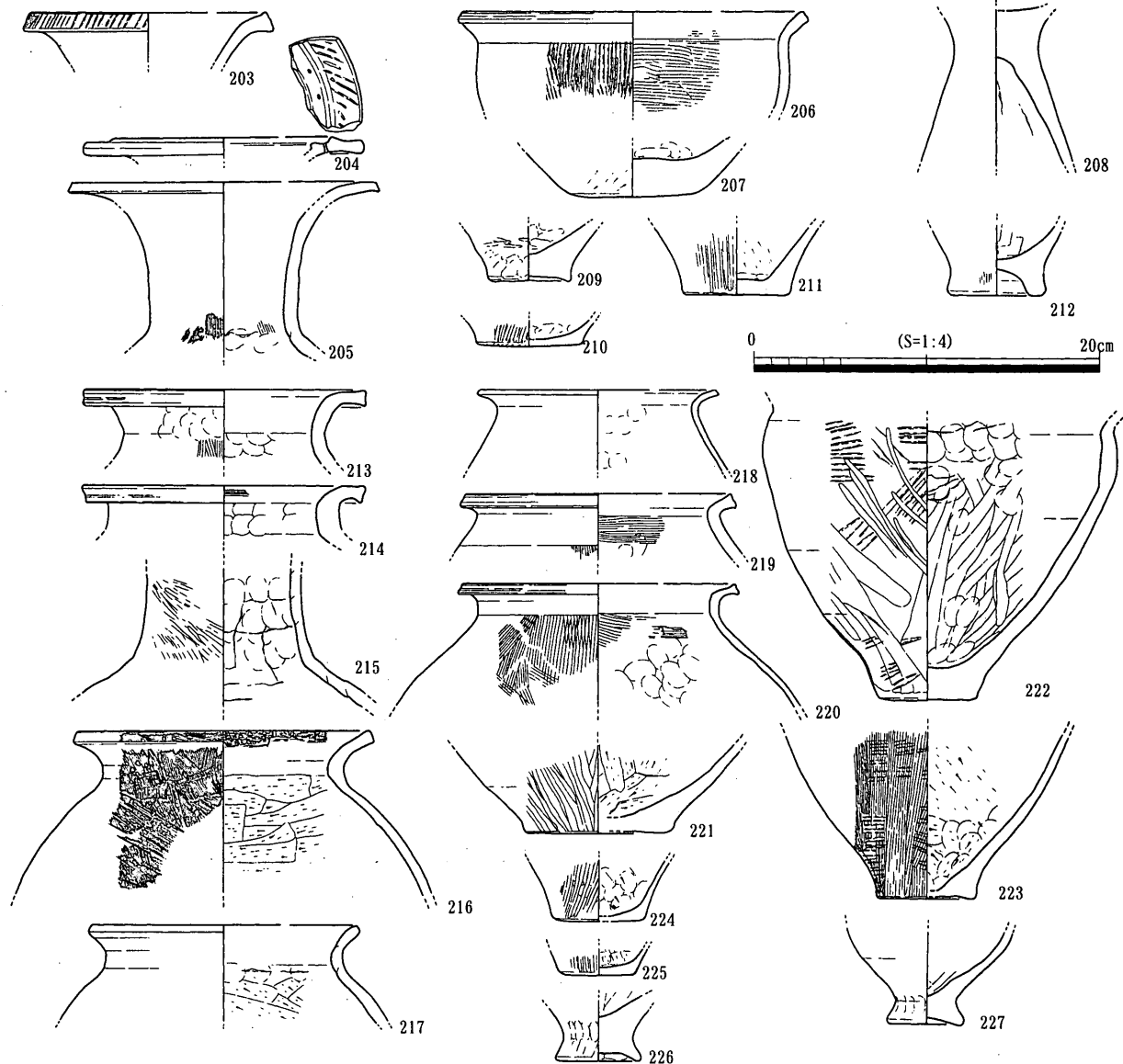
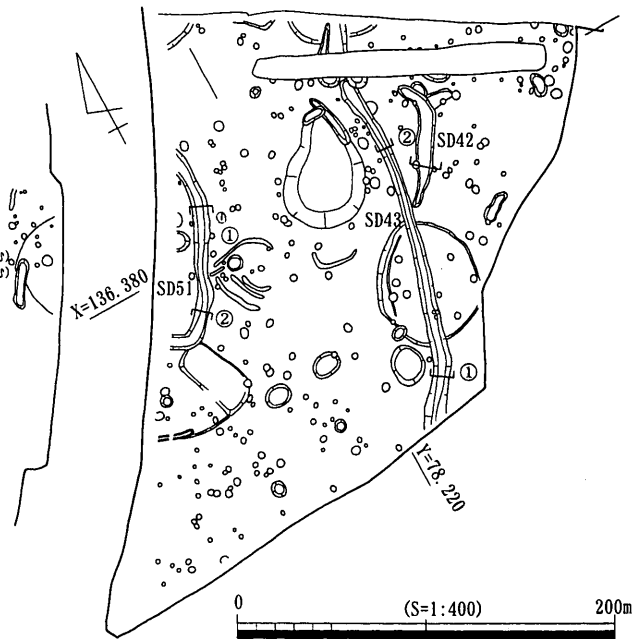
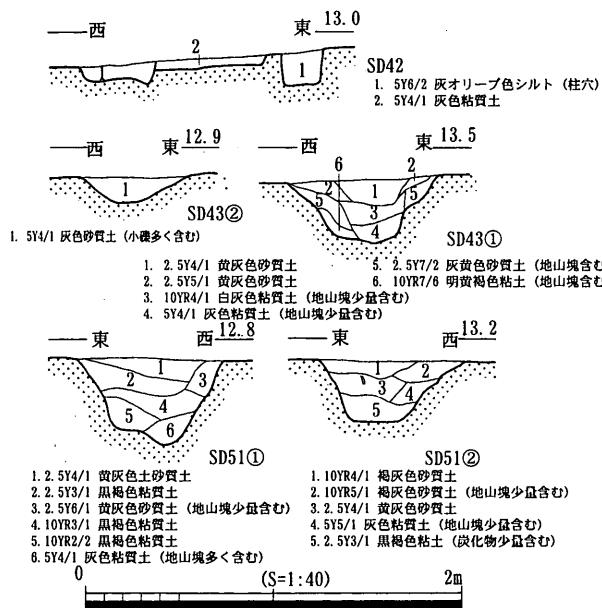
I 区 S D 42

I -5 区で検出した上面幅 0.6 m 残存深度 0.1 m ほどの溝状遺構である。全長 6.0 m 程にわたって検出しているが、平面形が僅かに弧状を呈することから竪穴住居周溝の可能性も想定されるが、内部に住居を暗示する明確な遺構は見られない。埋没土中から中期中葉~後葉段階の甕底部 212 が出土していることから、時期決定の根拠とする。

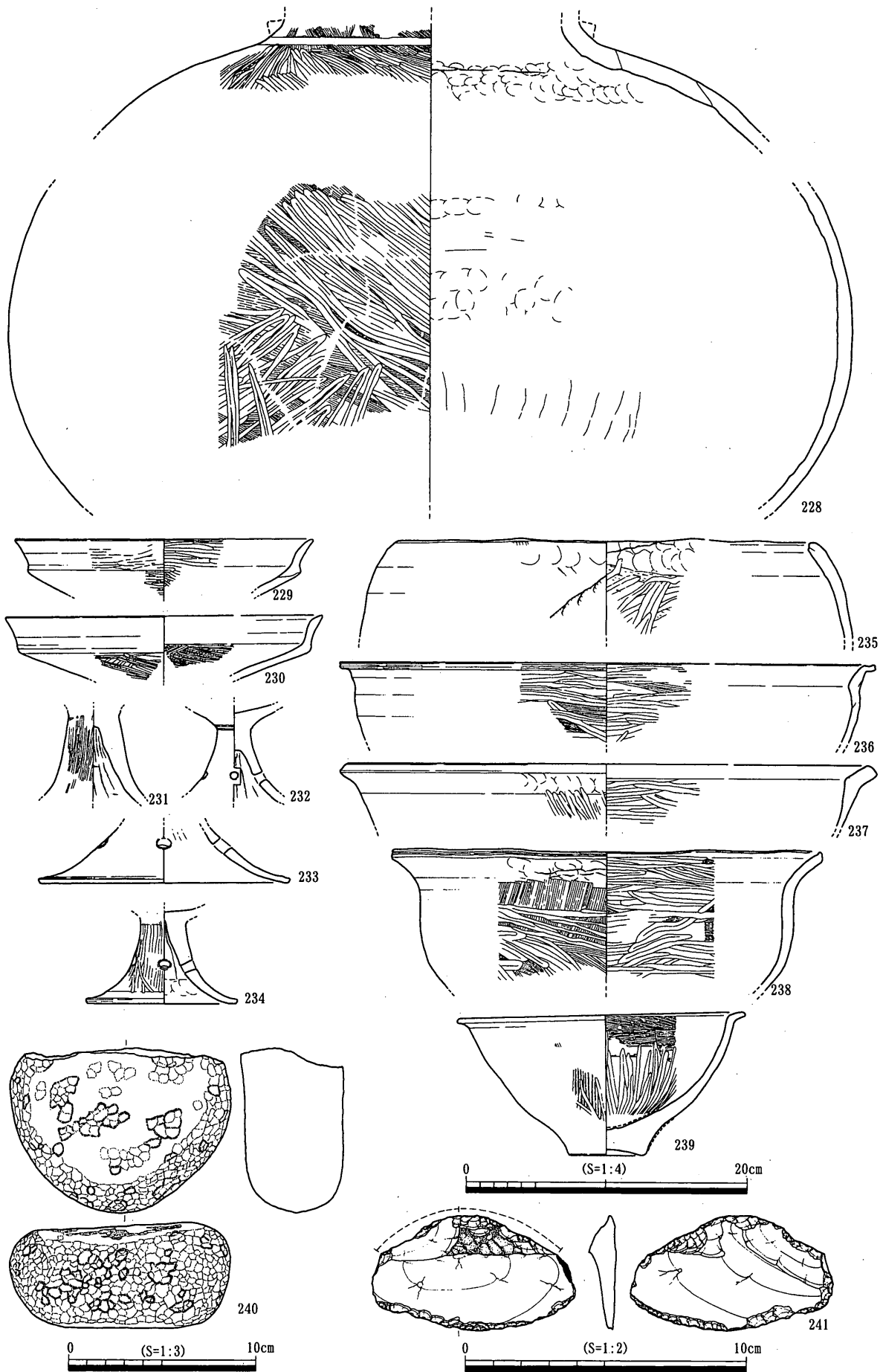
I 区 S D 43

I -5 区中央部を南北に延びる形で検出した溝である。上面幅 0.5 ~ 0.7 m、0.2 ~ 0.4 m 程の残存深度を測る。断面形は U 字ないし逆台形を呈し、総延長で 22 m 程にわたって検出しており、底面レベルから南から北方向への流下方向が想定できる。また、北側に向かうにつれて徐々に浅くなり、隣接する I -4 区では確認できなかった。また、断面観察では顕著なラミナが観察されないことから、水路としての機能は想定できず、具体的な性格付けは困難である。出土遺物は埋没土中位から見られ、小片化したものが多い。

203 ~ 211 は出土遺物である。203 は口縁部外面にハケ原体による列点文をもつ広口壺口縁部。204 は口縁部内面に 2 条の貼り付け突帯と、ヘラ描による施文を行う広口壺口縁部片であり、蓋受け用



第43図 I区 SD42. 43. 51平・断面図及び出土遺物実測図 その1



第44図 I区 SD51出土遺物実測図 その2

の2孔一対の穿孔が見られる。205は長頸壺の口縁・頸部片であり、接合関係は見られないが同一個体と考えられる。206は鉢口縁部、207は断面肉厚の壺底部片である。209は小型鉢底部片。210.211は甕底部片であり、210は胎土・調整から高松平野北東部地域からの搬入品である。208は高杯の脚部片である。

出土遺物の様相は、203.204の中期中葉段階のものと205～211の後期後葉段階のものが見られる。断面観察で一部掘り直し等の可能性が見られる箇所も存在することから、一定期間の維持・管理が想定されるが、規模的な点から中期中葉段階のものは混入品と理解し、後期後葉段階に機能してものと推測される。

I区SD51

I-5区西部で検出した溝である。上面幅0.7m残存深度0.4～0.5m程を測り、逆台形の断面形をもつ。西側が現道部分に相当し未調査部分となるが、南側と北側で屈曲する「コ」の字形の平面プランをもつ。埋没土に顕著なラミナ状堆積が確認できないことと、本溝の内側には、やや間隔を空けてSH03が存在することから、同住居の周溝の可能性はある。本溝とSH03の出土遺物に明瞭な時間差は見られないが、未調査部分を挟むことから、周溝と確定するには至らない。

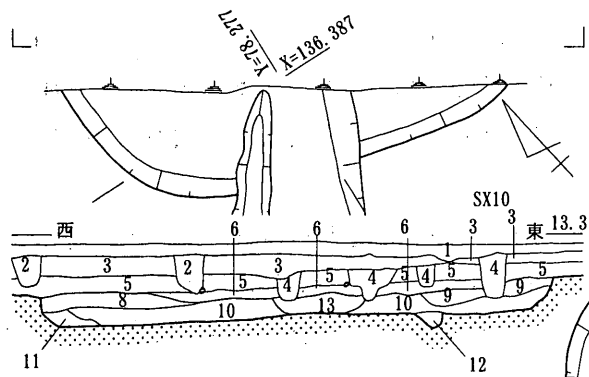
213～241は出土遺物である。また、これらは単一箇所に集中することなく、検出範囲に散在する形で最下層から出土している。213.214は口縁部が短く屈曲する広口壺口縁部。215は長頸壺の頸部片、216.217の広口壺の口縁部片である。218～220は甕口縁部、223～225は同底部片であるが、218～220.224.225は胎土・調整から高松平野北東部地域からの搬入品と思われる。222は体部外面に平行タタキを残す鉢であり、226.227は脚台様の底部をもつ小型鉢である。228は大型壺の胴部～頸部片であり、外面をミガキ締める。229～234は高杯口縁・脚部片である。229.230は形態・胎土的に見て高松平野北東部地域からの搬入品である。口縁部があまり外反しない点から、後期後葉でも古く位置づけられる。235は口縁部が内傾する球形の鉢口縁部。236～239は口縁部が大きく外反する鉢である。240は砂岩製の敲石であり、側面を中心として敲打痕が見られる。241は小型の横長剥片を素材とするスクレイパーであり、背部に潰れ状の階段状剥離と細かな両側調整の刃部が見られるが、顕著な磨耗痕は見られない。

I区SX09

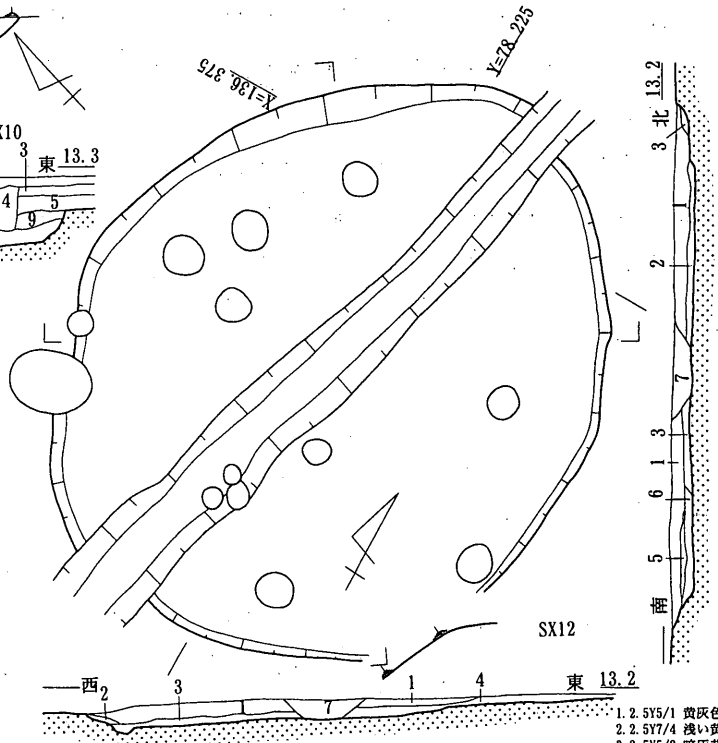
I-4区X=136.387 Y=78.230付近で検出した直径1.1m残存深度0.15m程を測る円形の落ち込みである。出土遺物は埋没土中位を中心に見られた。242は長頸壺口縁部である。248は外面に平行タタキを留める小型鉢の底部片である。248の鉢底部の形態などから、これらは後期後葉段階の所産と推定される。

I区SX10

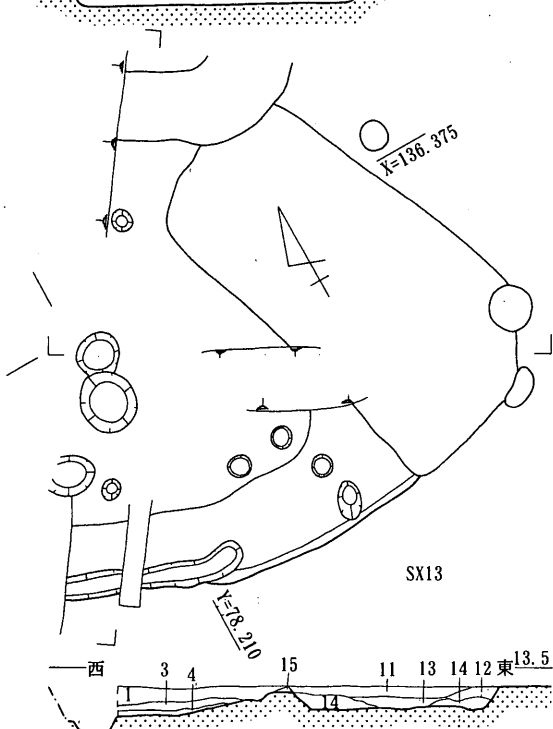
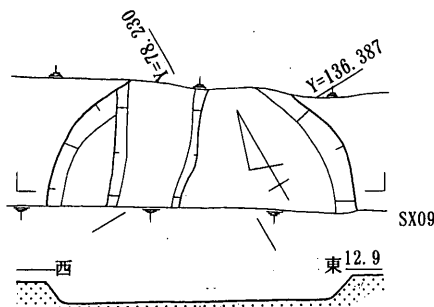
I-4区X=136.387 Y=78.277付近で検出した落ち込みである。検出した範囲では2.1×0.7m程の楕円形の平面プランが想定でき、0.2m程の残存深度を測る。出土遺物(243.246.245.251.253.254)は埋没土上層を中心に出土している。243.245は甕口縁部、246は細頸壺の口縁部である。251は明瞭な平底をもつ小型鉢底部。253は高杯口縁部であり、口縁端部は僅かながら両側に拡張される。254



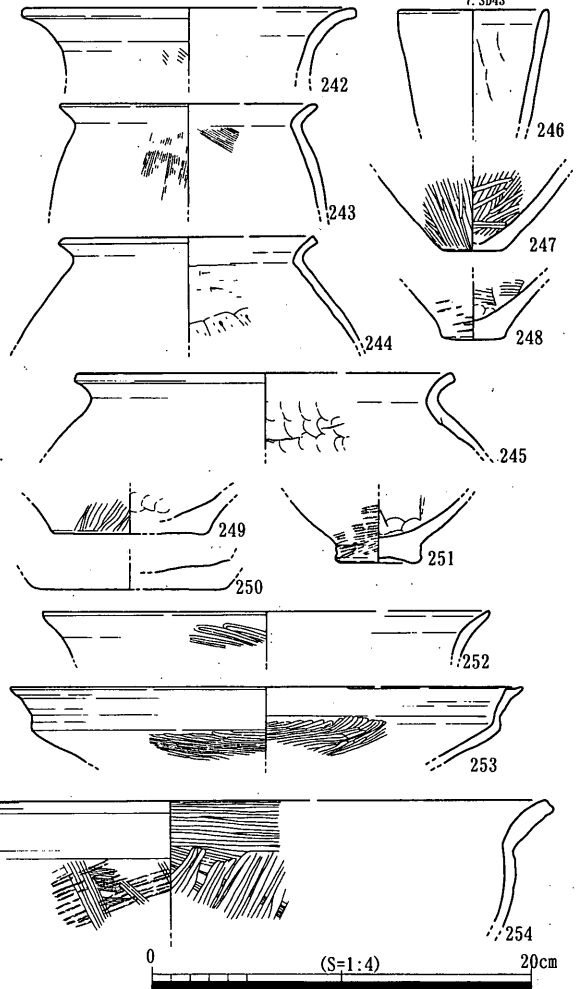
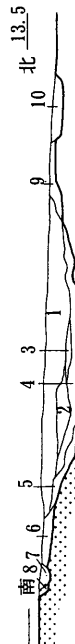
- 1. 2. 5Y8/4 土にぶい黄粘土 (旧耕作土)
- 2. 10YR8/4 浅い橙粘質土 (柱穴)
- 3. 2. 5Y5/2 暗灰黄粘土 (遺構面)
- 4. 2. 5Y5/2 暗灰黄粘質土 (柱穴)
- 5. 2. 5Y5/1 黄灰色土 (遺構面)
- 6. 10YR5/1 褐灰色粘質土
- 8. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (SX10)
- 9. 2. 5Y4/1 黄灰色粘質土 (SX10)
- 10. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (SX10)
- 11. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (SX10)
- 12. 2. 5Y4/2 暗灰黄粘質土 (SX10)
- 13. 2. 5Y6/1 黄灰色粘質土 (SD43)



- 1. 2. 5Y5/1 黄灰色粘質土
- 2. 2. 5Y7/4 浅い黄粘質土
- 3. 2. 5Y5/2 暗灰黄粘質土
- 4. 2. 5Y7/2 灰黄粘質土
- 5. 2. 5Y6/1 黄灰色粘質土
- 6. 5Y4/1 灰粘質土
- 7. SD43



- 1. 2. 5Y3/1 黒褐色粘質土
- 2. 2. 5Y4/1 黄灰色粘質土
- 3. 2. 5Y5/1 黄灰色粘質土
- 4. 5Y5/1 灰粗砂粘質土
- 5. 8Y4/1 灰粘質土
- 6. 5Y7/1 灰白色粗砂粘質土
- 7. 2. 5Y4/1 黄灰色粘質土
- 8. 2. 5Y5/2 暗灰黄粘質土
- 9. 2. 5Y6/2 灰黄粘質土
- 10. SD51
- 11. 2. 5Y3/2 黒褐色粘質土 (SK10)
- 12. 2. 5Y5/1 黄灰色粘質土 (S)
- 13. 2. 5Y4/2 暗灰黄粘質土 (S)
- 14. 2. 5Y4/1 黄灰色粘質土 (S)
- 15. 10YR7/3 にぶい橙シルト



第45図 I区 SX09. 10. 12. 13平・断面図及び出土遺物実測図

は鉢口縁部である。253の高杯口縁部や251の鉢底部形態より、これらの土器群は後期後葉でも古い段階に位置づけられる。

I区SX12

I-5区X=136.375 Y=78.225付近で検出した3.1×2.6mの楕円形を呈する落ち込みで、中央部分を後期後葉段階のSD43に切り込まれる。残存深度は0.15mであり、壁面の立ち上がりは比較的緩やかである。平面形が歪であることと内部に見られる柱穴はすべて上層から穿たれたものであることから、住居とは見れない。毎度中から比較的安定した底部をもち、中期中葉段階の所産と思われる249の壺が出土している。

I区SX13

I-5区X=136.375 Y=78.210付近で検出した落ち込みである。北・東側を切り合い関係により消失し、東側が未調査地となるが、直径2.5m深さ0.2m程の規模が想定できる。立ち上がりは緩やかであり、自然地形の可能性が高い。出土遺物は見られなかったが、後期後葉段階のSD51、SK56に切られることから、これ以前の所産と思われる。

2. 古代～近世

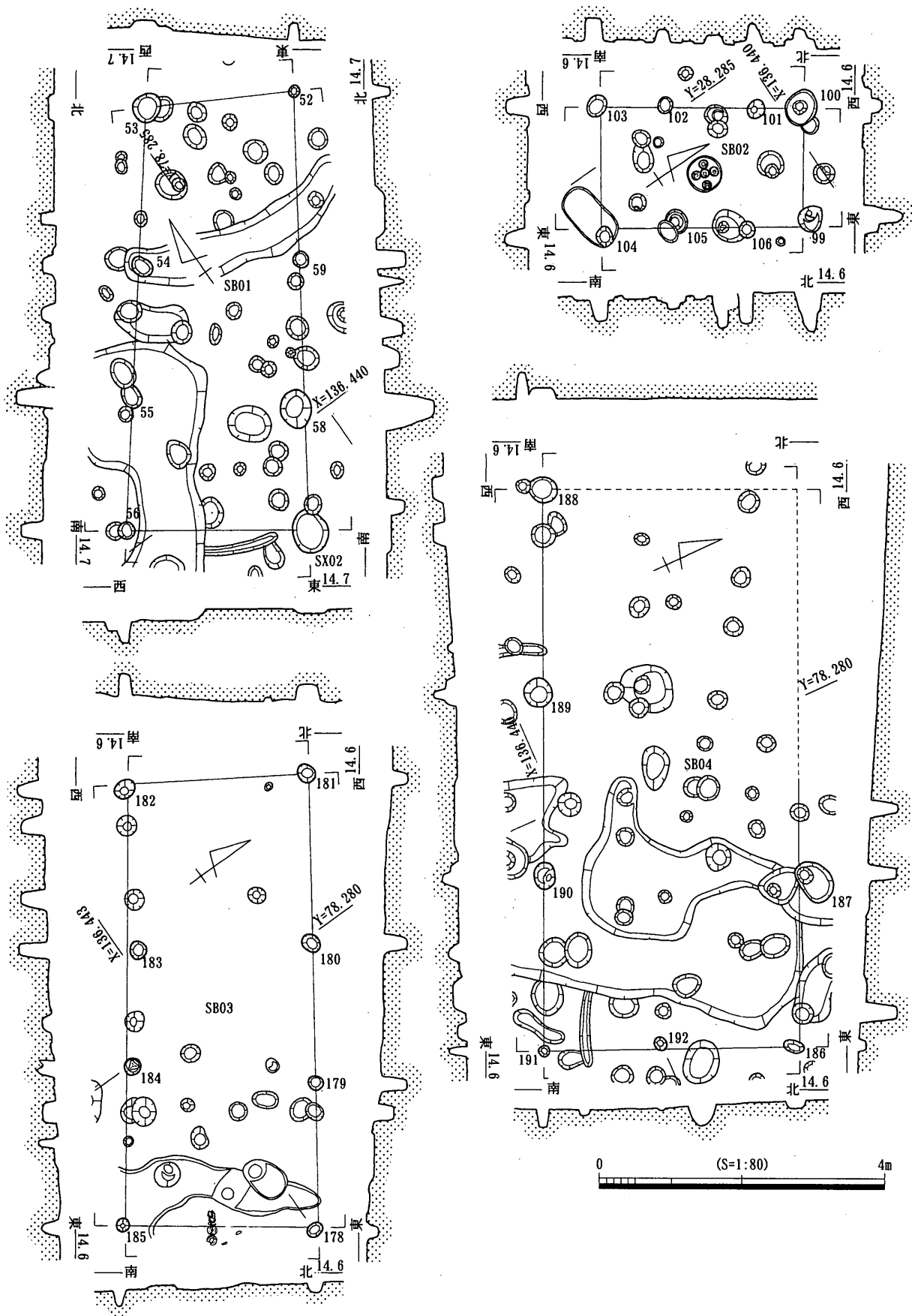
I区SB01

I-1区X=136.440 Y=78.285付近で検出した掘立柱建物である。I-1区の柱穴が密集する部分で検出していることから、現地調査の段階で復元できず整理作業の段階で復元したものであることをお断りしておく。規模は、1間×3間(2.6×5.8m)の柱構造を示し、床面積は15.08㎡に復元される。現代の耕作土直下で検出しており、検出面は一定程度の削平を受けている。柱間はほぼ一定しているが、北東隅柱の柱穴52の位置により平面形が歪みを見せることから、本柱穴を除いた復元が許されるかもしれない。建物主軸は座標北から35°西へ振った南北棟である。遺物は柱穴55から256の土師質土器小皿と、262同捏鉢口縁263の瓦質焼成の鉢?、柱穴56から263に酷似する264の瓦質焼成の鉢?、柱穴58から257の土師質土器杯口縁部が出土している。256.257の土師質土器小皿・杯の法量から、概ね14c代の所産と推定され、本建物の廃絶時期を示すものと考えられる。

I区SB02

I-1区X=136.439 Y=78.286付近で検出した小規模な掘立柱建物である。規模は1間×3間(1.8×2.8m)であり5.04㎡程の床面積が復元される。梁・桁行の柱通りは良好であり、柱間も0.8m前後と一定したものとなっている。建物主軸は座標北から34°西へ振った南北棟である。建物内部中央に、土師質土器杯5個体・銭貨5枚を納めたほぼ同時期のSX03が位置するが、遺物の様相はSX03が先行し本建物の廃絶が後出するようである。出土遺物は、柱穴99から255の土師質土器小皿、柱穴99から土師質土器足釜265の脚部片が出土している。

255の土師質土器小皿の法量から、本建物は14c末～15c初頭に廃絶したものと推測する。



第46図 SB01~04平・断面図

I 区 S B 03

I -1 区 X = 136.443 Y = 78.280 付近で検出した掘立柱建物である。規模は 1 間 × 3 間 (2.7 × 6.4 m) 座標北から 54° 東へ振った建物主軸をもつ東西棟で、復元される床面積は 17.28 m² である。北側桁行の柱穴 183 のみ柱通りから内側へずれるが、これ以外の柱穴の柱通りは良好であり柱間も 2 ~ 2.2 m とほぼ一定したものとなっている。検出面は一定程度の削平を受けているが、各柱穴の下場のレベルで見るとほぼ揃うものとなる。

時期決定可能な出土遺物は見られないが、建物主軸や位置関係から周辺の建物とほぼ同時期と思われることから、14 ~ 15 c 初頭の帰属時期を推定しておきたい。

I 区 S B 04

I -1 区 X = 136.440 Y = 78.280 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 66° 東へ振った東西棟である。検出面が後世に削平を受けていることもあり、北西隅柱と北側桁行の柱穴を欠落するが 1 間 × 3 間 (3.6 × 7.8 m) の柱構造と 28.08 m² の床面積が復元される。現地調査段階で認識しておらず、整理作業の段階で確認したものであることを明記しておく。柱穴規模はバラツキがあるが、底面の窪んだ部分を柱痕と仮定した場合の柱通りは良好である。柱穴 197 から土師質土器杯底部片の 259 が出土していることから、本建物は 14 c 末 ~ 15 c 初頭に廃絶したものと推定する。

I 区 S B 05

I -1 区 X = 136.440 Y = 78.278 付近で検出した比較的大形の掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 34° 西へ振った南北棟である。南東隅柱を近世期の S D 11 によって破壊されているが、1 間 × 4 間 (3.4 × 10.6 m) の柱構造と 36.04 m² の床面積を復元できる。しかし、東西桁行の柱穴 209・210 間と柱穴 208・216 間の柱間寸法が、他の桁行のそれに比べて短いことから、この部分を庇と見ることもできる。時期決定可能な出土遺物は見られないが、建物主軸や周辺の建物の帰属時期から、概ね 14 c ~ 15 c 初頭に機能した建物と推定しておきたい。

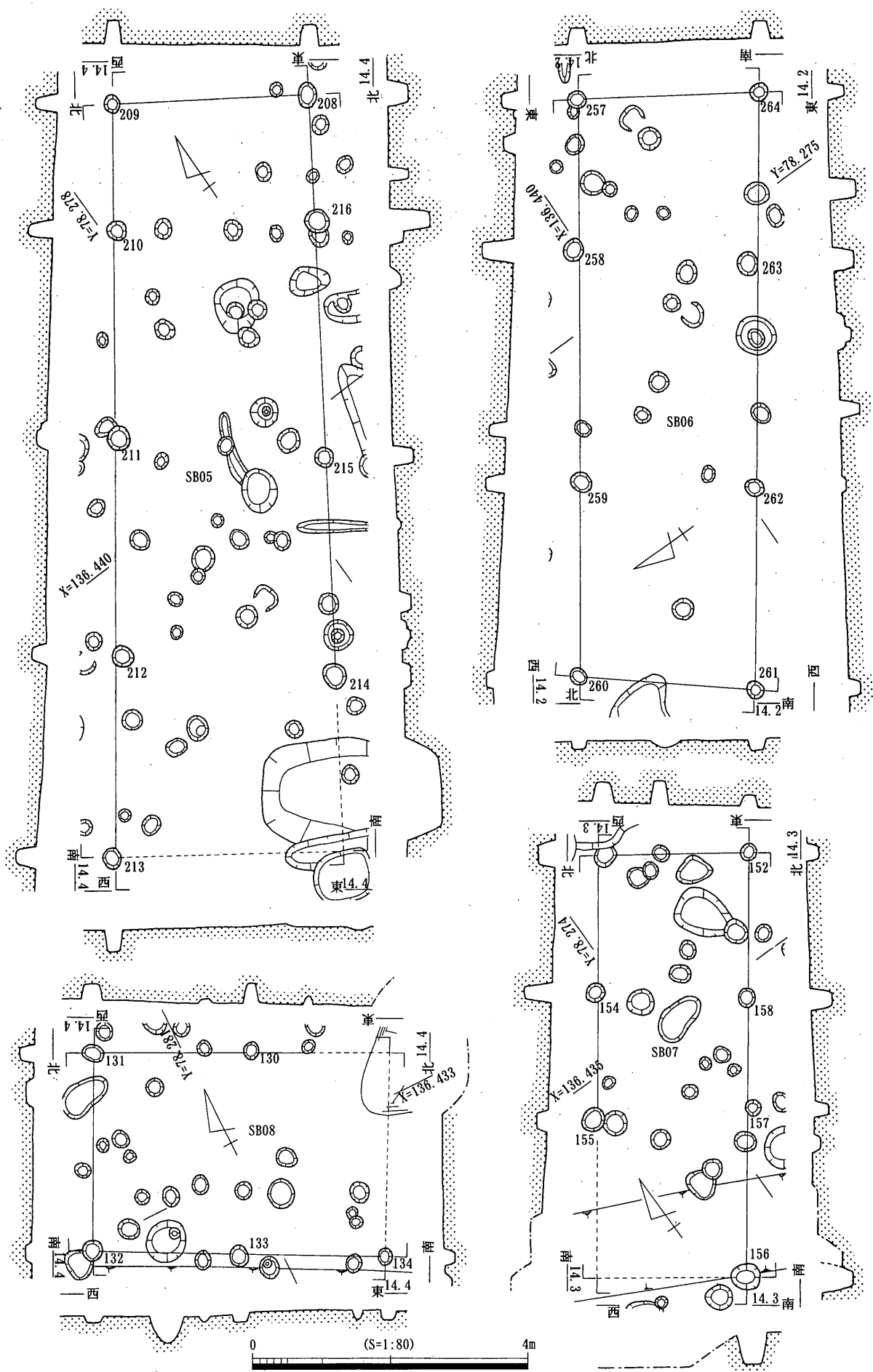
I 区 S B 06

I -1 区 X = 136.440 Y = 78.275 付近で検出した掘立柱建物である。1 間 × 3 間 (2.6 × 8.0 m) の柱構造と 20.8 m² の床面積が復元される。建物主軸は座標北から 55° 東偏し東西棟である。また、現地調査段階で認識しておらず、整理作業段階で復元した建物である。柱通りが悪く、他の建物と比較して柱間もやや長く一定しない。柱穴 258 からは中世末期の土師質土器把手付鍋 261 が出土しており、本遺跡内では当該期の唯一の建物となる。

261 の土師質土器把手付鍋は、口縁部の形態から 16 c 末 ~ 17 c 初頭の年代が想定される。

I 区 S B 07

I -1 区 X = 136.435 Y = 78.279 付近で検出した掘立柱建物である。1 間 × 3 間 (2.0 × 6.0 m) の柱構造と 12 m² 程度の床面積が想定される。建物主軸は座標北から 36° 西偏し、南西隅柱を調査区境の側溝によって破壊されている。東側桁行の柱穴 157 のみ位置関係が乱れるが、全体として柱通りは



第47図 I区 SB05~08平・断面図

良好である。柱穴 152 より土師質土器杯底部 260 と、柱穴 154 から同杯底部 258、柱穴 155 から銭貨景祐元宝 266 が見られる。258.260 の土師質土器杯の底部形態から、14 c 末～15 c 初頭の廃絶時期が想定される。

I 区 S B 08

I -1 区 X = 136.433 Y = 78.281 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 63° 東へ振った東西棟で、攪乱穴によって北東隅柱を欠落するが、1 間×2 間 (2.8 × 4.2m) の柱構造と 11.76 m² の床面積を想定できる。検出位置が I -1 区の中でも最も削平を受けた部分であることから、本来的には桁行の柱列が東へ伸びていた可能性も考慮する必要がある。また、本建物は現地調査の段階で復元したものではなく、整理作業段階で柱配置から復元したものである。各柱穴の埋没土が、共通していたことと、平面配置から建物として復元した。時期決定可能な出土遺物は見られなかったが、建物主軸方向と、埋没土が周囲に存在する建物群と類似することから、14c～15c 初頭に機能したものと推定しておきたい。

I 区 S B 09

I -2 区 X = 136.439 Y = 78.270 付近で検出した掘立柱建物である。柱配置や埋没土の共通性から、1 間×3 間 (2.6 × 5.4m) の柱構造と 14.04 m² の床面積を復元できる。建物主軸は、座標北から 60° 東偏し、南側桁行の柱穴の一部を欠落する。柱通りは良好ではないが、柱穴底面のレベルはほぼ共通したのものとなっていることから、建物として復元した。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴と周辺建物との主軸方向の共通性から、14c～15c 初頭に機能したものと見ておきたい。

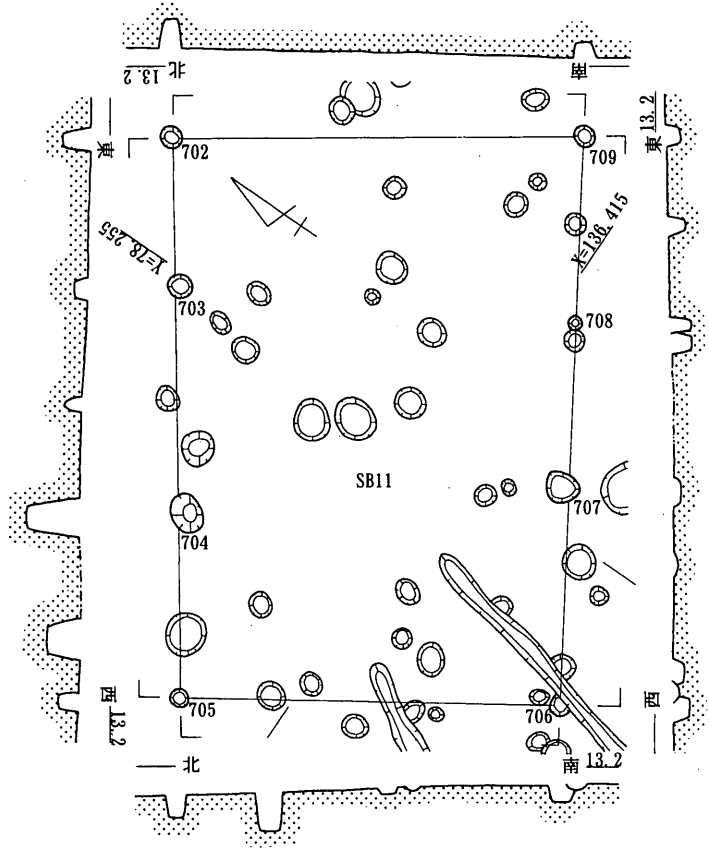
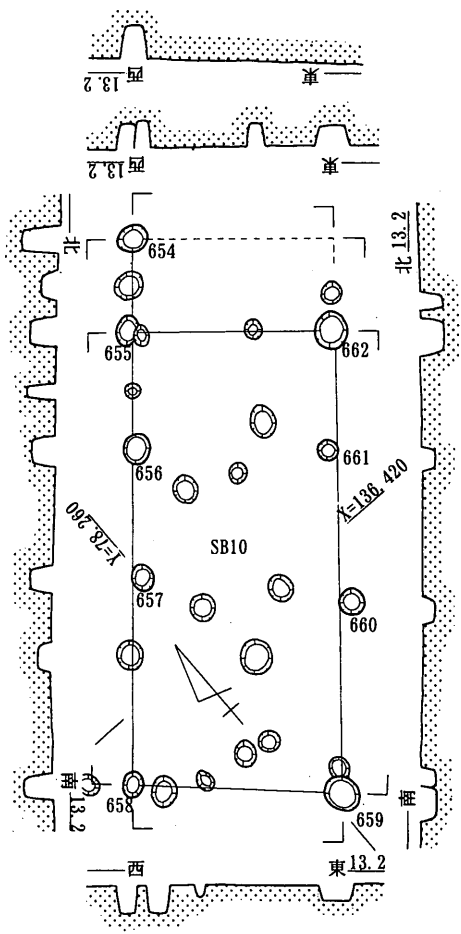
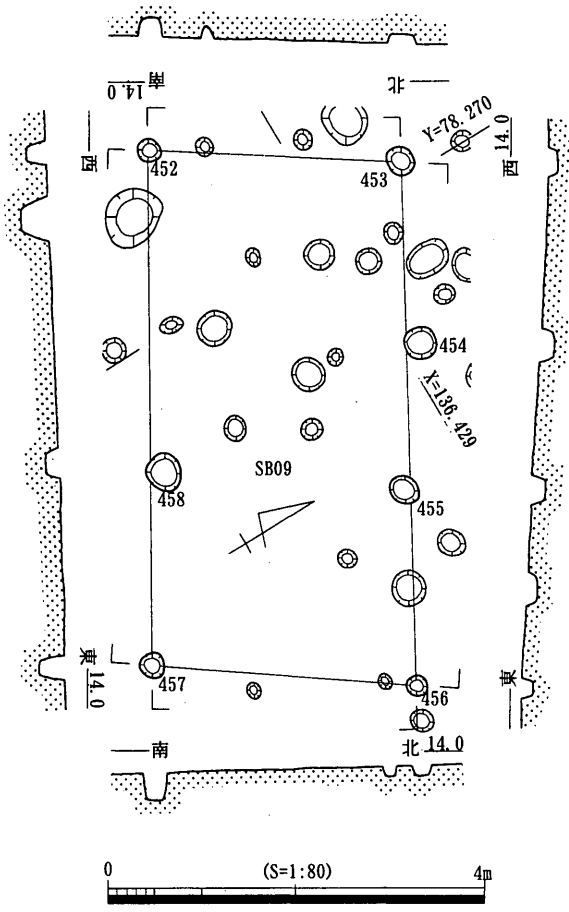
I 区 S B 10

I -2 区東部 X = 136.420 Y = 78.260 付近で検出した掘立柱建物である。主軸は座標北から 40° 西偏し、1 間×3 間 (2.2 × 4.8m) の柱構造をもち、10.56 m² 程の床面積が復元される。また、西側桁行の延長上に位置する柱穴 654 を庇等に関係するものとして復元すると、12.32 m² の建物面積を想定できる。柱通りが悪く、南半部の柱穴 657・658 間と柱穴 660・659 間の柱間が他と比べて長いものとなっているが、柱穴埋没土と底面のレベルが概ね類似していることから、建物として復元した。柱穴埋没土は暗灰黄色砂質土であり、航測図化校正段階で把握したことから、柱痕等の確認は出来なかった。

時期決定可能な出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴と建物主軸方向から、14c～15c 初頭に機能したものと推定しておく。

I 区 S B 11

I -2 区東部 X = 136.415 Y = 78.255 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北より 55° 西偏し、I 区建物の中では建物主軸が異なった存在である。1 間×3 間 (4.2 × 5.8 m) の柱構造の内、梁間がやや長い点も他のものと異なる。柱通りは良好であるが、平面形はやや歪んだものとなる。時期決定可能な出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴から 14 c～15 c 初頭に機能した建物と推定しておく。



第48図 I区 SB09~11平・断面図

I 区 S B 12

I - 2 区 X = 136.420 Y = 78.252 付近で検出した小形の掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 58° 東へ振った東西棟であり、北西隅柱を欠落するが 1 間 × 3 間 (1.8 × 3.6 m) の柱構造と 6.48 m² の床面積を復元する。南側の桁行の柱穴 800 の配置が他のものと比較してずれるが、柱穴の埋没土や規模の類似することと、底面のレベルがほぼ合致することから、建物を構成する柱穴に含めた。床面積から、主屋に付属する簡易な構造をもつ建物であった可能性が高い。時期決定可能な出土遺物は見られないが、建物主軸方向や埋没土の類似から、I - 1 区北東部の建物群と同様の 14 ~ 15 c 初頭の帰属時期を想定しておく。

I 区 S B 13

I - 2 区西半部 X = 136.430 Y = 78.243 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 58° 東偏する東西棟である。南側桁行の柱穴の一部が欠落するが、1 間 × 3 間 (3.2 × 6.4 m) の柱構造と 20.48 m² 程の床面積を想定できる。また、南東隅柱となる柱穴 955 の位置がややずれるが、他の柱穴と比較して埋没土が類似することと、底面レベルが一致することから建物に含めて考え、現地調査段階ではなく整理作業の段階で復元したものである。柱穴が完存する北側桁行に関しては、柱間・柱通りは良好である。

時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土と建物主軸が I - 1 区北東部の 14 ~ 15 c 初頭の建物と類似することから、これらとほぼ同時期の所産と推定しておきたい。

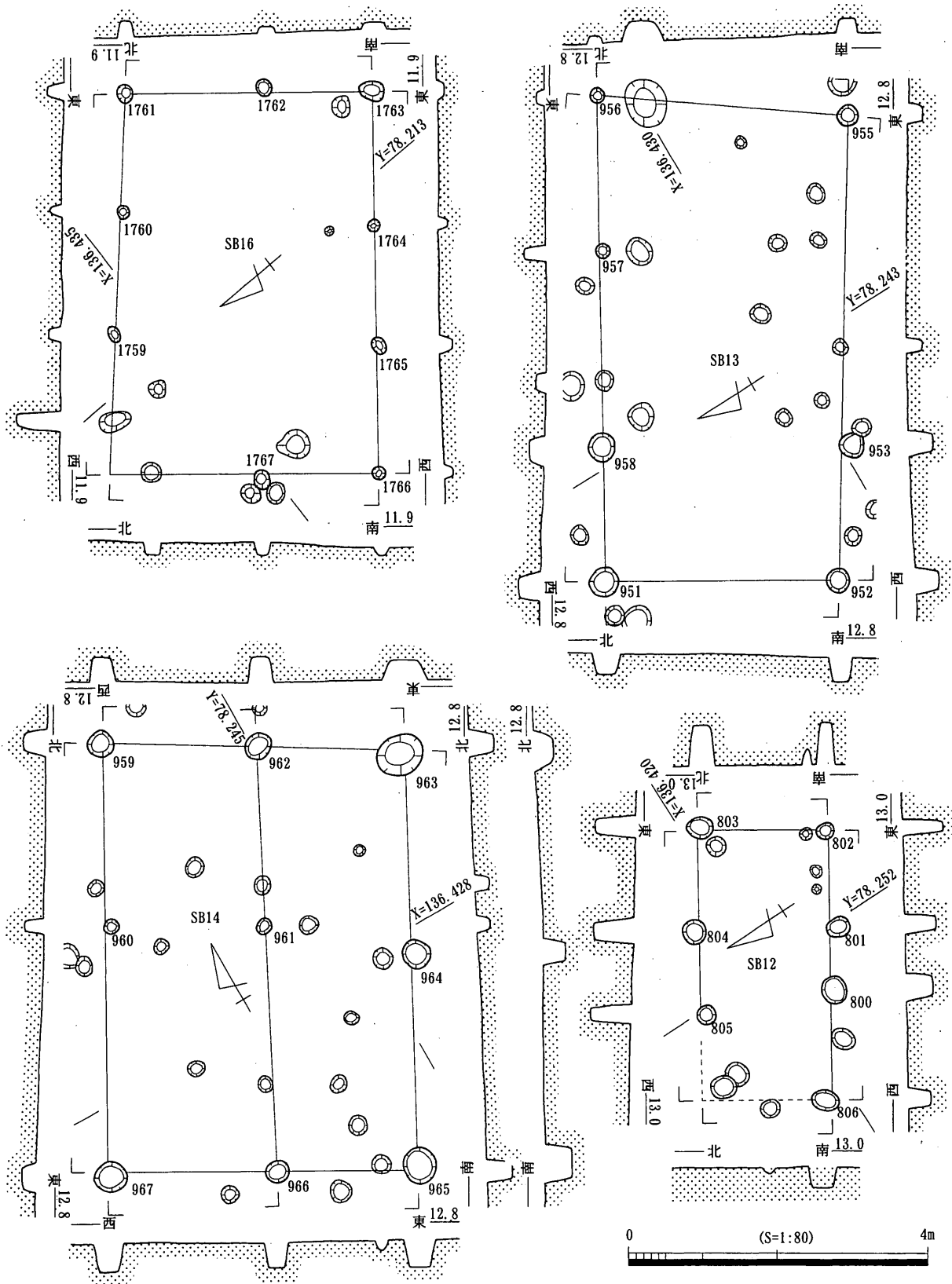
I 区 S B 14

I - 4 区 X = 136.428 Y = 78.245 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 29° 西へ振った南北棟であり、2 間 × 2 間 (4.0 × 5.6 m) の柱構造と 22.4 m² の床面積を想定できる。ただ、西側桁行の柱穴 960 の規模が、他の柱穴に比べて小形であることから、含めて復元するかどうかは微妙である。現代の耕作土のほぼ直下で検出していることから、削平を受けて柱痕部分のみ残存しているとも考えられる。内部中央には柱穴 961 が存在することから、束柱として把握することもできよう。埋没土は暗灰黄色砂質土であり、現地調査の段階で把握していたが、柱痕等の確認は出来ていない。

時期決定可能な出土遺物は見られないが、建物主軸や埋没土の共通性から I - 1 区北東部の 14 ~ 15 c 初頭の建物群とほぼ同時期の所産と推定しておきたい。

I 区 S B 16

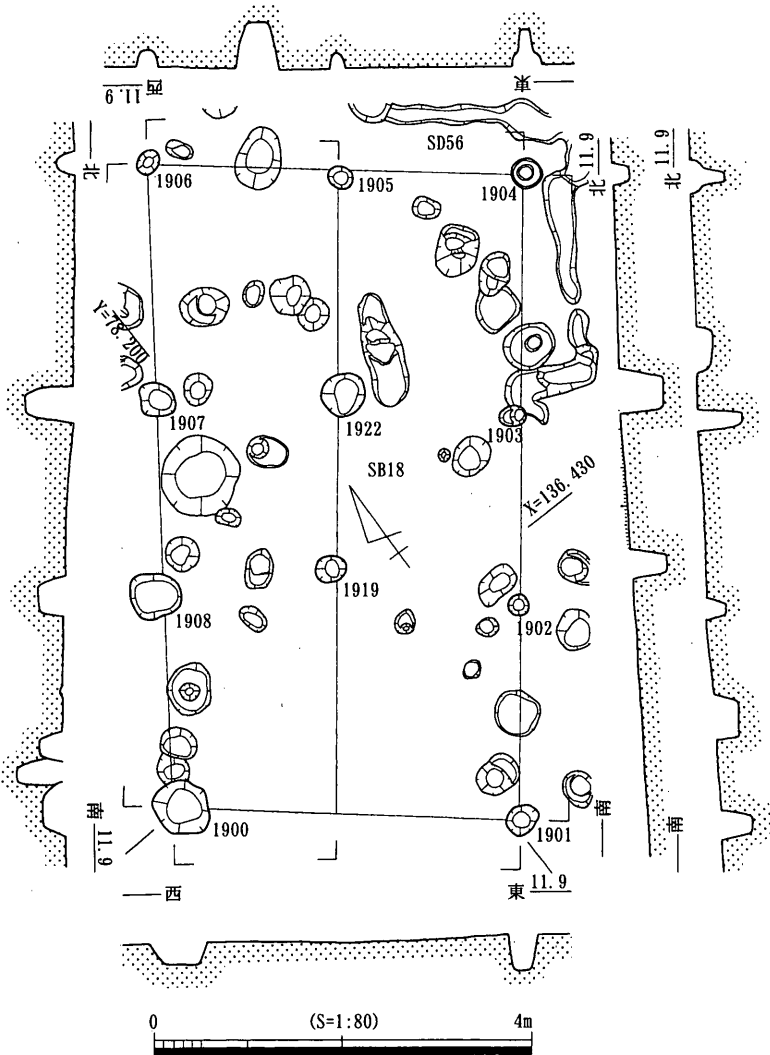
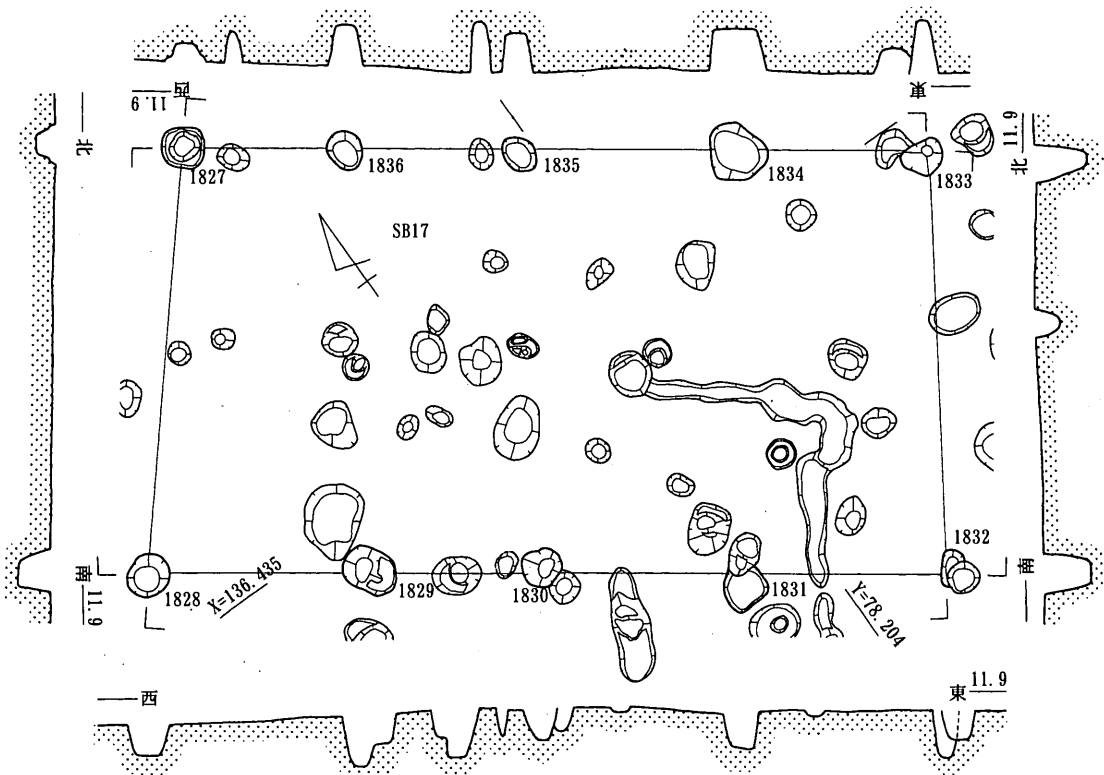
I - 8 区 X = 136.435 Y = 78.213 付近付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 50° 東偏する東西棟である。北西隅柱を欠落するが 2 間 × 3 間 (3.4 × 5.0 m) の柱構造と、17 m² 程度の床面積に復元できる。桁行の柱間と柱通りは良好であるが、梁間方向の棟持柱と考えられる柱穴 1762.1767 はやや南側の桁行に寄った配置を示す。各柱穴が 0.15 ~ 0.2 m 程の残存深度を見せることから、検出面は一定程度の削平を受けていることも考慮されよう。時期決定可能な出土遺物は見られなかったが、建物主軸や埋没土の類似から、I - 1 区北東部の建物と同様の 14 ~ 15 c 初頭に帰属する建物と見ておきたい。



第49図 I区 SB12~14.16平・断面図

I区SB 17

I-9区 $X = 136.435$ $Y = 78.204$ 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 54° 東へ振った東西棟であり、1間×4間 (4.4×8.4 m) の柱構造をもち 36.96 m² の床面積が想定される。

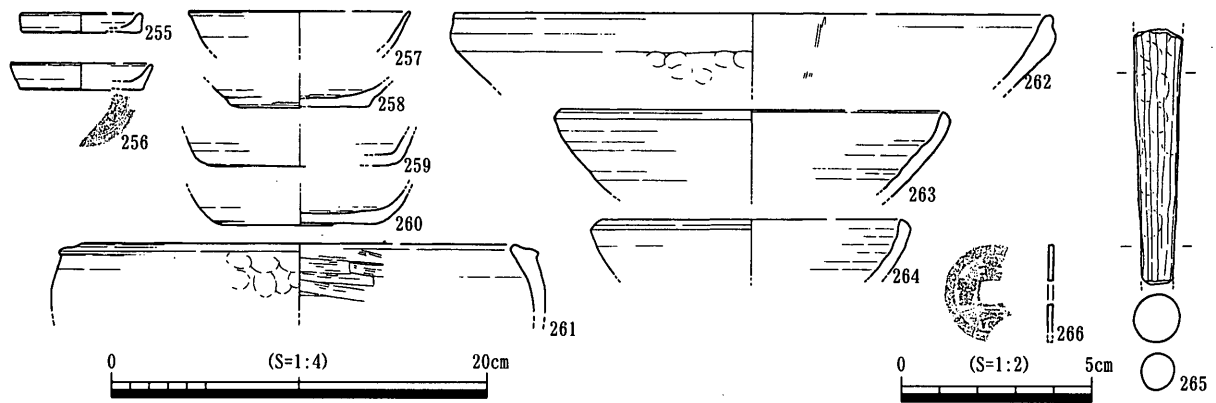


桁行の柱穴は直径0.4～0.6mの歪な円形のものが多く、北西隅柱の柱穴1827に見るような方形に近いものも含まれる。現地調査で確認できず、報告書作成段階での復元となったが、柱穴底面が更に窪む部分を柱痕と仮定すると、直径0.2m程の規模を復元できる。内部に東柱の可能性が想定される数基の柱穴が存在するが、確定するに至らなかった。柱穴規模・平面形にバラツキがあるが、柱穴1833から土師質土器小皿450、柱穴1834から土師質土器杯底部片465が出土していることから、15c初頭の所産と考えられる。

I区SB18

I-9区X=136.430 Y=78.200付近でSB17と重複して確認された掘立柱建物である。建物主軸は座標北から37°西へ振った南北棟で

第50図 I区 SB17.18平・断面図



第51図 I区 SB関連出土遺物実測図

あり、北側の梁間のみ2間で桁行3間(4.0×6.6m)の柱構造をもつ。復元される床面積は26.4㎡である。東西桁行の柱穴間には、柱穴1922.1919が存在し東柱の可能性がある。北東隅柱1904外側には、本建物に合致しクランクする小溝(SD56)が存在し、雨落ち溝的な性格を与えることかできる。柱穴規模は直径0.3～0.6mの円形を呈しバラツキがある。報告書作成段階での建物復元の為断面観察を行っていない。

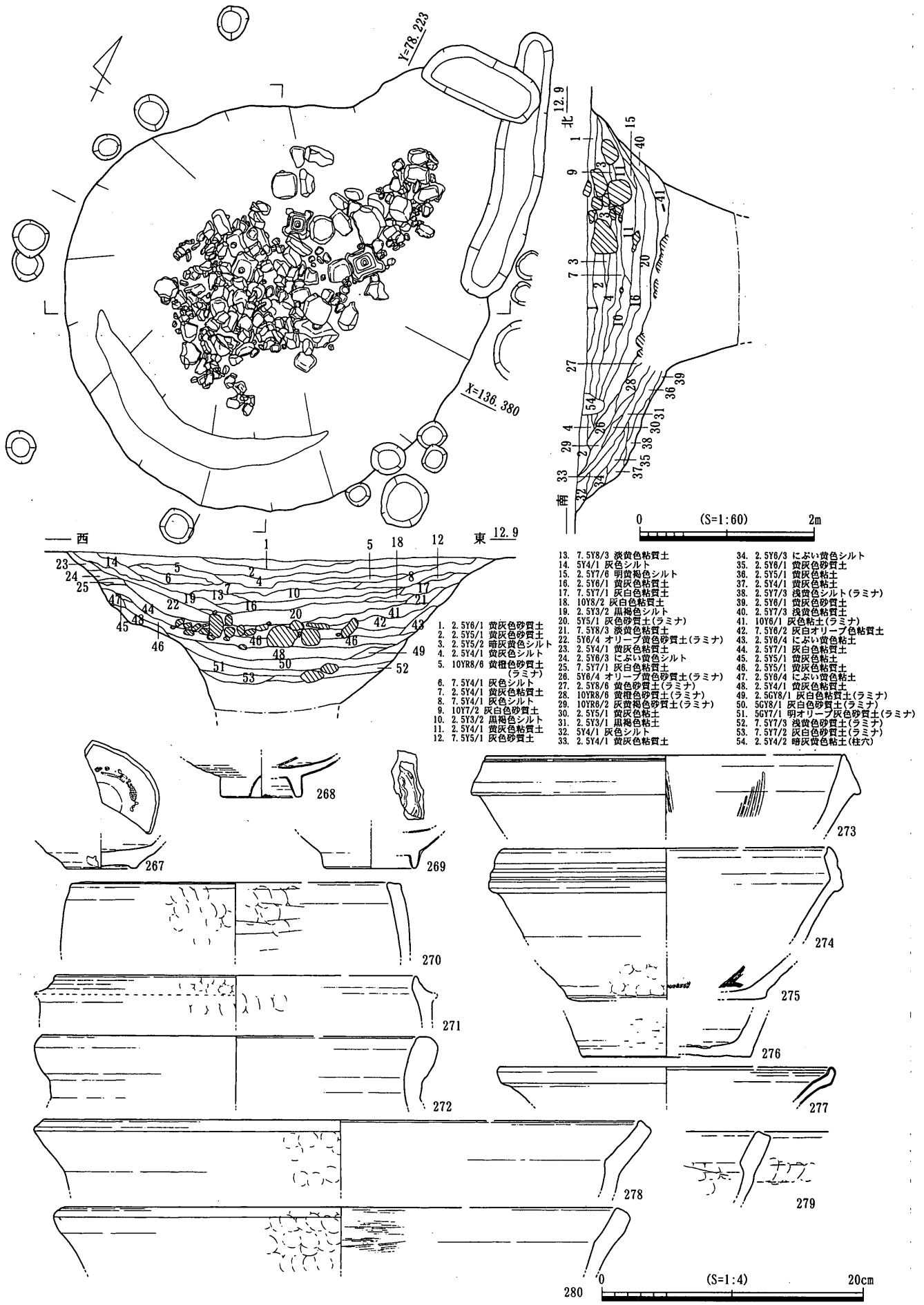
図化可能な出土遺物は見られなかったが、各柱穴と本建物に伴うSD56から、土師質土器杯の小片が出土していることから、I-1区北東部の建物と同様に14c～15c初頭の年代を想定しておきたい。

I区SE01

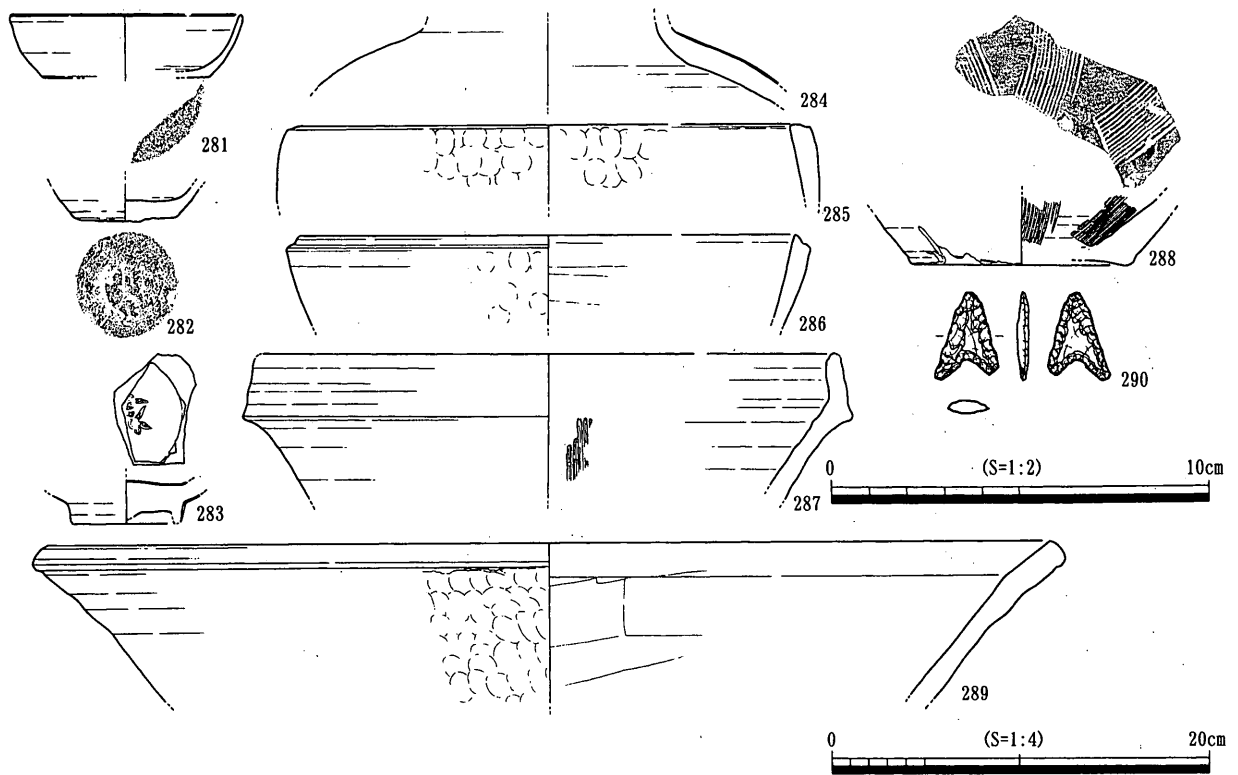
I-5区北部X=136.380 Y=78.223付近で検出した井戸である。平面形は直径4.5m前後の円形を呈し、北東部分に1.0m程の張り出し部が取り付く。断面形は逆台形を呈し、安全面の考慮から底面までの掘削は出来なかったが、現状で2.0m以上を測るものである。埋没土は上・中・下の3区分することができる。断面図を作成することが可能であったのは上・中層であり、下層はグライ化した青灰色粗砂を主体とする。中～上層は細かな単位での自然流入土と見られ、埋没までにかかなりの時間幅が見込まれる。また、この埋没過程において凝灰岩製の石造物が廃棄された状況が確認できる。第52図の出土状況図は中層の段階のものである。また、北側部分の上層の埋没土にも少量の石造物片が含まれていた。石造物は、五輪塔と宝篋印塔から構成されているが、肉眼観察では県内さぬき市津田町に産出する凝灰岩である火山石である可能性が高い。

267～280は上層267は肥前系陶器皿、268は産地不明の施釉陶器碗である。267は見込み部に砂目が見られ17c前半に位置づけられる。269は青磁碗の高台片。270は土師質土器把手付鍋口縁部、271は土師質土器足釜口縁部である。272は備前焼甕口縁部。273～275は備前焼播鉢口縁・底部片である。口縁部の形態から273は15c前半、274は16c後半に位置づけられよう。276は須恵器壺底部片。277は受け口状の口縁部をもつ青磁碗口縁である。278～280は土師質土器鍋の口縁部であり、形態から16c以降の所産と思われる。

281～289は中層出土遺物である。281.282は土師質土器杯の口縁・底部片。281は底部に回転糸切り痕を残し、口径から見て14c代の所産である。281は青磁碗高台片。284は備前焼壺肩部片。285は土師質土器把手付鍋口縁部であり、16c後半以降に位置づけられる。286は土師質土器捏鉢の口縁部。287.288は備前焼播鉢口縁・底部片である。287は16c後半の所産と思われる。289は



第52図 I区 SE01平・断面図及び出土遺物実測図 その1

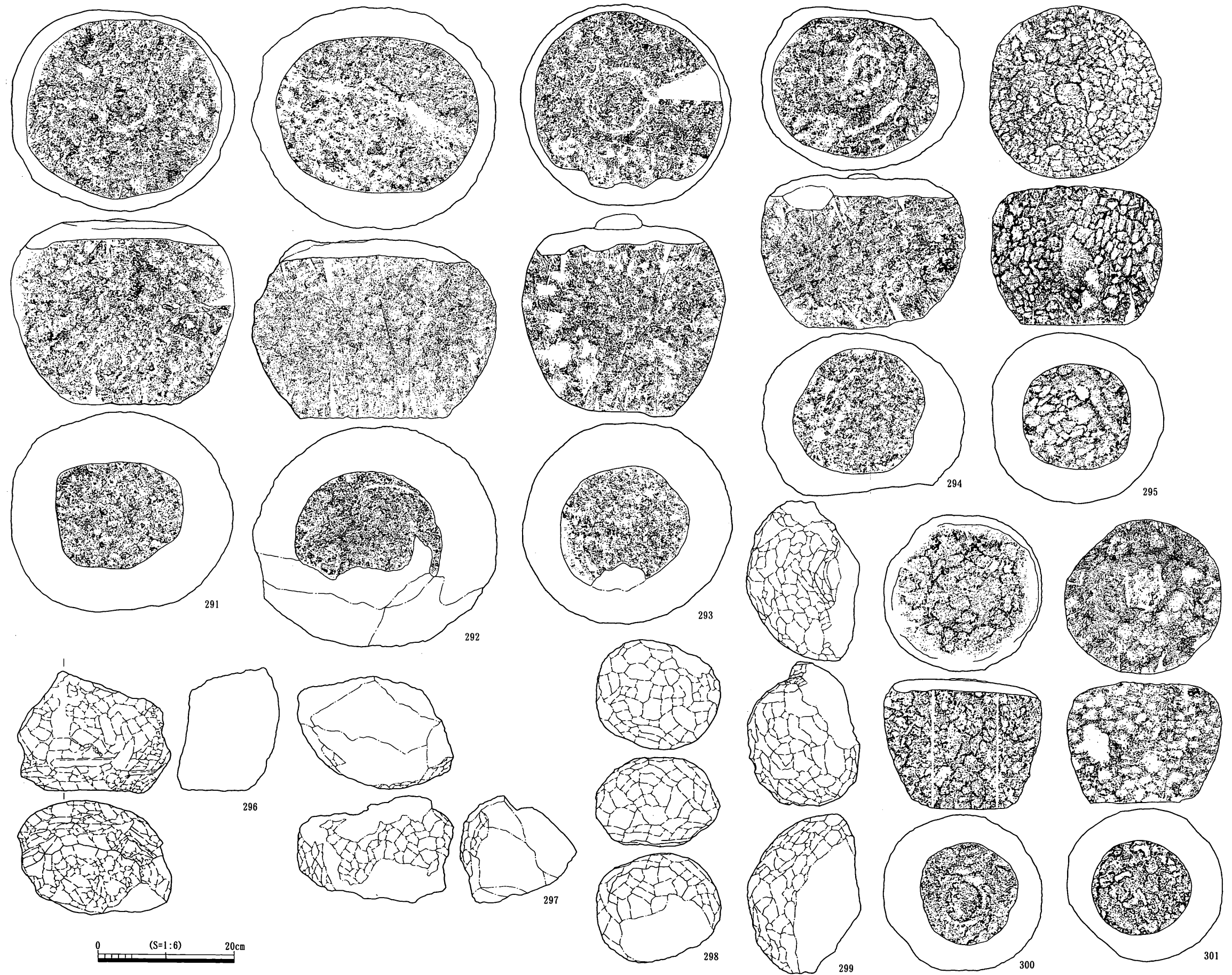


第53図 I区 SE01出土遺物実測図 その2

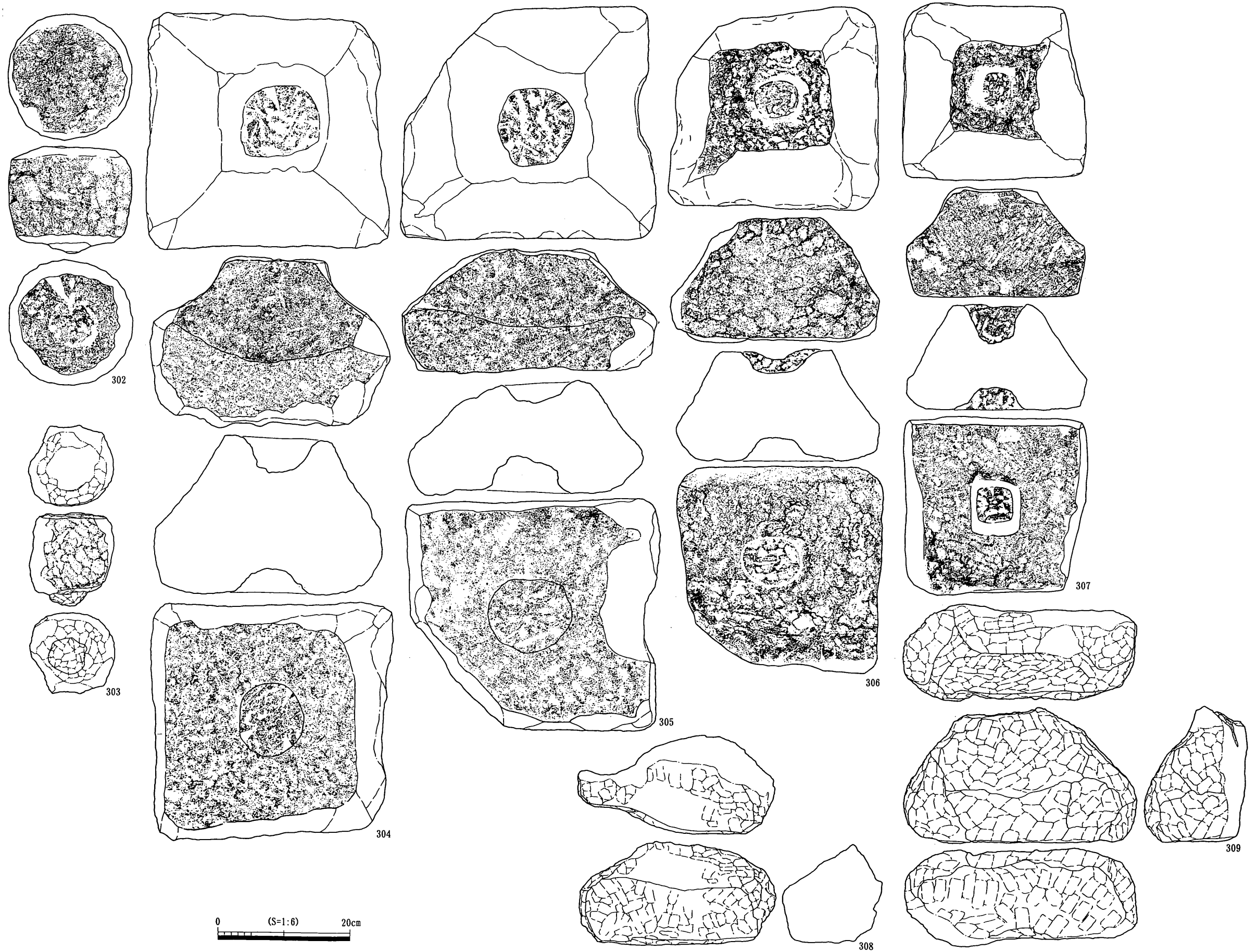
土師質土器鍋口縁部。290は凹基無茎式石鏃である。

291～295は五輪塔の水輪である。法量・形態ともにバラツキがあり、時期差を示す可能性がある。302.303は五輪塔の風輪と思われる。304～309は五輪塔火輪。310.311は宝篋印塔の総輪と思われる。312.313は宝篋印塔の笠である。314.315は宝篋印塔の基礎部と判断される。

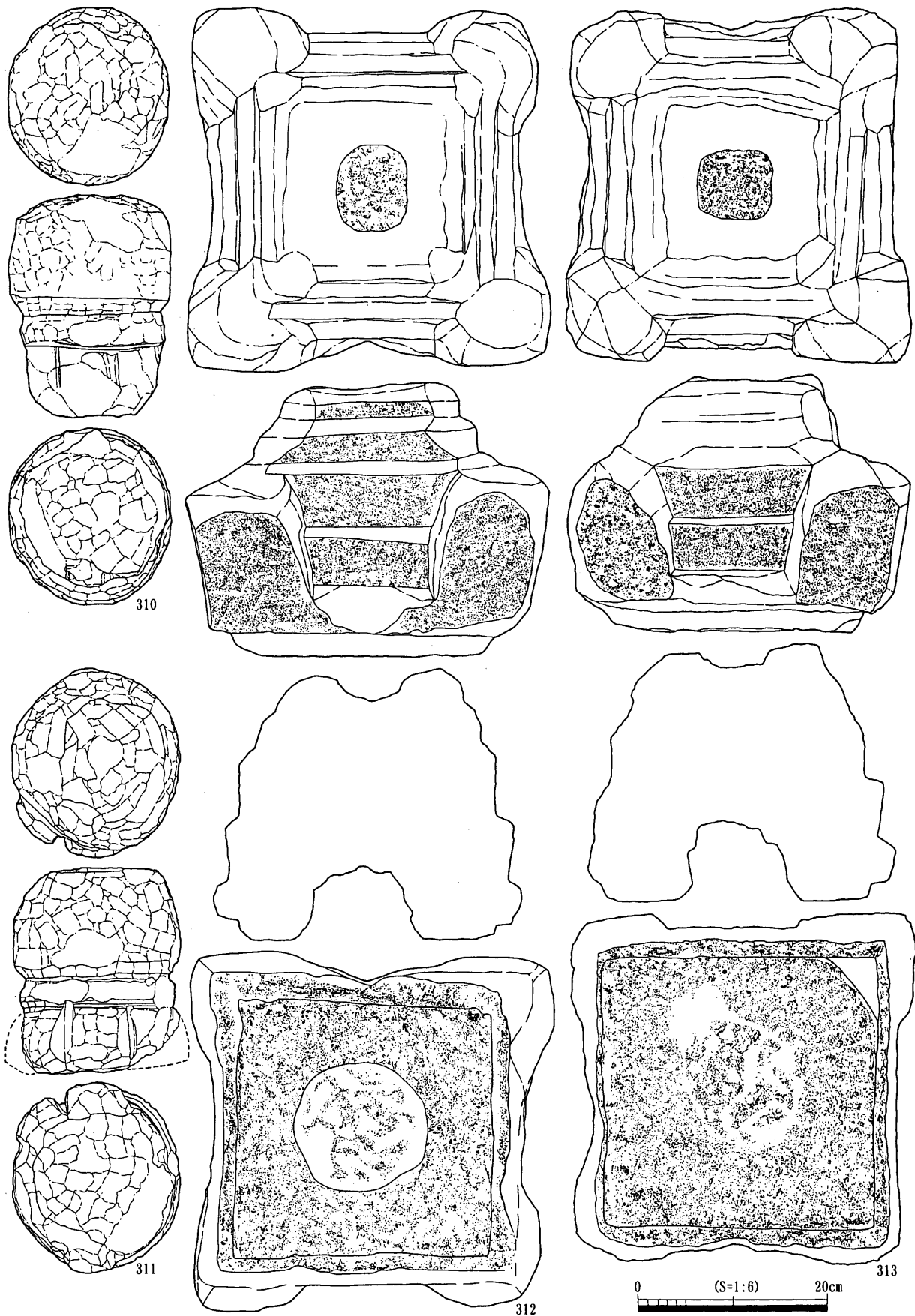
土器・陶磁器に関しては、14c～17c前半までの時間幅を有し上層と中層で層位的に区分できない。先の堆積状況で説明したような最終埋没までかなりの期間を要している点も出土遺物の時間差に反映されているものと見られる。しかし、中層に中世後半の遺物が多く含まれる傾向があり、五輪塔・宝篋印塔の石造物が投棄されたのは14c後半以降と推測することが可能であろう。従って、井戸として機能していたのは14c後半以前であり、最終埋没時期が17c前半に求めることができる。



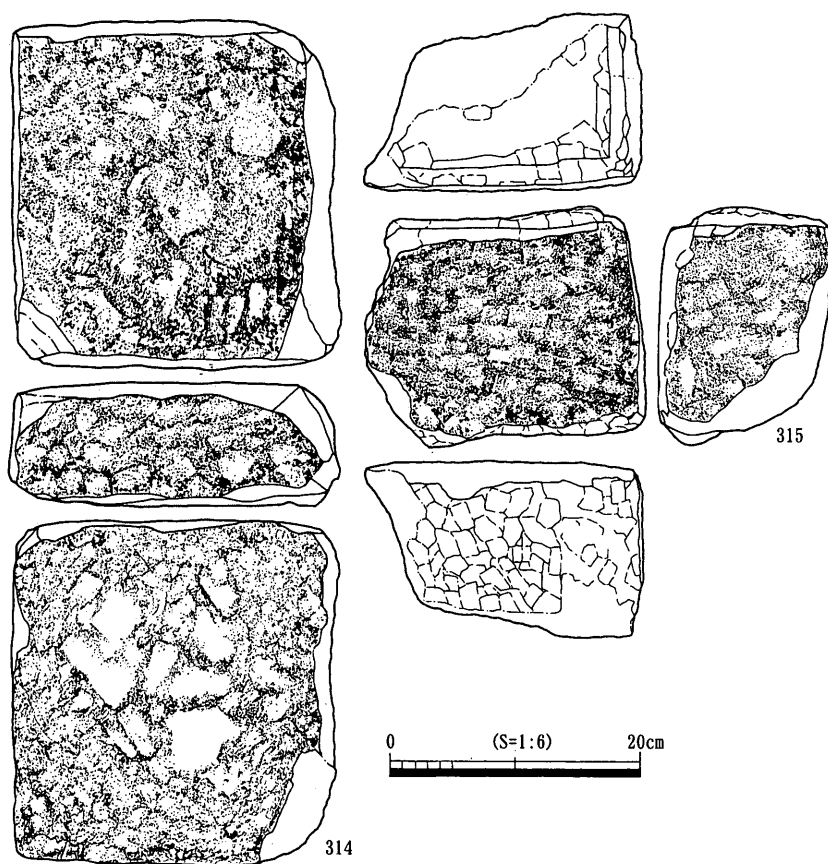
第54図 I区 SE01出土遺物実測図 その3



第55図 I区 SE01出土遺物実測図 その4



第56図 I区 SE01出土遺物 その5



第57図 I区 SE01出土遺物実測図 その6

I区SK 09

I -2区 X = 136.441 Y = 78.232 付近で検出した土坑である。直径 2.5 m 深さ 0.1 m 程のやや歪な円形を呈する。埋没土は粗砂を多く交えた粘質土の単一層であり、細片化した土器片が含まれていた。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴から中世期の所産と見ることが出来る。

I区SK 10

I -1区 北東部 X = 136.435 Y = 78.276 付近で検出した土坑である。長軸 2.1 m 短軸 1.3 m の隅丸長方形を呈し、東・南側を S D 11 によって切られる。残存深度は 0.4 m 程を測り、断

面形が概ね逆台形を呈する。

321.322.327.330.326.329 は出土遺物である。321 は施釉陶器皿、322 は施釉陶器碗、いずれも産地は不明である。327 は口縁部下に重ね焼き痕が見られないことから、堺・明石産の播鉢と見られる。330 は平瓦片。これらの遺物は 19 c 頃の所産と思われる。326 は土師質土器足釜脚部片、329 は聖宋元寶 (初鑄年 1101) は中世期の遺物と思われ、混入品とすることができる。

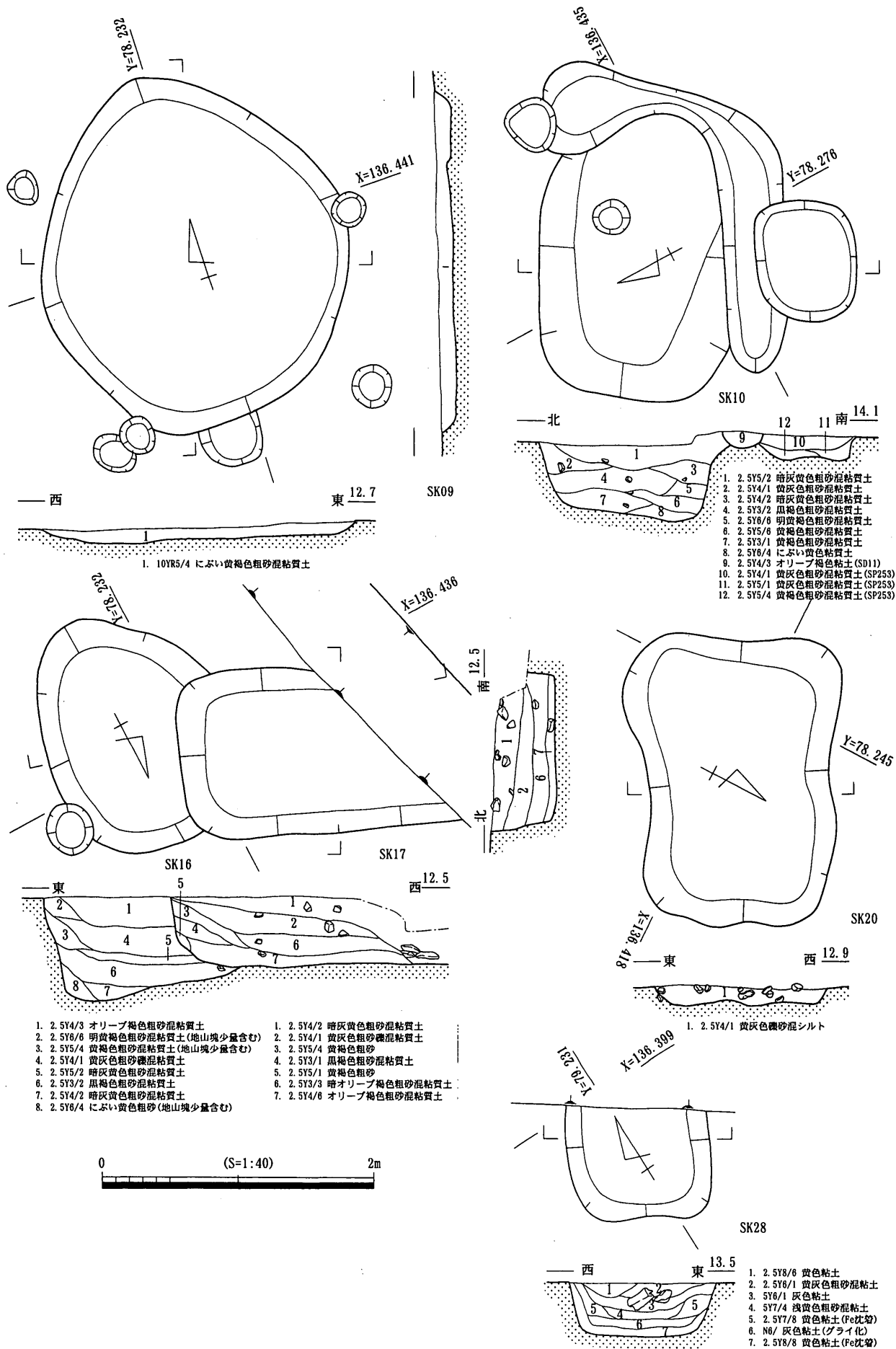
I区SK 16.17

I -2区西部の X = 136.436 Y = 78.232 付近で検出した土坑である。切り合い関係があり、SK 17 が後出する。SK 16 は長軸 1.7 m 短軸 1.3 m 程の円形を呈し、残存深度 0.7 m 程を測る。SK 17 は西側が調査区外に延びるものの、長軸 2.0 m 以上短軸 2.0 m の隅丸長方形を呈し、残存深度 0.5 m 程を測る。

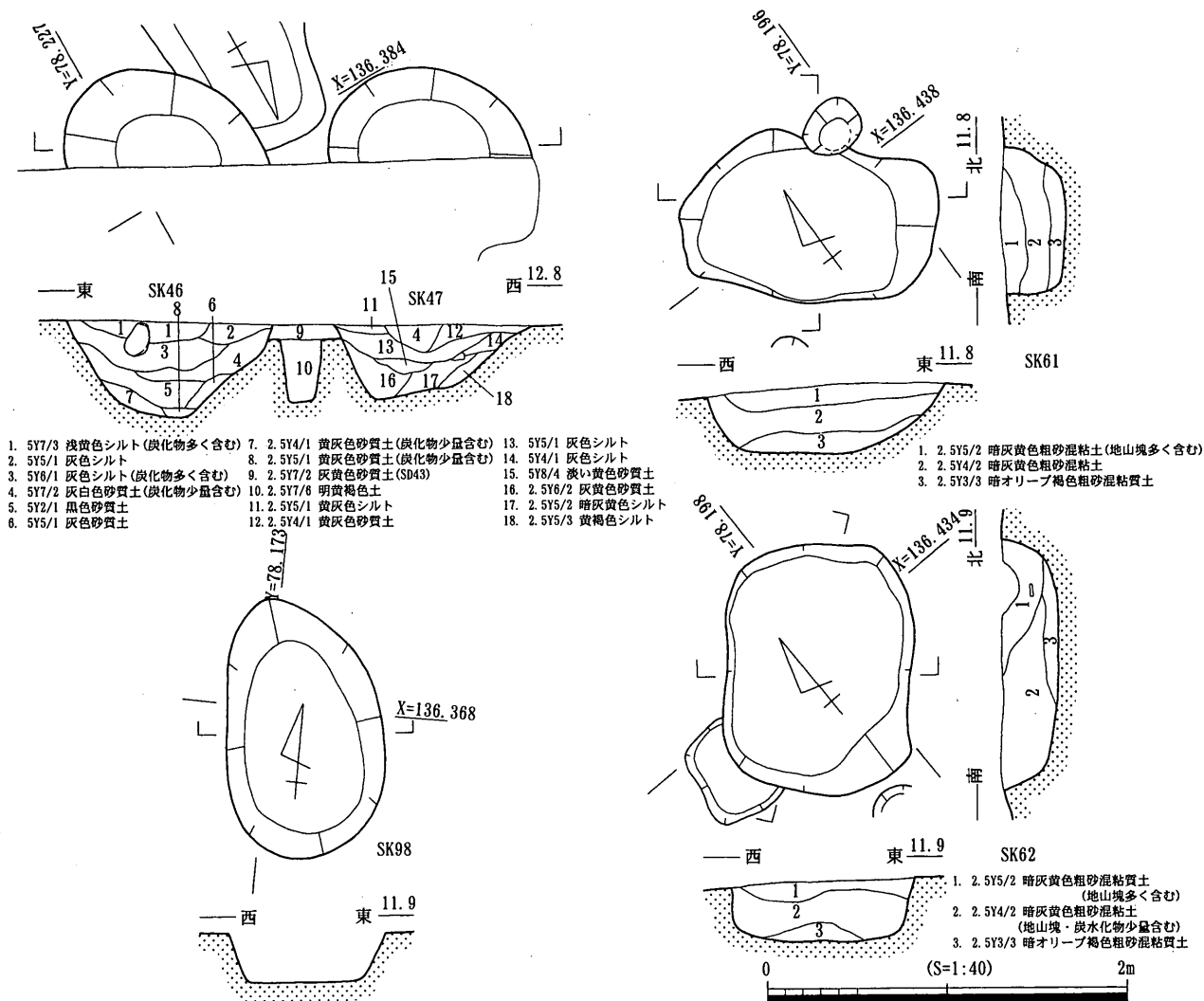
出土遺物は、SK 16 より瓦質焼成の焙烙口縁部 324 が、SK 17 より土師質土器鍋口縁部片 325 がある。いずれも小片であるが、324 の焙烙口縁部より両遺構とも 19 c 以降の所産である可能性が高い。

I区SK 20

I -3区 X = 136.418 Y = 78.245 付近で検出した土坑である。長軸 2.0 m 短軸 1.6 m 程の歪な隅丸長方形を呈し、逆台形の断面に 0.15 m 程の残存深度を見る。出土遺物は見られないが、埋没土の特徴



第58図 I区 SK09. 10. 16. 17. 20. 28平・断面図



第59図 I区 SK46. 47. 61. 98. 62平・断面図

から中世以降の所産と推定される。

I区SK 28

I -4区X = 136.399 Y = 78.231 付近で検出した土坑である。北半部が予備調査トレンチによって破壊されているが、現状で一辺が1 m程の方形土坑と推定される。断面形は逆台形であり、東西両壁面と底面に黄色の粘土が貼り付けられていた。出土遺物には上層から石材不明の砥石 331 がある。正確な時期決定には至らないものの、埋没土の状況から近世以降の所産である可能性が高い。

I区SK 46.47

I -5区北部X = 136.384 Y = 78.227 付近で並んで検出された土坑である。いずれも北側部分が予備調査トレンチによって破壊されているが、共に直径 1.1 m程の円形を呈し逆台形の断面形をもつ。SK 46は0.5 m程の残存深度を測り、埋没土中に多くの炭化物を交える。SK 47は0.4 m程の深さがありシルト～細砂を基調とした埋没土が認められた。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴から見て中世以降の所産である可能性が高い。

I 区 S K 61

I -7 区 X = 136.438 Y = 78.196 付近で検出した土坑である。長軸 1.4 m 短軸 0.9 m 程の隅丸長方形を呈し、逆台形の断面に 0.4 m 程の残存深度を測る。埋没土中から、底部外面に回転糸切り痕を止める土師質土器杯底部 317 が出土した。

I 区 S K 62

I -7 区 X = 136.434 Y = 78.198 付近で検出した土坑である。長軸 1.4 m 短軸 0.9 m の隅丸長方形を呈し、逆台形の断面に 0.35 m 程の残存深度を測る。埋没土中から土師質土器杯 316.318、東播系須恵器捏鉢口縁 323、土師器甕? 胴部片 328、須恵器高台杯 320 が出土している。これらの内、8 c 代の所産と考えられる須恵器高台杯 320 は明らかに混入品であり、土師質土器杯 316.318 の法量や東播系須恵器捏鉢の口縁部形態から、本遺構が 14 c 後半に形成されたものと見ることができる。

I 区 S K 68

I -8 区 X = 136.438 Y = 78.188 付近で検出した土坑である。長軸 1.5 m 短軸 0.9 m 程の楕円形を呈し、0.3 m 程の残存深度を測る。埋没土は粗砂粒を多く交える黒灰色粘土の単一層であり、時期決定可能な出土遺物は見られない。埋没土の特徴から、中世以降の所産と推定される。

I 区 S K 69

I -8 区 X = 136.436 Y = 78.189 付近で検出した大形土坑である。直径 2.2 m 程の歪な円形を呈し、0.1 m 程の残存深度を測る。埋没土中には直径 0.1 m 程の焼土塊が含まれるが、底面に被熱を止める箇所は見られない。二次的に投棄されたものと思われる。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴から中世以降の所産と考えられる。

I 区 S K 70

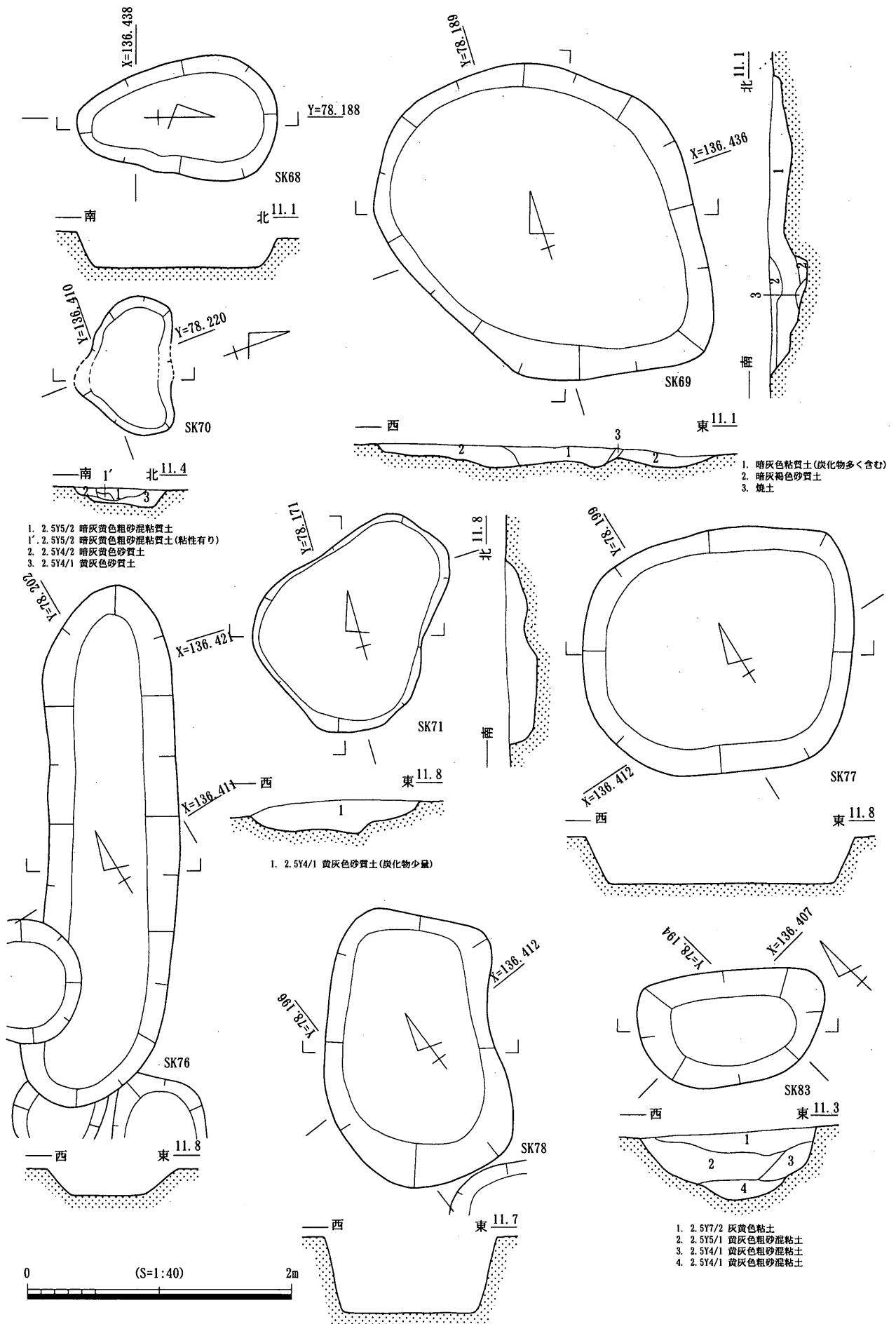
I -8 区 X = 136.410 Y = 78.220 付近で検出した土坑である。長軸 1.0 m 短軸 0.7 m を測る歪な楕円形を呈し、0.15 m の残存深度を見る。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴から中世以降の所産と判断される。

I 区 S K 71

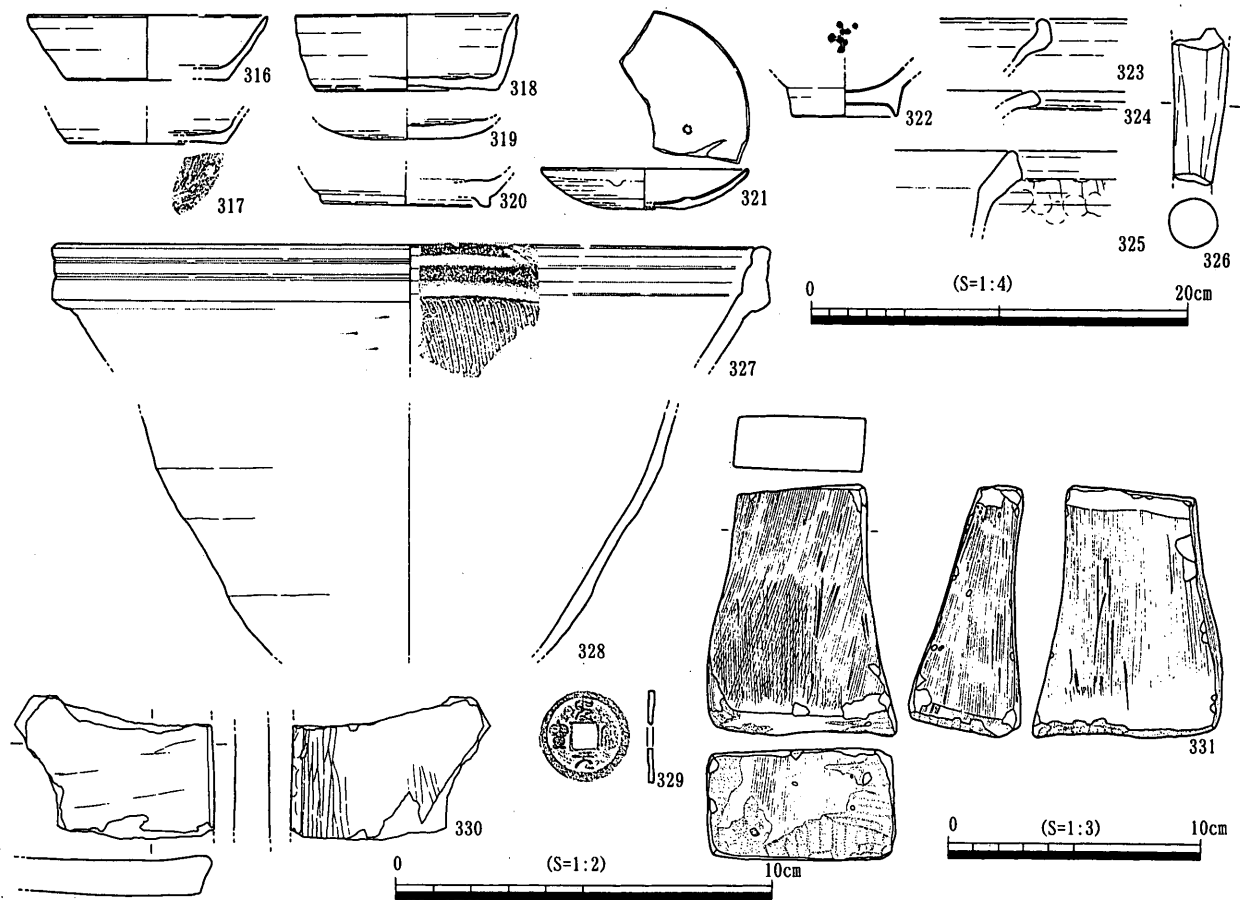
I -8 区 X = 136.421 Y = 78.171 付近で検出した土坑である。長軸 1.6 m 短軸 1.2 m 程の歪な楕円形を呈し、深さ 0.2 m 程を測る。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴から中世以降の所産と考えられる。

I 区 S K 76

I -11 区 X = 136.411 Y = 78.202 付近を中心に検出した舟形土坑である。長さ 3.8 m 幅 1.0 m 深さ 0.2 m 程の規模を測り、埋没土は粗砂粒を多く交える黒灰色粘質土の単一層である。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴から判断して中世以降の所産である可能性が高い。



第60図 I区 SK68~71. 76~78. 83平・断面図



第61図 I区 SK出土遺物実測図(古代～近世)

I区SK 78

I -11区X = 136.412 Y = 78.196 付近で検出した土坑である。長軸 2.0 m短軸 1.3 m程の歪な長方形を呈し、逆台形の断面に 0.5 m程の残存深度を測る。埋没土は粗砂を多く交える暗灰色粘質土を主体とする。時期決定可能な出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴から中世以降の所産と推定される。

I区SK 83

I -11区X = 136.407 Y = 78.194 付近で検出した長軸 1.4 m短軸 0.9 m程の歪な長方形土坑である。断面形はU字状を呈し、黄灰色粘質土を主体とした4層の埋没土が見られる。時期決定可能な出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴から中世以降の所産である可能性が高い。

I区SK 98

I -11区X = 136.368 Y = 78.173 付近で検出した土坑である。長軸 1.4 m短軸 0.9 m程の楕円形を呈し、0.2 m程の残存深度を測る。時期決定可能な出土遺物は見られなかったが、埋没土が暗灰色粘質土を主体とすることから、中世以降の所産であると思われる。

I区SD 01

掘立柱建物が密集する I -1区北東部で検出した小規模な溝である。上面幅 0.5 m深さ 0.15 mを測り

断面形はU字形を呈し、東西方向に3 m程にわたって検出している。出土遺物は見られないものの、周辺の中世期(14～15 c初頭)遺構とほぼ同一の埋没土をもつことから、当該期の遺構と判断する。

I区SD02

I-1区北東部で検出した遺構である。溝としての略号を与えているものの、西側の立ち上がりが不明確なことや平面形から、落ち込みとして把握されるものかもしれない。残存深度は0.15 m程を測り、後述する土器・銭貨埋納遺構であるSX02は、本遺構内に含まれる。時期決定可能な出土遺物は見られないが、SX02出土遺物が14 c後半を示すことから、本遺構の廃絶時期を同時期に比定しておきたい。

I区SD06

I-1区北東部で検出した溝である。主軸方向は周辺の掘立柱建物のそれに合致し、概ね南北方向で延長4 mにわたって検出している。北端部は土坑状に膨らみ、上面幅1.0 m程を測り上述したSD02を切り込む。南半部では上面幅0.4 m程の小溝となり途切れる。出土遺物に土師質土器杯335が見られることから、14 c後半頃の廃絶が想定される。

I区SD08.09

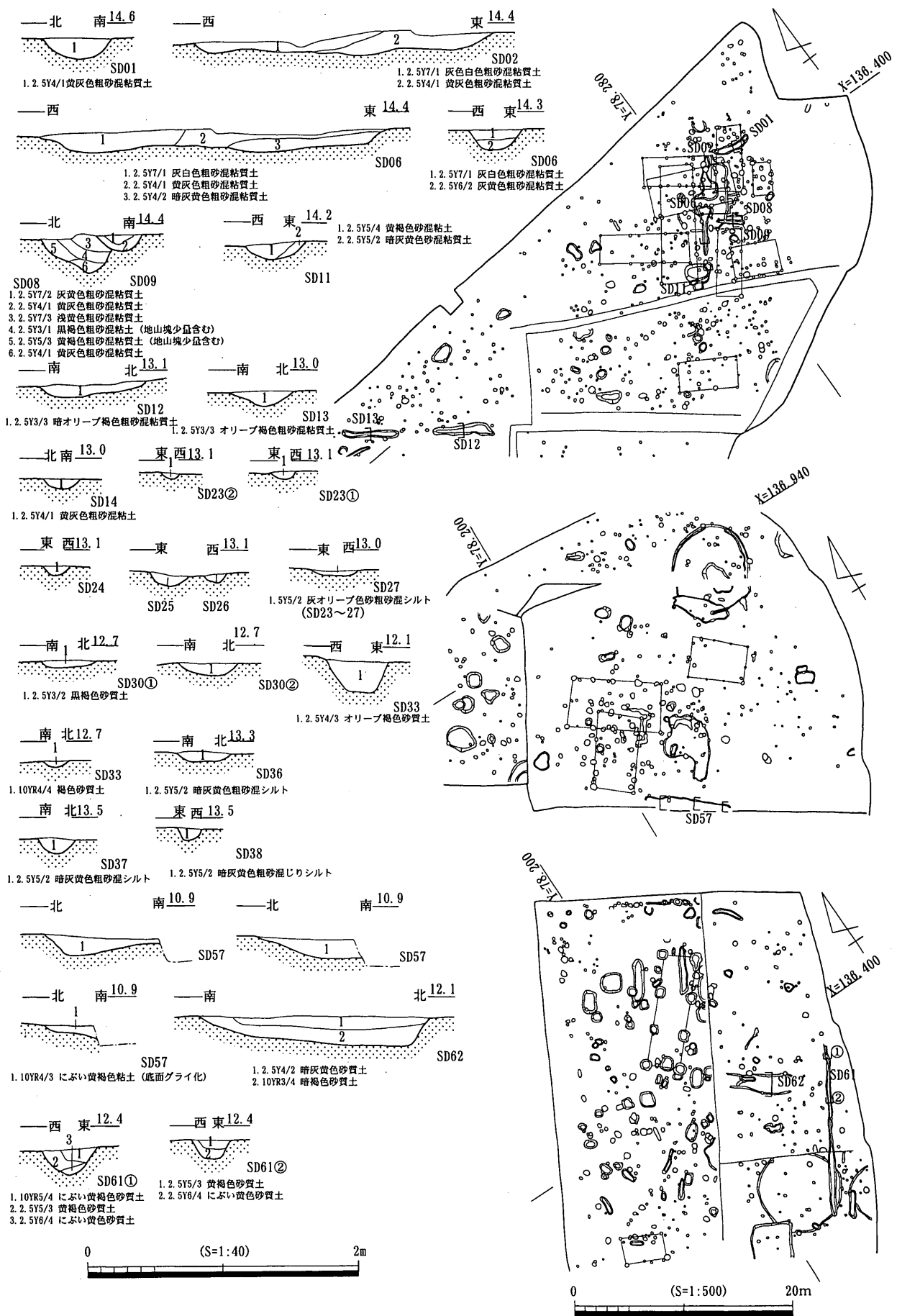
I-1区北東部で検出した小溝である。位置的には、先のSB07の北側梁間に隣接し、方向も同建物に合致している。SD08は上面幅0.5 m深さ0.25 m程の規模を測り、南側の立ち上がりはSD09によって壊される。SD09は上面幅0.3 m深さ0.15 m程の小溝である。SD09は東西方向2.5 m程にわたって検出しているおり、この範囲がSB07の梁間の長さに合致することから、先の位置関係を含めて考えるとSB07に伴い開削された可能性が高い。時期決定可能な出土遺物は見られないが、SB07と同じ14 c末～15 c初頭の廃絶時期が想定される。

I区SD11

I-1区北東部で検出した小溝である。上面幅0.4 m深さ0.15 m程の規模を測り、SK10の南・東側を切り込むようにL字形にクランクする形で確認された。時期決定可能な出土遺物は見られないが、近世19 c頃の埋没が想定されるSK10を切り込むことから、これ以降に形成されたものとする事が出来る。

I区SD12.13

I-2区北西部で検出したほぼ同一と判断される溝である。両遺構ともに、上面幅0.5～0.8 m深さ0.15 mを測り断面形は緩やかな逆台形を呈する。現代の耕作土のほぼ直下において検出していることから、上面に少なからずの削平を受けているものと見られる。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴はI-1・2区で確認している14 c～15 c初頭の諸遺構と合致する特徴をもつ。方向も同時期の掘立柱建物の主軸方向と合致することから、同時代に掘開されたものと推定される。また、I-1区とI-2区掘立柱建物群を2分する位置に存在することから、屋敷地等の区画としての意味合いをもつ溝である可能性も考えられる。



第62図 I 区 SD01他平・断面図

I 区 S D 23 ~ 27

I -2 区南西部で検出された小溝群である。いずれも上面幅が 0.1 ~ 0.3 m 深さ 0.1 m 程の小溝であり、埋没土の特徴は共通したものとなっている。4 m 四方の範囲で固まって検出し規模と埋没土が類似しながら、方向は概ね南北方向を示すが厳密に揃うものではない。規模的な特徴から、耕作に伴う畝間の溝の可能性が高いが、方向性がバラツキを見せることから、性格付けが難しいものとなっている。時期決定可能な出土遺物は見られないが、周辺の中世期の諸遺構とほぼ同一の埋没土をもち、S D 23 から土師質土器足釜胴部片 340 の出土を見たことから、14 ~ 15 c 初頭に形成された小溝群と推定しておく。

I 区 S D 30

I -3 区西部で検出した小溝である。上面幅 0.4 m 深さ 0.15 m を測り、一部途切れながら延長 0.5 m にわたって検出した。方向は概ね南西から北東方向を示すが、周囲に関連する建物等の遺構を見ることができないことから、性格付けが難しい。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴から 14 ~ 15 c 初頭に掘開されたものと推定しておく。

I 区 S D 33.36.37.38

I -4 区北西部で検出した小溝群である。いずれも上面幅 0.2 ~ 0.3 m 深さ 0.15 ~ 0.3 m 程の長さ 1.5 m 程度で終息する小規模なものである。規模的に建物等に付随する遺構と見られるが、周囲に関連する可能性のある遺構が見られないことから、性格付けが難しい。出土遺物は見られないが、埋没土の特徴から 14 ~ 15 c 初頭の所産と推定しておく。

I 区 S D 57

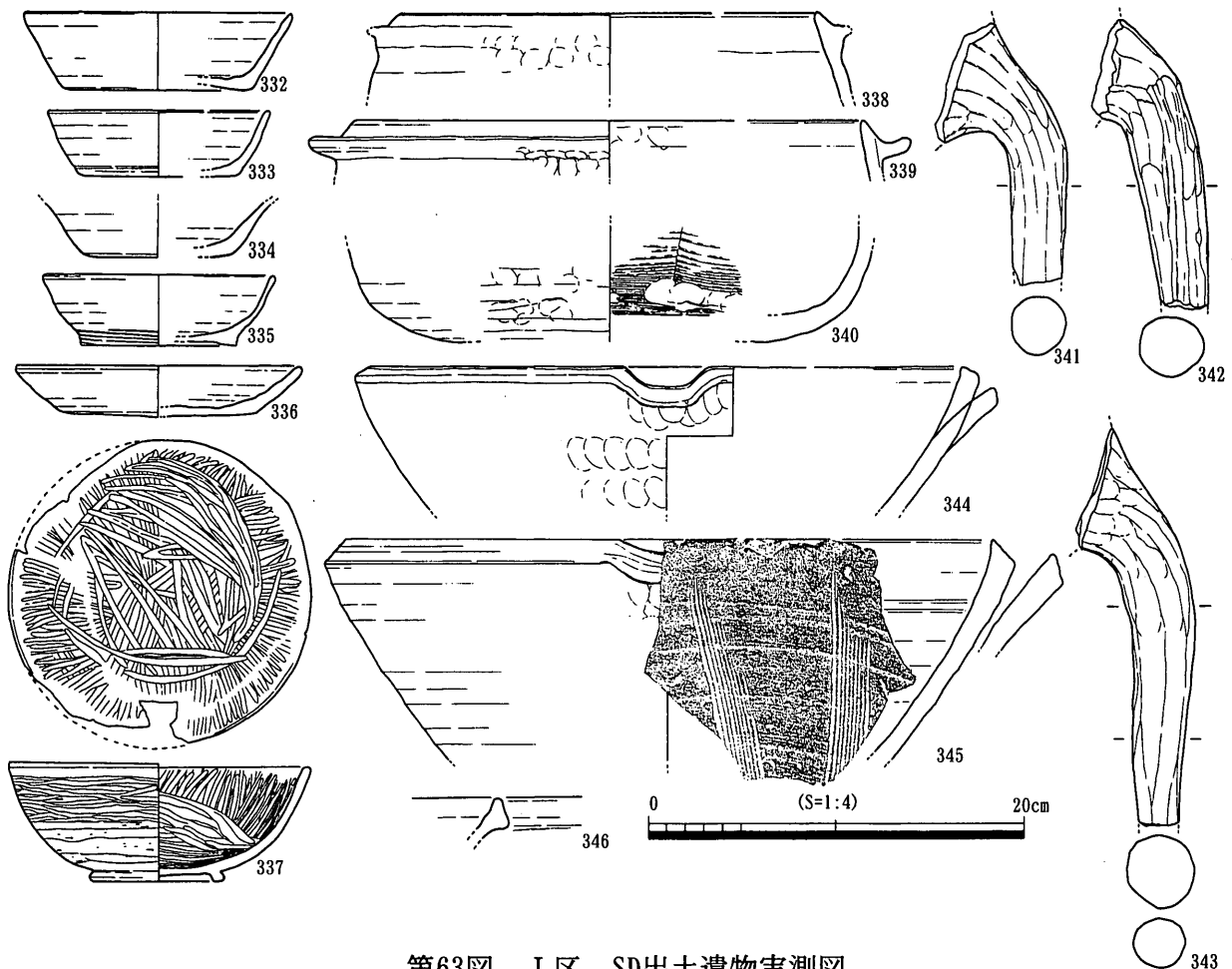
I -7 区南部で検出した溝である。南側の立ち上がり調査区外へ延びるが、上面幅 0.9 m 深さ 0.2 m 程の規模を測り、延長 8 m にわたって検出された。埋没土中から時期決定可能な遺物は見られないが、検出位置が、S B 17.18 等の掘立柱建物に隣接することと、方向がこれらの建物に合致することから、何らかの関連が想定される。時期的には、S B 17.18 と同様の 14 c 末 ~ 15 c 初頭の年代が与えられるものと思われる。

I 区 S D 62

I -9 区西部で検出した溝である。上面幅 1.7 m 深さ 0.2 m 程の規模を測り、東西方向 0.7 m にわたって確認された。東西両端で約 0.2 m の比高差があり、東から西への流下方向が想定されるが、断面観察で流水状態は観察されなかった。出土遺物に土師質土器杯 332.334、同足釜口縁部 338.339、同脚部片 341.343 が見られることから、14 c 後半 ~ 末に開削された可能性が指摘できる。なお、流下方向は I 区の当該期の掘立柱建物とほぼ合致するものである。

I 区 S D 67

I -9.10 区において検出した小溝である。上面幅 0.3 ~ 0.4 m 深さ 0.15 ~ 0.2 m を測り、I -9.10 区東側を 16 m 程にわたって直線的に延びる。出土遺物は、土師質土器杯 333、同播鉢 344.345、同足釜脚部片 342 が見られ、14 c 後半代の廃絶が想定できる。性格付けについては不明な点が多く残るが、



第63図 I区 SD出土遺物実測図

本溝の方向はI区の当該期の掘立柱建物とほぼ合致したものとなっている点は注意される。

I区SD 66

I-11区中央部で検出された上面幅0.3m深さ0.2mを測る小溝である。断面形はU字形を呈し、総延長4mにわたって検出された。出土遺物に底面から出土した完形の内黒の黒色土器碗337が見られることから、10c代の遺構と推定されるが、周辺にSD 69を除いて当該期の遺構が確認できないことから、性格付けの難しいものとなっている。

I区SD 69

I-11区南部で検出された上面幅0.25m深さ0.1m程の溝である。出土遺物に10c代の所産と見られる土師質土器杯336が見られることから、廃絶時期の一端を伺う事ができる。しかし、上述したSD 66を除いて当該期の遺構が分布しないことから、本溝の性格付けは難しい。

I 区 S X 01

I -1 区 X = 136.442 Y = 78.282 付近の掘立柱建物が集中する部分で検出した土器・銭貨埋納遺構である。掘り方そのものは確認できず、土器・銭貨等の集中は S D 02 の中の一部に認められた。銭貨 4 枚の上に北西から南東方向に完形の土師質土器杯を伏せた状態で 5 個体と 352.353 の同小皿を並べており、356 の土師質土器鉢は破片で杯類に含まれた状態で、354.355 の土師質土器足釜脚部はやや離れた位置から単独で出土した。出土状況や周辺の掘立柱建物との位置関係から、地鎮に関係した遺構と推測される。

347 ~ 350 は土師質土器杯で、底部はすべてヘラ切りされている。出土状況が一括高いことから 347 ~ 349 の扁平な一群と 350.351 の深手の一群が共存することとなる。352.353 は土師質土器小皿であり、底部はヘラ切りである。354.355 は土師質土器足釜脚部片。356 は土師質土器鉢? の口縁部片である。357 ~ 359 は永楽通寶。360 は元祐通寶である。361 は不明鉄器であり、土師質土器杯・小皿の下層から出土を見た。

本遺構は、共伴する銭貨の年代から 15 c 初頭以降の年代が想定される。また、土師質土器杯・小皿の形態から 15 c 初頭~前半に形成されたものである可能性が高い。

I 区 S X 02

I -1 区北東部 X = 136.439 Y = 78.284 付近で検出した土器埋納遺構である。長軸 0.65 m 短軸 0.5 m 程の楕円形の土坑内部南側に、土師質土器小皿 3 個体、同杯 2 個体を埋置する。また、西側の杯内部に皿 1 個体を東側の杯内部に皿 2 個体を約めていた。本遺構には銭貨・鉄器類は伴わない。出土状況や周辺の掘立柱建物の存在から見て、地鎮的な色彩が濃い遺構と見られる。

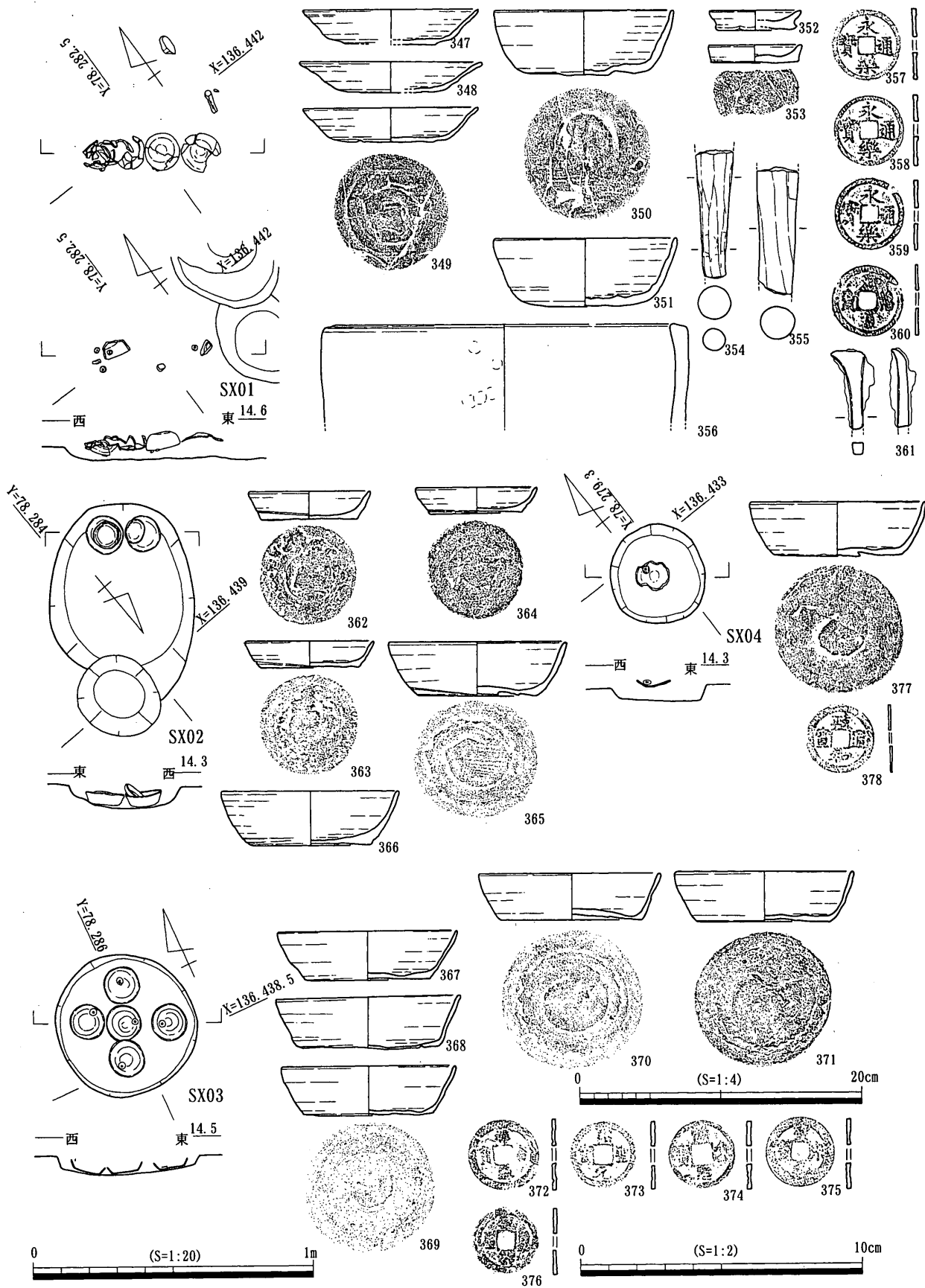
362 ~ 364 は土師質土器皿である。いずれも底部外面に回転ヘラ切り痕が確認されるが、底部を越えて体部にもその始点となる痕跡を留める。365.366 は土師質土器杯。365 の底部外面には板状圧痕と、体部外面には小皿と同様にヘラ切りの始点となる痕跡が刻まれる。小皿の法量が、先の S X 01 と比べて大振りであることから、14 c 後半頃の年代を想定できるであろう。

I 区 S X 03

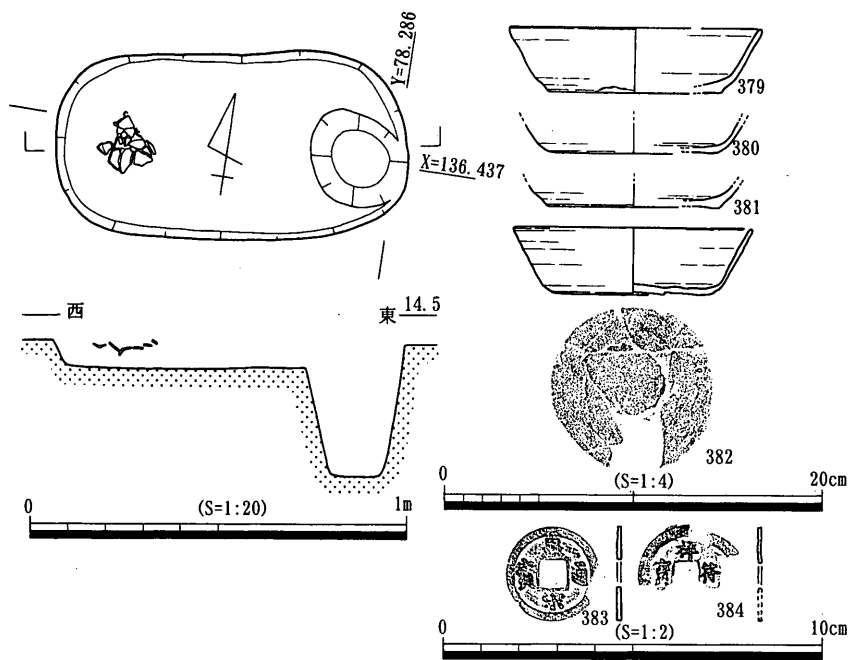
I -1 区北東部 X = 136.438 Y = 78.286 付近で検出した土器・銭貨埋納遺構である。直径 0.5 m 程の円形を呈する土坑内に、完形の土師質土器杯 5 個体を十文字に並べ、杯の内部に一点の銭貨を埋置する。出土状況や遺物組成から、地鎮的な色彩が濃い遺構と見られる。本遺構が S B 02 内部中央に位置しているが、出土遺物の様相からは、S B 02 の廃絶時期が後出するようである。

367 ~ 371 は完形の土師質土器杯であり、底部はすべてヘラ切り。372 は祥符通寶 (初鑄年 1009)、373 は紹聖元寶 (初鑄年 1094)、374 は□□元寶、375 は聖宋元寶 (初鑄年 1101) である。376 は鑄上がりが悪いことと錆化が著しく判読できない。

土師質土器 367 ~ 371 は底部が薄底化している点は、先に見た S X 02 や後述する S X 04 出土のものとは異なる。やや後出するものと見てよいだろう。従って本遺構の年代を 14 c 末 ~ 15 c 初頭と推定しておきたい。



第64図 I区 SX01~04平・断面図及び出土遺物実測図



第65図 I区 SX05平・断面図及び出土遺物実測図

法量・形態ともにSX02出土の365. 366に酷似する。378は政和通寶(初鑄年1111)である。本遺構は、土師質土器杯の形態から14c後半に形成されたものとする。

I区SX05

I-1区X=136.437 Y=78.286付近で検出した土器・銭貨埋納遺構である。長軸9.5m短軸0.5m程の楕円形の土坑西半部に土師質土器杯4個体と銭貨2点を埋置する。382のみ完形でうつ伏せの状態で見出された他はすべて破片の状態で固められていた。銭貨のこの破片の中から出土している。遺構内東側にはSB02の隅柱である柱穴104が穿たれているが、調査段階で埋没土の際立った差異は見られなかった。近接する他のSX01～04に比べて、埋置状況や土師質土器の完存率が悪いが、銭貨と組み合わせる遺物組成から地鎮的な色彩の濃い遺構と思われる。

379～382は土師質土器杯である。いずれも底部はヘラ切りされており、器厚は薄い。383は皇宋通寶(初鑄年1038)、384は祥符通寶(初鑄年1009)である。土師質土器杯の形態から、本遺構は14c末～15c初頭に形成されたものと見られる。

I区SX06

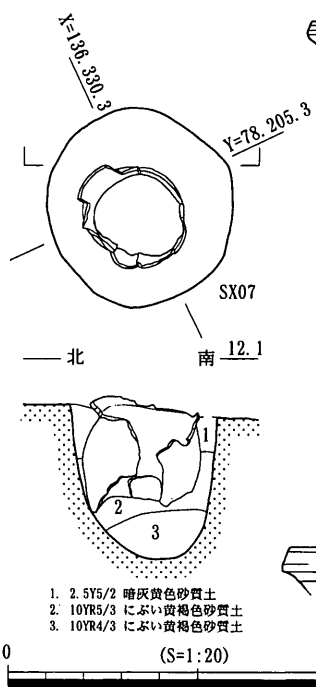
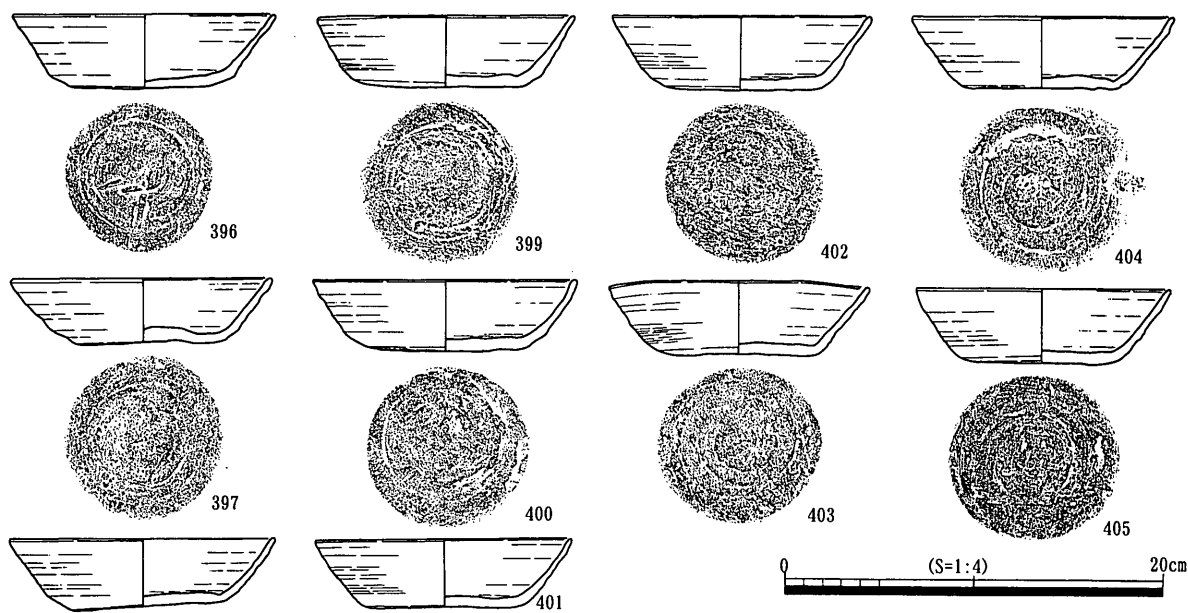
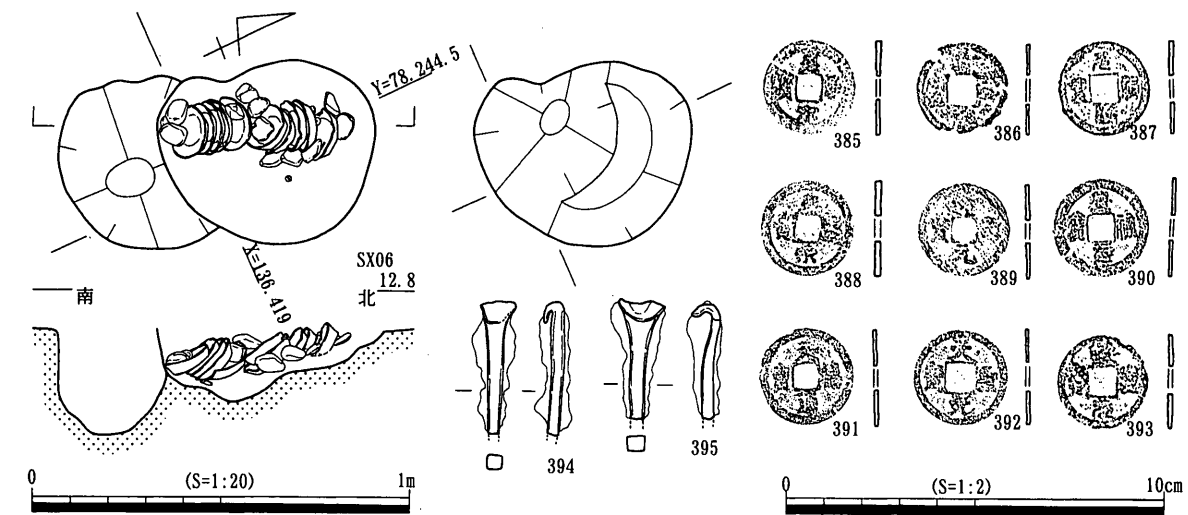
I-2区X=136.419 Y=78.244付近で検出した土器・銭貨・鉄製品埋納遺構である。長軸5.5m短軸4.5mを囲む柱穴に似た掘り方の中に、土師質土器杯10個体、銭貨9枚、鉄製品2個体を埋置する。土師質土器杯はすべて完形の状態状態で垂直方向に立てた状態で一直線に並べ置き、砂岩礫を噛ませることにより安定化を図る。銭貨は杯の間を中心に見出されており、1枚のみやや離れた位置から単独で出土した。釘と考えられる鉄器は、銭貨と同様に杯の間に置かれていた。出土遺物の状態や組成から地鎮的な色彩が濃い遺構と思われる。

396～405は土師質土器杯であり、口径13.5～14.0cm器高3.4～3.8cm程にまとめ、体部外面下半に回転ナデによる段をもつなど共通する点が多い一群である。底部すべてヘラ切りである。銭

I区SX04

I-1区X=136.433 Y=78.279付近で検出した土器・銭貨埋納遺構である。直径0.35m程の円形を呈する柱穴内に土師質土器杯1個体とその内部に銭貨1点を埋置している。出土状況と遺物組成から、地鎮的な色彩が濃い遺構と思われる。

377は完形の土師質土器杯である。底部はヘラ切りされており、



1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土

第66図 I区 SX06・07平・断面図及び出土遺物実測図

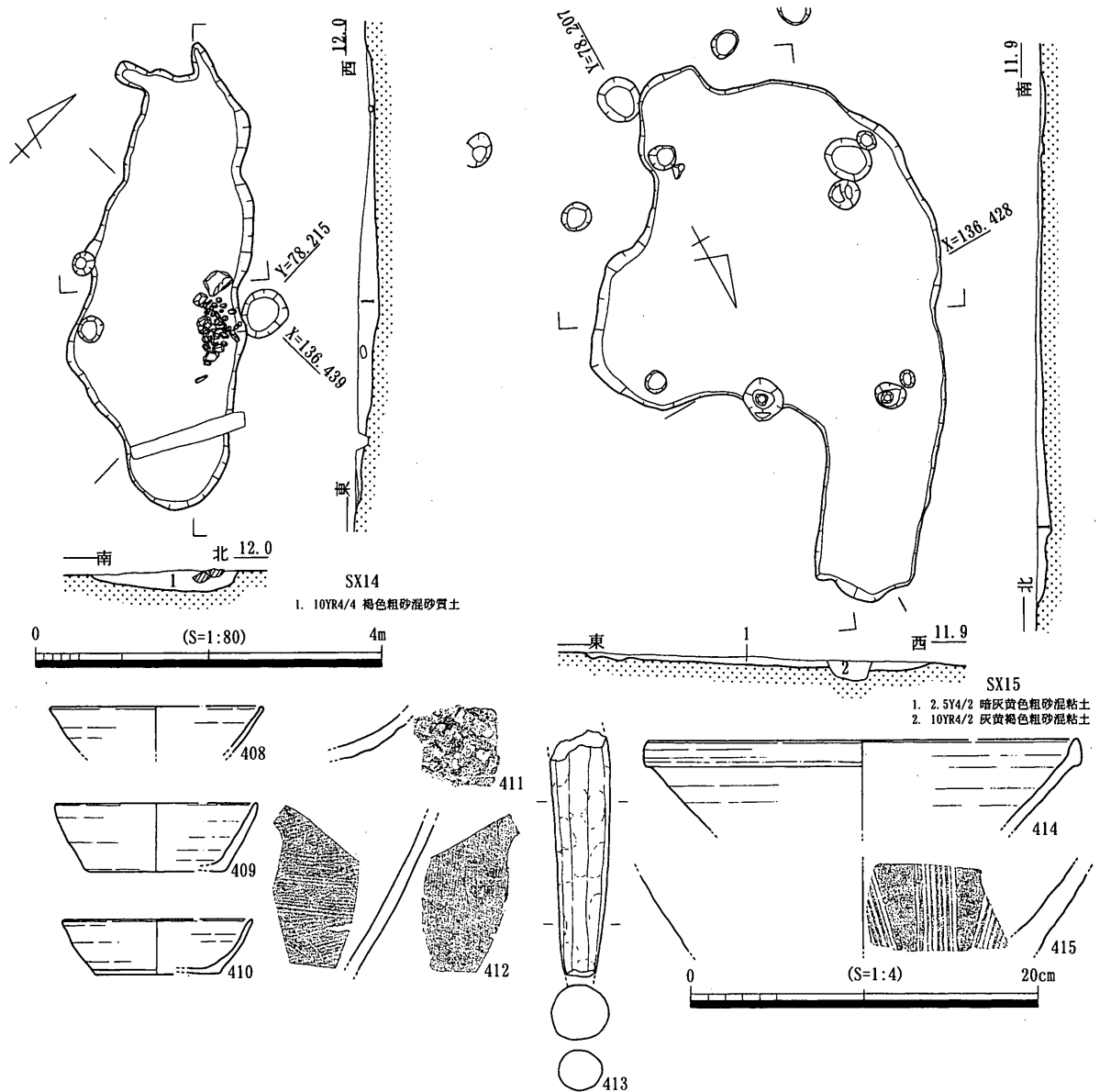
貨は、385.388 皇宋通寶 (初鑄年 1038)、386 □□通寶、387 元祐通寶 (初鑄年 1086, 折二 1093)、389 □□元寶、390 景祐元寶 (初鑄年 1034)、391 天禧通寶 (初鑄年 1017)、392 天聖元寶 (初鑄年 1023)、393 □□元寶が見られ、判読可能なものは北宋銭で占められる。394.395 は折り返しをもつ点から見て鉄釘の可能性が高い。

土師質土器杯の法量・形態から先の S X 01 ~ 05 出土のものとは比べて古相を示すと考えられることから、本遺構の年代を 14 c 前半頃と推定したい。

I 区 S X 07

I - 8 区 X = 136.330 Y = 78.205 付近で検出した土器埋設遺構である。直径 0.35 m 深さ 0.4 m U 字形の断面をもつ掘り方に、底部を打ち欠いた土師器甕 406 を埋設する。底部を打ち欠いていることから、土器井戸の可能性はあるが、透水層を意識して掘開されたものではない。

406 は土師器甕である。外面に密な縦ハケを施し、内面の横ハケは丁寧なナデ調整によって消去する。



第67図 I 区 SX14・15平・断面図及び出土遺物実測図

形態から 10 c 頃の所産と見られる。407 の東播系須恵器鉢は上層から出土し、口縁部形態から 13 c 後半の可能性があり、土師器甕に比べると年代的にかなりの隔たりがあることから、混入品と考える。

I 区 S X 14

I -7 区 X = 136.439 Y = 78.215 付近で検出した不定形落ち込みである。長軸 4.8 m 短軸 2.0 m 程の楕円形を呈し、0.1 ~ 0.2 m 程の残存深度を測る。立ち上がりは極めて緩やかであり、中央部南側の埋没土中に土器・砂岩礫の集積が確認できる。出土遺物には土師質土器杯 410、土師質土器足釜底部片 411、同脚部片 413、備前焼甕胴部片 412、産地不明の須恵質の播鉢胴部片 415 が見られる。土師質土器杯 410 の法量・形態から、本遺構は 14 c 代に形成されたものと考えられる。

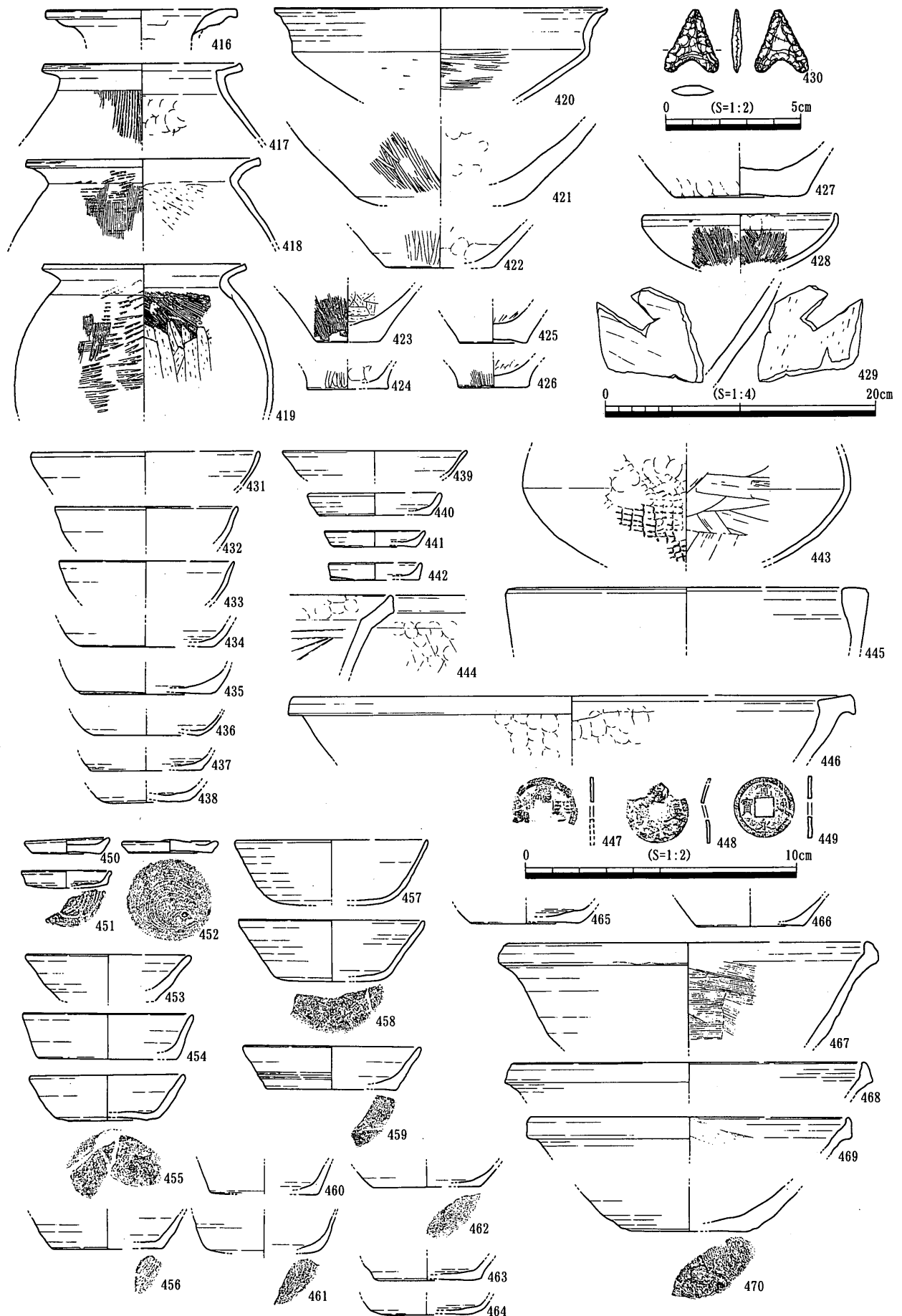
I 区 S X 15

I -7 区 X = 136.428 Y = 78.207 付近で検出した不定形落ち込みである。残存深度が 0.1 m に満たないことや、平面形が極めて歪であることから、検出面の凹凸である可能性が高く人的に形成されたものではない。出土遺物には、土師質土器杯 408.409、東播系須恵器捏鉢口縁部片 414 等の 14 c 代を中心とした遺物が見られる。

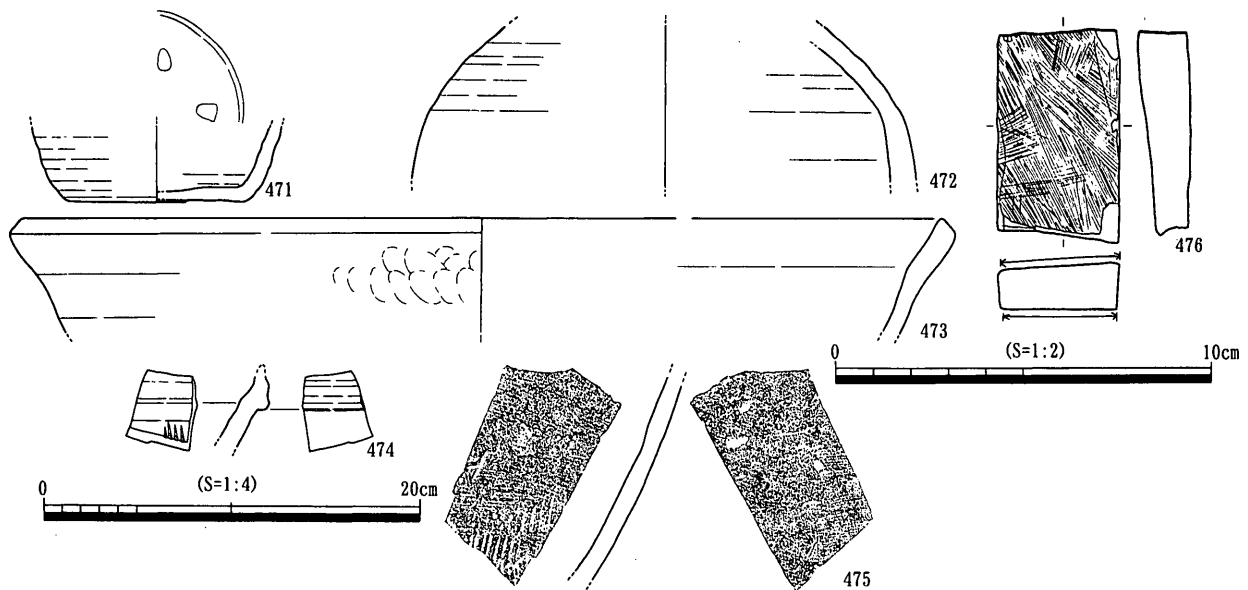
I 区柱穴出土遺物

416 ~ 470 の遺物は、明確に建物として復元できなかった柱穴から出土した一群である。416 は柱穴 2309 から出土した弥生後期後葉段階の長頸壺口縁部。417.418 は柱穴 1489 から出土した弥生後期後葉の甕口縁部であり、417 は胎土・調整から高松平野北東部地域からの搬入土器である。419 は柱穴 2206 からの弥生後期後葉段階の甕。420 は柱穴 2097 から出土した弥生後期後葉の高杯。胎土・調整から見て高松平野北東部地域からの搬入品と見られる。421 は柱穴 1294 出土の弥生中期と考えられる壺底部片。422 は柱穴 2097 出土の弥生後期の壺底部片。423 は柱穴 2000 出土の甕底部片。424 は柱穴 2097 出土の弥生後期後葉の所産と考えられる甕底部片であり、胎土・調整から高松平野北東部地域からの搬入品である。425 は柱穴 1863、426 は柱穴 2143 から出土した弥生後期後葉段階の甕底部片。427 は柱穴 2116 から出土した壺底部片であり、安定感のある形態から弥生中期前葉の所産と思われる。428 は柱穴 2007 から出土した弥生後期後葉の小形鉢である。429 は柱穴 2041 から出土した大形鉢胴部片。430 は柱穴 415 から出土した凹基無莖式石鏃である。

431 は柱穴 72 出土の土師質土器杯口縁部。432 は柱穴 142 からの土師質土器杯口縁部である。433 は柱穴 92 出土の土師質土器杯。434 は柱穴 217 から出土した土師質土器杯底部。435 は土師質土器杯底部片であり、柱穴 41 からの出土。436 は柱穴 203 からの土師質土器杯底部片。437 は柱穴 294 出土の土師質土器杯底部。438 は柱穴 47 から出土した土師質土器杯底部片。436 のみ糸切りの可能性がある他はすべてヘラ切りである。439 は皿化した土師質土器杯口縁部であり、15 c 代の所産と見られる。440 は柱穴 108 から出土を見た土師質土器皿で、法量・形態から 12 c 代に位置づけられる。441 は柱穴 114 からの土師質土器小皿。442 は柱穴 88 出土の土師質土器小皿であり、体部外面にヘラ切りの始点となる痕跡を止める。443 は柱穴 96 出土の土師質土器足釜胴部片。444 は柱穴 72 出土の土師質土器鍋口縁部。445 は柱穴 1272 出土の土師質土器鉢口縁部で、近世の所産と思われる。446 は土師質土器鍋口縁部であり、柱穴 268 からの出土。



第68図 I区 SP出土遺物実測図 その1



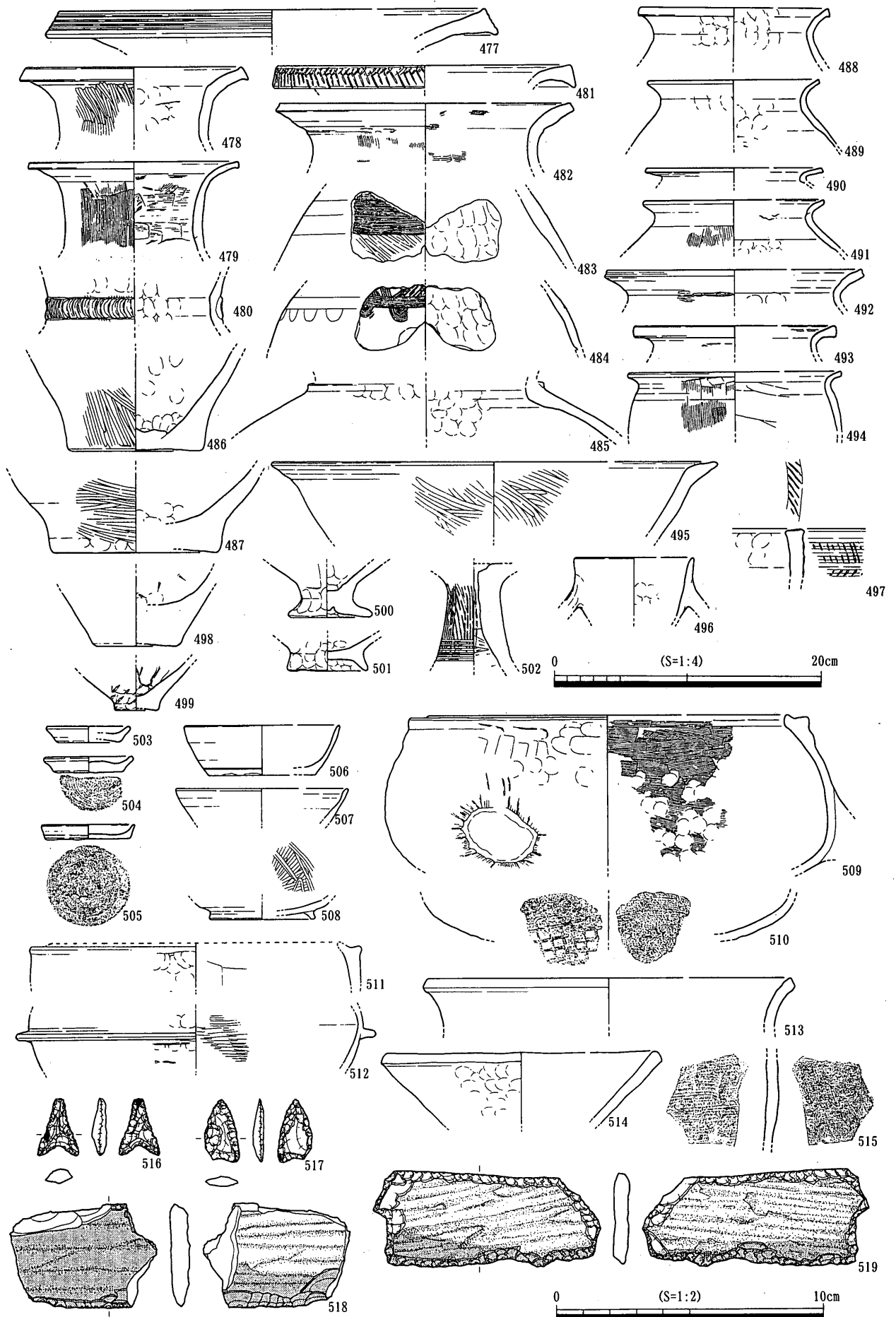
第69図 I区 SP出土遺物実測図 その2

450はS B 17を構成する柱穴1833から出土した土師質土器小皿であり、レイアウトミスで本図に掲載しているものである。451は柱穴2160出土の土師質土器小皿であり、底部外面に回転糸切り痕を止める。452は柱穴1927出土の底部外面に回転糸切り痕が見られる土師質土器小皿である。453は柱穴2307出土の土師質土器杯。454は柱穴2324出土土師質土器杯。455は底部外面に回転糸切り痕を止める土師質土器杯であり、柱穴1889からの出土。456は柱穴1852出土の土師質土器杯の小片であり、僅かに残る底部外面に回転糸切り痕が見られる。457は柱穴1891出土土師質土器杯。458は柱穴1884出土の土師質土器杯であり、底部外面は回転糸切りによって成形される。459は柱穴2324出土の土師質土器杯であり、体部外面に2条沈線と底部外面に回転糸切り痕を止める。460は柱穴2324出土の土師質土器杯小片。461は柱穴2066出土の底部外面に糸切り痕が見られる土師質土器杯底部片。462は柱穴1822出土土師質土器杯底部片。463は柱穴1913出土の土師質土器杯底部片。464の土師質土器杯底部片は柱穴1924からの出土。465はS B 17を構成する柱穴1834から出土した土師質土器底部片であり、レイアウトミスにより本図に掲載しているものである。466は柱穴1950から出土した土師質土器杯底部。467は柱穴1950出土の東播系須恵器捏鉢口縁部である。468の東播系須恵器捏鉢口縁部は柱穴2295出土。469は柱穴1884出土の東播系須恵器捏鉢口縁部。470は底部外面に糸切り痕を止める柱穴2286出土の東播系須恵器捏鉢底部片。

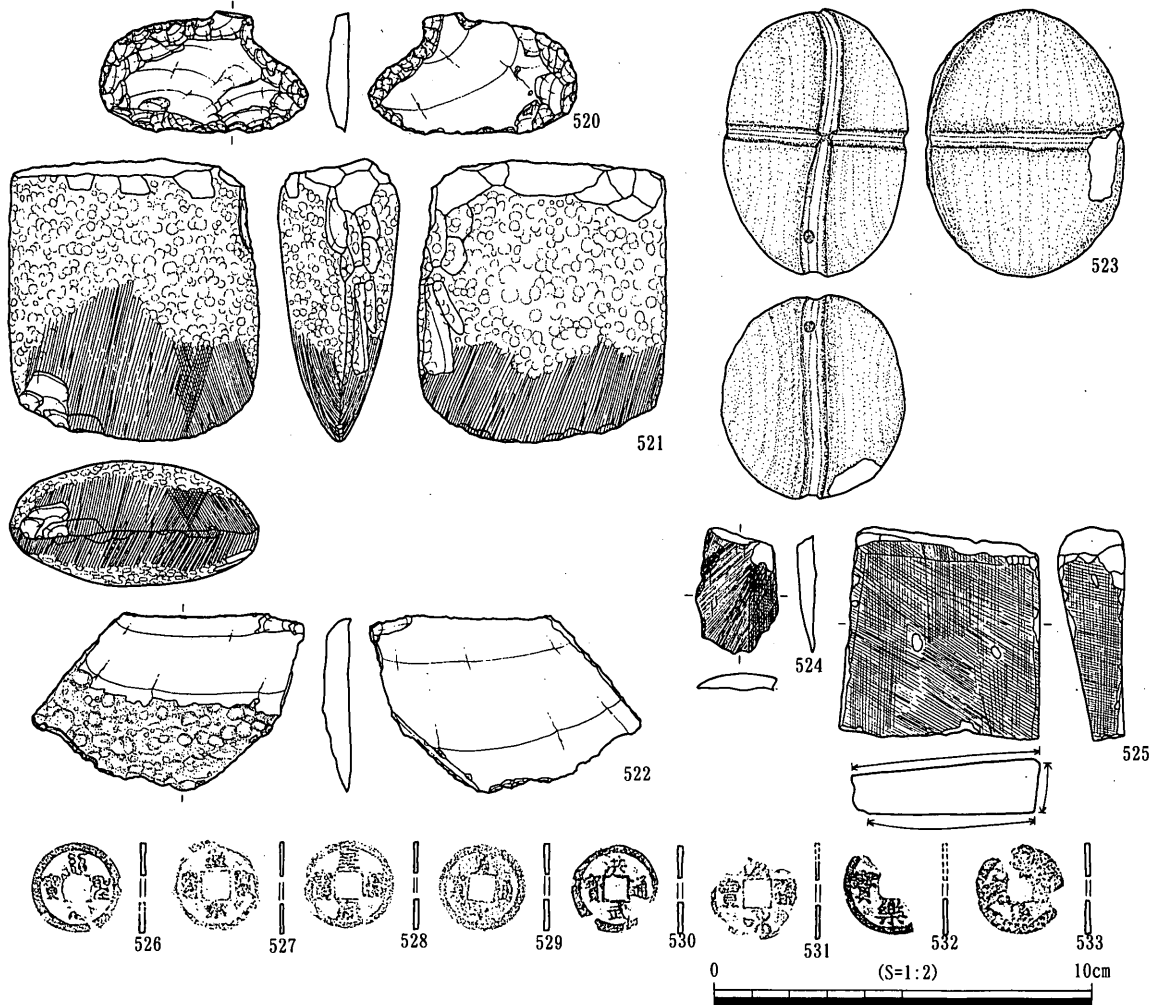
471は柱穴2302出土の見込み部に胎土目が見られる施釉陶器皿。472は柱穴2524出土備前焼壺肩部片。473は柱穴2534出土の土師質土器鍋口縁部片である。474は柱穴2534出土の備前焼播鉢口縁部片。475は柱穴2534出土の備前焼甕胴部片。476は柱穴1892より出土した石材不明の砥石である。

I区遺構外出土遺物

477～533は、遺構から遊離した状態や攪乱等から出土した遺物である。477は拡張される口縁部に4条の凹線を施す広口壺口縁部。形態・法量から器台の可能性も考えられる。478.479は弥生後期後葉の広口壺口縁部。480は弥生中期中葉の壺頸部片。481は口縁部外面にヘラ描きによる羽状文を施す弥生中期中葉段階の広口壺口縁部。482は弥生後期～終末期の広口壺口縁部。483は数帯の櫛描



第70図 I区 遺構外出土遺物実測図 その1



第71図 I区 遺構外出土遺物実測図 その2

直線文を施す弥生中期前葉の壺胴部片である。484は櫛描直線文上位に櫛描山形文と下位に櫛描扇形文を施す弥生中期前葉の壺胴部片。485は頸胴部境に断面三角形の突帯を施す弥生後期後葉段階の広口壺肩部片。486の甕底部片、487の壺底部片は安定感のある形態から、弥生中期前葉の所産と考えられる。488～493は弥生後期後葉段階の甕口縁部。490.491は胎土・調整から高松平野北東部地域からの搬入品である。494は弥生後期の所産と考えられる小型甕口縁部。495は形態から鉢あるいは高杯の口縁部と見られ、弥生中期前葉の可能性が考えられる。496の小形鉢には縦位の把手が施され、弥生後期前葉の所産と見られる。497は凹線文山部の上面と口縁端部上面に刻み目を施す弥生中期後葉段階の鉢口縁部。498は厚手の底部をもつ甕であり、詳細な帰属時期は不明。499～501は弥生後期後葉の鉢底部片である。502は弥生後期後葉の高杯脚部片であり、外面に6条の沈線が施される。

503～505は土師質土器小皿。504の底部外面には回転糸切り痕が見られる。506.507は土師質土器杯であり、506は底部外面を越えて胴部下位に回転ヘラ切り痕の痕跡が見られる。508は内黒の黒色土器碗。11c後半の所産と見られる。509.510は土師質土器足釜である。511は土師質土器把手付鍋口縁部片。512は土師質土器羽釜。513は亀山焼甕口縁部。515は備前焼甕胴部片である。

516は安山岩製の凹基無茎式石鏃。517は凹基無茎式石鏃である。518.519は紅簾片岩製の打製石庖丁片。ともに急角度の刃部を中心に磨耗痕が発達している。521は緑色片岩製の磨製石斧片であり、

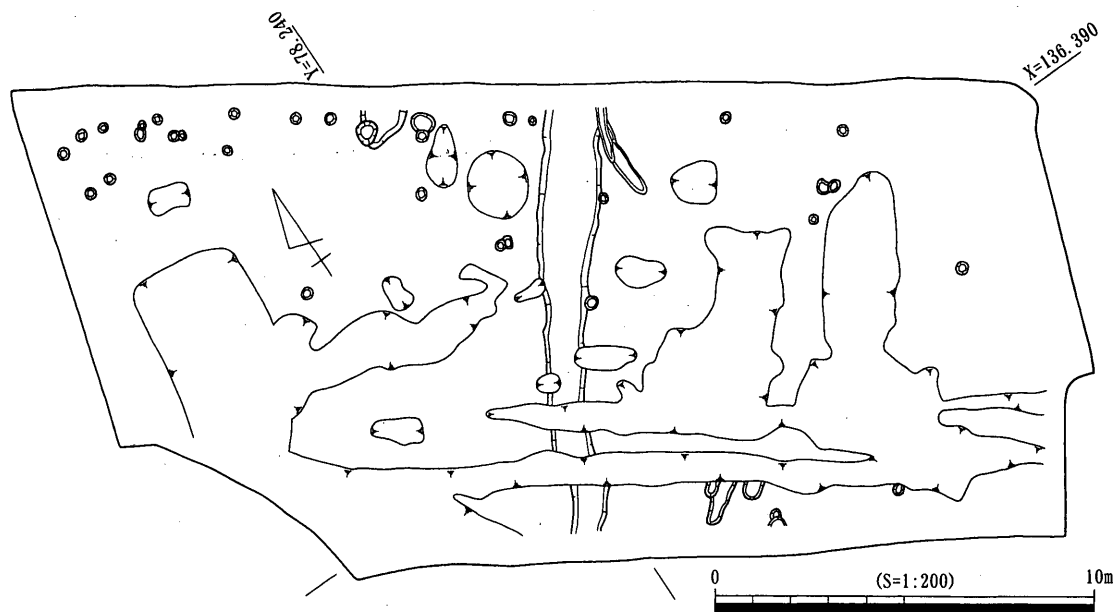
刃部を中心に研磨による線状痕が観察され、両主面には成形の敲打痕を明瞭に止める。刃部には使用に伴う衝撃剥離が見られるとともに、刃縁が均等ではなく片減り様になる。522は背面に自然面を多く残す剥片で、下縁に微細な加工痕が見られる。523は砂岩製の有溝石錘である。524は緑色片岩製の磨製石斧片であり、再加工の痕跡は見られない。525は石材不明の砥石である。

526～533は銭貨である。判読可能なものとして526紹聖元寶(初鑄年1094)527.528皇宋元寶(初鑄年1253)529寛永通宝530洪武通寶(初鑄年1368)531政和通寶(初鑄年1111)532永樂通寶(初鑄年1408)が挙げられるが、533の銭貨名は不明である。

I-4区上層遺構

I区では、現地調査段階で遺構検出を2回に分けて実施している。しかし、検出面間の層厚が0.1m程の調査区が多い状況であった。調査段階での混乱や明らかな誤認も認められることから、本報告書では両検出面合わせて報告している。しかし、I-4区では検出面間の堆積層が0.8mと厚く認められたことから、上層遺構を切り離して報告することとした。

調査前は宅地となっていたこともあり、かなりの部分が攪乱を受けているが、調査区中央部を南北に延びる幅0.2～0.3m深さ0.2m程の規模を測るSD01や北部を中心にピット群が検出された。これらの遺構から時期決定可能な出土遺物は見られないが、下位の検出面で近世段階の遺構を確認していることから、それ以降の時期が想定される。



第72図 I-4区 東部上層遺構平面図



第73図 II区 第2検出面遺構配置図

第3節 II区の調査

II区第2検出面の概要

II区の大部分は谷底低地に該当し、その中で微高地と谷地形を呈する低地部分に分けて捉えることができる。微高地部分はII区中央部を舌状に南北方向に伸びる。また、第2検出面の微高地上では下層の砂礫層が露出する箇所が多く見受けられることから、下位の堆積層の凹凸が反映されているものと考えられる。

II区全体で遺構検出は2面に分けて実施している。下位より第2検出面・第1検出面と呼称する。第2検出面では、弥生時代中期前葉～後期末葉の遺構を確認している。中期前葉に属する遺構はSH06のみであり、他に居住に関係した遺構は希薄である。

中期中葉～後葉にかけての凹線文出現期前後には、SH01～03.09等の同時並存で2.3棟の竪穴住居が微高地上を点在する景観が想定される。掘立柱建物は未確認ながら、廃棄土坑やこれに類する集石遺構が多く作られることから、安定的に集落が営まれたものと見られる。中期末～後期前葉に関しては若干遺構数は減少するものの、SH02.05等の竪穴住居が存在することから、小規模ながら集落自体は存続している。

後期後葉段階では、微高地上に同地併存で3棟程の住居群と2～3棟程度の掘立柱建物が展開する。遺構数では本段階が最も多い。住居は、直径8～10mを測る大形の円形住居を中心に、一辺が5m程度の方形住居が新たに出現する。

終末期に帰属する明確な遺構は存在せず、谷地形や包含層中に僅かに遺物が見られるに過ぎない。若干の空白期を挟みながら中期前葉以降継続していた集落も、本段階には完全に廃絶しているようである。

盛んに居住遺構が営まれている中期中葉～後葉・後期後葉段階には、微高地上の住居に隣接する縁辺部において、自然礫と土器等の遺物が集中して検出される不明遺構（集石）を多く検出している（SX01～09）。これらは自然の窪地状の地形か土坑内に礫と土器を投棄しているものであり、出土状況から人為的に形成された可能性が高いが、平面形が不定形であることから、性格付けが難しい。単なる廃棄遺構とも考えられるが、通常廃棄場所として選定される谷地形などの低地帯に形成されずに、微高地上か縁辺部に見られる点を重視し、廃棄物処理以外に何らかの意図を想定しておきたい。

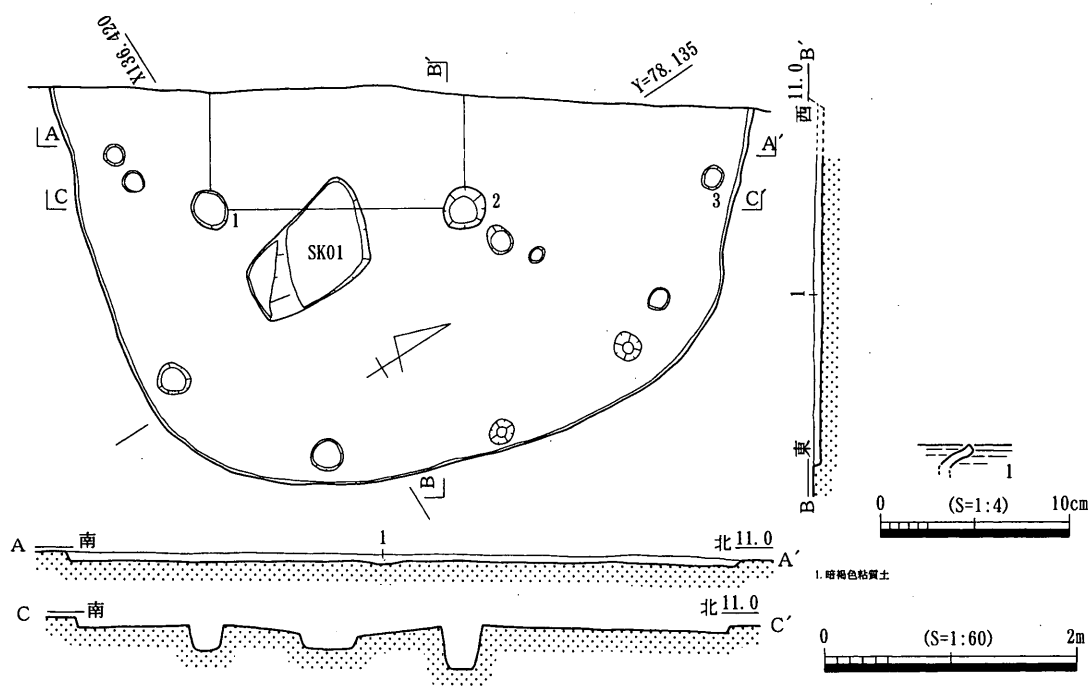
もっとも、遺物組成が通常集落内に見られる日用品を中心とした一般的な廃棄遺構の組成と変わらないことから、儀礼や墓制と関連付けて解釈するのは困難と思える。

微高地周囲の谷地形は、本検出面において明瞭な窪地状態を止めており、埋積が進行した上位の第1検出面においてもその痕跡が確認できる。本検出面では、基本的に弥生期の遺構を報告するが、谷地形内にはその後の古墳～中世までの遺物を含んでいるけれども、説明の都合上本節で紹介する。谷1・2からは、まとまった状態で古墳時代中期の布留4式併行と見られる土器群が多く出土している。

II区 SH01

II区微高地北東部分のX = 136.420 Y = 78.135 付近で検出した竪穴住居である。西半部が現道下となることから全容は不明ながら、直径 5.5 m程の円形を平面形をもつものと思われる。微高地上面の立地が影響してか残存深度は 0.1 m程と浅い。現状での埋没土は粗砂粒を多く交える粘質土の単一層である。床面は基盤層をそのまま利用し概ねフラットであり、壁溝等の付属施設は持たない。支柱穴は図示する2基が該当し、4基支柱穴であると推測されるが、その位置は南へ偏ったものとなっている。また、支柱穴に近接して土坑 (SK01) を検出しているが、位置関係から見て中央土坑とは断定できない。

床面からの出土遺物は、いずれも図化不可能な細片であり、唯一SP01より甕口縁片の出土を見た。1は凹線文出現直前の弥生中期中葉段階の所産と思われる横ナデによる跳ね上げ口縁をもつ甕であり、本住居の廃絶時期を弥生中期中葉に推定する。

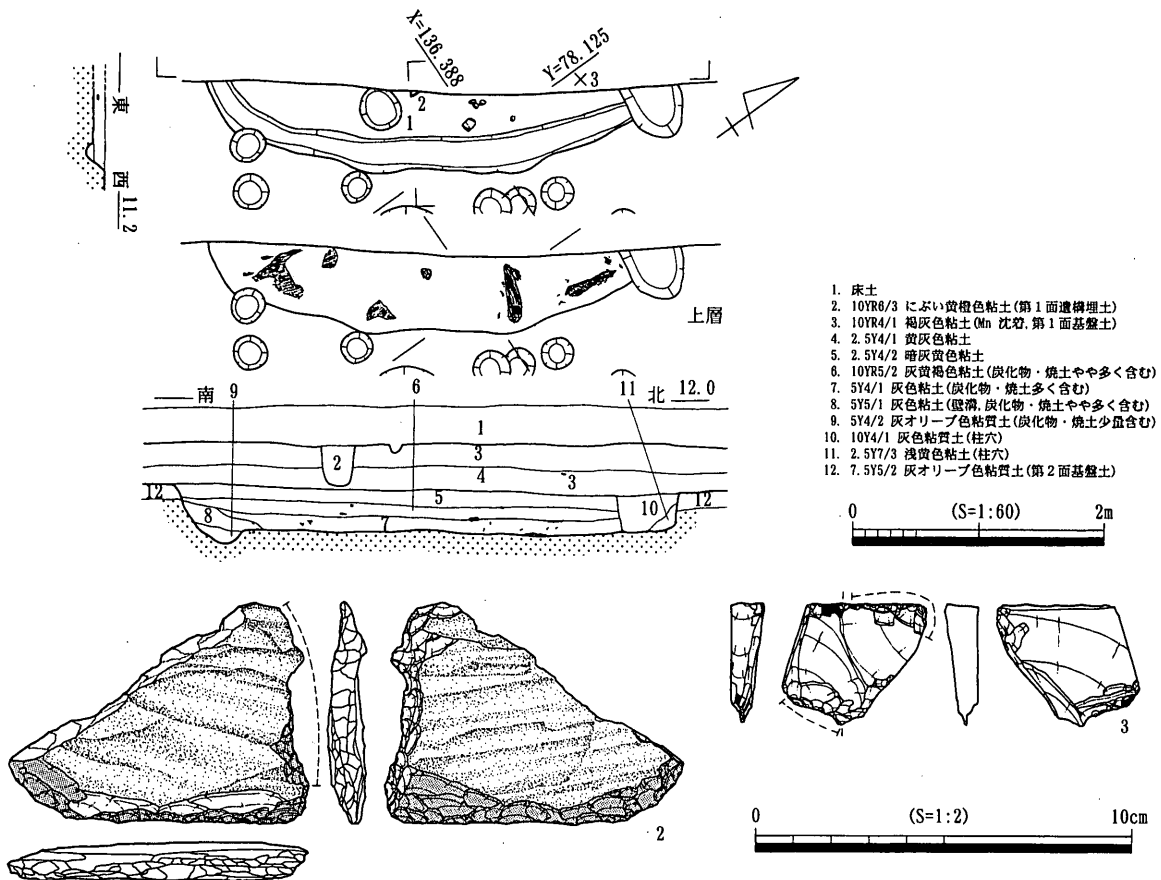


第74図 II区 第2面SH01平・断面図及び出土遺物実測図

II区 SH02

II区南部のX = 136.388 Y = 78.125 付近で検出した竪穴住居である。大半が現道下の未調査部分になるが、検出範囲から 4.5 m前後の円形プランを推定することができる。残存深度は 0.3 mと比較的良好であり、埋没土中位には炭化材と焼土塊が見られた。この炭化材は、殆どが住居中央へ向かう形で検出していることから、垂木等の部材と推定される。床面は基盤土をそのまま利用しており、壁際では幅 0.2 m深さ 0.1 m程の壁溝が検出された。

遺物は、床面直上から出土しているが、調査範囲内で時期決定に有効な土器類の出土は確認できない。2は紅糜片岩製の打製石庖丁である。背部を欠損するが、刃部長 70mm 器幅 60mm 最大厚 10mm を測り、急角度の両刃の刃部をもつものである。摩滅痕は刃部を中心とした範囲に観察される。3は、上下縁に潰れ状の剥離面が観察される楔形石器である。



第75図 II区 第2面SH02平・断面図及び出土遺物実測図

時期決定可能な出土遺物は見られないが、周辺遺構の状況から弥生中期末～後期初頭の廃絶時期を推定しておく。

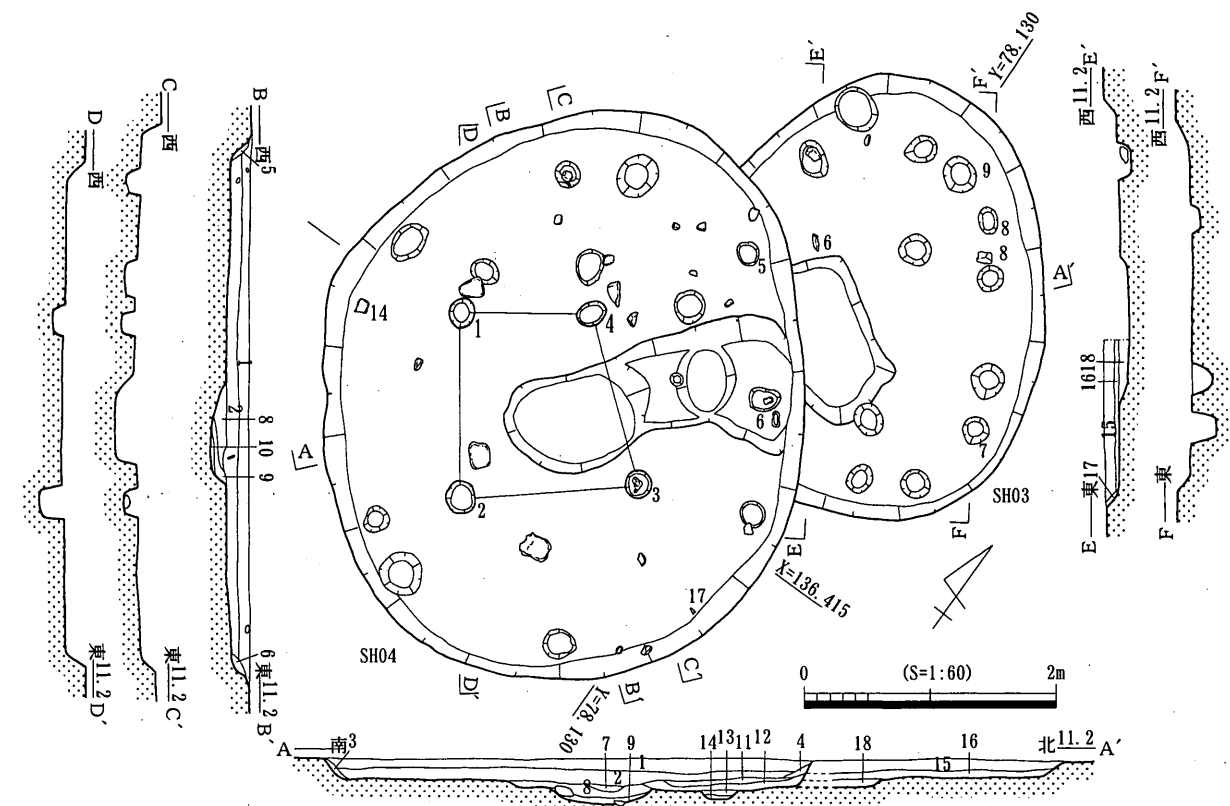
II区SH03

II区SH04に切られる形で検出した小型の竪穴住居であり、長軸3.4m短軸2.8m(推定)残存深度0.2m程を測る。床面上では現状で合計9基の柱穴を確認しているが、規則性は見られず支柱穴を確定できない。床面は概ねフラットであるが、基盤層をそのまま利用しているようであり、張床層は見られない。床面中央からやや南寄りの部分では、長軸1.2m短軸0.9m残存深度0.1m程の中央土坑を検出している。埋没土には、疎らに炭化物が見られるが、底面に被熱痕は見られない。

遺物は、床面上と床面の若干浮いたレベルと、柱穴内から出土している。4.5は広口壺の口縁部片であり、5の口縁部外面には1条の凹線文が確認できる。6は甕の口縁部片であり、7は同底部片である。6は強い横ナデ調整に伴う跳ね上げ口縁をもち、口縁部外面には1条の凹線文が見られる。7の内面には縦ケズリが確認できる。

8は、サヌカイト製のほぼ完形の打製石庖丁であり、幅12.4cm長さ5.8cmを測る。背面側に残るやや大きな剥離面方向から、素材となる横長剥取にあたって、交互剥離が用いられた可能性がある。主要剥離面の打面は背部調整によって消去されているが、厚さが2cm以上の肉厚な横長剥片を使用していることが窺える。両側に抉りを施し、一側縁に自然面を留め留めている。刃部はほぼ直線的で調整痕は見られず、使用による摩滅痕と微細剥離が観察される。9は小型の石錐である。

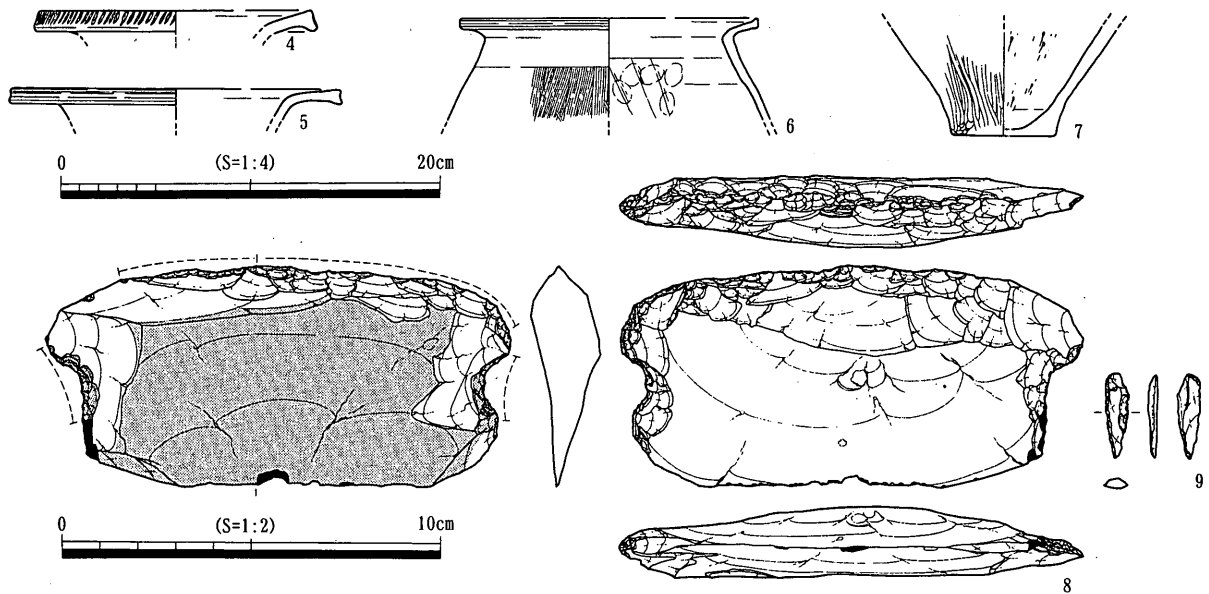
5の広口壺や6の甕の口縁形態と口縁部外面に見られる凹線手法から、本住居は弥生中期中葉の凹線



1. 10YR5/3 にふい黄褐色粗砂混粘質土(炭化物少量含む)01上層
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混粘質土(炭化物少量含む)01下層
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混粘質土
4. 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混粘質土
5. 10YR5/3 にふい黄褐色粗砂混粘質土
6. 10YR5/3 にふい黄褐色粗砂混粘質土
7. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土(中央炉, 焼土塊多く含む)

8. 10R4/4 赤褐色粗砂混粘質土(中央炉)
9. 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混シルト(中央炉, 炭化物少量含む)
10. 2.5Y3/1 黒褐色粗砂混シルト(中央炉, 炭化物多く含む)
11. 2.5YR5/8 明赤褐色焼土
12. 10R4/4 赤褐色粗砂混粘質土(地山塊多く含む)

13. 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混シルト
14. 2.5Y4/1 暗灰色粗砂混シルト(炭化物少量含む)
15. 10YR4/3 にふい黄褐色粗砂混粘質土
16. 7.5YR4/4 褐色粗砂混シルト
17. 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混粘質土
18. 10YR5/2 灰黄褐色混砂シルト(中央炉, 炭化物少量含む)

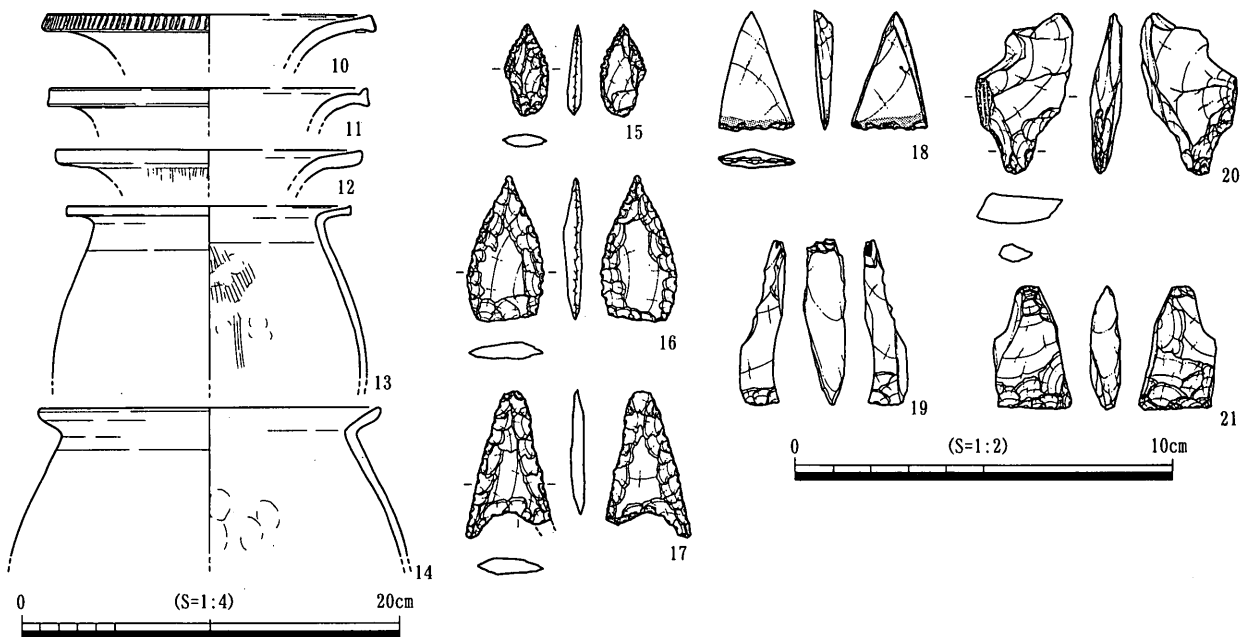


第76図 II区 第2面SH03.04平・断面図及び出土遺物実測図

文出現期に廃絶したものと推定する。

II区SH04

II区中央部の谷2西側微高地上X=136.415 Y=78.130付近で検出した竪穴住居である。平面形は、長軸4.2m短軸3.8m程の楕円形を呈し、残存深度0.2mを測る。SH03と切り合い関係をもち、本



第77図 II区 第2面SH04出土遺物実測図

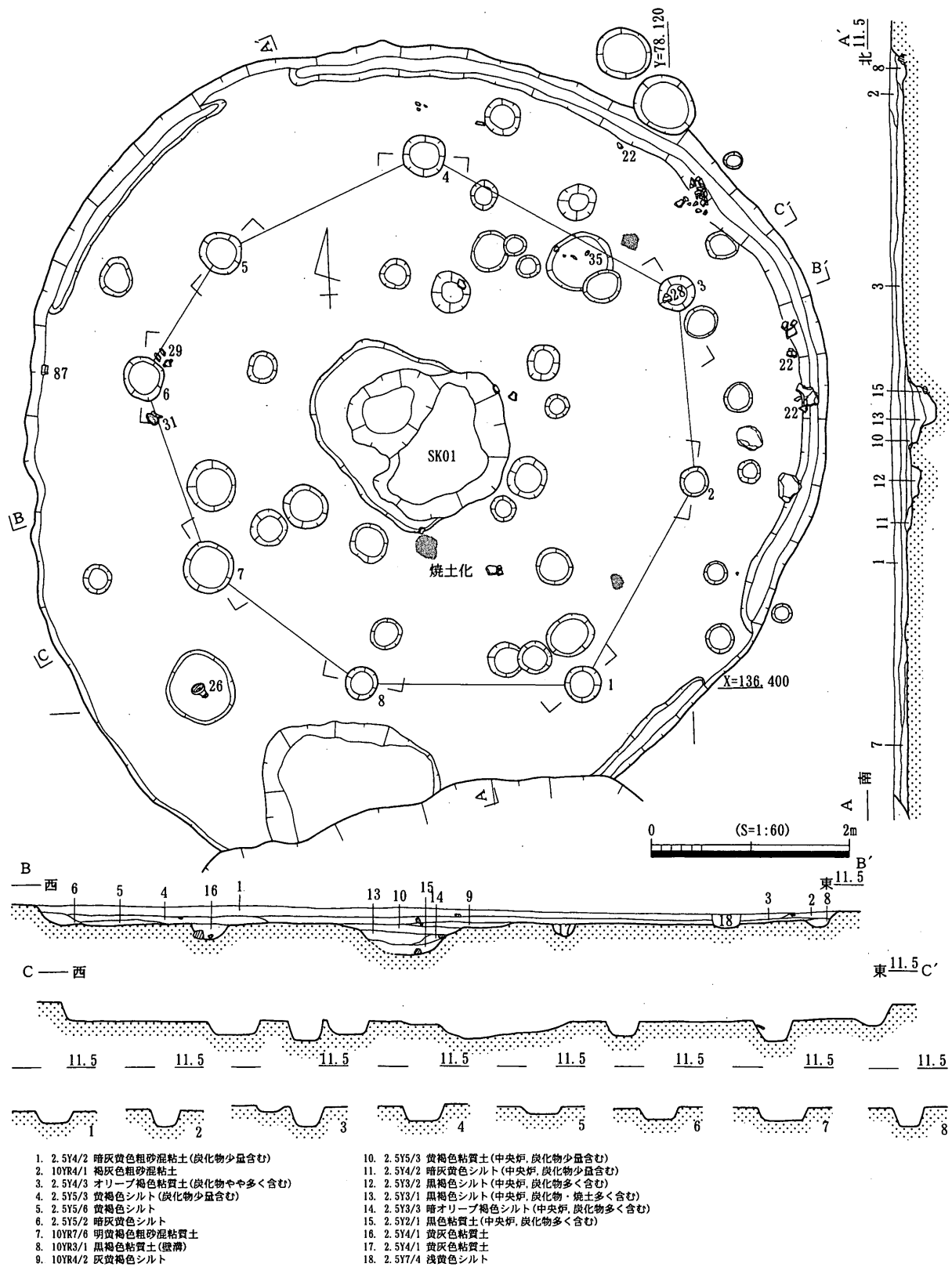
住居が後出する。床面上では合計 15 基の柱穴を確認しているが、図に示す 4 基の主柱穴を持つものと推定される。壁際に同心円上に並ぶ柱穴も存在するが、位置関係から見て補助的なものと見られる。床面中央には長軸 1.2 m 短軸 0.75 m 床面からの残存深度 0.1 m 程を測る中央土坑が存在する。底面に顕著な被熱痕はなく、最下層に層厚 5 cm 程の薄い炭化物層が見られた。また、北側には壁際へ伸びるやや浅い土坑状の落ち込みが存在する。中央土坑との切り合い関係はなく、中央土坑と同時並存したものと推定される。埋没土上位には、弱い被熱を受けた焼土塊が広がるが、底面に被熱痕は見られない。また、この焼土塊は、中央土坑の上層にも確認できることから、住居廃絶時に投棄されたものと推定される。

遺物はすべて床面直上より出土している。10～12 は広口壺の口縁部である。11 の口縁部外面は凹線状に窪むが、明確なものではない。13.14 は、「く」の字上口縁をもつ甕であり、4 の口縁部内面には横ナデによる跳ね上げが見られるが、口縁部外面に凹線文は確認できない。15 は円基無茎式石鏃であり、側縁を鋸歯状に仕上げている。16 は表裏にやや広い素材面を残す平基無茎式石鏃で、17 は凹基無茎式石鏃である。18 は細かな二次加工を施す剥片である。19.21 は上下縁に潰れ痕が確認できる楔形石器、20 は身部の調整が殆ど見られない石錐である。

出土遺物の様相は、形態や凹線文が確認できないものの強い横ナデ調整が用いられていることから、弥生中期中葉の凹線文出現直前の様相を示しているものと思われる。

II区SH05

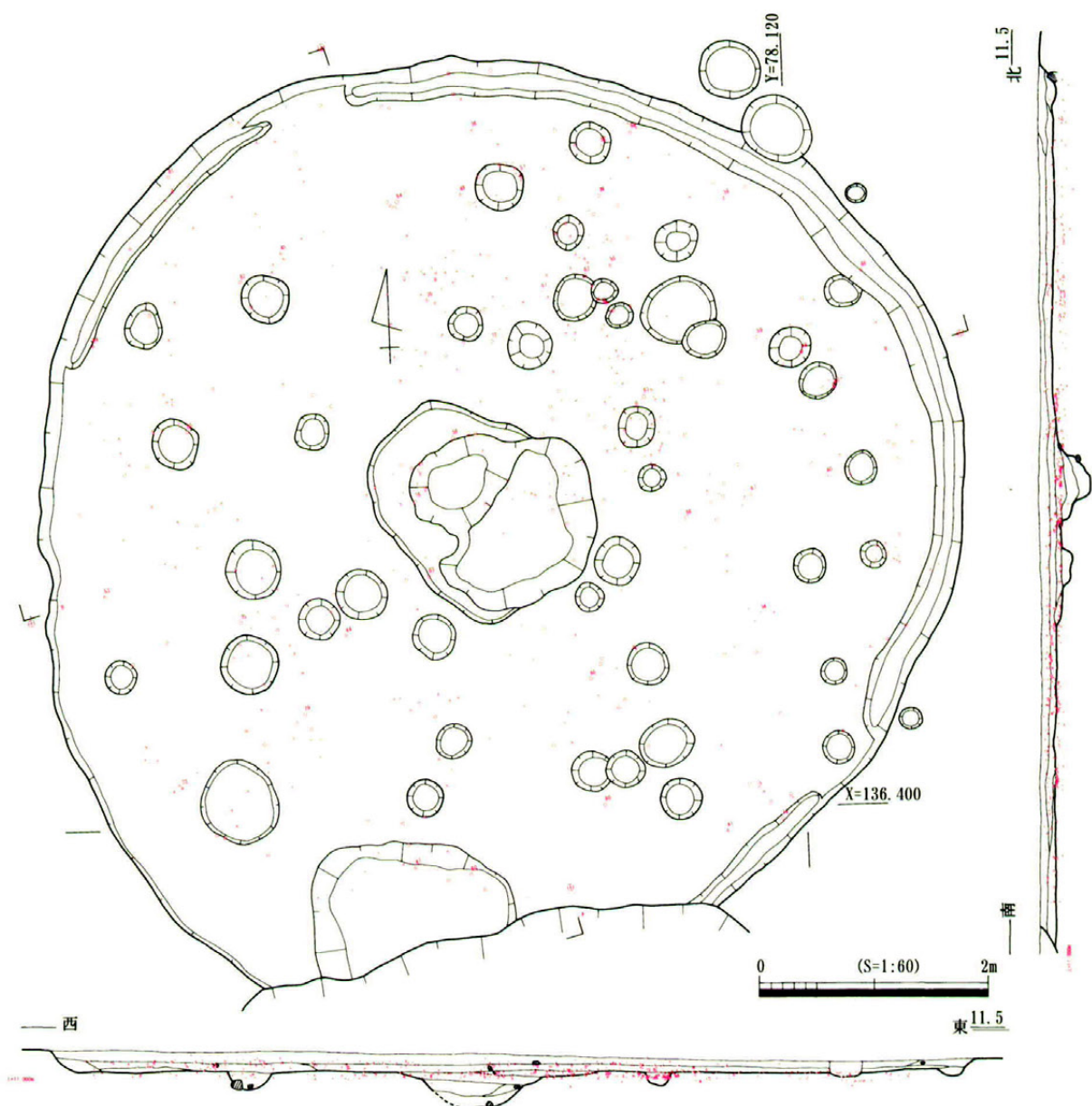
II区中央部の X = 136.400 Y = 78.120 付近で検出した直径 8.5 m を測る円形の竪穴住居である。検出面から 0.2 m 程の残存深度を測り、南側は形成時期不明の流路状の落ち込み 1 に切られる。床面まで掘り下げた段階で多くの柱穴を確認しているが、位置関係から見て主柱穴と考えられるのは図示する 8 基の柱穴と、中央土坑の両サイドに配される 2 基の柱穴となるものと思われる。中央部では、長軸 2.1 m 短軸 1.7 m 床面からの残存深度 0.3 m を測る中央土坑が存在する。床面南側では長軸 1.8 m 短軸 1.2 m (推定) 残存深度 0.3 m 程の土坑 (SK01) が確認された。この SK01 は、掘り込み面の観察から、



第78図 II区 第2面SH05平・断面図

住居に伴うものと推定されるがその機能は不明である。床面は基盤層をそのまま利用しており、中央土坑以外にトーンで図示した3箇所の焼土化した部分を検出している。

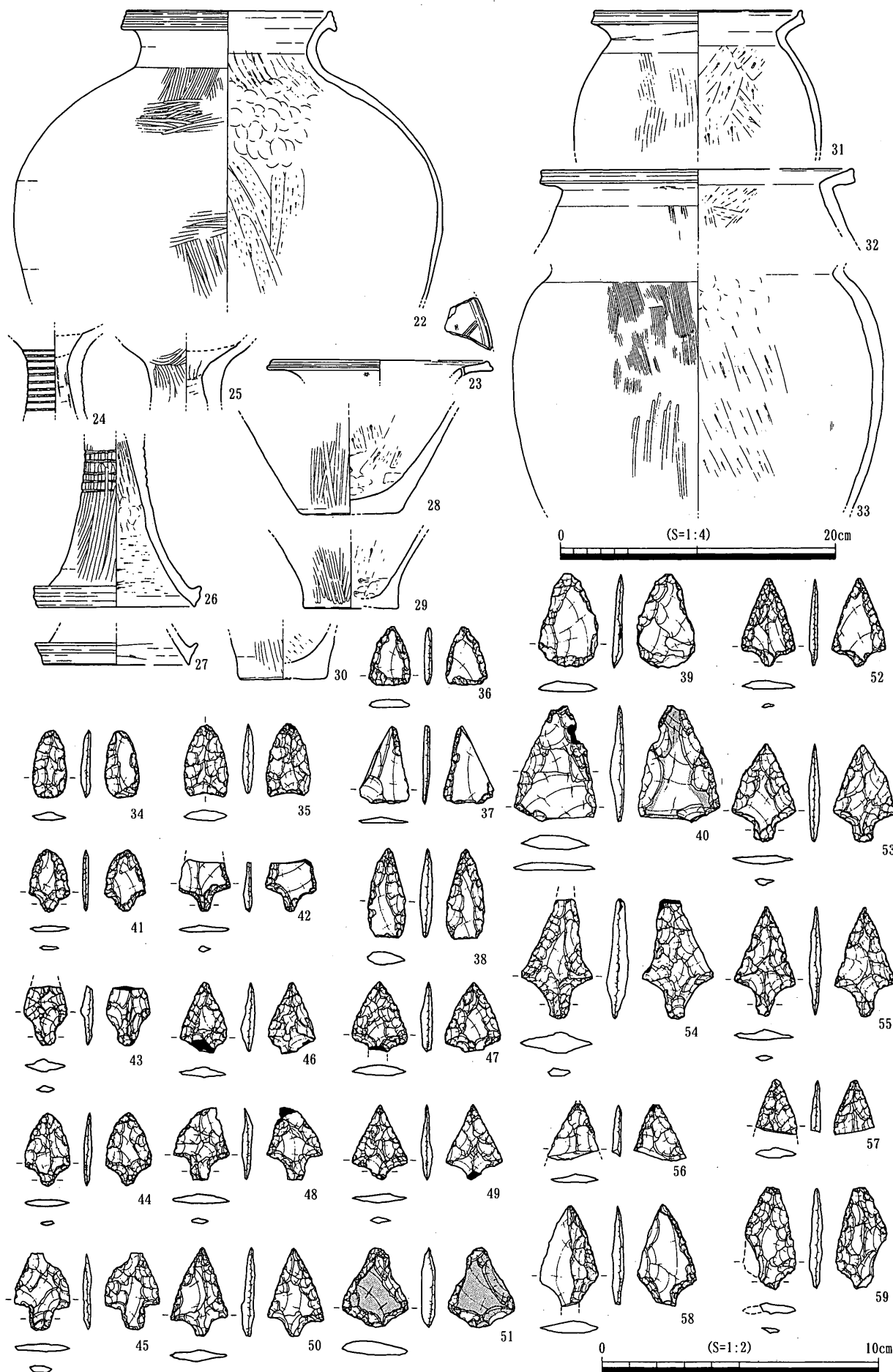
調査中、住居上層を掘り下げる段階から、多くのサヌカイト製の剥片及び微細なチップを確認したこ



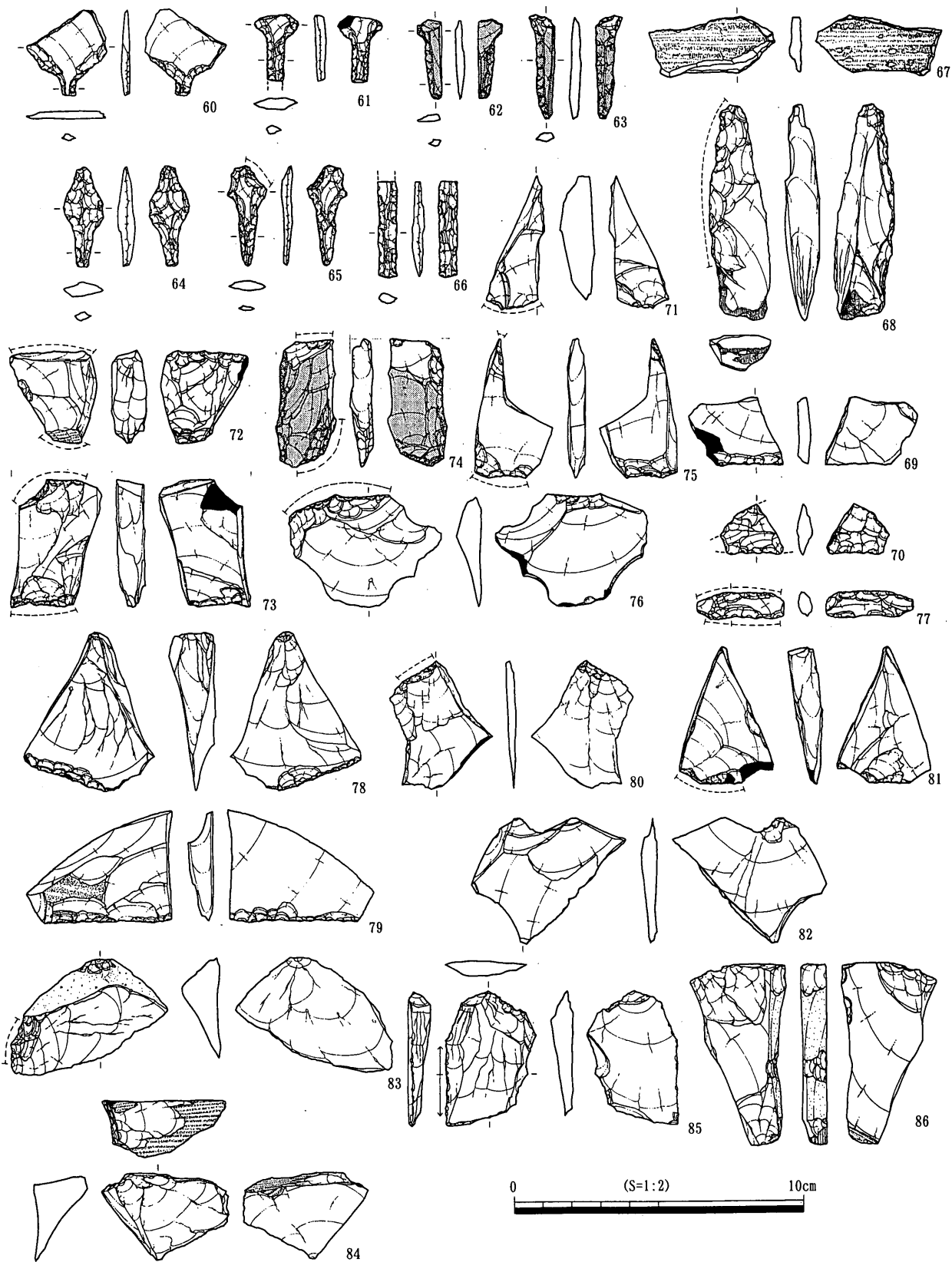
第79図 II区 第2面SH05石器分布図

とから、出土位置を記録しながら慎重に調査を行った。石器群は、垂直分布では一部浮き上がった上層に位置するものも見られるが、基本的には床面に集中する。平面分布では、極度に一箇所に集中する場所は見られないが、北東部分に分布密度がやや濃い箇所が見受けられる。石器群の構成は、器種的には石鏃が26点と最も多く、次いで石錐6点楔形石器10点スクレイパー2点となっており、圧倒的多数を占めるのは200数点にも及ぶ剥片類と微細な石片である。肉眼観察では、金山産サヌカイトが大多数をしめるが、一部に安山岩を素材としたのものも見られる。また、殆どの剥片類は明瞭なバルブを留めていないことなどから、両極打撃によって多産されたものと考えられる。器種組成からも、両極打撃によって得られた素材を基にして石鏃等の小型品を生産していた可能性を指摘できる。

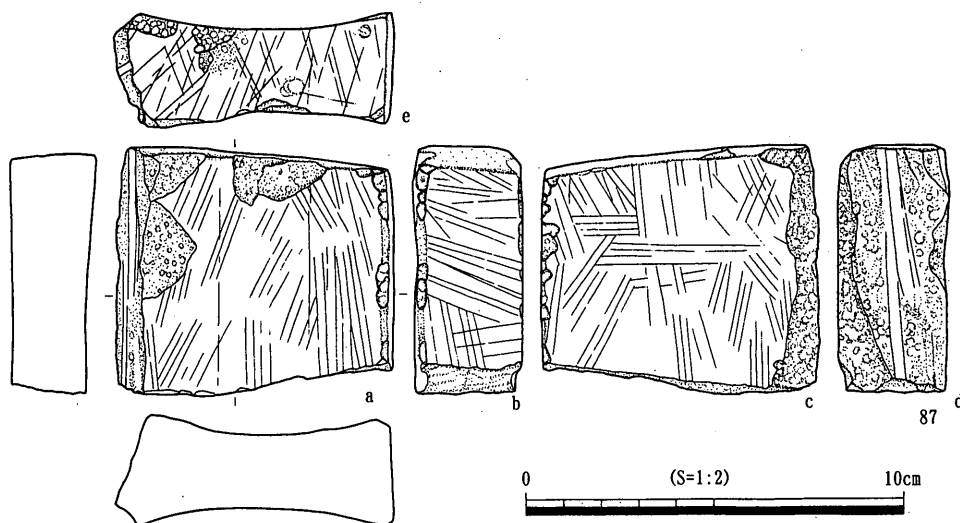
土器類は、基本的に床面直上から出土しており、8はP3、26はP9より、27は上層から出土である。22は口縁部外面に3条の凹線文をもつ広口壺であり、胴部内面の削りは上半部まで到達していない。23は口縁部外面に1条の凹線文、同内面には蓋受け用の穿孔と櫛描文原帯による施文を認める。24～27は高杯の脚部片である。いずれも内面に横方向のケズリ調整が見られ、24.26のように外面にヘラ



第80図 II区 第2面SH05出土遺物実測図 その1



第81図 II区 第2面SH05出土遺物実測図 その2



第82図 II区 第2面SH05出土遺物実測図 その3

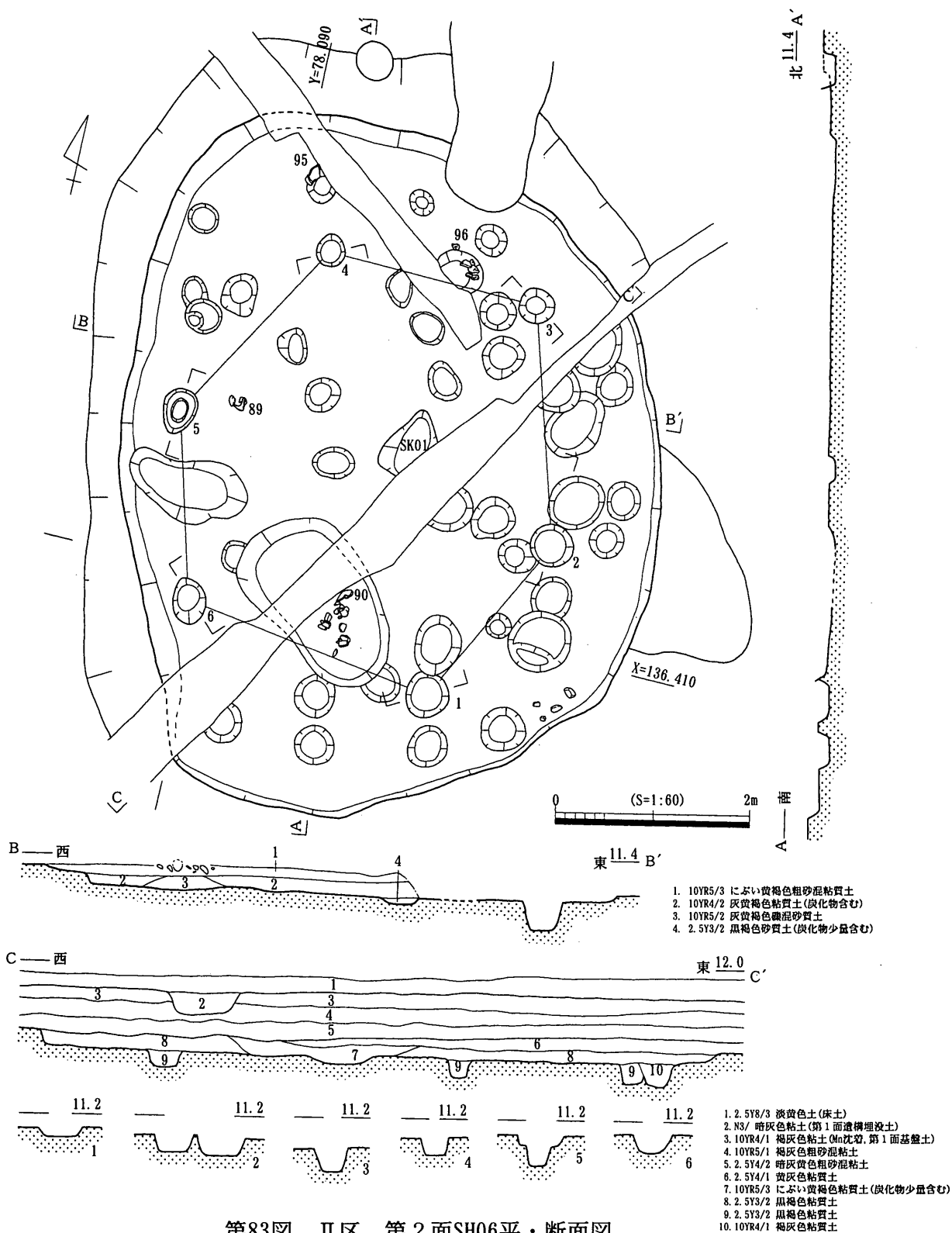
描きの沈線文帯をもつものも見られる。27は上下に拡張する脚端部をもつが、26に比べて凹線手法が退化したものとなっている。31～33は甕である。31～33の内面には、口頸部境にまで達するケズリ調整を残している。28～30は内面に縦方向のケズリ調整が見られる甕底部片である。

34は円基無茎式、35は凹基無茎式、36～40は平基無茎式石鏃である。37は基部と片側の側縁部には調整が及んでいないことから、成形途上品の可能性がある。41～59は凸基有茎式石鏃である。鏃身幅はバラツキを見せ、完形に近いもので2.3～4.4cm幅がある。中には54のような先端部を欠損するものの、現状で4.4cmを測る大型のものも見られる。58は先端部から基部の一侧縁の調整が見られず、成形途上品と見られる。60～66は石錐である。67は紅簾片岩製の打製石庖丁片である。68は下端に研磨痕が明瞭に観察され、この部分が片刃状になる。石材は肉眼観察で金山産サヌカイトであるが、研磨により刃部を作出していることから磨製の扁平片刃石斧の可能性が考えられる。69.70は小型であるが、刃部を意識した調整が認められることからスクレイパーとして報告する。71～81は楔形石器またはその削片である。82～84は剥片である。83は肉厚で自然面を打面とする安山岩製の剥片である。86は素材分割片である。87は砂岩製の砥石であり、砥面には平板なものやU字状を呈しバラツキがある。側面のd面とした部分には、溝状に窪む研磨痕が見られる。

出土土器の様相は、口縁部内面施文を行う2のような弥生中期後半古段階の資料も見られるが、凹線文の退化傾向を示す27や、31～33の甕内面上半部におけるケズリの顕在化などから、弥生中期末葉～後期初頭段階の所産と推定される。これらの出土遺物の時期を援用し、本住居の廃絶時期を弥生中期末葉～後期初頭段階とする。

II区SH06

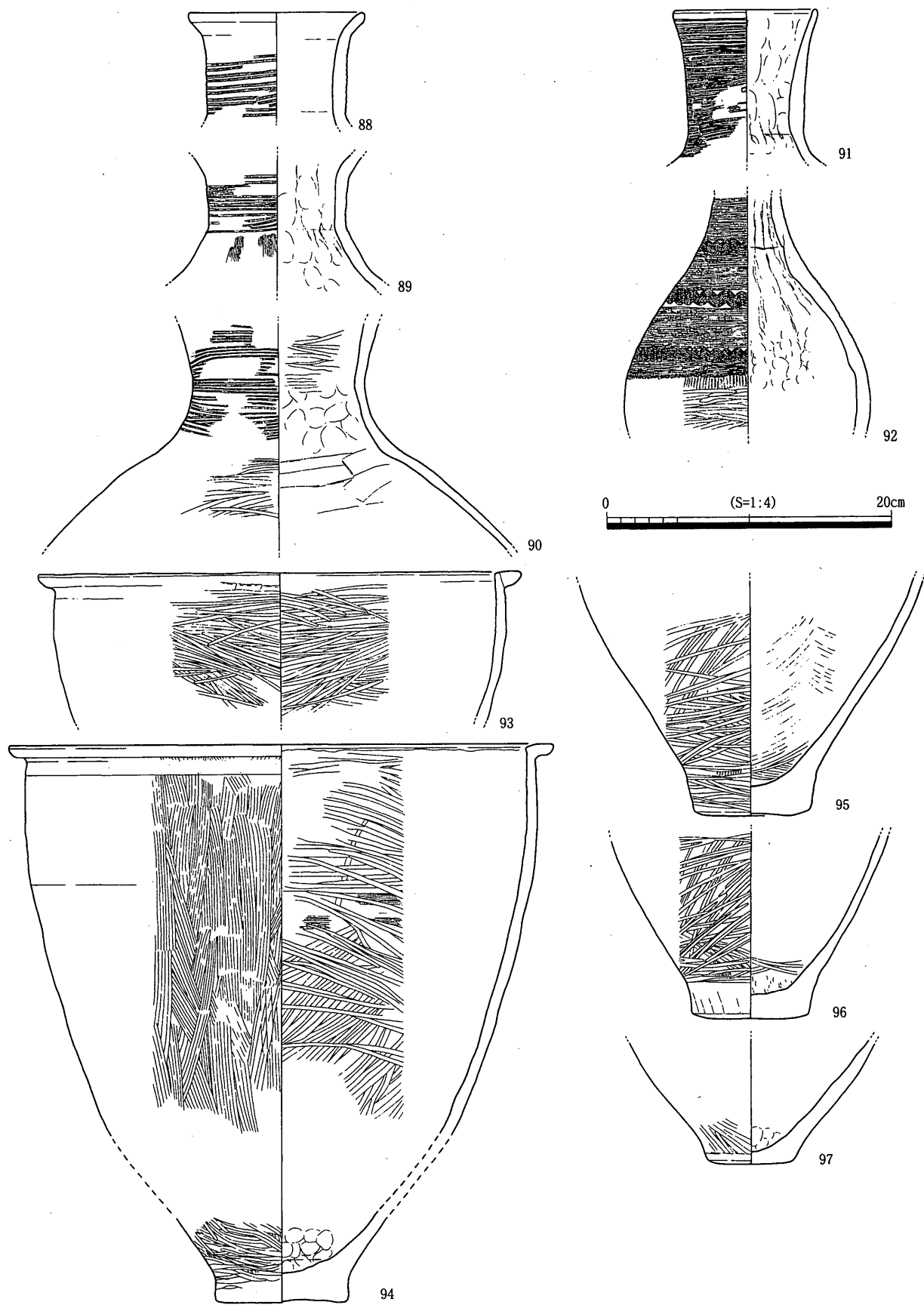
II区西半部のX=136.410 Y=78.090付近で検出した竪穴住居である。平面形が長軸7.0m短軸5.5mの楕円形を呈し、不定形である。壁面は直立気味に立ち上がり、残存深度0.2m程を測る。住居周辺には、住居本体の掘り込みとは別に、緩やかに落ち込む箇所が存在するが、伴うものかどうかは不明である。床面上には複数の柱穴が存在することから支柱穴は不明確であるが、深度や位置関係から図示した6基のものと推定する。また、明確な中央土坑は見られず、住居南東部に位置する土坑は廃絶途上に穿たれており、床面には伴わない。



第83図 II区 第2面SH06平・断面図

出土遺物は、床面からやや浮いたレベルと南東部に位置する土坑から出土しているが、両者に接合関係が認められるため、廃絶時に一括廃棄されたものと見られる。

88～90は広口壺の口縁部・頸胴部片であり、頸部外面に櫛描直線文が見られる。櫛描文は水平方向に一定せず、重複と上下動が激しい。91.92は細頸壺の口縁部・頸胴部片である。92は重複する櫛描直線文間に原体を反転運動により描く櫛描波状文を充填する。93は口縁部の傾きと復元される器形



第84图 II区 第2面SH06出土遺物实测图

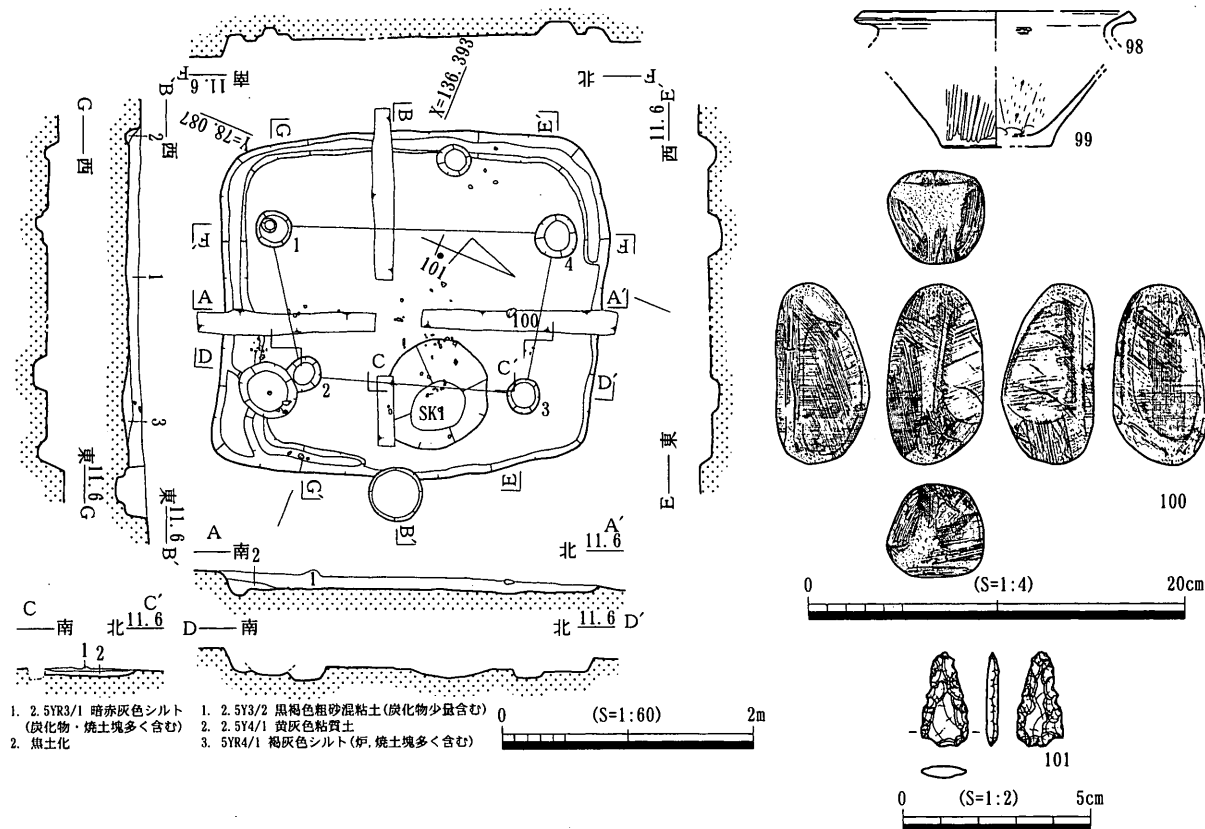
から、鉢の可能性が高い。94の甕は、突帯貼り付けによって口縁部を作り出し、内面に密なミガキ調整が施される。95～97は、甕底部片である。

出土遺物の様相は、88～92の壺外面に見られる積極的に回転台を利用しない櫛描文や、貼り付けによる口縁部をもつ93の鉢や94の無文の甕から、弥生中期前葉を示すものと思われる。これらの出土遺物の属性から、本住居は弥生中期前葉に廃絶したものと推定する。

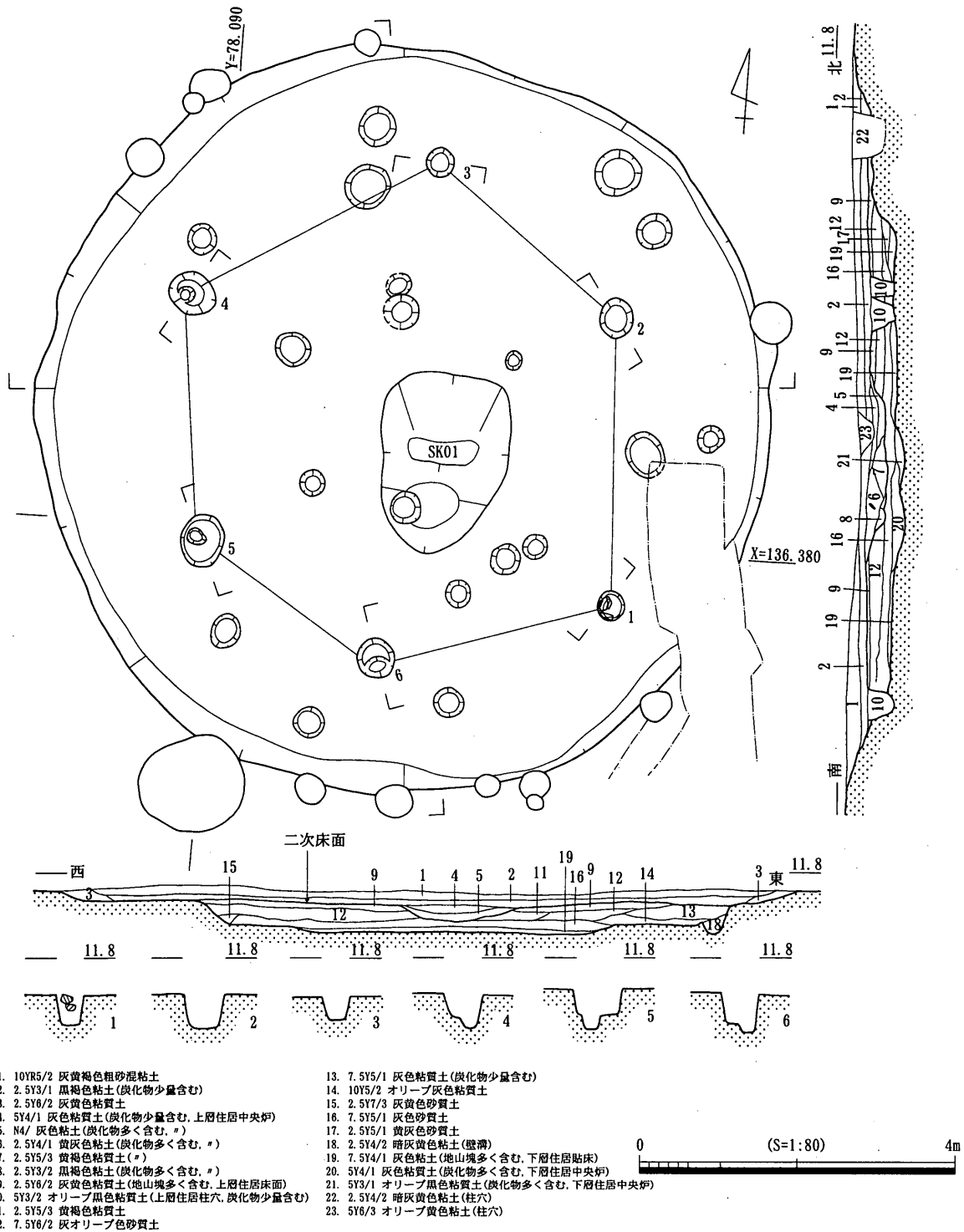
II区SH07

II区南西の微高地周辺部のX = 136.393 Y = 78.087付近で検出した竪穴住居である。平面形が2.8m × 3m程の隅丸方形を呈し、残存深度0.1m程を測る。埋没土は、黒褐色粘土のほぼ単一層であり、床面は基盤土をそのまま利用している。主柱穴は図示する4基を推定しているが、平面配置がやや歪である。床面中央からやや東にずれた位置で、深さ0.1程度で断面形が皿状を呈する土坑を検出している。底面には明瞭な被熱の痕跡が確認できることから、炉としての機能を推定できる。壁溝は北辺の一部から西辺を通して東辺の一部に見ることができ、幅0.15m深さ0.1m程を測る。

出土遺物は98の甕口縁片が床面からやや浮いたレベルから、他のものはすべて床面直上より出土したものである。98は甕口縁部片であり、断面形態と胎土中に雲母・角閃石をやや多く交えることから高松平野かその周辺地域からの搬入品と思われる。99は甕底部片であり、98の口縁部と同様の胎土をもつことから同一個体の可能性がある。胎土と形態、調整手法から1と同様に高松平野かその周辺地域からの搬入品である。100は安山岩質斑岩製の敲石である。上下端の敲打痕に加えて全体的に研磨を受けているようであり、磨石として使用されたのち敲石として用いられている可能性がある。肉眼観察で



第85図 II区 第2面SH07平・断面図及び出土遺物実測図



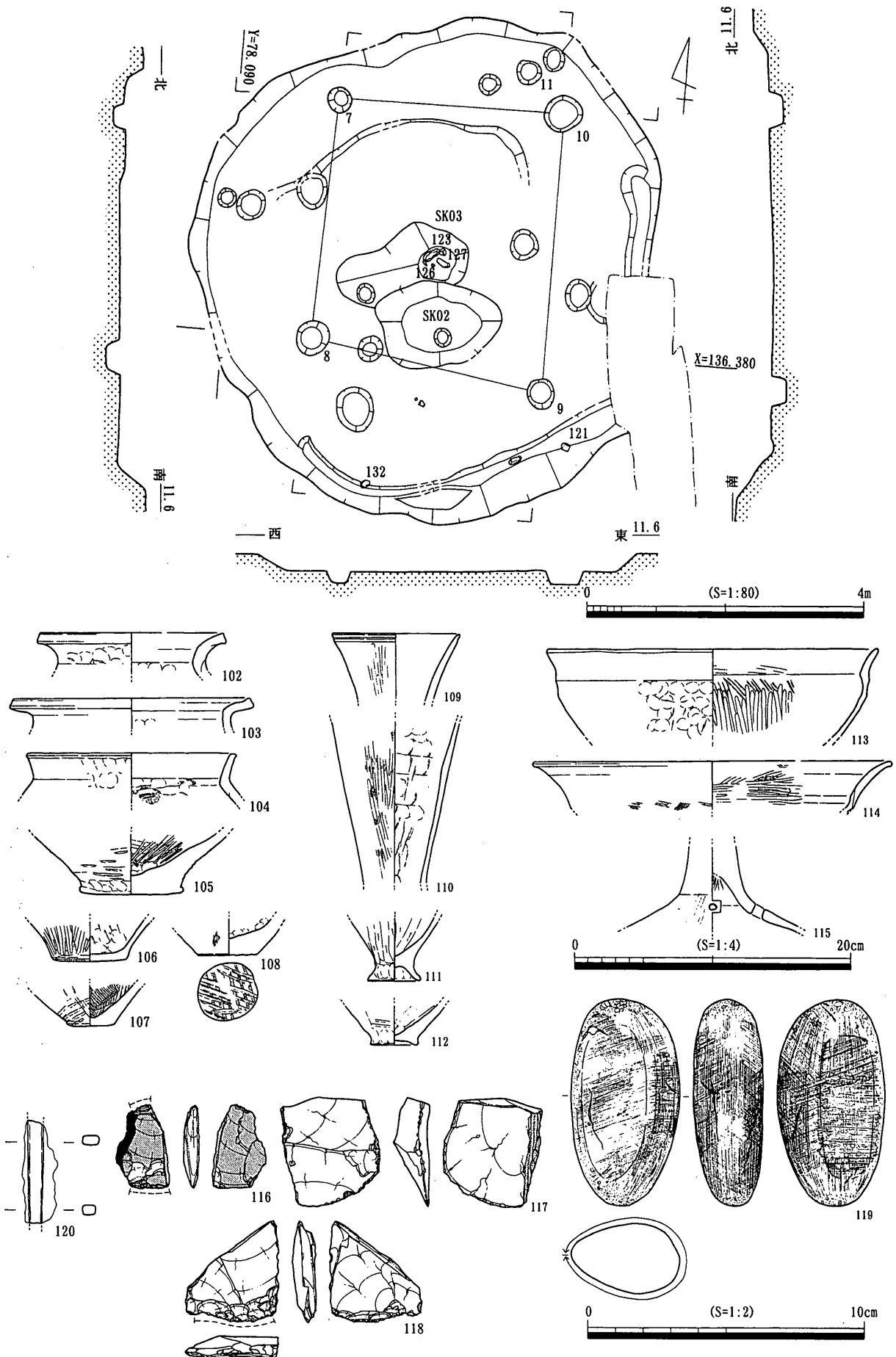
第86図 II区 第2面SH08上層平・断面図

赤色を呈する部分が観察されたことから、赤色顔料付着の有無について分析を依頼したが、顔料は確認できず、石材そのものが、赤く発色していることが判明した。101は平基無茎式の石鏃である。

出土土器はいずれも小片であることから時期決定に困難が伴うものの、98.99の甕口縁・底部形態から見て、本住居の廃絶時期を弥生後期後半段階と推定する。

II区SH08

II区微高地南半部のX = 136.380 Y = 78.090付近で検出した大型の竪穴住居である。調査の結果、

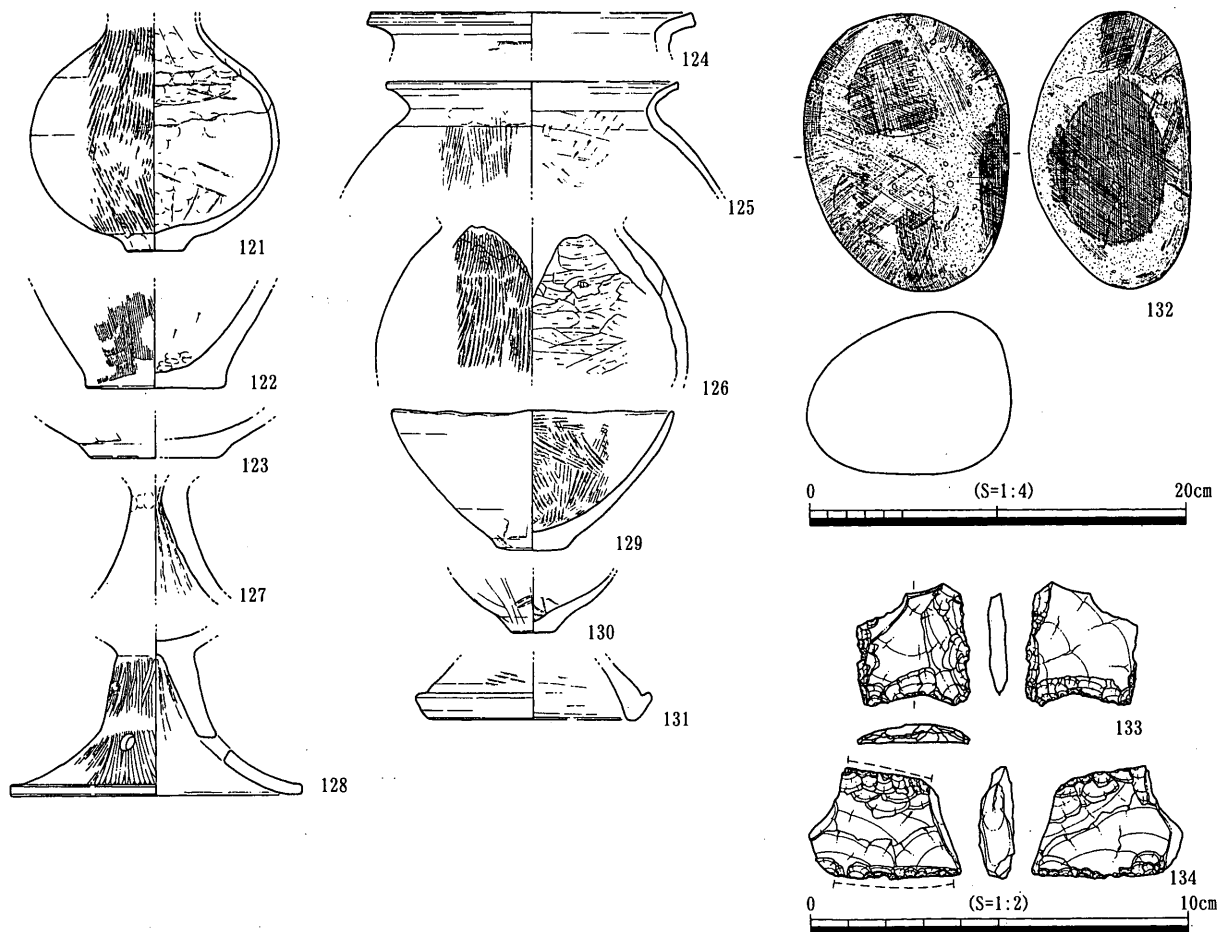


第87図 II区 第2面SH08下層平・断面図及び上層住居出土遺物実測図

2 時期の使用が推定されることから、上層と下層住居に分割して記述する。

上層住居は、直径 4.6 m の大型円形の平面プランをもち、床面まで 0.2 m 程の残存深度を測る。下層住居と重複する部分には、地山ブロックを多く含む 9 層を敷き床面としているが、それ以外の周縁部分は基盤層である黄褐色砂質土をそのまま床面としており、壁溝等の施設は見られない。主柱穴は、位置関係や深度から図示する 6 基に復元され、P 1 には詰め石等の造作が確認された。また、床面中央には炭化物を多く含む中央土坑 (S K 01) が存在している。

下層住居は上層住居に完全重複しており、上層住居床面検出時にその存在が確認された。平面形が直径 3.5 m ほどのやや歪な円形を呈し、上層住居床面から 0.25 m 程下位に床面が存在する。床面は基盤層をそのまま利用しており、北半部では削り出しによる高さ 0.1 m 程のベッド状遺構を伴う。主柱穴は図示する 4 基と推定されるが、後述する中央土坑に切り合い関係が見られることを考慮すると、中央土坑の東西両サイドにある 2 基の柱穴が主柱穴に該当する時期が存在していた可能性も残している。床面



第88図 II 区 第 2 面SH08下層出土遺物実測図

中央には切り合い関係をもつ 2 基の中央土坑が検出された。時期的に後出する南側の S K 03 の底面に小柱穴が確認されたが、その機能については不明である。

102 ~ 119 は上層住居、121 ~ 134 は下層住居出土遺物である。102 ~ 119 の上層住居出土遺物の内、103 は中央炉 (S K 01) から 111.112 が床面直上から出土し、他のものはすべて埋没土中から出土している。102 は広口壺の口縁部、103.104 は甕口縁部片であり、103 は強い横ナデ調整と胎土中に雲母・角閃石を交えることから、高松平野及びその周辺地域からの搬入品である。105 ~ 108 は、明瞭

な平底を留める甕もしくは鉢底部であり、108の底部外面には平底成形に関係するタタキ目が見られる。109.110は細頸壺の口縁・頸部片である。111は脚台をもち、内外面に縦ケズリが確認できる製塩土器の脚部片であり、胎土中には雲母片をやや多く含む。112は上げ底の底部をもつ鉢である。113は胴部中位で反転する器形をもつ鉢で、114.115は高杯の口縁・脚部片である。

116.118は楔形石器、117は使用痕と考えられる微細剥離が観察される剥片である。119は上下に敲打痕が見られる安山岩質斑岩製の敲石で、全体的に研磨痕が見られることから、磨石転用の可能性がある。

121～134の下層住居出土遺物の内、121～122.128～129.132は床面より、123.126.127はSK 03から出土した。121は口縁部のみ欠損する細頸壺の胴部である。122は安定的な平底をもつ甕底部で、123は壺底部片と思われる。124～126は甕の口縁・胴部片である。126は現状で図示するように、白色系と茶褐色系で雲母片をやや多く含む2種類の胎土から構成されている。129は完形の鉢であり、底部は平底を留めている。130はやや矮小な平底をもつ鉢底部である。131は高杯の脚部片は、形態・調整から見て弥生中期後半段階の所産であり混入品と考えられる。

132は全体に使用による磨耗痕が観察される安山岩質斑岩製の磨石である。133はスクレイパーであり、134は上下縁に潰れ状の剥離が観察されることから楔形石器と考えられる。

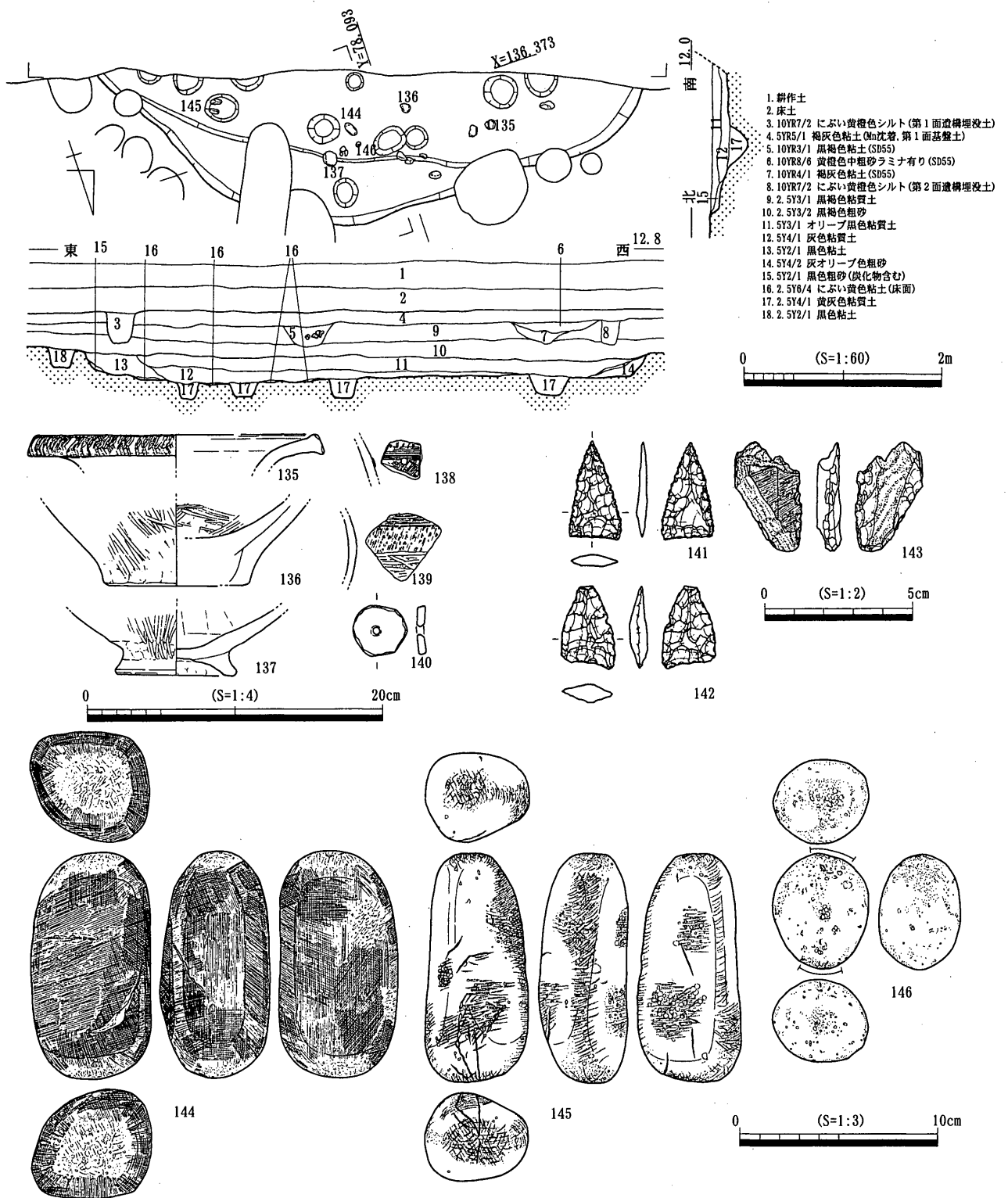
Ⅱ区SH 09

Ⅱ区微高地南部のX = 136.373 Y = 78.093付近で検出した竪穴住居である。大半が調査区外へ延びるが、検出状況から直径5.5 m程の円形プランをもつものと推定される。残存深度は0.3 mを測り、床面は概ねフラットであるが、南側は高さ0.1 m程の階段状になっている。埋没土は概ね2層に大別され、床面は基盤層である黄褐色砂質土をそのまま利用している。床面には複数の柱穴が確認できるが、調査範囲の制約から支柱穴を推定することは難しい。埋没土中には、サヌカイト製の剥片を多く含んでおり、144～146の敲石の存在を合わせて考えると、本住居内での石器生産を想定することができる。

出土遺物の内、135～137.144～146が床面直上から他は埋没土中より出土している。また、図化を行っていない剥片類も床面直上を中心に出土している。135は広口壺の口縁部であり、上下に拡張される口縁端部外面にはハケ目原体による羽状の列点文が見られる。136は壺底部片であり、外面の縦ミガキの下位にはケズリ調整が見られる。137は壺あるいは鉢の底部と思われるが、類例に乏しく断定できない。138.139は壺胴部片であり、外面には櫛描施文及び円形浮文が確認できる。140は小型の紡錘車であり、甕等の胴部片を転用したものと思われる。

141は平基無莖式、142は凹基無莖式の打製石鏃である。143は緑色片岩製の柱状片刃石斧片であり、折損以外の研磨面を切る再加工痕が見られる。144.145は安山岩質斑岩製の敲石であり、144は敲打痕以外に全体的に磨耗痕が見られることから、磨石転用の可能性がある。また、144.145ともに線状の敲打痕が観察されるものである。146は砂岩製の敲石である。

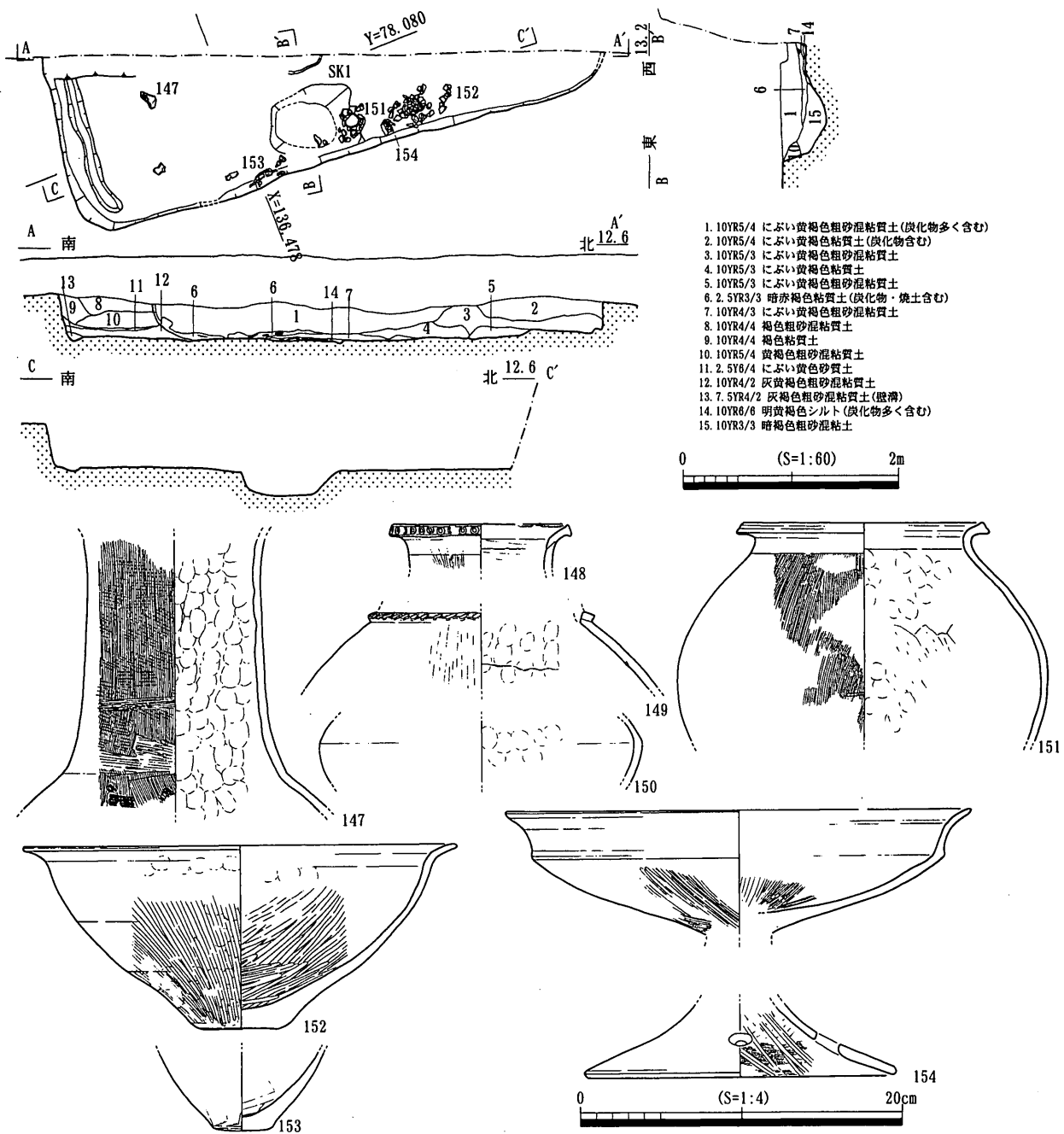
135～139の出土土器の様相は、形態・施文等に凹線文出現直前期を示すことから、本住居が弥生中期中葉に廃絶したものと推定する。



第89図 II区 第2面SH09平・断面図及び出土遺物実測図

II区SH10

II区北部の国道トレンチ部で確認した竪穴住居である。大半が現道下位の未調査部分になることから全体像は把握しづらいものの、一辺が5m程の平面プランをもつものと思われる。住居東側の検出面上には、下層の旧中州と考えられる砂礫層が露出する状況が看取され、本住居が微高地上に立地することを暗示している。0.3m程の残存深度を測るが、埋没途上において再掘削された可能性がある。焼土と



1. 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混粘質土(炭化物多く含む)
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土(炭化物含む)
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂混粘質土
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂混粘質土
6. 2. 5YR3/3 暗赤褐色粘質土(炭化物・焼土含む)
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混粘質土
8. 10YR4/4 褐色粗砂混粘質土
9. 10YR4/4 褐色粘質土
10. 10YR5/4 黄褐色粗砂混粘質土
11. 2. 5Y6/4 にぶい黄色砂質土
12. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混粘質土
13. 7. 5YR4/2 灰黄褐色粗砂混粘質土(炭濁)
14. 10YR6/6 明黄褐色シルト(炭化物多く含む)
15. 10YR3/3 暗褐色粗砂混粘質土

第90図 II区 第2面SH10平・断面図及び出土遺物実測図

带状に貫入する炭化物を見ることができ、機能は判然としない。床面は基盤土をそのまま利用しており、南辺に小規模な壁溝をもち、東辺には直径 0.9 m 残存深度 0.2 m 程の土坑が伴う。調査区西壁中央部の床面上では、幅 0.3 m 厚さ 0.1 m 以下の炭化物のまとまり（14 層）を検出しており、中央炉かそれに伴う施設の痕跡である可能性がある。

遺物は、住居東辺の土坑付近の床面直上からまとまって出土している。南側に散在する破片も、これらと接合関係をもつことから、出土遺物全体が住居廃絶時に床面上に遺棄されたものと解釈できる。

147 は長頸壺の頸部片であり、外面の縦ハケ下位には細い平行タタキが見られる。胎土中に雲母・角閃石を含む点と器形から、高松平野かその周辺からの搬入品の可能性が高い。148 は広口壺の口縁部片であり、口縁部外面には、竹管による列点文が見られる。149 は壺胴部片であり、頸胴部境に 1 条

の刻み目をもつ貼り付け突帯を1条付与する。150は細頸壺の胴部片である。152は内外面に密なミガキ調整が見られる鉢であり、153は小型鉢の底部片である。154は杯部中位で器形反転を行う高杯の杯部と脚部片であり、接合関係は確認できないが調整手法・胎土から同一個体として報告する。

147の長頸壺や厚みのある151の甕口縁部形態から、後期後葉段階でも比較的古い様相をもつ土器群と推定できる。本住居の廃絶時期を後期後葉古段階に推定しておきたい。

Ⅱ区S B 01

Ⅱ区中央部の微高地上X = 136.400 Y = 78.100付近で検出した1×3間(3×4.4 m)の柱構造をもつ掘立柱建物である。建物主軸方位は、座標北から7°東へ触れるもので、ほぼ南北方向となる。想定床面積は13.2 m²で、桁行の柱間は1.4～1.5 m程と一定しており柱通りも良好である。柱穴は、直径0.15 m残存深度0.2 mを測る小振りなものであるが、明確な柱痕は確認できていない。

出土遺物は数点の土器片が見られるが、時期決定に耐えられるものではない。建物主軸と柱構造が類似するS B 03・04を参考にすると、弥生後期後葉段階の所産と考えられる。

Ⅱ区S B 02

Ⅱ区北西部の微高地上X = 136.428 Y = 78.095付近で検出した1×3間(3×5.7 m)の柱構造をもつ掘立柱建物である。建物主軸は座標北から88°西へ振った東西棟であり、北東隅柱を予備調査トレンチにより失っているが、17.1 m²程の床面積を想定できる。桁方向の柱間は芯々間で1.8 mと一定しており、柱通りも良好である。

出土遺物は、柱穴1018から155の甕が出土している。155は外面に1条の凹線文をもつやや厚手の口縁部をもち胴部外面に縦ハケと下半部に縦ミガキが見られる。内面の縦位ケズリは上半部のハケ目調整によって消去されている。時期的には、弥生中期末葉～後期初頭の所産と考えられ、この出土遺物の時期を援用し本建物の廃絶時期を推定しておく。

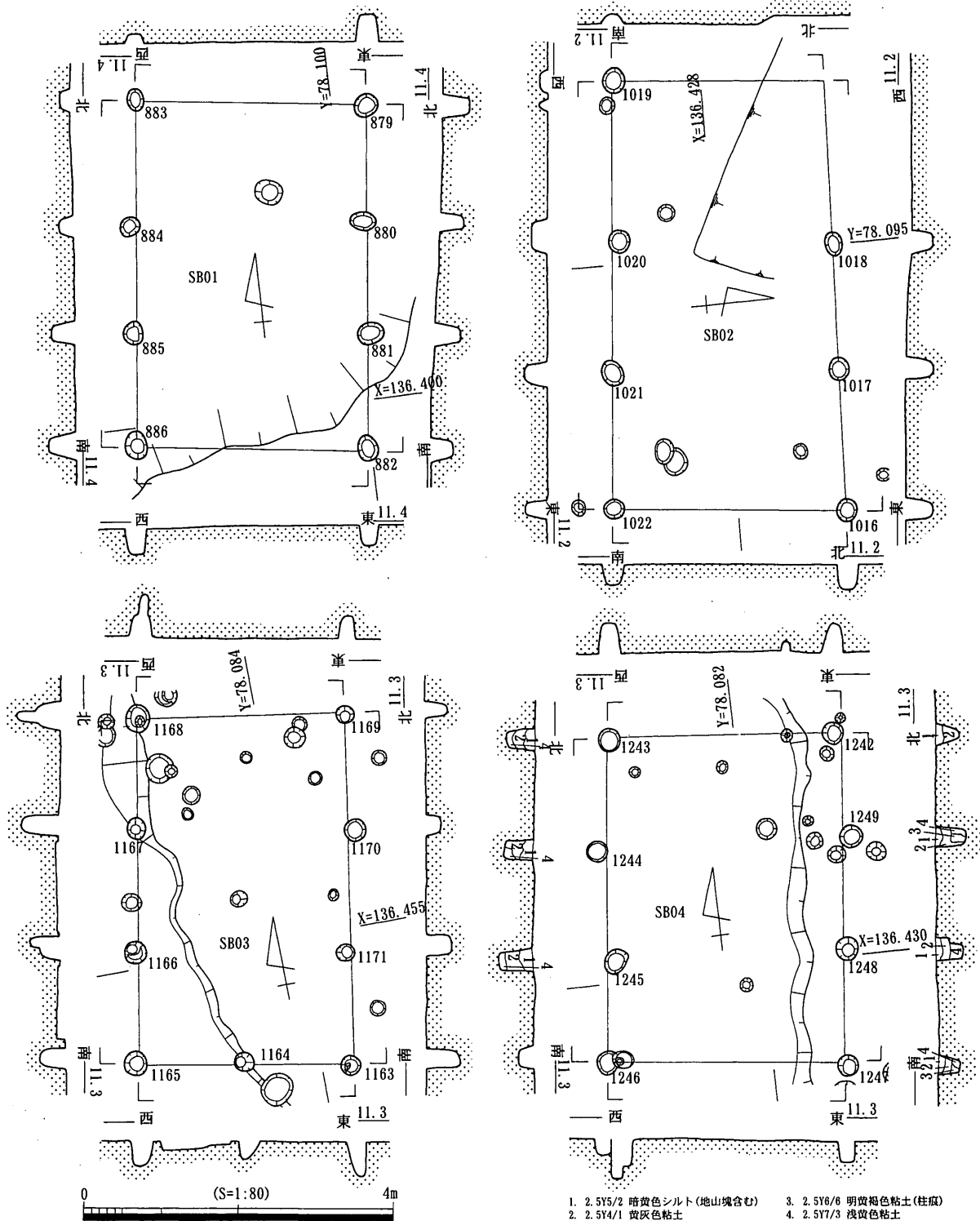
Ⅱ区S B 03

Ⅱ区北西部の微高地西縁と、低地帯である谷3に一部重複するX = 136.455 Y = 78.084付近で検出した、2×3間(2.8×4.4 m)の柱構造をもつ掘立柱建物である。切り合い関係はないが、北側にS B 04がかなり近接して構築されていることから、本建物と時間差をもつものと推定される。建物主軸は、座標北から9°西へ振った南北棟である。柱配置から想定される床面積は12.32 m²であり、南側の梁間のみ棟持柱が採用される。東側桁行の柱通りがやや悪いが、柱間は1.4 m前後と揃っている。柱穴は直径0.3 m前後を測り、柱穴底面の状況から柱痕は直径0.16 m程が復元される。

出土遺物は、土器細片のみであり時期決定に困難を伴うが、構築面の一部である谷3が弥生後期前葉までにほぼ埋没する状況から、弥生後期後葉を中心とした建物である可能性が高い。

Ⅱ区S B 04

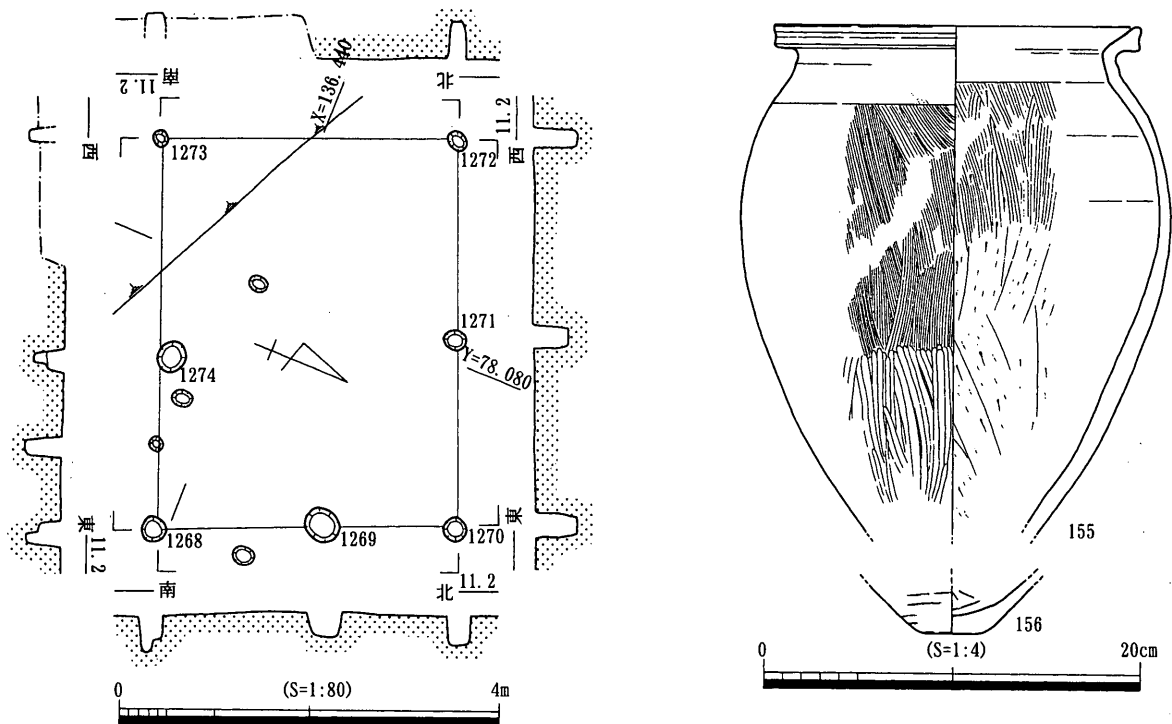
Ⅱ区微高地東側斜面から谷3の部分にかけてのX = 136.430 Y = 78.082付近で検出した1×3間(3.2×4.2 m)の柱構造をもつ掘立柱建物である。建物主軸は座標北から西へ4°振った南北棟であり、想定される床面積は13.44 m²である。柱穴は直径0.3 m前後のもので統一され、0.1 m程の柱痕が確認



第91図 II区 第2面SH01~04平・断面図

できる。西側の柱通りがやや乱れるが、柱間は1.4m前後と比較的揃っている。南側の近接するSB03とは梁間一辺の柱間に差異が見られるものの、梁間・桁行の長さや柱間、床面積・建物主軸等が酷似することから、極めて近接する時期に両者が立て替えられた可能性が高い。

時期決定可能な出土遺物は見られないが、谷3埋没後に構築されていることからSB03と同様弥生後期後葉を中心とした建物と考えたい。



第92図 II区 第2面SB05平・断面図及びSB02.05出土遺物実測図

II区SB05

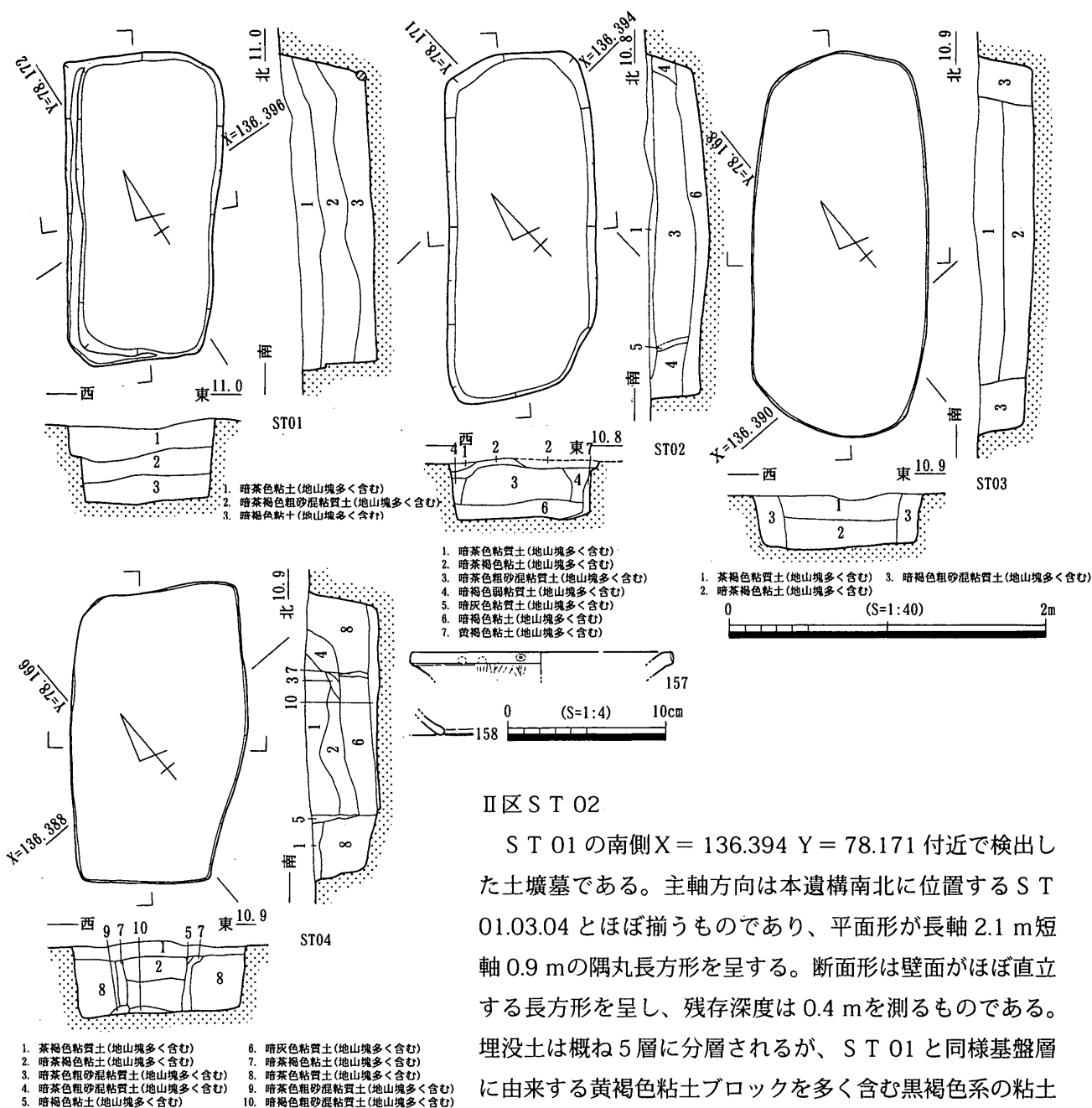
II区北西部の谷3上面の $X = 136.440$ $Y = 78.080$ 付近で検出した 2×2 間 (3.2×4 m) の柱構造をもつ掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 69° 西へ振った東西棟であり、想定される床面積は 12.8 m^2 を測る。東側の梁間のみ2間の柱構造となる。桁行の柱間は2 m前後と本調査区の第2検出面の建物と比べてやや長い。直径0.2 m前後の柱穴から構成されているが、明確な柱痕は検出できなかった。

出土遺物は、柱穴1269から矮小な平底をもつ156鉢底部片が出土している。谷3埋没後に構築されていることと、156の鉢が弥生後期後葉に比定されることから、本建物の廃絶時期を弥生後期後葉と推定する。

II区ST01

II区東部の扇状地の裾部 $X = 136.396$ $Y = 78.172$ 付近で検出した土壙墓である。本遺構の南側にはST02～04の土壙墓が列状に検出された。長軸1.9 m短軸0.9 mの隅丸長方形を呈し、残存深度0.52 mを測る。壁面はほぼ直立し、断面は長方形になる。埋没土は、基盤層に由来する径3 cm程の黄褐色粘土ブロックが多く含まれる黒褐色系の粘土を主体としている。概ね3層に分層しているが、巨視的には底面から上面まで同一層と捉えてよいだろう。

平・断面形や構築直後の埋め戻しが想定できる埋没土から見て、土壙墓と判断する。出土遺物は見られないが、検出面と本遺構南側に位置するST04の帰属時期を援用して、弥生後期後葉の所産と推定する。



第93図 II区 第2面ST01~04平・断面図
及びST04出土遺物実測図

II区 S T 02

S T 01 の南側 X = 136.394 Y = 78.171 付近で検出した土壙墓である。主軸方向は本遺構南北に位置する S T 01.03.04 とほぼ揃うものであり、平面形が長軸 2.1 m 短軸 0.9 m の隅丸長方形を呈する。断面形は壁面がほぼ直立する長方形を呈し、残存深度は 0.4 m を測るものである。埋没土は概ね 5 層に分層されるが、S T 01 と同様基盤層に由来する黄褐色粘土ブロックを多く含む黒褐色系の粘土によって充填されており、一気に埋め戻された可能性が高い。

平・断面形と埋没土の特徴から見て、土壙墓と思われる。

時期決定可能な出土遺物は見られないが、検出面の様相と同一群を成す S T 04 の帰属時期を援用して、弥生後期後葉の所産と推定しておく。

II区 S T 03

S T 02 南側の X = 136.390 Y = 78.168 付近で検出した土壙墓である。主軸方位は隣接する S T 01.02.04 と同様であり、長軸 2.4 m 短軸 1.1 m 程の隅丸長方形の平面形をもつ。残存深度は 0.3 m 程を測り、断面形は長方形である。埋没土は基盤層の黄褐色粘土ブロックを含む黒褐色系の粘土を主体としており、概ね 3 層に分層しているが、ほぼ同一層と見られる。ブロック土が多く含まれることから、

掘削後の早い段階に埋め戻された可能性があることと、平・断面形態から土壙墓として報告する。

時期決定可能な出土遺物は見られないが、主軸方向を揃えて構築されている S T 04 の時期を援用し、弥生後期後葉の所産と考える。

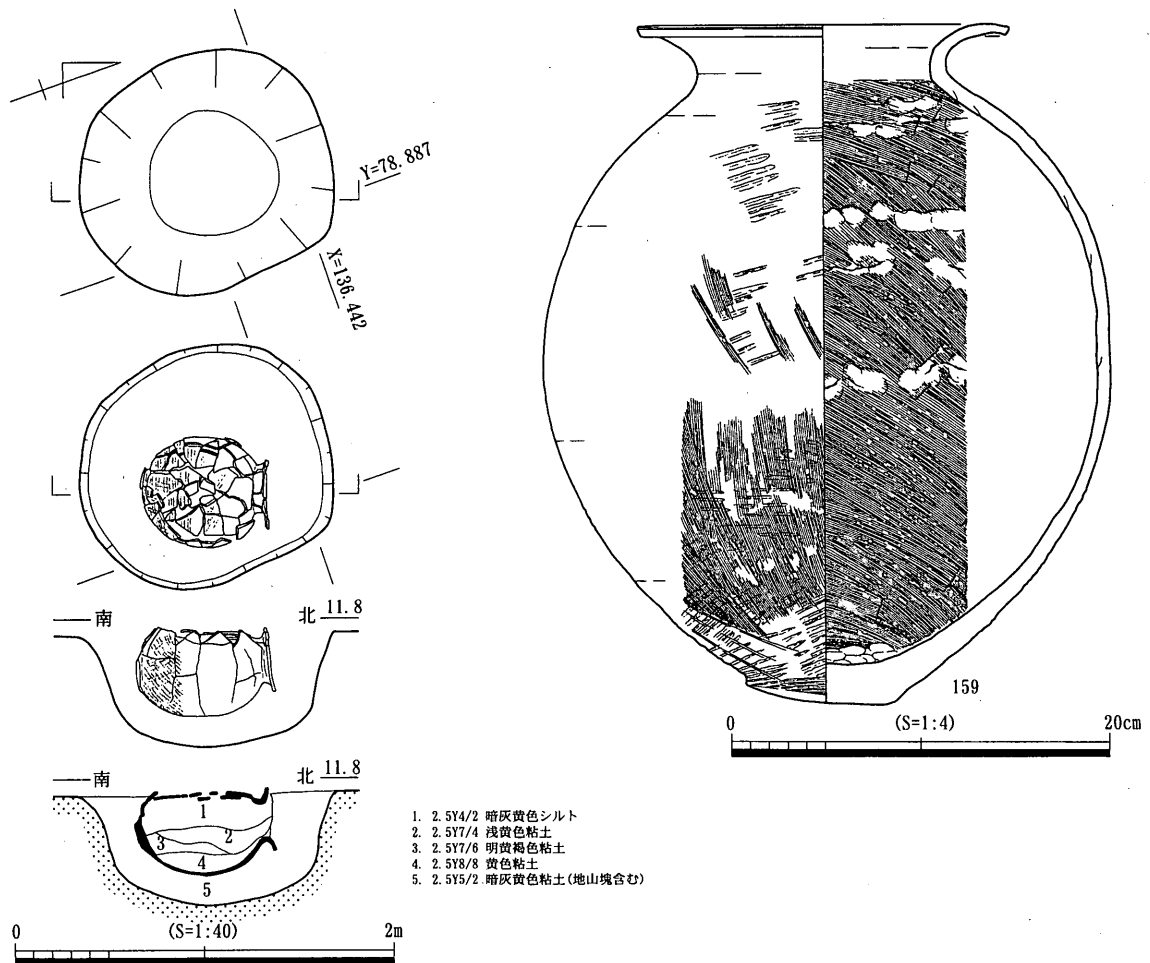
II区 S T 04

S T 01 ~ 03 の延長上に位置する X = 136.388 Y = 78.166 付近で検出した土壙墓である。平面形が長軸 1.8 m 短軸 1.1 m 程の隅丸長方形を呈し、断面形は壁面が直立する長方形であり、残存深度 0.4 m を測る。埋没土は数層に分層されているが、主体となるのは、基盤層に由来する黄褐色粘土ブロックを多く含む黒褐色粘土であり、掘削後の早い段階に埋め戻された可能性が指摘できる。

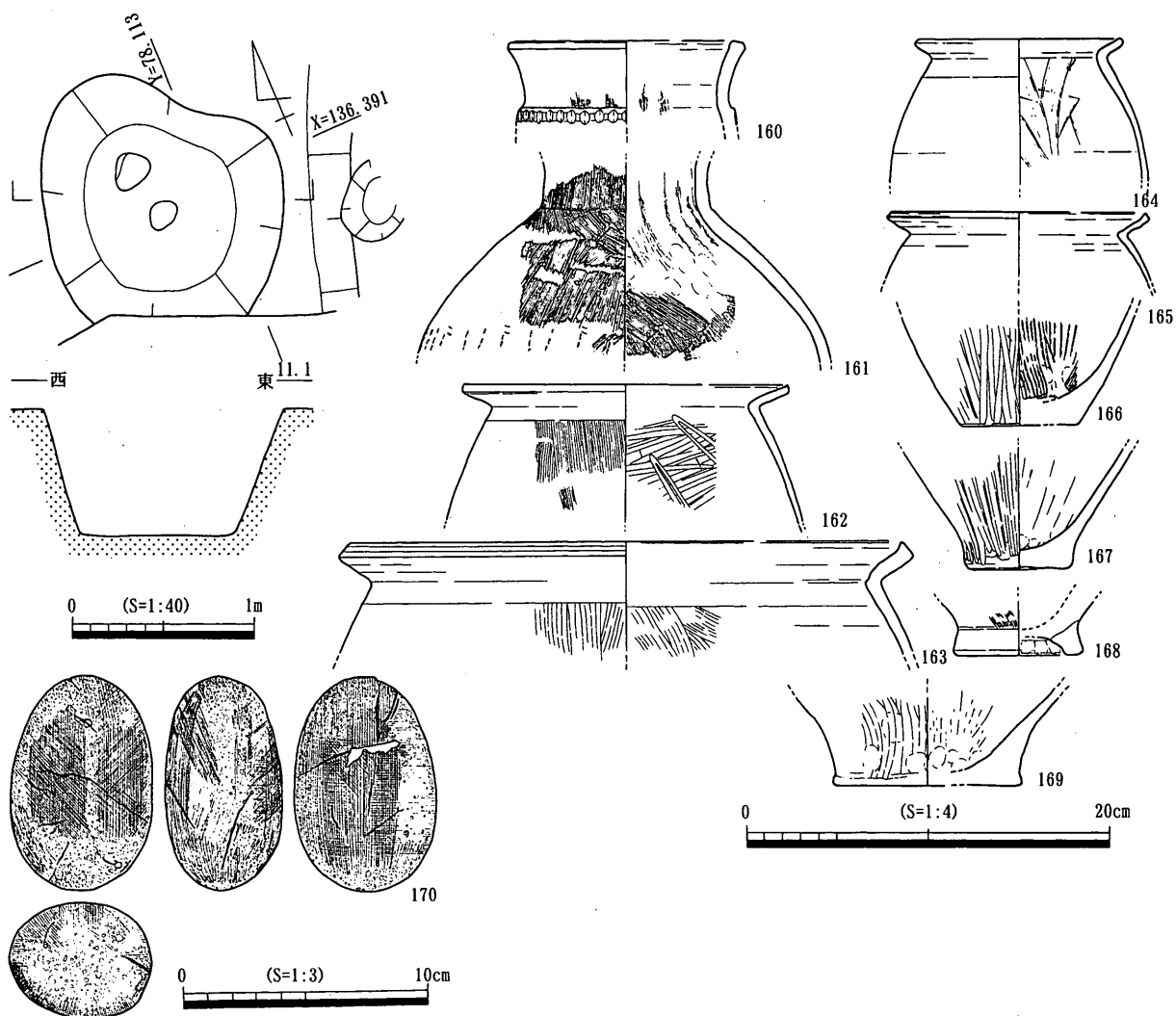
出土遺物はこの埋め戻し土から 157 の広口壺の口縁部と 158 の高杯脚部？小片がある。158 の広口壺が概ね弥生後期後葉に比定されることから、本遺構の帰属時期を同時期に推定する。

II区 S T 05

II -6 区 X = 136.442 Y = 78.887 付近で検出した土器棺墓である。直径 1.2 m 程の平面形が円形を呈し、深さ 0.6 m を測る掘り方に、口縁部を北側へ向け器体を水平方向に埋置する。159 の広口壺以外に他個体は確認できないことから、土器利用した蓋の存在は想定できない。打ち欠き・穿孔等の痕跡は



第94図 II区 第2面ST05平・断面図及び出土遺物実測図



第95図 II区 第2面検出面SE02平・断面図及び出土遺物実測図

見られなかった。159は中形の広口壺であり、胴部外面には平行タタキ内面に密な縦ハケ調整が見られる。底部は安定した平底をもつものであり、弥生後期後葉段階の所産と推定される。この土器の帰属時期を援用し、本遺構の帰属時期を弥生後期後葉段階に比定する。

II区第2面SE02

II-5区X=136.391 Y=78.113付近の微高地上で検出した井戸である。本遺構上層には落ち込み1が存在し、この埋没土を除去した段階で平面プランを検出した。1.4m程の円形を呈し、残存深度0.7m程を測り、底面には径0.2m程の砂岩礫と土器片が見られる。底面レベルが透水層に到達しているかどうかの確認が出来ていないが、深度や断面形から井戸としての機能を推定する。

160～170は砂岩礫とともに底面付近からまとめて出土した一群である。160は頸部に刻み目をもつ押捺突帯を施す直口壺である。161の広口壺の胴部最大径付近には、ハケ原体による列点文が見られる。162～169は甕の口縁・底部片である。163は肥厚される口縁部外面に1条の凹線文が見られる。162.164.165は、跳ね上げ口縁をもつ甕であるが、165口縁部外面には1条の凹線文が確認できる。168は上げ底を呈する甕底部片である。170の安山岩質斑岩製の敲石は、上下縁に敲打痕が認められるが、全体的に磨耗しており磨石転用の可能性がある。

出土遺物の様相は、甕の凹線手法のバラツキに示されるように凹線文の出現期を示していると思われる。この出土遺物の帰属時期を援用し、本遺構が弥生中期中葉段階に廃絶したものと推定する。

Ⅱ区第2面SK 09

Ⅱ-2区の谷底低地と扇状地との変換点 $X = 136377$ $Y = 78.166$ 付近で検出した直径2.2 m程を測る円形土坑である。残存深度は0.3 m程を測り、断面形はU字状を呈する。埋没土は6層に分層され、最上層の1層中より花崗岩・砂岩礫と171～177.180の土器片が集中して検出された。

171.172は長頸壺の頸部片であり、171にはハケ原体による列点文が見られる。173.174は平底を留める甕底部片である。175は小型の鉢底部片と見られる。176.177の甕は口縁部形態や調整手法、胎土中に雲母片を多く含むことから高松平野かその周辺地域からの搬入品と考えられる。180の壺は、頸部に押捺突帯を施す弥生中期中葉段階の混入品である。

180の混入品を除いた出土遺物は、弥生後期後葉段階のもので占められることから、本遺構の廃絶時期を弥生後期後葉に推定する。

Ⅱ区第2面SK 12

Ⅱ-2区の微高地東縁辺部の $X = 136.373$ $Y = 78.121$ 付近で検出した土坑である。平面形が長軸3.2 m短軸2.0 m程の歪な楕円形を呈し、0.2 m程の深度を測る。底面はほぼフラットであり、壁面は緩やかに立ち上がる。南半部の底面には焼土化した箇所が見受けられるが、他の底面や壁面に同様の箇所は存在しない。土器焼成の性格を想定したが、出土遺物に焼成中破損が見られるものが存在しないことから、具体的な機能は不明である。埋没土上位の1層から178～183の土器・石器が出土している。

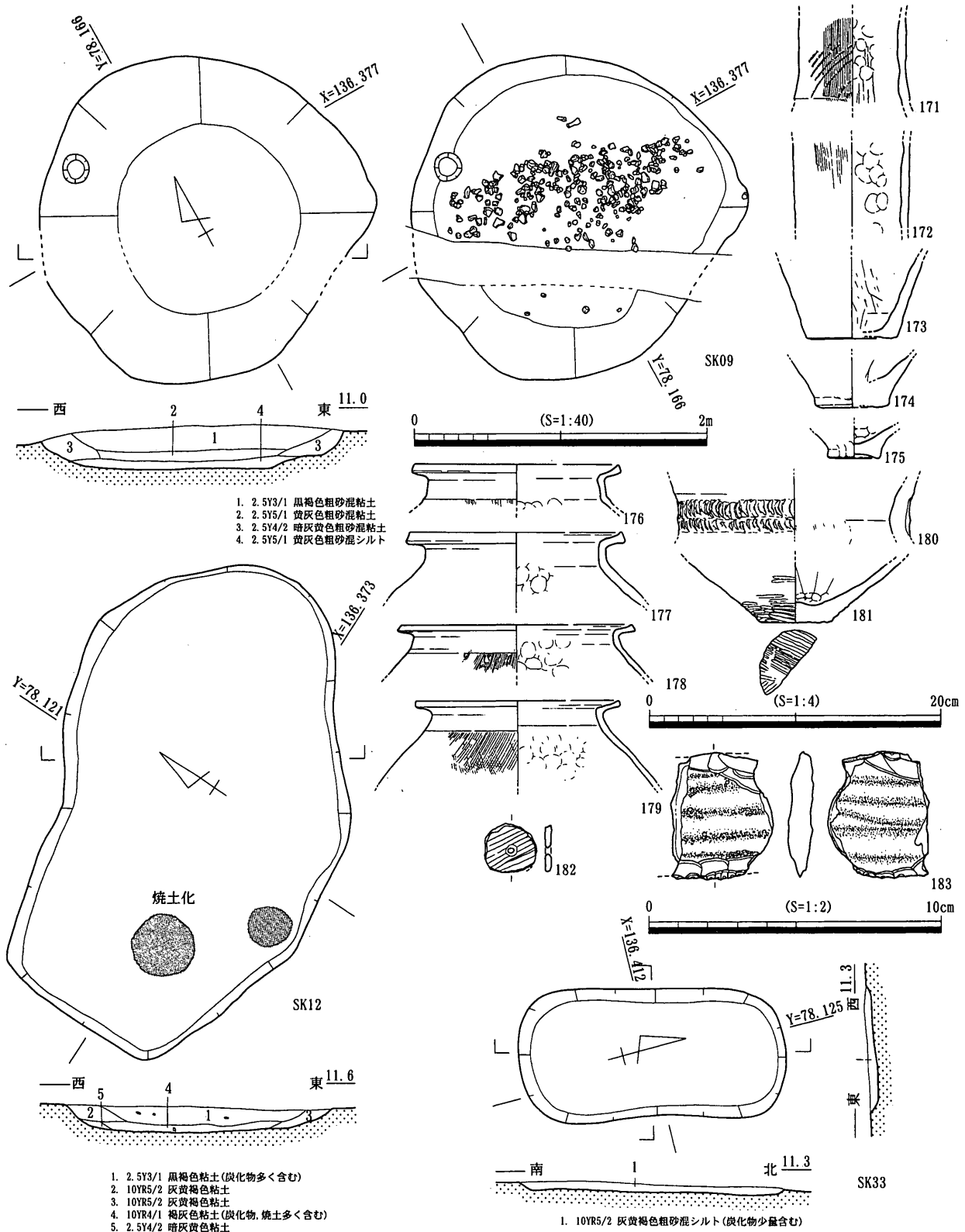
178.179の甕口縁部片は、形態・調整や胎土中に雲母・角閃石が含まれることから高松平野かその周辺地域からの搬入品である。180は底部外面に平底成形に関係した平行タタキを留める甕底部片である。182は甕胴部片を転用した紡錘車である。183は紅簾片岩製の不抉の打製石庖丁片である。刃部を中心に強い磨耗痕が観察される。178.179の甕口縁部や181の底部形態から、本遺構が弥生後期後葉段階に形成されたと考える。

Ⅱ区第2面SK 34

Ⅱ-6区 $X = 136.417$ $Y = 78.096$ 付近で検出した土坑である。平面形が直径2.6 m程の円形を呈し、残存深度0.15 m程を測る。壁面は緩やかに立ち上がり、暗オリーブ褐色粘土の単一層の中に砂岩礫が疎らに見られた。時期決定可能な遺物は出土していないが、埋没土中より弥生土器細片が出土していることと、検出面の様相から弥生期の所産と推定する。

Ⅱ区第2面SK 35

Ⅱ-6区 $X = 136.420$ $Y = 78.092$ 付近の微高地上で確認した土坑である。長軸3.2 m短軸0.6 m程の舟形を呈し、残存深度0.1 mを測る。埋没土は灰色粗砂混粘土の単一層である。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土中から弥生土器細片が出土していることと、検出面の様相から弥生期の所産と考えられる。



第96図 II区 第2面SK09, 12, 33平・断面図及び出土遺物実測図

II区第2面SK33

II-4区微高地上のX = 136.412 Y = 78.125付近で検出した長軸1.8m短軸0.9m程の隅丸長方形を呈する土坑である。残存深度が0.1m程しか確認できなかったことから、本来的には第1検出面に帰属する遺構の可能性がある。埋没土中からは土器細片が出土しているが、時期決定には至っていない。

II区第2面SK41

II-7区 X = 136.415 Y = 78.083 付近で検出した土坑である。平面形は長軸 1.5 m 短軸 1.3 m 程の楕円形を呈し、残存深度 0.3 m 程を測る。埋没土は上下 2 層に分層され、下層からは砂岩・花崗岩礫と土器片が絡み合って一括して出土している。これらの礫群には人的加工を行った痕跡は一切見られない。

184 ~ 192 は出土遺物である。184 は直口壺口縁部である。185 広口壺口縁部内面には、櫛描文原体による斜格子文が確認できる。186 は広口壺の頸部片である。187 は長胴形の壺であり、現存で胴部外面に 3 帯の櫛描波状文と円形浮文を施す。赤褐色系の焼き上がり胎土中に片岩粒を含むことから、阿波地域からの搬入品と考えられる。188 ~ 192 は甕の口縁部・底部片である。188 ~ 190 は強い横ナデ調整によって口縁端部が跳ね上げ状に成形され、胴部内面には僅かながらヘラケズリ痕が確認できる。

口縁端部等に凹線手法が見られないものの、188 ~ 190 の口縁形態から凹線文出現直前の様相を示していると考えられることから、本遺構の廃絶時期を弥生中期中葉段階と推定する。

II区第2面SK47

II-5区 X = 136.399 Y = 78.120 付近で検出した 1 × 0.7 m 程の楕円形を呈する土坑である。残存深度 0.1 m 程であり、埋没土は暗褐色粘質土の単一層である。弥生中期中葉段階に比定される 193 の甕口縁部が出土している。

II区第2面SK60

II-8.9区 X = 136.388 Y = 78.091 付近で検出した土坑である。南辺を弥生後期後葉段階の SH08 によって破壊されるが、長軸 5.5 m 短軸 0.4 m 程の不整な楕円形を呈し残存深度は 0.3 m を測る。埋没土は 2 層に区分され、北半部の上層より砂岩礫と 194 ~ 201 の土器群が一括して出土している。

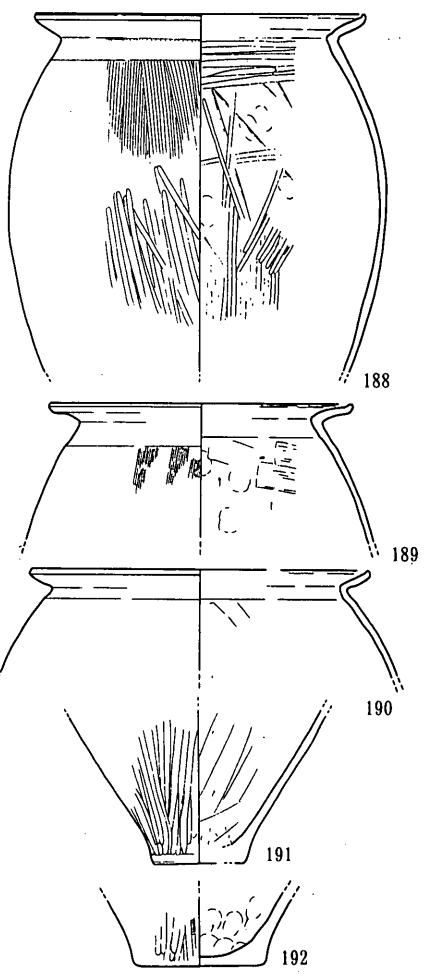
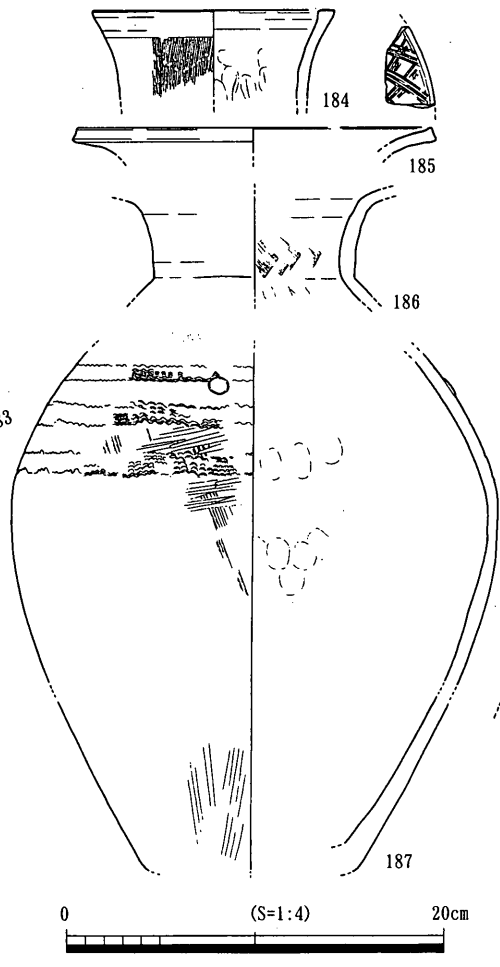
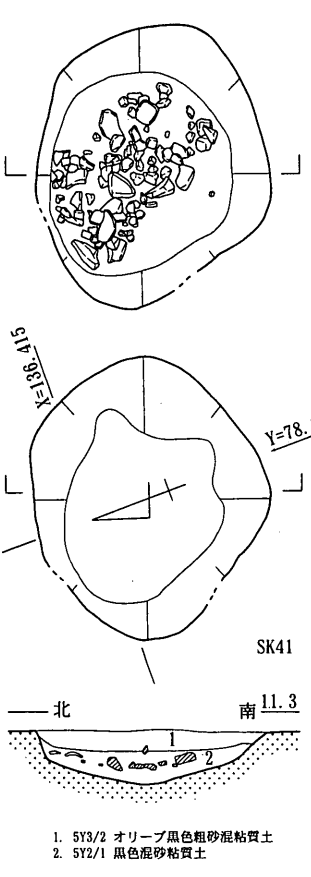
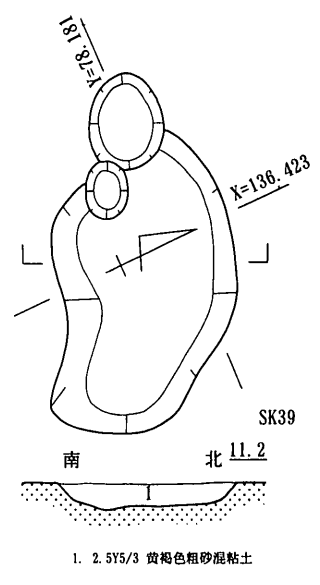
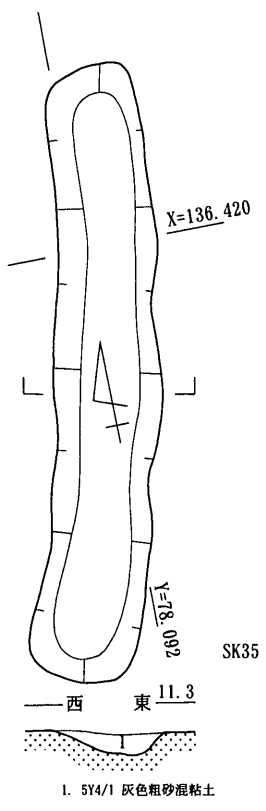
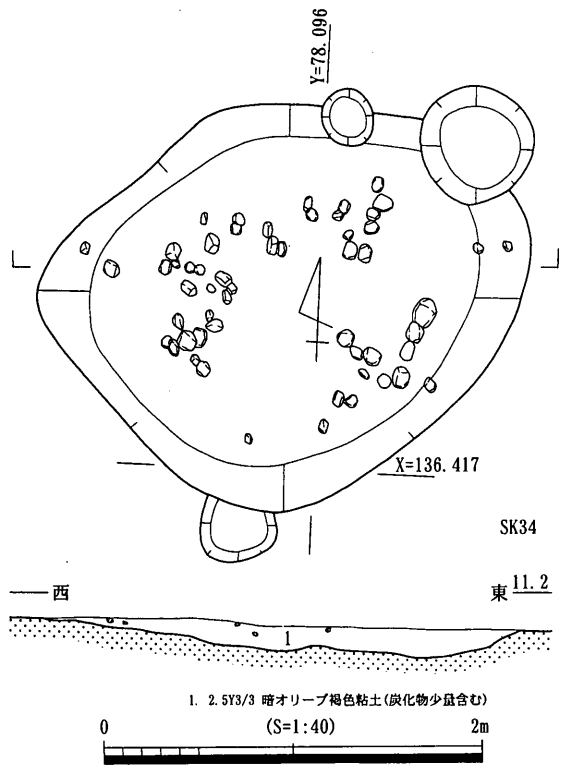
194 ~ 197 は広口壺の口縁部である。194.195 の口縁部内外面にはヘラ描き・櫛描による斜格子文が施される。196.197 の口縁部外面には凹線文が見られ、197 はその上面を刻む。198 は壺底部片であり、外面の縦ミガキ下位にはヘラケズリが確認できる。199 は方形透かしをもつ台付鉢の脚部である。200.201 は口縁端部を面取りする甕であり、明瞭な凹線文は見られないものの口縁端部外面が強い横ナデ調整によって窪む。196.197 に見られる凹線文や、197 の凹線文上面を刻む施文手法から、凹線文出現期の土器群に位置づけられる。

II区第2面SK66

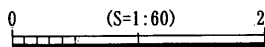
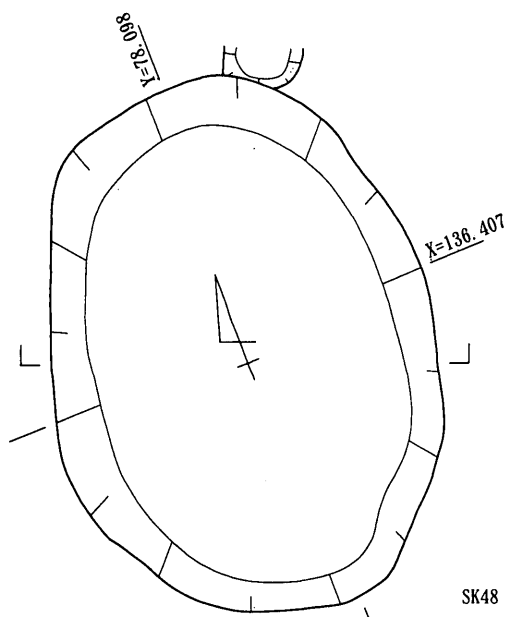
II-9区の微高地西縁辺部 X = 136.386 Y = 78.084 付近で検出した長軸 3.1 m 短軸 1.7 m 程の楕円形を呈する土坑である。残存深度 0.4 m 程を測り、断面形は緩い U 字形である。埋没土は 3 層に区分されるが、いずれにも炭化物粒を多く交えるが、底面・壁面ともに被熱痕は認められない。出土遺物は一切確認できなかったが、検出面の様相から弥生期に属すると推察される。

II区第2面SK69

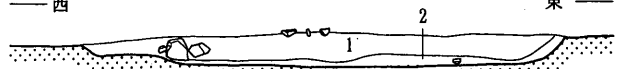
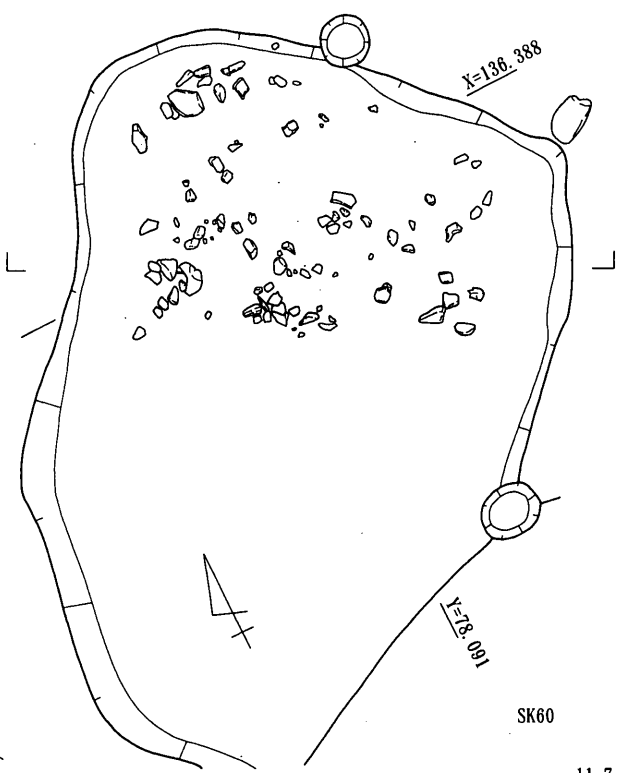
II-9区の微高地西縁辺部の X = 136.380 Y = 78.184 付近で検出した長軸 4.1 m 短軸 3.6 m 程の楕円形を呈する土坑である。最深部で 1.2 m 程の深度を測るが、底面中央にテラス部分をもちその両側が



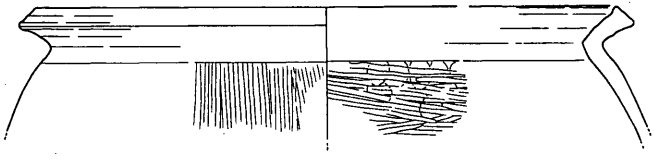
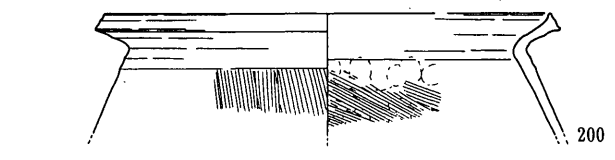
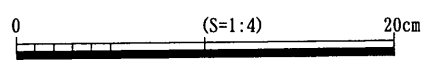
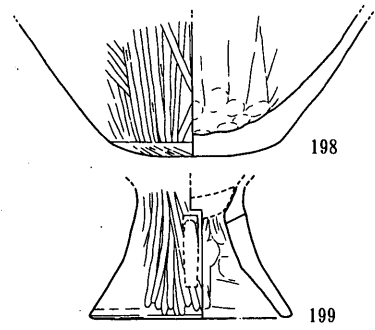
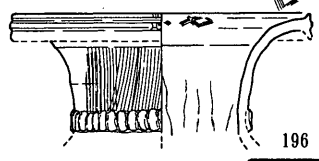
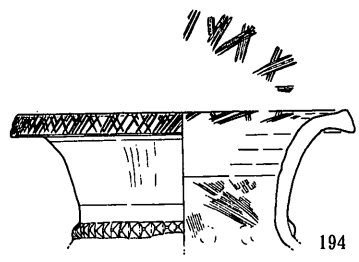
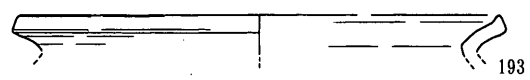
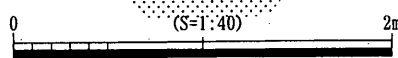
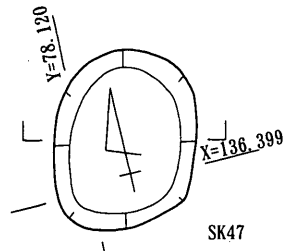
第97図 II区 第2面SK34. 35. 39. 41平・断面図及びSK41出土遺物実測図



- 1. 10YR4/2 灰黄褐色粘土
- 2. 10YR7/6 明黄褐色シルト
- 3. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト



- 1. 5Y4/1 灰色粗砂
- 2. 5Y3/1 オリーブ黒色中粒砂(炭化物少量含む)

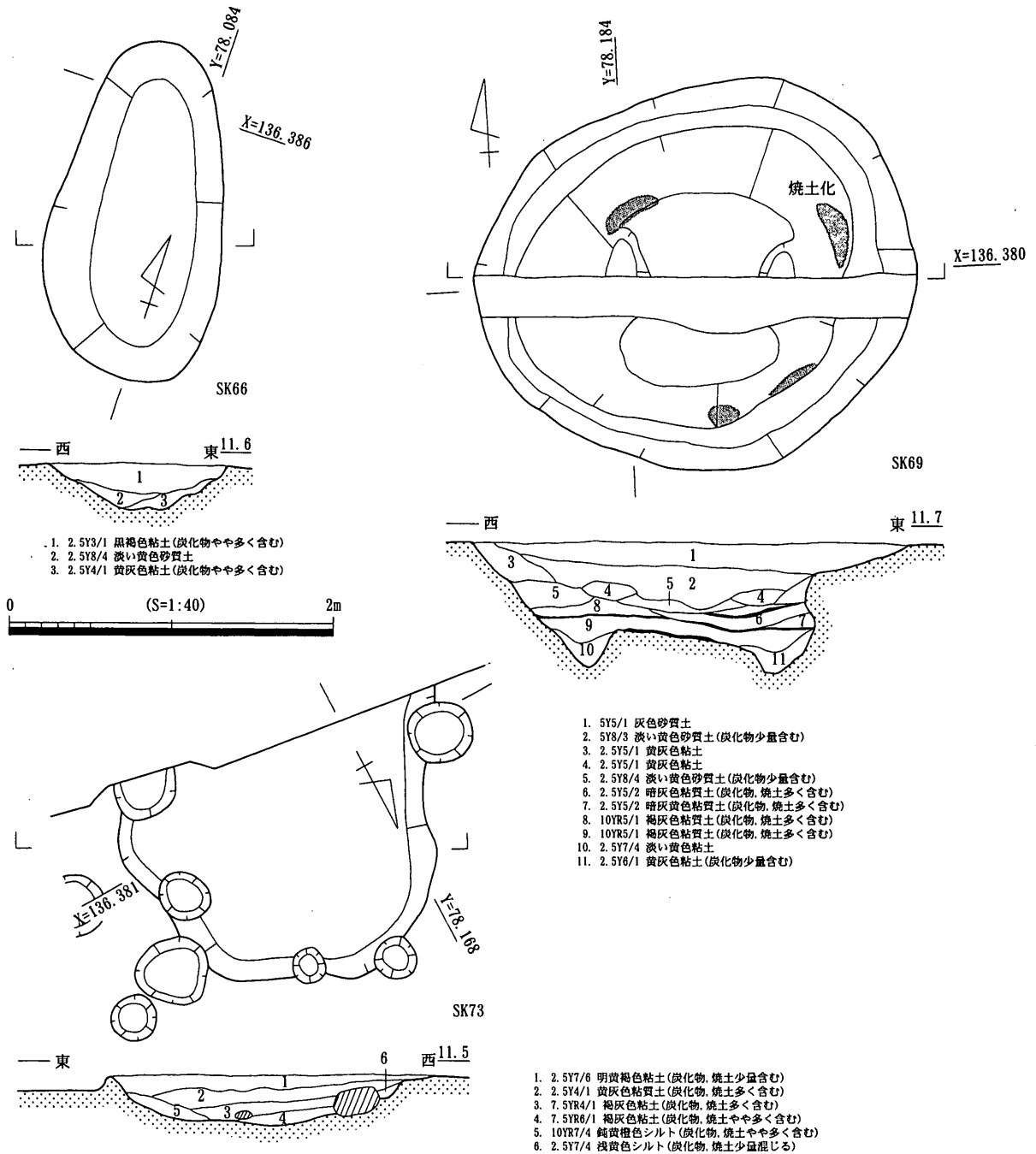


第98図 II区 第2面SK47. 48. 60平・断面図及びSK47出土遺物実測図

溝状に窪む。埋没土は11層に区分されるが、中位から下位にかけて層境と中央テラス部分直上に炭化物を帯状に交える。壁面の数箇所には焦土化した部分が観察され、何らかの焼成施設に伴う遺構である可能性が高いが、出土遺物が一切認められないことから、特定することは難しい。また、中央のテラス部分両側の溝状の窪みの機能についても不明とせざるを得ない。出土炭化材の一部を樹種同定したところ、すべてケヤキであることが判明している。出土遺物は見られないが、検出面の様相から弥生期に属するものと見られる。

II区第2面SK73

II-9区低地部分X=136.381 Y=78.168付近で検出した土坑である。南半部が調査区外へ延びるが、現状で長軸2.2m以上短軸2.8m程の歪な隅丸方形の平面形をもつものと思われる。断面形は緩い逆台



第99図 II区 第2面SK66. 69. 73平・断面図

形であり、下位の埋没土を中心に焼土塊・炭化物粒が多く出土した。底面・壁面に熱変箇所が観察されないことから、これらは二次的に投棄されたものと見られる。出土遺物には土器細片が見られるが、時期決定に耐えうるものではない。検出面の様相から、弥生期に属するものと判断される。

Ⅱ区第2面SD 06～08

Ⅱ-1・2区東部で検出した溝状遺構である。いずれも上面幅0.15～0.2m深さ0.1m程を測り、断面形はU字状で極めて小規模なものである。1m程で途切れる点を合わせて考慮すると、竪穴住居壁溝の残骸可能性があるが、検証する材料は無い。時期決定可能な出土遺物は見られないが、検出面の様相から弥生期の所産と思われる。

Ⅱ区第2面SD 09

Ⅱ-1区中央部で検出した溝状遺構である。上面幅0.9～1.1m残存深度0.1m程を測り、延長10mにわたって検出された。深さが浅い点と谷1南側の延長線上の低地中央部で検出していることから、自然地形の落ち込みである可能性が高い。埋没土中から弥生後期後葉段階に比定される甕202が出土している。

Ⅱ区第2面SD 10

Ⅱ-1区南部の微高地東側斜面で検出した溝状遺構である。上面幅0.4m深さ0.2m程を測り、U字状の断面をもつ。8m程にわたって検出しており、北側が緩く西へ屈曲して途切れる。時期決定可能な出土遺物は見られないが、検出面の様相から弥生期の所産と推定される。

Ⅱ区第2面SD 11

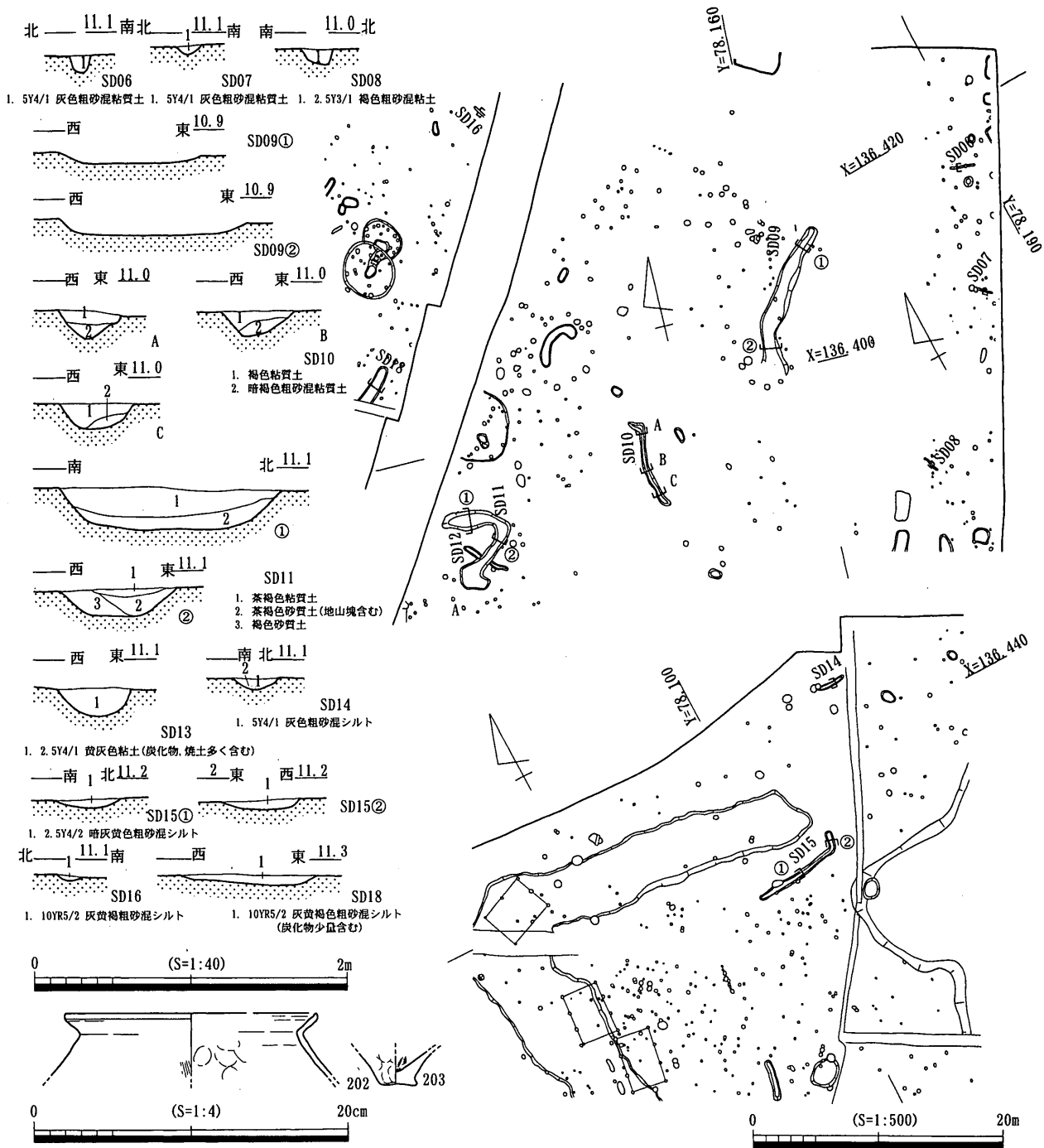
Ⅱ-2区西部の微高地東斜面で検出した溝状遺構である。上面幅0.7～1.3m深さ0.2～0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。平面形が極めて不整形であり、U字形を呈することから人的なものではないと推察される。

Ⅱ区第2面SD 14

Ⅱ-6区北東部で検出した溝状遺構である。上面幅0.2～0.4m深さ0.1～0.2mを測り、断面形はU字状を呈する。約2m程で途切れることや、微高地上で検出していることから、居住に関係した遺構と思われるが、性格付けは困難である。時期決定可能な出土遺物は見られないが、検出面の様相から見て弥生期の所産と推定される。

Ⅱ区第2面SD 15

Ⅱ-6区中央部で検出した溝状遺構である。上面幅0.4m深さ0.1m程を測り、延長8m程にわたって検出された。微高地上に位置するものの、深度から見て自然地形の可能性が高い。埋没土中から、後期後葉段階の小型鉢底部片203が出土している。

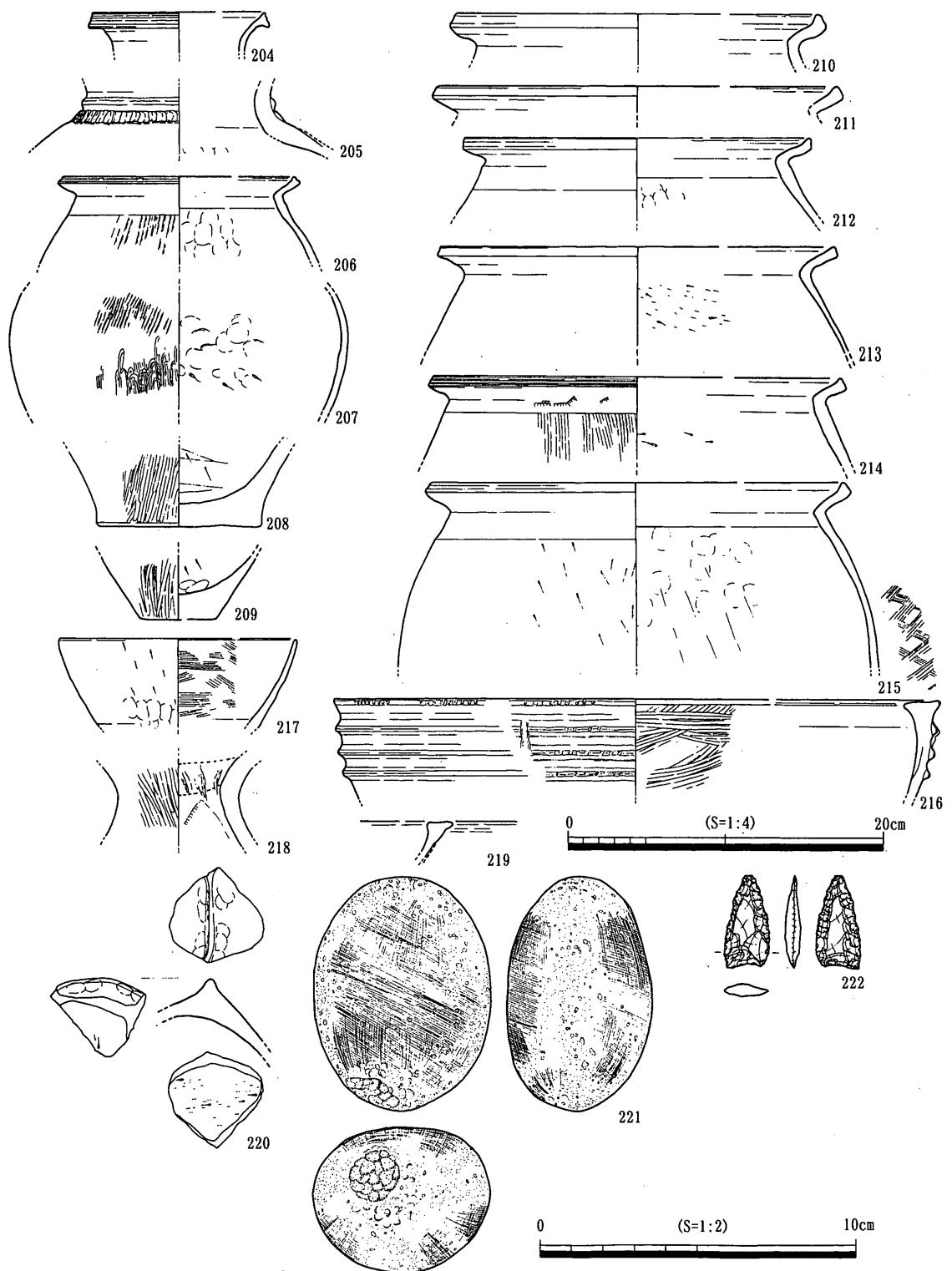


第100図 II区 第2面SD06他平・断面図及び出土遺物実測図

II区第2面柱穴出土遺物

ここで掲載する遺物は、建物を構成する柱穴から出土しながらも、明確に建物を復元することができなかった遺物である。

204.205は、柱穴1740から出土した弥生中期後葉段階の広口壺口縁部・肩部片である。205は、頸胴界に断面三角形突帯と押捺突帯を併用し稀な存在である。206は柱穴257から出土した凹線文出現期の甕口縁部である。跳ね上げ状の口縁端部に1条の凹線文を認める。207は柱穴850から出土した後期後葉段階の甕胴部最大径付近の破片である。胎土・器形から見て高松平野北東部地域からの搬入品と思われる。208は柱穴1756から出土した中期後葉段階の甕底部片である。209は柱穴212からの中期後葉段階の壺底部片であり、外面の縦ミガキ下位にはケズリが認められる。210.212は柱穴



第101図 II区 第2面SP出土遺物実測図

1733 出土の凹線文出現期の甕口縁部。211 は、口縁端部内面が僅かに肥厚される中期中葉段階の甕口縁部であり、柱穴 1281 から出土している。213.214 は柱穴 699 から出土した中期後葉段階の甕口縁部である。213 の口縁端部外面には凹線文が認められないが、形態から 214 と同じく凹線文出現期の所産と推定される。215 は柱穴 1082 から出土した中期後葉段階の甕口縁部。216 は柱穴 1542 から出土した中期中葉の台付鉢の口縁部である。口縁部下には上面を刻む 3 条の貼り付け突帯を施し、口

縁端部上面に櫛描による格子文を認める。217は柱穴1745から出土した後期後葉段階の小形鉢口縁部。218は柱穴1756から出土した中期中葉～後葉段階の台付鉢の脚部と鉢部の接合部分の破片である。219は台付鉢の口縁部の小片で、柱穴538から出土した。220の柱穴699出土の小片は、曲線をなす器形をもち、外面に断面三角形の突帯を1条施すもので、器種を特定できない。213.214の凹線文出現期の甕と共伴していることから中期後葉の所産と推定される。221は柱穴1756から出土した安山岩質斑岩製の敲石である。上下面の敲打痕に加えて全体的に磨耗しており磨石転用の可能性が高い。222は凹基無莖式の打製石鏃であり、柱穴1581から出土した。

Ⅱ区第2面SX01

上層礫群

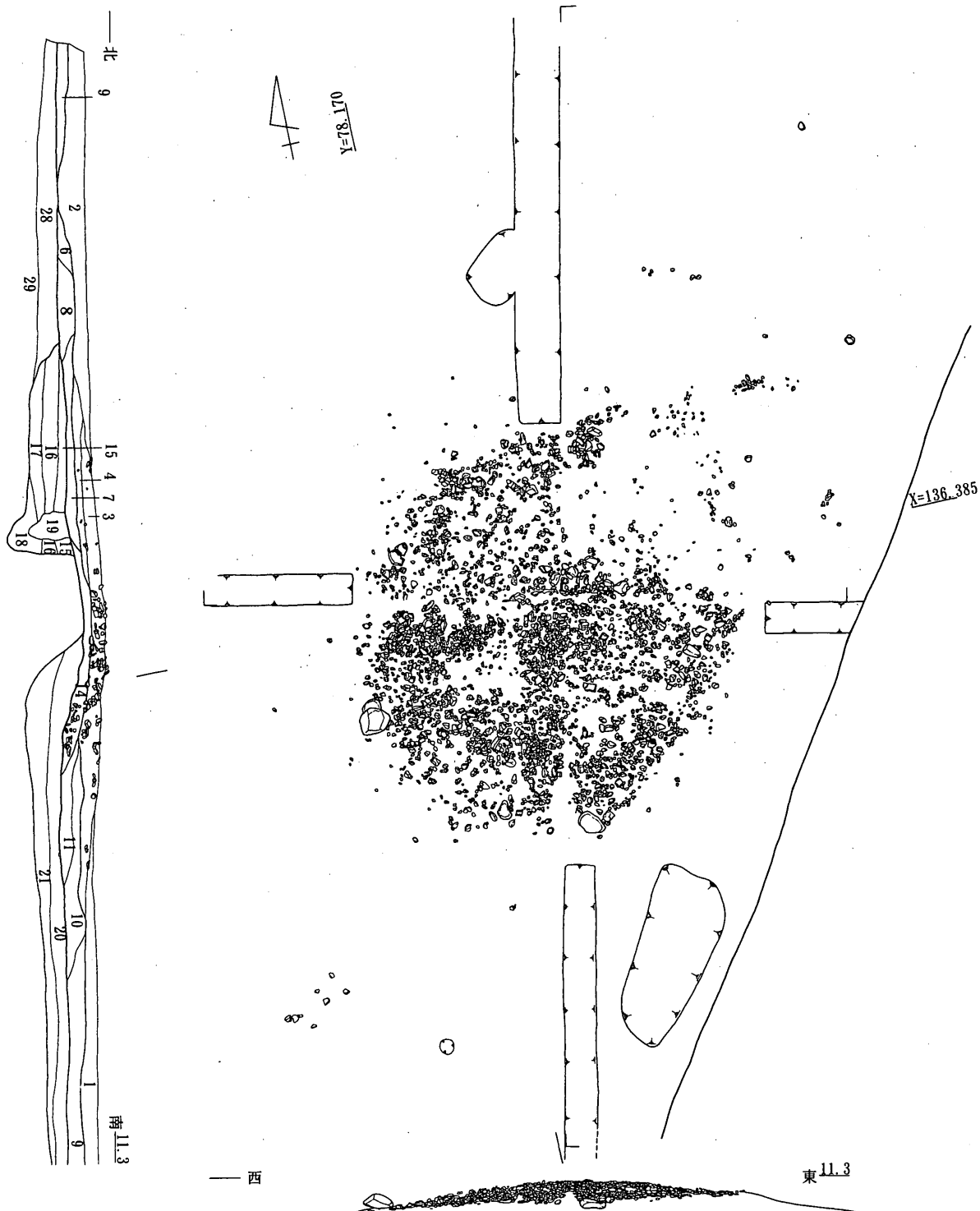
Ⅱ区東部の扇状地裾部X = 136.385 Y = 78.170付近で検出した礫・土器から構成される不明遺構である。第1検出面調査終了後、第2検出面との間の堆積層を掘り下げる段階で長軸約5m短軸約4mの範囲に礫・土器の集中が認められた。礫・土器群は、断面図において1.2層とした第1検出面の基盤土と、第1・2検出面間の堆積層である6～12層との間に集中が見られる。断面観察では、礫・土器群に伴う掘り込みは確認できなかったことから、先の6～12層上面に廃棄あるいは集中して置かれた状態と見られる。第1・2検出面間で確認していることから、帰属する検出面の確定に戸惑ったが、遺物の出土状況や層位関係から第2検出面上位に別の検出面ないし遺構面が存在していた可能性が高い。また、自然堆積によって形成された可能性を考慮したが、礫群に方向性が見られないことから、人的に形成された遺構と判断した。

礫群を構成する石材は、一部人頭大のものが見られるが径5～15cm程の砂岩礫を主体とし花崗岩礫も少量見られる。その分布状況は、北東から南西方向へ延びる楕円形を呈し、南東部分では希薄である。礫群を構成する砂岩・花崗岩礫は、すべてに円摩した状況が観察され、基盤層中に包含されるものに類似する。確認した限りでは敲石等の人的行為が加わったものは見られない。巨視的には、楕円形の範囲に集中が認められるものの、この部分から遊離した状態で、周囲に散在する礫や土器片も少なからず認められた。礫・土器集中が認められる部分には3層とした粘土層が分布しているが、地山塊を含まないことから、礫・土器投棄に伴う意識的な客土と見ることはできない。

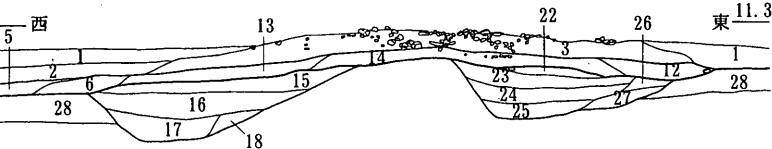
礫群の隙間には、細片化した土器片と結晶片岩製の石庖丁やサヌカイト製打製石鏃等が見られた。また、その組成に関しては日用品を主体とし、意図的に加えられた特殊な遺物は認められない。遺物は礫にほぼ対応する形で分布しており、接合関係が認められるものも存在する。接合関係を見ると、一定箇所集中する傾向は認められないが、出土遺物に時間幅が見られることから、形成に際して一定期間見積もる必要がある。

下層礫群

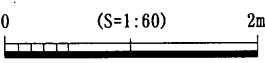
上層礫群を除去すると、南西部分の下位において別の礫群と、更にその下位より井戸と考えられる土坑(SE01)を検出した。調査当初、上層の礫群とレベル的に連続する部分が存在したことから、両者が一連の遺構である可能性を想定したが、間層を介在させる箇所が存在することや、SE01の上層礫群の下位から掘り込まれた状況は確認できなかったことから、一連のものと捉えられない。下層の礫群やSE01の出土遺物は、弥生中期後葉段階のもので占められており、型的にもかなりの時間差をもって形成されたものであると推測できる。



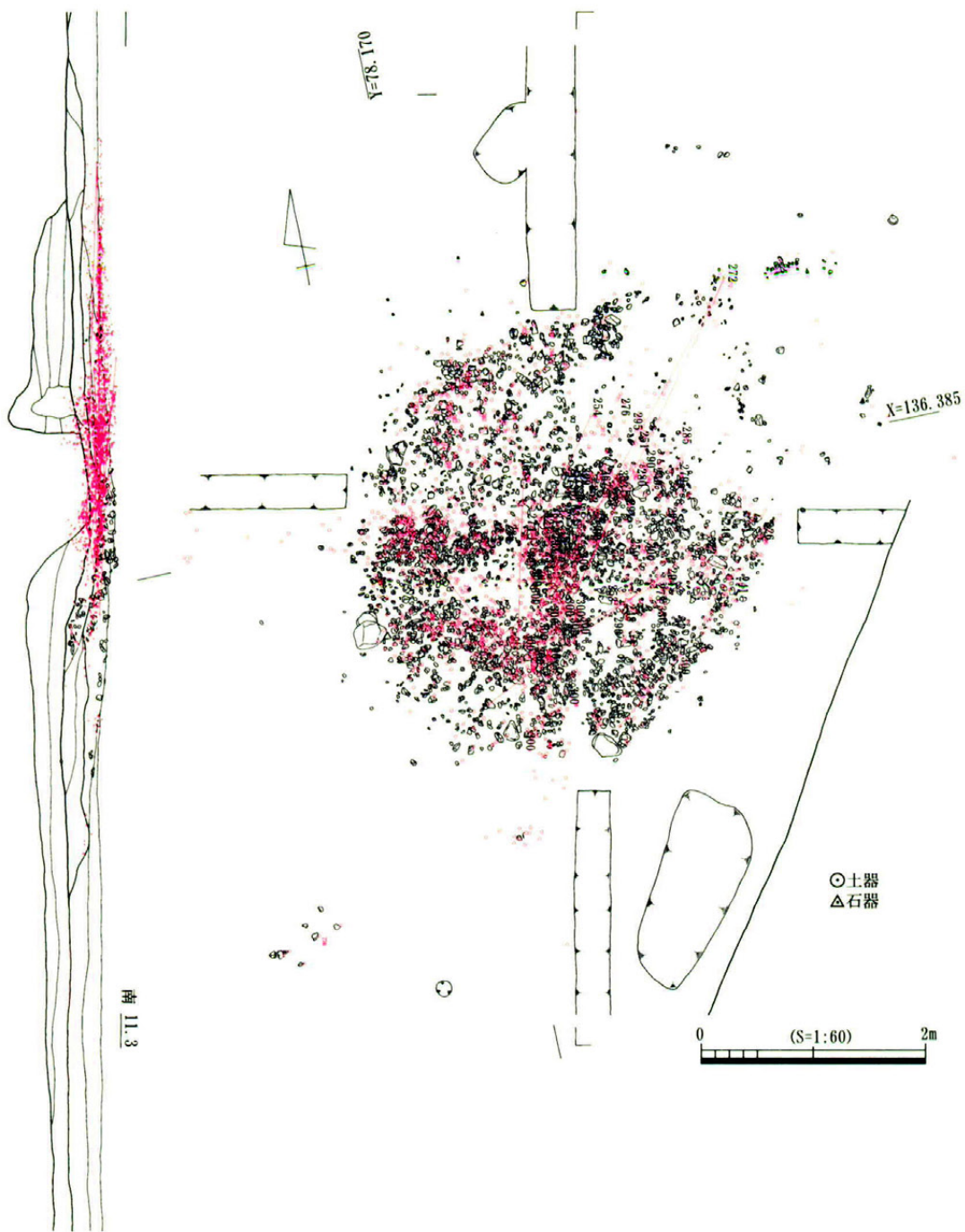
- 1. 5Y7/3 浅黄色粘土(第1面基盤土)
- 2. 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混粘質土
- 3. 2.5Y6/1 黄灰色粘土(上層礫群)
- 4. 2.5Y4/1 黄灰色粘土(上層礫群)
- 5. 7.5Y5/1 粗砂混灰黄色粘土
- 6. 5Y5/1 灰色粘土
- 7. 5Y4/1 灰色粘土
- 8. 2.5Y7/6 明黄褐色粗砂混粘土
- 9. N5/ 灰色粗砂
- 10. 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土
- 11. 5Y4/1 灰色粘質土
- 12. 10YR4/1 褐灰色粘質土
- 13. 5Y4/1 灰色粘土
- 14. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土(下層礫群)
- 15. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土(下層流路)



- 16. 7.5Y5/1 灰色粗砂(下層流路, ラミナ有り)
- 17. 10Y6/1 灰色粗砂(下層流路, ラミナ有り)
- 18. 10Y4/1 灰色粗砂(下層流路, ラミナ有り)
- 19. 2.5Y6/1 暗灰色粘土(樹根)
- 20. 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混粘土(下層SE01 構築面)
- 21. 2.5Y5/6 黄褐色粘土(基盤土)
- 22. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土(下層流路)
- 23. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土(下層流路, ラミナ有り)
- 24. 7.5Y5/1 灰色粗砂(下層流路, ラミナ有り)
- 25. 10Y6/1 灰色粗砂(下層流路, ラミナ有り)
- 26. 10Y4/1 灰色粗砂(下層流路, ラミナ有り)
- 27. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土(下層流路)
- 28. 2.5Y7/4 浅黄色粗砂混粘土(基盤土)
- 29. 2.5Y8/6 黄色粘質土(基盤土)



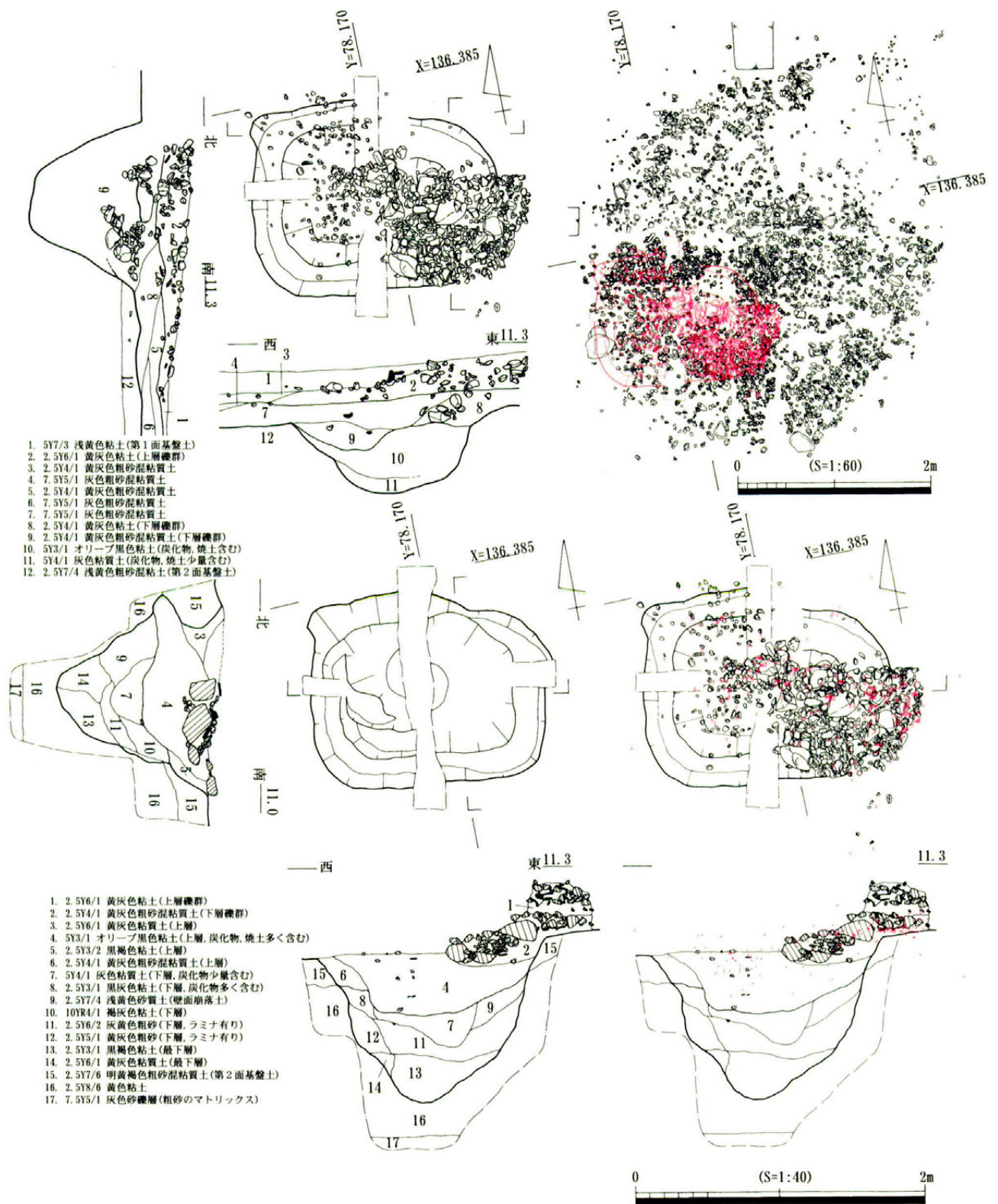
第102図 II区 第2面SX01上層平・立・断面図



第103図 II区 第2面SX01上層遺物分布図

S E 01 は、長軸 1.7 m 短軸 1.3 m の隅丸長方形を呈し、残存深度が 1.2 m 程を測る。断面形は壁面が緩やかな逆U字形を呈し、北壁の一部はオーバーハングする箇所が見受けられる。埋没土は砂質土を主体とした下層と、微細な炭化物と焼土粒を交える黒褐色系の粘質土から成る上層とに大別できる。また、下層には先のオーバーハングする部分に対応して壁面の崩落土と考えられる土層も存在することから、機能時には一定期間滞水状況にあったことが窺える。底面下層に存在し透水層と考えられる 17 層の砂礫層まで到達していないものの、滞水状態にあったことを考慮し井戸として報告する。

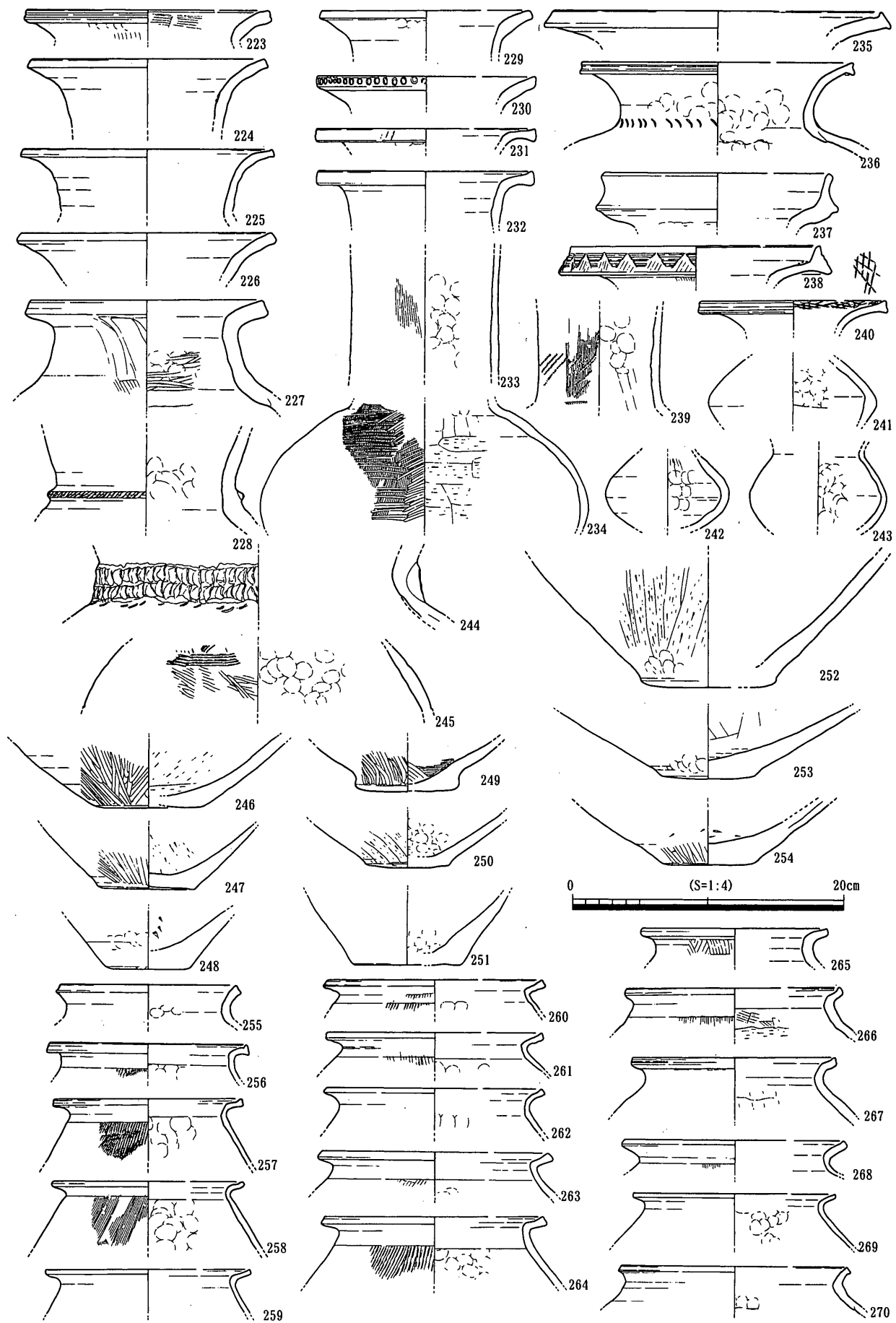
下層の礫群は、S E 01 上層の上位に掘方を越えて広がる部分が認められるが、その範囲は S E 01 の掘方とほぼ一致する。上層出土遺物と礫群に含まれる土器に時間差が認められないことから、上層を含めた埋め戻しの一連の行為の中で礫群が形成された可能性が高い。したがって、礫群と井戸の機能



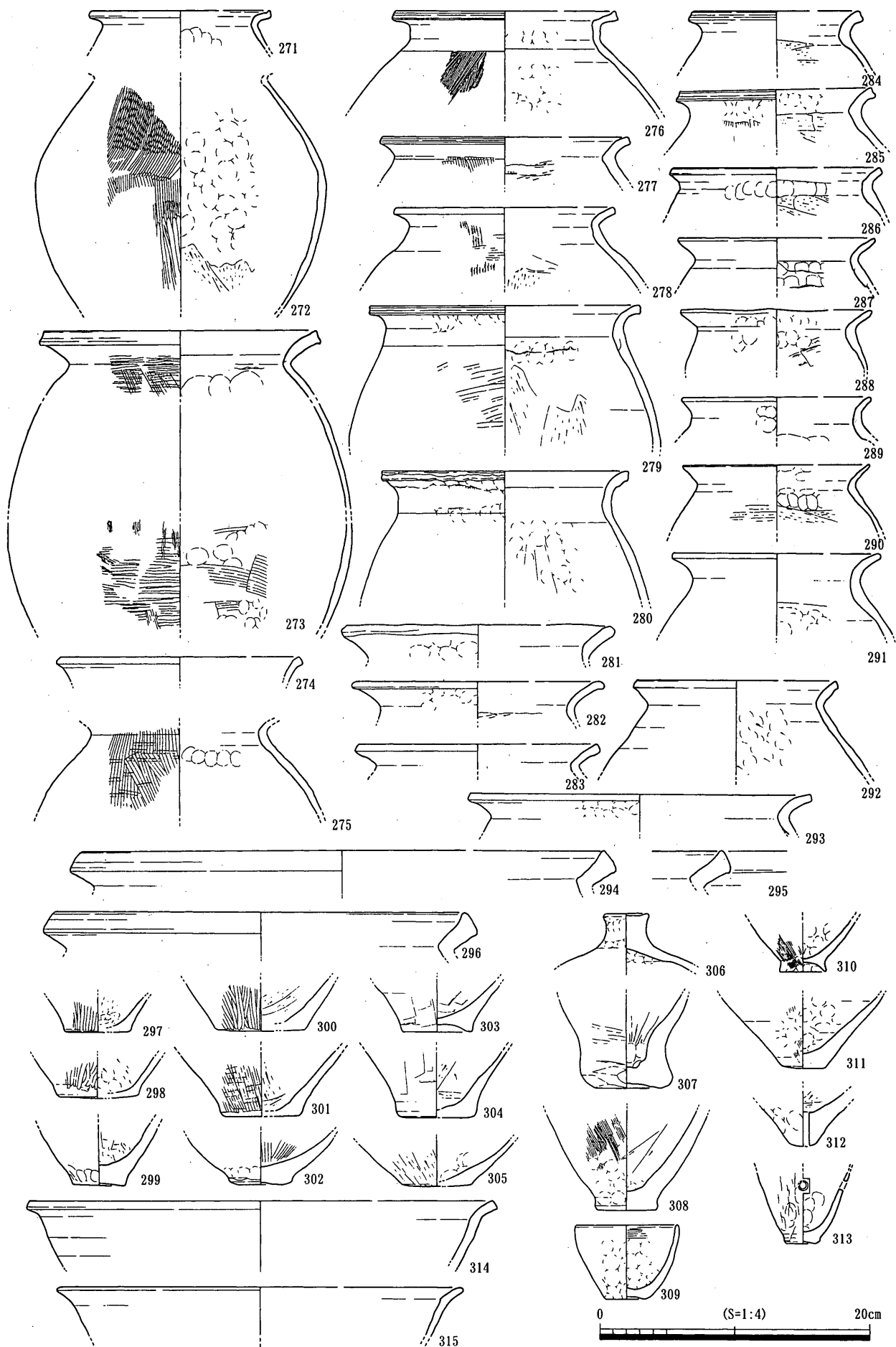
第104図 II区 第2面SX01下層・SE01平・断面図及び遺物分布図

との関連性は薄い。

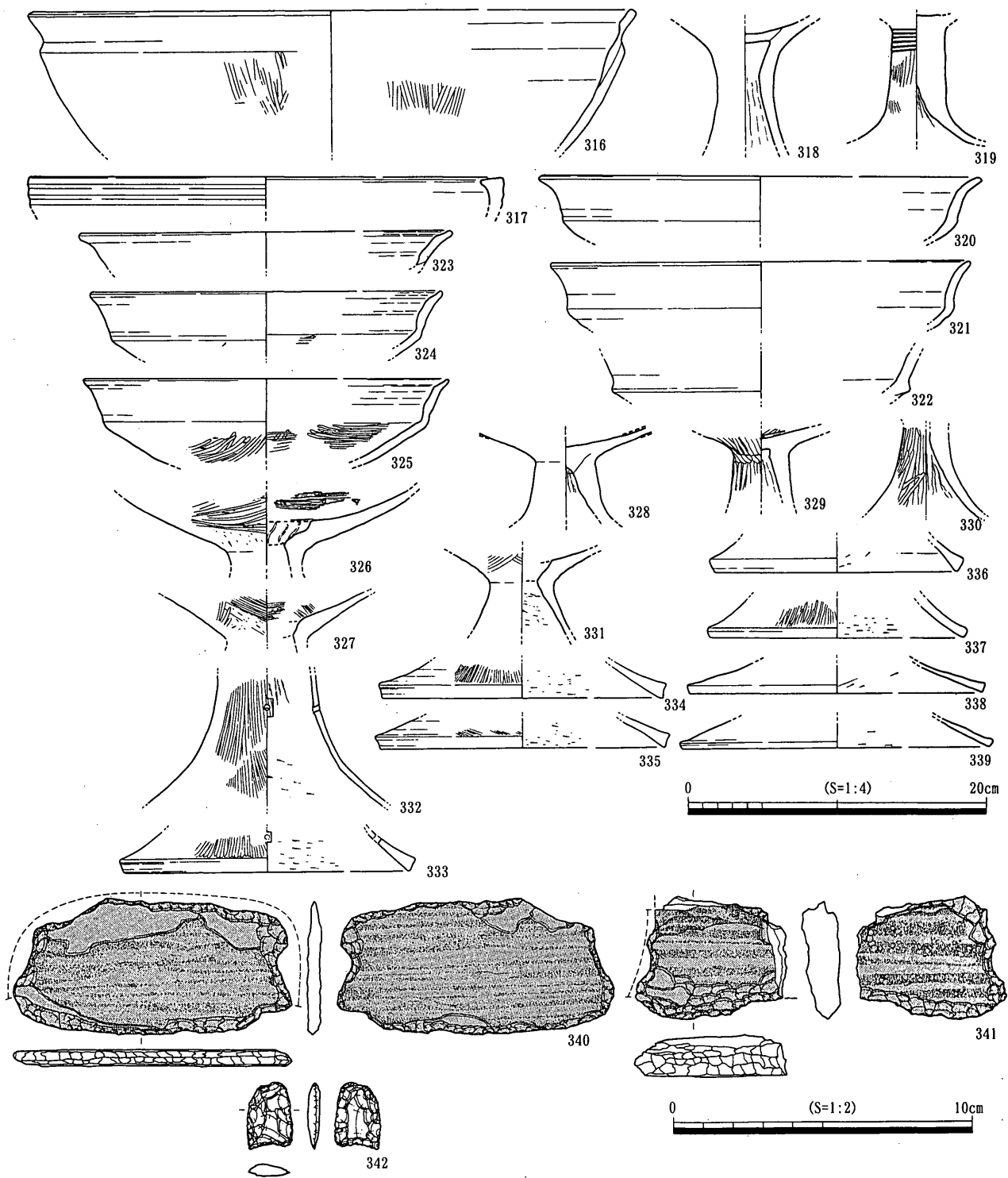
223～342は上層礫群、343～346は下層礫群、347～364はSE01上層から出土した遺物である。後述するように上層礫群出土遺物の内、大半が弥生後期後葉の所産であるが、一部中期中葉～後葉や後期前葉～中葉段階のものも見られる。また、弥生後期後葉のものの中でも数型式に跨る時間幅が看取されることから、短期間で形成されたものではなさそうである。下層礫群出土遺物は、弥生中期後葉段階



第105図 II区 第2面SX01上層出土遺物実測図 その1



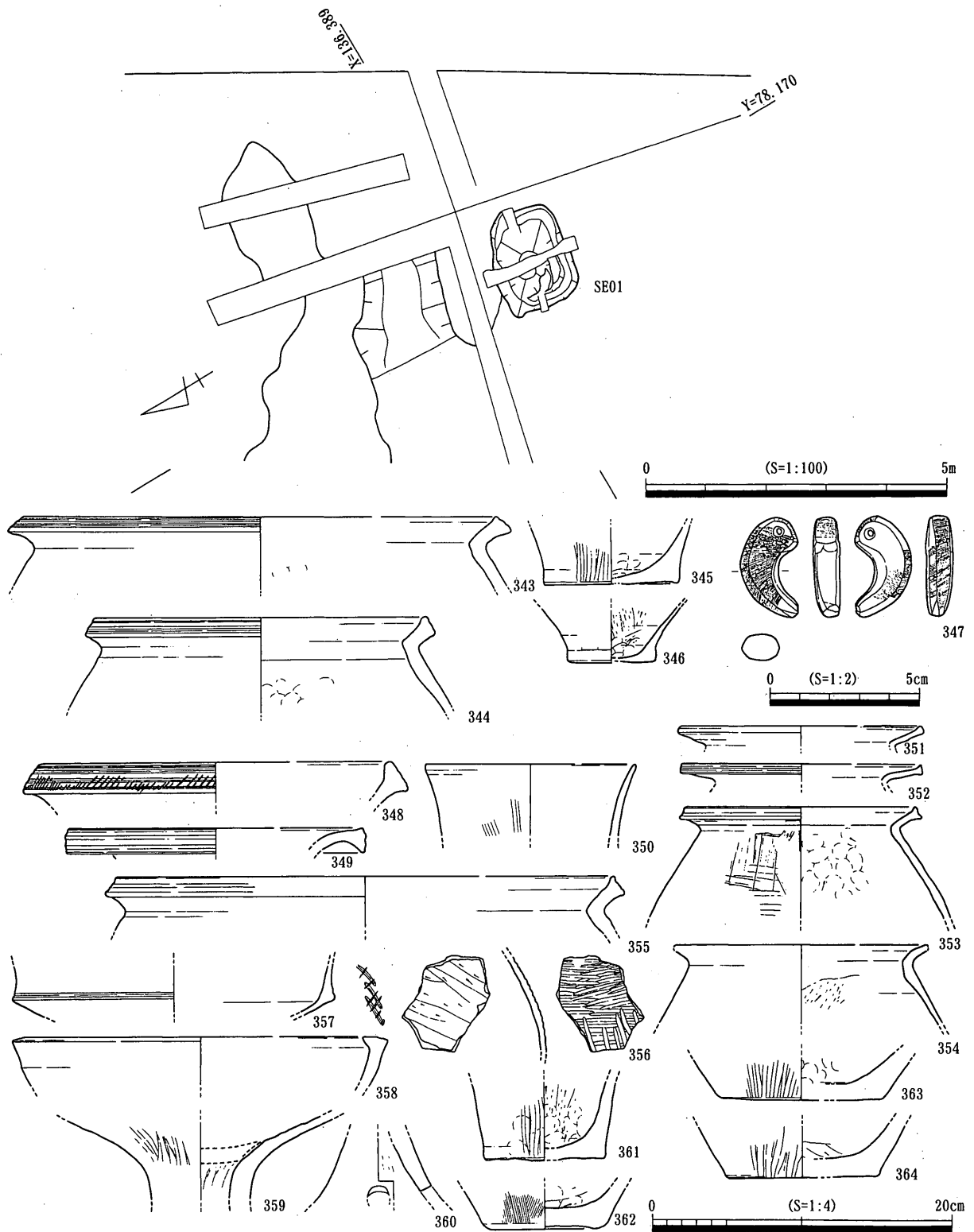
第106図 II区 第2面SX01上層出土遺物実測図 その2



第107図 II区 第2面SX01上層出土遺物実測図 その3

のものでほぼ占められる。

223～228.234～236.238は広口壺の口縁部・胴部片である。227の広口壺は内傾する頸部をもつものであり、他のもの比べて後出する要素をもつものである。234は胴部外面に分割横ミガキが見られる広口壺の胴部片であり、形態・調整や胎土中に雲母・角閃石を多く含むことから、高松平野北東部かその周辺地域からの搬入品と思われる。236は焼き上がりが赤褐色の色調を示し、精良な胎土中



第108図 II区 第2面SX01下層SE01平面図及び出土遺物実測図

に結晶片岩流が見られることから、阿波地域からの搬入品と考えられる。238は拡張される口縁端部外面に横方向のへら描き沈線と鋸歯文が施される。229.230.232.233.239は長頸壺の口縁・頸部片である。231は強い横ナデ調整をもち、口縁端部外面に櫛描施文を見ることから弥生中期中葉段階の所産である。237は異形の複合口縁壺である。240の広口壺は口縁部外面に1条の凹線文、内面にへら描きの斜格子文が見られることから、弥生中期後葉段階の所産と思われる。242.243は小形壺の胴部片

である。244 は、押捺突帯をもつ弥生中期後葉段階の直口壺の頸部片である。245 は、胴部外面に櫛描直線文と山形文？が見られる壺胴部片であり、積極的な回転台利用が見られない櫛描文の特徴から弥生中期前葉の所産と考えられる。244～254 は壺胴部片である。244.247.254 は、外面の縦ミガキ下位に見られるケズリ調整と形態から、弥生中期後葉段階の所産である可能性が高い。255～305 は甕の口縁・胴部・底部片である。256～272.276 は、口縁部形態や調整手法、胎土中に雲母・角閃石を含む点から、高松平野北東部かその周辺地域からの搬入土器の可能性が高い。口縁部形態にバリエーションがあり、時間幅をもつものと思われる。270 は形態的に違和感があり、これらの甕の模倣形態の可能性が高い。273 は、胎土・調整手法から見て同一個体として図示した。胴部外面の平行タタキは口縁部下まで確認できる。284.285 は拡張される口縁部外面に凹線文が見られ、形態・調整弥生後期前葉～中葉の所産と思われる。294～296 の甕は形態から見て、弥生中期中葉に遡る。

297～305 は甕底部片である。297.298 は胎土・調整から見て、高松平野北東部かその周辺地域からの搬入品である。306 は蓋として図示しているが、突底の鉢の可能性もある。307～317 は、鉢口縁・底部片である。313 の鉢は、中位に穿孔を行う。317 は凹線手法が看取されるもので、弥生中期後葉段階の所産である。318～339 は高杯の口縁・脚部片である。323～327.331～339 の高杯は、器形・調整・胎土から見て高松平野北東部かその周辺地域からの搬入土器と思われる。形態的にバラツキがあることから、一定の時間幅をもった一群と言える。

340 は紅簾片岩製の打製石庖丁である。両側に抉りをもち、強く摩滅した両刃の刃部と体部に磨耗痕が見られる。341 も紅簾片岩製の打製石庖丁片であり、340 と比較して肉厚な体部と急角度の刃部をもつものである。342 は、凹基無茎式の打製石鏃である。

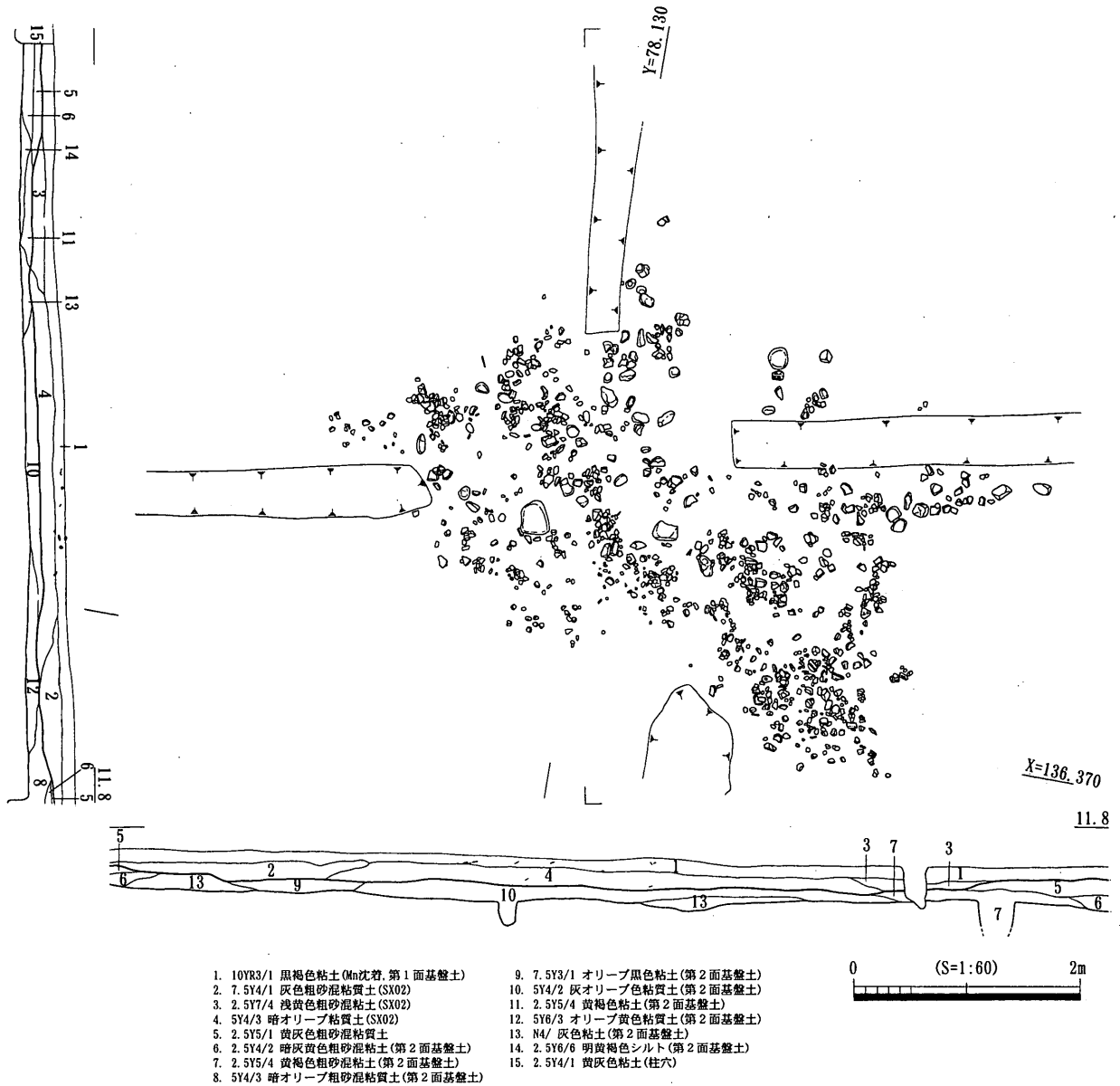
343～346 は、下層礫群からの出土遺物である。343.344 は拡張される口縁端部に、凹線文が見られる。345 は甕底部であり、内面のケズリ調整は丁寧なナデ調整によって消去される。346 は薄手の甕底部である。これらの土器群は、弥生中期後葉を中心としたものと思われる。

347～364 は、S E 01 上層出土遺物である。348 は大きく外反する口縁部外面に、3条の凹線文とその上部に刻み目を施す。349 は口縁端部外面に凹線文をもつ広口壺の口縁部である。350 は直口壺の口縁部であるが、当該期にあまり見られない形態をもち、後期段階に下る可能性もある。351～356 は甕の口縁・胴部片である。353 の肩部外面には、左上がりの平行タタキが看取される。356 は胴部最大径付近の破片であるが、外面にやや細身の平行タタキを明瞭に留める。357 は杯部中位で反転する口縁部をもつ高杯である。358.359 の台付鉢は、胎土から見て同一個体の可能性が高い。360 は高杯か台杯鉢の脚部片である。361.362 は甕底部片、363.364 は壺底部片である。

350 の直口壺や360 高杯脚部は時期的に下る可能性が考えられるものの、出土遺物の大半は弥生中期後葉に帰属するものと見られる。これらの出土遺物の帰属時期を援用し、本遺構が弥生中期後葉段階に廃絶するとともに、下層礫群が形成されたものと判断する。また、遺構の性格としては日用品を中心とした廃棄遺構の可能性が高い。

II区第2面S X 02

II -2 区南部のX = 136.370 Y = 78.130 付近で検出した土器・礫溜り状の遺構である。第1 検出面と第2 検出面間の堆積層掘削途上において土器片と礫の集中が確認された。断面精査の結果、7.5 × 5.5 m深さ 0.15 m程を測る不定形の落ち込み状の部分にこれらの遺物が集中している状況が見られた。ま

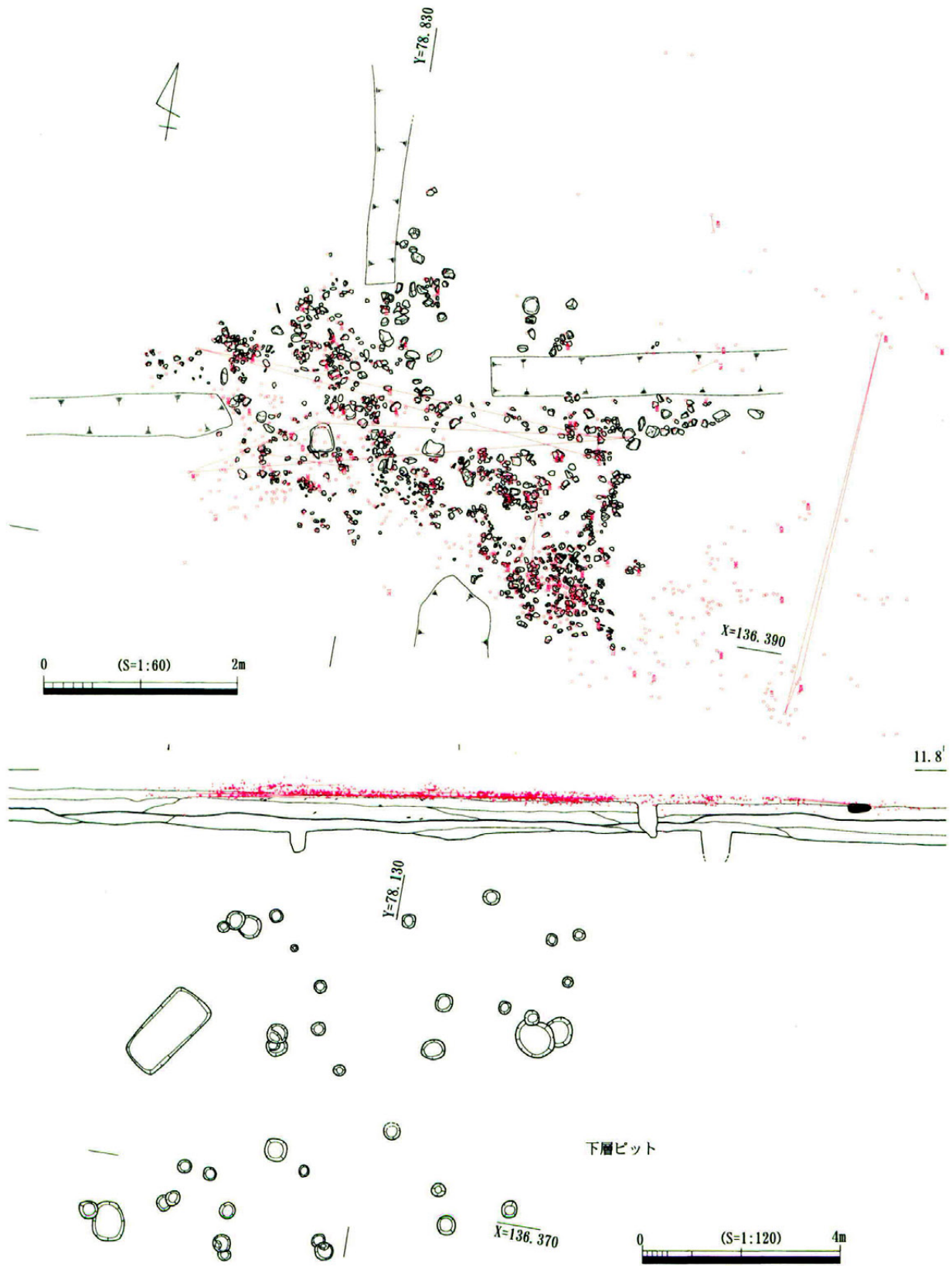


第109図 II区 第2面SX02平・断面図

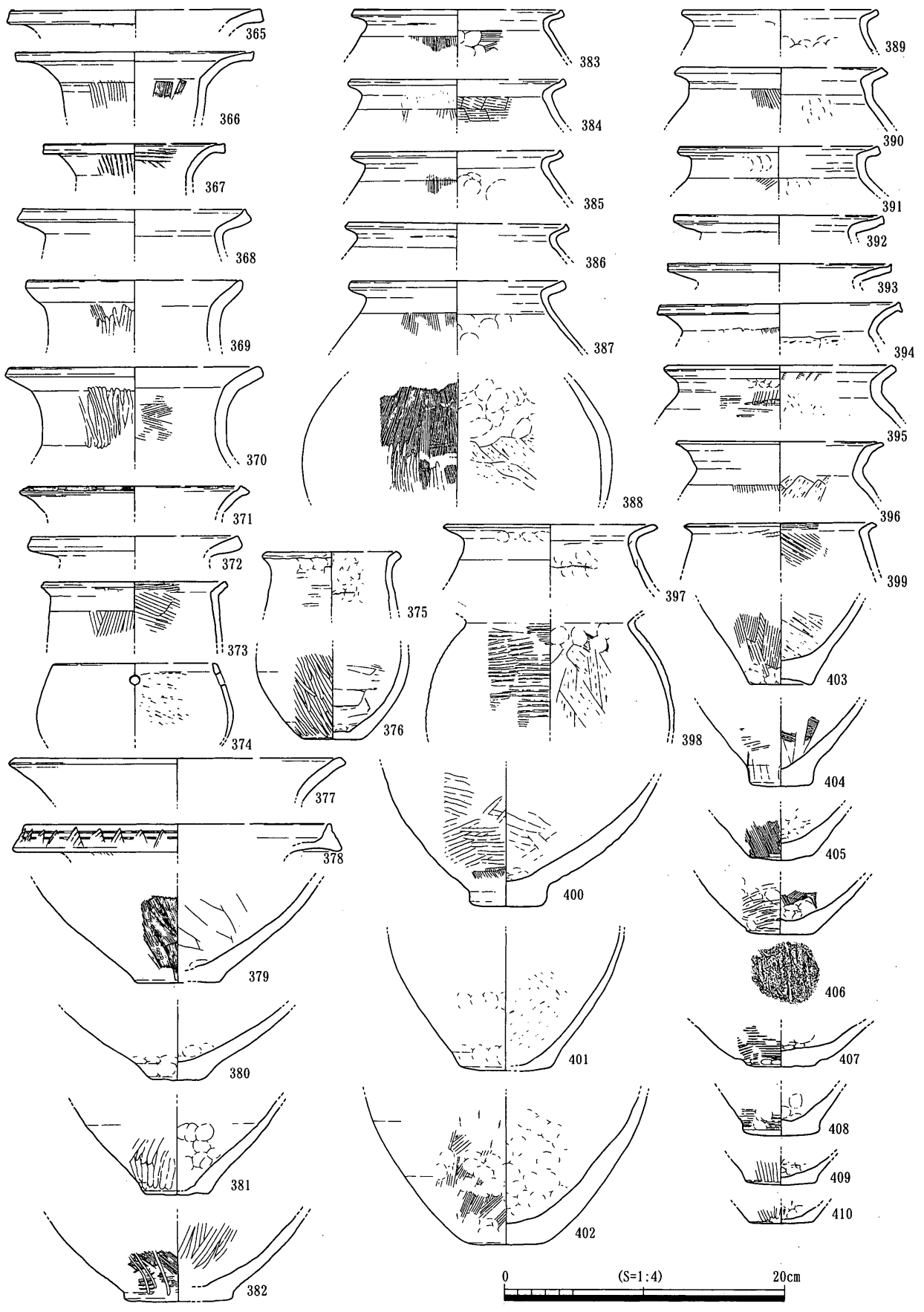
た、落ち込みの立ち上がり極めて緩やかであることから、人的に掘開された可能性は低く自然地形である窪地に遺物群が投棄されたものと解釈される。埋没土には地山塊のブロック土が見られないことから、自然埋没したものと見られる。遺物の多くは第1検出面の基盤土である最上層中に含まれており、最終埋没する段階で投棄されたと考えられる。遺物は主に細片化した土器片とサヌカイト製石鏃、紅簾片岩製の打製石庖丁等から構成されており、完形に復元できるものは見られない。また、出来るだけ出土位置を記録しながら取り上げたが、接合関係をもつものは少ない。土器片とともに砂岩礫が少数見られたが、図化した以外に人的な加工が加えられたものは見られなかった。後述するように、出土遺物には時間幅が見られることから、短期間に形成されたものでない可能性が高い。

本遺構を除去した段階で、下面から複数のピット群を確認している。層位的に見て本遺構に伴うものではない。時期決定可能な遺物は見られないが、層位的な関係から弥生後期後半以前の所産と見られる。

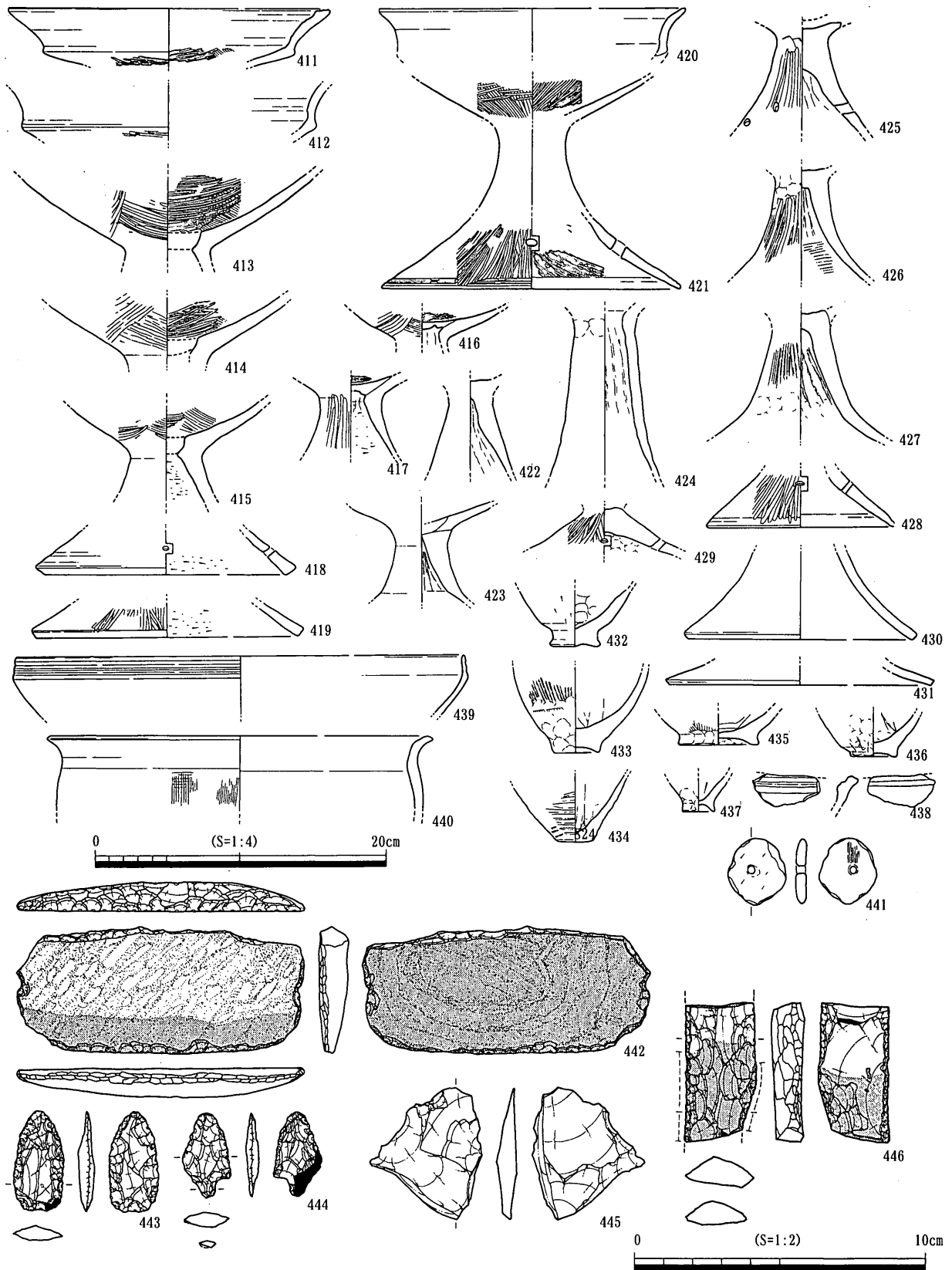
365～451は出土遺物である。365～371は広口壺の口縁部片。形態的に後期後半段階を主体とするが、頸部がハの字状を呈する368は時期的に下る可能性がある。371は口縁端部外面に3条の沈線文帯が見られる。372は長頸壺の口縁部片。373.375は口縁端部が短く屈曲する壺?である。374の



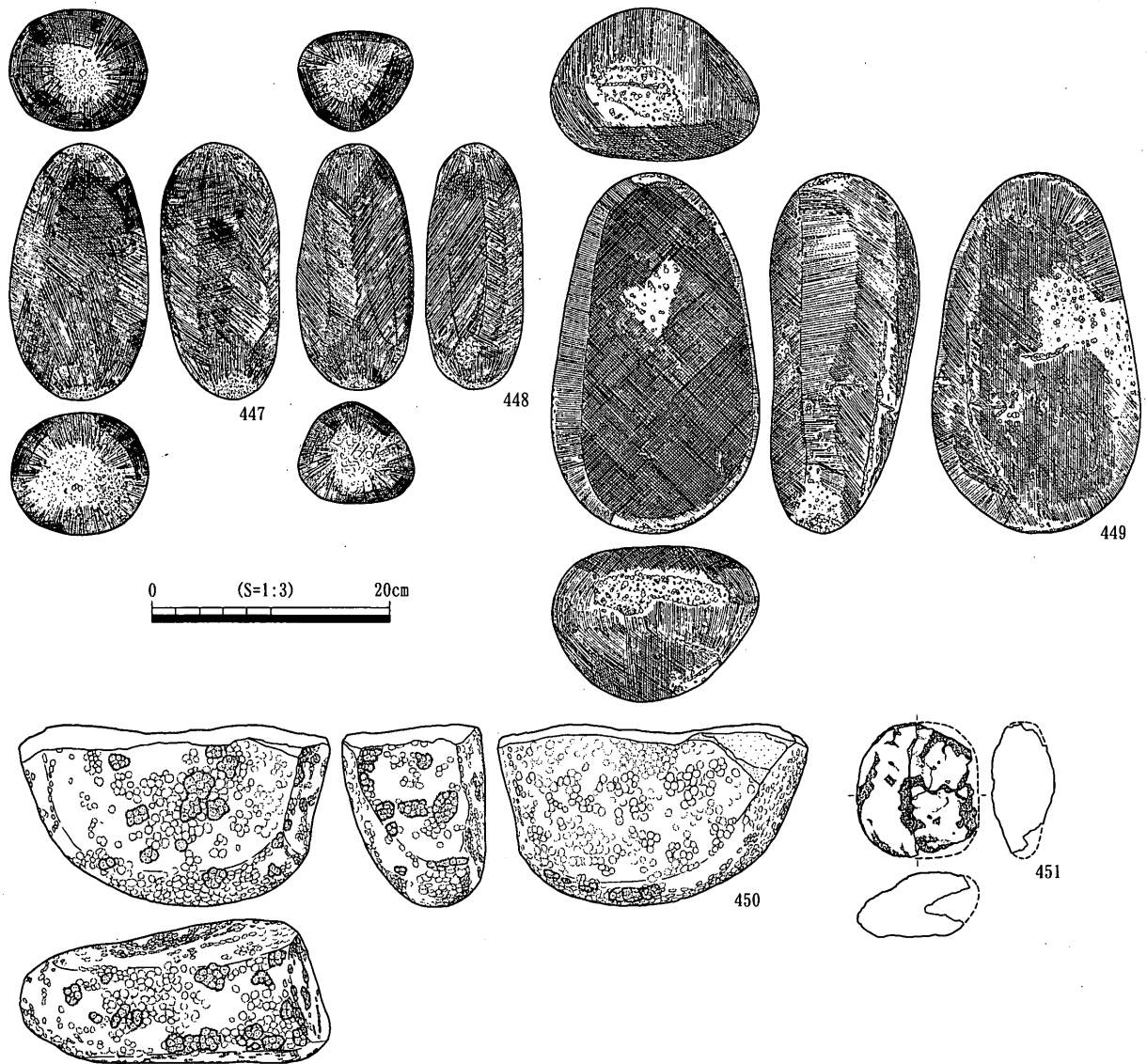
第110図 II区 第2面SX02遺物分布図及び下層遺構平面図



第111図 II区 第2面SX02出土遺物実測図 その1

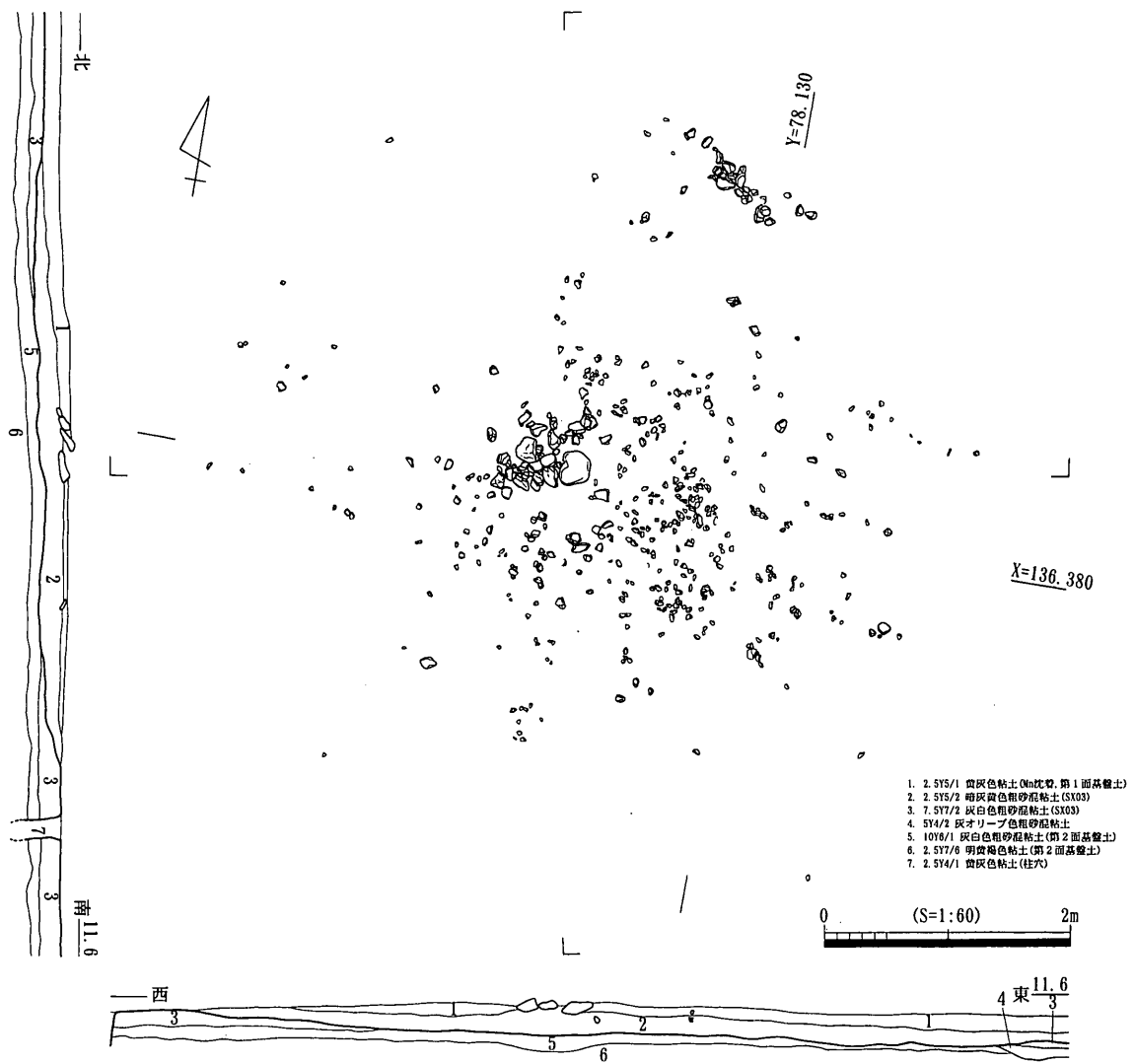


第112図 II区 第2面SX02出土遺物実測図 その2



第113図 II区 第2面SX02出土遺物実測図 その3

無頸壺は蓋受用の穿孔が見られる。376は小型壺の底部片。377は口縁部が大きく外反する。378の広口壺は上方に拡張される口縁端部外面に2条の沈線文帯と線鋸歯文を刻む。379～382は壺底部片。383～391は胎土中に雲母・角閃石を多く含む高松平野北東部産の甕である。口縁部形態にバラツキが見られることから、後期後半における時間差を示す可能性がある。409.410は同地域産の底部片である。小型化した矮小な平底の形態から、後期後葉でも後出する所産と思われる。392は長頸壺の口縁部の可能性が高い。393～399は遺跡内の製作が想定される甕の一群である。400～408は甕底部片。402は器壁の厚さから壺底部の可能性が高い。406は平底成形に関係した平行タタキが見られる。405.407は丸底に近い形態をもつことから、終末期に下る可能性がある。411～419は高松平野北東部産の高杯であり、杯部内外面に分割ミガキ脚部と内面にケズリ調整が看取される。420～431は遺跡内かその周辺での製作が想定できる高杯である。432～437は小型鉢底部片。439は口縁部外面に3条の凹線文をもつもので、中期後葉段階の所産である。440は口縁部が緩やかに外反する鉢口縁部片である。438は微細な砂粒を多く含み、口縁部内面に凹線文が見られる縄文深鉢の口縁部片と見られる。441は甕胴部転用の紡錘車である。

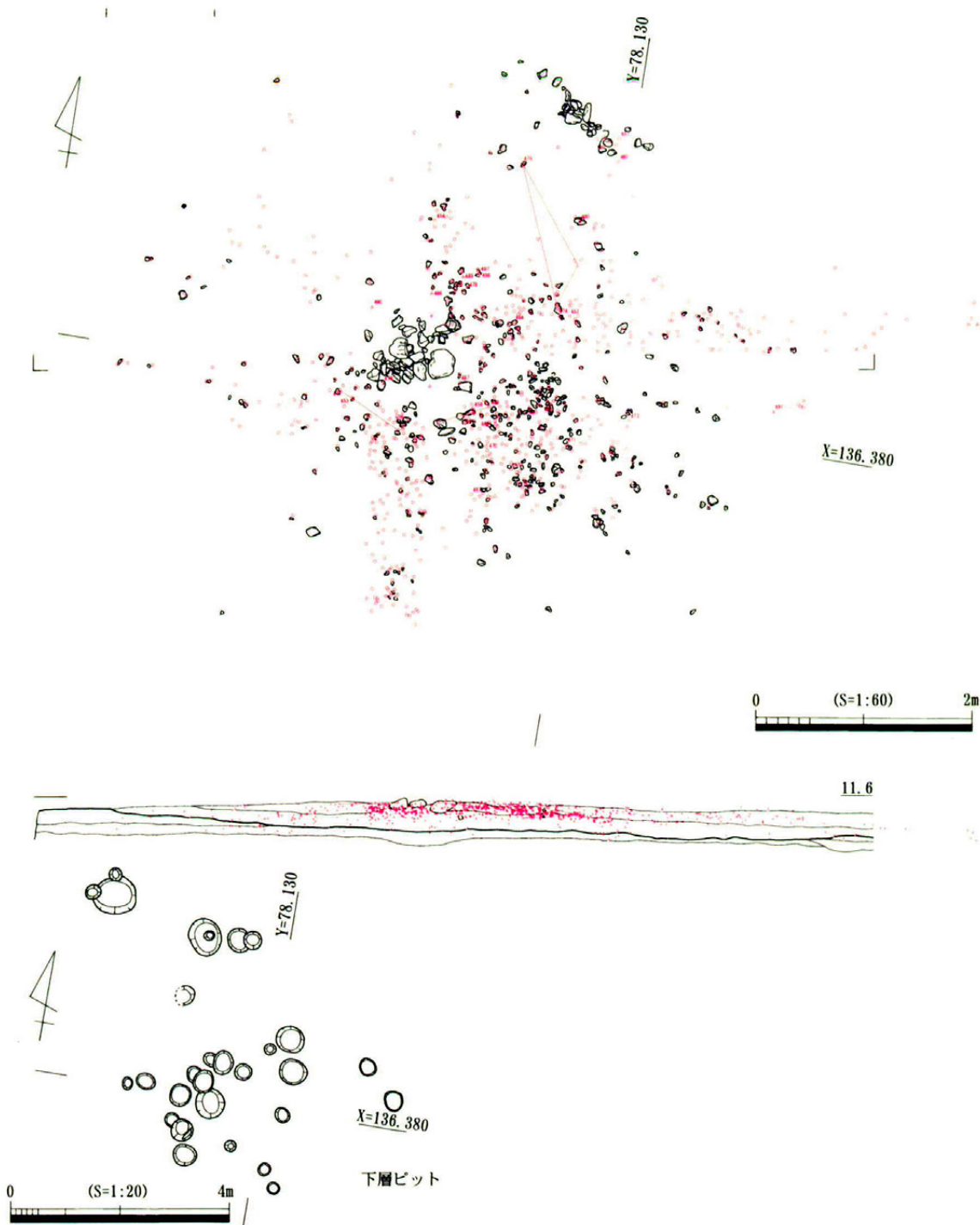


第114図 II区 第2面SX03平・断面図

442は紅簾片岩製の打製石庖丁である。両側縁に抉りを施し、両面調整の刃部に強い磨耗痕が見られる。443は円基無莖式石鏃、444は凸基有莖式石鏃である。445は二次加工のある剥片。446は打製短剣の石片である。肉厚な断面は菱形に近く、側縁は対象ではなく一側縁が斜交する。図示する下半部の側縁を中心に潰れが顕著に見られ、これを基部に関係した調整痕と見なし上下を判断している。477～449は安山岩質斑岩製の敲石である。上下面を中心とした敲打痕の他に、研磨による線状痕や全体的に磨耗していることから磨石転用の可能性が高い。450は砂岩製の敲石である。451は軽石と思われ、具体的な機能は不明ながらも浮子の可能性が考えられる。

II区第2面SX03

II-2区南部のX = 136.380 Y = 78.130付近で検出した土器・礫の集中が認められる遺構である。本遺構南側に位置するSX02と同様、上面を覆う第1検出面の基盤土である黄灰色粘土層を除去すると7×5m程度の不定形の落ち込みに、土器片・砂岩礫の集中が確認された。立ち上がりが非常に緩やかであることから、人的に掘開されたものである可能性は低く、落ち込み自体は自然地形の可能性が高い。主要な埋没土である2層は、落ち込みの立ち上がりを越えて周囲にも堆積している状況が確認できることから、遺構としての広がり、土器・礫が認められる部分のみである。最上層の中央部分には砂

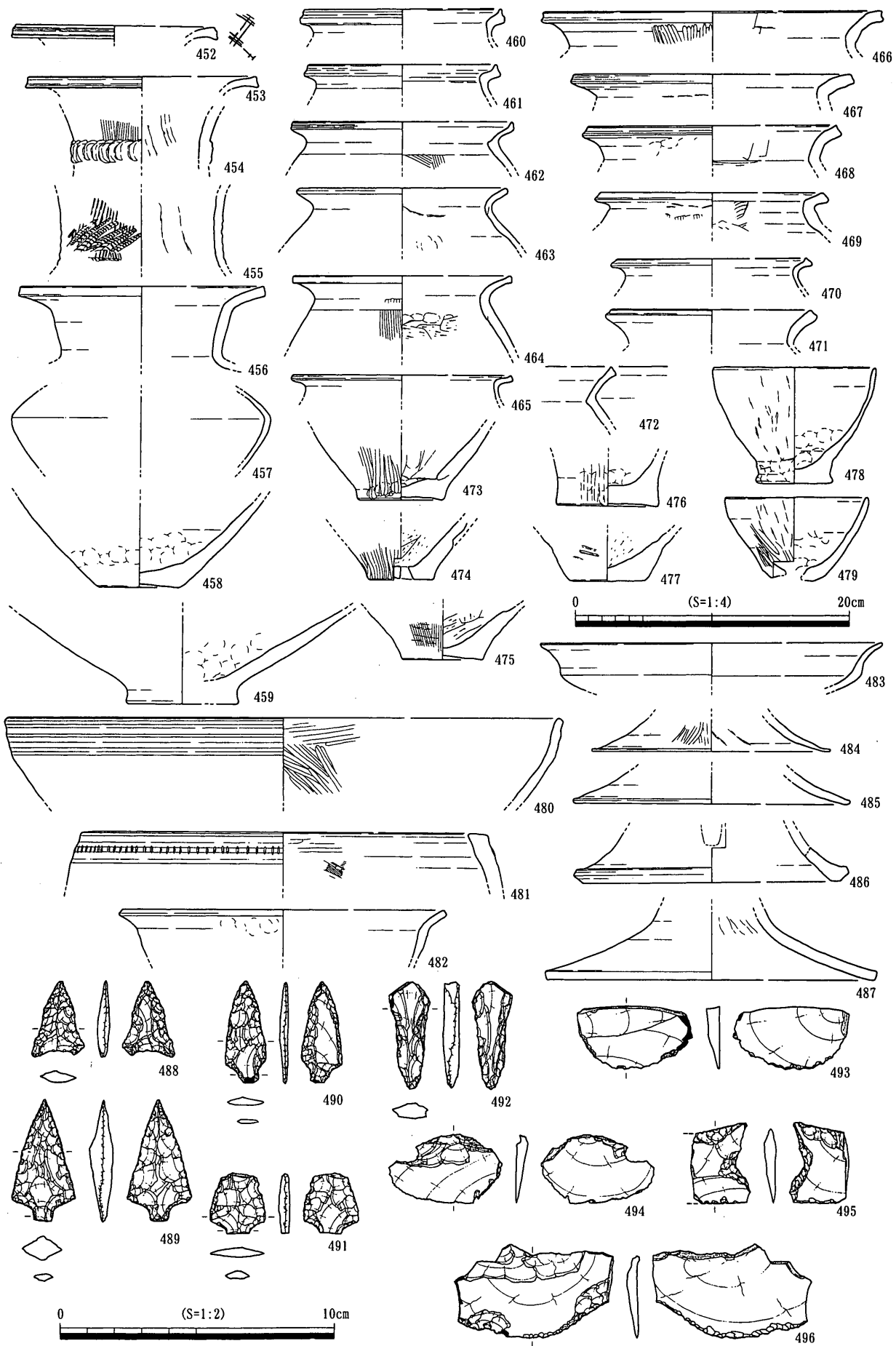


第115図 II区 第2面SX03遺物分布図及び下層遺構平面図

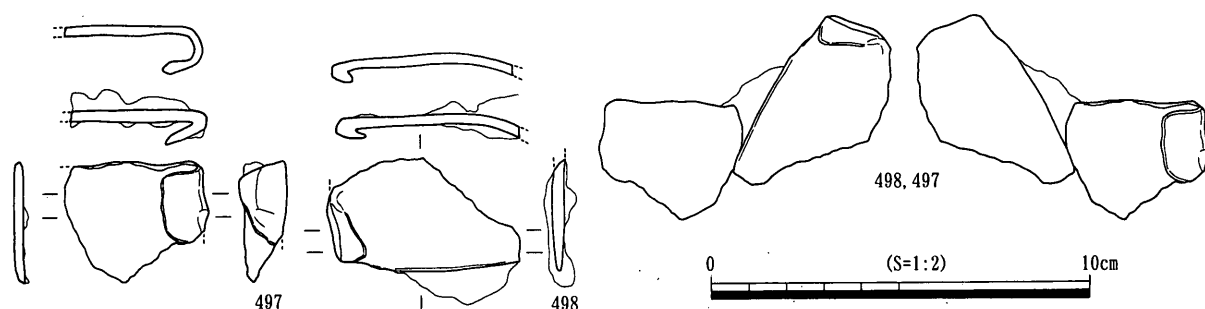
岩製の扁平な自然礫が見られるが、意図的なものかどうかは不明である。出土した土器はいずれも細片であり接合関係をもつものは少なく、サヌカイト製の石鏃を中心とした剥片石器や、摘み鎌と考えられる鉄器も見られた。

本遺構の下位には数基のピット群を検出している。層位的に後期後葉以前の所産と思われるが、本遺構に直接関係するしたものではない。

452～498は出土遺物である。452～455は中期後葉段階の広口壺の口縁・頸部片である。他の後



第116図 II区 第2面SX03出土遺物実測図 その1



第117図 II区 第2面SX03出土遺物実測図 その2

期後葉段階の出土遺物との時間差が著しいことから、下層遺構からの混入品の可能性が高い。456は広口壺の口縁部。457は細頸壺の胴部片である。458.459は壺底部。460.461は拡張される口縁端部の形態から、後期前葉に遡る。462～472は甕口縁部片。465.469.470は胎土中に雲母・角閃石を多く含む高松平野北東部からの搬入品と見られ、465は461と比較して口縁部の屈曲度から後期後葉の中でも後出する可能性が高い。473～477は甕底部片。多くのが明瞭な平底を留めるが、476は形態から中期後葉段階の所産と推定され、452～455と同じく下層遺構からの混入品である。478.479は小型鉢。478は明瞭な平底を留め、後期後葉段階でも古層を示すものと思われる。479は底部を欠損するが、残存部から判断して焼成前穿孔を行うものと思われる。480.481は中期後葉段階の凹線文系の鉢で、下層からの混入品と思われる。482は後期後葉段階の鉢口縁部。483～485は高杯である。486は方形透かしを施す中期後葉段階の台付鉢の脚部片で、下層遺構からの混入品と考えられる。487は形態とやや厚みのある断面から、器台の脚部の可能性がある。

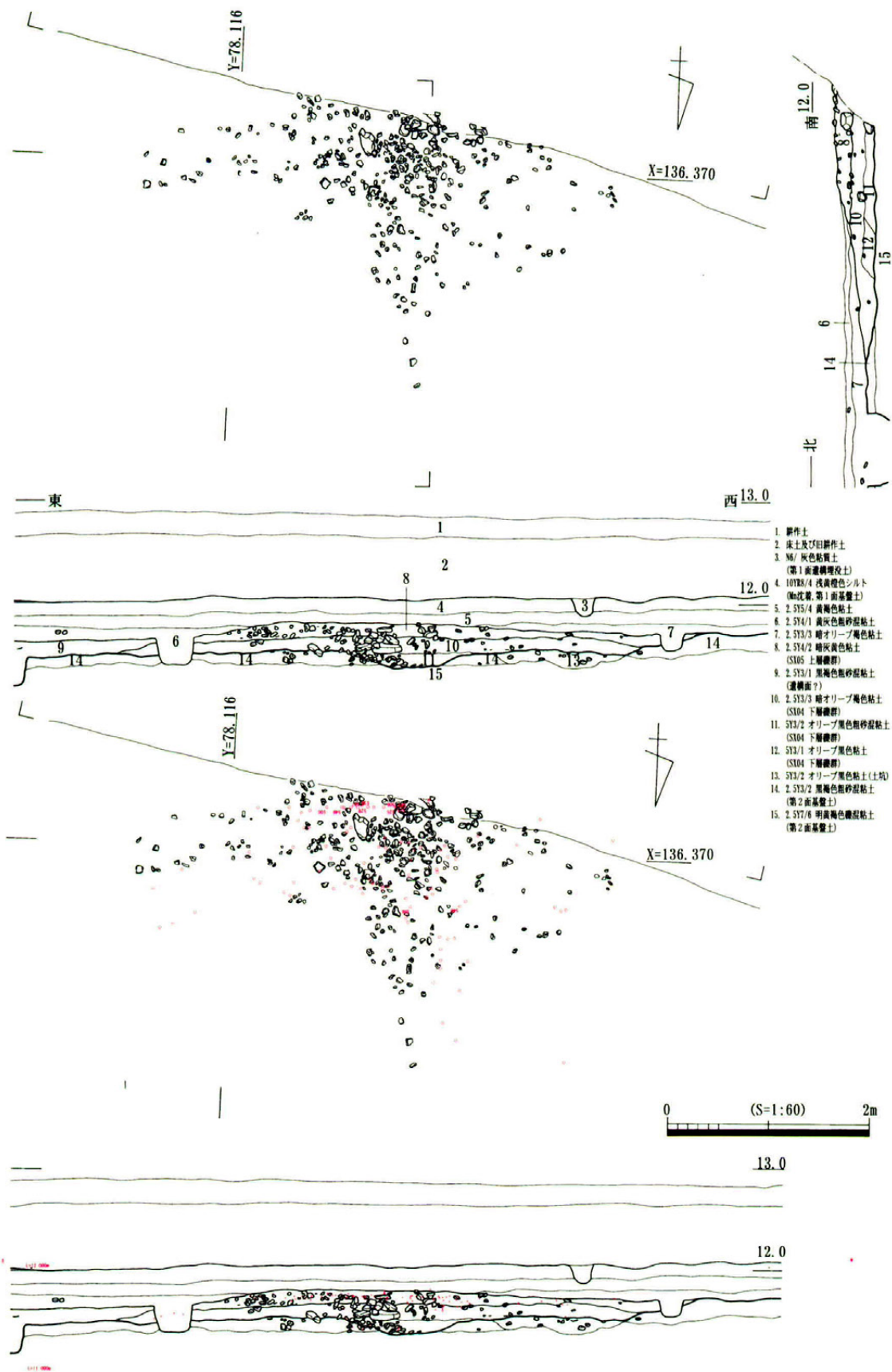
488は凹基無茎式打製石鏃。489～491は凸基有茎式打製石鏃で、490は身部に素材面を明瞭に留める。492は打製石鏃の身部である。493.494は使用痕と見られる微細剥離が確認できる剥片である。494は自然面を打面とするが、表面には階段状の複数の剥離面が見られる。495は側縁にノッチを施すが、あまりに小型であることからスクレイパーとした。496はスクレイパーである。

497.498は錆化により、接合した状態で出土した鉄器である。497は側縁に装着を意図した折り返しが見られるが、完全に閉じられたものではない。刃部に相当する機能部位の残存は見ないが、折り返しの状況や法量から摘み鎌の可能性が高い。498の側縁部にも折り返しを確認できるが、同様に摘み鎌と考えることができるが、残存状態は悪く、不明鉄器としておきたい。

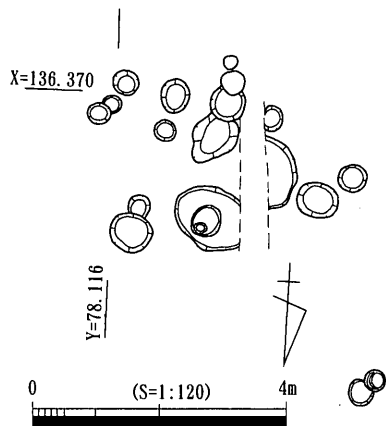
出土遺物の様相は、中期後葉・後期前葉・後期後葉段階の時期差が認められることから時期決定に課題を残すものとなっている。しかし、全体で支配的なものは後期後葉段階のものとしてことができ、本遺構の形成時期を示しているものと思われる。また、短期間で埋没した状況にないことと、出土遺物に後期後葉段階における時間差が看取できることから、形成に際して一定の時間幅を見積もる必要があると言えよう。また、遺物組成から日用品を中心とした廃棄関連の遺構とすることができる。

II区第2面SX04

II-2区南端部のX=136.370 Y=78.116付近で検出した土器・礫の集中が認められる不明遺構である。南西方向から北西方向へ傾斜する地形面に、東西幅5m深さ0.2m程の落ち込みが見られ、この部分に土器片・自然礫の集中が見られる。8～12層が主要な埋没土に相当するが、8層中には自然礫とともに後期後葉段階の土器片が、下層の9～12層には中期中葉～後葉段階の土器片が含まれる。土器・



第118図 II区 第2面SX04平・断面及び遺物分布図



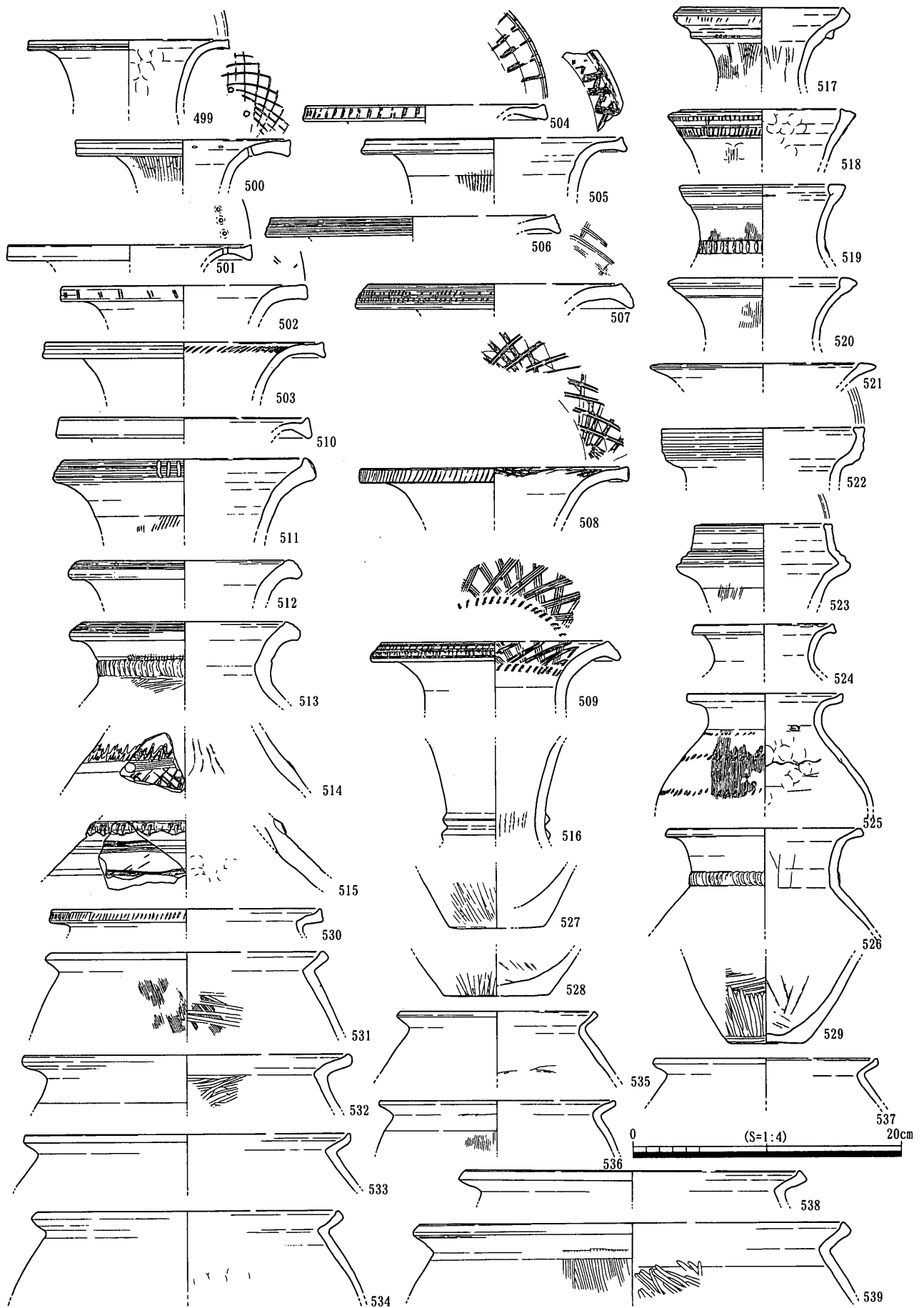
第119図 II区
第2面SX04下層遺構平面図

礫の集中が認められる部分の埋没土は、粘性が強い点で落ち込み外部の堆積層と区別されるが、地山塊を多く含むような人的に埋め戻した状況は見られない。礫群の検出状況が、一定の方向性をもつようなものでないことから、自然堆積で生じた状況に無く、土器片とともに人的に廃棄されたものと推定できるが、主要な形成要因は定かではない。また、層位毎における出土土器の時期を重視すれば、中期後葉段階と後期後葉段階の2時期に形成されたものである可能性も考えられる。土器・石器とともに多く含まれる礫は、地山中に含まれる砂岩礫を中心にしており、多所から搬入された形跡は見られない。本遺構を除去した段階で下層より柱穴群を確認しているが、掘り込み面から直接本遺構と関連するものではなく、

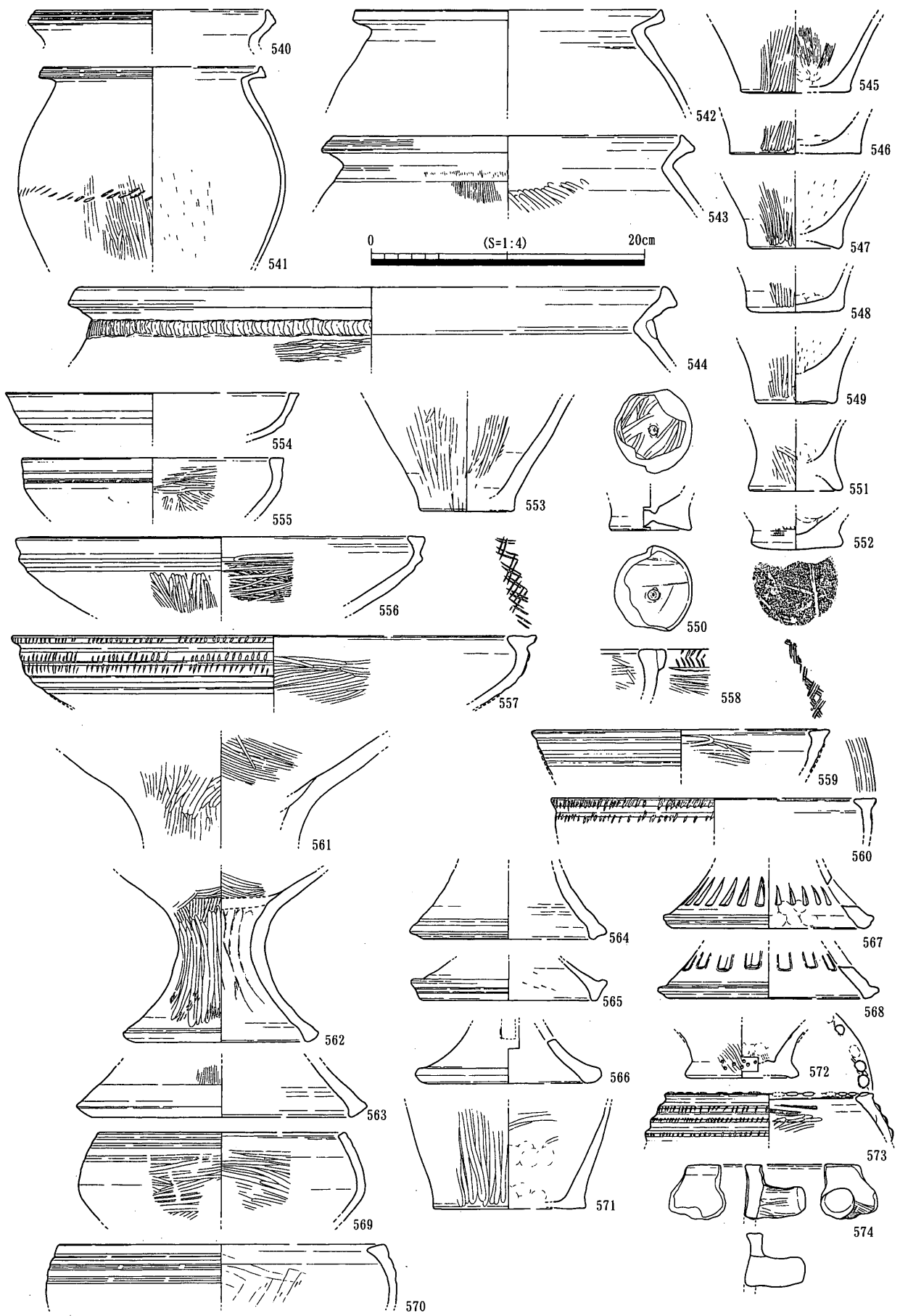
層位的に中期後葉以前の所産と推定する。

499～570.582.583は下層の9～12層から出土した一群である。499～516は広口壺の口縁・頸部片である。499～510は口縁部が大きく外反するもので、多くのものが内面に櫛描・ヘラ描きによる斜格子文で飾られる。507.509の口縁部外面の凹線文間に刻み目が認められ、高松・丸亀平野における凹線文出現期の属性を示している。511.512は頸部から連続して口縁部が外反する広口壺であり、511の口縁端部外面には凹線手法と縦位の円形浮文が見られる。513は短頸の広口壺であり、頸部に押捺突帯が付与されている。514.515は外面を櫛描直線文・波状文で加飾する広口壺胴部片である。517～521は細頸壺の口縁部片である。517は口縁部下に貼り付けによる突帯を施す讃岐地域の中期中葉段階に多く見られるものであるが、凹線手法が見られることから中期後葉でも古層を示すものと思われる。519.520は口縁部内面を折り返しによって肥厚する。522.523は直口壺であり、いずれも口縁部外面に凹線文を施すが口縁部が内傾する。523は形態的に異形品である。本遺跡出土資料中のII区第2面SX09出土の848に類例が見られる。524～526は口縁端部の拡張があまり見られない広口壺である。凹線手法は確認できないものの、形態から中期後葉段階の所産と推定される。527～529は壺底部片である。

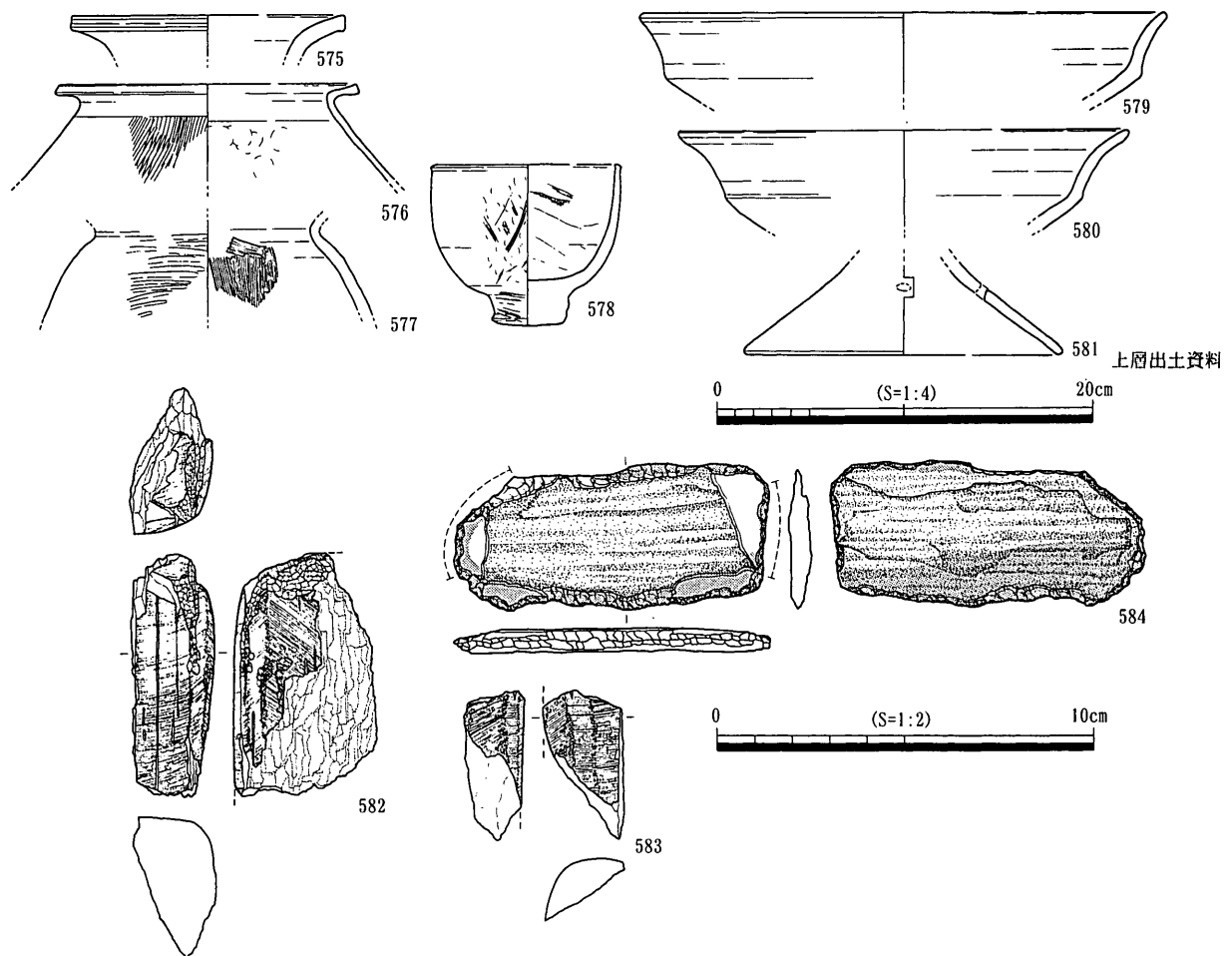
530～544は甕口縁部。540.541.543を除いて口縁部に凹線手法をもたないものが多いが、強い横ナデ調整や拡張される口縁端部の属性から見て、凹線文出現期以降に位置づけられる可能性が高い。530は確実に面取りされる口縁端部外面に刻み目を施す。536は口縁部の面取りが弱いものの、強い横ナデ調整により跳ね上げ口縁に仕上げられている。540は口縁部の屈曲が緩く直立気味であることから、中期後葉でも後出する段階の所産である可能性が高い。545～553は甕底部片。530は底部内外面に焼成後の穿孔途上の痕跡が見られる。554.555は口縁部が直立気味に立ち上がる阿波地域を主体に分布する高杯口縁部で、杯部外面に凹線手法を見ることが出来る。556～568は台付鉢。567.568の脚部には三角形、566には方形透かしが施される。また、565内面には横位のケズリ調整が見られることから、高杯脚部片の可能性もある。577.560の口縁部下の凹線紋間には刻み目による列点が見られ、凹線文出現期の属性を備える。569.570は口縁部が内傾する鉢。571は底部径と立ち上がりから寸胴の鉢底部と思われる。572は刺突による列点が施される無頸壺の底部片。573は口縁端部上面に円形浮文、口縁部下の凹線文間に刻み目を施す無頸壺の口縁部。574は差込による把手?をもつ鉢



第120図 II区 第2面SX04出土遺物実測図 その1



第121図 II区 第2面SX04出土遺物実測図 その2



第122図 II区 第2面SX04出土遺物実測図 その3

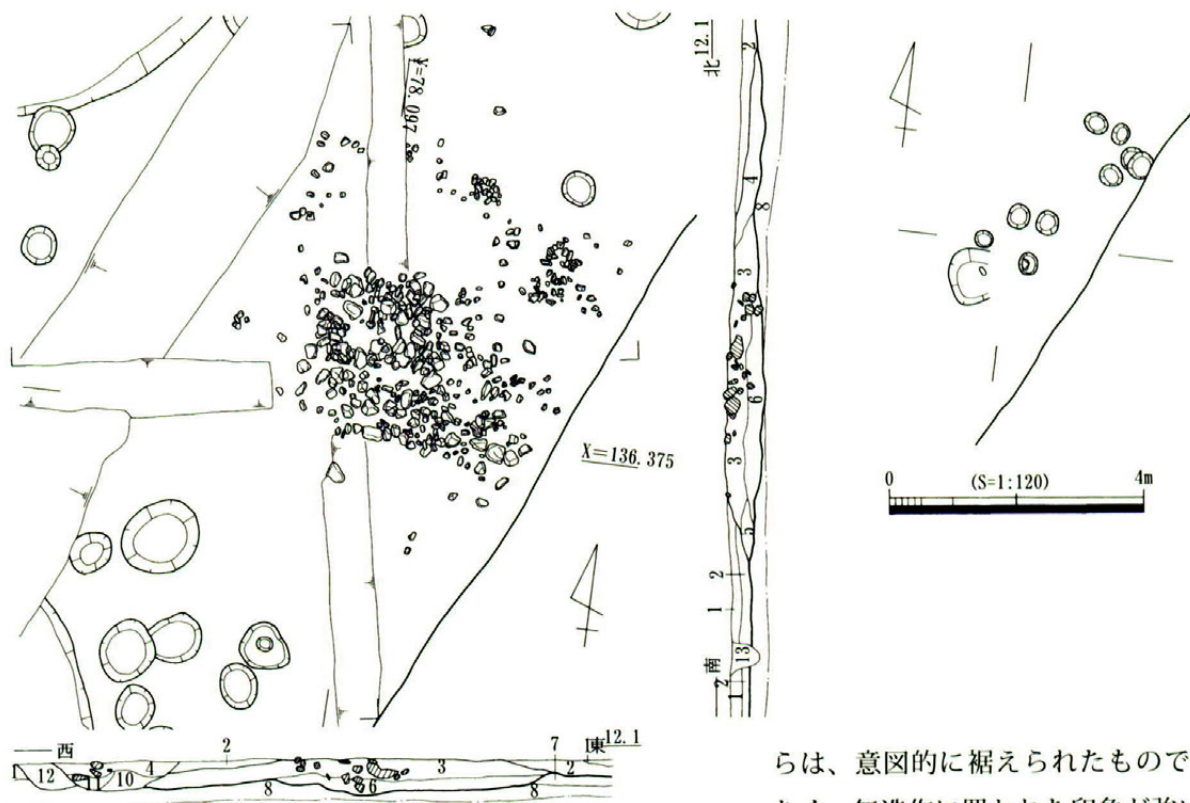
口縁部と思われる。582.583は緑色片岩製の柱状片刃石斧の基部片であるが、582は顕著な受熱痕が見られる。

575～581.584は上層の8層からの出土遺物である。575は後期後葉段階の広口壺口縁部。576.577は甕口縁・肩部片であるが、576は形態や胎土中に雲母・角閃石を多く含むことから高松平野北東部かその周辺地域からの搬入品である。579～581は高杯の口縁・脚部片である。584は紅簾片岩製の打製石庖丁である。顕著な抉りは見られないものの、調整が側縁・背部に及び強い磨耗痕をとどめ、両刃の刃部をもつものである。

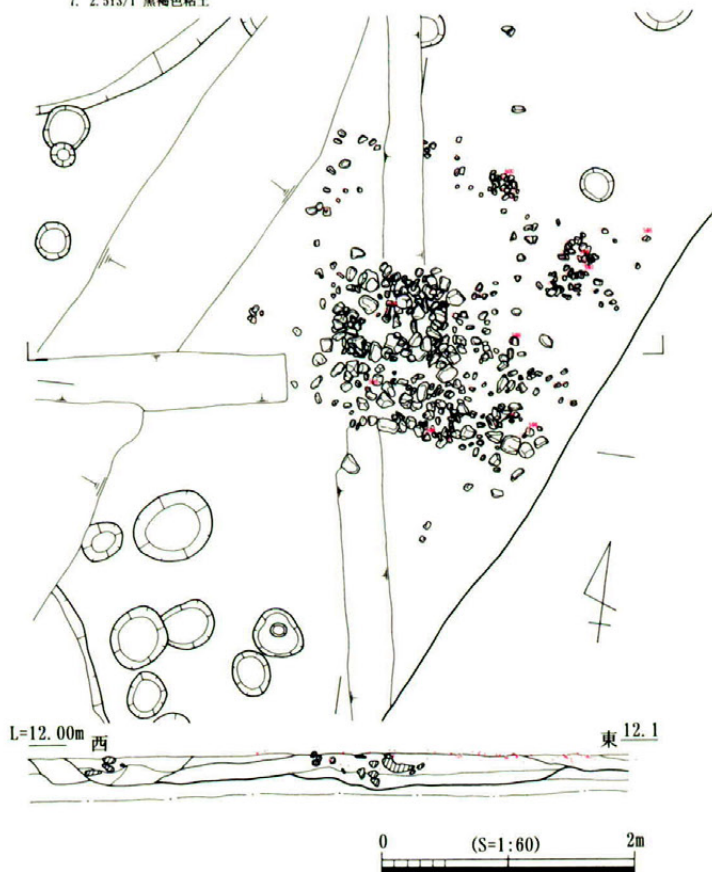
出土遺物の様相は中期後葉を中心とした下層と後期後葉の上層の一群に分かれる。層位的な遺物の年代観を重視すれば、中期後葉段階に土器・自然礫群が投棄され、その後、後期後葉段階にも同様の作業が行われた可能性がある。形成要因は定かではないが、上記の2時期に本遺構が形成されたと考える。遺物組成からは、日用品を中心とした廃棄遺構の性格が強い。

II区第2面SX05

II-9区南東部X=136.375 Y=78.097付近で検出した不明遺構である。直径4m深さ0.15m程の不定形な落ち込みの中に、土器片・自然礫の集中が認められる。断面観察の結果、4～6層としたレンズ状の埋没土が確認されているが、土器・礫群は、方向性や垂直方向の重なり等の出土状況から、自然堆積で生じたものとは考えにくく、人的に投棄されたものと考えられる。また、礫の分布状況が



- | | |
|----------------------------------|--------------------------------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色粘質土(Mn 沈着, 第1面基盤土) | 8. 2.5Y8/8 黄色中粒砂(第2面基盤土) |
| 2. 2.5Y5/1 黄灰色粗砂混粘質土(第1・2面間の堆積層) | 9. 2.5Y4/1 黄灰色粘土(SD55) |
| 3. 10YR4/2 灰黄褐色粘土 | 10. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土(SD55) |
| 4. 10YR4/1 褐色粘質土 | 11. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混粘質土(SD55) |
| 5. 2.5Y3/1 黒褐色粘土 | 12. 10YR4/1 灰色粘土(SD55) |
| 6. 10YR3/1 黒褐色粘土 | 13. 2.5Y5/3 黄褐色シルト(柱穴) |
| 7. 2.5Y3/1 黒褐色粘土 | |

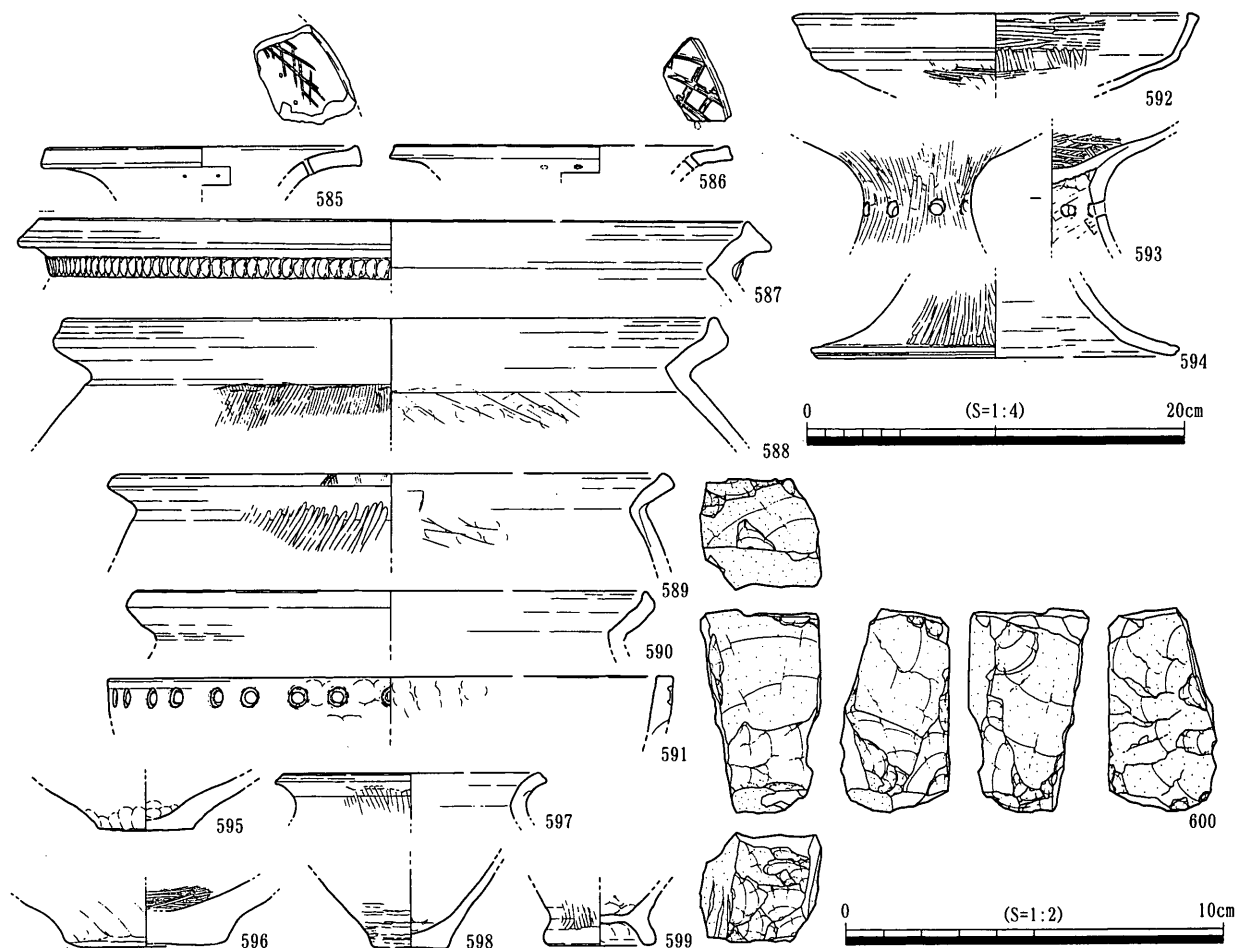


第123図 II区 第2面SX05平・断面・遺物分布図
及び下層遺構平面図

らは、意図的に据えられたものではなく、無造作に置かれた印象が強い。自然埋没する環境下で幾度かの土器・礫群の廃棄が継続され形成されたものであろう。

本遺構を除去した段階で数基の柱穴群を確認しているが、掘り込み面の状況から直接的に関連するものではない。層位的には、中期後葉以前の居住域に関係した遺構群と推定される。

585～600は出土遺物である。585.586は広口壺の口縁部。口縁部内面をへら描き・櫛描による斜格子文、口縁部下に蓋受け用の2孔一対の穿孔を施す。587～590は甕口縁部片。587.588の口縁部外面には明確な凹線文が見られないものの、凹状に窪む。591は口縁部下に竹管による列点文を施す鉢?である。592は口縁部が直立する高杯であり、杯部の器形反転部に1条の凹線文を見る。593は台付鉢の脚部片。596は



第124図 II区 第2面SX05出土遺物実測図

壺底部片であり、形態から中期中葉～後葉に位置づけられる。599は脚台様の甕底部片である。600は安山岩製の石片である。大部分が自然面に覆われ、加工は進んでいない。

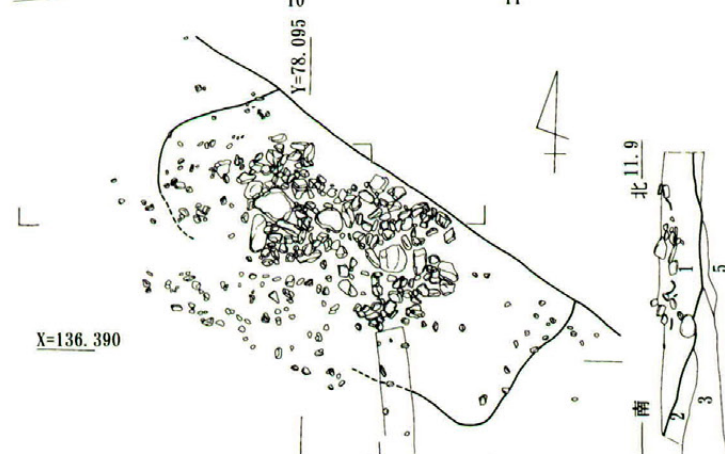
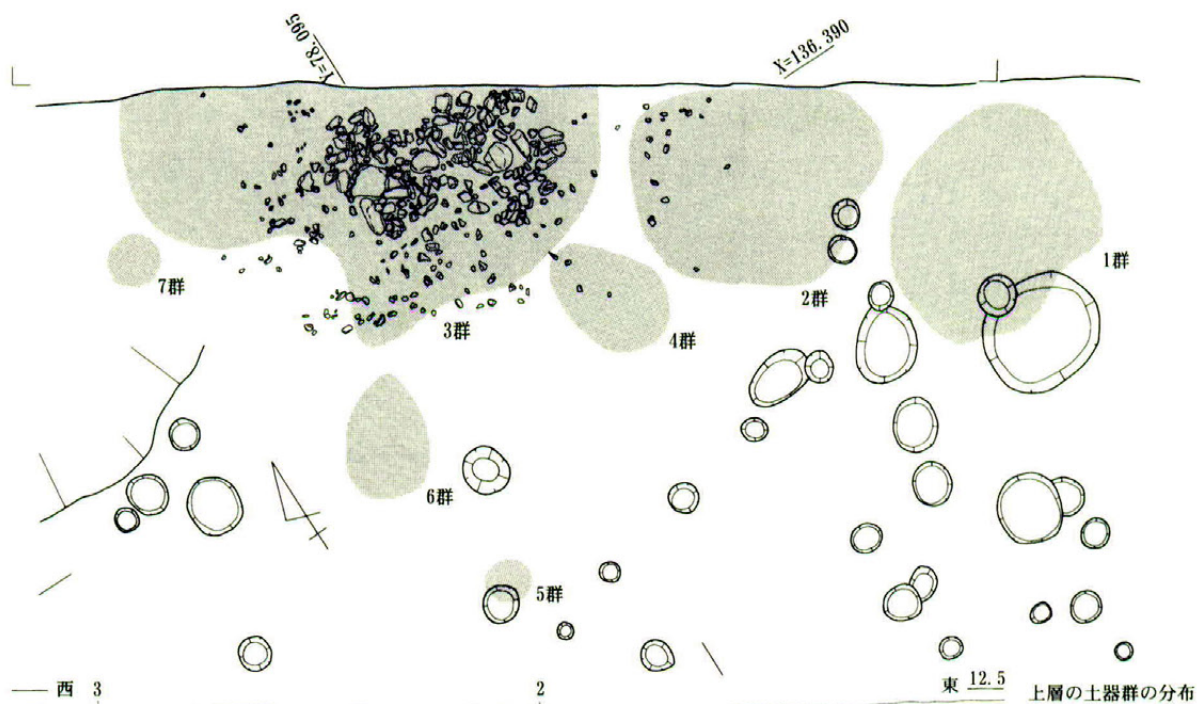
594の高杯脚部、595の小型鉢底部、597.598の甕口縁・底部片は、後期後葉段階の所産と思われるが、本遺構最上面から出土している点を考慮すると、上面を覆う堆積層に帰属する可能性が高い。

出土土器の様相は、後期後葉段階594.595.597.598を除けば、凹線文出現期の様相を呈していると考えられる。後期後葉の土器群が最上面から出土していることと、閉鎖的な埋没状態に無い点を考慮すれば、後期後葉の土器群を混入品と理解することができ、本遺構は中期後葉段階に形成されたものと推定しておきたい。遺物組成からは、日用品を中心とした廃棄遺構の性格が強い。

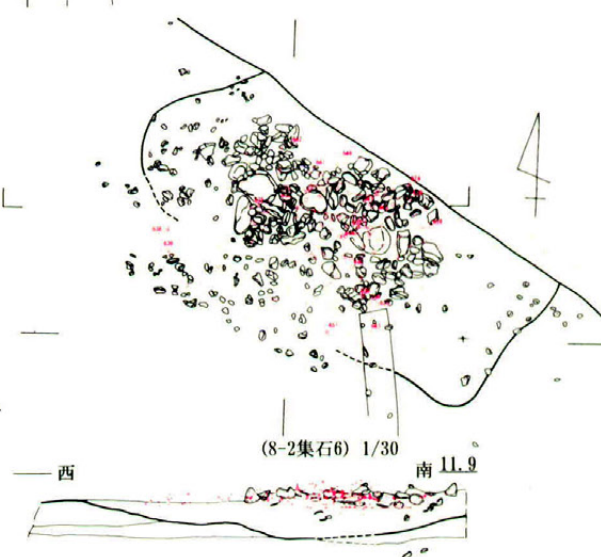
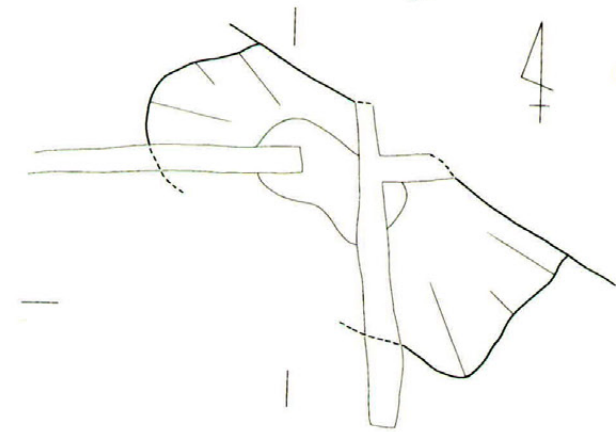
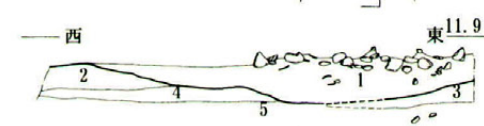
II区第2面S X 06

II-8区X = 136.390 Y = 78.095付近において検出した土坑上面に土器・自然礫の集中が認められる遺構である。本遺構は、基本的に第2検出面において確認しているが、土坑上層の第1検出面と第2検出面の堆積層中においても土器・礫群の集中を確認しており、この部分についても合わせて説明することとする。

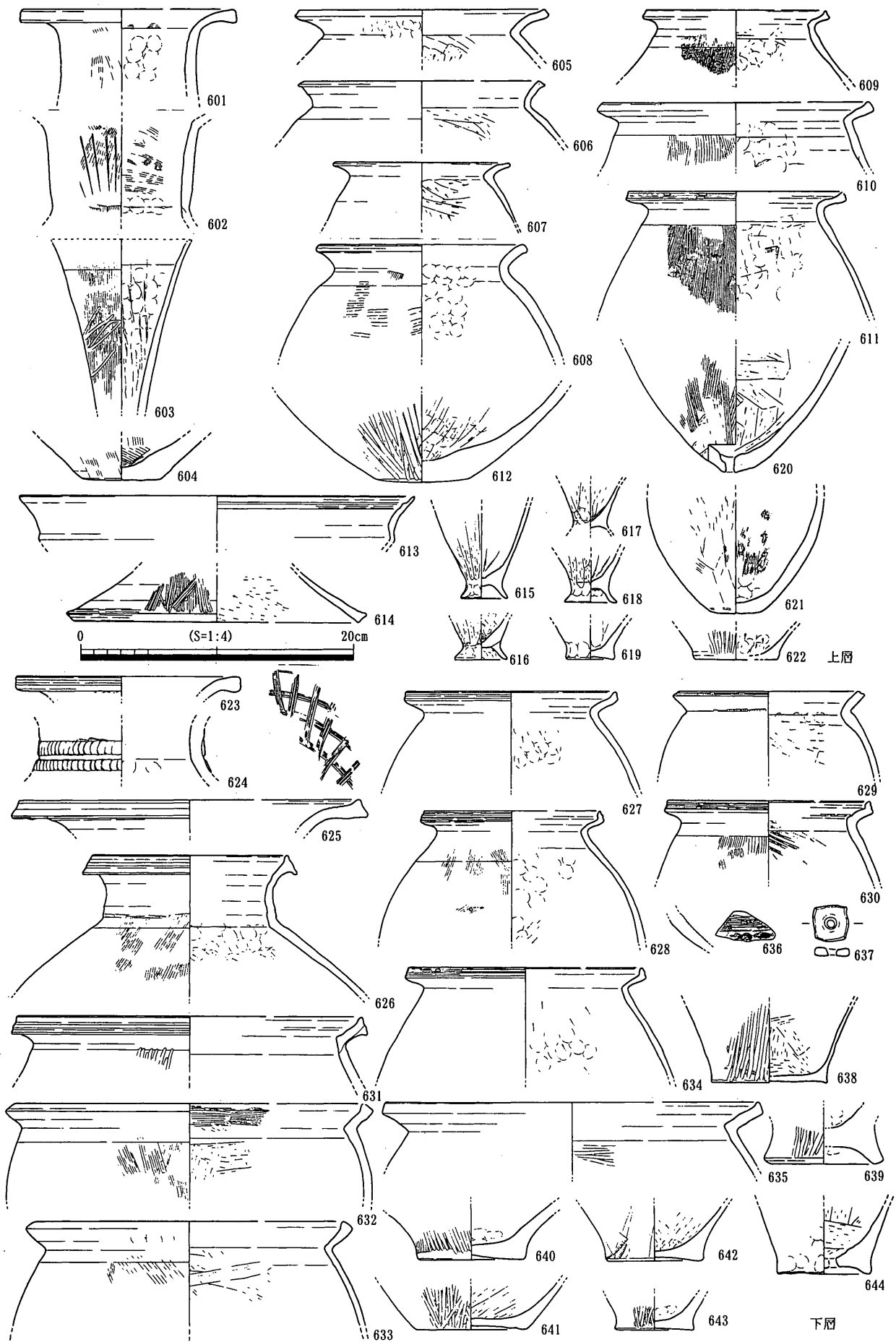
上層の土器・自然礫の集中が認められる範囲は下層土坑と重複する部分もあるが、より広範囲で検出されている。時間的な制約から平面図の作成が出来ていないが、概ね7群程度に分かれて分布している状況にあった。下層土坑の上面の状況との比較では、自然礫が小型であり土器片を主体としている。層



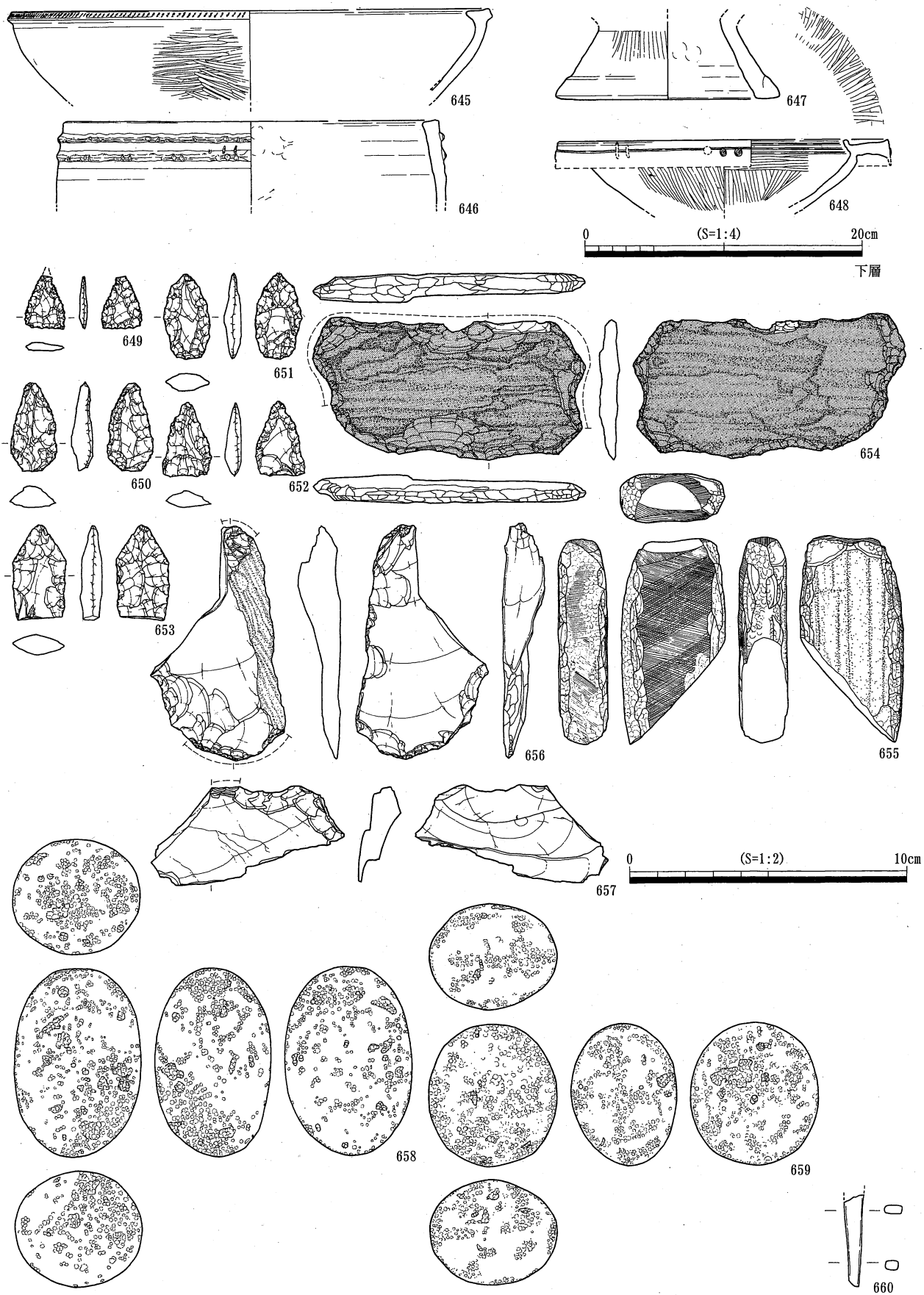
1. 耕作土
2. 10YR7/6 明黄褐色シルト(第1面遺構埋没土)
3. 10YR8/4 浅黄褐色シルト(Mn沈着,第1面基盤土)
4. 10YR3/1 黒褐色シルト(Mn沈着,第1面基盤土)
5. 5Y6/4 オリーブ黄色粗砂混粘土
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土(SX06 上層)
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂混粘土
8. 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混粘土(SX06 下層)
9. 2.5Y5/1 黄灰色粗砂混粘土
10. 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混粘土(第2面基盤土)
11. 2.5Y8/6 黄色シルト(第2面基盤土)



第125図 II区 第2面SX06平・断面図及び遺物分布図



第126図 II区 第2面SX06出土遺物実測図 その1



第127図 II区 第2面SX06出土遺物実測図 その2

位的な関係では、断面等での確認に成功した3群について見ると、上層の土器・礫群との間には僅かながら堆積層を介在させて存在している状況が見られた。なお、上層の一群に含まれる土器群は後期後葉段階の所産で占められ、礫に人的加工を施したものは見られない。

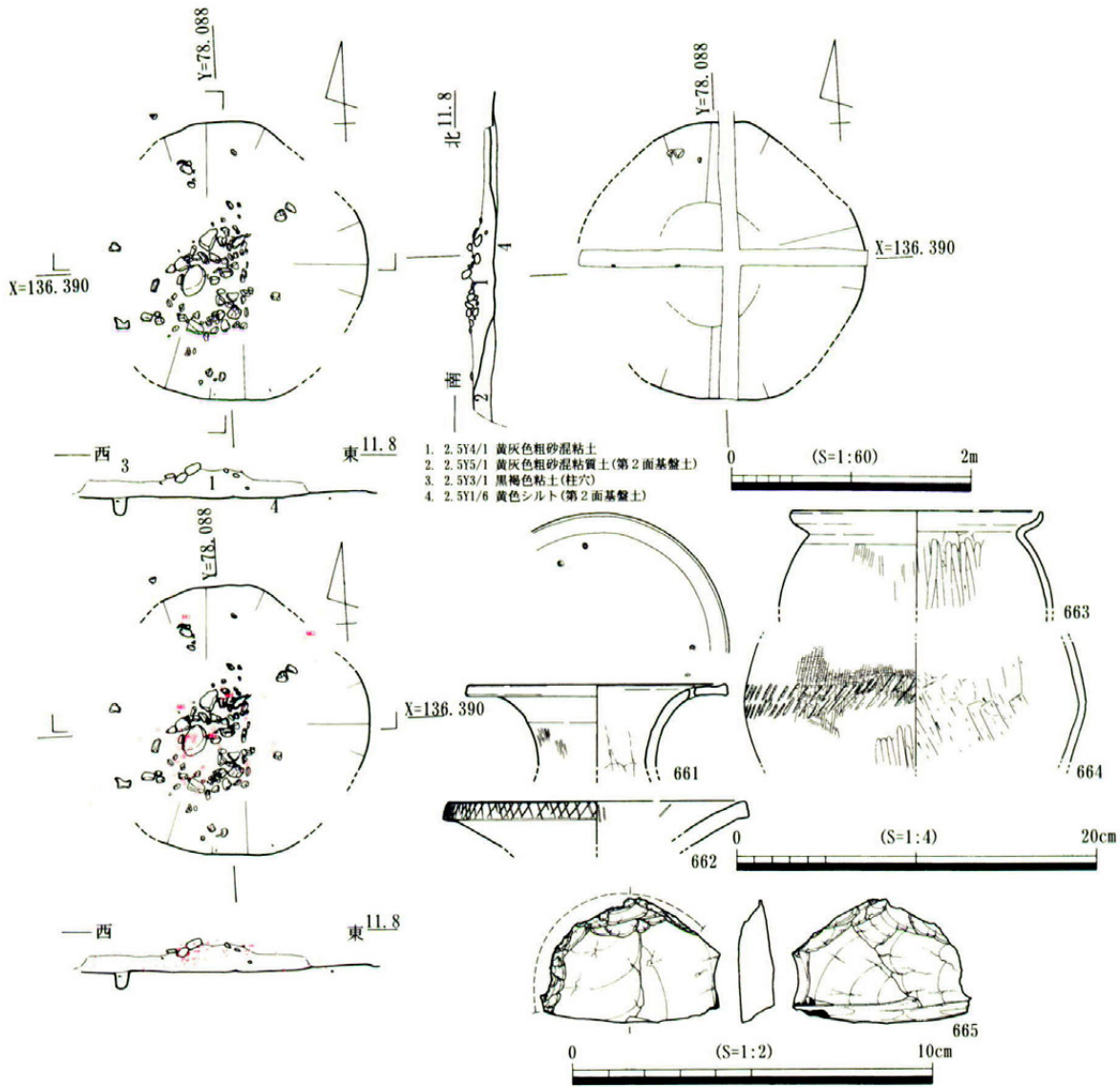
上層の土器・礫群を除去すると、3.5×3m深さ0.3m程を測る不定形の土坑の上位に土器・自然礫が集中して出土した。埋没土は粗砂粒を多く交える粘質土の単一層から構成されている。礫には、径0.4m程の大型のものから0.1m程の小型のものが見られるが、すべて地山中に含まれる砂岩礫であり人的加工を加えたものは見られない。これらの自然礫に混じって打製・磨製石器類も確認できるが量的には多くはない。土器類はいずれも破片の状態で完形近く復元できるものは見られず、中期後葉段階のもので占められる。

形成要因については不明であるが、空白期を挟み中期後葉と後期後葉段階にほぼ同様の遺構が形成されるには、下層土坑上面の礫群が完全に埋没せずに後期後葉段階にも確認できる状況にあったと考えられる。

601～622.649.650.652.654.655.657.660は上層からの出土遺物である。601.602は長頸壺の口縁・頸部片であり、602の頸部外面にはヘラ描きによる現状で縦位5本の細線で記号文が施される。603は細頸壺の頸部片。604は平底を留める壺底部片である。605～611は甕口縁部片。609.611は口縁部形態や胎土中に雲母角閃石が多く含まれることから、高松平野北東部地域からの搬入品である。610は609.611と比較してやや違和感があり、在地製作品の可能性がある。612は中期後葉段階の壺底部片である。613.614は高松平野北東部産の高杯。615～618は脚台付の底部にケズリを施す製塩土器である。619は調整手法や底部形態に製塩土器とするには違和感があり、小型鉢の底部片と考える。649は平基無茎式石鏃、650は円基無茎式石鏃。652は素材面を多く残す平基無茎式石鏃である。654は紅簾片岩製の打製石庖丁であり、側縁部に加えて背部中央にもノッチが見られる。655は緑色片岩製の柱状片刃石斧の基部片であり、側縁に対して基部は直交するが凹状に窪む。657は2次加工が見られる剥片である。

660は不明鉄器。鉄鏃の茎部と考えられるが小片であることから、器種を特定することが出来ない。623～648.651.653.656.658.659は下層土坑に伴う出土遺物である。623～625は広口壺の口縁・頸部片。626は頸部が直立し、張りが強い胴部をもつ壺・甕折衷的な形式である。636は櫛描施文を認める壺胴部片。640.641は壺底部片である。627～634は甕口縁部、638.639.642～644は同底部片。627.629.634.642の胎土中には片岩粒が含まれることから、阿波地域からの搬入品と思われる。639は脚台様の底部をもつ甕底部片である。637は土器片転用による有孔円盤であるが、あまりに小型であることから具体的な機能は不明である。645は両側拡張の口縁部をもつ台付鉢。外面には分割ヨコミガキを認める。646は刻み目をもつ貼り付け突帯を2条施す鉢口縁。647は短脚の台付鉢の脚部片である。648は垂下する口縁部外面に1条凹線と円形・棒状浮文で加飾する高杯である。651は円基式打製石鏃。653は大半を折損しているが、大きさや明瞭に菱形を呈する断面形から打製石剣の切先部と考えられる。656は上下縁に潰れが見られる楔形石器。658.659は敲打痕を多くとどめる砂岩製の敲石である。

上層出土遺物は、後期後葉を中心とし一部中期後葉のものが見られる。下層土坑に伴うものは、中期後葉段階で占められている。これらの出土遺物の帰属時期を援用し、本遺構の時期決定の材料とする。遺物組成からは、日用品を中心とした廃棄遺構の性格が強い。



第128図 II区 第2面SX07平・断面・遺物分布図及び出土遺物実測図

II区第2面S X 07

II-8区の微高地西縁辺部のX = 136.390 Y = 78.088付近で検出した遺構である。第1検出面と第2検出面間の掘り下げ途中に礫・土器群の集中を確認している。精査の結果、直径2.2 m程の円形の土坑であることが判明したが、壁面の立ち上がりが緩やかであったことから平面プランの検出に戸惑い、周囲を掘り下げてしまうという調査ミスを行っている。埋没土は粗砂粒を多く交える黄灰色粘土の単一層であり、第2検出面の上面の自然堆積層との識別が非常に困難であった。土器・礫群の埋没土上位に集中して検出されている。礫群は地山中に多く見られる砂岩・花崗岩から構成されているが、人的加工を加えたものは見られない。

埋没土を除去した段階で小ピットを確認したが、本遺構より以前のもものと推察される。

661～665は出土遺物である。661の広口壺内面には2孔1対の蓋受け用の穿孔が行われている。662の口縁部外面はヘラ描きによる斜格子文で飾られる。663は強い横ナデ調整による跳ね上げ口縁をもつ甕であるが、凹線文は確認できない。664は甕の胴部最大径付近の破片であり、外面には縦位のハケ・ミガキによって消去される平行タタキが見られる。665は上縁と一側縁に潰れ状の剥離面が

観察される楔形石器である。

出土土器には凹線文が確認出来ないが、663の口縁部形態などから凹線文出現前後の弥生中期中葉段階の土器群に比定されよう。これら出土遺物の帰属時期を援用し、本遺構が弥生中期中葉段階に形成されたものと推定しておきたい。

Ⅱ区第2面S X 08

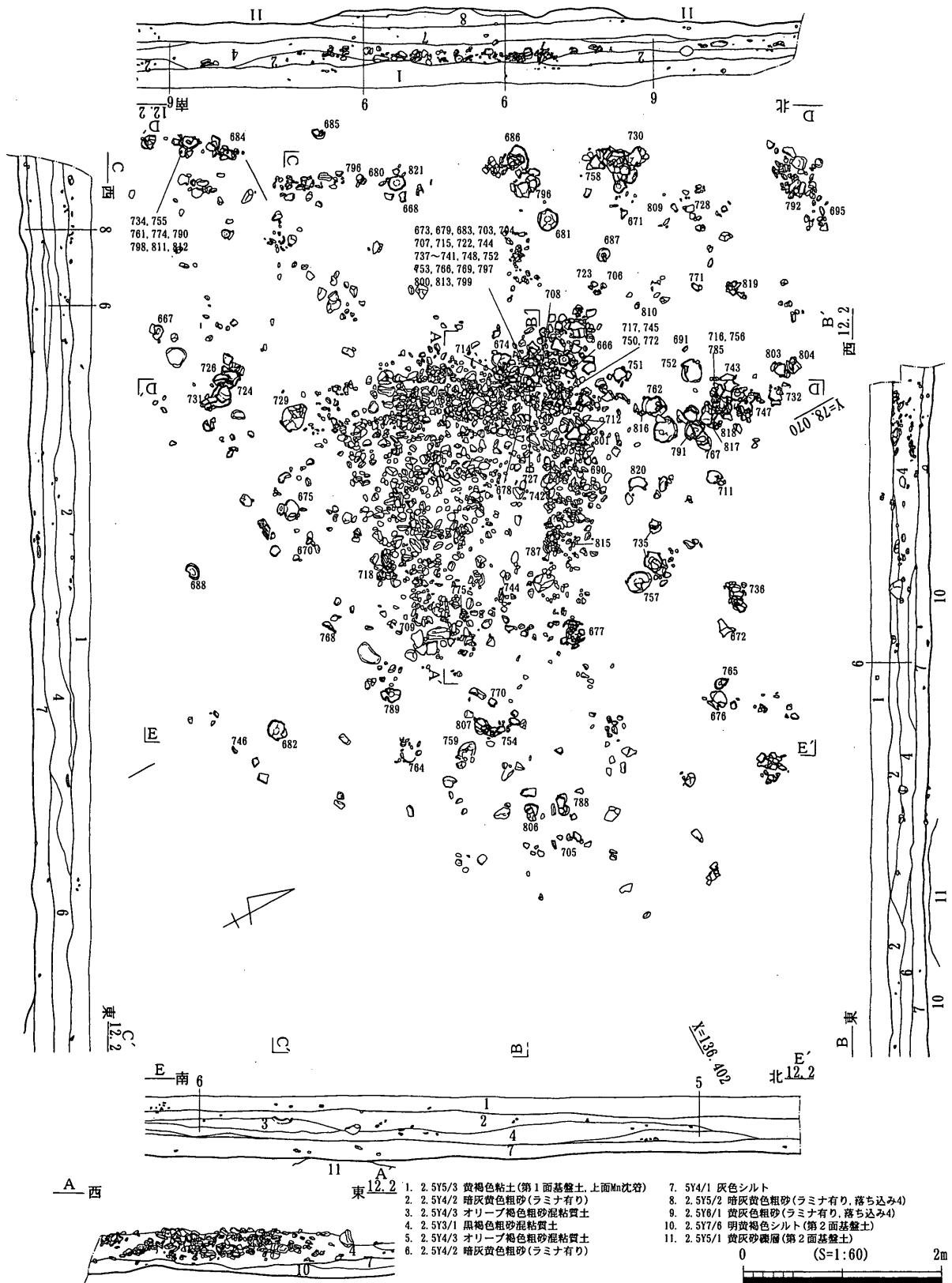
Ⅱ区西部の低地部分のX = 136.402 Y = 78.070付近で検出した不明遺構である。第1検出面と第2検出面間の堆積層において、径8m程の範囲に砂岩・花崗岩礫群と土器群の集中が見られた。ほぼ遺構全域にラミナが認められる粗砂層である2層の堆積が見られ、その下位の3・4層としたシルト層から礫・土器群が集中して検出された。この下層には落ち込み2や隣接して谷3が存在することから、巨視的にはⅡ区微高地東側の低地部分に相当し、全体的に不安定な堆積環境にあったことがうかがえる。この堆積環境を考慮すれば、礫・土器群が旧河道内に含まれるものである可能性を考えたが、礫の平面分布の方向性や遺物の出土状況から、再堆積したものでないと判断した。

礫群は、基盤層中に多く見られる砂岩・花崗岩礫を主体としており、穏やかに集中する部分は見られるものの、意図的に配置された状況は見られない。土器類は、弥生中期中葉～後葉のものと後期～後葉のものが混在した状況で出土しているが、弥生中期段階のものは量的に少なく破片であるのに対して、後期中葉～後葉段階のものは完存率が高い。以上の点から、主体的な形成時期は後期後葉段階にあると思われる。しかし、後期後葉段階の資料中にも時間幅が見られることから、同時期の中でも形成に関して一定期間見積もる必要がある。

666～670は長頸壺である。669は拡張口縁をもつ広口壺であり、後期中葉段階に遡る。671.672は口縁部が水平に屈曲する広口壺である。形態・胎土から見て、高松平野北東部かその周辺地域からの搬入土器の可能性が高い。673の短頸壺頸胴部には縦ハケによって消される平行タタキが確認できる。674～678は口縁部が緩やかに外反する広口壺であるが、形態にバラツキがあり時期差を示す可能性がある。676.678の広口壺は頸部から連続して口縁部が外反するものであり、674.675と比較して時期的に後出するものと考えられる。

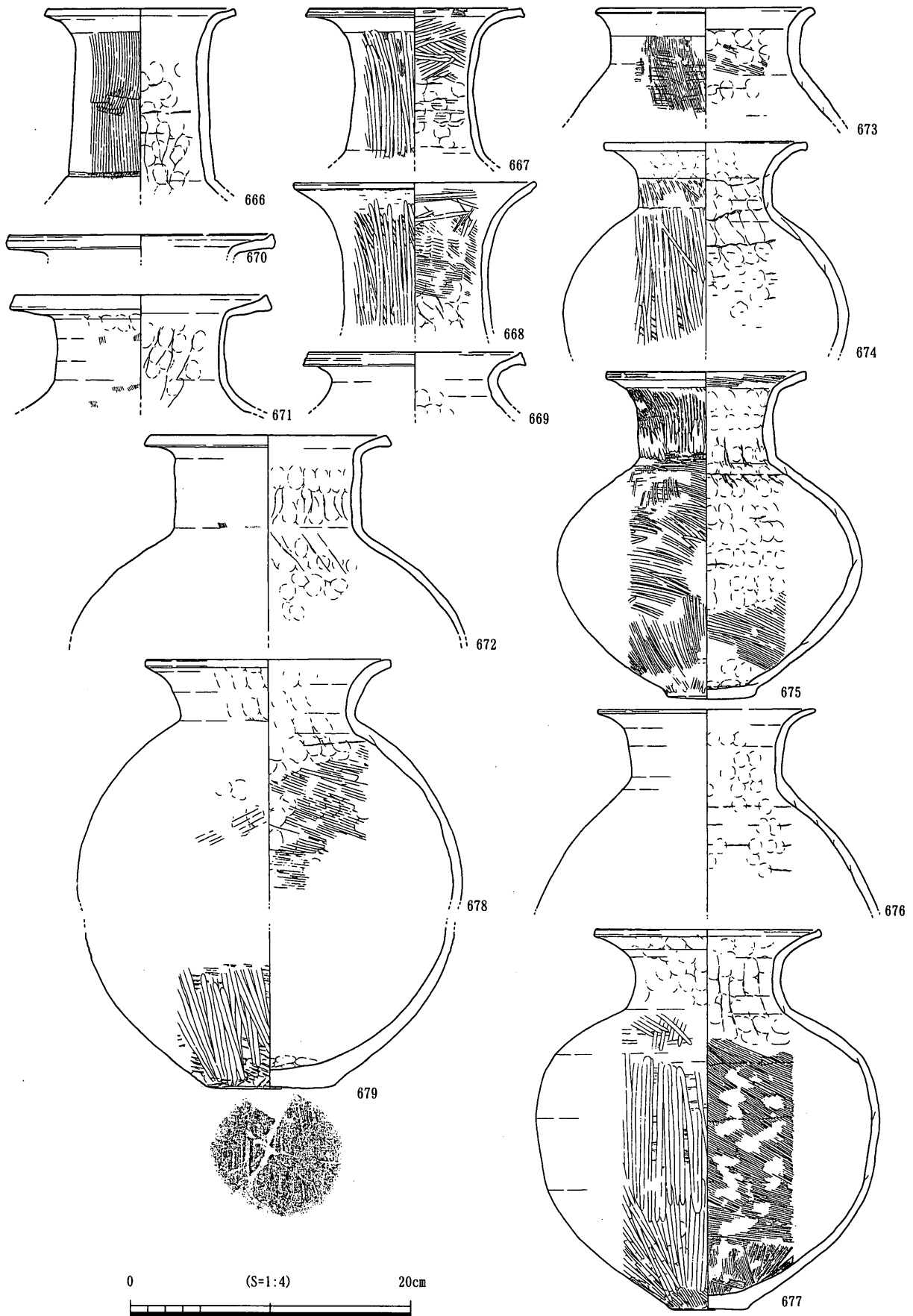
675はほぼ完形の広口壺であり、胴部全体にミガキによって消される平行タタキの痕跡が確認できる。676～683は広口壺の胴部片であり、679.681の底部外面には平底成形に関係した平行タタキ痕が見られる。683は広口壺の胴部片と思われるが胴部下半にケズリ調整が見られ、他のものと比べて違和感がある。684.685は短頸壺であり、内面は全体にケズリ調整が見られる。686の広口壺は接合点が見られないものの、出土状態と胎土・調整の類似から同一個体として復元した。687.688は細頸壺である。687は直口ではなく、口縁部が短く屈曲する。688は雲母・角閃石を多く含む胎土をもつことや、形態・調整手法から高松平野北東部かその周辺地域からの搬入品である。

689～702は中期中葉～後葉段階の土器群である。695.696.700は口縁端部外面に1条の凹線文が見られるが、一括資料でないことから、凹線文をもたない他の広口壺との時間的な関係は分からない。697は頸部に断面三角形突帯を付与する広口壺の頸部片である。691は、698のような口縁部外面に貼り付け突帯を施す壺の退化形態であり、中期後葉の所産と思われる。698は口縁端部に刻み目、口縁部下から頸部にかけて面を刻む貼り付け突帯を施し、中期中葉段階のものと見られる。699は長頸壺の口縁部片であり、形態から見て弥生中期中葉に遡る可能性がある。701.702は外面を櫛描直線文・

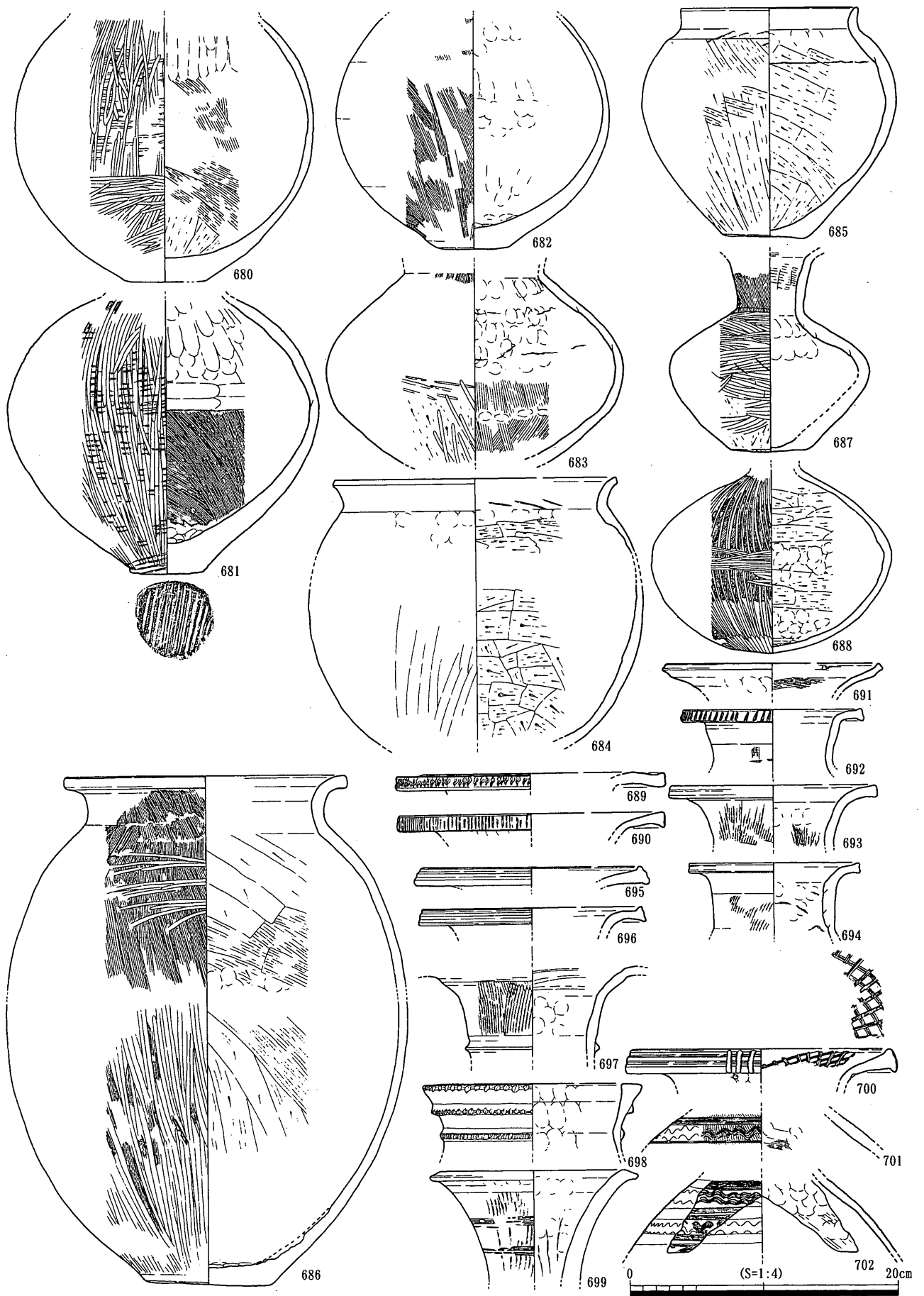


第129図 II区 第2面SX08平・断面図

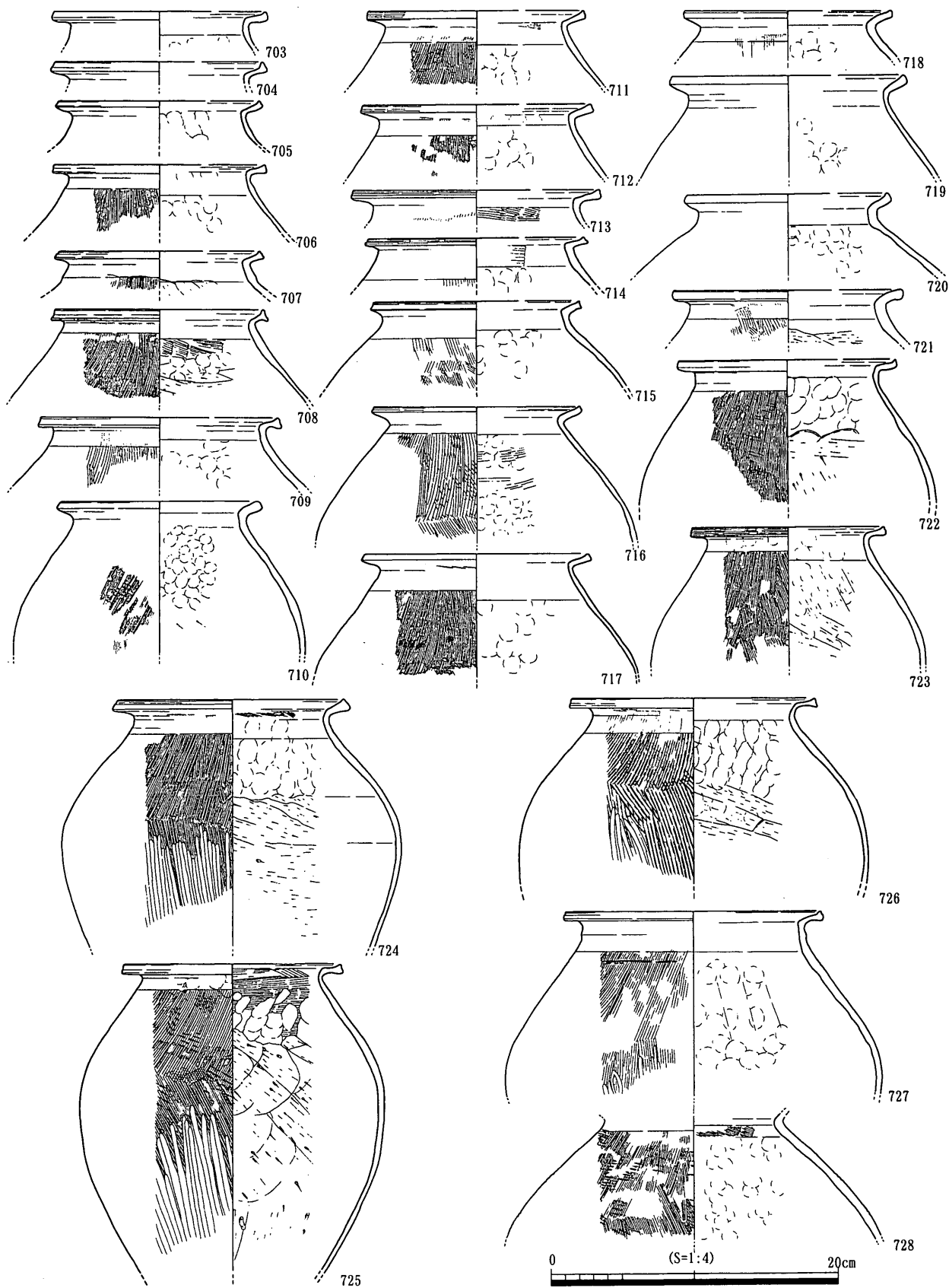
波状文で加飾する壺胴部片である。703～738は、高松平野北東部かその周辺地域からの搬入土器と思われる薄甕である。胴部外面上半に縦ハケを施し下半部は縦ミガキ内面の上半部にはヘラケズリに切られる指頭圧痕を明瞭に残す。



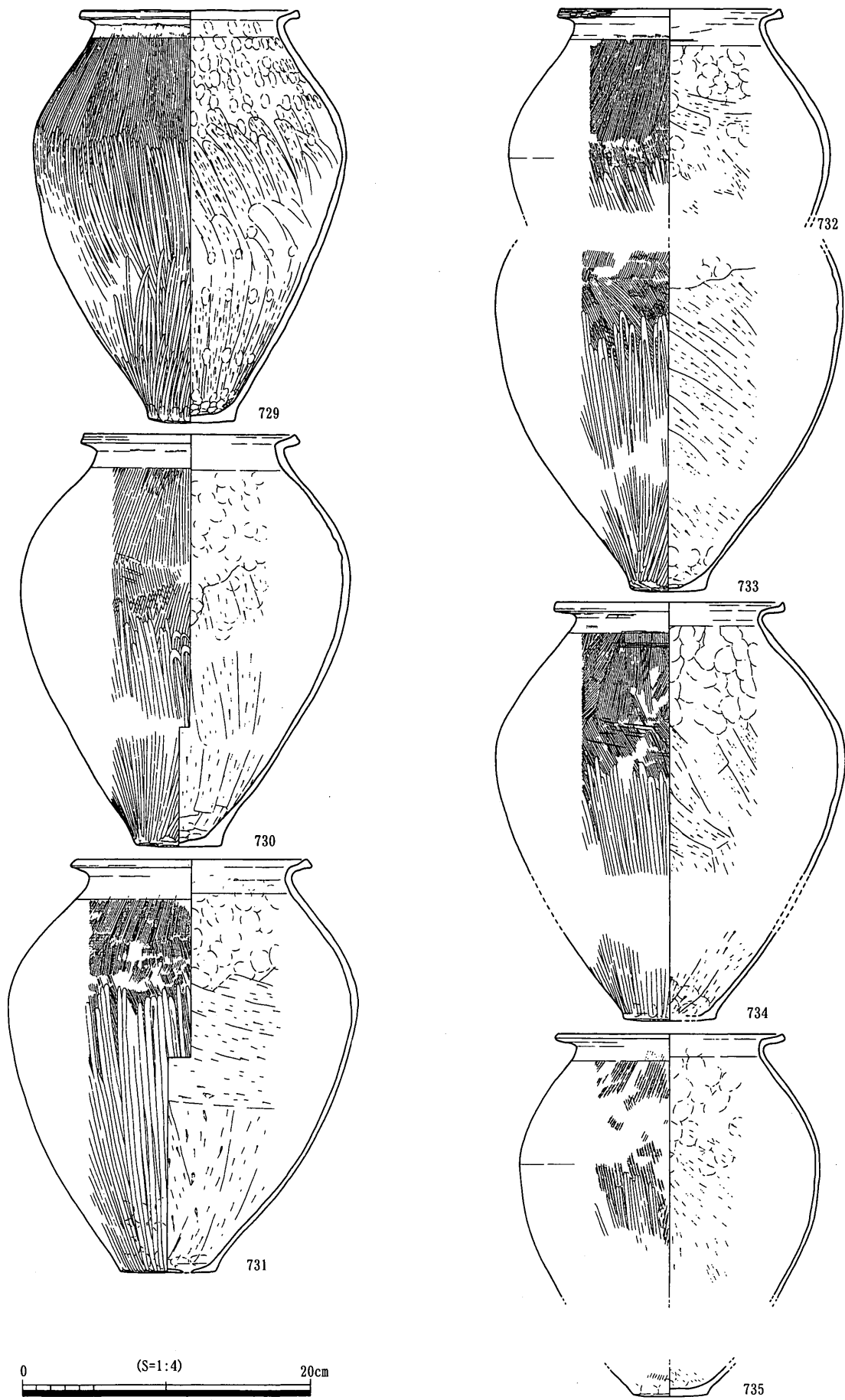
第130図 II区 第2面SX08出土遺物実測図 その1



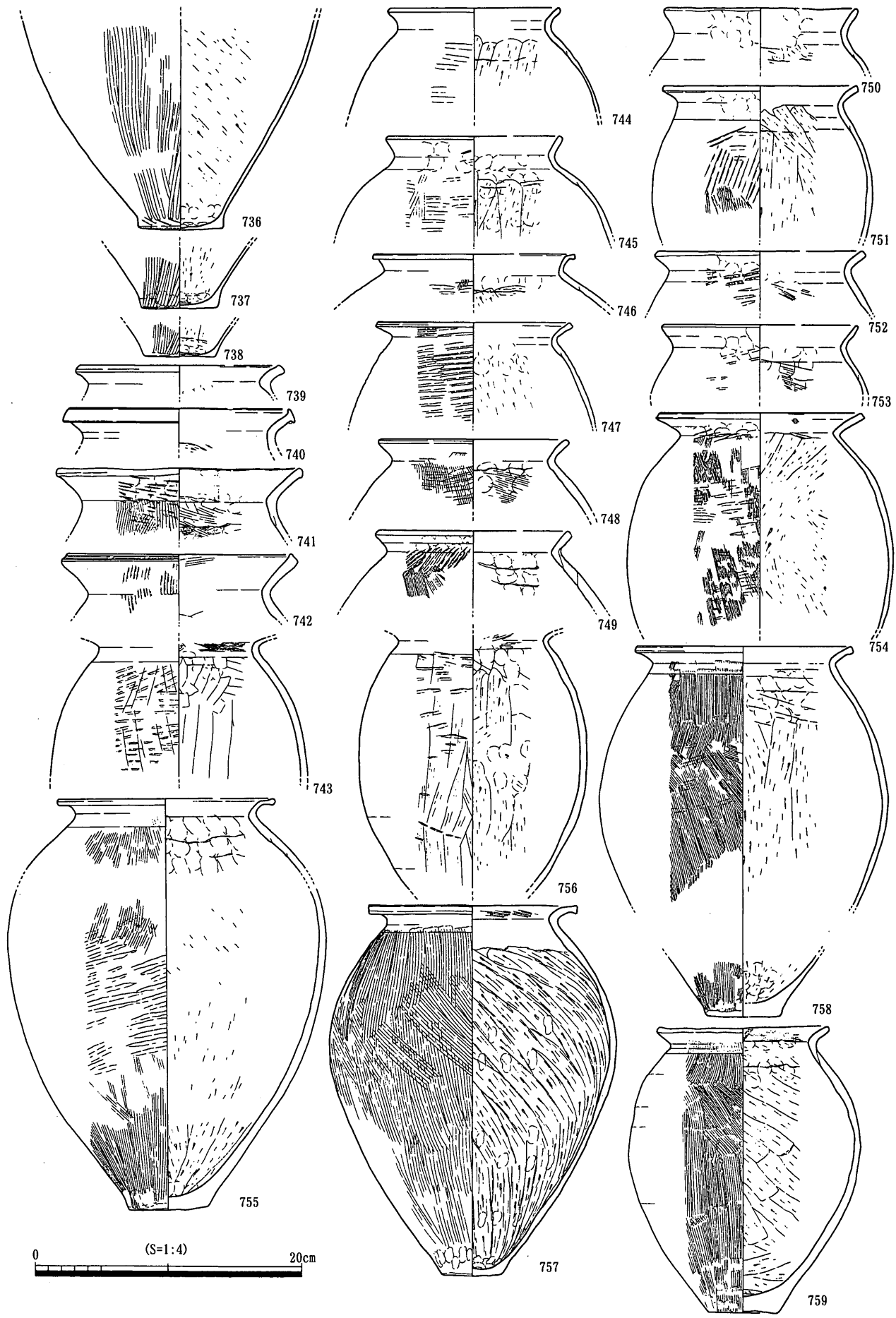
第131図 II区 第2面SX08出土遺物実測図 その2



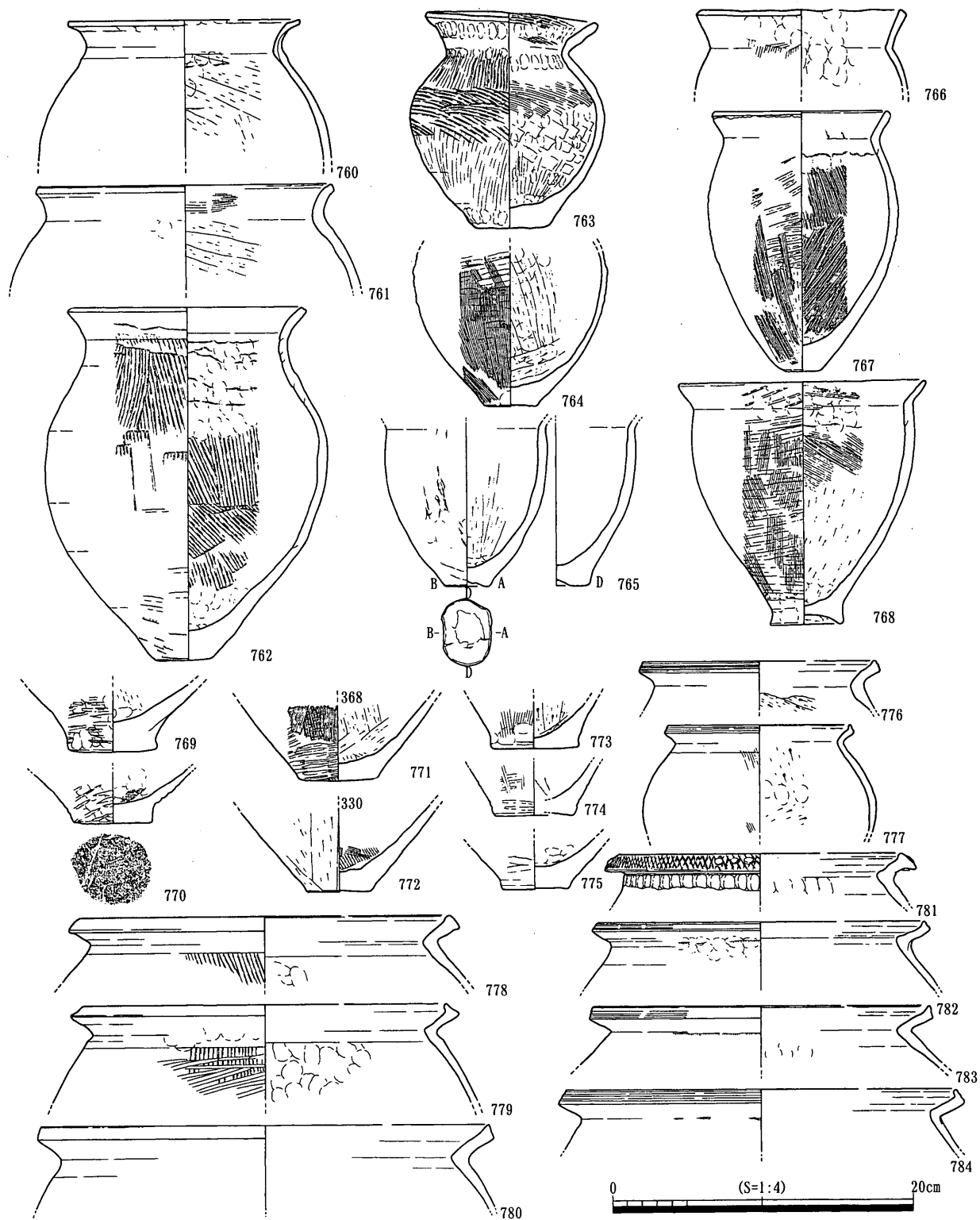
第132図 II区 第2面SX08出土遺物実測図 その3



第133図 II区 第2面SX08出土遺物実測図 その4

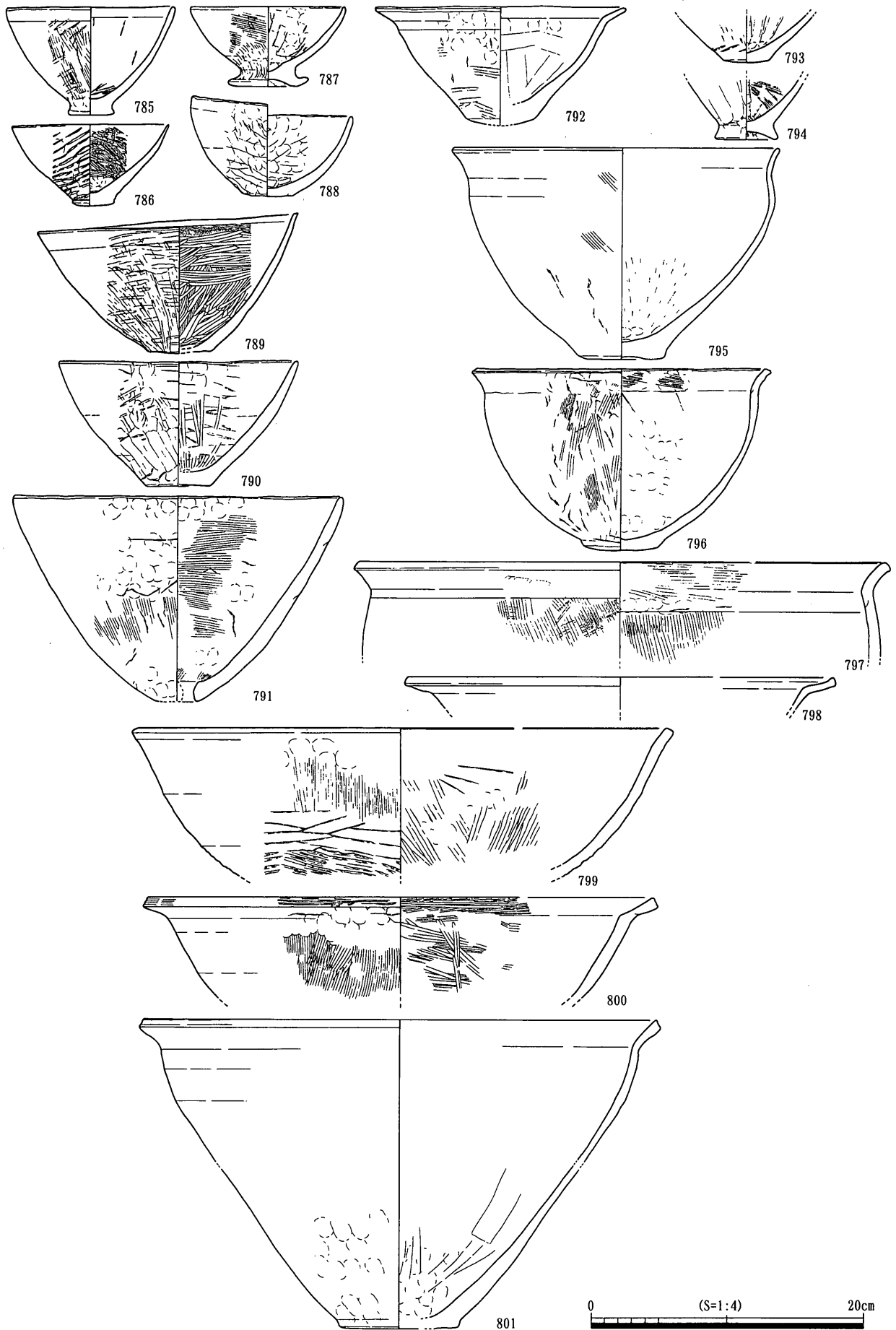


第134図 II区 第2面SX08出土遺物実測図 その5

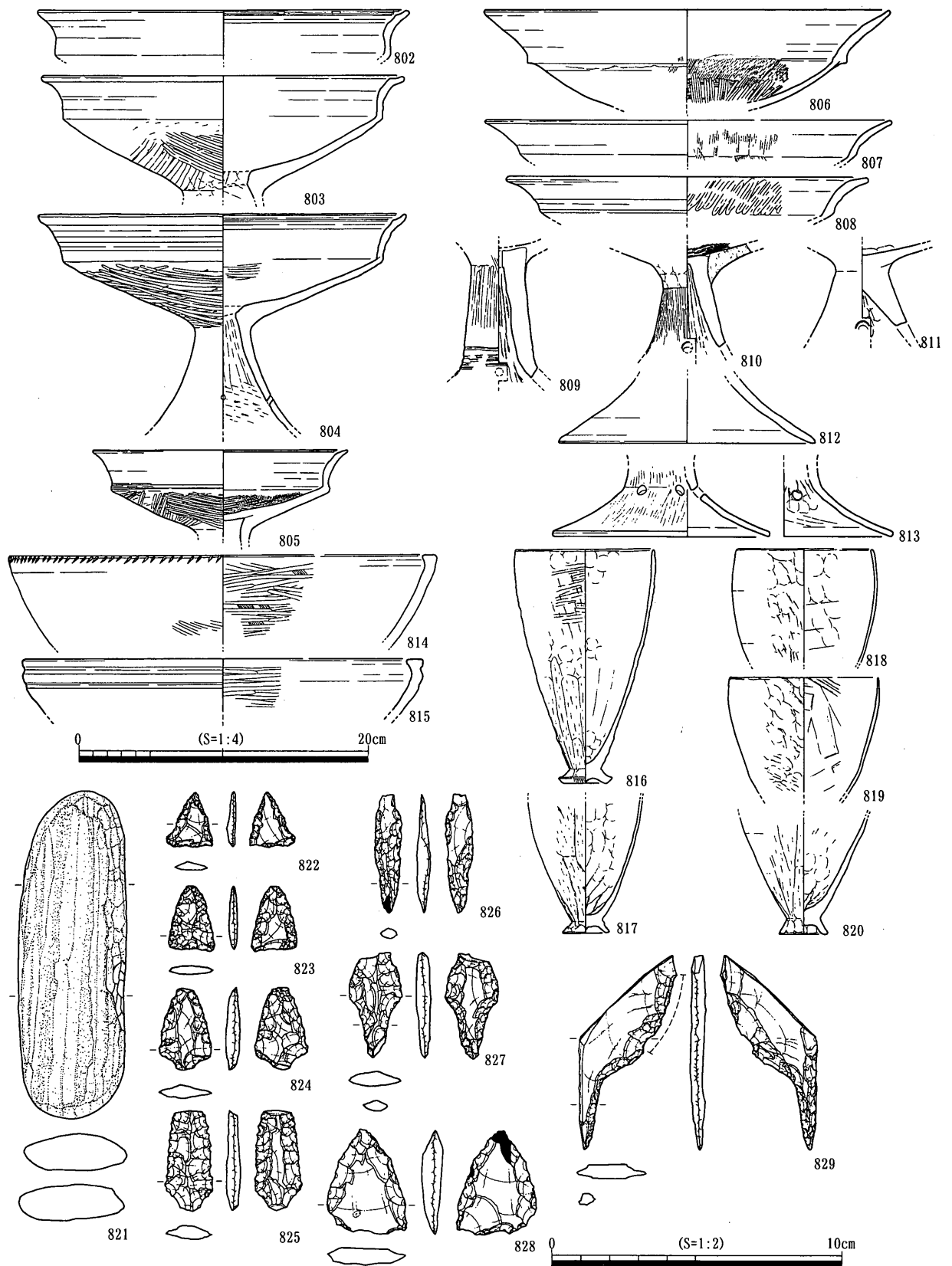


第135図 II区 第2面SX08出土遺物実測図 その6

710.722.725.728.733.734 は胴部外面の縦ハケの下に、細い左上がりのタタキ目をとどめる。口縁部形態にはバラツキがあり、拡張口縁をもち比較的古層を示す 708 に加えて、口縁部が水平近くになるまで屈曲する 726.727.735 は後期後葉でも後出する段階のものと思われる。739～761 は遺跡内での製作が考えられる一群の甕で、胴部外面に平行タタキ、内面にケズリ調整を留めるものが多い。741.747.749 は口縁部下までタタキ目が及ぶことから、胴部タタキ成形のち折り曲げによって口縁部

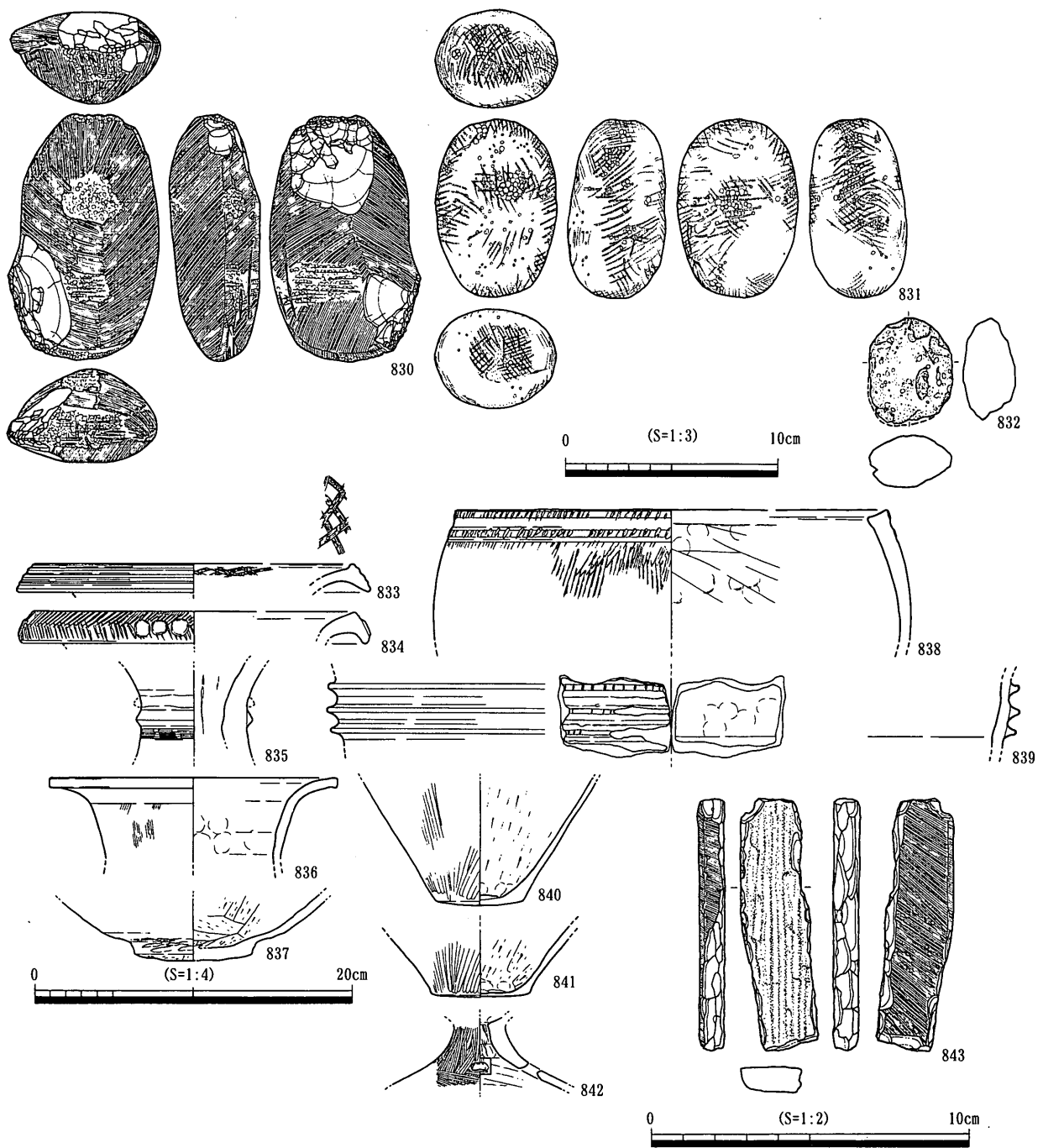


第136図 II区 第2面SX08出土遺物実測図 その7



第137図 II区 第2面SX08出土遺物実測図 その8

が作り出されたものと推測する。757～759は、胴部外面に密な縦ハケが見られ、757.758は形態から高松平野北東部産の甕を模倣したと思われる。760.761は口縁部の屈曲が緩い一群の甕であり、761は壺の可能性もある。762は口縁部が緩く外反し、内外面を粗いハケ調整によって仕上げるが、



第138図 II区 第2面SX08出土遺物実測図 その9

胴部下半には僅かながら平行タタキが看取される。特徴的な胎土ではないが、本遺跡出土の甕の中では形態的に違和感があり、搬入品の可能性が残る。763～768は小型の甕の一群である。763は内外面を密なハケ調整によって仕上げる。764.767.768は外面に平行タタキを留め、768は口縁部下にタタキ目が及び脚台様の底部をもつ。769～775は甕底部片であり、いずれも明瞭な平底を留める。

776.777は僅かに拡張される口縁部外面に凹線文をもつ小型の甕であり、形態から後期中葉以前に遡るものである。778～784は形態から見て弥生中期後葉の凹線文出現前後の所産である。778～780はやや厚手の口縁部をもつが、外面に凹線文は見られない。781は拡張される口縁部外面に斜格子文と円形浮文を貼り付け、頸部には押捺突帯を施すものである。782～784は上方に拡張される口縁部外面に凹線文が見られる。

785～801は鉢である。785～794は小型の鉢であるが、平底や凸底や脚台様になる底部をもつがタタキ成形の785.786.789.790.792や絞り痕を残す787.788.791.793が見られ、形態・調整手法にバラツキがある。795.796は中形鉢であり、いずれも明瞭な平底と外面に絞り目を留める。797～801は大型鉢である。799はボール状の器形をもち、胴部下半に平行タタキが看取される。801は出土状態・胎土等の観察から同一個体として図示した。

802～813は高杯である。802～805は円盤充填技法や口縁部内外面の凹線手法、杯部下半の分割ミガキ等の属性や胎土から、高松平野北東部かその周辺地域からの搬入品と思われる。806は口縁部が大きく外反する高杯であり、内面に赤色顔料の付着が認められる。808の内面には往復運動による縦ミガキが見られる。813の脚部には、合計6箇所の穿孔が行われている。814.815は弥生中期後葉段階の台付鉢と鉢である。814の口縁端部には刻み目、815の口縁端部には2条の凹線文が見られる。816～820は製塩土器である。脚台付であり、胴部下半を縦方向に削る。816の半完形品は口縁部下の外面に平行タタキが見られ過渡的な様相を示す。

830.831は安山岩質斑岩製の敲石である。830は全体に磨耗痕及び線状痕が見られ、それらを切る敲打痕とそれに伴う複数の剥離面が見られる。磨石転用の可能性が考えられる。831はほぼ全面に敲打痕が見られるが、アバタ状のものに加えて線状の敲打痕がある。832は軽石であり、具体的な機能は不明なものの浮子の可能性があろう。

833～843は下層の7層から出土した一群である。上層の3.4層出土資料と同じく弥生中期後葉と後期後葉段階のものが混在する。層位的な取り上げを試みたが、後期後葉段階のものは取り上げミスの可能性もある。

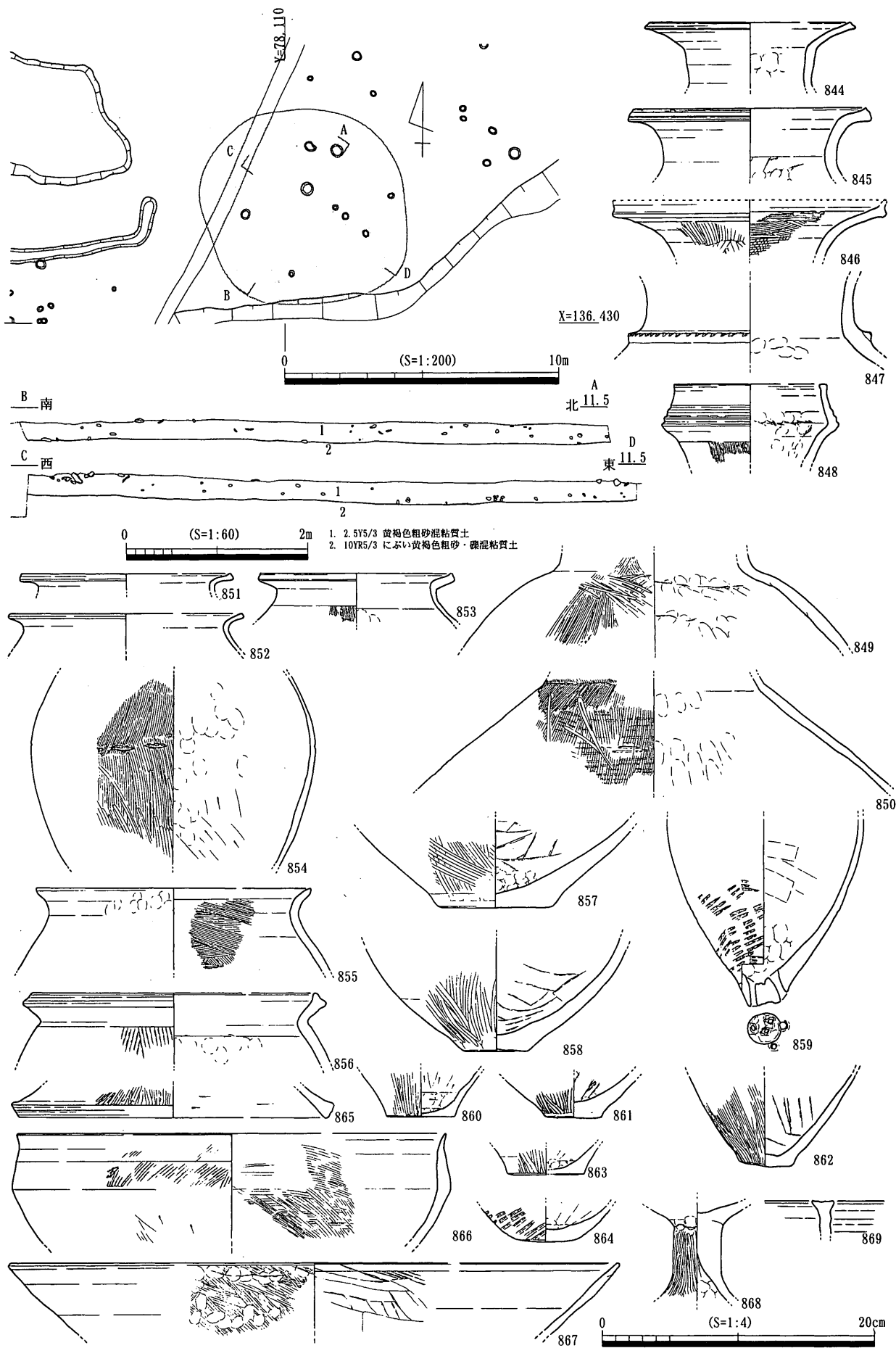
833.834.835は中期後葉段階の広口壺口縁・頸部片。836は後期後葉に属する広口壺口縁部である。837の甕底部片は形態から見て後期後葉でも新しい段階に位置づけられる。840.841の甕底部片は胎土・調整から判断して高松平野北東部産であり、後期後葉でも新しい段階である。838は中期後葉段階の鉢口縁部。839は同時期の鉢胴部片である。842は短脚の高杯であり、後期後葉の所産である。843は緑色片岩製の柱状片刃石斧片であり、側縁に再加工の痕跡が見られる。

II区第2面S X 09

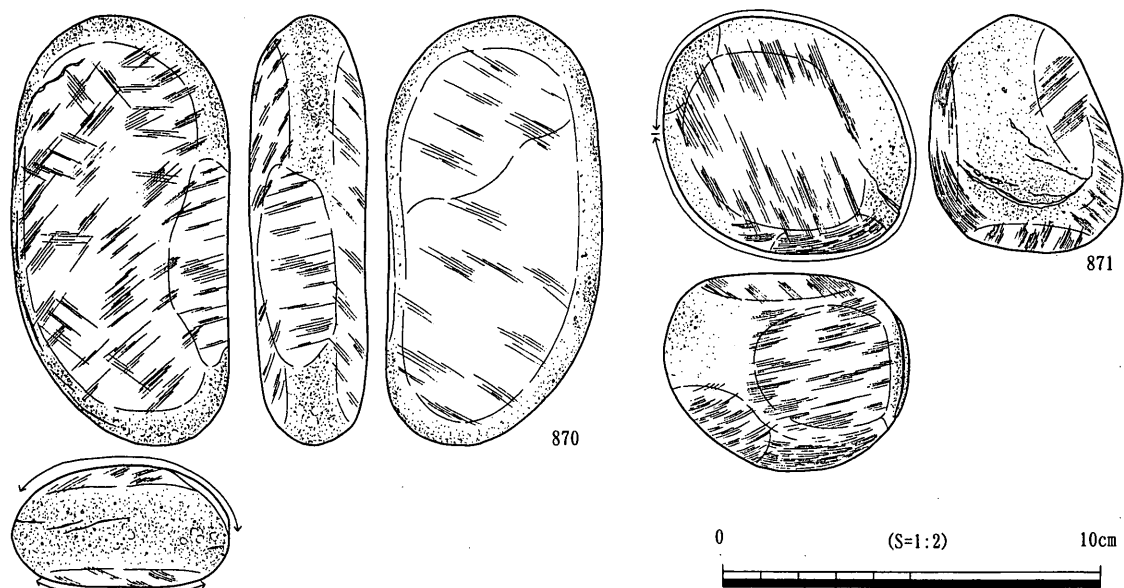
II-4区北西部X = 136.430 Y = 78.110付近で検出した不明遺構である。層厚0.25 m程を測る第1検出面と第2検出面との間の堆積層の中に、礫・土器の集中を確認している。断面精査の結果、掘り込み等の確認ができず、単一の堆積層の中に遺物が包含されるという土器だまり状を呈していた。従って、復元した遺構の範囲についても、遺物の出土範囲から推測している。

礫は敲石等を除き、多くが人的加工・使用痕を留めない径0.1～0.3 m程の砂岩礫から構成されており、土器自体は破片の状態で数箇所にまとまって出土した。これらが自然堆積する過程において遺棄された状況にあるのか、何らかの遺構を攪拌して生じたものなのかは判断できない。単なる包含層として認識もできるが、明らかに遺物の集中が認められたことから、遺構として報告するものである。遺物は1 mグリッドで一括して取り上げているが、図化可能なものが少数に留まることからまとめて掲載している。

844～847は広口壺の口縁・頸部片。845は確実に面取りする口縁部外面に2条の凹線を施し、後期中葉段階の所産である。848は複合口縁壺の口縁部であり、凹線手法から中期後葉段階の所産である。



第139図 II区 第2面SX09平・断面図及び出土遺物実測図 その1



第140図 II区 第2面SX09出土遺物実測図 その2

849.850は広口壺の肩部片。851～853の甕口縁部は形態・胎土から高松平野北東部地域からの搬入品であり、860.863はその底部片である。854は中期後葉段階の甕胴部片。855は口縁部が緩く外反する甕口縁部。856は拡張口縁に凹線手法が見られる中期後葉段階の甕。857.858は壺底部片である。859は尖底の鉢であり、底部に5個の焼成前穿孔が見られる。

861.862.864は甕底部片。865の高杯脚部は形態・胎土的に見て高松平野北東部地域からの搬入品である。866は細身の口縁部をもつ鉢、867は皿形の鉢であり、本遺跡出土資料中にはあまり見られない。868は中実の高杯脚部。869は中期後葉段階の鉢口縁部である。

870.871は安山岩質斑岩製の敲石である。全体的に敲打痕に切られる磨耗痕及び研磨？と見られる線状痕が観察されることから、磨石転用の可能性がある。

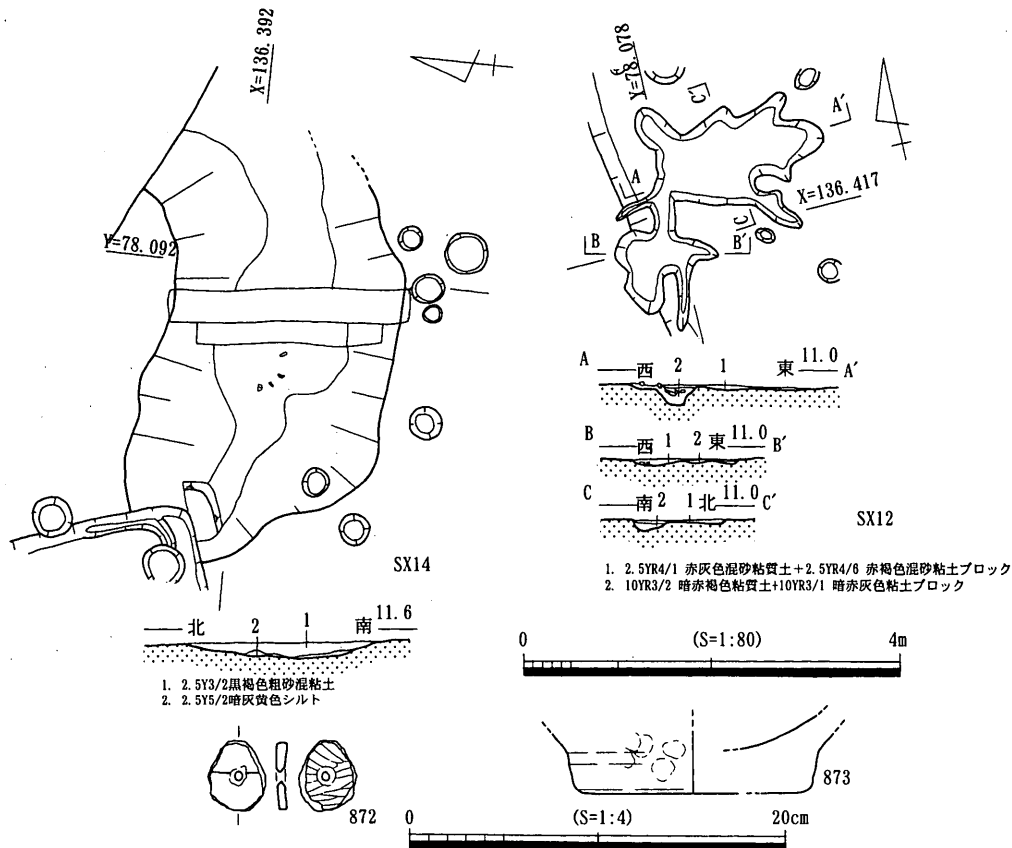
以上、出土遺物には後期後葉を中心とするものの、中期後葉のものも含めてかなり時間幅が見られることから短期間に形成されたものとは言い難い。

II区第2面S X 12

II -7区谷3上面のX = 136.417 Y = 78.078付近で検出した不定形落ち込みである。1 m四方の範囲に八手状に広がる平面形をもち、深さは0.1 m程を測る。埋没土中には、焼土ブロックを多量に含む。平面形が不定形なこと、断面形が一定しないことから風倒木痕の可能性が高いが、焼土塊を多く含む点はこれとは異なる。出土遺物には安定した平底をもつ壺底部片873が見られるが、谷3埋没土からの混入の可能性が高い。

II区第2面S X 14

II -8区X = 136.392 Y = 78.092付近で検出した落ち込みである。上面幅2.0 m深さ0.2 m程を測り、東西方向で4 mにわたって検出している。断面形が緩やかであることから、自然地形の可能性が高い。埋没土中からは、甕胴部転用品と見られる紡錘車872が出土した。



第141図 II区 第2面SX12. 14平・断面図及び出土遺物実測図

II区谷地形

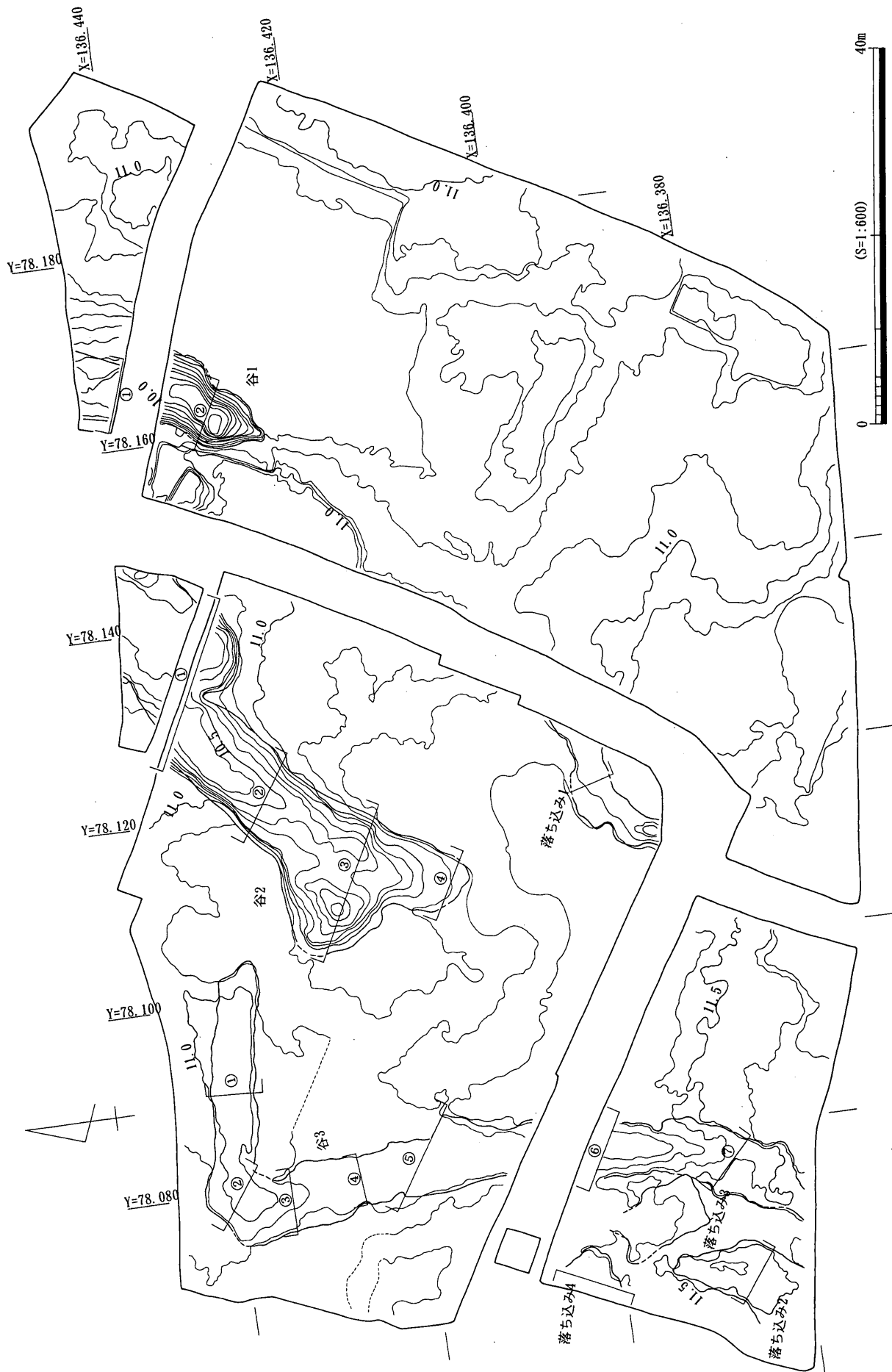
谷底低地に位置するII区では、弥生時代の遺構面下位の砂礫層等の影響により、複数の谷地形の地形や、微高地が見られ起伏に富む地形面となっている。

出土遺物の様相から、この地形面は弥生時代前期までには形成されており、中世13cまでの時間幅の中で順次埋積し平坦化していく。深度や埋積状況から、谷地形と落ち込みの二つに大別し解説する。

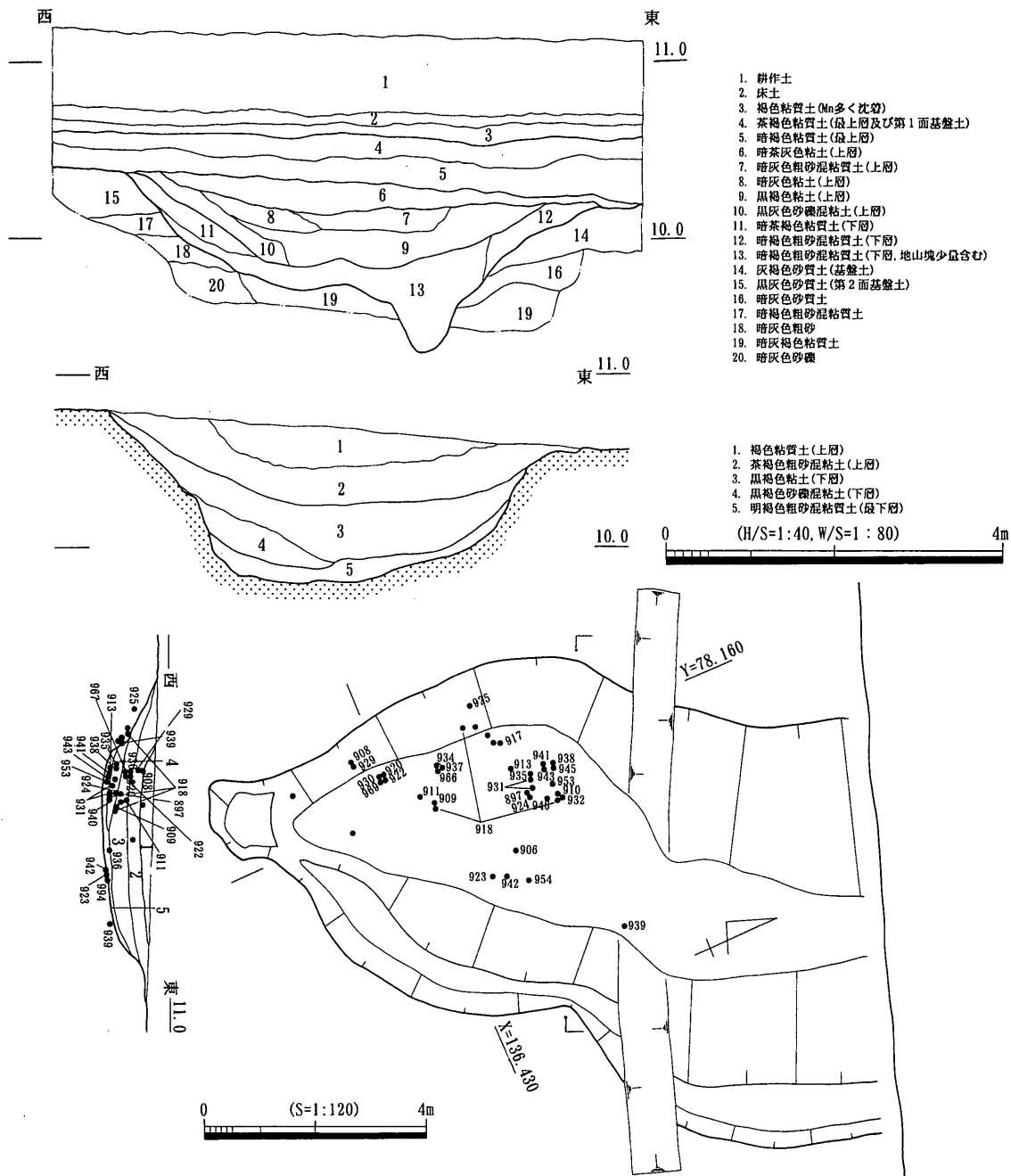
II区谷1

谷1は、II区北東部のI区から延びる扇状地との変換点付近に位置する。最大幅6m検出面から0.9m程の深度を測る。第2検出面で正確なプランを検出したが、断面図の検討から第1検出面においても埋積途上の窪地であったことが窺える。II-1区の中で途切れるものの、その延長部分にあたり南側のII-2区の検出面も低くなっており、巨視的には南西方向から延びる谷筋に相当する地形面に位置している。埋没土は、大別して上層の褐色系の粘土と下層の黒褐色粘土から埋積されており、上層には8~9c前半の須恵器・土師器等の遺物を、下層には弥生中期中葉~古墳時代前期の遺物が含まれる。これらの出土遺物が示す時期から、弥生中期中葉には本格的に埋没が開始され9c前半にはほぼ埋没したものと考えられる。また、上層からの出土ではあるが弥生中期初頭段階の土器片も見られることから、形成時期は弥生中期初頭以前と推定できる。耕作土と考えられる層準は確認できなかったことから、水田として利用されていた可能性は低い。

南半部の下層では、古墳時代前期の土師器群をまとめて検出している。また、この西側の微高地上には同時併存する竪穴住居(II区SH01)を検出していることから、隣接する住居から投棄されたものと見られる。

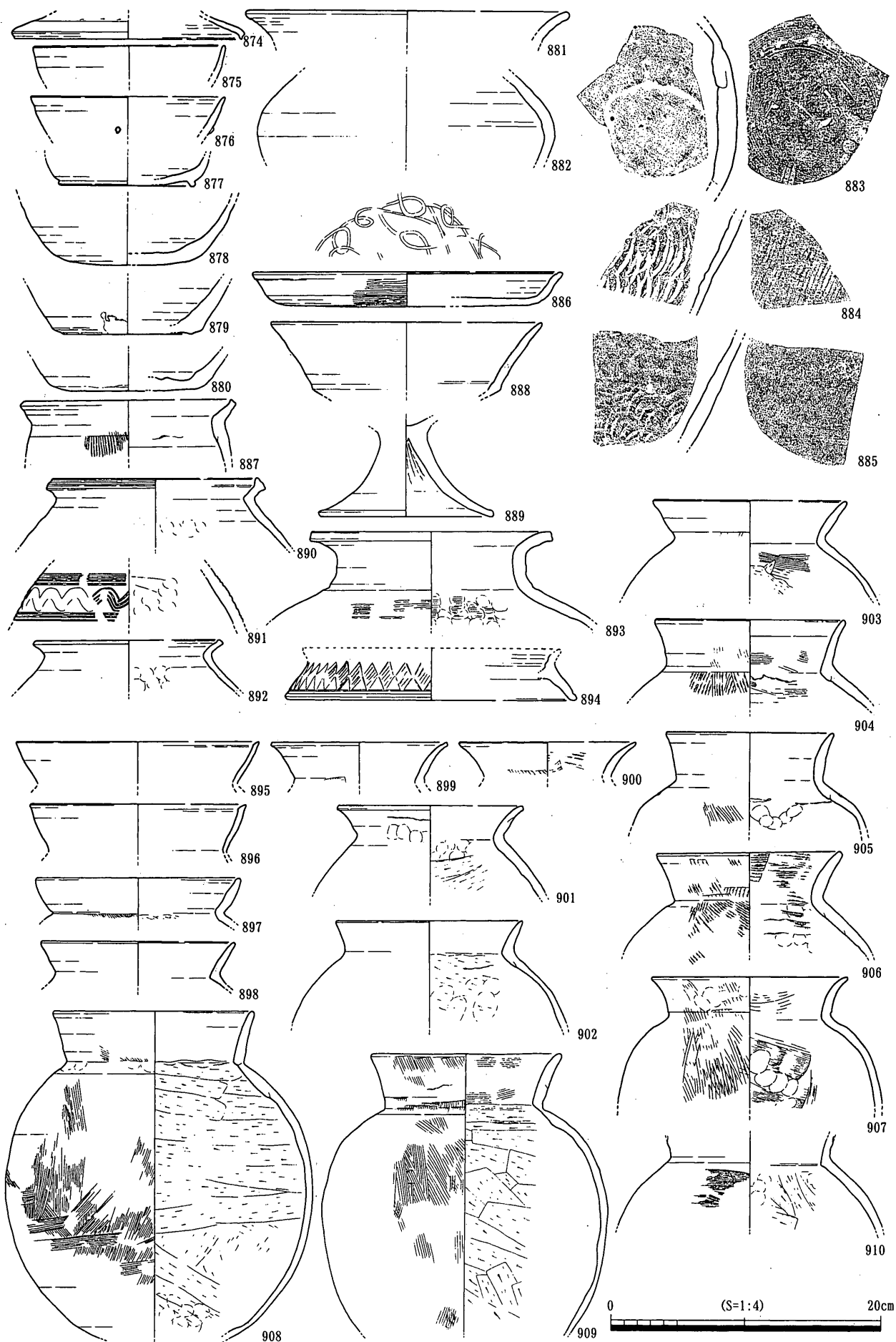


第142図 II区 第2面上の微地形

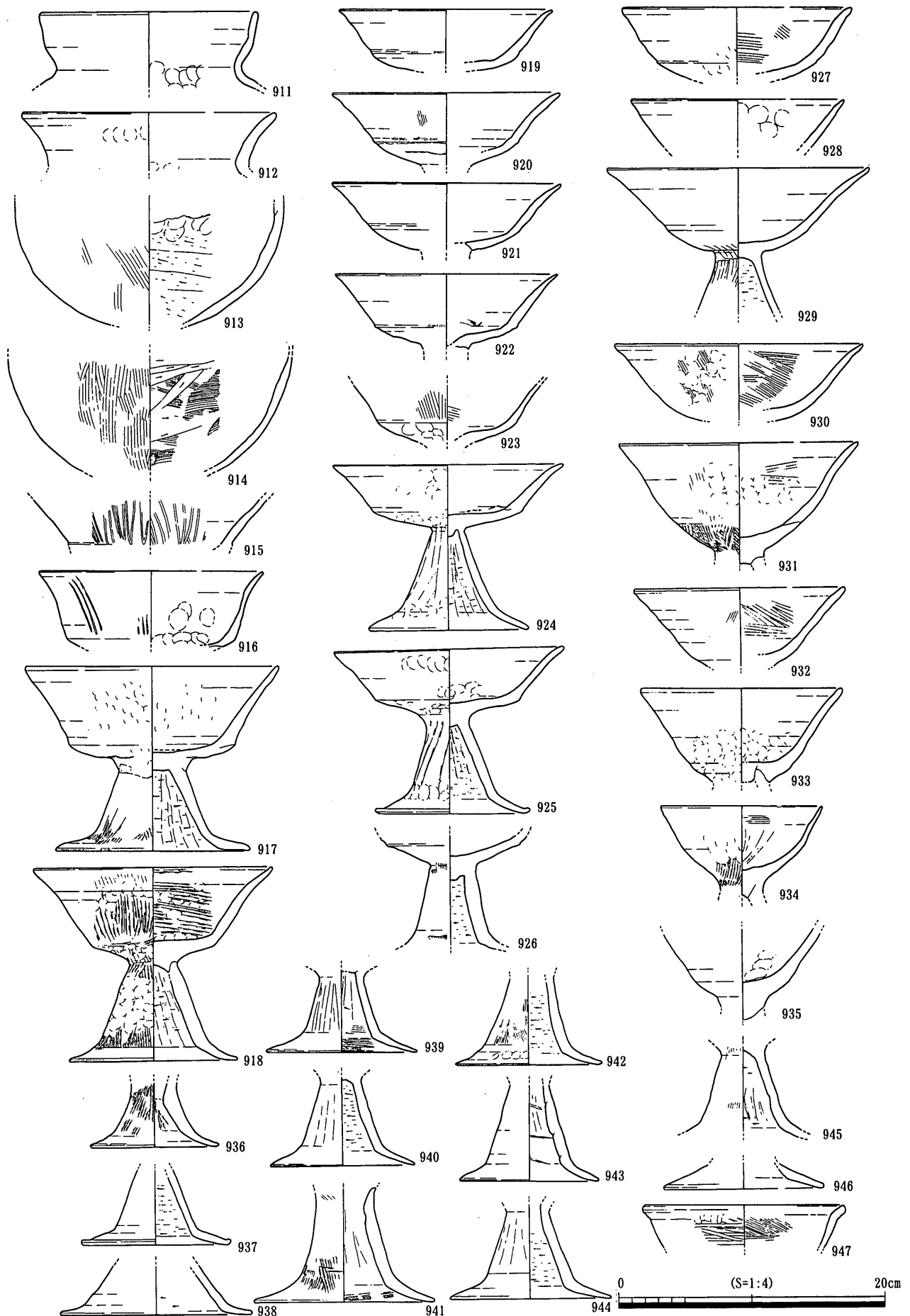


第143図 II区 第2面谷1断面図及び遺物分布図

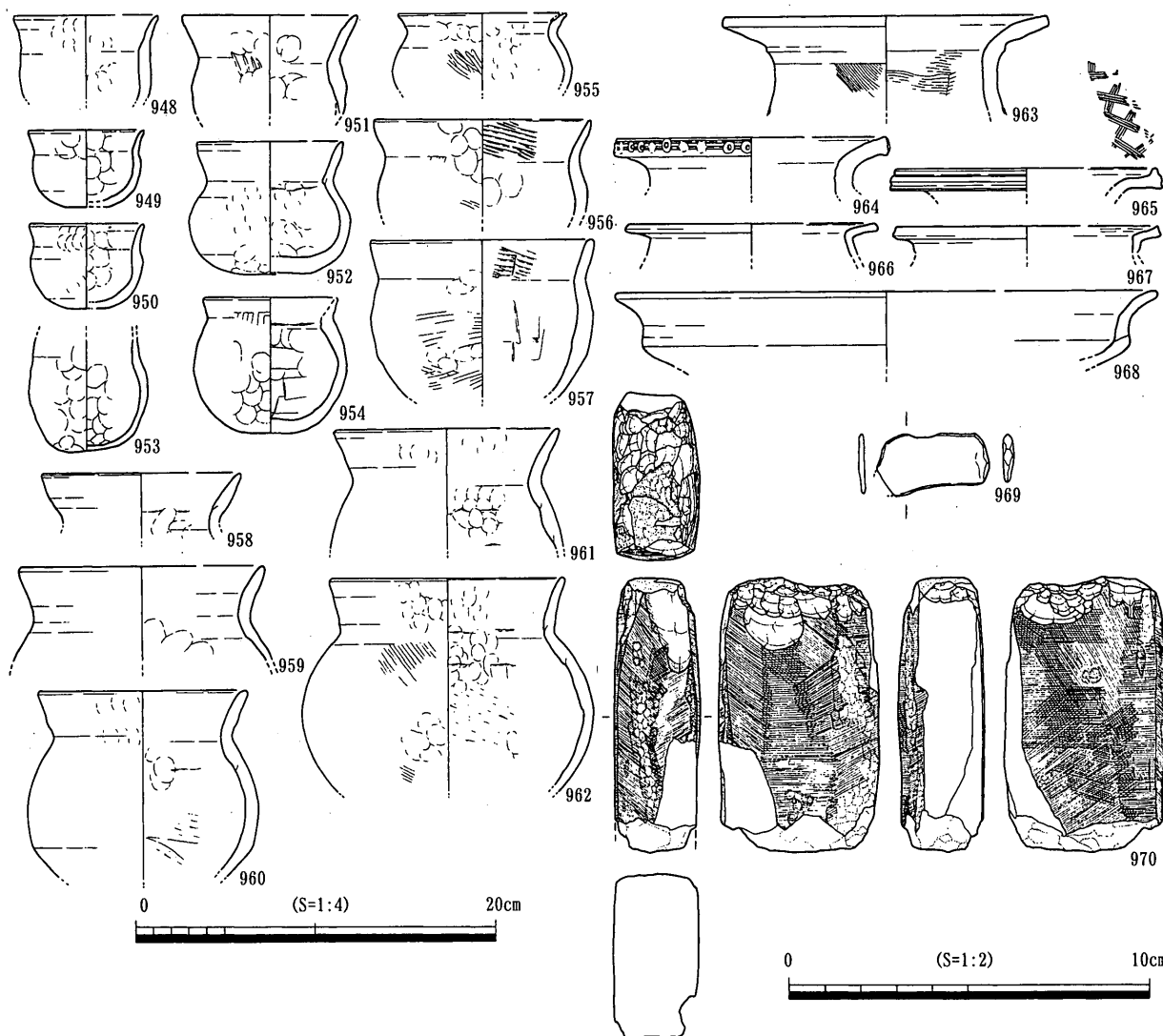
874～894.970は上層出土遺物である。874は須恵器杯蓋であり、笠形の天井部の形状から8c前半に比定される。875は無蓋の須恵器杯身であり、7c後半～8c前半の所産である。877は須恵器高台付杯であり、高台の貼り付け位置と矮小な形態から、8c末～9c前半に比定される。878～880は須恵器壺底部片である。881は須恵器甕口縁部、882は須恵器長頸瓶の胴部片である。891は円盤閉塞痕の明瞭に観察される須恵器横瓶の胴部片である。884.885は須恵器甕胴部片と思われる。886は内面にヘラミガキによる暗文が見られる土師器杯であり、内外面に赤色顔料が確認できる。形態から8c中葉段階のものと思われる。887は小型の土師器甕である。厳密な時期決定はできないが、これら須恵器・土師器は8c代を中心としたものである。970は緑色片岩製の柱状片刃石斧の基部片である。両主面・側面ともに入念に研磨されているが、研磨痕の下位には剥離・敲打成形痕が見られる。側面に対して基面は斜交し僅かに窪む。基部途中で折損しているが、現状で再加工の痕跡は確認できない。



第144図 II区 第2面谷1出土遺物実測図 その1



第145図 II区 第2面谷1出土遺物実測図 その2



第146図 II区 第2面谷1出土遺物実測図 その3

888は古墳時代前期の土師器高杯である。889は弥生土器高杯の脚部片と思われる。891の壺胴部外面には、積極的な回転台利用の痕跡が見られない櫛描文が施される。櫛描文の属性から見て、弥生中期初頭段階の所産と思われる。892は弥生後期の甕である。893の広口壺肩部外面には、平行タタキが看取される。894は垂下する口縁部外面に鋸歯文が見られる弥生後期後葉段階の器台片である。

895～969は下層出土遺物であり、前述した通り古墳時代中期の土師器群は一括性が高い。895～914は土師器甕である。一定程度の残存を見るものを対象にすると、胴部外面の縦ハケと内面のケズリ調整を基調とする。胴部形態はやや縦長の球形を呈し、小片を含めて肩部列点等の施文を行う個体は見られない。口縁部形態は、内傾する口縁部と口縁端部内面を肥厚する895～897や、直線的に外反する898～903、直立気味の口縁部をもつ904～910、複合口縁の911等が見られバラツキがある。912は短頸壺の口縁部片と思われる。915～946は土師器高杯である。大半が杯部に器形反転に伴う稜線や段状の窪みを残すが、930～935のように脚部との接合部から連続して口縁部に至るものも見られる。915.916の杯部外面には、文様を意識した細い縦方向のヘラミガキが見られる。脚部形態にもバラツキがあり、その殆どのものが「ハ」の字状を呈するが、937.938は脚部中位が膨らみ脚端部が明瞭に屈曲するもので比較的古層の属性を留める。947は鉢である。948～962は小型丸底壺である。955のみミガキが見られるが、多くのものはハケ目ないしナデ調整を基調とする。947の鉢内面

には、赤色顔料の付着が確認できる。顔料の同定は行えていないが、肉眼観察ではベンガラと推定される。949～953は手ずくね状の小型である。これらの資料は、甕の口縁部形態や長胴化した器形、高杯の杯部形態から布留4式併行期の所産と考えられる。

963～968は、下層出土の弥生土器群である。963の広口壺口縁部はその形態から、弥生後期後葉の所産と思われる。964は口縁端部外面の沈線文帯に竹管による押捺を行う円形浮文を施す。965は口縁部内面に櫛描による斜格子文を施す凹線文出現期の広口壺である。966.967は強い横ナデ調整が見られる弥生後期後葉段階の甕口縁部であり、胎土中に雲母・角閃石を多く交えることから、高松平野北東部かその周辺地域からの搬入品である。968は弥生後期後葉の高杯杯部と思われる。

Ⅱ区谷2

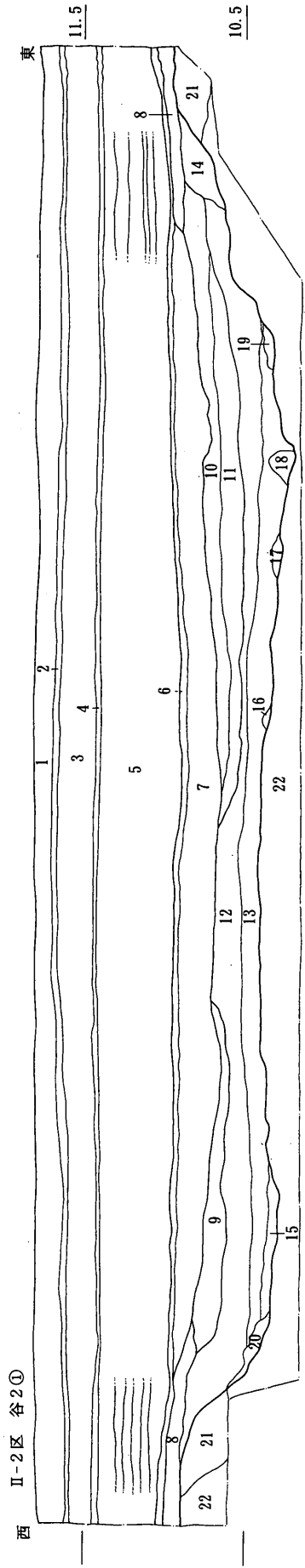
Ⅱ区北半部で検出した谷地形である。最大幅16m第1検出面からの深度1m程を測り、Ⅱ区微高地の中央部からやや蛇行しながら北東方向へ延びる。層位区分は大別して最下層・下層・中層・上層の区分が可能である。最下層は礫層の直上にみられ、遺物を含まない黄灰色粗砂である。さらにその上面に、黒褐色粘土から成る下層が面的に堆積する。この段階に平面プランが張り出す南西部分では、布留4式段階の土師器群が一括廃棄されている。中層は茶褐色系の粘土からなり、水平堆積しながら全域にわたって下層を覆う。断面2の部分では、中層を切り込むように溝状を呈する部分が見受けられるが、局所的なものであり、面的には広がりを見せない。この部分の埋没土は粗砂層を主体としていることから見て、中層堆積後の局所的な窪地に洪水砂が堆積したものと見られる。出土遺物は少数であるが、下層とほぼ同時期の古墳時代前期の土師器を少量含む。この段階でかなりの埋没が進行しているが、窪地状態であり、完全には埋没していない。上層はマンガン粒の沈着が著しく、出土遺物には8c代の須恵器類と12c代の土師質土器皿や黒色土器椀が含まれる。これら出土遺物から、中世前半には完全に埋没していたものと考えられる。

971～1011は出土遺物である。971～980は上層より出土した一群であり、8c～12cにかけての時間幅が見られる。971.972は土師質土器皿である。973は内黒の黒色土器椀の高台片と思われる。976は古墳時代中期の土師器甕の口縁部片であり、口縁部形態から布留4式併行期の所産と思われる。977は須恵器瓶類の肩部片である。978は口縁部から肩部を欠損するが、長頸瓶か平瓶の胴部片と見られる。979は須恵器甕の胴部片である。980は土師器甕の口縁部片で頸部に粗い縦ハケ調整を見ることができる。

981～984は中層出土遺物である。981は土師器高杯の杯部であり、杯部中位に僅かながら器形反転に伴う段を残す。982は椀形の杯部に口縁端部が短く外反する土師器高杯である。983.984は管状土錘である。

985は下層から出土した土師器鉢の胴部片であり、他のものと同じく布留4式併行期の所産である。

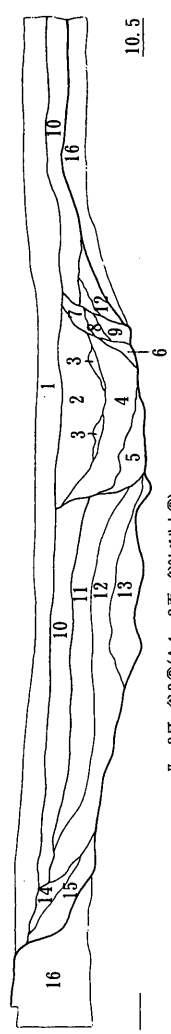
986～995.1008～1011はトレンチ等から出土した層位不明の一群である。986.987は複合口縁の土師器甕の口縁部である。988～991は土師器高杯の杯部・脚部片である。形態から見て布留4式併行期の所産と思われる。992.993は胎土中に雲母・角閃石を多く含む高松平野かその周辺地域からの搬入土器と思われる土器群である。994は明瞭な平底をもち、外面に平行タタキが見られる甕である。これらの遺物は本来的には下層に属していた可能性が高い。995は土師器甕の口縁部であり、古代期の所産と考えられる。



II-2区 谷2①

1. 褐色粘板岩(粘板岩)
2. 褐色粘板岩(粘板岩)
3. 10VR6/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
4. 10VR5/6 黒褐色粘板岩(粘板岩)
5. 泥岩
6. 2.5Y3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
7. 10VR5/3 黒褐色粘板岩(粘板岩)
8. 2.5Y5/4 灰黄褐色粘板岩(粘板岩)
9. 10VR4/2 灰黄褐色粘板岩(粘板岩)
10. 10VR3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
11. 10VR3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
12. 2.5Y3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
13. 2.5Y3/2 黒褐色粘板岩(粘板岩)
14. 10VR3/2 黒褐色粘板岩(粘板岩)
15. 5Y3/1 オリーブ黒褐色粘板岩(粘板岩)
16. 2.5Y4/2 暗灰黄褐色粘板岩(粘板岩)
17. 2.5Y3/2 黒褐色粘板岩(粘板岩)
18. 灰色砂礫(下層)
19. 2.5Y3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
20. 2.5Y3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
21. 10VR5/6 灰黄褐色粘板岩(粘板岩)
22. 砂礫層

東 11.5

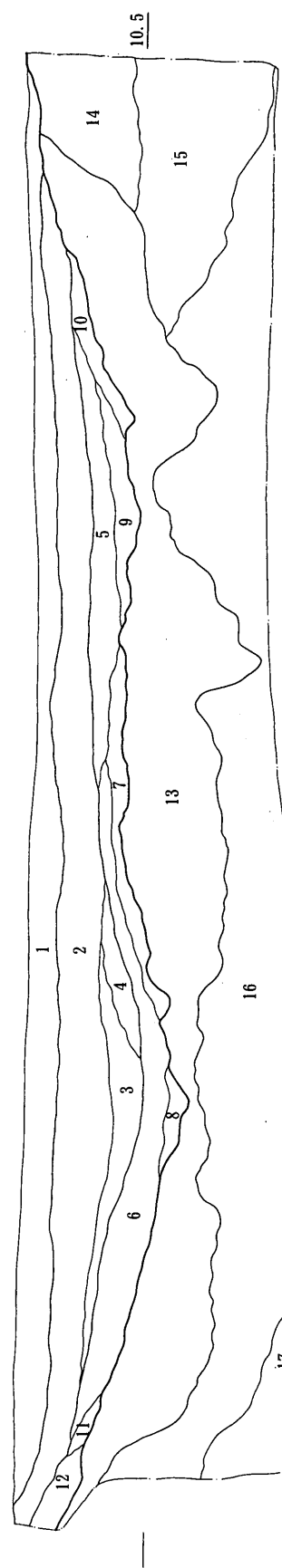


II-2区 谷2②

1. 10VR5/3 灰黄褐色粘板岩(粘板岩)
2. 10VR4/2 灰黄褐色粘板岩(粘板岩)
3. 10VR3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
4. 灰色砂礫(ラミナ有り)
5. 10VR4/1 和灰色粘板岩(粘板岩)
6. 2.5Y4/1 灰黄褐色粘板岩(粘板岩)
7. 2.5Y3/2 黒褐色粘板岩(粘板岩)
8. 10VR4/1 和灰色粘板岩(粘板岩)
9. 10VR3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
10. 10VR4/2 灰黄褐色粘板岩(粘板岩)
11. 10VR3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
12. 7.5YR2/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
13. 7.5YR3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
14. 5Y3/1 オリーブ黒褐色粘板岩(粘板岩)
15. 2.5Y3/2 黒褐色粘板岩(粘板岩)
16. 灰色砂礫(第2面基盤土)

第147図 II区 第2面谷2断面図 その1

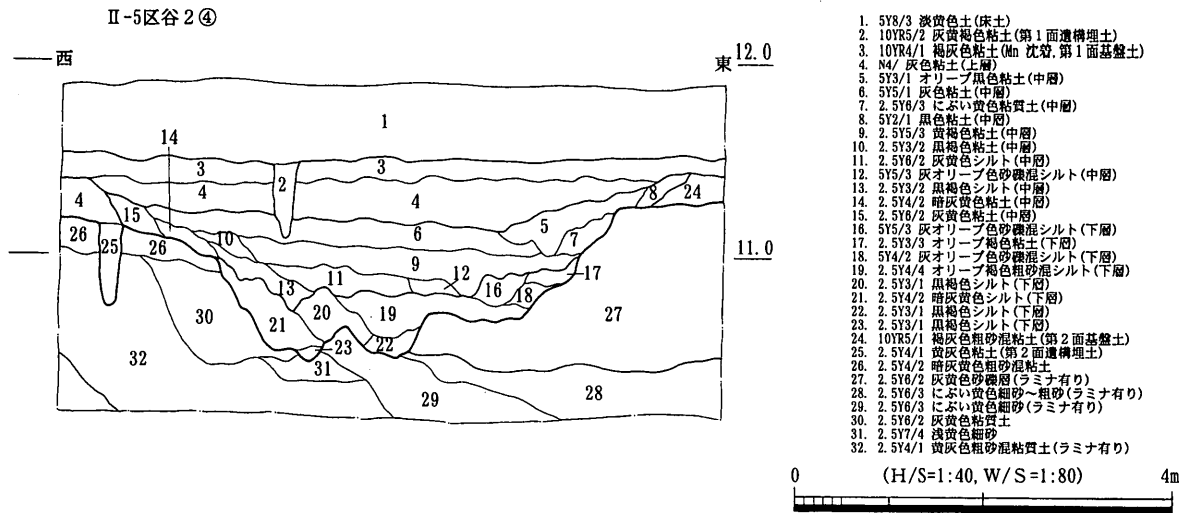
II-2区 谷2③



II-2区 谷2③

1. 10VR5/3 灰黄褐色粘板岩(粘板岩)
2. 10VR4/2 灰黄褐色粘板岩(粘板岩)
3. 10VR3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
4. 2.5YR3/1 暗赤褐色粘板岩(粘板岩)
5. 10VR3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
6. 10VR3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
7. 10VR3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
8. 2.5Y3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
9. 7.5YR2/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
10. 7.5YR3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
11. 10VR3/1 黒褐色粘板岩(粘板岩)
12. 2.5Y5/3 暗褐色粘板岩(粘板岩)
13. 5Y7/8 黄褐色粘板岩(粘板岩)
14. 5Y8/8 黄褐色粘板岩(粘板岩)
15. 5Y8/6 黄褐色粘板岩(粘板岩)
16. 5Y4/1 灰色粘板岩(粘板岩)
17. 5Y6/4 オリーブ黄褐色粘板岩(粘板岩)

東 11.5



第148図 II区 第2面谷2断面図 その2

1008.1009の鉄器は、側面と上面を折り曲げによって成形されるが現状で刃部等の機能部位が特定できないことと、トレンチから出土を見たことにより器種と帰属時期の特定が難しい。1011は平基無茎式石鏃である。1011は安山岩質斑岩製の敲石である。上下面に敲打痕が見られるが、全体的に磨耗しており磨石転用の可能性がある。

II区谷2内SK 27

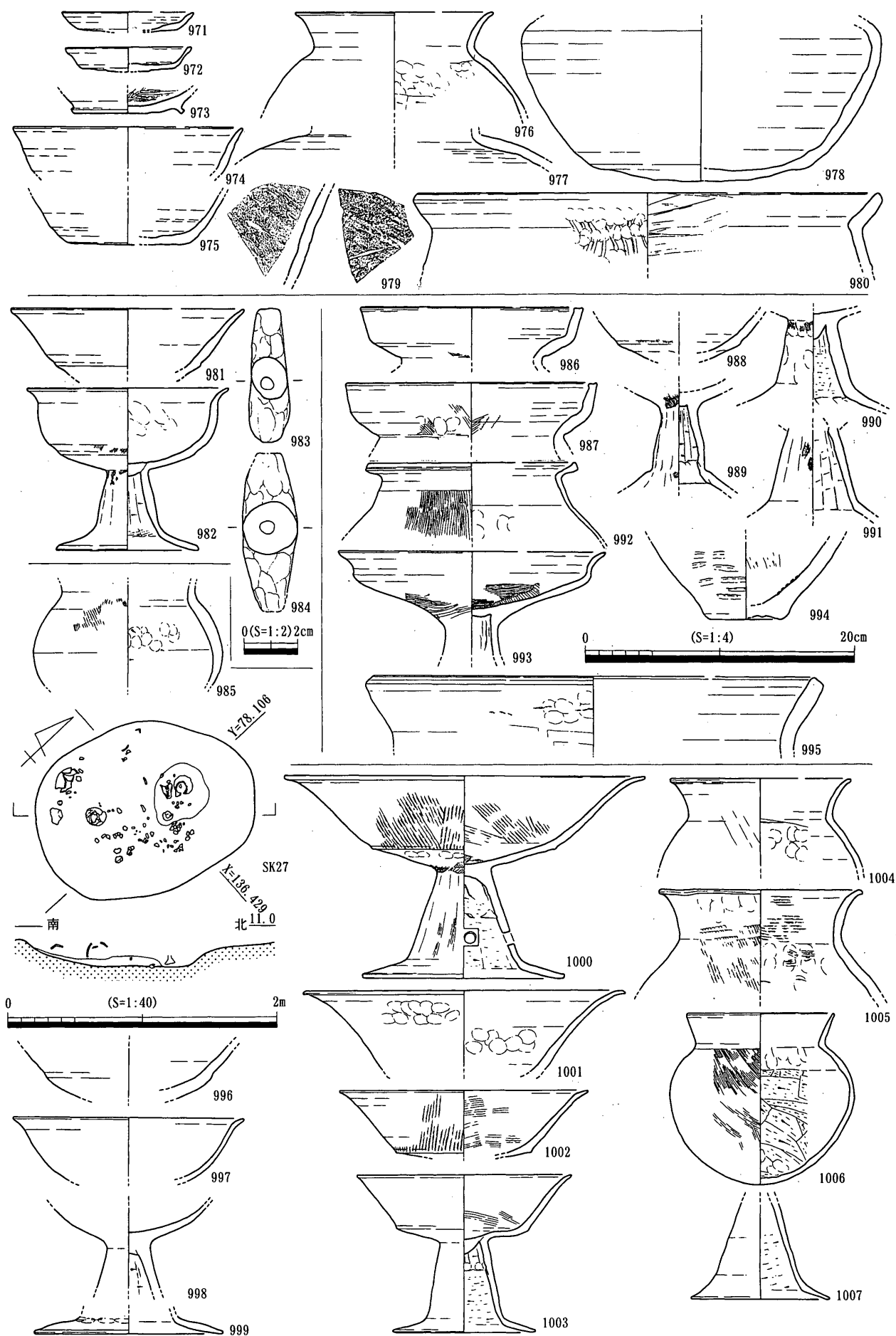
II-4区西部のX = 136.429 Y = 78.106付近において土坑状の窪みに廃棄された土器群を検出している。土坑の遺構略号を与えているが、壁面の立ち上がりが一様でないことから、人為的に掘開されたものかどうかは判断できない。

996~1007は出土遺物である。996~1003.1007は土師器高杯である。杯部形態にバラツキがあり、杯部中位に器形反転に伴う稜線を留める996.1000.1002.1003や、外反しながらも脚部との接合部付近から連続して口縁部へ至る1001、椀形の997.998が存在する。1004.1005は短頸壺の口縁部である。1006は直立気味の口縁部をもつ甕であり、胴部外面に縦ハケ内面のほぼ全域にヘラケズリが施される。高杯の杯部の特徴は、本遺構の他の土師器群と同様のものであり、布留4式併行期の所産と考えられる。また、谷1下層の一群ともほぼ同時期の所産と思われる。

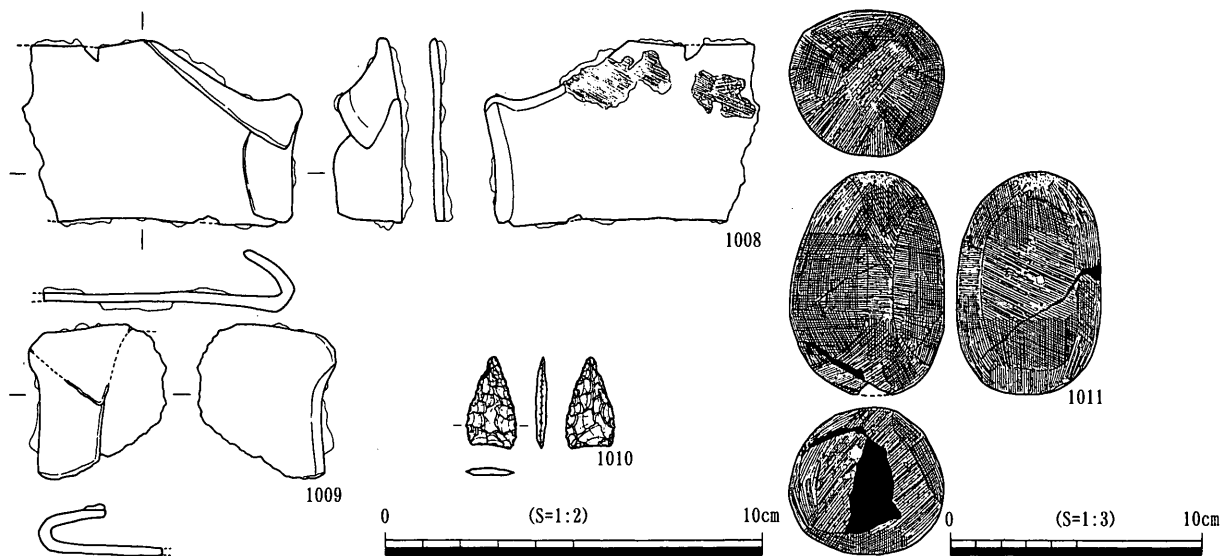
谷3

II区西部で検出した谷地形である。II-8.9区からII-6.7区の微高地西側を北方向へ抜けて、II-6北西部で東へ屈曲し途切れる。検出状態で上面幅は5~8m程を測る。比較的早い段階で埋没したと考えられ、谷1.2で見たような長期に及ぶ埋没状況は想定できない。

出土遺物には中期後葉~後期前葉に比定される甕口縁部・底部片1012~1014が見られることから、後期前葉にはほぼ平坦化していたものと考えられる。埋没後には後期後葉段階と推定されるSB 03~05等の居住遺構が営まれている。



第149図 II区 第2面SK27平・断面図及び谷2 SK27出土遺物実測図 その1



第150図 II区 第2面谷2出土遺物実測図 その2

II区第2面落ち込み1

II -5区東部の微高地上を南西から北東方向へ伸びる形で検出した落ち込みで、4 m程の上面幅と0.3 m程の深さが確認できる。他の調査区で確認できないことや、埋没土から漸移的に埋積した状況が推定できることから、微高地上面の局所的な自然地形の落ち込みである可能性が高い。

埋没土中からは遺物が出土していない。

II区第2面落ち込み2～4

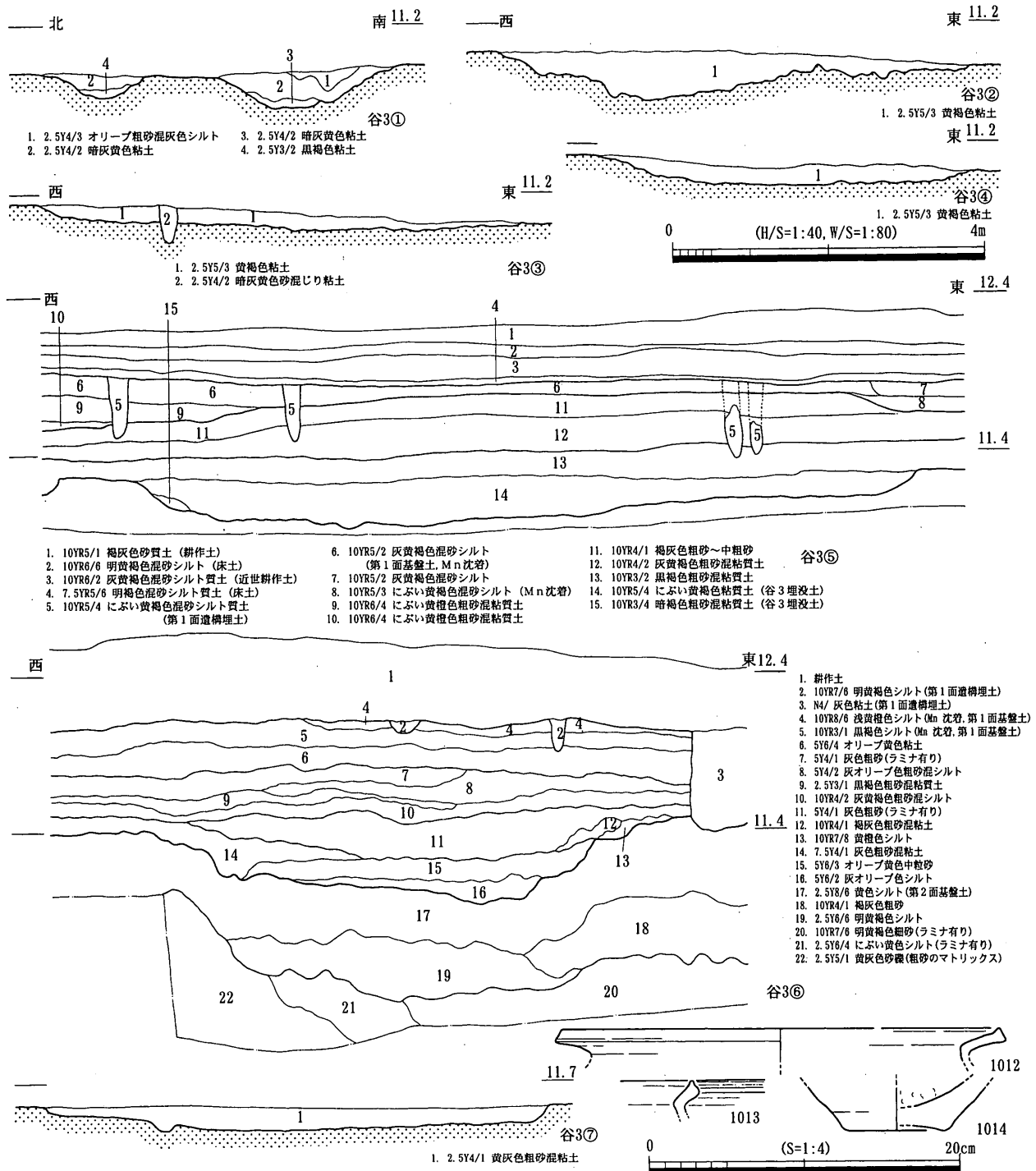
II -8.9区西半部の谷3西岸に点在する自然落ち込みである。深さ0.2 m程を測り、基盤層の凹凸で形成された自然地形と見られる。落ち込み4が存在する部分は、後期後葉段階に形成された礫・土器集中遺構S X 08の部分と一致する。落ち込み3埋没土からは中期中葉段階の所産と思われる広口壺口縁部1015が出土しているが、谷3と同様に後期後葉には埋没平坦化しているものと推定される。

II区遺構外出土遺物

ここで掲載する遺物は、第1第2検出面間の堆積層に包含されていた遺物と、遺構検出作業中に遊離してしまったものである。また、都合上第1検出面の遺構検出時に出土したものも合わせて説明しておきたい。

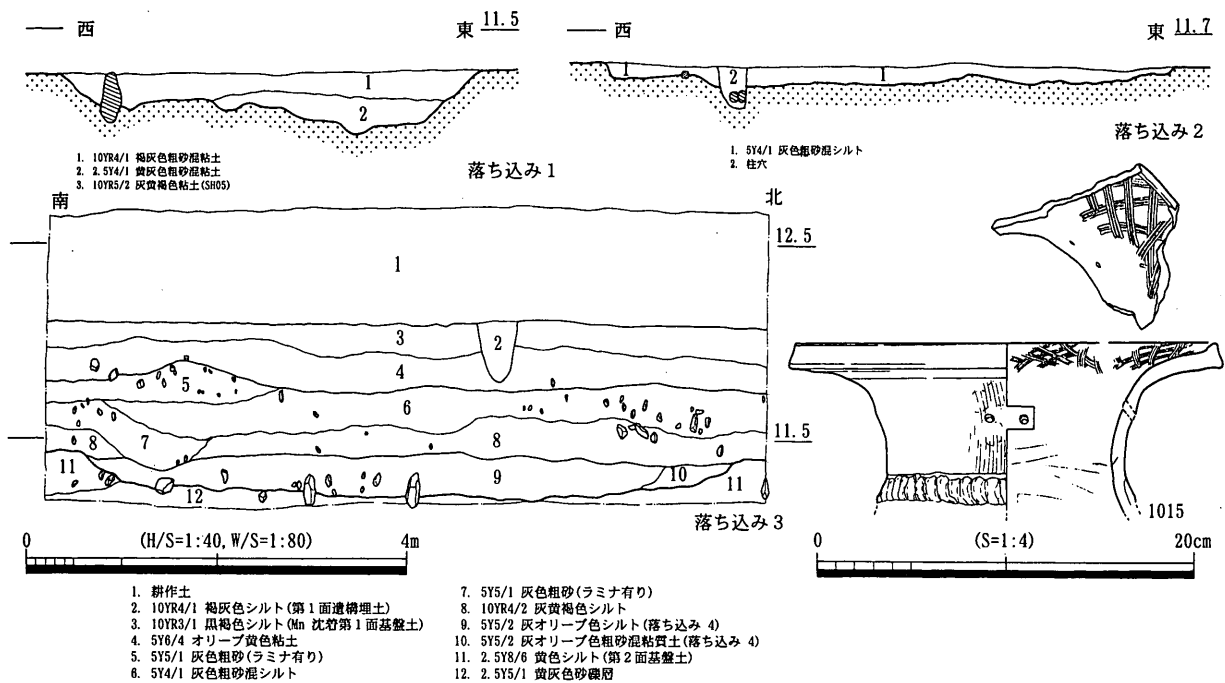
1016～1023は、第1検出面の遺構検出作業中出土した一群である。1016は土師質土器小皿であり、14c末～15c初頭の所産と思われる。1017.1018は須恵器長頸瓶の頸・胴部片である。1018は風船技法を示す閉塞痕は見られないが、剥離した頸部の接合擬口縁から3段接合の可能性がある。1019は、古墳時代中期の小型丸底土器である。谷1.2出土資料と同様に布留4式併行期の所産と考えられる。1020は弥生後期後葉の小型鉢底部。1021は同時期の高杯口縁部である。1022は高松平野北東部からの搬入品である高杯脚部片であり、後期後葉段階の所産である。1023の銭貨は寛永通宝。

1024～1051は第1・第2検出面間の堆積層から出土した一群である。1024～1026は弥生後期後葉～末の広口壺口縁部。1027は短頸壺の頸部片である。1028は弥生後期中葉の甕底部。1029は形態から見て、弥生中期後葉の壺底部片と考えられる。1030は、弥生前期後葉の如意形口縁甕であり、



第151図 II区 第2面谷3断面図及び出土遺物実測図

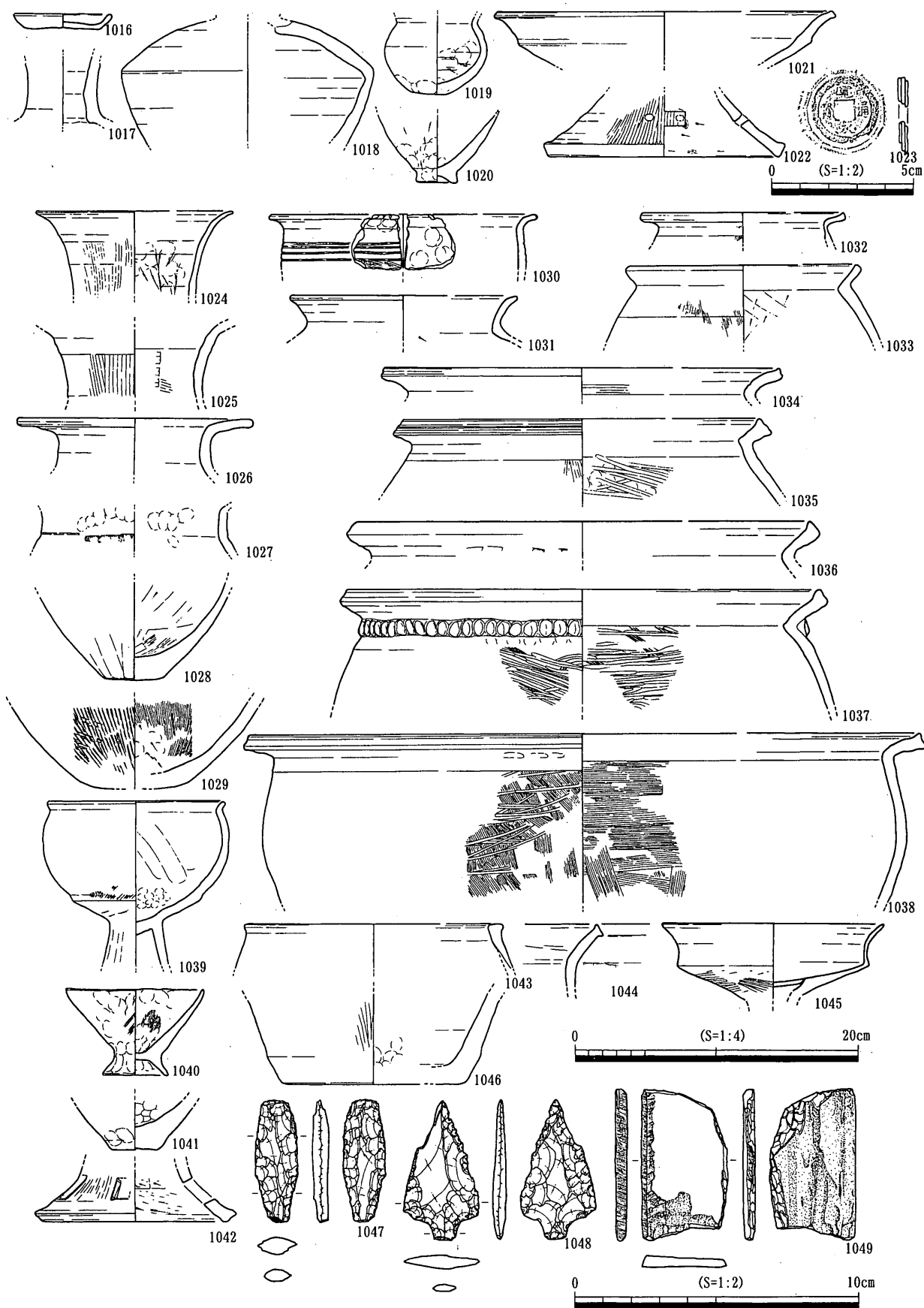
口縁部に刻み目と胴部外面に4条沈線を認める。本遺跡では数少ない弥生前期資料であり、当該期の明確な遺構は確認していない。1031の甕口縁部は直立気味に開くことから、弥生終末期の可能性がある。1032の甕口縁部小片は高松平野北東部地域からの搬入品と考えられる。1033~1037は拡張される口縁部をもつ弥生中期中葉~後葉の甕。1037の口縁部の凹線文や内面の横ミガキは、凹線文出現期の属性を備える。1038は弥生後期後葉段階の中型鉢口縁部。1039は古墳時代中期布留4式併行期のワイングラス形の杯部をもつ高杯。1040.1041は弥生後期後葉段階の小型鉢底部。1042は方形透しをもつ弥生中期中葉段階の台付鉢脚部片。1043は弥生中期中葉の鉢あるいは無頸壺の口縁部小片である。



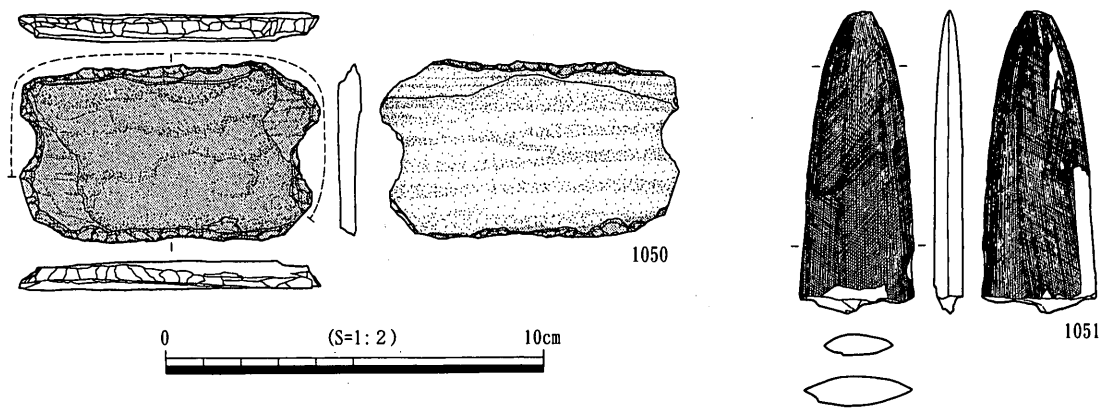
第152図 II区 第2面落ち込み1. 2. 3断面図及び出土遺物実測図

1045 は高松平野北東部地域からの搬入品である弥生後期後葉の高杯。開く口縁部形態と矮小な杯部から、後期後葉でも新しい段階の所産であろう。1047 は柳葉形の凸基有茎式打製石鏃。1048 の凸基有茎式石鏃は、鏃身の一部に周縁加工が行われていない。1049 は柱状片刃石斧の小片であり、側縁部を中心に再加工の痕跡が見られる。

1050 は完形の紅簾片岩製の打製石庖丁である。1051 は安山岩製の磨製石剣あるいは石戈の身部から切先にかけての破片である。表面には研磨による線状痕が見られる。鏃は明瞭ではなく、断面形はレンズ状となる。



第153図 II区 遺構外出土遺物実測図 その1



第154図 II区 遺構外出土遺物実測図 その2

Ⅱ区第1検出面の概要

本調査区の第1検出面では、主に古墳時代中期から中世15c初頭までの遺構を確認している。検出面は、近世段階～現在まで耕作土を除去した段階で設定おり、上面は先の耕作土によって水平カットされている。第2検出面で見られた地形面の凹凸は、谷1.2の上層部分に僅かに窪地が確認できる以外はほぼ平坦化している状況にある。

古墳時代中期の遺構には、Ⅱ-1区SH01他に明確な居住遺構は見られないが、先に見た谷1.2堆積土中に多くの遺物が投棄されていることから、調査区北側に集落の本体の存在が予想される。

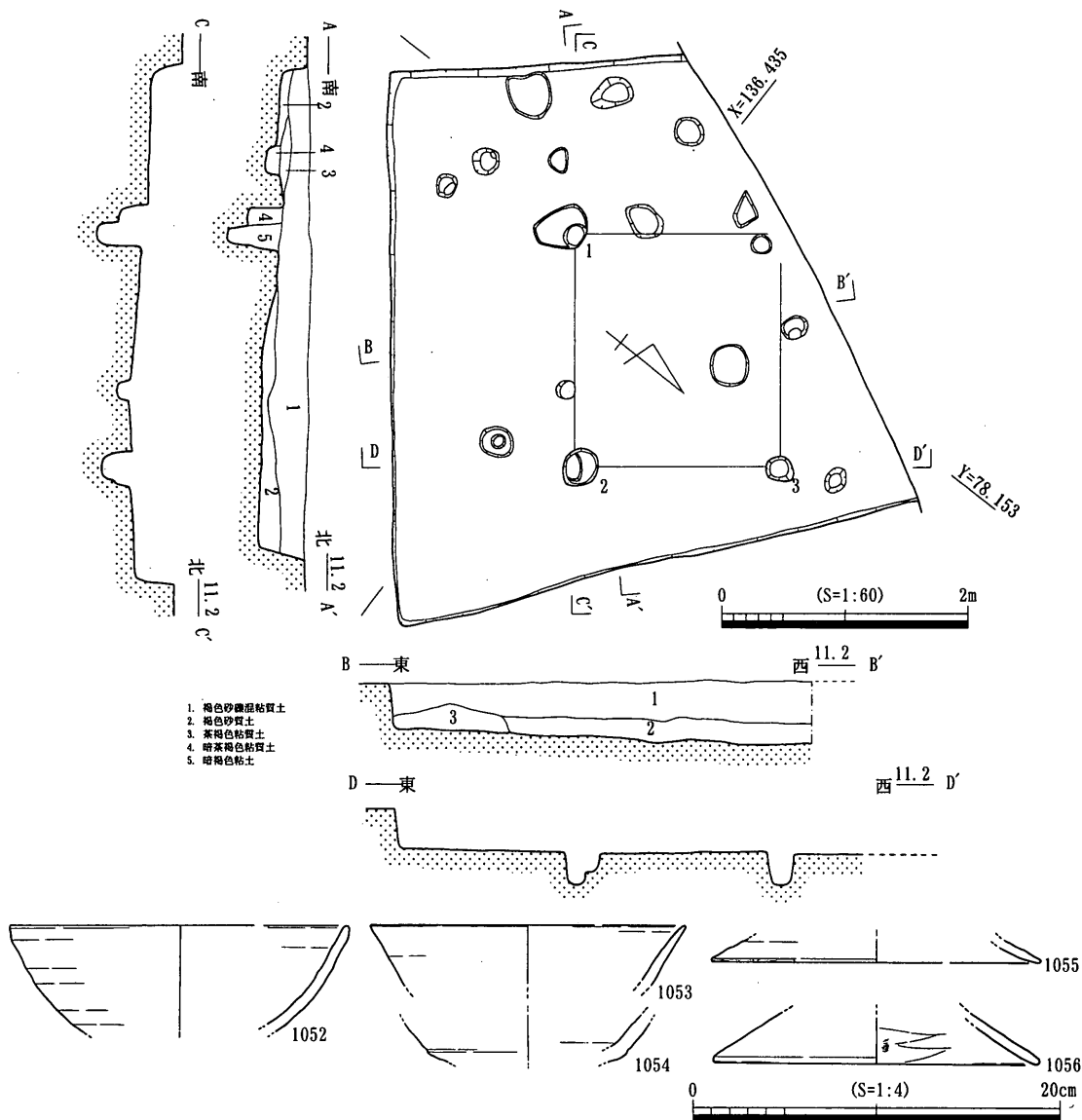
古代では、谷1.2埋土中に遺物が見られるものの明確な居住遺構を確認していない。主要遺構には、Ⅱ区西半部を中心に34基の土壌墓が挙げられる。また、これらは主軸方向を揃え、群構成を採るものが多いことから、計画的に形成された可能性が高い。

中世期の遺構は大きく2時期に分けて整理することができる。中世前半期である11c後半から12c前半では、谷2南西部にST33～42等の土壌墓が営まれている。古代のものと同様に主軸方向を揃えるが、並列する形で造られている点は異なっている。また、明確な建物復元は出来なかったが、Ⅱ-6区柱穴に当該期の遺物が確認できることから、集落南東部の一角に計画的に営まれた状況が推定できる。

中世後半の14cから15c初頭段階には、掘立柱建物のまとまりが4単位程確認できる。この掘立柱建物群の周囲には、Ⅱ-6区南部の建物群のみ小溝を伴うが、基本的には開放されており、区画溝は確認できない。建物主軸方向は、一部のものを除いて座標北から55°前後東偏するものと35°前後西偏するもので統一されている。この主軸方向は、Ⅰ・Ⅱ区とも共通して見られることから、遺跡周辺の条里型地割は遺存していないけれども当該期に何らかの地割が施工されていた可能性が高い。Ⅱ区東部には、この建物主軸に合致するSD12.13が見られるが、近世以降の所産と考えられることから、当該期の地割溝を見ることはできない。



第155図 II区 第1検出面遺構配置図



第156図 II区 第1面SH01平・断面図及び出土遺物実測図

II区第1面SH01

II-1区北西部X = 136.435 Y = 78.153 付近の谷1西岸の微高地上で検出した方形住居である。北辺が斜交し平面形が歪となっているが、住居東辺を手掛かりにして一辺4.5m程の方形住居と推定できる。住居は、微高地を形成する砂礫層を掘り抜いて構築されており、0.3m程の残存深度を測る。また、2.3層は貼床層の可能性が考えられるが、調査時に明らかにはできなかった。床面上には数基の柱穴が存在するが、位置関係や規模・深度から見て、図示する4基の主柱穴をもつものと考えられる。

1052～1056は出土遺物であり、すべて埋没土中から出土した。1052～1054は土師器高杯の杯部である。椀形を呈し、杯部中位に器形反転に伴う稜線は見られない。1053は口縁部片、1054には辛うじて稜線が見られる。1055、1056は脚部片である。これらは、高杯の杯部形態から布留4式新段階併行期の所産と考えられ、谷1.2出土遺物の土師器群とほぼ同時期の所産と考えられる。

Ⅱ区第1面S B 01

Ⅱ-1区北東部 $X = 136.410$ $Y = 78.185$ 付近で検出した掘立柱建物である。一部が調査地外壁に延びる可能性があるが、現状で1間×2間(2.2×4.0 m)の柱構造をもち、8.8 m²の床面積が想定される。建物主軸は座標北から89°西偏し、S B 02とともにⅡ区第1検出面の中では異質な存在である。同様の主軸方向をもつものとしてⅠ区S B 11が挙げられるが、全くの同一方向ではない。時期決定可能な出土遺物は出土していないが、検出面の他遺構の様相と埋没土の特徴から判断して、中世期の所産である可能性が高い。

Ⅱ区第1面S B 02

Ⅱ-1区北部 $X = 136.420$ $Y = 78.178$ 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から73°西偏し、2間×2間(3.6×4.0 m)の柱構造と14.4 m²の床面積を復元できる。北側桁行の柱穴73がややずれるが、梁間・桁行ともに柱間は揃っている。

現地調査段階で把握しているものの、柱穴埋没土の記録が作成できていないが、現状で直径0.15 mほどの柱痕を想定できよう。時期決定可能な出土遺物は見られないが、検出面の他遺構の様相や主軸方向から概ね中世期の所産と推定しておく。

Ⅱ区第1面S B 03

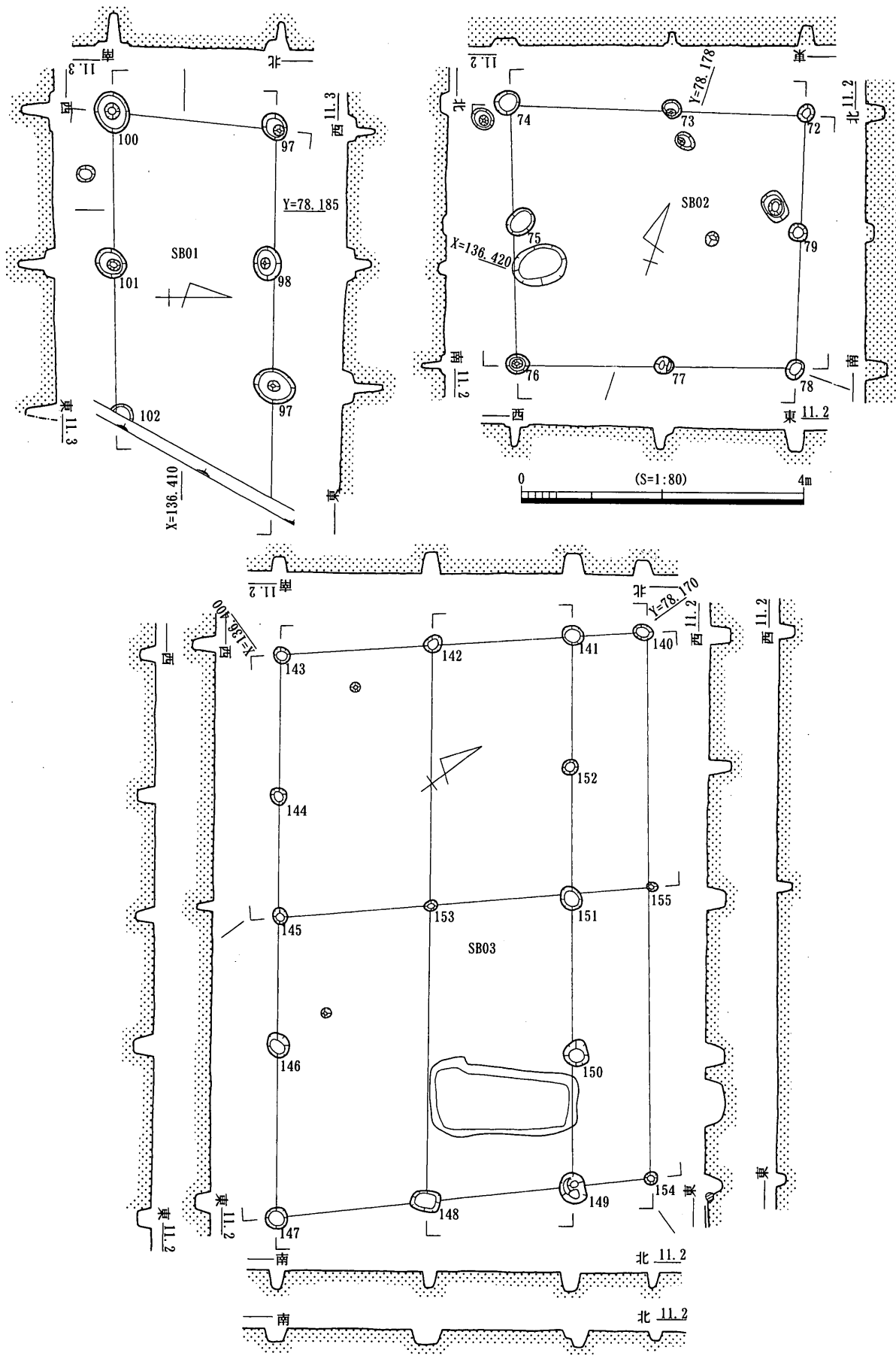
Ⅱ-1区北部 $X = 136.400$ $Y = 78.170$ 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から54°東偏し、2間×4間(4.1×7.8 m)の柱構造と、31.98 m²の床面積を復元できる。また、北側桁行の外側1.2 m程の離れた部分に庇と考えられる一回り小さな柱穴が存在し、これを含めた面積規模は42.12 m²となる。柱間は1.8～2.0 mを測り、建物内部中央に見られ間仕切りと考えられる柱穴153より東側では、柱間がやや長くなる傾向がある。

出土遺物には、柱穴149から出土した扁平化した土師質土器杯1057や、柱穴149出土の弥生後期後葉段階の甕口縁1065、柱穴151出土の砂岩製砥石1072がある。検出面から見て1065は混入品であり、1057の土師質土器杯は形態から15c初頭段階の所産と推定され、この出土遺物から本建物の廃絶時期を推定しておく。

Ⅱ区第1面S B 04

Ⅱ-1区中央部 $X = 136.415$ $Y = 78.163$ 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から27°西偏するもので、1間×3間(3.8×5.6 m)の柱構造をもち、21.28 m²の床面積を想定できる。柱通りは良好であるが、東側桁行の南東隅柱の柱痕の位置がやや外側へずれる。現地調査で復元しているものの、柱穴内部の埋没土の記録が出来ていない。柱穴底面が窪む部分を柱痕に関係したものとすれば、直径0.1～0.15 m程の柱痕であった可能性が高い。

時期決定可能な出土遺物は見られないが、S B 03に隣接していることと建物主軸がS B 03にほぼ直交して設定されていることから、15c初頭に廃絶したものと推定しておく。



第157图 II区 第1面SB01~ 03平·断面图

Ⅱ区第1面S B 05

Ⅱ-6区北部X = 136.445 Y = 78.104 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から52° 東偏し、一部が調査地外に延びる為、検出した範囲内で1間×3間(2.8×3.8 m)の柱構造が復元できる。柱穴は0.2 m程の円形を呈し、報告書作成段階で把握した為、柱痕等の埋没土の確認ができなかった。時期決定可能な出土遺物は見られないが、周辺遺構の帰属時期と建物主軸から14 c～15 c 初頭の所産と推定する。

Ⅱ区第1面S B 06

Ⅱ-6区北部X = 136.442 Y = 78.098 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から62° 東偏し、1間×3間(2.2×6.0 m)の柱構造と13.2 m²の床面積が復元できる。柱間は一定せず、2～2.4 m程のバラツキを見せる。南西隅柱は他のものと比べて大形であることから、廃絶時に抜き取られたものかも知れない。

出土遺物は、柱穴459から1066 東播系須恵器捏鉢口縁、柱穴460から備前焼甕胴部片1067と土師質土器足釜脚部片1071がある。1066の東播系須恵器捏鉢の形態から、本建物は14 c前半に廃絶したものと推定する。

Ⅱ区第1面S B 07

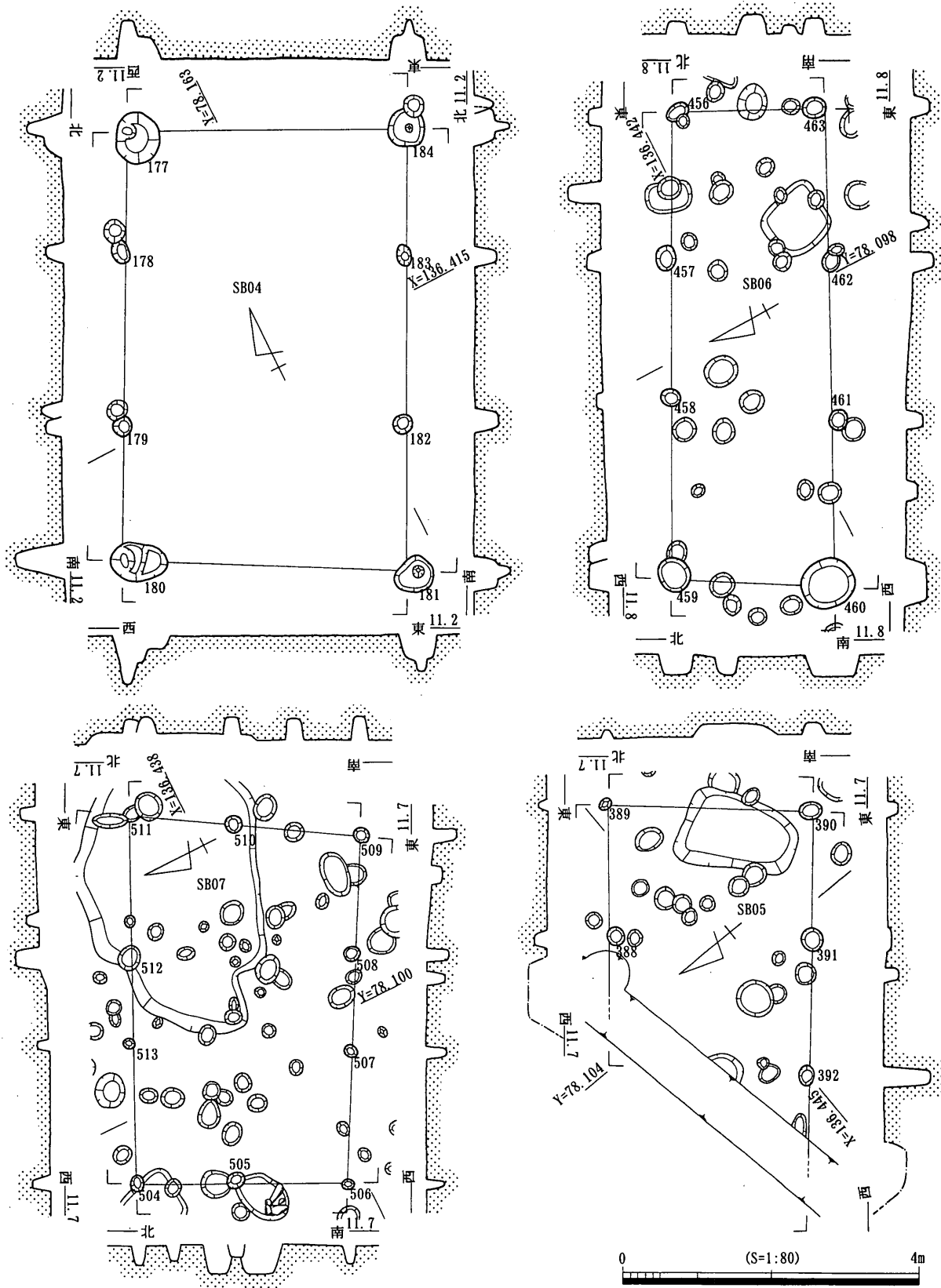
Ⅱ-6北部X = 136.438 Y = 78.100 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から64° 東偏し、2間×3間(2.4×5.0 m)の柱構造と12 m²程度の床面積が想定できる。柱間は1.4～1.8 mと一定しないが柱穴底面のレベルと柱通りはほぼ揃う。また、梁間中央には棟持柱と考えられる柱穴505と510が存在している。出土遺物はいずれも小片であるが、時期決定可能なものとして柱穴511から土師質土器足釜口縁1069が出土しており、本建物が14 c代に廃絶したものと推定する。

Ⅱ区第1面S B 08

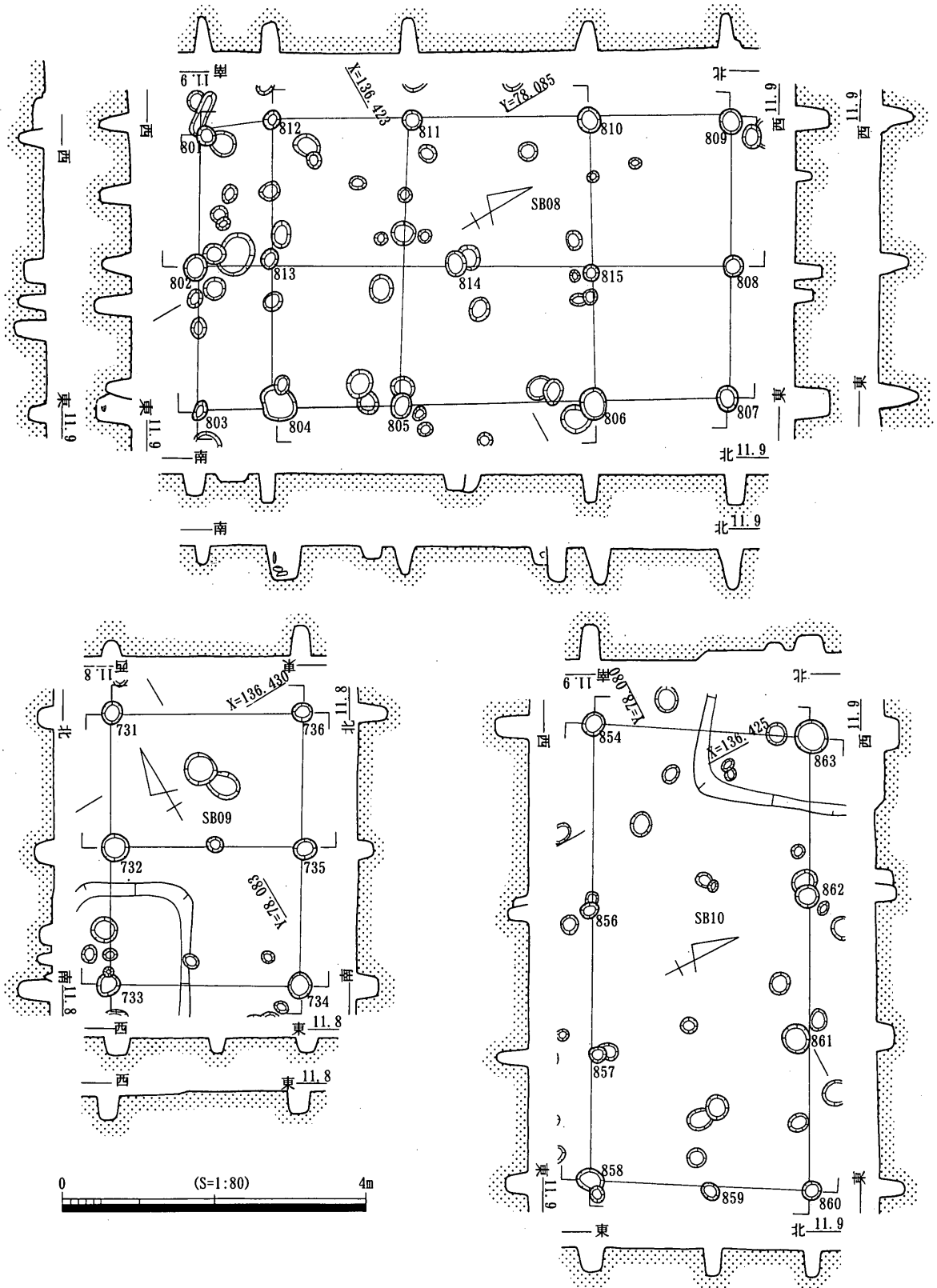
Ⅱ-6区南部X = 136.423 Y = 78.085 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から29° 西偏し、2間×3間(3.6×6.2 m)の柱構造と22.32 m²の床面積をもつ。また、建物南側には東西桁行と梁間棟持柱から1.0 m程離れて連続する3基の柱穴が存在し庇とすれば、これを含めた建物面積は25.92 m²となる。

柱穴は直径0.2～0.4 m円形のもので占められ、南東隅柱には砂岩礫が詰め石として充填されていた。桁行中央の柱間が2.5 m前後と長い他は1.8 m前後と一定したものとなっている。梁間方向の棟持柱と考えられる柱穴808・813間には束柱と考えられる小規模な柱穴815が見られるが、南側の桁行柱穴804・812間では省略されていることから、土間等に関係するものと考えられる。

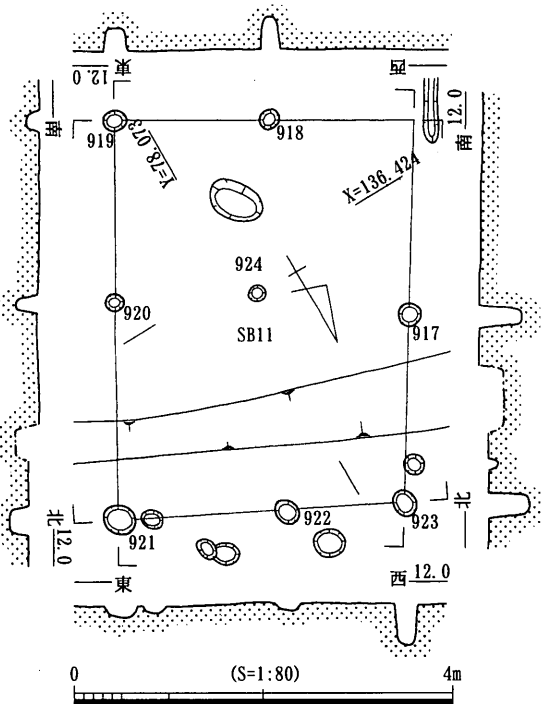
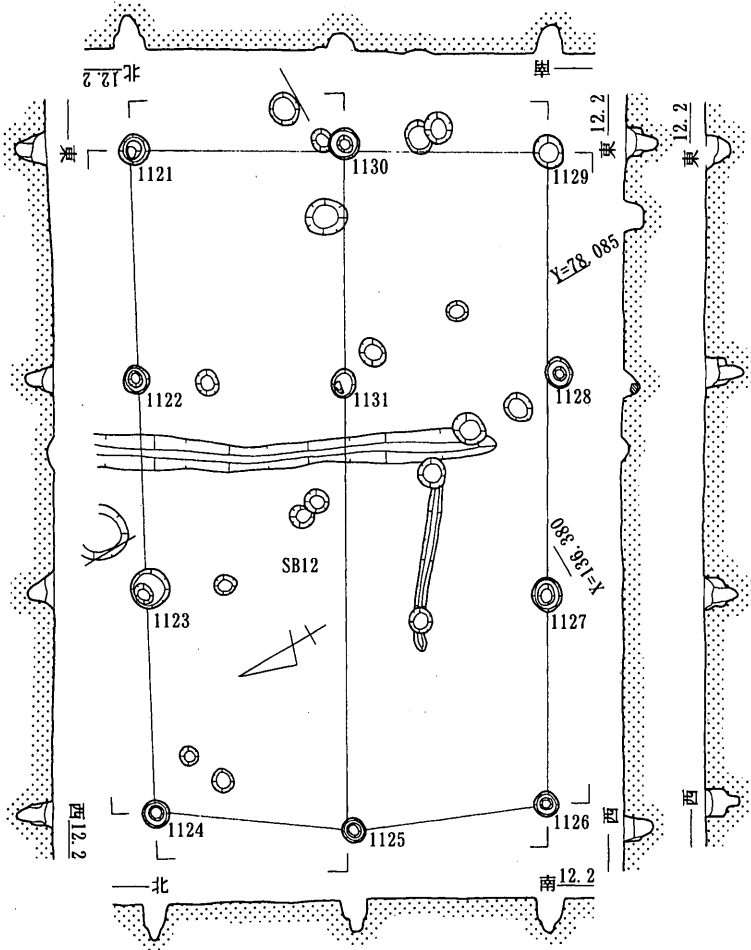
出土遺物は柱穴805出土の十瓶山系須恵器椀高台片1064、柱穴805出土の土師質土器杯口縁部1061、柱穴803出土の同口縁部1063、柱穴801出土の土師質土器鍋底部1070がある。1064十瓶山系須恵器椀は矮小な高台から13 c後半～末の年代が想定されるが、1061の土師質土器杯の法量・形態から本建物が14 c代に廃絶したものとする。



第158图 II区 第1面SB04~07平·断面图



第159图 II区 第1面SB08~10平·断面图



第160図 II区 第1面SB11・12平・断面図

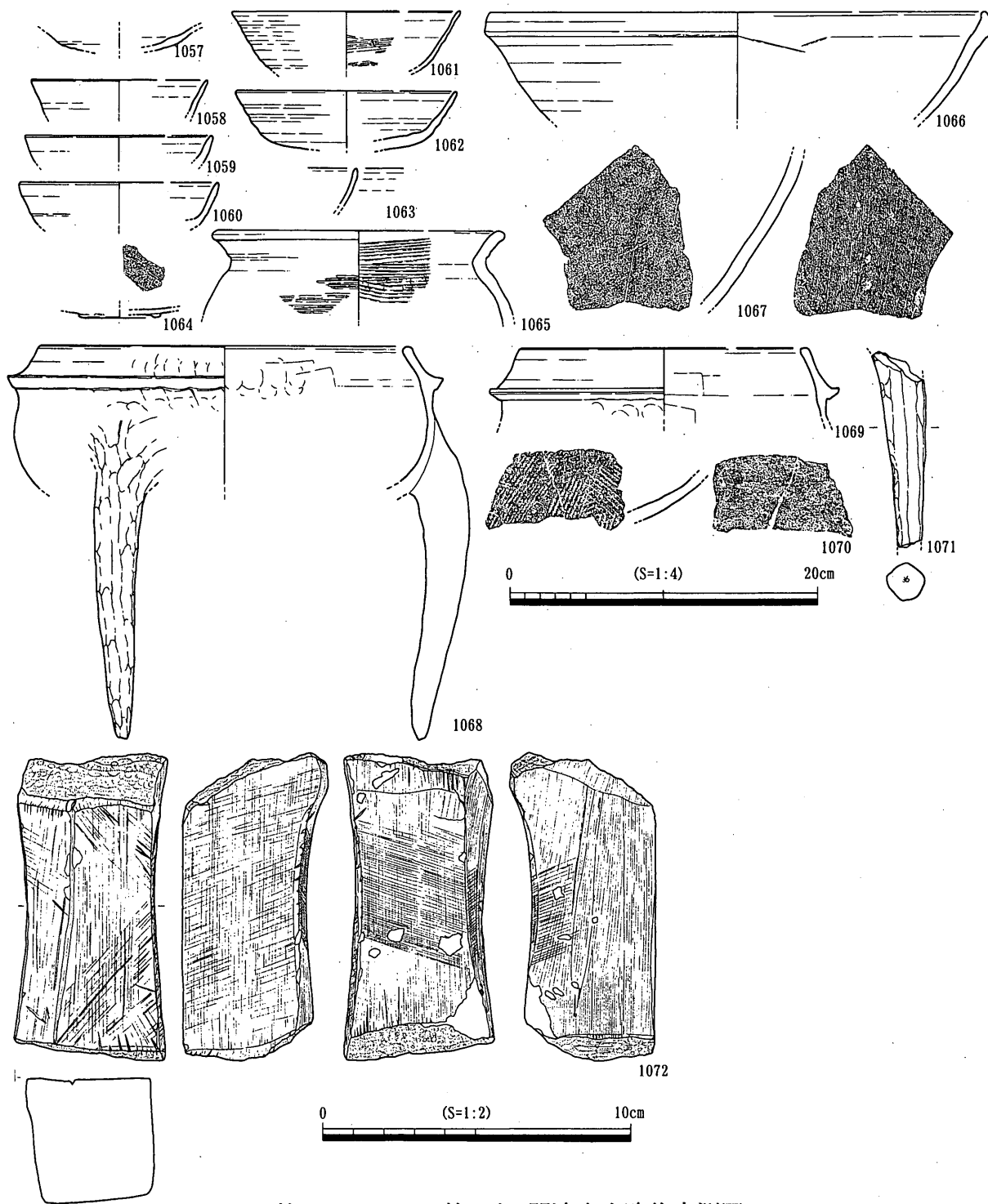
II区第1面S B 09

II -6区南部 X = 136.430 Y = 78.083 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 30° 西偏し、1間×2間(2.6×3.6 m)の柱構造と 9.36 m²の床面積が想定できる。小規模な建物ながら桁行柱間は 1.8 mと一定しており、建物内部には桁行の柱穴 735 と 732 を結ぶラインに小規模な柱穴 737 が存在する。規模的に間仕切りに伴うものとは考えづらく、性格は不明である。なお、柱穴の埋没土はすべて地山塊を含むシルトで占められていた。時期決定可能な出土遺物には、柱穴 732 から出土した土師質土器足釜 1068 がある。口縁部の形態から、概ね 14 c 代の所産と推定されることから、本建物の廃絶時期を推定する材料としておきたい。

II区第1面S B 10

II -6区南部 X = 136.425 Y = 78.080 付近で S B 08 と重複して検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 62° 東へ振った東西棟であり、2間×3間(3.0×6.0 m)の柱構造と 18.0 m²の床面積が復元できる。東梁間では棟持柱と考えられる柱穴 859 が存在するが、西側には確認できない。桁行の柱穴がやや非対称に配されているが、平面形と柱通りは良好であることから、報告書作成段階で建物として復元した。

時期決定可能な出土遺物として、柱穴 860 から出土した土師質土器杯口縁部 1058 がある。口径等から



第161図 II区 第1面SB関連出土遺物実測図

見て、14 c 末～15 c 初頭の所産と推定できることから、本建物の廃絶時期を推定する手掛かりとしたい。

II区第1面SB 11

I -6.7区 X = 136.424 Y = 78.073 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 32° 西偏し、2間×2間 (3.2 × 4.2 m) の柱構造をもち、13.44 m²の床面積を復元できる。南西隅柱を欠落するが、報告書作成段階で建物と認識したことから、現地調査で見落としている可能性がある。建物内

部中央の桁行側柱を結んだラインに小規模な柱穴 924 が存在するが、建物面積が小規模なことから総柱的な建物として復元するには躊躇がある。

遺物は各柱穴から見られるが、時期決定可能なものとして柱穴 921 からの土師質土器杯口縁部 1060、柱穴 919 からの同杯口縁部 1062 がある。1060 は口径が縮小しているものの、両者は 14 c 代の所産と見られることから、本建物の廃絶時期を同時期に比定する。

Ⅱ区第1面 S B 12

Ⅱ -9 区南東部 $X = 136.380$ $Y = 78.085$ 付近で検出した掘立柱建物である。建物主軸は座標北から 30° 東偏する東西棟であり、2 間 \times 3 間 (4.4×6.8 m) の柱構造と 29.92 m² の床面積を復元できる。柱穴は直径 0.2 ~ 0.3 m 程の円形を基調とし、南東隅柱 1129 を除く各柱穴で灰褐色シルトに置換された直径 0.16 m 程の柱痕を確認している。建物内東半部には棟持柱と桁行側柱を結んだライン上に床東柱と考えられる柱穴 1131 が存在するが、西半部に見られないことから土間等の空間利用を想定することが可能であろう。

時期決定可能な出土遺物として、柱穴 1127 から出土した土師質土器杯口縁 1059 がある。口径から見て 14 c 代の所産と推定され、本建物の廃絶時期を推定する手掛かりとしたい。

Ⅱ区第1面 S T 01

Ⅱ -1 区北部の $X = 136.426$ $Y = 78.177$ 付近で検出した土壙墓である。隅丸長方形の平面プランをもち、断面形は箱形を呈する。底面はフラットであるが、壁際に小規模な段差が見られる。平面形と地山塊を多く交える埋没土の特徴から、土壙墓と判断する。他のものと異なり、周囲に類似する遺構を伴わず、単独で位置することが特徴的である。時期決定可能な出土遺物は見られないが、8 c 代と考えられる S T 05 との位置関係や規模的な比較から、8 c 代の所産と推定する。

Ⅱ区第1面 S T 02

Ⅱ -1 区東部の $X = 136.403$ $Y = 78.180$ 付近で検出した土壙墓である。やや歪な隅丸長方形の平面プランをもち、短軸方向の断面は箱形を呈するものの長軸方向の壁面の立ち上がりは階段状に斜めに立ち上がる。Ⅱ区第1検出面の土壙墓の中では、平・断面形に違和感があるが地山塊を多く含む埋没土の特徴や主軸方位の共通性から土壙墓として報告する。時期決定可能な出土遺物は見られないが、S T 05 との位置関係や、主軸方向、規模的な比較から概ね 8 c 代の所産と推定しておきたい。

Ⅱ区第1面 S T 03

Ⅱ -1 区東部の $X = 136.401$ $Y = 78.180$ 付近で検出した土壙墓である。断面形は短軸方向が U 字形に近いが、長軸方向はほぼ箱形になる。埋没土に地山塊が多く含まれることと、隣接する S T 02・04 との位置関係や主軸方向の共通性から土壙墓として推定する。時期決定可能な遺物は見られないが、S T 05 との規模や主軸方向などの検討から概ね 8 c 代の所産と推定する。

Ⅱ区第1面 S T 04

Ⅱ -1 区東部 $X = 136.397$ $Y = 78.178$ 付近で検出した土壙墓である。北側に隣接する S T 03 ほぼ

遺構名	長軸 (m)	短軸 (m)	深度 (m)	方位	断面形	出土遺物
ST01	1.75	0.85	0.19	N-55W	箱形	
ST02	1.8	0.9	0.4	N-80W	箱形	
ST03	1.2	0.8	0.38	N-55W	箱形	
ST04	1.9	0.9	0.5	N-60W	箱形	
ST05	2.1	1.1	0.4	N-40E	箱形	土師器甕 1073
ST08	2	1.2	0.2	N-28E	箱形	
ST13	1.8	1	0.2	N-40E	箱形	
ST14	1.6	0.75	0.15	N-23E	箱形	
ST15	1.6	1.1	0.2	N-45E	箱形	
ST16	1.4	0.7	0.2	N-32E	箱形	
ST17	1.8	0.6	0.35	N-33E	箱形	
ST09	1.6	0.7	0.2	N-48E	箱形	
ST10	2	1.2	0.2	N-58E	箱形	
ST11	1.4	0.9	0.2	N-67E	箱形	
ST12	1.4	0.6	0.25	N-70E	箱形	
ST06	1.8	0.9	0.15	N-60W	箱形	
ST18	1.9	0.9	0.2	N-40W	箱形	
ST07	2.2	1.15	0.1	N-11W	箱形	
ST19	1.9	0.9	0.5	N-33E	箱形	
ST20	1.8	0.95	0.6	N-30E	箱形	弥生土器片
ST27	1.7	0.85	0.25	N-28W	箱形	
ST25	2	0.95	0.3	N-60E	箱形	
ST26	1.45	0.75	0.1	N-40E	箱形	
ST29	1.8	0.75	0.25	N-30E	箱形	
ST30	1.8	0.8	0.2	N-37E	箱形	
ST31	1.5	0.9	0.15	N-36E	箱形	
ST32	1.65	0.8	0.25	N-37E	箱形	
ST22	2.4	1.2	0.4	N-79E	箱形	
ST23	2.2	1	0.4	N-65E	箱形	
ST24	1.7	0.9	0.12	N-45E	箱形	
ST33	2.4	0.8	0.15	N-40W	逆台形	鉄滓
ST34	2.5	0.9	0.15	N-46W	逆台形	
ST35	2.6	0.8	0.2	N-47W	逆台形	
ST36	2.4	0.7	0.15	N-45W	逆台形	
ST37	2.4	0.8	0.15	N-43W	逆台形	
ST38	2.7	0.9	0.15	N-46W	逆台形	
ST39	1.9	0.6	0.1	N-45W	逆台形	
ST43	1.9	0.7	0.1	N-68E	逆台形	
ST44	2.65	0.8	0.3	N-40E	箱形	土師質土器杯底部
ST45	2.5	0.8	0.3	N-38E	箱形	
ST46	2.6	0.95	0.3	N-36E	箱形	
ST50	2.3	0.9	0.4	N-36E	箱形	
ST51	2.1	1	0.45	N-36E	箱形	
ST52	1.8	0.9	0.25	N-56W	箱形	土師質土器杯底部
ST54	1.62	0.6	0.2	N-67W	箱形	

第4表 II区 第1面土壙墓一覽

同一と思われる東西方向の主軸をもち、平面プランは隅丸長方形を呈する。断面形は箱形を基調とするが、西側の底面は段差が見られる。埋没土は12層に細分されているが、各層ともに地山塊と見られるブロック土を多く含む。埋没土の特徴と平・断面形の属性から、土壙墓として判断する。時期決定可能な出土遺物は見られないが、主軸方向や検出位置、平面形の属性から8c代の所産と推定する。

Ⅱ区第1面S T 05

Ⅱ-1区東部のX = 136.399 Y = 78.174付近においてS B 03と重複して検出した土壙墓である。平面プランは隅丸長方形を呈し、長・短軸方向ともに断面形は箱形である。南西隅の平面プランが乱れているが、検出段階のミスによるもので、本来的には整った隅丸長方形を呈していた可能性が高い。中位の2.3層中には地山塊を多く含み、比較的フラットな底面直上に堆積する4層中からはほぼ完形の土師器甕1073が出土している。この土師器甕は、北東・南西隅に分かれて出土している。完形を留めていることと、構築後の埋め戻し土下位の底面直上から出土していることから、確実に本遺構に伴うものと考えられる。形態から8c代の所産と考えられることから、本遺構の構築時期を同時期と推定する。

Ⅱ区第1面S T 06

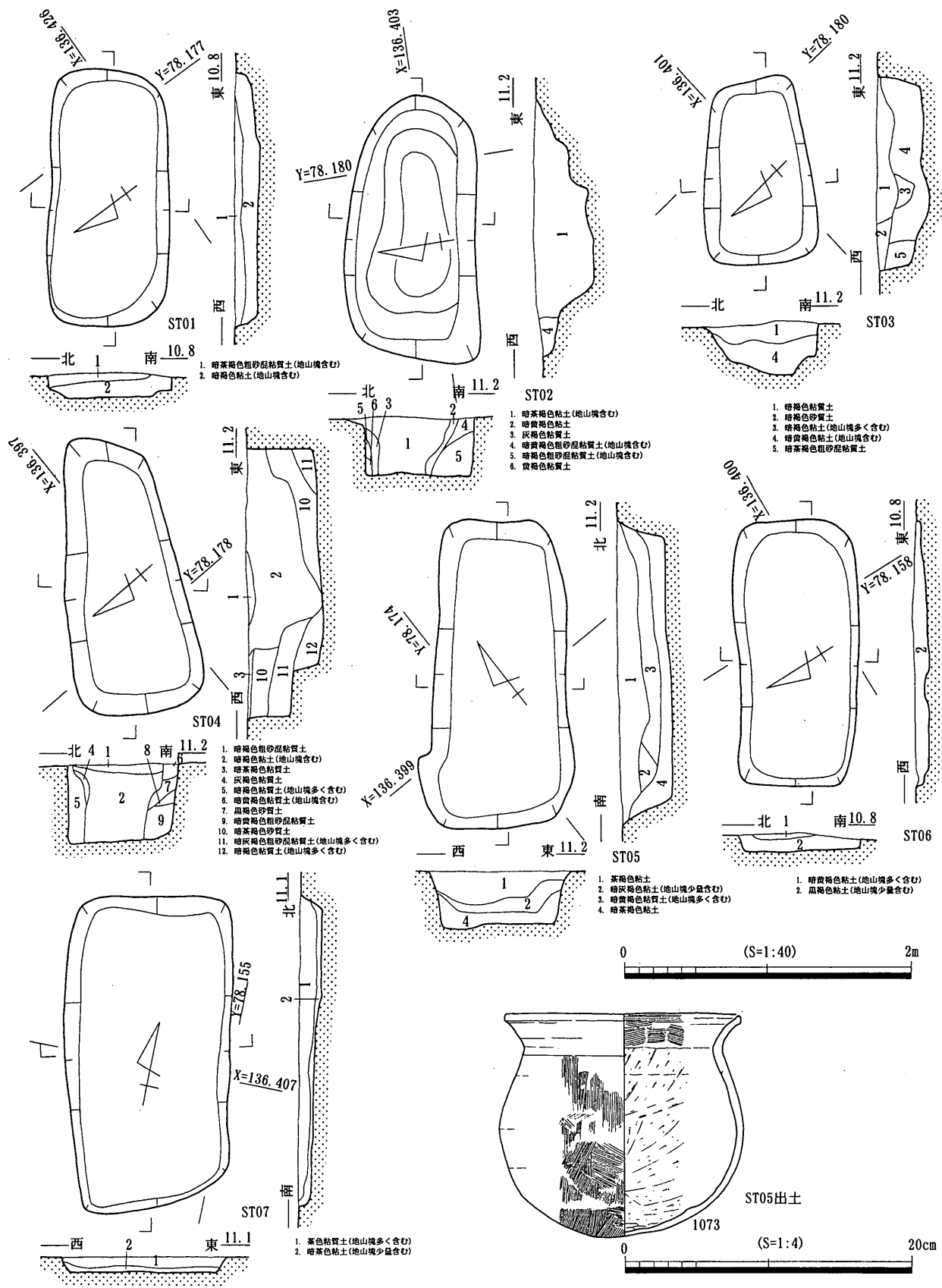
Ⅱ-1区南部のX = 136.400 Y = 78.158付近で検出した土壙墓である。平面プランは整った隅丸長方形を呈し、主軸方向はS T 03.04とほぼ同一の東西方向を採る。埋没土に地山塊のブロック土が含まれることと、平面プラン等の属性から土壙墓と判断する。断面形は箱形であるが残存深度は0.2m程と他の土壙墓と比べて浅い。これは、調査時に本遺構を第2検出面を検出しているが、報告書作成段階において、主軸方向や残存深度、埋没土の特徴から第1検出面に伴うと判断したことによる。本来的には他のものと同様の深度を有していた可能性が高い。時期決定可能な出土遺物は見られないが、S T 05との規模・主軸方向の検討から、8c代の所産と思われる。

Ⅱ区第1面S T 07

Ⅱ-1区南部のX = 136.407 Y = 78.155付近で検出した土壙墓である。位置関係から隣接するS T 06.08～18と同一群として把握できるが、主軸方向はⅡ-4区のS T 27.28とほぼ同一の南北方向を採る。平面プランは隅丸長方形を呈し、残存深度は0.2m程と浅い。平面プランと地山塊を含む埋没土の特徴から土壙墓として把握できるが、第1検出面で確認しているにもかかわらず、他の土壙墓と比べて深度が浅いことから、完全に掘り下げていない可能性が高い。時期決定可能な出土遺物は見られないが、主軸方向や位置関係から見て、概ね8c代の所産と推定しておく。

Ⅱ区第1面S T 08

Ⅱ-1区南部のX = 136.409 Y = 78.149付近で検出した土壙墓である。平面プランは整った隅丸長方形を呈し、同一群のS T 14～17とほぼ類似する南北主軸を採る。断面形はほぼ箱形であり、東側の短軸方向が、階段状に断面図が表現されているが、記録写真を見ると調査ミスの可能性が高い。埋没土に地山塊を多く交える点と平面プランから、土壙墓として性格をもつものと思われる。時期決定可能な出土遺物は見られないが、主軸方向や規模的な点から概ね8c代の所産と推定しておく。



第162図 II区 第1面ST01~07平・断面図及びST05出土遺物実測図

Ⅱ区第1面S T 09

Ⅱ-2区北東部のX = 136.400 Y = 78.143付近で検出した土壙墓である。S T 10～12に隣接して構築されており、本遺構とS T 10の主軸方向がやや北へ振れるが、ほぼ同一方向と見てよい。平面形が隅丸長方形を呈し、埋没土に地山塊が含まれることから土壙墓と判断する。また周辺のものと比較して、規模的にはやや小形である。時期決定可能な出土遺物は見られないが、他の土壙墓との位置関係や主軸方向の検討から、8c代の所産と推定しておく。

Ⅱ区第1面S T 10

Ⅱ-2区北東部のX = 136.398 Y = 78.143付近で検出した土壙墓である。平面プランは隅丸長方形を呈し、西側に隣接するS T 09とほぼ同一主軸をもつ。平面プランと埋没土に地山塊が多く含まれることから土壙墓と推定するものであるが、断面図に木管痕跡様に記録されたものはすべて乾痕である。時期決定可能な出土遺物は見られないが、位置関係や主軸方向、規模的な点から8c代の所産と推定しておきたい。

Ⅱ区第1面S T 11

Ⅱ-2区北東部のX = 136.399 Y = 78.140付近で検出した土壙墓である。平面形はやや歪な隅丸長方形を呈するが、埋没土に地山塊を交えることと隣接する同一主軸を採るS T 09.10.12と同様に土壙墓と考える。時期決定可能な出土遺物は見られないが、位置関係や主軸方向、規模的な点から概ね8c代の所産と推定しておく。

Ⅱ区第1面S T 12

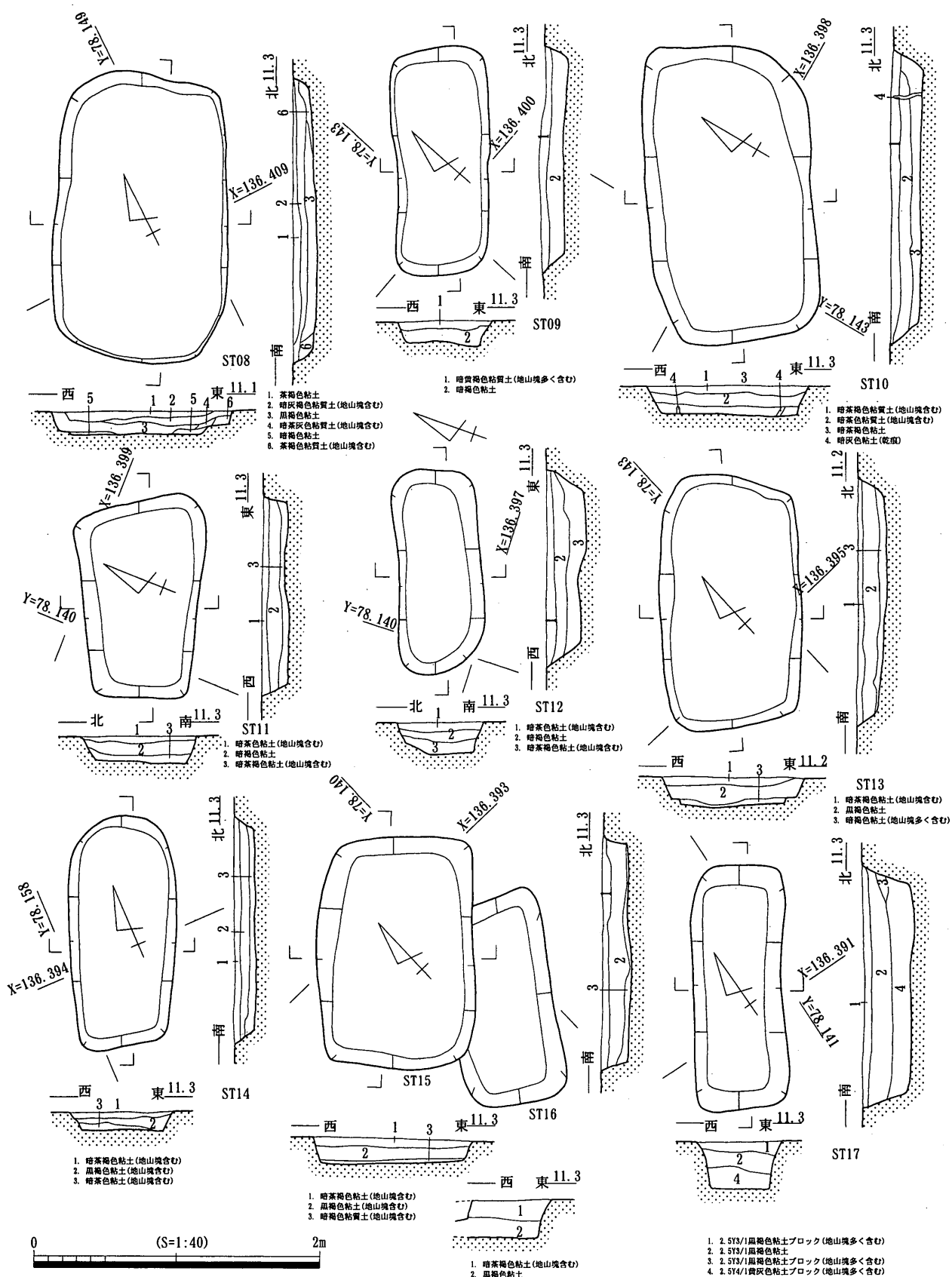
Ⅱ-2区北東部のX = 136.397 Y = 78.140付近で検出した土壙墓である。主軸方向は座標北から70°東偏し、西側のS T 11とほぼ揃うが規模的に本遺構が小形である点は異なる。平面形と埋没土に地山塊を交えることから土壙墓と考える。時期決定可能な出土遺物は見られないが、他のものとの位置関係や主軸方向、規模的な点から概ね8c代の所産と推定する。

Ⅱ区第1面S T 13

Ⅱ-2区北東部のX = 136.395 Y = 78.143付近で検出した土壙墓である。主軸方位は座標北から40°東偏し、南側に隣接するS T 15～17とほぼ揃う。平面プランはやや歪な隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形を呈する。短軸方向断面の底面に、小規模な段差が記録されているが、埋没土に木棺等の痕跡が見られないことから土壙墓と考える。時期決定可能な出土遺物は見られないが、位置関係や主軸方向、規模的な検討から概ね8c代の所産と推定しておく。

Ⅱ区第1面S T 14

Ⅱ-2区北東部のX = 136.394 Y = 78.158付近で検出した土壙墓である。平面プランはやや歪な隅丸長方形を呈し、0.3m程の残存深度を測る。断面形は逆台形であり、3層に分割された埋没土中には地山塊が多く見られた。また、主軸方向は隣接するS T 15～17とほぼ揃える。時期決定可能な出土遺物は見られないが、他のものとの位置関係や主軸方向、規模的な検討から概ね8c代の所産と推定し



第163図 II区 第1面ST08~17平・断面図

ておきたい。

Ⅱ区第1面S T 15

Ⅱ-2区北東部のX = 136.393 Y = 78.140付近で検出した土壙墓である。平面形は整った隅丸長方形を呈し、逆台形を呈する断面形をもつ。S T 16と切り合い関係があり、本遺構が後出する。埋没土は3層に分割されるが、巨視的には地山塊を多く含む同一層であり掘開直後に埋め戻された可能性が高い。平面形と埋没土の特徴から土壙墓と捉えてよい。時期決定可能な出土遺物は見られないが主軸方向や位置関係、規模的な検討から概ね8c代の所産と考えられる。

Ⅱ区第1面S T 16

Ⅱ-2区北東部のS T 15に切られる状態で検出した土壙墓である。平面プランは隅丸長方形を呈し、断面形は箱形に近い。先後関係にあるS T 15とは主軸方向をやや違えており、本遺構がやや西偏したのものとなっている。埋没土はS T 15に類似した地山塊を多く含む暗茶褐色粘土を主体としており、平面形や埋没土の特徴から土壙墓として捉える。時期決定可能な出土遺物は見られないが、主軸方向や検出位置、規模的な検討から概ね8c代の所産と推定しておく。

Ⅱ区第1面S T 17

Ⅱ-2区北東部のX = 136.391 Y = 78.141付近で検出した土壙墓である。平面プランは隅丸長方形を呈し、断面形は箱形に近くほぼ直立する。主軸方向は西側に隣接するS T 14.15と類似する南北方向を採り、規模的には北側にやや離れて分布するS T 09.12と同様に短軸がやや狭い。埋没土は地山塊を多く含み、巨視的には同一層と見なしてよい。平面形と掘開直後の埋め戻しを想起させる埋没土の特徴から、土壙墓として報告する。

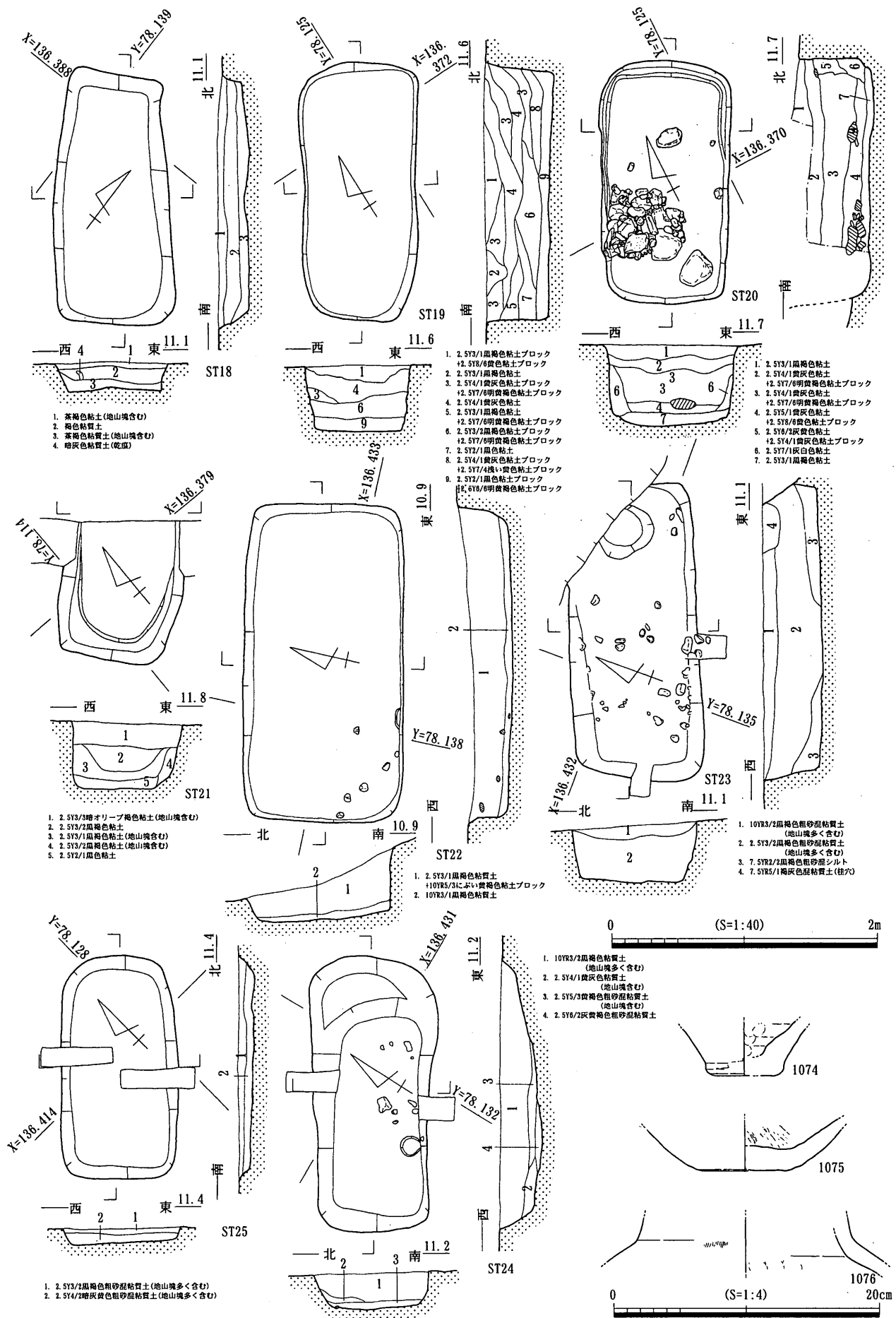
時期決定可能な出土遺物は見られないが主軸方向や検出位置、規模的な検討から概ね8c代の所産と推定しておきたい。

Ⅱ区第1面S T 18

Ⅱ-2区北東部X = 136.388 Y = 78.139付近で検出した土壙墓である。平面形が隅丸長方形を呈し、ほぼ箱形の断面をもつ。内部は、地山塊を多く含む粘土が充填されている。平面形と埋没土の特徴から土壙墓と判断するが、密集するS T 09～17とやや離れた位置に主軸方向を違えて分布している。巨視的には、同一群と把握できることから、時期決定可能な出土遺物は見られないものの概ね8c代の所産と推定する。

Ⅱ区第1面S T 19

Ⅱ-2区南部X = 136.372 Y = 78.125付近で検出した土壙墓である。平面プランは整った隅丸長方形を呈し、0.5 m程の残存深度を測る。断面形は壁面が直立する箱形であり、レンズ状に分層されるブロック土の互層が充填されていた。平面形と掘開直後に埋め戻された可能性が高い埋没土の特徴から土壙墓と把握する。また、0.4 m程南側に隣接して本遺構と主軸方向や平・断面形が合致するS T 02が列状に並んで存在する。他のものとの位置関係や規模的な検討から概ね8c代の所産と推定する。



第164図 II区 第1面ST18~25平・断面図及びST20出土遺物実測図

Ⅱ区第1面S T 20

Ⅱ-2区南部X = 136.370 Y = 78.125付近のS T 19に隣接して検出した土壙墓である。平面形は整った隅丸長方形を呈し、箱形の断面形をもつ。底面はフラットであるが、北半部のみ高さ数cm程度階段状に掘り残された箇所が見受けられる。埋没土は最下層の7層を除き地山塊が多く含まれるブロック土で充填されており、南半部の底面からやや浮いた位置に砂岩礫が集中して検出されている。埋め戻しの際に投棄されたものと思われるが、その具体的な意図は不明である。平面形や埋没土の特徴から、隣接するS T 19とともに土壙墓と推測する。出土遺物は、上記礫群に伴って1074～1076の弥生後期後半段階の土器片が出土しているが、本遺構を第1検出面で確認していることから混入品の可能性が高いと言える。主軸方向や位置関係から、8c代の所産と推定しておく。

Ⅱ区第1面S T 21

Ⅱ-2区南西部X = 136.379 Y = 78.114付近で検出した土壙墓である。北半部が未調査となるが、隅丸長方形の平面プランをもつものと思われ、断面形は箱形を呈する。底面はフラットであり、南側には数cm程度の掘り残しによる段差が見られるが、その機能については不明である。埋没土は5層に分層され地山塊を多く含むものとなっている。検出範囲における平面形と埋没土の特徴から、土壙墓としての把握が可能である。主軸方向は東側のS T 19.20とほぼ同様の南北主軸を採るものとなっており、位置関係も含めて同一の群構成と見てよい。時期決定可能な出土遺物は見られないものの、主軸方向、規模的な検討から8c代の所産と推定しておきたい。

Ⅱ区第1面S T 22

Ⅱ-4区X = 136.433 Y = 78.138付近の谷2東岸で検出した土壙墓である。平面プランは、整った隅丸長方形を呈し箱形の断面形をもつ。12c前半までの埋没時期が想定される、谷2上層の堆積土を除去した段階で平面形を確認している。埋没土に地山塊が多く含まれることと、平面形から判断して土壙墓の可能性が高い。また、谷2東岸には平面形や埋没土が類似するS T 23～26.29～32が列状に分布する。主軸方向には座標北から36～79°東へ振ったものとなっているが、このバラツキは、谷2東岸のラインに添わせて構築されることによって生じたものであろう。したがって、これらは極めて近接した時期に、構築された可能性が推定できる。

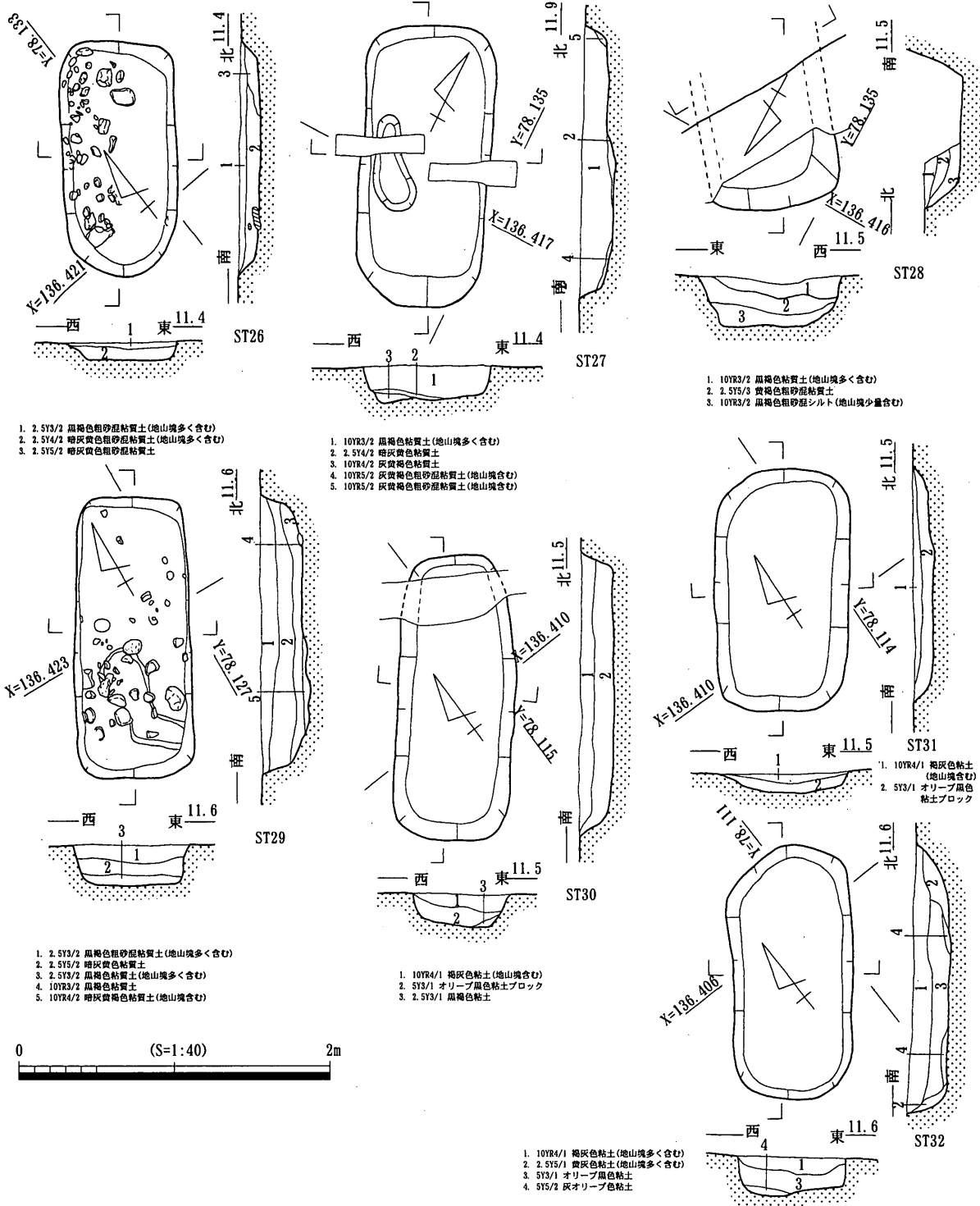
時期決定可能な出土遺物は見られないが、12c前半代までの谷2上層の堆積土下位に検出している点から、構築時期を上記時期以前に求められる。また、規模的な検討から8c代の所産と推定しておく。

Ⅱ区第1面S T 23

Ⅱ-4区北部のX = 136.432 Y = 78.135付近で検出した土壙墓である。平面プランは整った隅丸長方形を呈し、箱形の断面形をもつ。埋没土中には地山塊が多く含まれ、上位より中世(14～15c)の柱穴が穿たれている。平面プランや埋没土の特徴から土壙墓の可能性が高い。時期決定可能な出土遺物は見られないが、S T 22との位置関係や規模的な検討から概ね8c代の所産と推定する。

Ⅱ区第1面S T 24

Ⅱ-4区北部の谷2東岸X = 136.431 Y = 78.132付近で検出した土壙墓である。平面プランは隅丸



第165図 II区 第1面ST26~32平・断面図

長方形を呈し、遺構中央部の短軸方向では箱形長軸方向は逆台形に近い断面をもつ。底面は北東部分でテラス状になり南西部分へ向かって緩やかに窪む。平面プランや埋没土中には地山塊が多く含まれていることから、主軸をそろえるST 22.23と同様に土壌墓の可能性が高い。時期決定可能な出土遺物は見られないが、位置関係や規模的な検討から8c代の所産と推定しておく。

II区第1面ST 25

II -4区北東部X = 136.414 Y = 78.128付近で検出した土壌墓である。平面形が隅丸長方形を呈し、

逆台形を呈する断面をもつ。埋没土中には地山塊が多く含まれているが、微高地上に位置することから削平を受けている可能性があり、残存深度は0.2 m程と浅い。平面形と埋没土の特徴から土壙墓と考えられるが、谷2東岸に位置する土壙墓群の中では、主軸方向は揃うものの位置的にやや東へ離れた場所に構築されている。

時期決定可能な出土遺物は見られないが、位置関係や規模的な検討から8c代の所産と推定しておきたい。

II区第1面S T 26

II-4区谷2東側の微高地上X = 136.421 Y = 78.133付近で検出した土壙墓である。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は箱形に近いものである。埋没土に地山塊が多く含まれることや、平面形から土壙墓として捉えられる。微高地上に位置していることもあり、残存深度が浅い。平面図の底面に図示してあるのは、基盤層中に含まれる砂礫層である。時期決定可能な出土遺物は見られないが、位置関係や規模的な属性から8c代の所産と推定される。

II区第1面S T 27

II-4区X = 136.417 Y = 78.135付近の微高地上で検出した土壙墓と考えられる遺構である。隅丸長方形の平面形に、箱形の断面をもつ。埋没土は黒褐色粘土を主体とし、地山塊が多く含まれる。平面形と埋没土の特徴を考慮すると、土壙墓として把握するのが妥当である。位置的には、谷2東岸を南北方向に分布するS T 22 ~ 26.29 ~ 32と近接した位置にあるが、後述するS T 28と同様に、東側へ離れた位置に主軸ほぼ直交させて構築されている。時期決定可能な出土遺物は見られないが、規模・位置的な検討から概ね8c代の所産と考えられる。

II区第1面S T 28

II-4区X = 136.416 Y = 78.135付近で検出した土壙墓である。東側の大半が現水路に伴う未調査地となるが、西側に隣接して主軸を揃えるS T 27と同様に隅丸長方形を呈するものと考えられる。断面形は箱形であり、埋没土中には多くの地山塊を認める。平面形や埋没土の特徴から、土壙墓としての機能が推定できる。時期決定可能な出土遺物は見られないが、規模・位置的な検討から概ね8c代の所産と推定される。

II区第1面S T 29

II-4区南部の谷2東岸のX = 136.423 Y = 78.127付近で検出した土壙墓である。平面形は隅丸長方形を呈し、長・短軸ともに箱形の断面をもつ。底面は概ねフラットであるが、南側がやや窪む。地山塊は5層程度に分層され多くに地山塊を含み、巨視的には同一層に近いことから、掘開直後の埋め戻しが想定される。平面形と埋没土の特徴を考慮すれば、土壙墓としての機能を推定することが出来る時期決定可能な出土遺物は見られないが、規模・位置的な関係から、概ね8c代の所産と考えられる。

II区第1面S T 30

II-5区北部X = 136.410 Y = 78.115付近で検出した土壙墓と考えられる遺構である。調査区の都

合上、Ⅱ-4・5に跨って検出していることから、北側を側溝によって破壊してしまっている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面は箱形に近い。3層に分けられる埋没土には、地山塊が多く認められる。平面形を合わせて検討すると土壙墓としての性格をもつものと思われる。主軸方向は、北側に位置するST 25.26.29とほぼ合致する南北方向を採る。時期決定可能な出土遺物は見られないが、規模や主軸方向、他のものとの位置関係から概ね8c代の所産と推定される。

Ⅱ区第1面ST 31

Ⅱ-5区北部のX = 136.410 Y = 78.114付近で検出した土壙墓である。隅丸長方形の平面形を呈し、U字形の断面形をもつ。埋没土中に地山塊を多く含む点や平面形態から土壙墓と考えられるが、時期決定可能な出土遺物は見られないが、主軸方向や他のものとの位置関係、規模的な検討から、概ね8c代の所産と考えられる。

Ⅱ区第1面ST 32

Ⅱ-5区北部のX = 136.406 Y = 78.111付近で検出した土壙墓である。平面形がやや歪な隅丸長方形を呈し、短軸方向は箱形、長軸方向は逆台形からU字状の断面をもつ。埋没土に地山塊が多く含まれることや、平面形から判断して土壙墓と捉えられる遺構である。主軸方向は、北側にやや離れて分布するST 29～31とほぼ合致する南北方向を採用する。時期決定可能な出土遺物は見られないが、主軸方向や規模的な検討から概ね8c代の所産と推定しておきたい。

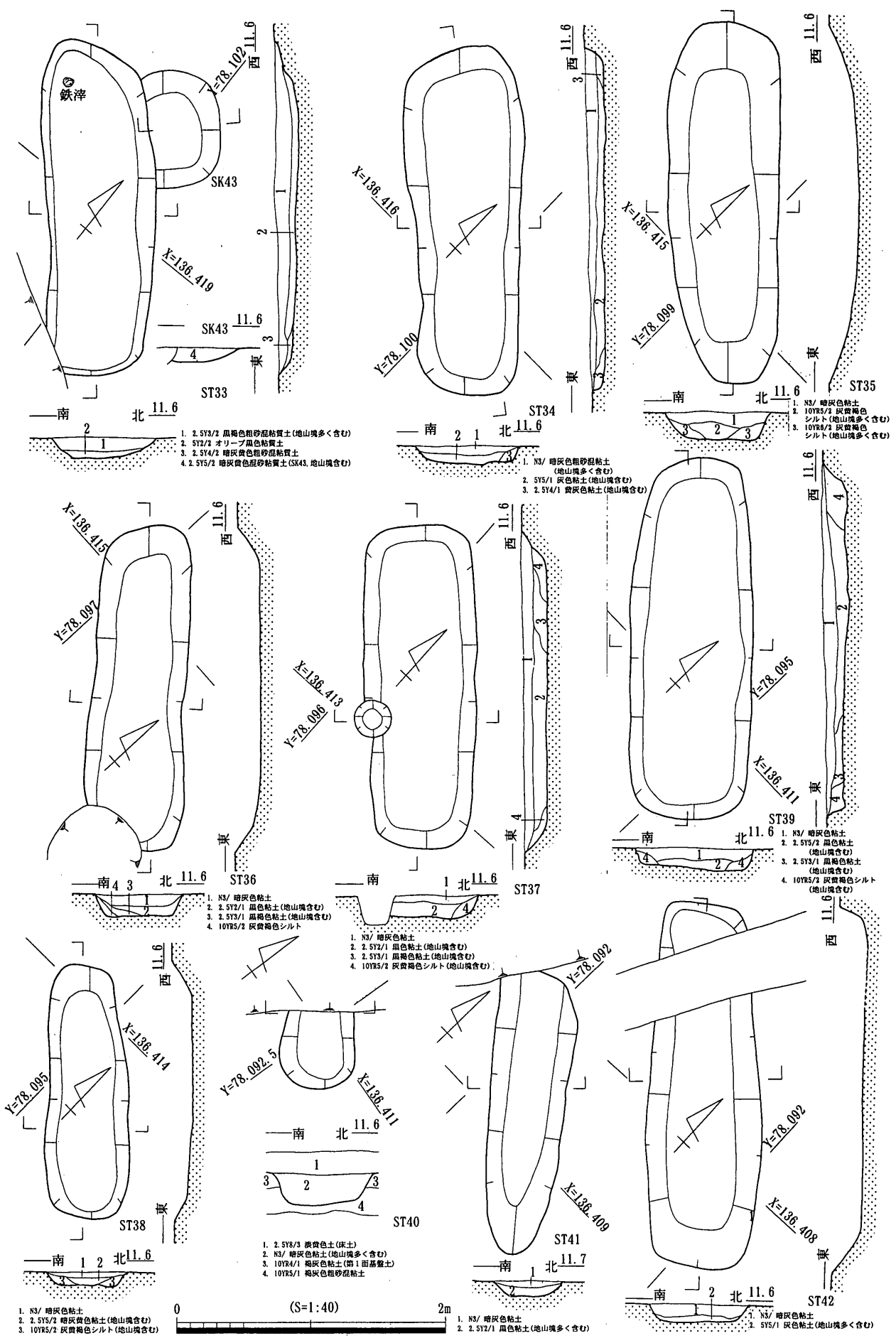
Ⅱ区第1面ST 33

Ⅱ-4区南西部のX = 136.419 Y = 78.102付近で検出した土壙墓である。平面形は隅丸長方形を呈し、緩いU字状の断面をもつ。埋没土中には地山塊が多く含まれ、北西隅の底面よりやや浮いたレベルから、鉄滓が出土している。埋没土の特徴や平面形から土壙墓としての機能が推定される。主軸方向は、本遺構南側に長軸方向を揃え等間隔に列状分布するST 34～42と合致し、これらは同一時期に形成された可能性が高い。

規模的には、Ⅱ区東部に分布するST 01～32と比較して、長軸方向が長い傾向があり、時期差と考えられる。時期決定に有効な出土遺物は見られないが、埋没土中に含まれる鉄滓が、12cまでの埋没時期が想定できる谷2上層から多く出土していることから、12cを前後する時期に構築された可能性が高い。

Ⅱ区第1面ST 34

Ⅱ-5区西部のX = 136.416 Y = 78.100付近で検出した土壙墓である。隅丸長方形の平面形に逆台形に近いU字形の断面形をもつ。埋没土中に地山塊が多く認められることと、平面形から土壙墓と見られる。時期決定可能な出土遺物は見られないが、北側に主軸方向を揃え分布しているST 33と共通点が多いことから、12cを前後する時期に構築されたものと見なす。



第166図 II区 第1面ST33~42平・断面図

Ⅱ区第1面S T 35

Ⅱ-5区西部の $X = 136.415$ $Y = 78.099$ 付近で検出した土壙墓である。平面形は隅丸長方形を呈し、U字から逆台形の断面形をもつ。埋没土は4層に分層されるが、巨視的には単一層に近く、地山塊が多く含まれる。北側に主軸方向を揃え分布しているS T 33に共通点が多く、12 cを前後する時期に構築されたものと推定しておきたい。

Ⅱ区第1面S T 36

Ⅱ-5区西部 $X = 136.415$ $Y = 78.097$ 付近で検出した土壙墓である。南東隅に攪乱を受けるが隅丸長方形の平面形をもち、逆台形の断面を呈する。埋没土に地山塊が多く含まれることや、平面形から土壙墓の可能性が高い。時期決定可能な出土遺物は見られないが、北側に主軸方向を揃え分布しているS T 33を始めとした他の土壙墓と共通点が多いことから、12 cを前後する年代が想定される。

Ⅱ区第1面S T 37

Ⅱ-5区西部 $X = 136.413$ $Y = 78.096$ 付近で検出した土壙墓である。整った隅丸長方形の平面形と逆台形の断面をもつ。埋没土は4層に細分されるが、いずれも地山塊を多く含むことから、掘開後の埋め戻しの単位として把握される。平面形と埋没土の特徴から、土壙墓としての機能が推測されよう。時期決定可能な出土遺物は見られないが、同一群と見られるS T 33と規模や埋没土の状況に類似点が多く見られることから、12 cを前後する年代を推定しておきたい。

Ⅱ区第1面S T 38

Ⅱ-5区西部 $X = 136.414$ $Y = 78.095$ 付近で検出した土壙墓である。隅丸長方形の平面プランをもち、箱形に近い逆台形様の断面を有する。埋没土中に地山塊が多く含まれることや、平面形態から土壙墓として捉えられる。周辺のS T 33～37等比べて小規模であることから、土壙墓として捉えた場合小児埋葬用であったとも考えられる。時期決定可能な出土遺物は見られないが、同一群であるS T 33と類似する点が多く見られることから、12 cを前後する年代が想定される。

Ⅱ区第1面S T 39

Ⅱ区西部の $X = 136.411$ $Y = 78.095$ 付近で検出した土壙墓である。平面形は整った隅丸長方形を呈し、箱形あるいは逆台形様の断面をもつ。埋没土に地山塊が多く含まれることから、周囲に存在するものと同様に土壙墓として推定できる。時期決定可能な遺物は見られないが、周囲の土壙墓と類似する点が多く見られることから、12 cを前後する年代が想定される。

Ⅱ区第1面S T 40

Ⅱ-5区西部の $X = 136.411$ $Y = 78.092.5$ 付近で検出した土壙墓である。調査区の都合上、西側部分が側溝や未調査地となり全体形が不明であるが、短軸長がS T 38に類似することから、長軸2.7 m程度の隅丸長方形の平面プランをもつものと推定される。埋没土は地山塊を多く含む単一層であり、平面形を考慮すれば土壙墓として捉えるのが妥当である。また、周辺に分布する土壙墓と比較して、S T 38と同様に小規模であることから、小児埋葬の可能性が考えられる。

Ⅱ区第1面S T 41

Ⅱ-5区西部のX = 136.409 Y = 78.092 付近で検出した土壙墓である。西側の一部が側溝によって失われているが、平面形は長楕円形を呈し逆台形様の断面をもつものと推定される。埋没土に地山塊が多く含まれることから、土壙墓の可能性が高い。

時期決定可能な出土遺物は見られないが、位置関係や埋没土の特徴から、12 c を前後する所産と推定しておきたい。

Ⅱ区第1面S T 42

Ⅱ-5区西部X = 136.408 Y = 78.092 付近で検出した土壙墓である。平面形は整った隅丸長方形を呈し、逆台形の断面をもつ。埋没土に地山塊が多く含まれることから、掘開後早期の埋め戻しが想定でき、平面形を考慮すれば土壙墓の可能性が最も高い。S T 33 から直線的に南へ伸びる土壙墓群のなかでは、最も南側に位置する。時期決定可能な出土遺物は見られないが、形態や群構成の類似から12 c を前後する所産と考えられる。

Ⅱ区第1面S T 43

Ⅱ-6区南東部X = 136.420 Y = 78.097 付近で検出した土壙墓である。平面形は整った隅丸長方形を呈し、U字形に近い断面形をもつ。底面は東側へ傾斜するが、概ねフラットである。埋没土中に地山塊が多く含まれる点と平面形から土壙墓としての機能が推定できる。また、周囲にはS T 33～42、S T 44～49などの土壙墓と考えられる遺構が存在するが、本遺構のみ主軸方向を違えている。時期決定可能な出土遺物は見られないが、周辺の遺構の状況から、12 c を前後する時期の所産と考えられる。

Ⅱ区第1面S T 44

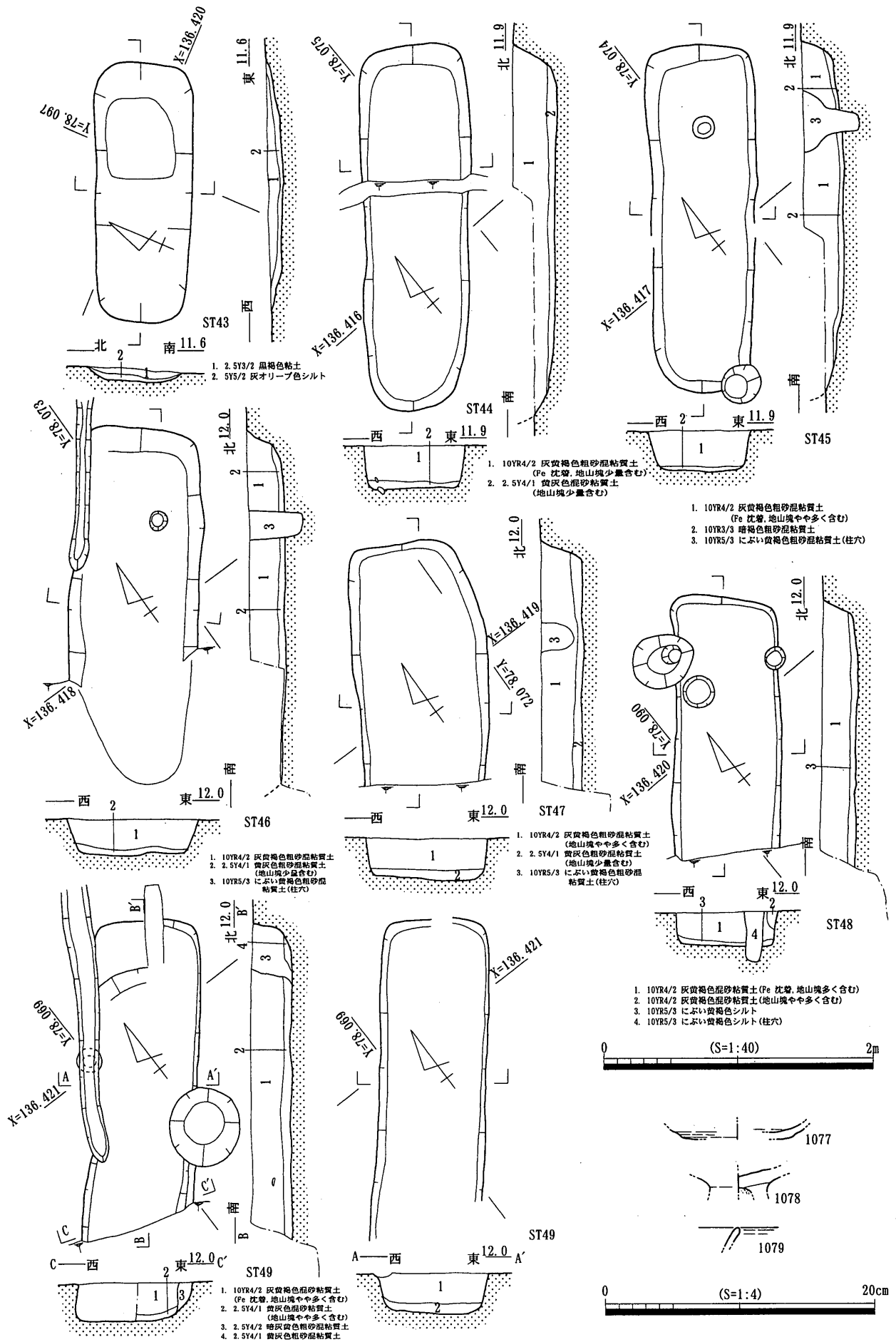
Ⅱ-7区X = 136.416 Y = 78.075 付近で検出した土壙墓である。南半部を予備調査トレンチによって削平を受けているが、隅丸長方形の平面形と箱形の断面をもつ。埋没土は2層に分割されるが、支配的なものは、1層とした地山塊を多く含む粘質土である。平・断面形や埋没土の特徴から、土壙墓として捉えられるものである。また、Ⅱ区東半部8 c代の所産と考えられる土壙墓と比較して長軸が長く、時期差を示す可能性がある。出土遺物には、埋め土である1層から土師質土器杯底部片 1077 が出土しており、本遺構を14 c代に形成されたものと推定する。

Ⅱ区第2面S T 45

Ⅱ-7区X = 136.417 Y = 78.074 付近で検出した土壙墓である。平面形は隅丸長方形であり、断面形は箱形を呈する。埋没土には地山塊を多く含み、平・断面形を合わせて考慮すると土壙墓としての性格を推測することができる。1層中より古墳時代と考えられる土師器高杯小片 1078 が存在するが、混入品と考えられる。S T 44 との主軸方向、規模的な検討から、14 c代に形成されたものと考えられる。

Ⅱ区第2面S T 46

Ⅱ-7区X = 136.418 Y = 78.073 付近で検出した土壙墓である。南半部は予備調査トレンチに削平を受けて下場のみ確認となったが、整った隅丸長方形の平面形と箱形の断面をもつものと思われる。



第167図 II区 第1面ST43~49平・断面図及びST44・45・49出土遺物実測図

埋没土は灰黄褐色粘質土を主体とし、地山塊を多く含む特徴から埋め土としての性格が強い。平・断面形や埋没土の特徴から、土壙墓として捉えうるものとする。時期決定可能な出土遺物は見られないが、主軸方向を揃えて分布する S T 44 と、平・断面形に共通点が多く見られることから、14 c 代に形成されたものと推定することができる。

Ⅱ区第1面 S T 47

Ⅱ-7区 X = 136.419 Y = 78.072 付近で検出した土壙墓である。南側を予備調査トレンチによって失うが、残存部分から隅丸長方形の平面形と箱形の断面形をもつものと思われる。埋没土は、埋め土としての性格が強い地山塊を多く含むもので、平・断面形を合わせて考慮すれば、土壙墓としての性格が与えられる。時期決定可能な出土遺物は見られないが、主軸方向を併行に揃えて分布する S T 44 と、平・断面形に共通点が多く見られることから、14 c 代に形成されたものと推定することができる。

Ⅱ区第1面 S T 48

Ⅱ-7区 X = 136.420 Y = 78.090 付近で検出した土壙墓である。南側が予備調査トレンチによって亡失しているが、隅丸長方形の平面形をもつものと思われ、箱形の断面形が確認できる。埋没土は埋め土と性格が強い地山塊を多く含むものであり、平・断面形を合わせて検討すると土壙墓としての色彩が濃い。時期決定可能な出土遺物は見られないが、主軸方向を併行に揃えて分布する S T 44 と、平・断面形に共通点が多く見られることから、14 c 代に形成されたものと推定することができる。

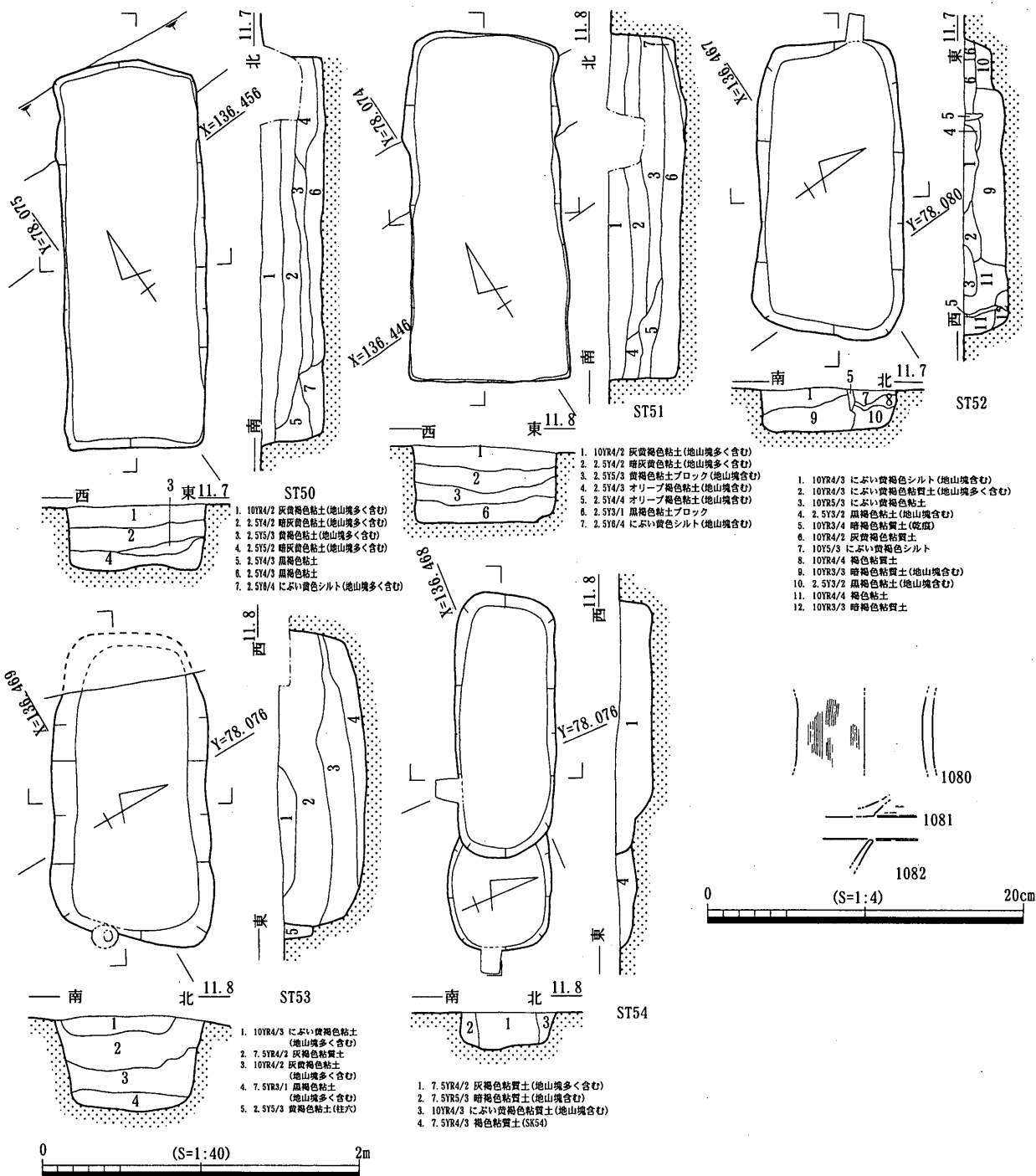
Ⅱ区第1面 S T 49

Ⅱ-7区 X = 136.421 Y = 78.069 付近で検出した土壙墓である。南側の一部を予備調査トレンチによって失うが、整った隅丸長方形の平面プランを推定することができ、断面形は箱形を呈する。埋没土に地山塊が含まれることから、平・断面形の属性とともに土壙墓としての性格が考えられる。Ⅱ-7区には東端の S T 44 より西端の本遺構まで主軸方向を平行させる形で列状に土壙墓が分布しているが、本遺構のみ埋没土の状況が異なっており、内側に明確に識別できる掘り方らしきものが存在する。また、この掘り方自体は、外側の平面を乱すものではなく、第 167 図下段左側に示すようにほぼ内側に納まる形で検出された。3. 4 層を木棺の裏込め土として理解することや、掘開された間もない時期に、平面形そのままにして掘り直されたと解釈する二通りの考え方ができる。前者の木棺の存在を仮定した場合、その内部の埋没土となる 1. 2 層中に多く地山塊が含まれることになり、解釈の矛盾が生じることから、土壙墓として近接する時期に掘り直されたものと考えられよう。

時期決定可能な出土遺物には、当初の埋め土である 3 層中から出土した土師質土器杯口縁部小片 1079 が見られる。口径等の復元が難しいが、同一群として把握される S T 44 の帰属時期を援用し、本遺構が 14 c 代に形成されたものと推定する。

Ⅱ区第1面 S T 50

Ⅱ-6区北西部 X = 136.456 Y = 78.075 付近で後述する S T 51 と並んで検出された土壙墓である。平面形は長方形に近く、箱形の断面形をもつ。埋没土は 7 層に細分できるが、底面よりやや上位の 5. 6 層を除いて地山塊が多く含まれることから大半が人的な埋め土として認識でき、巨視的には埋め



第168図 II区 第1面ST50~54平・断面図及びST51~53出土遺物実測図

戻しの単位を表すものと見られる。平・断面形を合わせて検討すると、土墳墓としての色彩が濃い。時期決定可能な出土遺物は見られないが、II-7区で検出している14c代のST44~49と比較して、長・短軸の長さがII区東半部のST01~32の一群に近いことから、概ね8c代の所産と推定しておきたい。

II区第1面ST51

II-6区北西部のX=136.446 Y=78.004付近で検出した土墳墓である。長方形に近い平面形をもち、断面は箱形を呈する。東側に位置するST50と比較して、長軸方向がやや短い、平・断面形は類似するものとなっている。埋没土の特徴は、底面直上に見られる6層を除いて、多くの地山塊が含まれる

もので埋め土としての性格が強い。また、数層に分層されるが、地山塊貫入の状況は共通するものであり、単一時期に行われた埋め戻しの単位を表すものと理解される。埋め土の特徴と平・断面形から土壙墓として見てよいだろう。

出土遺物に埋め土より出土した弥生後期後葉段階の長頸壺頸部片 1080 が存在するが、検出面から判断して下位からの混入品と理解される。隣接する S T 50 と平・断面の特徴が類似することから、8 c 代の所産と推定しておきたい。

Ⅱ区第1面 S T 52

国道際のⅡ-10区トレンチ X = 136.467 Y = 78.080 付近で検出した土壙墓である。隅丸長方形の平面プランに箱形に近い断面形をもつ。埋め土中には多くの地山塊の貫入を認めることから、埋め土としての性格が強い。平面形と埋め土の特徴から土壙墓としての機能が推定できる。出土遺物には、埋め土からの土師質土器杯底部片 1081 が見られ、本遺構が 14 c 後半に形成されたものと推定しておきたい。なお、本遺構とはほぼ同一主軸を採用し、土壙墓と考えられる S T 53.54 が存在している。

Ⅱ区第1面 S T 53

Ⅱ-10区 X = 136.469 Y = 78.076 付近で検出した土壙墓である。平面形は隅丸長方形を呈し、箱形に近い断面を有する。埋め土中には地山塊が多く貫入する状況が確認できることと、平・断面の属性から土壙墓として捉えられる。埋め土と見られる埋め土中から、土師質土器杯口縁小片 1082 が出土している。口径の復元は厳しいものの、本遺構東側に主軸を揃え構築されている S T 52 と同様の 14 c 後半の年代を想定しておきたい。

Ⅱ区第1面 S T 54

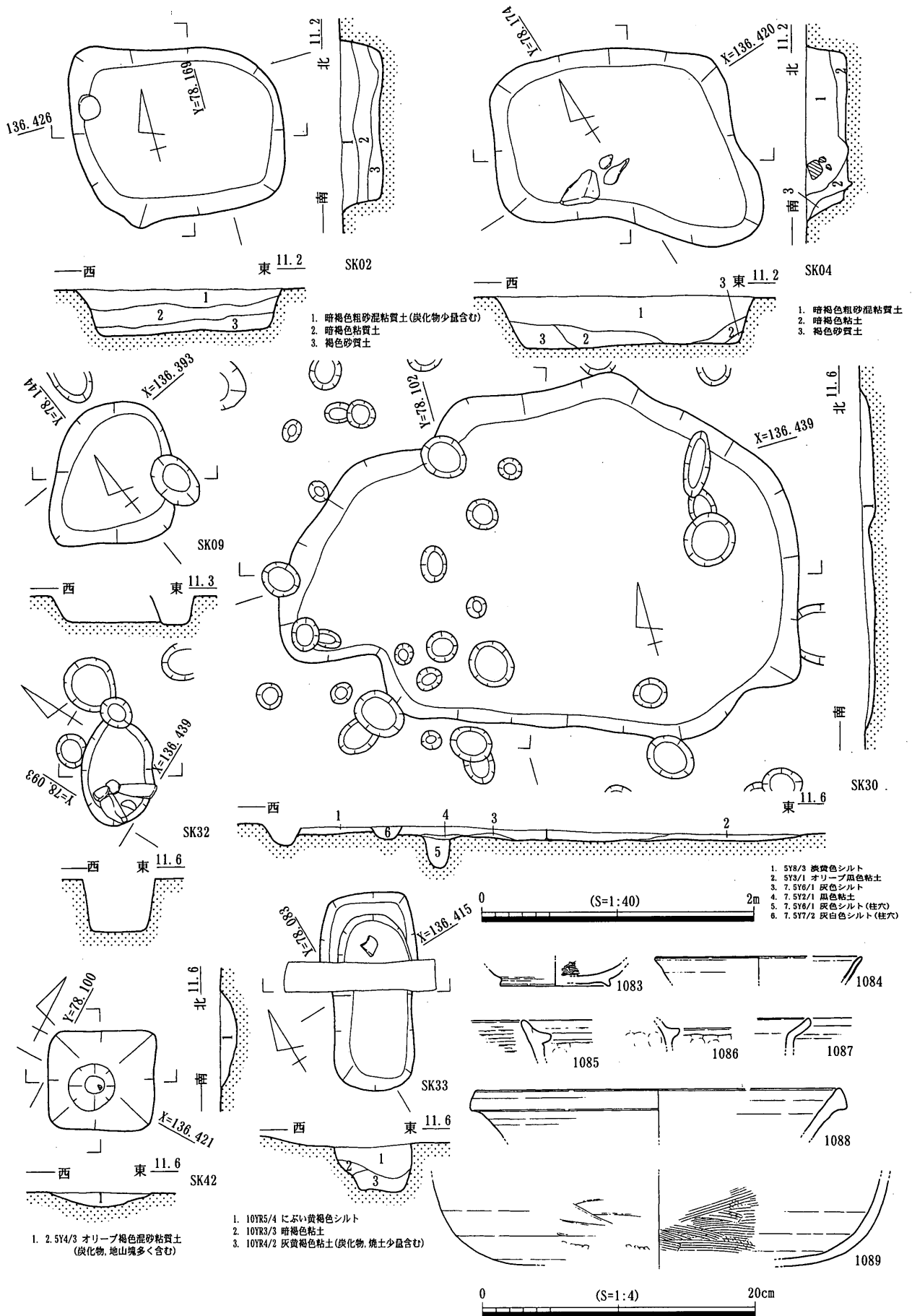
Ⅱ-10区 X = 136.468 Y = 78.076 付近で検出した土壙墓である。隅丸長方形の平面形と箱形の断面形をもち、S K 54 を切り込んで構築されている。底面東側が階段状となるが、全体としてはフラットである。埋め土に地山塊の貫入を多く認めることと、平・断面形の特徴から土壙墓として報告することとしたい。概報段階では、切り合い関係をもつ S K 54 との関係は掘り直しと捉えているが、平面形や埋め土の特徴が異なることから、単に先後関係をもつものと理解できる。時期決定可能な出土遺物は見られないが、北側に並列して見られた S T 53 や東側の S T 52 と同様に、14 c 後半に形成された遺構と推定しておく。

Ⅱ区第1面 S K 02

Ⅱ-1区北部 X = 136.426 Y = 78.169 付近で検出した土坑である。長軸 1.5 m 短軸 1.2 m 程の方形を呈し、逆台形の断面に 0.3 m 程の残存深度を見る。時期決定可能な出土遺物は見られないが、8 c 代の所産と思われる S T 01 に切り込まれることから、それ以前の所産と思われる。

Ⅱ区第1面 S K 04

Ⅱ-1区中央部 X = 136.420 Y = 78.174 付近で検出した土坑である。長軸 2.0 m 短軸 1.2 m 程の歪な隅丸長方形を呈し、0.4 m 程の残存深度を測る。南側の上位埋め土中には砂岩礫の集中が認められる。



第169図 II区 第1面SK02・04・09・30・32・33・42平・断面図及び出土遺物実測図

時期決定可能な出土遺物は見られないが、第1検出面で確認していることと、中世期遺構に類似した埋没土をもつことなどから、14c～15c初頭の所産である可能性が高い。

Ⅱ区第1面SK09

Ⅱ-1区中央部X = 136.393 Y = 78.144付近で検出した土坑である。長軸1.2m短軸1.0m程の長楕円形を呈し、0.2m程の残存深度を測る。時期決定可能な出土遺物は見られないが、中世期遺構に類似した埋没土をもつことから、14c～15c初頭の所産である可能性が高い。

Ⅱ区第1面SK30

Ⅱ-6区北東部X = 136.439 Y = 78.102付近で検出した土坑である。長軸3.9m短軸2.5m程の歪な長楕円形を呈し、0.1m程の残存深度を測る。立ち上がりが緩やかであることと、0.1m程の深度から、自然地形の落ち込みである可能性が高い。埋没土中からは白磁碗口縁1084と土師質土器足釜口縁1085が出土している。土師質土器足釜の口縁形態から、14c以降の所産と考えられる。

Ⅱ区第1面SK32

Ⅱ-6区北東部X = 136.439 Y = 78.093付近で検出した土坑である。長軸0.8m短軸0.5m程の楕円形を呈し、掘り上がりで0.4mほどの残存深度を測る。南西部の埋没土中に、砂岩礫が集中して見られることから、これを詰め石と解釈すれば建物を構成する柱穴の可能性もある。出土遺物には14c代の所産と思われる東播系須恵器捏鉢口縁1088と土師質土器足釜底部片1089が見られる。

Ⅱ区第1面SK33

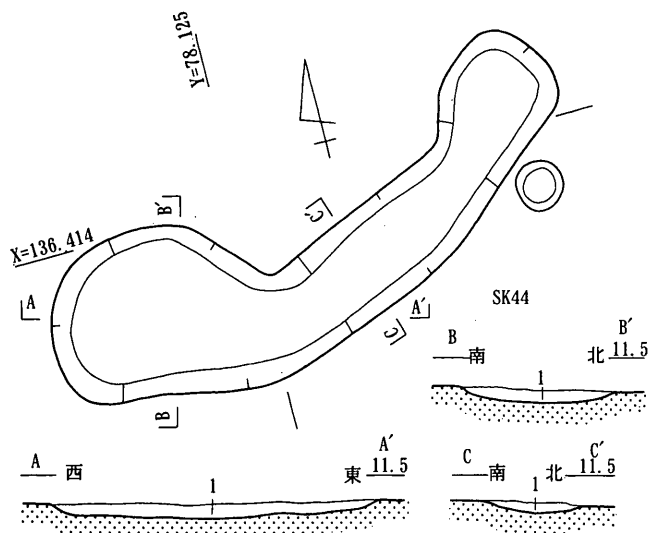
Ⅱ-6区北部のX = 136.415 Y = 78.083付近で検出した土坑である。長軸1.4m短軸0.6mの隅丸長方形を呈し、0.3m程の残存深度を測る。当初土墳墓の可能性を考えて調査したが、北側の底面はテラスを介して2段落ちとなり、立ち上がりは場所によって異なっていることから、土坑として報告する。北側の埋没土中位には砂岩礫が単体で見られた。土師質土器足釜鏝部片1086と同鍋口縁部1087が見られる。1086の鏝部の形態がかなり矮小なものとなっていることから、15c以降の年代が想定される。

Ⅱ区第1面SK42

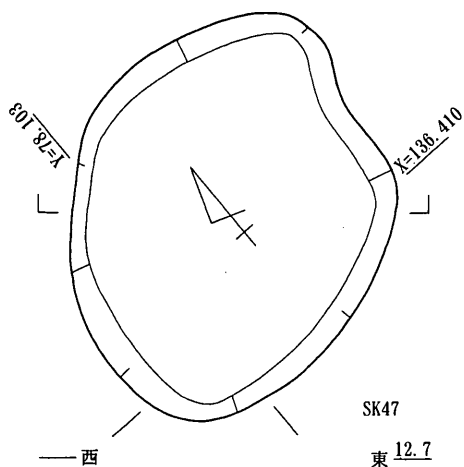
Ⅱ-4区南西部X = 136.421 Y = 78.100付近で検出した土坑である。一辺が0.7mほどの隅丸方形を呈し、深さ0.1m程のレンズ状に窪む断面をもつ。埋没土中には地山塊と炭化物がやや多く見られた。この埋没土の特徴は、隣接するST33～42の土墳墓群と極めて酷似する。出土遺物に、内黒の黒色土器椀高台片1083が見られることから11c後半から12c前半の所産と考えられる。

Ⅱ区第1面SK44

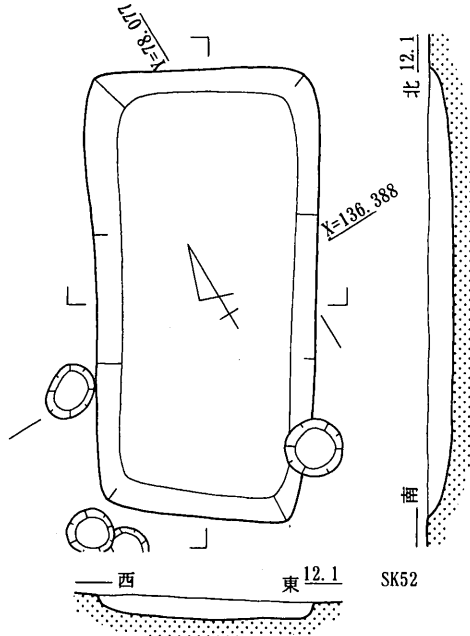
Ⅱ-4区東部のX = 136.414 Y = 78.125付近で検出した不定形な土坑である。残存深度が0.1mに満たないことと、立ち上がりが極めて緩やかであることから、自然地形の可能性が高い。出土遺物は見られなかった。



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混粘質土(炭化物、焼土多く含む)



1. 10YR6/2 灰黄褐色粘土(Mn 沈着)



第170図 II区 第1面SK44・47・52平・断面図

II区第1面SK47

II-5区西部のX=136.410 Y=78.103付近で検出した土坑である。直径2m程のやや歪な円形を呈し、逆台形の断面に0.15m程の残存深度を測る。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴が中世期のものと類似することから、周辺遺構の14c~15c初頭に形成されたものと推定する。

II区第1面SK52

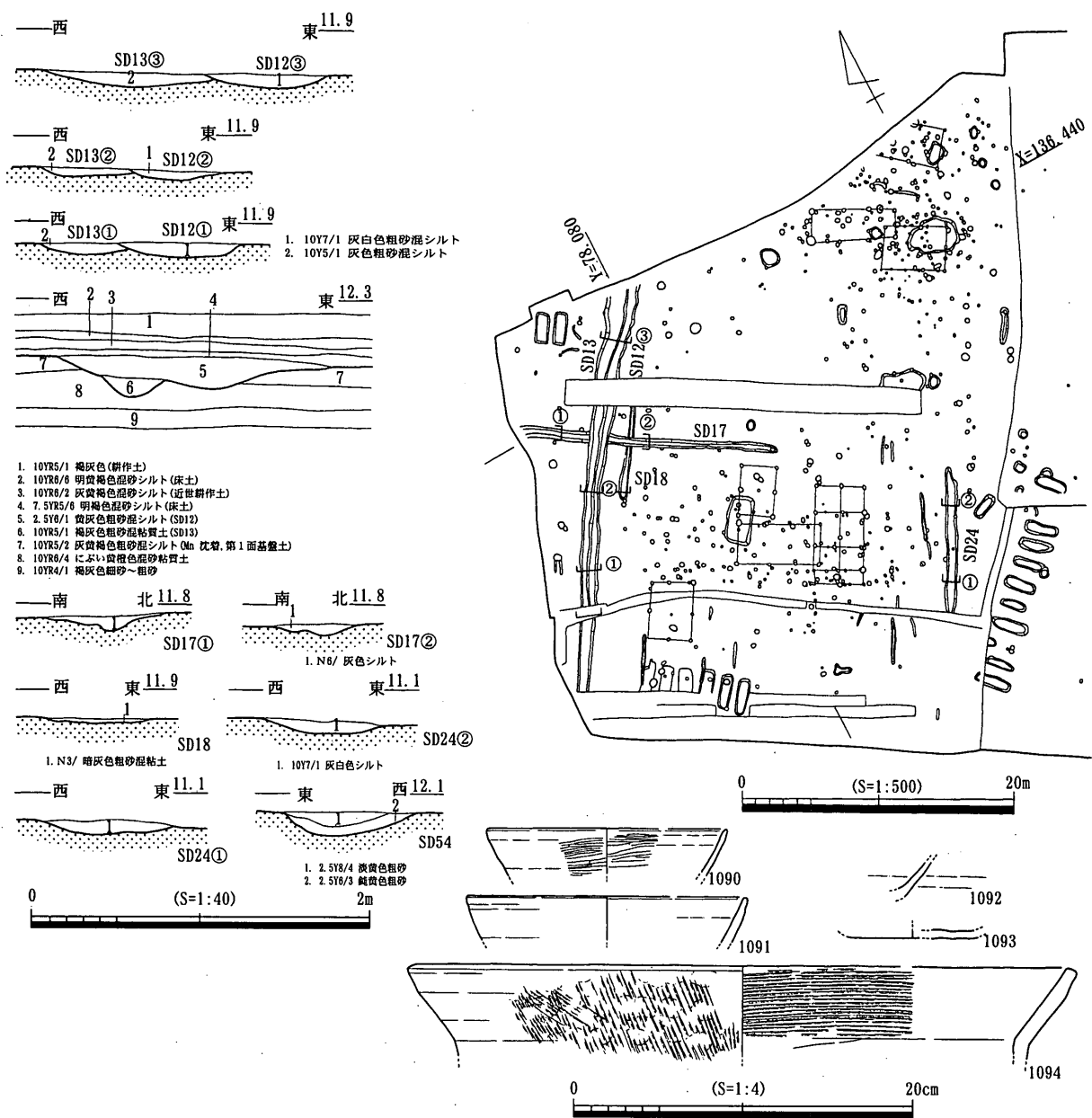
II-9区中央部のX=136.388 Y=78.077付近で検出した土坑である。長軸2.3m短軸1.2m程の隅丸長方形を呈し、緩やかな逆台形に近い断面をもつ。平面形から、墓としての可能性を考えて調査したが、立ち上がり緩やかであることと、II区で多く見られる土壙墓と違い埋没土中に地山塊が含まれないことから、土坑として報告する。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴が周囲の中世期遺構と類似することから、14c~15c初頭に形成されたものと推定する。

II区第1面SD12.13

II-6.7区西部を南西から北東方向へ流下する2条の溝状遺構。両者は重複または併走し、SD12が上位から穿たれており、SD13の詳細な規模は窺い知れない。SD12は第1検出面上位に堆積する近世段階の耕土中からの掘り込みが確認でき、上面幅1.6m深さ0.2m程を測る。SD13は、SD12より先行することは確定的であるが、時期決定可能な出土遺物が見られないことから、詳細な時期は知り得ない。両者ほぼ重複して検出されていることから、近世段階の所産と推定しておく。

II区第1面SD17

II-6区西部で検出した上面幅0.7m深さ0.1m程の溝で、調査区西壁から東西20mに亘って



第171図 II区 第1面SD12・13・17・18・24・54平・断面図及び出土遺物実測図

検出された。残存深度については、検出面上位がかなりの削平を受けていることを考慮しなければならない。方向性は、II-6区で確認した掘立柱建物群と合致するものであり、位置関係を見ると、北側のSB05～07の一群と南側のSB08～10の一群を二分する場所に存在している。時期決定可能な出土遺物は見られないが、近世段階の所産と考えられるSD12.13に切られることと、方向と位置関係を重視し、掘立柱建物群と同時期の14c後半～15c前半の所産と考えたい。

II区第1面SD18

II-6区西部で検出した上面幅0.6m残存深度0.1m程の南西から北東方向へ延びる溝状遺構である。東西方向のSD17に直行する形で検出し、SD17に切られる。また、その方向はII-6区の掘立柱建物とほぼ合致していることから、時期決定可能な出土遺物は見られないものの、14c後半～15c前半期の所産である可能性が高い。

II区第1面SD 24

II -6区東部において検出した溝であり、南西方向から北西方向へ11 mに亘って検出された。上面幅0.8 m深さ0.1 m程の規模を測るが、残存深度についてはかなりの削平を見込まなければならない。1090の内黒黒色土器碗は、南端付近の埋没土中から出土したもので、12 c前半の所産と考えられる。方向自体は、西側のSB 08と合致するが時期的には符合しないが、建物を復元できなかった柱穴出土遺物に当該期の遺物が見られることから、集落内の建物に付随する溝であった可能性も否定できない。

II区第1面SD 53.55

II -9区で検出した上面幅0.2 m深さ0.1 m程の畝間の溝と考えられる遺構である。SD 54は調査区東半部を北西から南東方向、SD 56は調査区中央部を南西から北東方向へ延びる形で検出した。周囲には同様の規模を測る小溝が方向を揃え一定間隔で見られることから、耕作に伴う畝間の溝と判断できる。SD 55から土師質土器杯底部片1092、SD 53からも同杯底部片1093が出土しているが、埋没土の特徴が上位に見られる概ね近世段階の耕作土に類似することから、混入品の可能性が高い。中世14 c後半～15 c前半の集落が廃絶したのち、近世段階に畑地となった痕跡と見るべきだろう。

II区第1面SD 54

II -9区南東部で検出した上面幅0.8 m残存深度0.2 m程を測る溝である。南壁から6 m程で確認した後途切れるが、検出面上面が削平を受けていることを考慮すると、本来的には延伸していたものと思われる。埋没土はラミナが認められるシルトから細砂であり、一定の流水状態を想定できる。1091の土師器碗口縁と1094の土師器甕口縁は、底面付近から出土した。これらの遺物から、本遺構は概ね11 c頃の所産と考えられる。

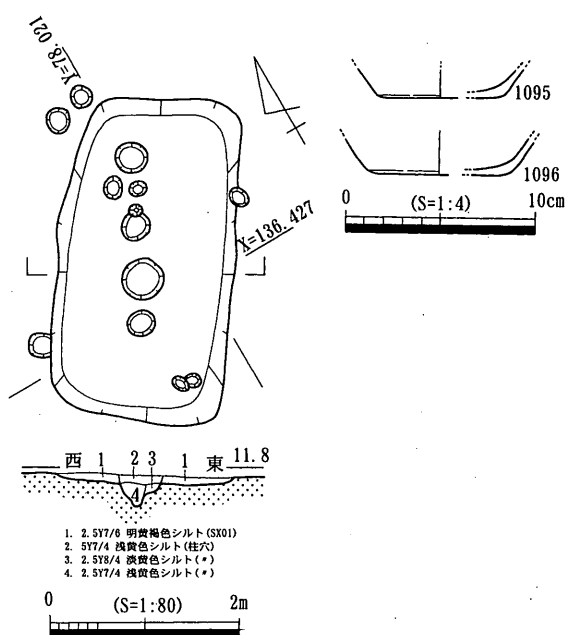
II区第1面SX 01

II -6区X = 136.427 Y = 78.021 付近で検出した落ち込みである。平面形は隅丸方形を呈するが、残存深度は0.1 m程であることと、立ち上がりが極めて緩やかであることから、削平され残った自然地形の可能性が高い。埋没土中からは、土師質土器杯底部片1095.1096が出土している。

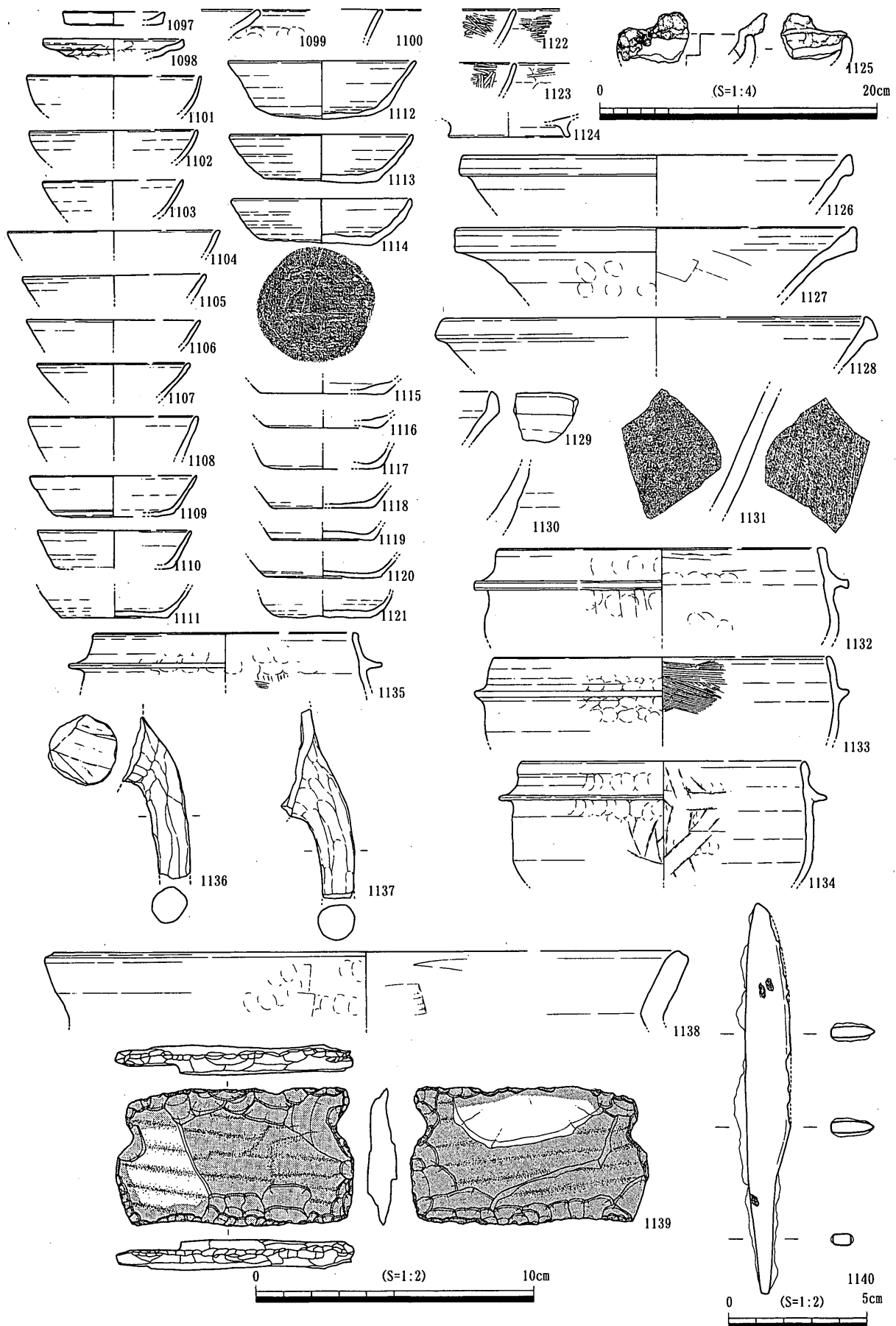
柱穴出土遺物

ここでは、II区第1検出面の建物として復元できなかった柱穴から出土した遺物である。遺物が多く認められるのは、II -6区に集中している。中には11c後半～12c前半代のものも見られ、建物として把握できなかったが中世前半代の集落の存在を暗示するものである。

1097は柱穴823からの土師質土器小皿。1098は



第172図 II区 第1面SX01平・断面図
及び出土遺物実測図



第173图 II区 第1面SP出土遗物实测图

柱穴 647 より出土した「て」の字状口縁をもつ京都系土師器皿であり、下っても 12 c 前半代の所産と考えられる。柱穴 567 から出土している 1099 も、小片ながら京都系土師器皿と見られる。1100 は柱穴 1063 から出土した土師質土器杯口縁の小片。1101 は柱穴 824 からの土師質土器杯。1102 の土師質土器杯は、柱穴 826 からの出土である。1103 は柱穴 786 の土師質土器杯口縁部。1104 の土師質土器杯口縁は柱穴 1117 より出土を見た。1105 は柱穴 722 から出土した土師質土器杯口縁。1106 は柱穴 913 から出土した土師質土器杯である。1107 の土師質土器は柱穴 405 からのもので、口径・器高から見て 15 c 前半まで下る。1108 は直立気味の口縁部をもつ土師質土器杯で、柱穴 526 から出土した。

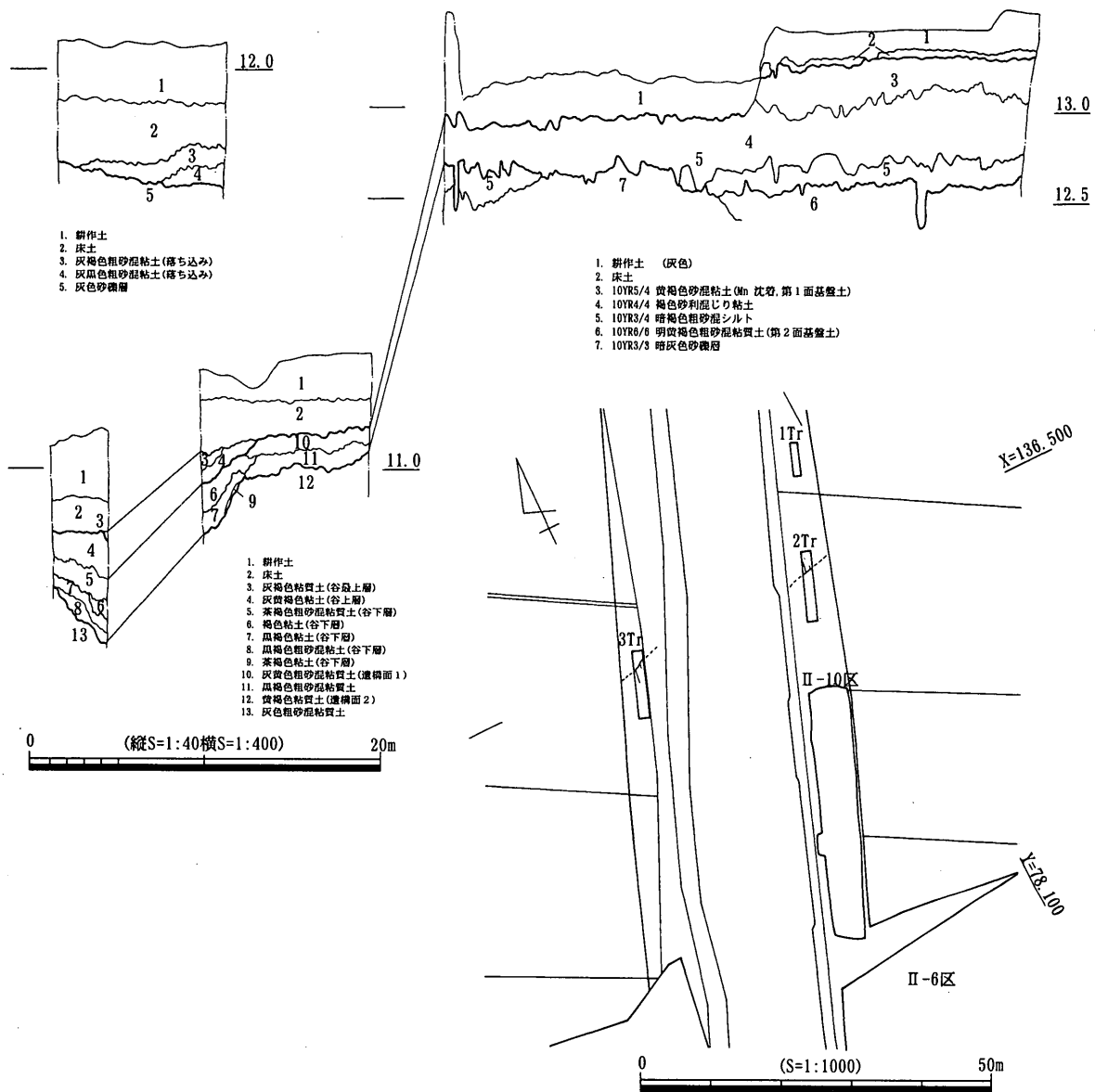
1109 の柱穴 749 から出土した土師質土器杯は、底部付近の体部外面に、回転ヘラ切りの始点となる痕跡が見られる。1110 の土師質土器杯は柱穴 938 からの出土。1111 の土師質土器杯は柱穴 798 から出土したものである。1112 は柱穴 1086 から出土したほぼ完形の土師質土器杯であり、形態から 14 c 前半の所産と考えられる。1113 の土師質土器杯は柱穴 952・956 間で接合したものである。1114 は柱穴 956 からの土師質土器杯であり、底部外面に板状圧痕が見られる。1115 は柱穴 1090 から出土した土師質土器杯底部。1116 の土師質土器杯底部は 1118 からのものである。1117 は柱穴 844 からの土師質土器杯底部。1118 の土師質土器杯底部は、柱穴 878 から出土。1119 は柱穴 423、1120 は柱穴 521、1121 は柱穴 406 から出土した土師質土器杯底部片である。

1122.1123 は和泉型瓦器碗の口縁部の小片であり、それぞれ柱穴 1077.1076 から出土している。1124 は内黒の黒色土器碗の高台片であり、柱穴 1021 から出土している。1125 は柱穴 833 から出土した埴塙と考えられるものである。口縁端部には、ガラス滓様のものが付着しているが断定はできない。1126～1129 は東播系須恵器鉢口縁部であり、それぞれ柱穴 559.945.475.435 より出土した。1130 は須恵器壺？の小片であり、柱穴 481 からのものである。1131 は柱穴 405 より出土した外面にケズリ調整が認められる備前焼甕の胴部片。1132～1137 は、土師質土器足釜の口縁・脚部片である。1132 は柱穴 379、1133.1137 は柱穴 405、1134 は柱穴 406、1136 は柱穴 749 よりそれぞれ出土した。1138 の土師器甕口縁部は、鉄製小刀 1140 とともに柱穴 341 から出土しており、口縁部形態から 11 c 後半～12 c 前半の可能性が考えられる。1139 は柱穴 220 から出土した紅簾片岩製の打製石庖丁であり、下位の堆積層からの混入品と考えられる。

国道 318 号線改良区の調査

県土木部横断道対策総室は、横断道本体工事に関連して、本遺跡を二分する形で存在している国道 318 号線の改良工事を計画していた。事業地は、調査区と隣接していることから、県教育委員会では平成 10 年度に確認調査を実施し、土壌墓等が確認された 258 m²について本調査が必要との回答を行った。本調査は、平成 11 年度に実施しており、その成果は本書のⅡ-10 区として報告している。ここでは、旧河道を主体として確認したことから、本調査に至らなかったトレンチについて説明を加えておく。

1～3 トレンチにおいて、旧河道を検出している。上面幅は不明ながらも、北側の肩部を検出した 3 トレンチから、南側の肩部を検出した 2 トレンチの北西方向へ伸び、1 トレンチではすべてが旧河道に含まれる。深さは 0.7m 前後と推定される。埋没土の特徴は、Ⅱ区で検出した谷 1.2 と同様に、盛んな流水状態が想定できない黒褐色系の粘土を主体として、漸移的に埋没している状況であった。おそらく、



第174図 II区 国道トレンチ部分平・断面図

北西方向の延長部分で谷 1.2 と合流すると考えられる。

出土遺物は、弥生後期土器と思われる細片があるが、極めて少数採取されるに留まった。居住域の中心となるII区微高地から離れていることが影響していると考えられ、集落縁辺部の様相を呈している。

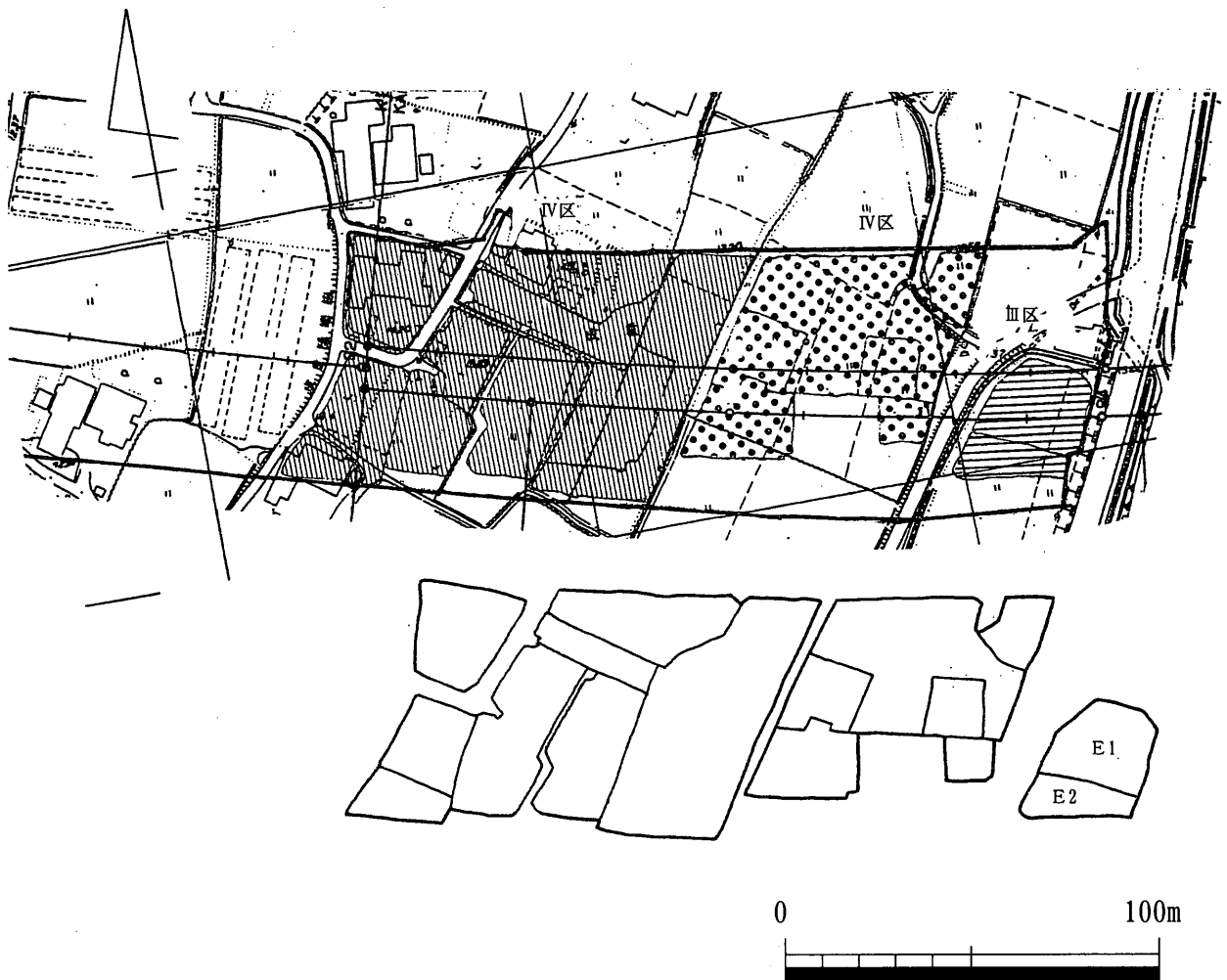
第4節 III区の調査成果

(1) 調査区の概要

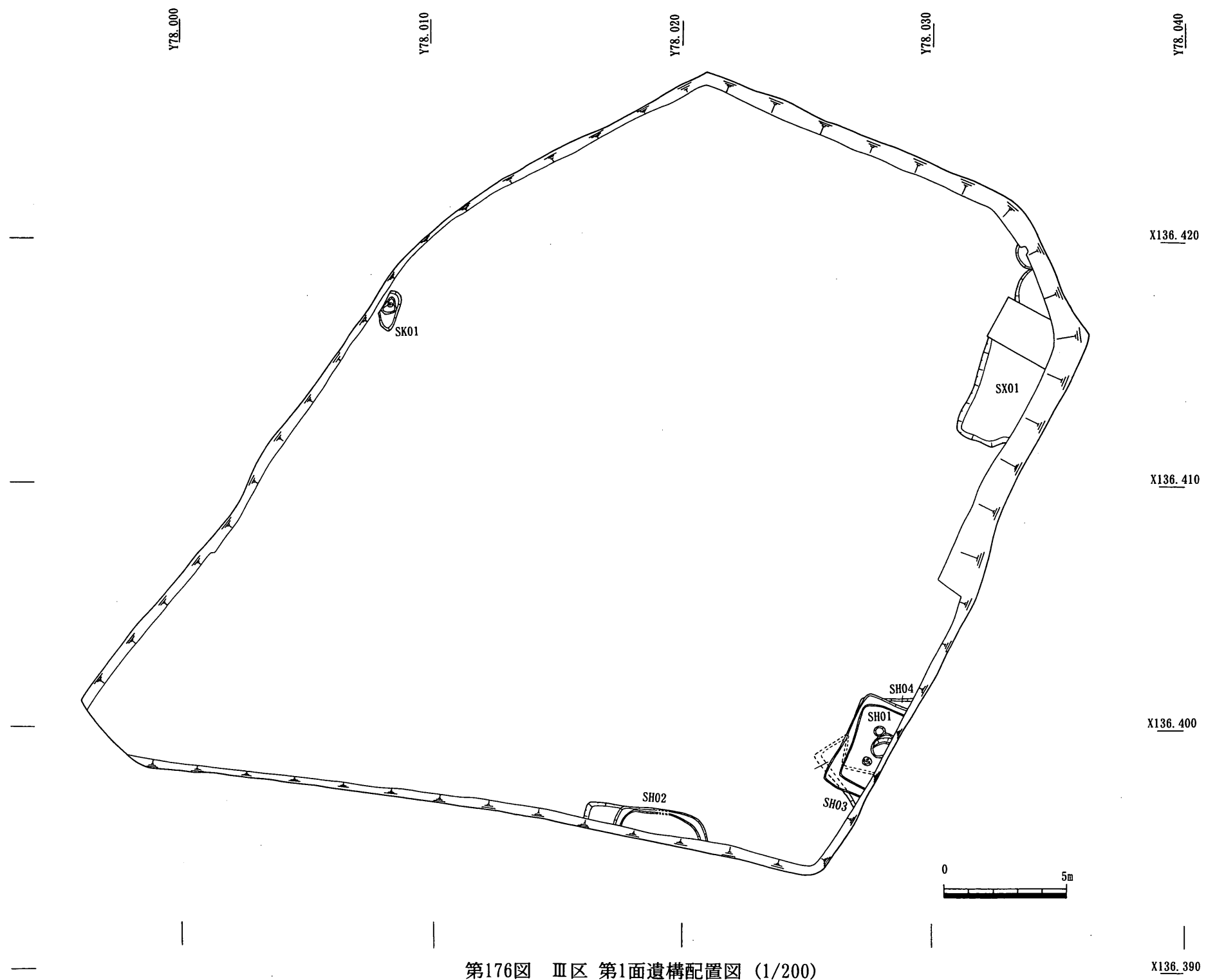
国道318号のすぐ西側に隣接し、国道に取り付く町道に挟まれた狭い調査区で、調査区の面積は1028㎡である。地表面は13.0m前後で平坦である。地表面から70cmほどは古い時期の耕作土が厚く堆積している。この耕作土の下部に沈着したマンガン層の直下に灰褐色砂質土層があり、この層の上面が古墳時代以降の第1遺構面となっている。標高12.3m前後で南側から北側に向かって僅かに下っている。

厚い耕作土の直下で第1遺構面となるため、包含層は部分的に残っていたが基本的には削平されている。包含層からは少量の中世土器が出土しているにとどまる。また第1遺構面の40cmほど下の標高11.9m前後に、弥生時代中期を中心とする第2遺構面が形成されている。

本調査区で検出された古墳時代以降の遺構は、上部が削平された状況で検出された。検出された遺構は竪穴住居跡が4棟、土坑1基、落ち込み状の遺構1基のみで、遺構密度は低い。竪穴住居跡は調査区



第175図 III区新旧調査区割り図 (1/2000)

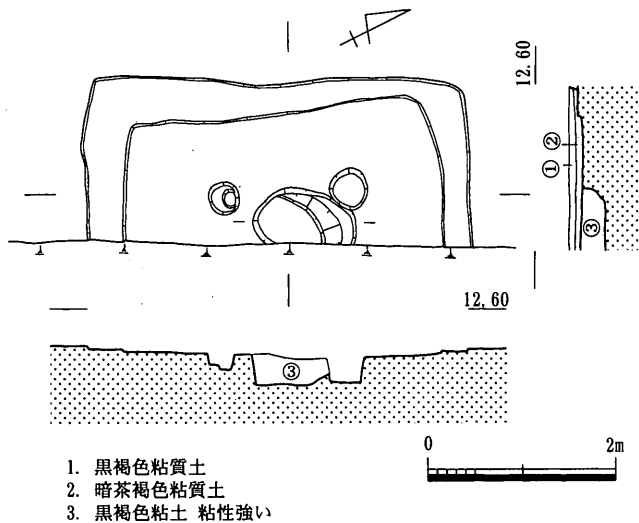


の南半分に集中しているが、いずれも調査区の壁際にあり、全体を検出するには至っていない。しかし
 竪穴住居跡は県下でもまだ類例の少ない古墳時代中期のもので、出土土器も良好で韓式系土器を含むな
 ど貴重な資料となった。

第1遺構面より下部の調査区の状況は、弥生時代の遺構・遺物の報告時に改めて詳細に記述すること
 にする。なお本調査区は調査時にはE1区・E2区と呼称していたが、遺構名の変更はしていない。

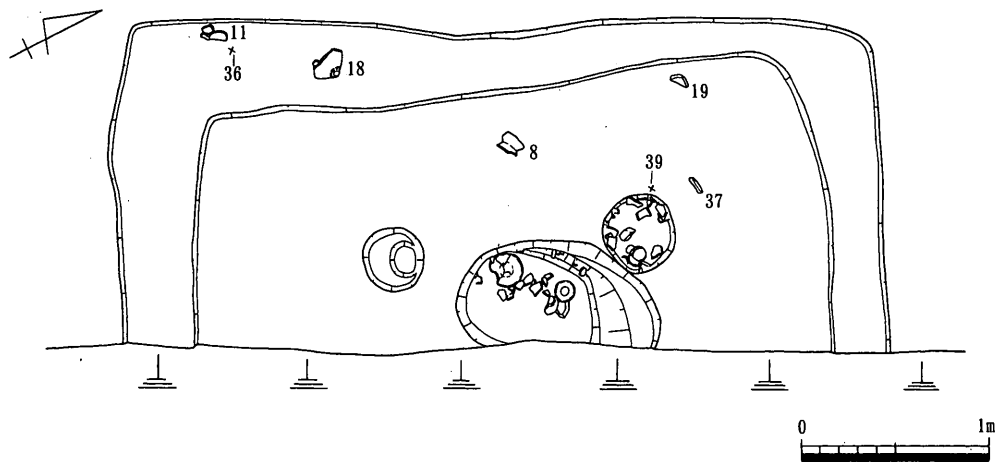
(2) 古墳時代の遺構・遺物

SH01 (第177～180図)

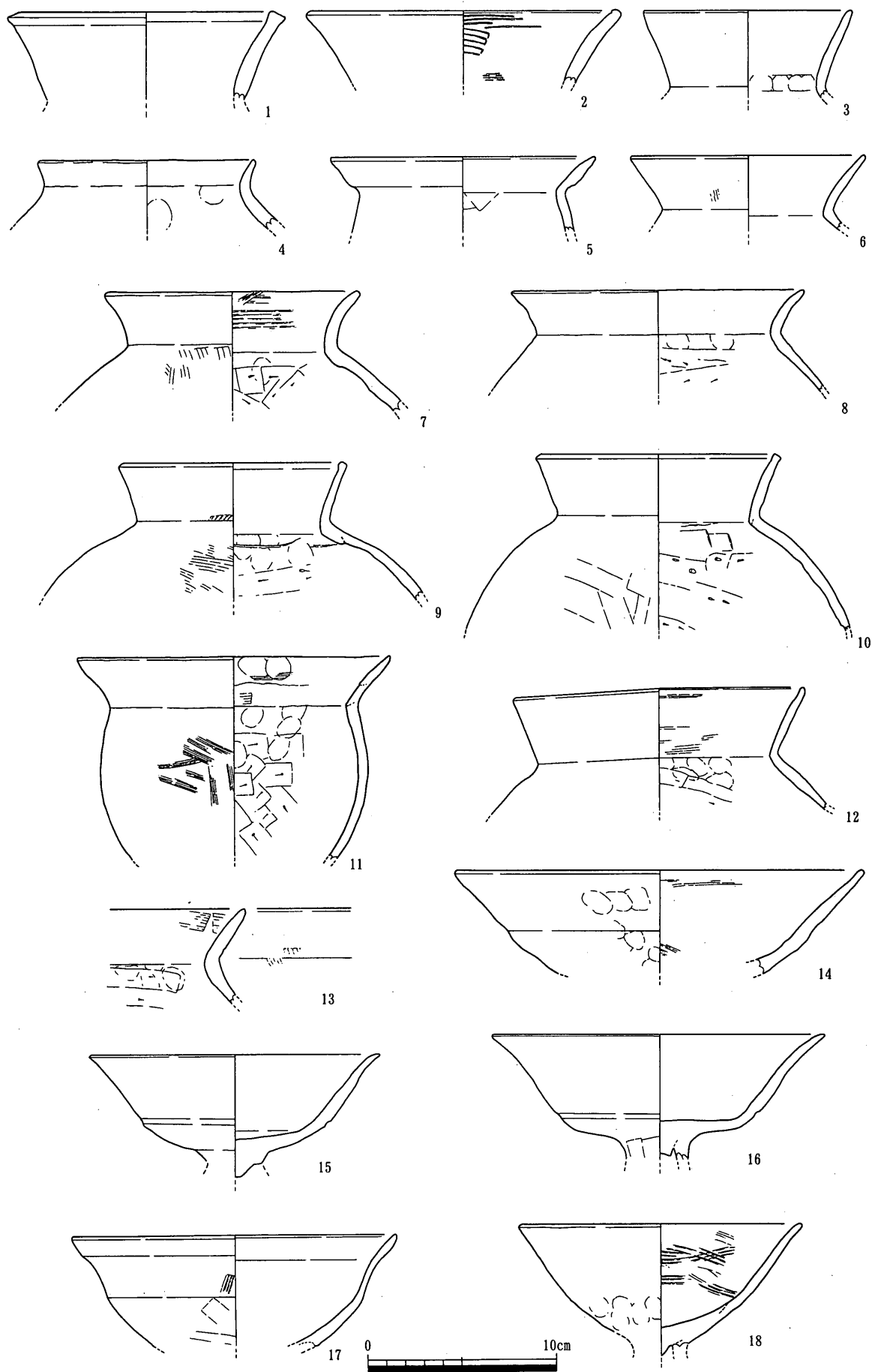


調査区の南半分の東壁際に検出した
 竪穴住居跡である。全体は検出出来な
 かったが、方形の竪穴住居跡と考えら
 れる。検出した南北部分では1辺は4.0
 mである。壁面に沿って幅20cm前後
 はテラス状になり、そこから5cmほど
 下がって床面になる。検出面から床面
 まで10cmほどで上部はかなり削平さ
 れている。床面には柱穴2基と土坑1
 基が検出された。柱間は1.2mあり、
 この柱穴に隣接して長径1.0mの土坑
 がある。この土坑の深さは28cmで北東
 側が段になっており、埋土は粘性の強

第177図 Ⅲ区 第1面SH01平・断面図(1/80)



第178図 Ⅲ区 第1面SH01遺物出土状況 (1/40)



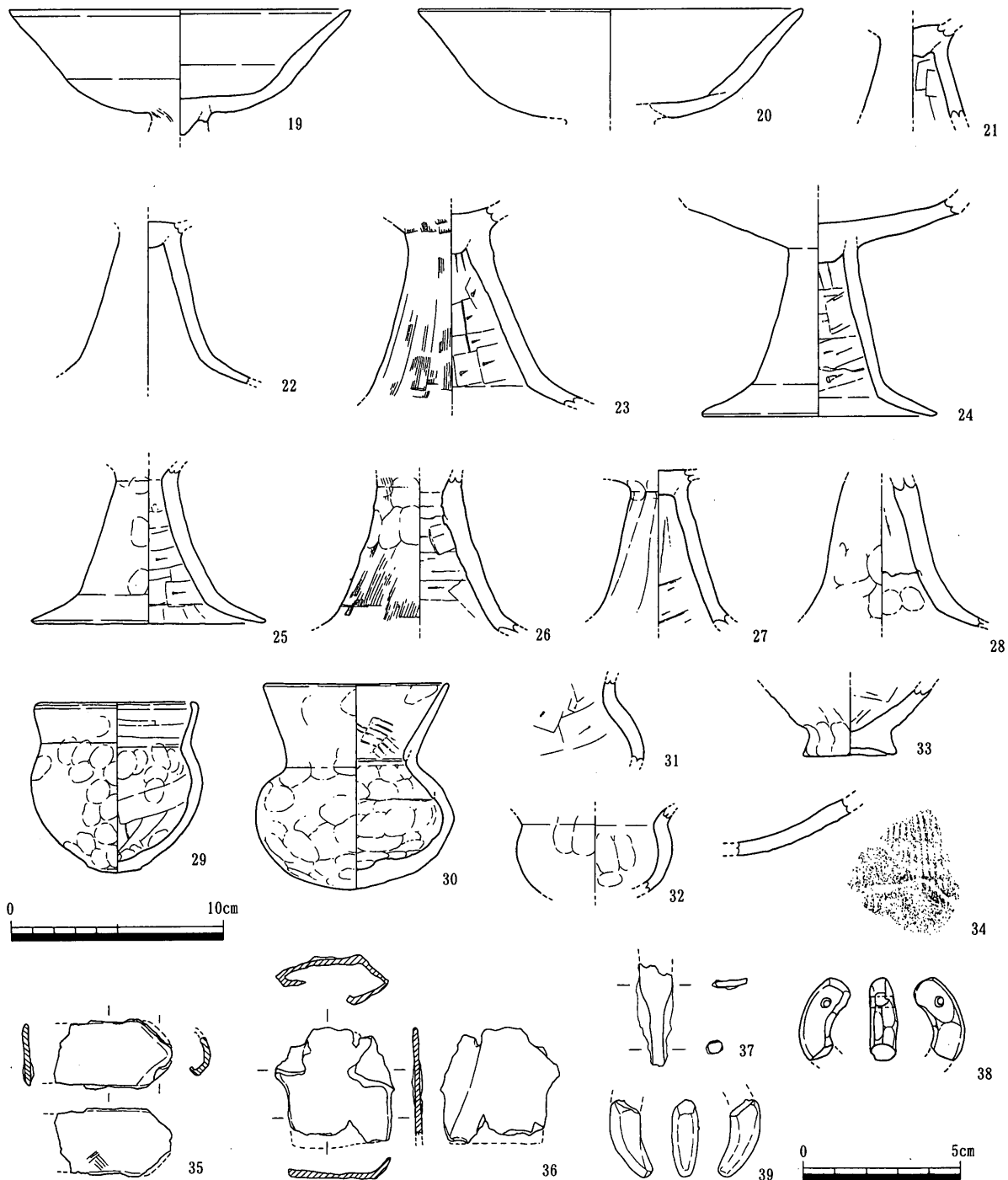
第179图 Ⅲ区 第1面SH01出土遺物(1) (1/3)

い黒褐色粘土で、土器がまとまって投棄されていた。

遺物は土器の他に鉄器と土製勾玉が出土しており、このうち4・10・13・15～17・20・22～25・28・34が土坑内から出土している。

1～3は壺である。1の口縁部端部は平坦で端部直下を強くナデている。2は口縁部内面に粗いハケ目を施している。3は口縁部屈曲部内面に強い指押さえが見られる。

4～13は甕である。4の口縁部は短く直立に近く立ち上がり、端部は先細りになっている。全体にナデている。甕に分類したが短頸壺としてもよいものである。5は口縁部外面が肥厚している。6の口縁部は鋭く屈曲して立ち上がる。7の口縁部は緩く外反し、内面にはハケ目を施す。体部外面はハケ目、



第180図 Ⅲ区 第1面SH01出土遺物(2) (1/3, 1/2)

内面にはヘラ削りを強く施す。8の口縁部は端部付近で外反する。9の口縁部は直線的に立ち上がり、端部内面を強くナデることにより内側に肥厚させている。体部上半は大きく膨らみ外面にハケ目、内面にはヘラ削りを施している。10は口縁部端部は平坦で端部付近を強くナデている。体部外面には板ナデが見られるが、磨滅していることから本来はハケ目であったかもしれない。内面はヘラ削りである。11は体部最大径より口径のほうが上回る。体部の張りは小さく外面に細かいハケ目を、内面にはヘラ削りを粗く施している。12の口縁部は歪んでおり、端部内面を強くナデている。13は口縁部の屈曲部内面は丸みを帯びている。

14～20は高杯の杯部、21～28は高杯の脚部である。14は外面に指押さえが顕著である。内面には部分的にハケ目が残る。15・16は口縁部上部で外反し、立ち上がり部外面にはナデによる凹線が巡っている。16は杯部と脚部の接合部に充填した粘土を下の脚部側から棒状工具によって押圧している。17は上半部を強くナデているため全体にS字状に屈曲している。外面には一部ハケ目が見られる。高杯の杯部としたが、あるいは鉢かも知れない。18は口径の割には深く、立ち上がり部の屈曲はほとんど認められない。内面は粗いハケ目を施した後にナデている。19・20は口縁部中央を強くナデている。22～25は脚部下半で屈曲して直線的に開く。脚部内面はいずれも横方向にヘラ削りを行っている。27の外面は弱い面取り状になっている。

29～32は小形丸底壺である。29の口縁部端部はナデのために内傾している。体部の内・外面全体に指押さえが顕著である。底部は突出気味である。30の口縁部は直線的に開き、内面には粗いハケ目が残る。体部は扁平な球形で内・外面ともに指押さえが顕著である。

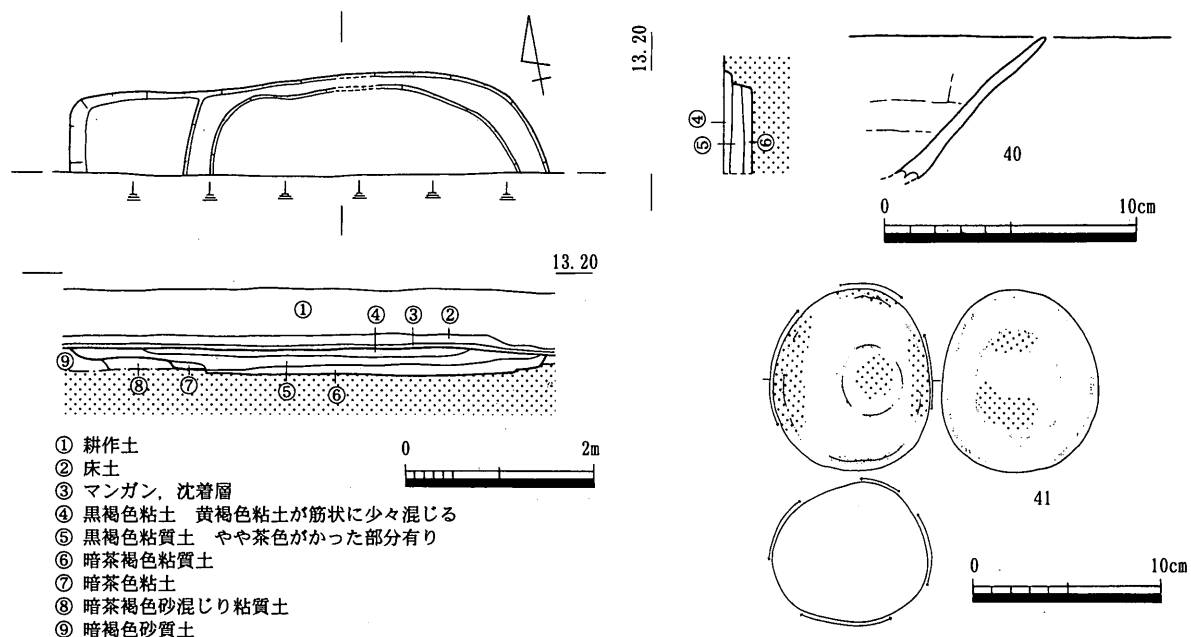
34は軟質の韓式系土器の甕の底部から体部にかけての破片である。底部はナデており、体部には1.8mm×7mmの長方形の格子目タタキが施されている。小破片のためタタキの単位は不明であるが、破片の中ではタタキ目の単位のずれが確認できる。外面の一部に煤が付着している。胎土には赤色粒が目立つ。

35～37は鉄器である。35は鉄鎌の基部の部分で、端部を内側に折り曲げている。また一部に木質が残っている。36は方形板を使用した鋤あるいは鋤の刃先である。端部の両方の角の部分の内側に折り曲げている。37は鉄鎌の茎部分で上半は欠損している。

38・39は土製の勾玉である。38は内側に細かい面取りの跡がある。

SH 02 (第181図)

調査区南壁沿いの東寄りで検出した竪穴住居跡である。検出した東西方向で一辺5.0mあり、東側の隅は丸みを帯びている。平面形は方形になると考えられる。またSH 01と同様に壁面に沿ってテラス状の高まりをもつが全体に低くなっている。特に西側部分は幅1.2mの広いテラスを形成しており、その下に東側部分に対応する低い幅の狭いテラス状の段がある。東西部分是对称な作りにはなっていない。検出面から床面までは30cmで上部は削平されている。僅かな部分が検出されたにとどまるため、床面で柱穴や土坑などは検出されなかった。上部には黒褐色粘土・粘質土が、下部には暗茶褐色粘質土が堆積していた。住居の一部しか調査していないためか、遺物は少ない。40は高杯の杯部の細片である。口縁部は上部でわずかに外反している。41は拳大の球形に近い安山岩製の磨石で、使用により磨滅している部分が多い。



第181図 Ⅲ区 第1面SH02平・断面図(1/80), 出土遺物(1/3, 1/4)

S H 03 (第 182 ~ 185 図)

調査区の南半分の東壁際でS H 01 に大部分が重なって検出された竪穴住居跡である。北側部分は後述するS H 04 に壊され、上部はS H 01 によって削平されている。さらにこの住居は墳丘が良好に残っている弥生時代の方形周溝墓を壊して建てられており、方形周溝墓の調査上、土層観察ベルトを残す必要があったため、北西側のコーナー部分は調査出来なかった。

平面的に検出できたのは、住居の西側部分の2.2 mで方形の住居が考えられるが規模等は不明である。検出面から床面までは40cmあり、床面で柱穴を検出したが支柱穴を復元するには至っていない。また西側の壁面に近い床面上には多量の炭化物とともに垂木材と考えられる炭化木が出土しており、この住居は焼失したことが伺える。この炭化木はS H 04 によって壊された部分の、S H 04 の床面より下部でも検出しており、これらはS H 03 に伴う炭化木と考えられる。S H 03 の埋土は灰黄褐色粘土混じり砂質土が中心である。

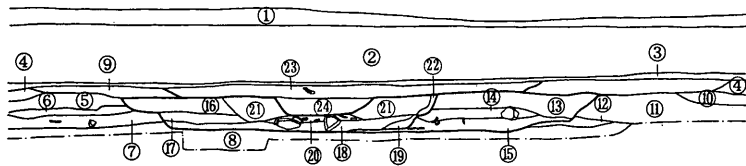
遺物は土器と鉄器が出土している。

42 ~ 44 は甕である。42 の口縁部は僅かに外反しており、内面にハケ目を施している。体部は球形であるが中央部の張りは弱い。外面には全体にハケ目を施し、内面は指押さえが顕著である。

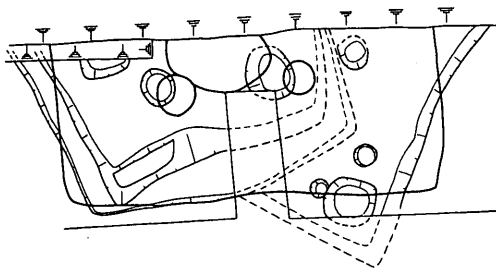
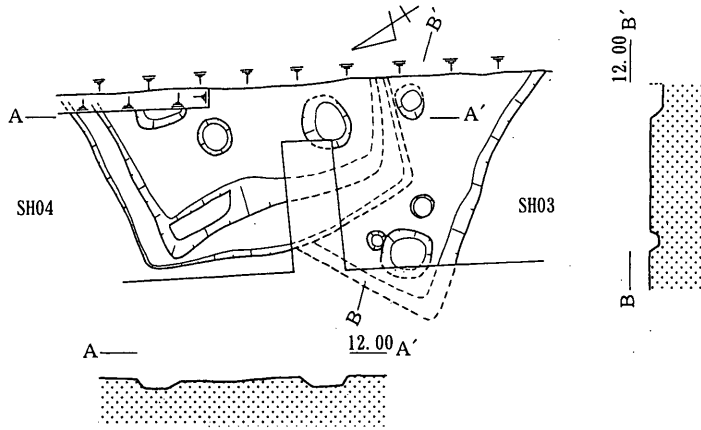
45 ~ 48 は高杯である。47・48 は立ち上がり部に段を形成し、口縁部は若干外反する。外面は段の部分を中心にハケ目があり、内面にも横方向のハケ目を施す。48 の脚部は鋭く屈曲して直線的に開く。

49 ~ 51 は小形丸底壺で、いずれも全体に指押さえが顕著である。49 は口縁部と体部の境が不明瞭で、端部付近をナデることで口縁部を形成している。50 の口縁部は直線的で端部は先細りである。体部は扁平である。51 の口縁部は外反し、体部は扁平で底部は平底に近づいている。

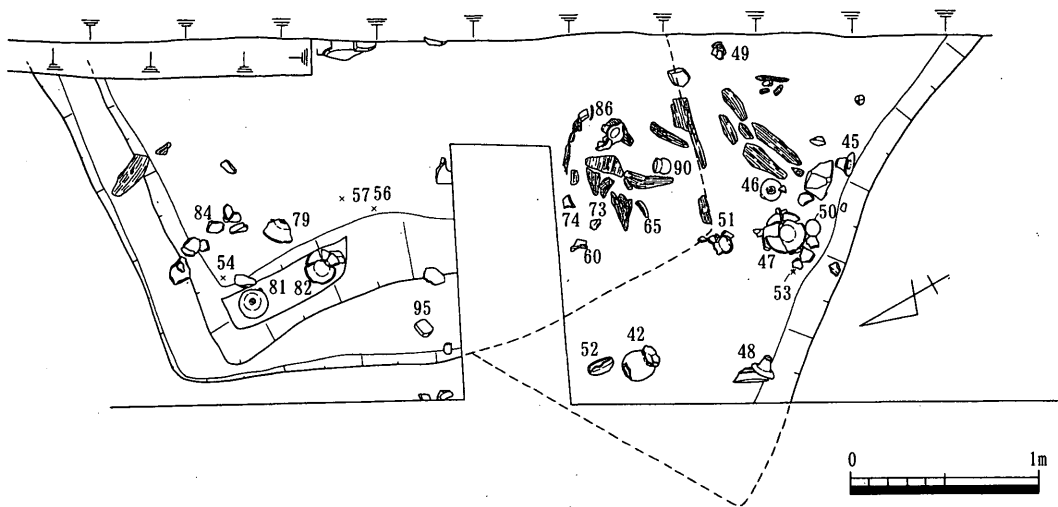
52 は鉢であるが全体に歪んでおり安定が悪い。口縁部を中心に指押さえが目立つ。体部外面には部分的にヘラ削りが認められる。底部外面は指押さえの後にナデている。53 は鉄鏝の篋被部の破片である。



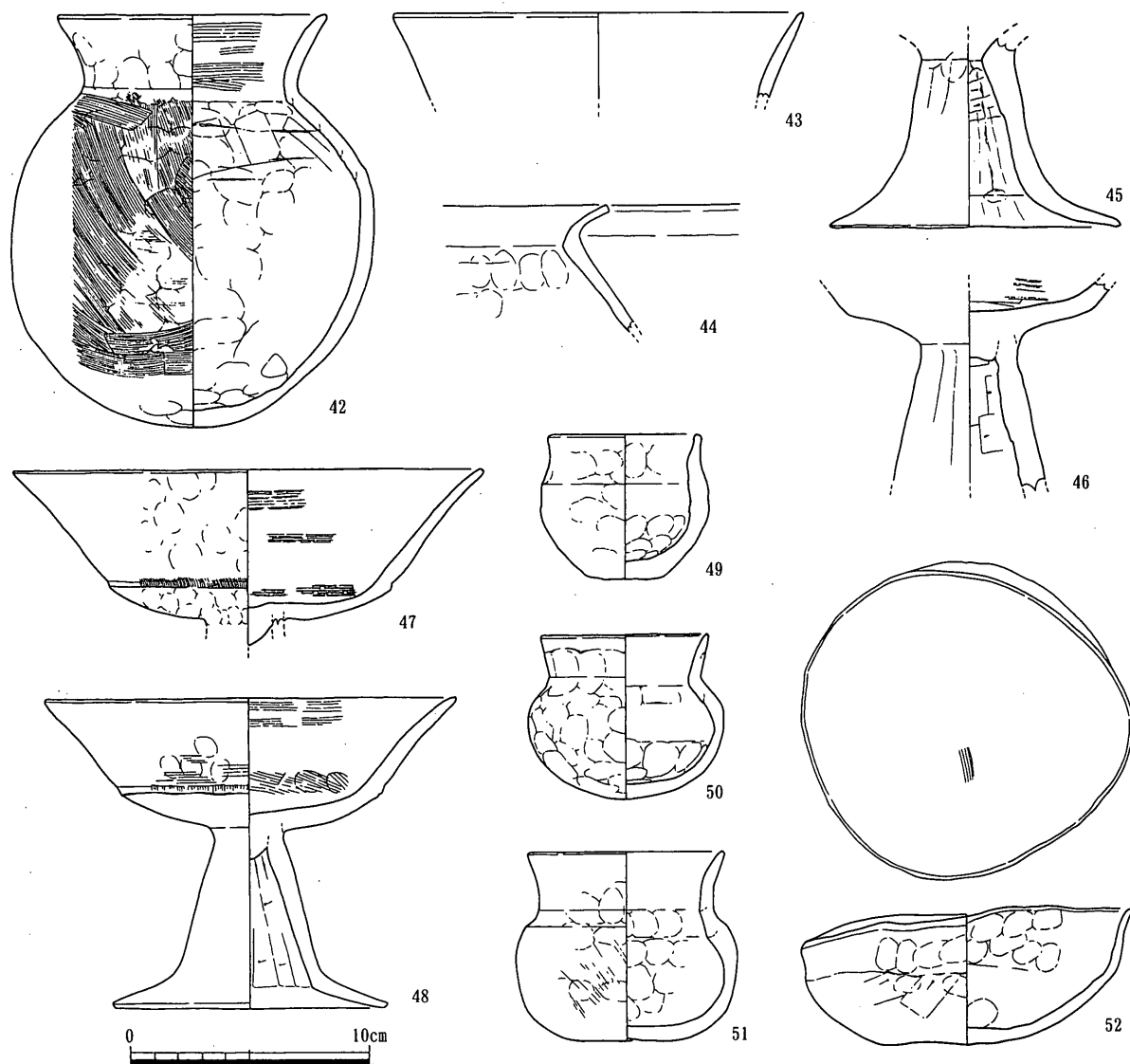
- ① 耕作土
- ② 床土, 古い耕作土
- ③ マンガン層
- ④ 灰褐色砂質土
- ⑤ 黄褐色粘質土 1~2cmの灰白色の粘土ブロックを含む
- ⑥ 黄褐色粘質土の中に1~3mm程度の砂粒が多く入る
- ⑦ 黄褐色砂混じり粘質土 1~3mm程度の砂粒を多く含む
- ⑧ にぶい黄褐色砂質土 1~4cmの灰白色の粘土ブロックを少々含む
- ⑨ 灰黄褐色砂混じり粘質土 炭化物, 遺物をごく少量含む
- ⑩ 灰黄褐色砂混じり粘質土 直径1~2mmの砂粒を多く含む
- ⑪ 褐色粘土混じり砂質土 1~4cmの灰白色の粘土ブロックを含む
- ⑫ 褐色粘土混じり砂質土 炭化物を少々含む
- ⑬ 灰黄褐色粘土混じり砂質土 1~5mm程度の砂粒を多く含む
- ⑭ 灰黄褐色粘土混じり砂質土 遺物を少々, 2~20cmの礫を少々含む
- ⑮ 灰黄褐色粘土混じり砂質土 遺物, 炭化物を多く含む
- ⑯ 褐色粘質土 遺物, 炭化物を少々含む
- ⑰ 褐色粘質土 炭化物は少々含む
- ⑱ 炭化物層 炭化物を非常に多く含む
- ⑲ にぶい黄褐色粘質土 1~4cmの灰白色粘土ブロックを含む 炭化物はごく少量含む
- ⑳ 褐色粘質土 炭化物はほとんど含まないが10~50cmの礫を含み, 遺物も多く含む
- ㉑ 暗褐色砂混じり粘質土 炭化物を少々含む
- ㉒ 灰黄褐色砂混じり粘質土
- ㉓ 黒褐色粘質土 遺物を少々含む
- ㉔ 褐灰色粘質土



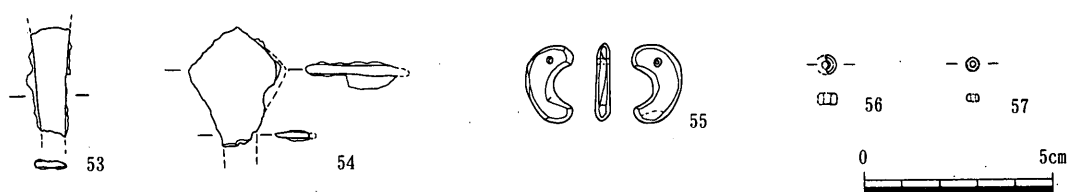
第182図 III区 第1面SH03・04平・断面図(1/80)



第183図 III区 第1面SH03・04遺物出土状況(1/40)



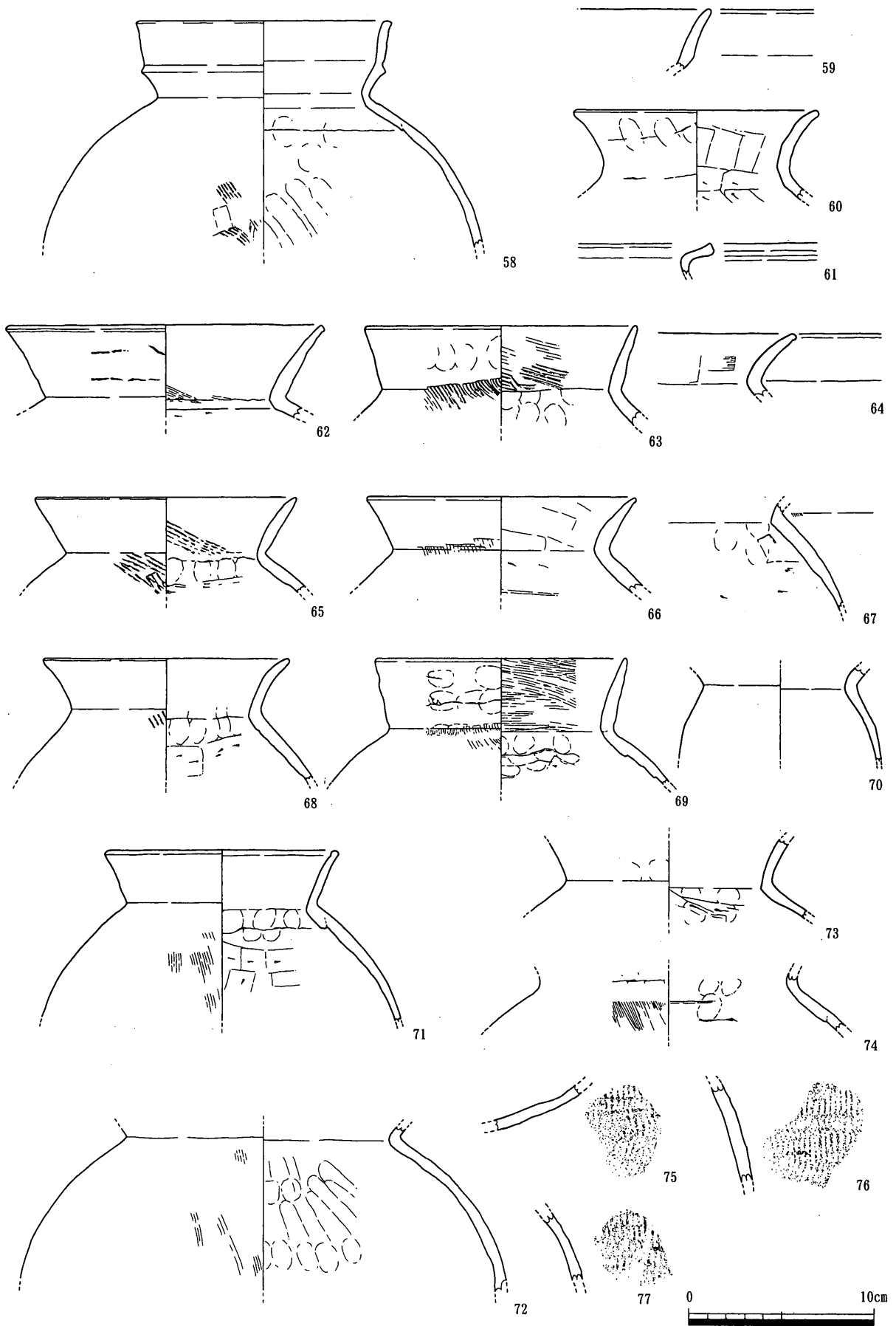
第184図 Ⅲ区 第1面SH03出土遺物(1/3)



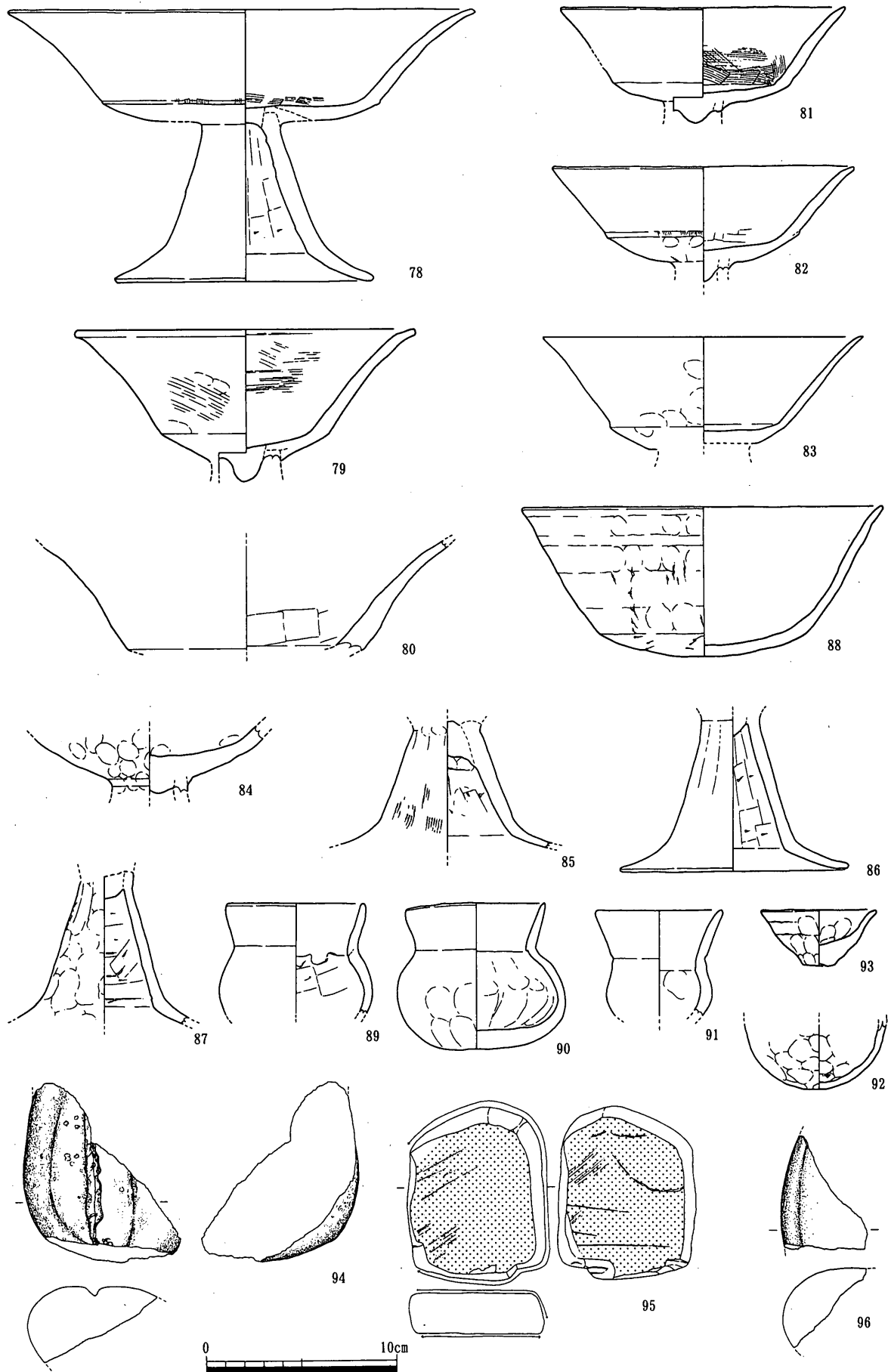
第185図 Ⅲ区 第1面SH03・04出土遺物(1/2)

SH 04 (第 182・183・185～187 図)

調査区の南半分の東壁際でSH 01に大部分が重なって検出された竪穴住居跡で、SH 03を壊しており、上部はSH 01によって削平されている。SH 03と交わる部分は炭化物が多いため平面的に確認出来なかったが、調査区の東壁の断面で確認出来ている。住居の北西隅はやや鈍角で、一辺3.0mの方形住居である。壁面に沿って幅20～30cmのテラスがあるが、北西隅部分ではテラスの幅が狭くなっている。このテラスと床面との比高差は15cmで、また検出面から床面まで35cm前後あり、床面直上には5～10cmの厚い炭化物層がある。炭化木も出土しており、SH 03と同様に焼失した住居で



第186图 Ⅲ区 第1面SH04出土遺物(1) (1/3)



第187图 Ⅲ区 第1面SH04出土遺物(2) (1/3)

ある。床面で柱穴を3基検出したが、全体を検出していないため支柱穴の復元は不明である。住居の埋土は褐色粘質土が中心である。調査区の東壁の断面の観察によると、S H 04 は埋没後に中央部分が再掘削されている。

遺物は土器とともに鉄器・石器・玉類が出土しているが、コーナー部分からの出土が多かった。

54 は鉄鏃で、平根圭頭式である。

55 は滑石製の勾玉で、大きく湾曲しており頭部と尾部が揃う。頭部には直径 1.5 mm の穿孔がある。

56 はガラス製、57 は滑石製で扁平である。

58～60 は壺である。58 の口縁部は二重口縁であるが、途中の屈曲の度合いは鈍い。体部は上半のみであるが丸みをもつ。外面はハケ目の後にナデしており、内面は指で器壁を抉るように強くナデている。60 の口縁部は強く外反する。

61～74 は甕である。62 の口縁部は外面を強くナデしており、端部は僅かに外側に肥厚する。63 の口縁部は直線的に立ち上がり、内・外面にハケ目を施す。65 の口縁部屈曲部の外面は鋭いが、内面は丸みを帯びている。66 の口縁部端部は先細りになる。68 の口縁部は上部で外反する。体部上半の張りは弱い。69 の口縁部は直線的に立ち上がり、内面には全体にハケ目を施している。体部内面には強くヘラ削りを行い、このヘラ削りの工具の角による段が見られる。71 は口縁部端部内面を強くナデている。体部上部には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。

75～77 は軟質の韓式系土器の甕の体部の破片で、いずれも胎土に特徴的な赤色粒を多く含んでおり、内面を丁寧にナデている。75 の体部外面には 1.8 mm × 7 mm の長方形の格子目タタキが施された後にナデている。ナデによりタタキが潰れて幅広になったり不明瞭な部分が多い。タタキは3方向に分かれるが単位は破片のため不明である。底部に近い部分の破片である。76 の外面には 1.8 mm × 9 mm の長方形の格子目タタキが3方向に認められる。体部中央付近の破片で、胎土には赤色粒のほかに長石・石英の粗い粒子が目立つ。77 の外面には 1.5 mm × 6 mm の長方形の格子目タタキが2方向に認められる。体部中央付近の破片である。

78～87 は高杯である。78 は口径 24.0cm の大形の高杯である。口縁部は緩やかに外反しており、立ち上がり部外面に段がある。脚部は下半で屈曲して開く。79 は口縁部端部を強くナデしており、杯部は深い作りである。81・83 は立ち上がり部の稜は不明瞭である。86 の脚部は鋭く屈曲しており、内面全体にヘラ削りを施している。

88 は大形の鉢で、高杯の杯部に似ている。外面は全体に指押さえを行った後にナデている。底部外面にはヘラ削りを施している。

89～92 は小形丸底壺である。90 の体部は扁平で平底に近い。口縁部はやや歪んでいる。91 は体部最大径より口径のほうが上回っている。

93 はミニチュア土器で全体に指押さえが顕著である。底部は厚く若干の上げ底になっている。

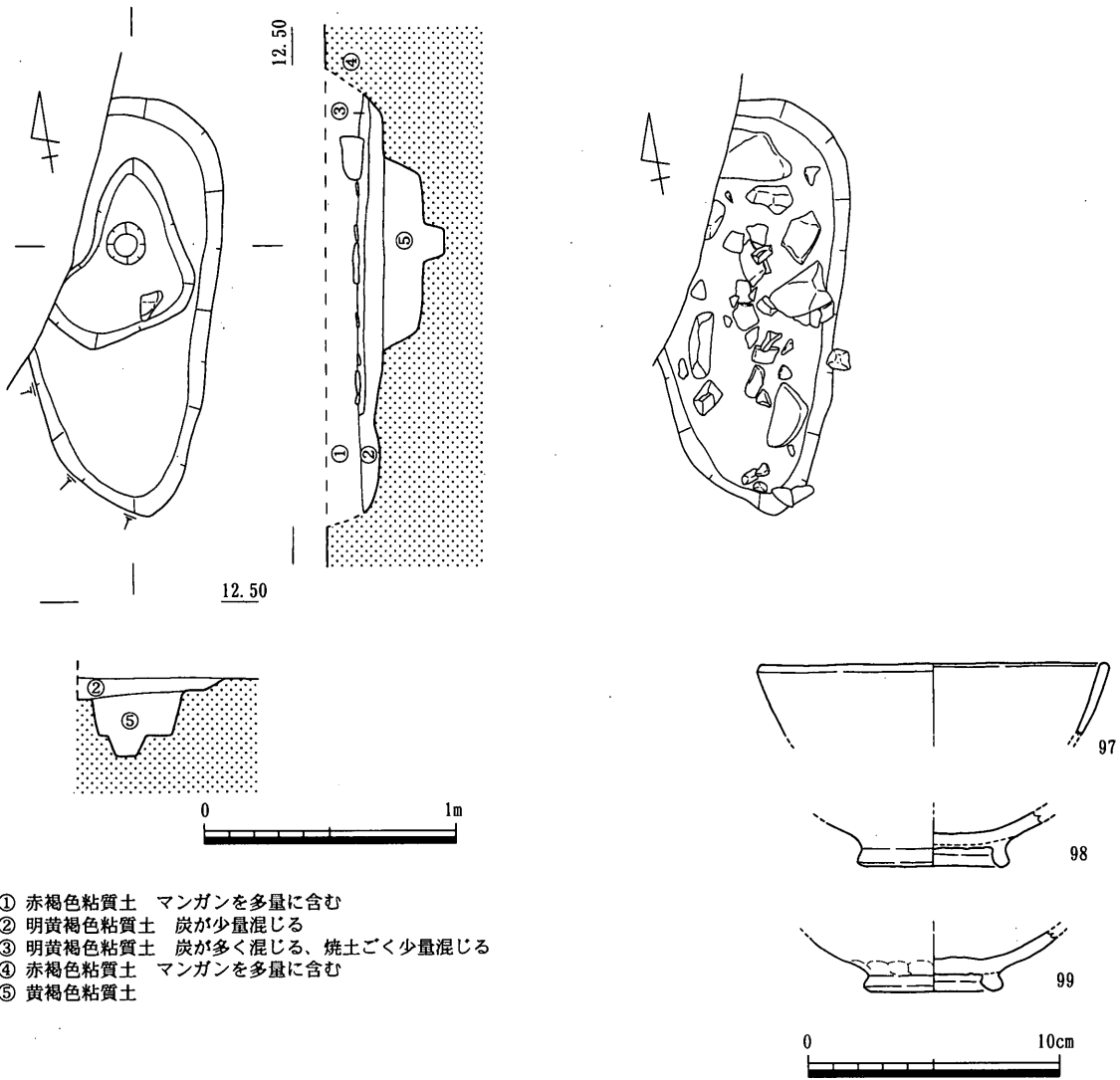
94 は中央部に幅 5～6 mm の筋状の窪みが認められる。二次焼成を受けており、玉砥石と考えられる。

95 は3面使用している砥石で、擦痕も少々認められる。96 は敲石の破片である。

(3) 中世の遺構・遺物

S K 01 (第 188 図)

調査区中央の西壁際で検出した土坑である。平面形は長楕円形で長径 1.6 m、短径は検出した最大部



- ① 赤褐色粘質土 マンガンを多量に含む
- ② 明黄褐色粘質土 炭が少量混じる
- ③ 明黄褐色粘質土 炭が多く混じる、焼土ごく少量混じる
- ④ 赤褐色粘質土 マンガンを多量に含む
- ⑤ 黄褐色粘質土

第188図 Ⅲ区 第1面SK01平・断面図(1/30)出土遺物(1/3)

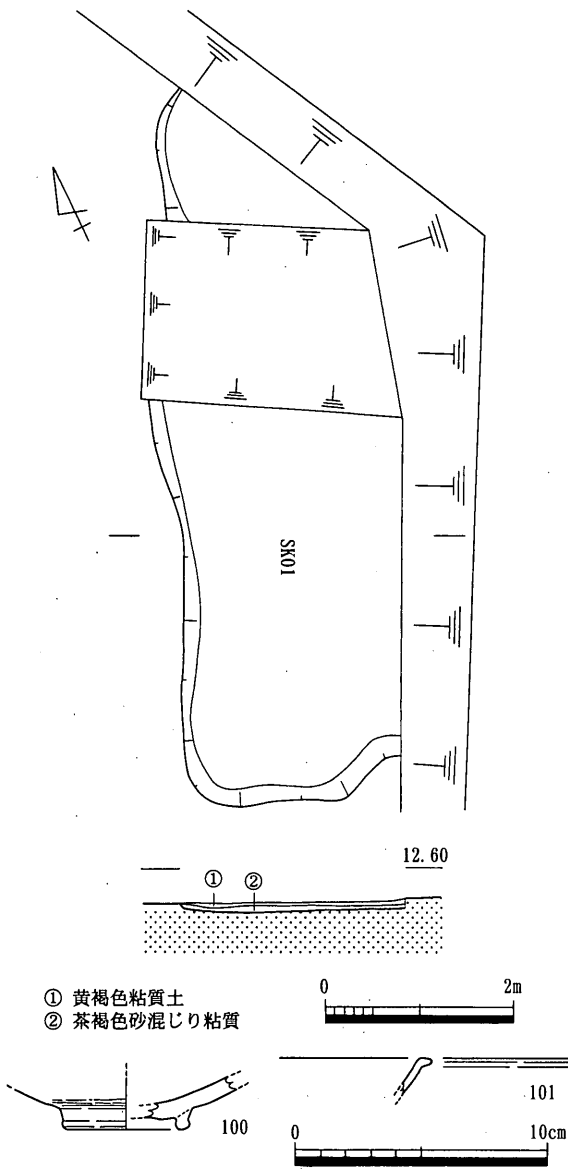
分で0.72 mである。土坑の底部には柱穴状の不整形な掘り込みがある。この土坑は上面を平面的に検出できなかったが、掘り込み面から10cmほど下で10～30cm大の礫が出土した。これらの礫を検出した面には炭化物が広がっており焼土も部分的に認められる。また礫も大部分は被熱しており、この部分で土器が少量出土している。

97は黒色土器碗で、内・外面にカーボンが付着させている。98・99ともに底部に外反する高台を貼り付けている。

S X 01 (第189図)

調査区の北東隅で検出した不整形の落ち込み状の遺構で、部分的に攪乱を受けている。深さは10cm程度で底面は平坦に近い。黄褐色粘質土と茶褐色砂混じり粘質土が堆積していた。

埋土中から遺物が少量出土している。100は須恵器碗で底部にやや外開きの断面方形の高台を貼り付けている。体部外面には回転ヘラミガキが施されている。101は白磁碗で、口縁部端部を横につまみ出している。



第189図 Ⅲ区 第1面SX01平・断面図(1/80)
出土遺物(1/3)

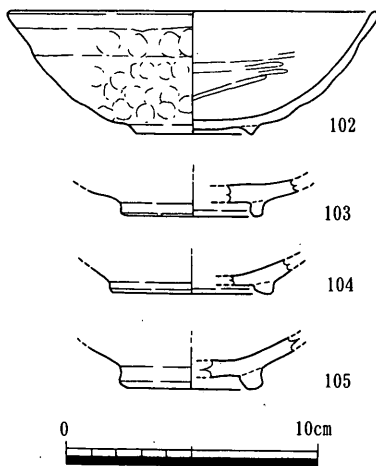
(4) 包含層出土遺物(第190図)

機械掘削時と遺構検出のための精査時に出土した遺構外からの出土遺物である。

102は瓦器椀で底部には断面三角形の小さな高台を貼り付けている。体部外面には全体に指押さえが顕著で、内面にはヘラミガキが少々残る。和泉型の瓦器である。103～105は黒色土器椀で、103・104は両面に、105は内面にカーボンの付着が認められる。

(5) 小結

Ⅲ区の古墳時代以降の遺構・遺物は少ないが、古墳時代中期の竪穴住居跡を検出したことが注目される。竪穴住居跡からは須恵器自体は出土していないが須恵器出現期の土師器に加えて、細片ではあるが軟質の韓式系土器が出土している。県内ではまだ少ない須恵器出現期の竪穴住居跡や土器群の良好な資料となる。また湊川を挟んで成重遺跡の西側に位置する大内町の原間6号墳をはじめとする一連の中期古墳である原間古墳群との関係も注目される。原間6号墳から出土した三累環頭大刀や成重遺跡のⅢ区竪穴住居跡から出土した韓式系土器など朝鮮半島との関係がある遺物が出土している。5世紀前半代の白鳥町～大内町にかけての地域と渡来人との関わりが注目される。



第190図 Ⅲ区 第1面包含層出土遺物(1/3)

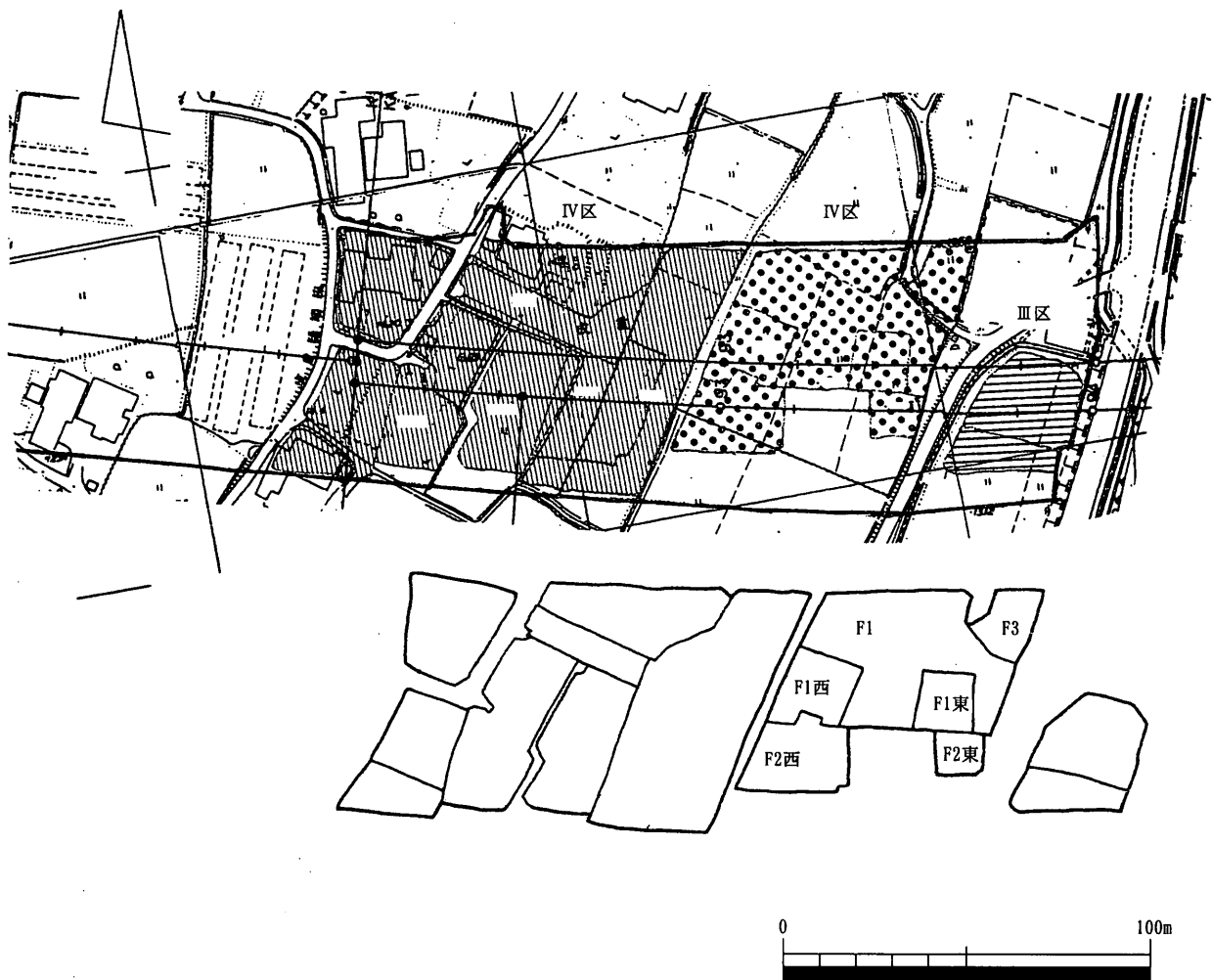
第5節 IV区の調査

(1) 調査区の概要

IV区は調査対象地の西部に位置する。地形的にはV区の自然堤防からⅢ区のある東側および北側に向かってごくゆるく傾斜する。遺構面は2面確認した。ここでは第1遺構面に掘削された古墳時代～中世の遺構を報告する。第1遺構面はⅢ区と同様に旧耕作土の下にある灰褐色砂質土層（マンガン沈着）の上面である。包含層は第1面ベース土と類似する層が部分的に見られるものの遺物はほとんど含んでいない。

主要な検出遺構は古墳時代の竪穴住居6基（うち3基は布留Ⅳ式併行期）、古代の掘立柱建物3棟・焼成土坑1基、中世の掘立柱建物13棟・土坑墓11基などである。

出土遺物は遺構内、外あわせても第1遺構面に伴う時期のものは極めて乏しい。こうした状況はIV区だけでなく、V区の旧G1、2区でも変わらない。このため遺構の時期比定については埋土から判断したものが多。埋土と時期の対応は次のように考え、IV、V区（うち旧G1、2区）の時期比定を行った。



第191図 IV区 新旧調査区対照表(1/2000)



第192図 IV区 第I面遺構配置図(1/400)

古代：暗黄褐色（砂混）粘質土・（明）茶褐色（砂混）粘質土〈中世の黒褐色粘質土より赤味が強い。〉

中世：黒褐色（砂混）粘質土（茶味がかかる）・（暗）灰褐色砂混粘質土（砂質土）

ただ古墳時代の遺構でも黄褐色系の埋土は見られ、古代でも黒褐色系の埋土をもつ遺構がわずかに存在する。

(2) 古墳時代の遺構・遺物

竪穴住居

SH 01（第 193 図）

旧 F 1 区中央西部で検出した竪穴住居である。平面形はほぼ正方形で、規模は長径 4.38 m、短径 3.9 m、深さ 36 cm を測る。壁沿いの四周には地山削り出しのベッド状遺構が巡る。上部の平坦面の幅は概ね 40～50 cm を測るが、南部では 20 cm 程度と狭まっている。この部分は他より床面への傾斜が緩やかになっているため旧状を留めていない可能性もある。主軸方向は N-37°-E である。主柱穴は 4 本がベッド状遺構に接するコーナー一部で、別の 4 本がこれより内側で検出された。それぞれの深さ、底場レベルはほぼ同じである。

出土遺物は土師器小型丸底壺（1、2）、甕（3、4）、高杯（5～7）、弥生土器甕（8、9）がある。1 は直線的に外方に延びる口縁部をもつ。2 は底部が平底に近い。3、4 は口縁端部が外反する。5 は口縁端部が外方に小さく反る。6 は口縁部が直立気味で深い形態である。口縁部と体部の境界は小さく突出し、稜線をもつ。7 はベッド状遺構の上面ほぼ直上から出土した脚部である。竪穴住居の時期は 6 から布留Ⅳ式併行期と考えられる。

SH 02（第 194 図）

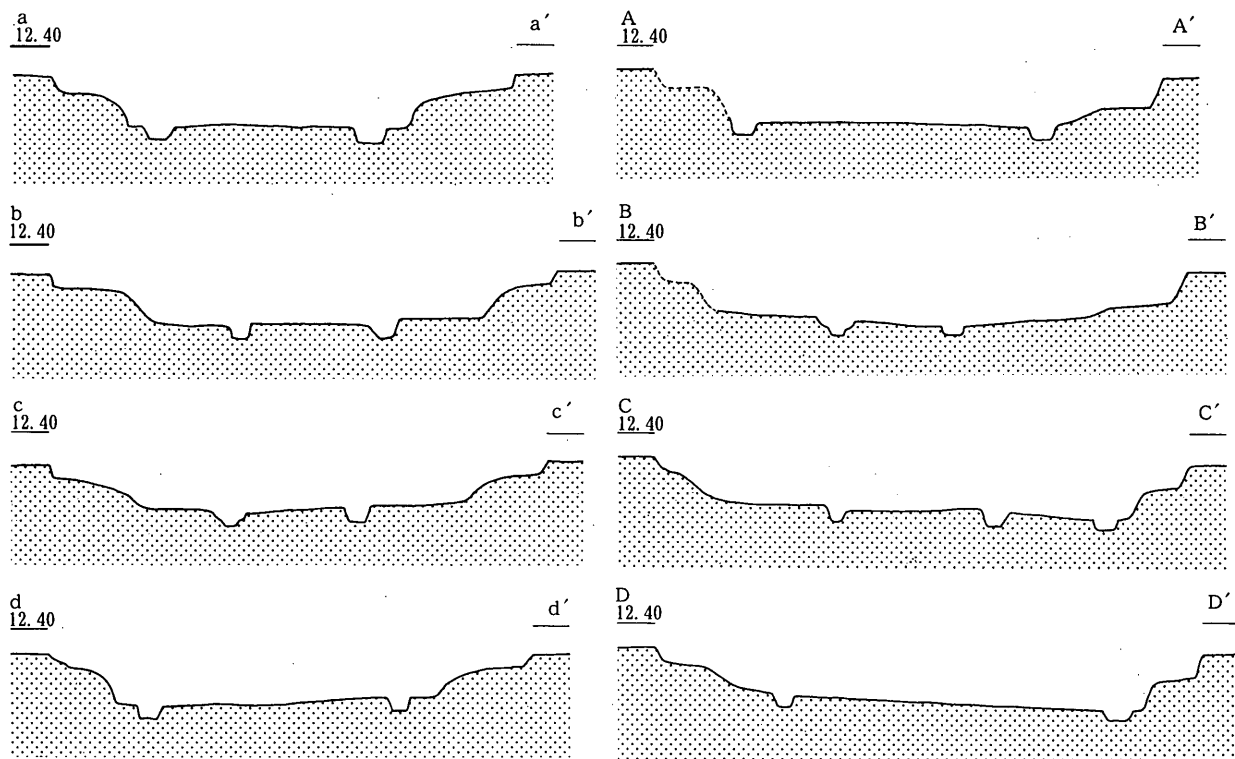
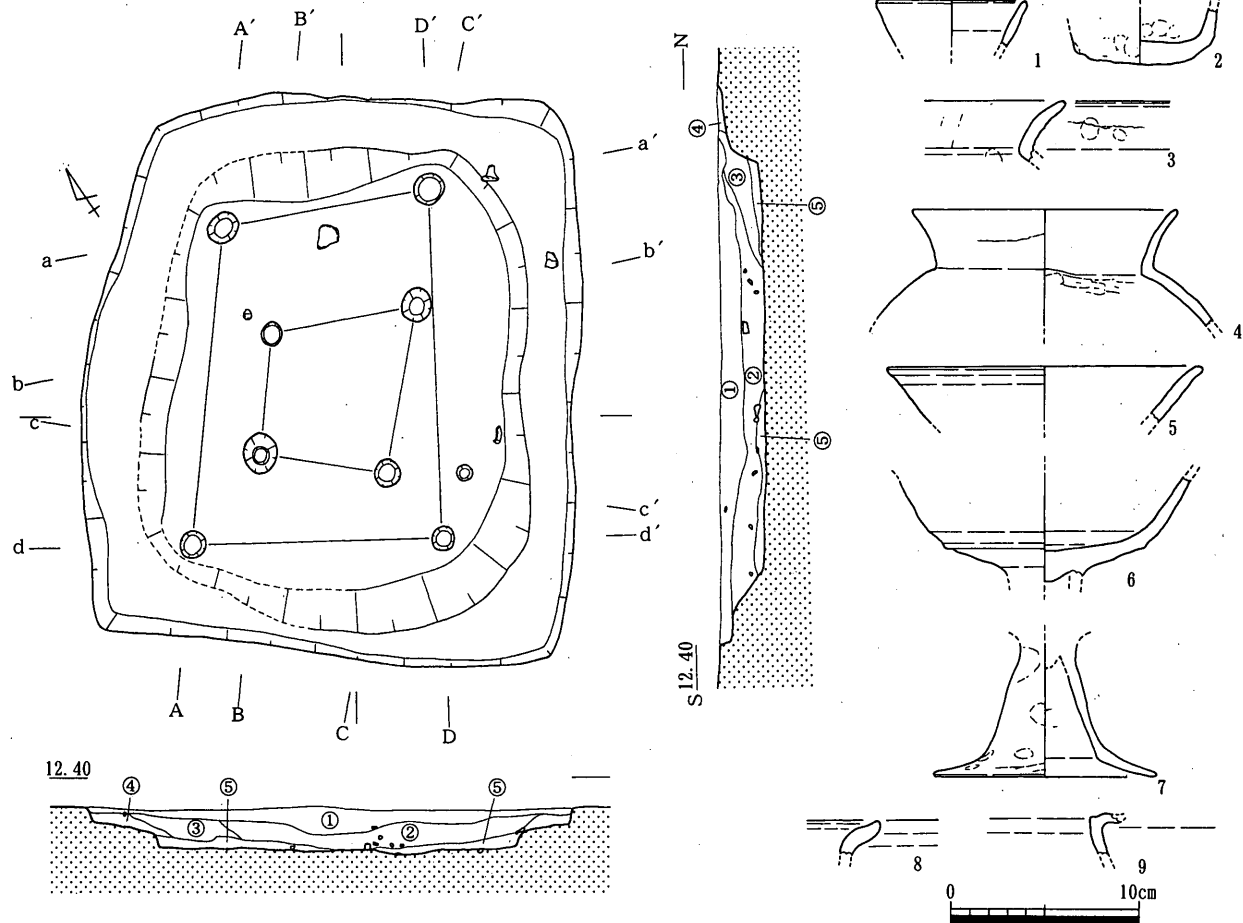
旧 F 1 区中央南部で検出した竪穴住居である。平面形は西側に突出するいびつな方形で、SK 04 を切る。規模は長径 3.78 m、短径 3.3 m を測る。遺存状況が悪く、深さは 6 cm しかない。このため埋土も単層である。主軸方向は N-34°-E である。主柱穴は南部の 1 穴を欠くが、本来は 6 基で構成されると考えられる。出土遺物は土師器鉢（10、11）、弥生土器甕（12、13）がある。10、11 は口縁部が強く外反し、布留式併行期と考えられる。

竪穴住居の時期は 10 より布留式併行期と考えられる。

SH 03（第 195 図）

旧 F 1 区北西部で検出した竪穴住居である。平面形は西側でやや膨らむ長方形である。SH 04 を切り、SK 07、08 に切られる。規模は長径 5.388 m、短径 3.9 m、深さ 24 cm を測る。主軸方向は N-55°-W である。主柱穴は 5 穴で構成されると考えるが、北西隅の 1 穴も含むかもしれない。その場合、SK 07 に切られる位置にもう 1 穴存在したと考えられる。

出土遺物は土師器甕（14）、高杯（15）弥生土器高杯（16）がある。14 は床面直上から出土した。短い直立する口縁部をもち、外面全体、口縁部内面にハケ目を、体部内面にヘラケズリを施す。15 は口縁部が長く直立気味の形態であり、端部が外方に延びる。内外面に板ナデを施す。布留Ⅳ式併行期と考えられる。竪穴住居の時期は 15 より布留Ⅳ式併行期と考えられる。

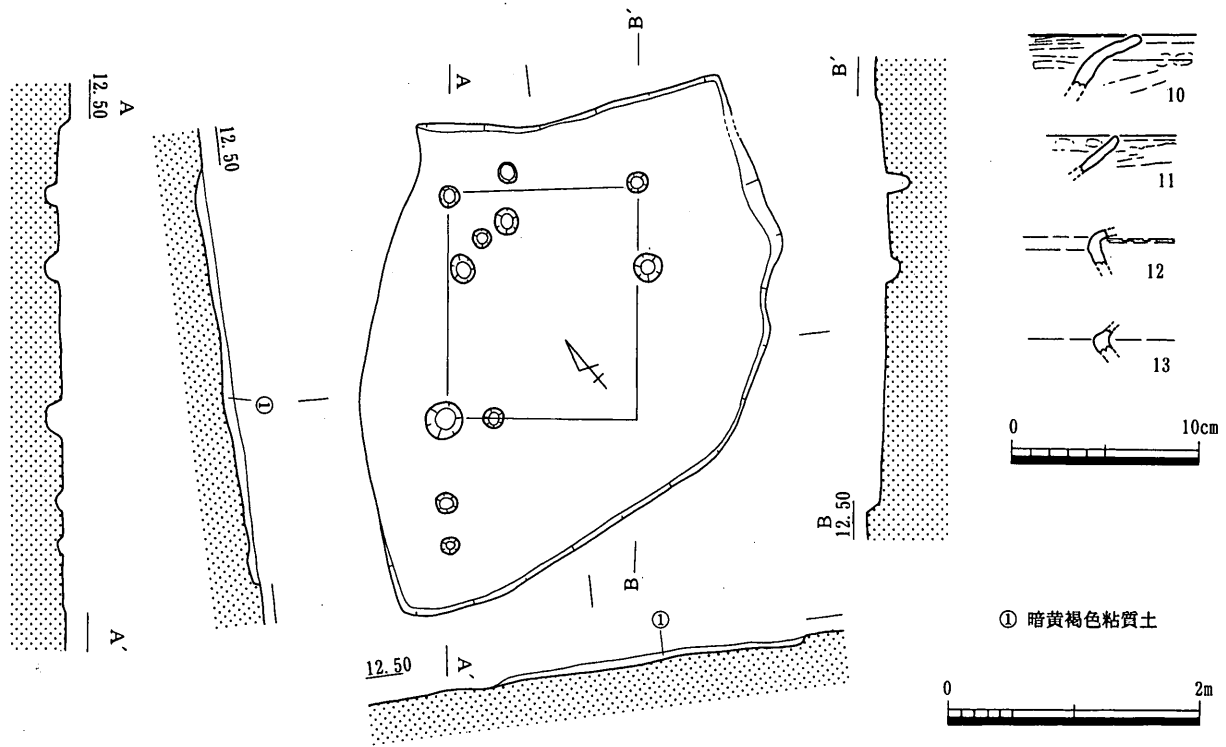


① 暗黄褐色砂利混粘質土 黒褐色粘質土をブロック状に含む
 ② 黒褐色砂利混粘質土
 ③ 黒褐色砂利混粘質土 ②より暗く工器片を含む

④ 明黄褐色粘質土
 ⑤ 茶褐色砂利混粘質土



第193図 IV区 第1面SH01平・断面図(1/60), 出土遺物(1/4)



第194図 IV区 第1面SH02平・断面図(1/60), 出土遺物(1/4)

SH 04 (第 196 図)

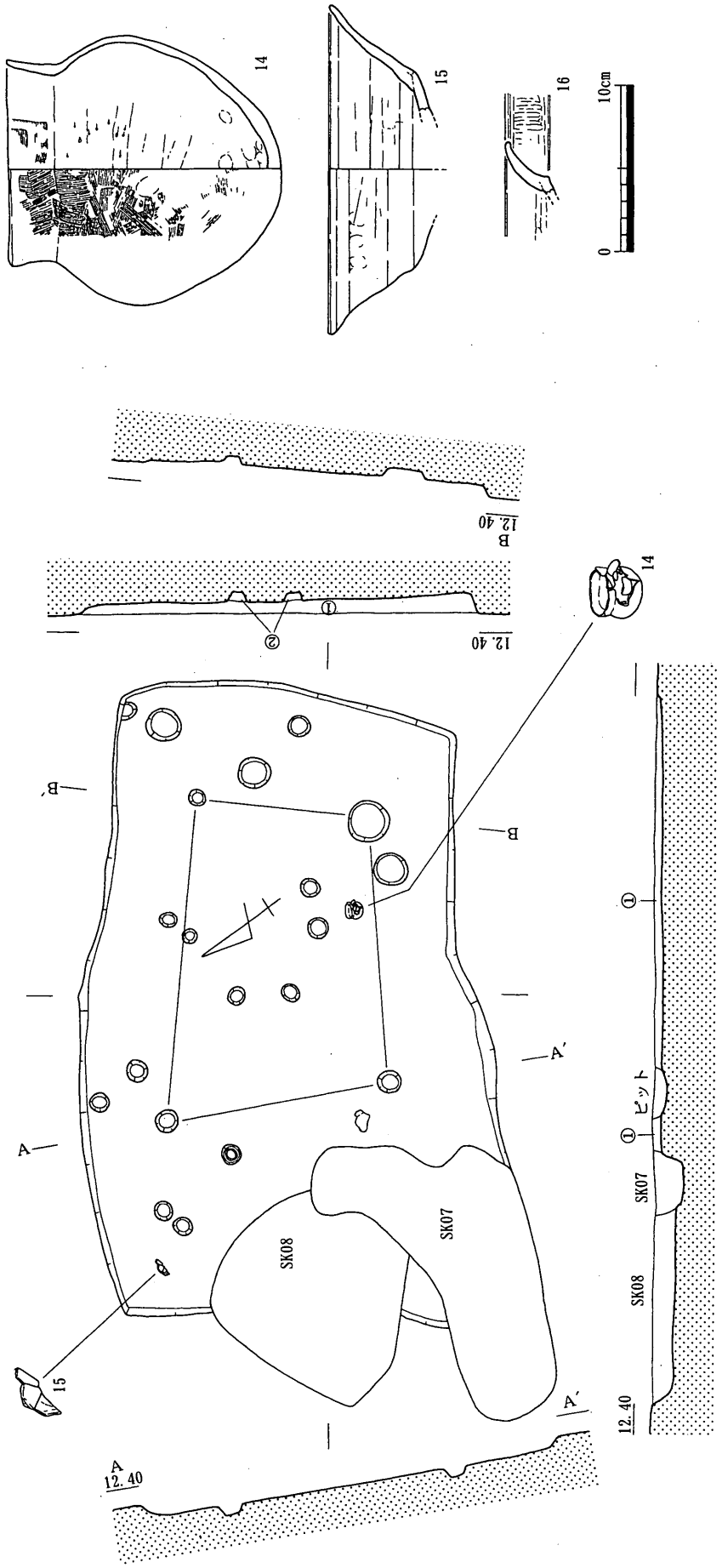
旧F 1区北西部で検出した竪穴住居である。平面形は西側でややいびつな方形である。SH 03、SK 07、08に切られる。規模は長径 3.84 m、短径 3.36 m、深さ 24 cmを測る。主軸方向はN-22°-Wである。主柱穴はコーナー部に位置する4穴からなると考えられる。北西部では床面直上で小型丸底壺が2点(17、18)接して口縁部を上位に向けて出土した。その他の出土遺物は土師器甕(19)がある。17、18は直立する短い口縁部をもち、頸部外面付近にハケ目、指オサエが見られる。口縁部内面には横ハケを施す。布留IV式併行期ごろと考えられる。

SH 05 (第 197 図)

旧F 1区からF 2区(西)にかけての位置で検出した竪穴住居である。平面形は南側がやや狭い正方形である。規模は長径 3.78 m、短径 3.78 mを測る。深さは 6 cmと遺存状況は悪い。主軸方向はN-55°-Wである。主柱穴は4穴からなると考えられる。出土遺物は弥生土器甕(20)、サヌカイト製打製石庖丁の破片(21)がある。21は床面直上で出土し、側縁中央部に粗い調整による抉りをもつ。刃部は右図側でのみ細部調整が施され、片刃の可能性もある。竪穴住居の時期は検出遺構面、周辺遺構の時期、IV区での出土遺物から布留式併行期と判断される。21については破損品であるため弥生時代の遺物の名残と考える。

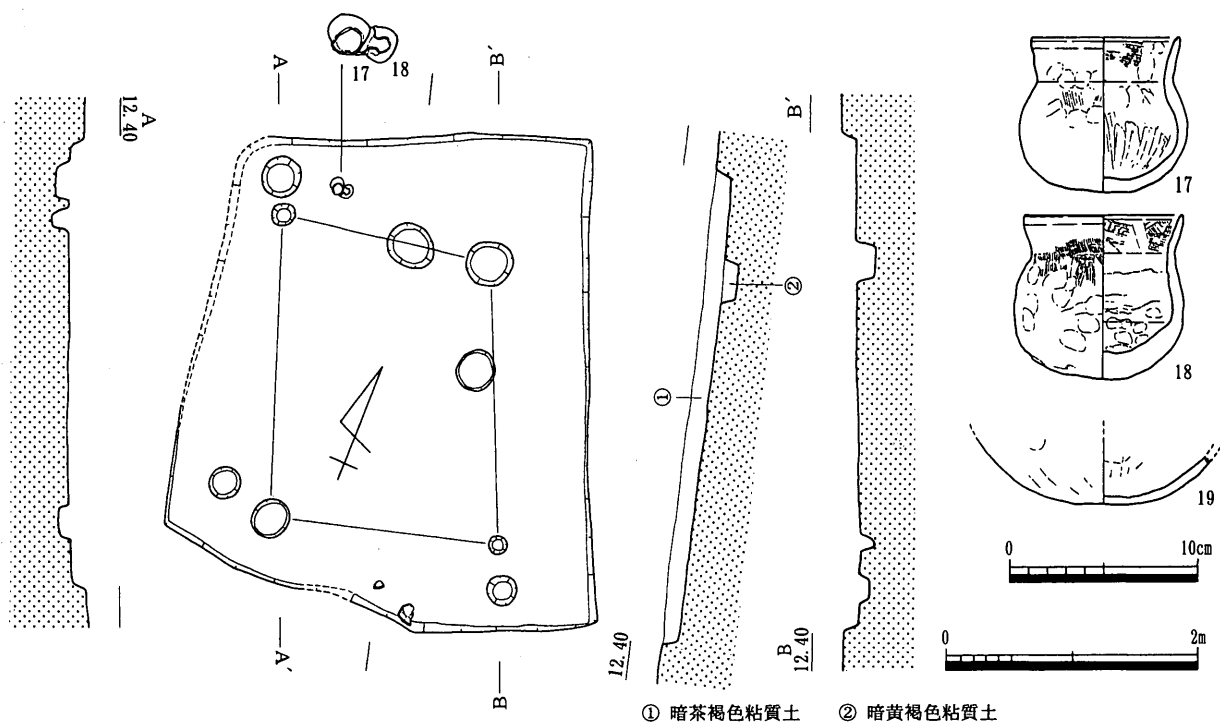
SH 06 (第 198 図)

旧F 1区中央部で検出した竪穴住居である。平面形は東側で狭まるいびつな楕円形である。SK 39に切られる。規模は長径 6.84 m、短径 5.4 mを測る。深さは 10 cmであり、遺存状況は悪い。床面では東側、北西隅で方形の土坑(SK 01、02)があり、北側、東側の壁沿いで壁溝状の小溝がある。規模はSK 01が約 90 cm、SK 02が 1.05 m以上であり、深さは共に 6 cmを測る。土坑の埋土は

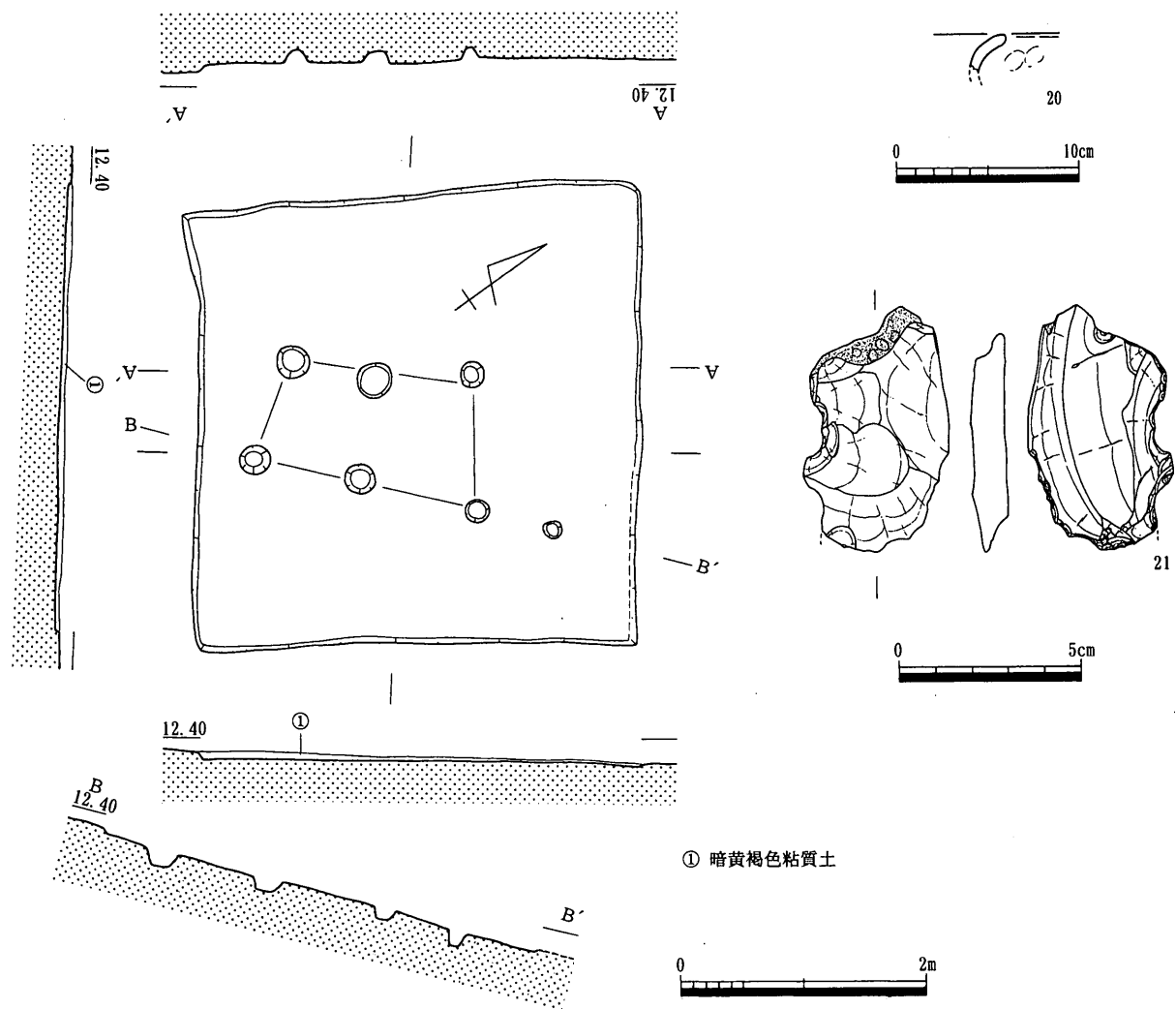


- ① 茶褐色砂質土
- ② 暗茶褐色砂質土

第195図 IV区 第1面SH03平・断面図(1/60), 出土遺物(1/4), 遺物出土状況拡大図(1/10)



第196图 IV区 第1面SH04平·断面图(1/60), 出土遺物(1/4), 遺物出土状况扩大图(1/10)



第197图 IV区 第1面SH05平·断面图(1/60), 出土遺物(1/4, 1/2)

黄褐色粘質土の単層である。主柱穴は6穴からなると考えられる。出土遺物は弥生土器甕(22、24)、壺(23)がある。23は外面に3条の刻目貼付突帯をもち、口縁端部に波状文を施す。S P 01から出土しており、弥生中期と考えられる。遺構面の時期からこれらは混入と判断されること、付近の竪穴住居の時期、IV区での出土遺物からSH06の時期は布留式併行期と考えられる。

土坑

S K 01 (第199図)

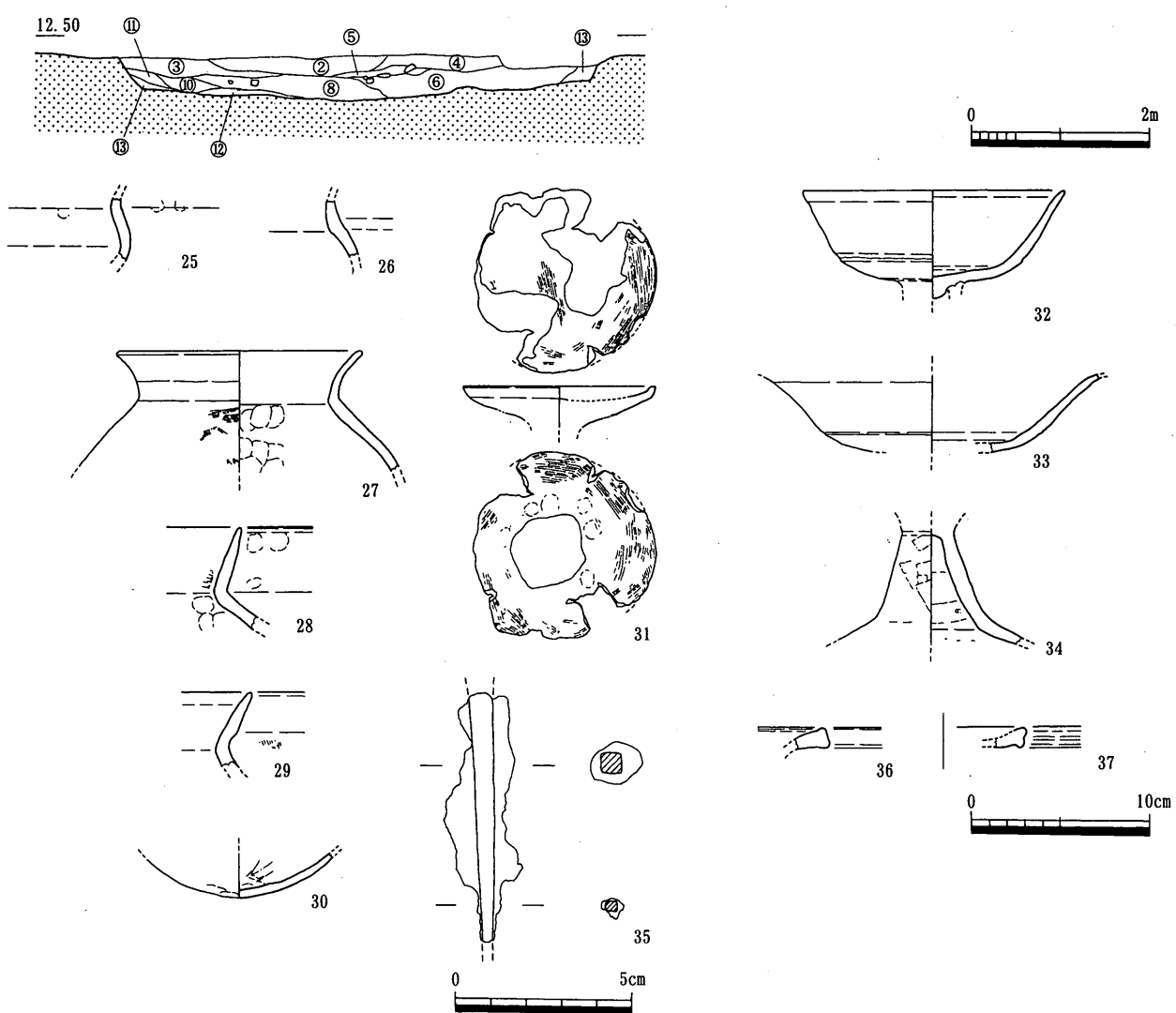
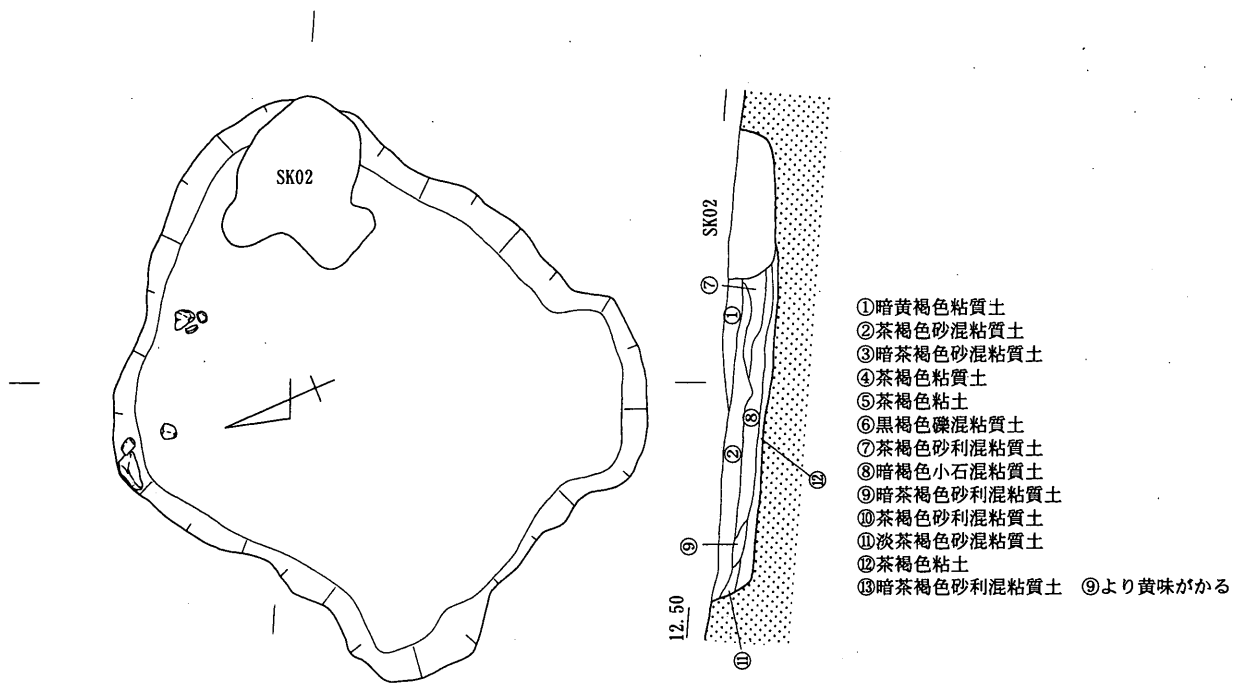
旧F1区南東部で検出した土坑である。平面形はややいびつな方形であり、西側と南側に張り出す。断面形は逆台形を呈する。床面はほぼ平坦であるが、中央部へむかって下がる。S K 02、03に切られる。規模は長径5.68 m、短径4.64 m、深さ48 cmを測る。主軸方向はN-62°-Eである。埋土には拳大の礫を多く含む。よって地山ブロックは見られないが、人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物は28 lコンテナ1箱弱あるが、約半分は第2遺構面に伴う弥生土器である。これらも埋め戻し土に混じっていたと考えられる。凶化した遺物として土師器小型丸底壺(25、26)、甕(27~30)、高杯(31~34)、鉄釘(35)、弥生土器壺(36、37)がある。27は短く外反する口縁部をもつ。体部上位外面にはハケ目を施す。28、29は直立気味で直線的な口縁部をもつ。31は扁平な杯部をもち、内外面にハケ目を施す。32、33は口縁部、体部境界に丸味をもつ。S H 01、03出土高杯で見られる稜線がなく、後出的である。布留IV式併行期と考えられる。34は外面に板ナデ、内面にヘラケズリを施す。35は断面が方形であるが、先端部付近では薄い板状になる。36、37は口縁端部に凹線文を施す。32、33より土坑の時期は布留IV式併行期と考えられる。

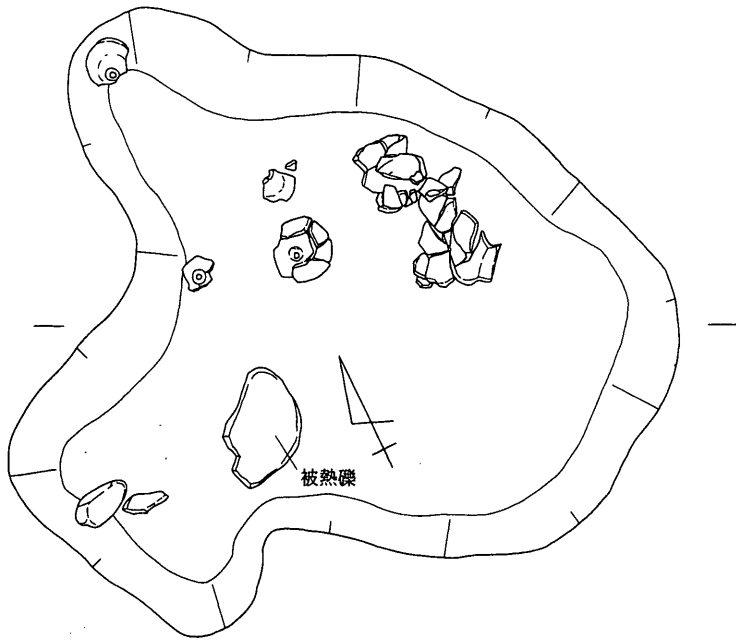
S K 02 (第200図)

旧F1区南東部で検出した土坑である。平面形はいびつな楕円形であり、西側に方形に張り出す。断面形は逆台形を呈するが、床面は西側に下る。S K 01を切り、S K 03に切られる。規模は長径83 cm、短径81 cm、深さ25 cmを測る。埋土は5層に分けられるが、4層は焼土である。これが土坑内での焼成に伴うのか、焼土の廃棄なのかは現場で確認できていないため不明である。仮に土坑内で焼成が行われたとすれば、残りの良い土器も出土しているため土器焼成遺構である可能性もある。だが出土土器に2次焼成によるヒビ、歪み、器表面の剥落などは認められない。また平面図に記載した大形の土器片はレベルが11、65~11、75 mにあり、北西側でかたまって出土した。これは4層のレベルに一致する。よって大形土器片の廃棄に伴い、焼土も廃棄された可能性が高い。そのように見れば表裏とも被熱により赤化、剥落が見られる礫(出土レベルは11.74 m)もこの廃棄に伴うものであろう。

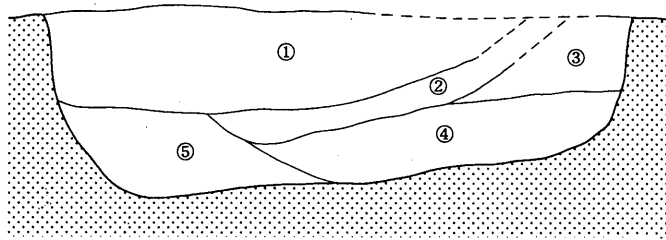
出土遺物には土師器甕(38~41)、高杯(42~45)、鉢(46)がある。38、39は口縁部が直立気味で、肩が張る器形である。39は口縁部が短く、体部外面に板ナデ、内面に指ナデを施す。40は直立する広い口縁部をもつ。42は口縁部から体部にかけて外面にほとんど屈曲が見られないなだらかな器形をもつ。



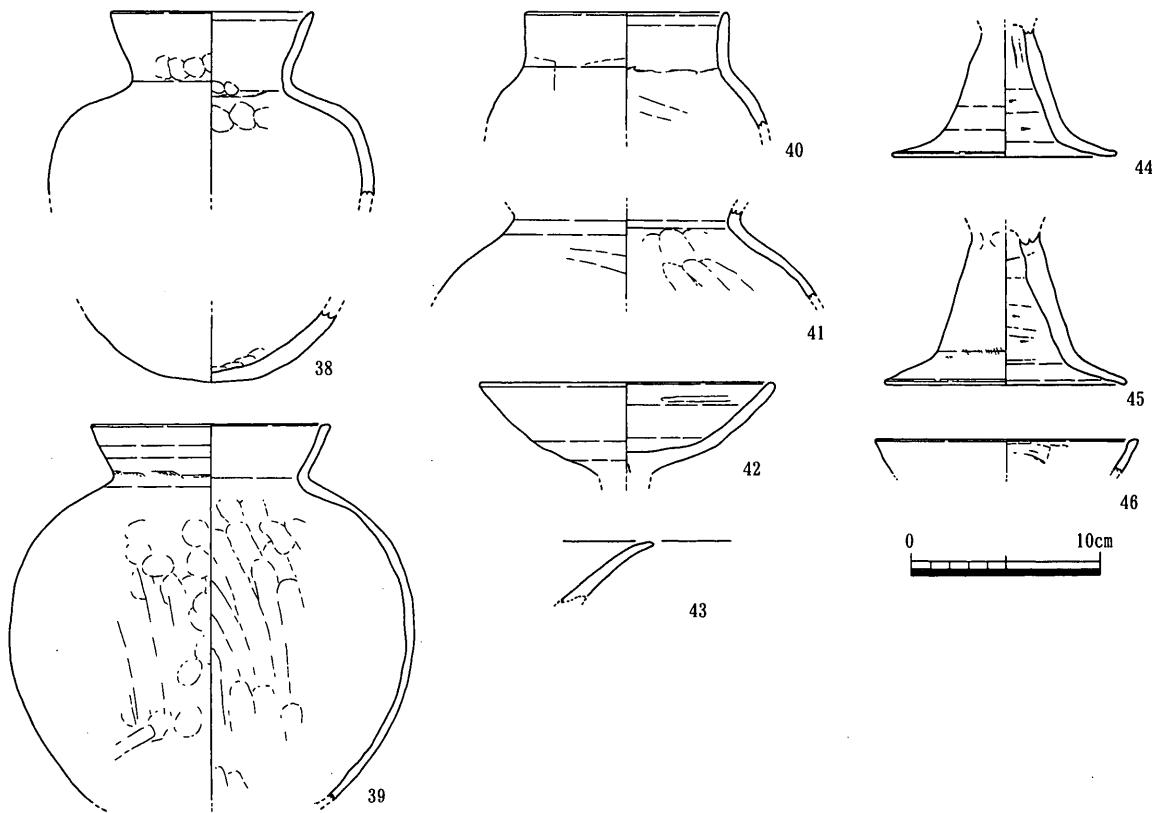
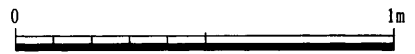
第199図 IV区 第1面SK01平・断面図(1/80), 出土遺物(1/4, 1/2)



12.20



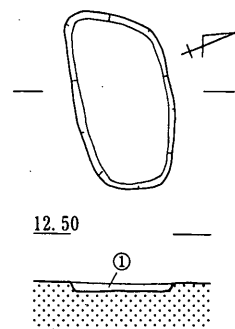
- ① 暗黄褐色粘質土 少量の土器片を含む
- ② 暗橙褐色砂利混粘質土
- ③ 橙褐色粘質土
- ④ 暗橙褐色粘質土 弱く被熟し赤味を帯びる
- ⑤ 暗褐色砂利混粘質土



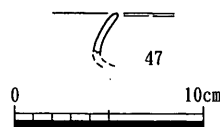
第200図 IV区 第1面SK02平・断面図(1/20), 出土遺物(1/4)

S K 03 (第 201 図)

旧 F 1 区北東部で検出した土坑である。平面形は整った長方形であり、断面形は浅い皿状を呈する。S K 01、02 を切る。規模は長径 96 c m、短径 52 c m、深さ 4 c m を測る。出土遺物には土師器小型丸底壺 (47) がある。47 は口縁端部が外反気味である。47 と切り合いより土坑の時期は布留 IV 式併行期と考えられる。



① 黄褐色粘質土 (茶味がかる)



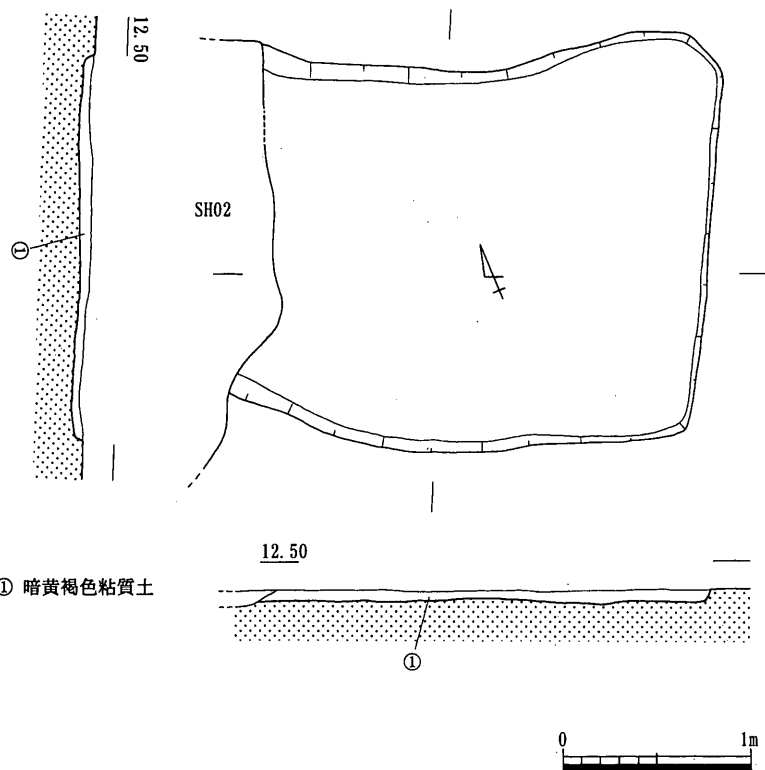
第201図 IV区第1面
SK03平・断面図(1/40),
出土遺物(1/4)

S K 04 (第 202 図)

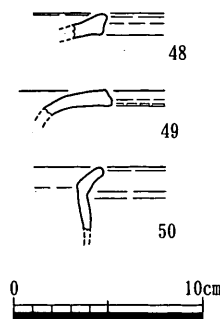
旧 F 1 区中央南部で検出した土坑である。平面形はややいびつな長方形であり、断面形は壁が直に落ち、床面はほぼ平坦である。S H 02 に切られる。規模は長径 2.48 m 以上、短径 2.12 m、深さ 8 c m を測る。主軸方向は N - 27° - W である。出土遺物は弥生土器壺 (48、49)、甕 (50) がある。土坑の時期は遺構面と切り合いから布留式併行期と考えられる。

S K 05 (第 203 図)

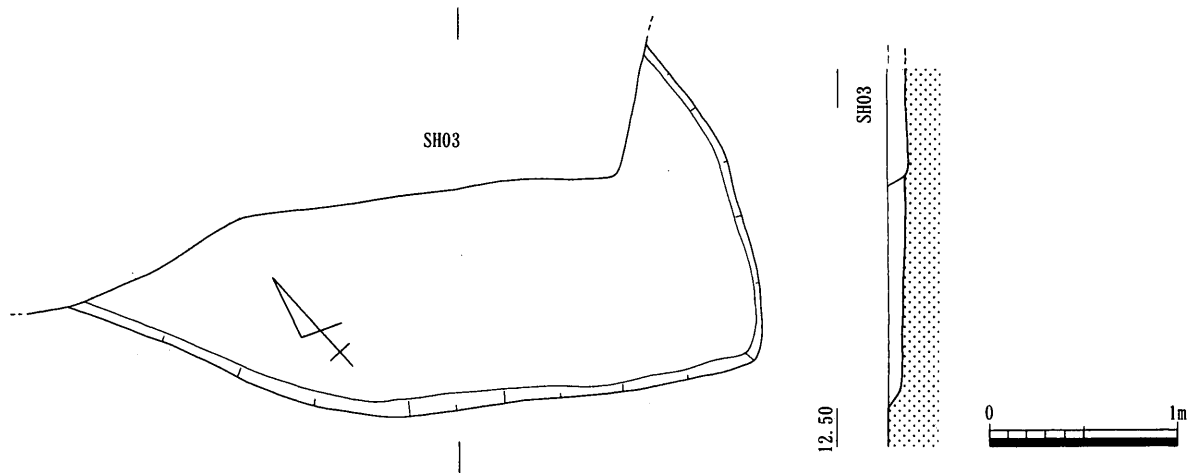
旧 F 1 区北西部で検出した土坑である。大部分を S H 03 に切られるが、平面形は楕円形を呈すると推測される。断面形は底場が平坦である。規模は長径 3.68 m 以上、短径 1.8 m 以上、深さ 8 c m を測る。出土遺物はない。土坑の時期は遺構面と切り合いから布留式併行期と考えられる。



① 暗黄褐色粘質土



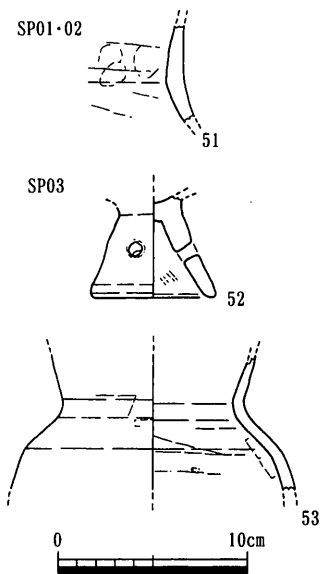
第202図 IV区 第1面SK04平・断面図(1/40), 出土遺物(1/4)



第203図 IV区 第1面SK05平・断面図(1/40)

柱穴出土遺物(第204図)

IV区で検出した掘立柱建物、柵列を構成しない古墳時代の柱穴出土遺物を図化した。51は土師器甕である。口縁部が直立気味に立ち上がる。内面には頸部で指オサエ、体部で板ナデが見られる。52は弥生土器の高杯の脚である。直線的であり、ほとんど広がらない。中央部を外側から穿孔する。杯、脚部の外面境界にハケ目、内面に板ナデを施す。53は土師器甕である。口縁部がほぼ直立し、体部上位で屈曲気味である。内面には板ナデを施す。



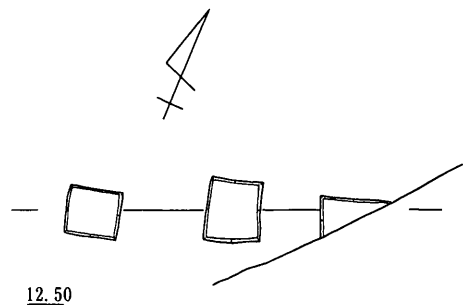
第204図 IV区 第1面SP出土遺物(1/4)

(3) 古代の遺構・遺物

柵列

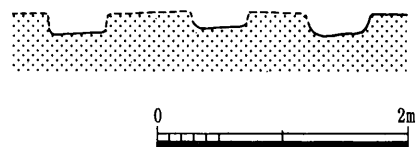
S A 01 (第205図)

旧F1区の南東隅で検出した柱穴列である。東側は調査区外に延び、3穴しかない。だが付近には遺構がなく、平面形、規模、柱穴間距離、底場レベルが類似するため柵列(ないし掘立柱建物)と考える。規模は2間以上(2.04 m以上)である。主軸方向はN-25°-Wである。柱穴の平面形はほぼ正方形であり、径約40cm、深さ約10cmを測る。出土遺物はない。柵列の時期は柱穴の平面形、規模から古代と考える。

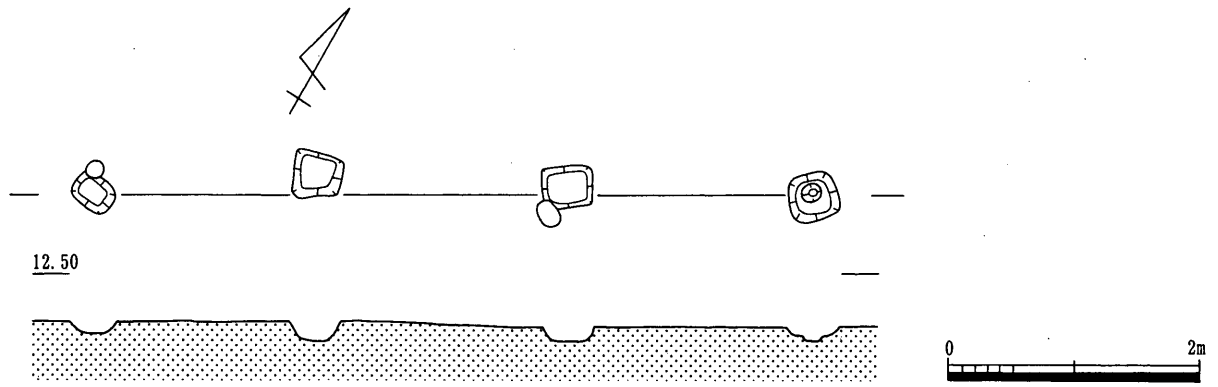


S A 02 (第206図)

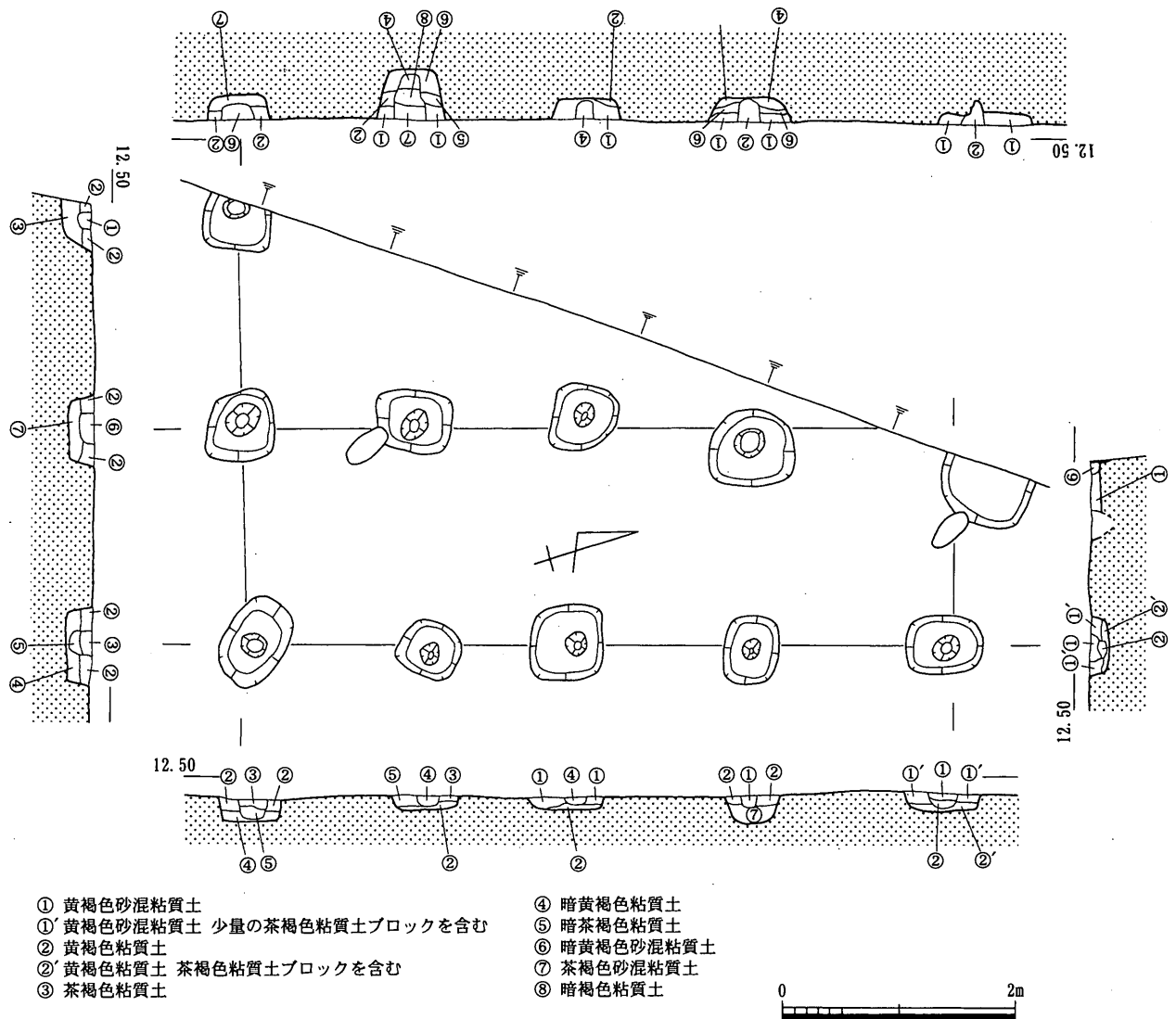
旧F1区の南東部で検出した柵列である。規模は3間(5.76 m)である。主軸方向はN-32°-Wである。柱穴の平面形はややいびつな方形であり、径約40cm、深さ約10cmを測る。埋土は茶褐色粘質土、暗黄褐色粘質土である。出



第205図 IV区 第1面SA01 平・断面図(1/60)



第206図 IV区 第1面SA02平・断面図(1/60)



- | | |
|------------------------------|-------------|
| ① 黄褐色砂混粘質土 | ④ 暗黄褐色粘質土 |
| ①' 黄褐色砂混粘質土 少量の茶褐色粘質土ブロックを含む | ⑤ 暗茶褐色粘質土 |
| ② 黄褐色粘質土 | ⑥ 暗黄褐色砂混粘質土 |
| ②' 黄褐色粘質土 茶褐色粘質土ブロックを含む | ⑦ 茶褐色砂混粘質土 |
| ③ 茶褐色粘質土 | ⑧ 暗褐色粘質土 |

第207図 IV区 第1面SB01平・断面図(1/60)

土遺物はない。柵列の時期は柱穴の平面形、規模から古代と考える。

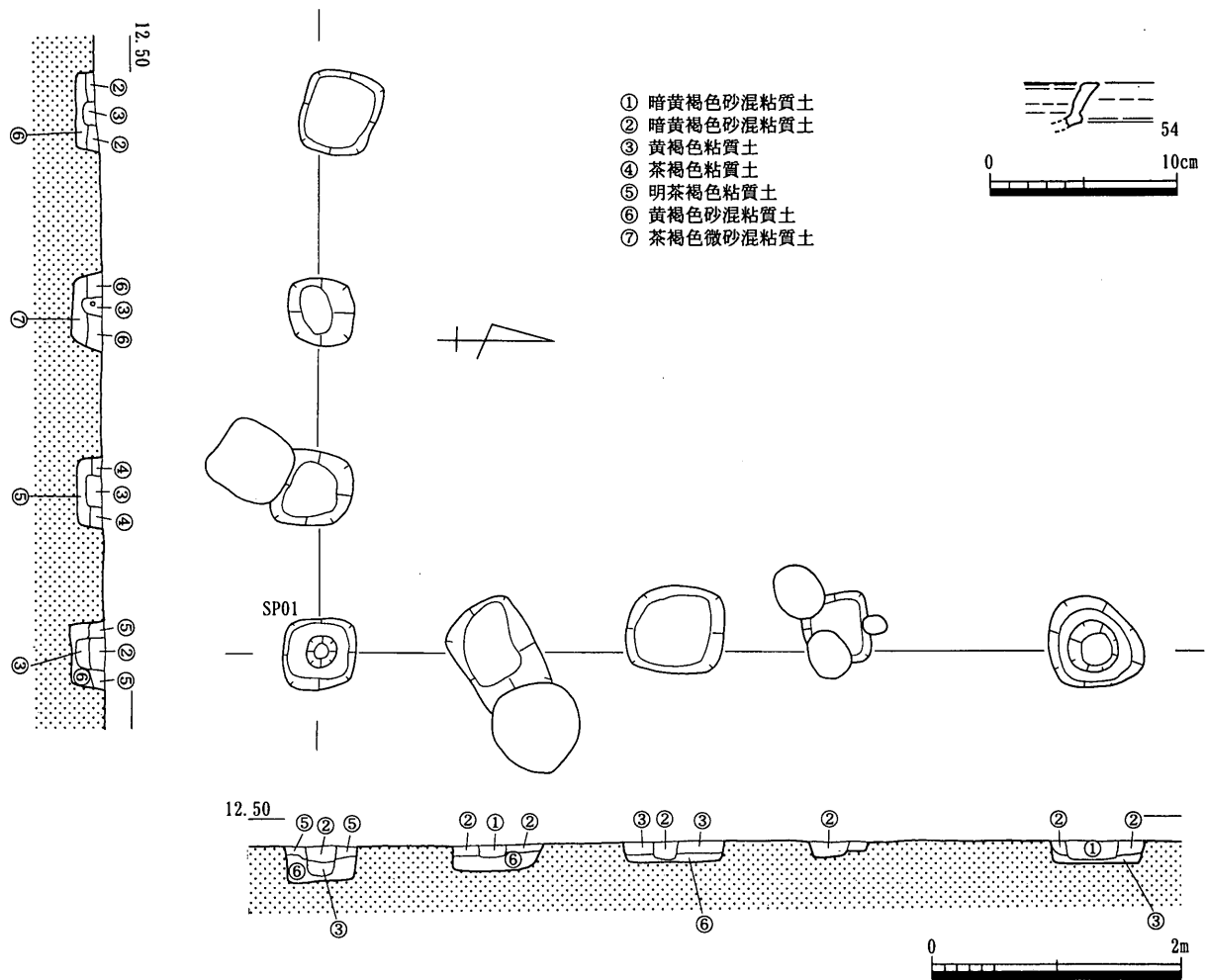
建物

S B 01 (第 207 図)

旧 F 1 区の北西部で検出した総柱建物である。西側桁行は大部分が調査区外に延びるが、規模は梁間 2 間×桁行 4 間 (3.6 × 6.0 m、21.6 m²) である。主軸方向は N - 16° - W である。柱穴の平面形は隅丸方形であり、径 50 ~ 70 cm、深さ 15 ~ 45 cm を測る。全ての柱穴で柱痕を確認し、径 18 ~ 24 cm を測る。出土遺物は混入した弥生土器の小片があるのみである。建物の時期は柱穴の規模、平面形から古代と考える。

S B 02 (第 208 図)

旧 F 1 区の南西部で検出した側柱建物である。西側桁行、北側梁間は大部分が調査区外に延びるが、規模は梁間 3 間以上×桁行 4 間以上 (4.38 m 以上× 6.3 m 以上、27.6 m² 以上) である。主軸方向は N - 1° - W である。柱穴の平面形は隅丸方形、不整形であり、径 50 ~ 70 cm、深さ 15 ~ 30 cm を測る。断面観察によりほとんどの柱穴で柱痕を確認し、径 20 ~ 25 cm (北東隅の柱痕は 40 cm) を測る。出土遺物は混入した弥生土器高杯 (54) などがあるのみである。建物の時期は柱穴の規模、平面形から古代と考える。なお、S B 01 からは南に 20 m と比較的近接しており、同様な柱穴規模、平面形、建物規模をもつ。主軸方向はずれるものの他に同様な建物が見られないため近接した時期の



第208図 IV区 第1面SB02平・断面図(1/60), 出土遺物(1/4)

建物である可能性が高い。

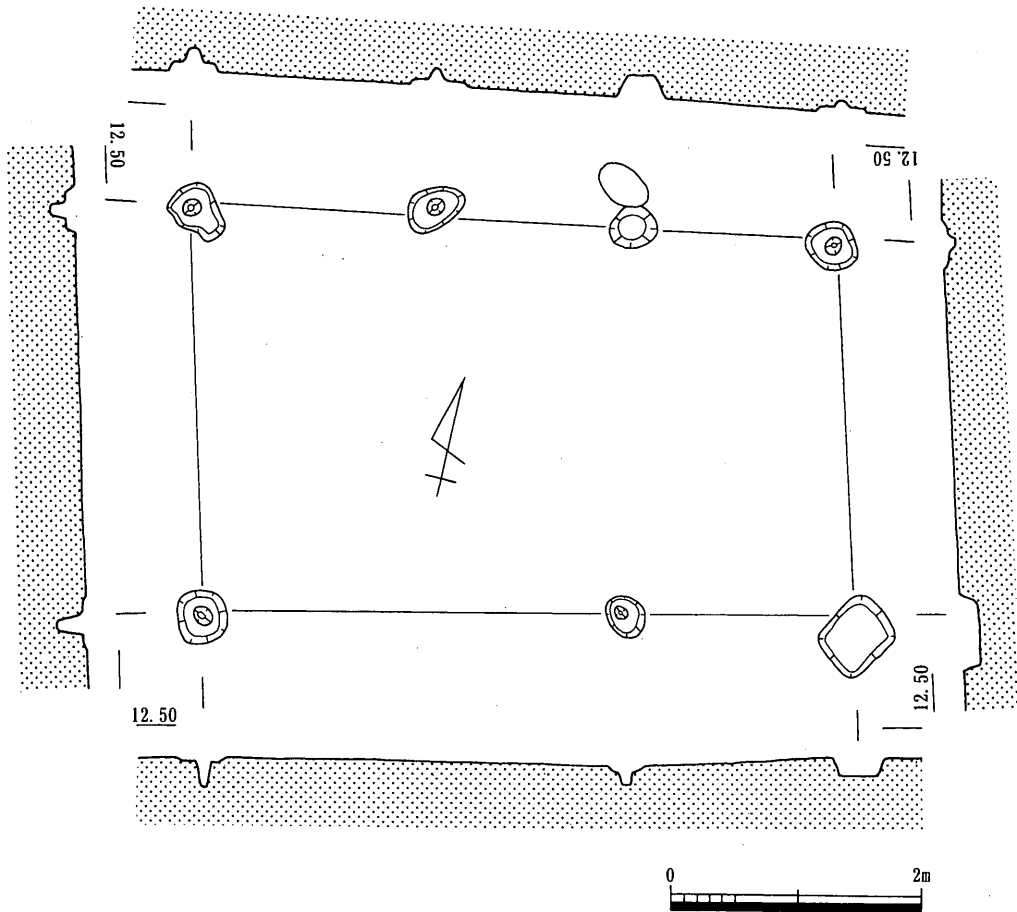
S B 03 (第 209 図)

旧 F 1 区の南西部で検出した側柱建物である。S K 24 を切る。規模は梁間 1 間×桁行 3 間 (3.3 m × 5.1 m、16.83 m²) である。主軸方向は N - 12° - W である。柱穴の平面形は楕円形、隅丸方形、不整形であり、径 40 ~ 50 c m、深さ 15 ~ 25 c m を測る。出土遺物はない。埋土は暗黄褐色粘質土、黄褐色粘質土である。建物の時期は南側に近接する中世の建物群と主軸が異なること、埋土から古代と考える。

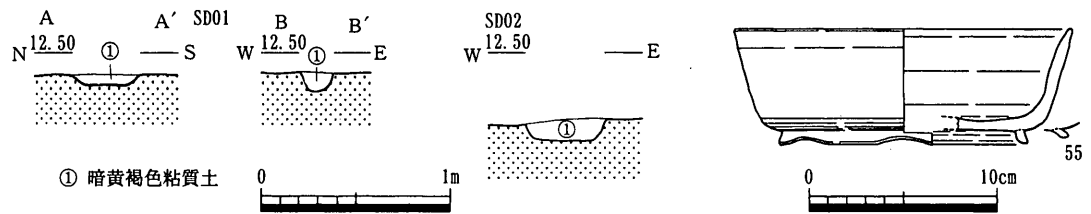
溝

S D 01 (第 210 図)

旧 F 1 区の中央南部で検出した溝である。S K 28 の北、西側を取り囲むように位置する。埋土も類似するため有機的な関係にあったと推定される。断面形は浅い皿状、逆台形を呈する。幅 9 ~ 18 c m、深さ 4 ~ 8 c m を測る。埋土は暗黄褐色粘質土である。出土遺物はない。溝の時期は S K 28 との配置、埋土より古代と考える。



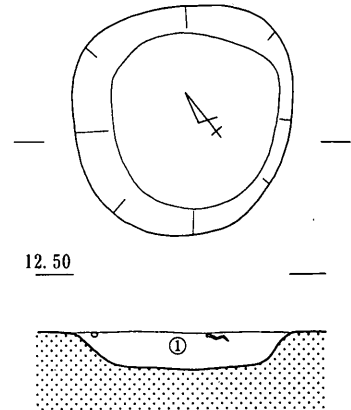
第209図 IV区 第1面SB03平・断面図(1/60)



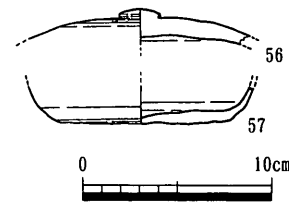
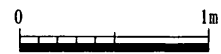
第210図 IV区 第1面SD01・02断面図(1/40), 出土遺物(1/4)

SD 02 (第210図)

旧F1区の南東部で検出した溝である。検出長は2.2mであるが、北に延びる。断面形は逆台形であり、底場はほぼ平坦である。幅20cm、深さ10cmを測る。出土遺物は須恵器杯身(55)がある。55は底部内よりに小さい高台をもつ。指オサエにより残存部では2ヶ所のくぼみが見られる。溝の時期は55より8世紀前半と考えられる。



① 暗茶褐色砂利混粘土



第211図 IV区 第1面SK06
平・断面図(1/40), 出土遺物(1/4)

土坑

SK 06 (第211図)

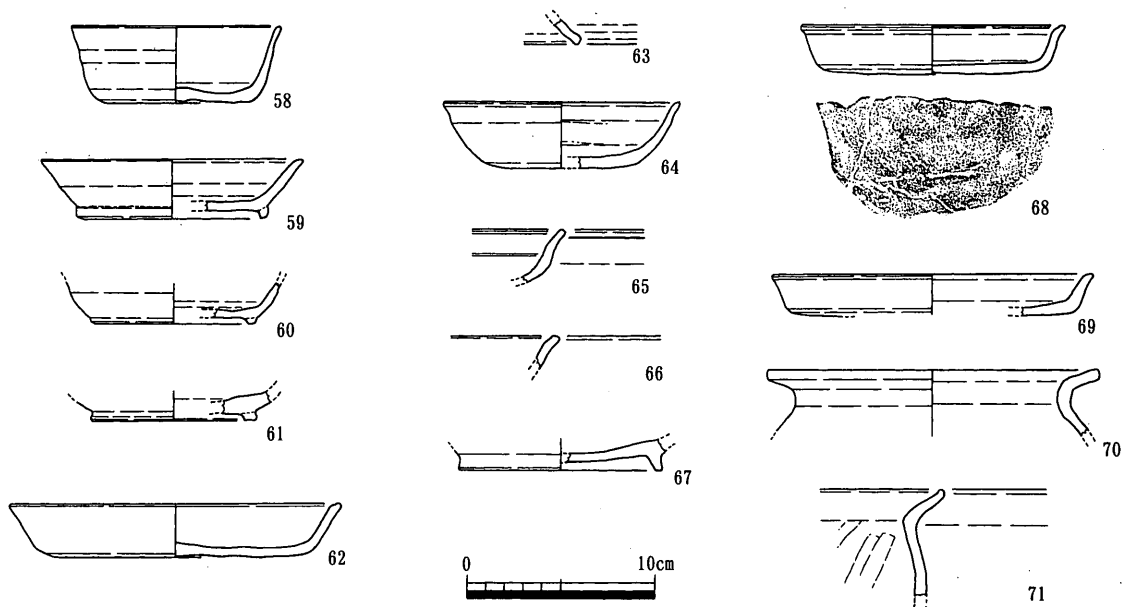
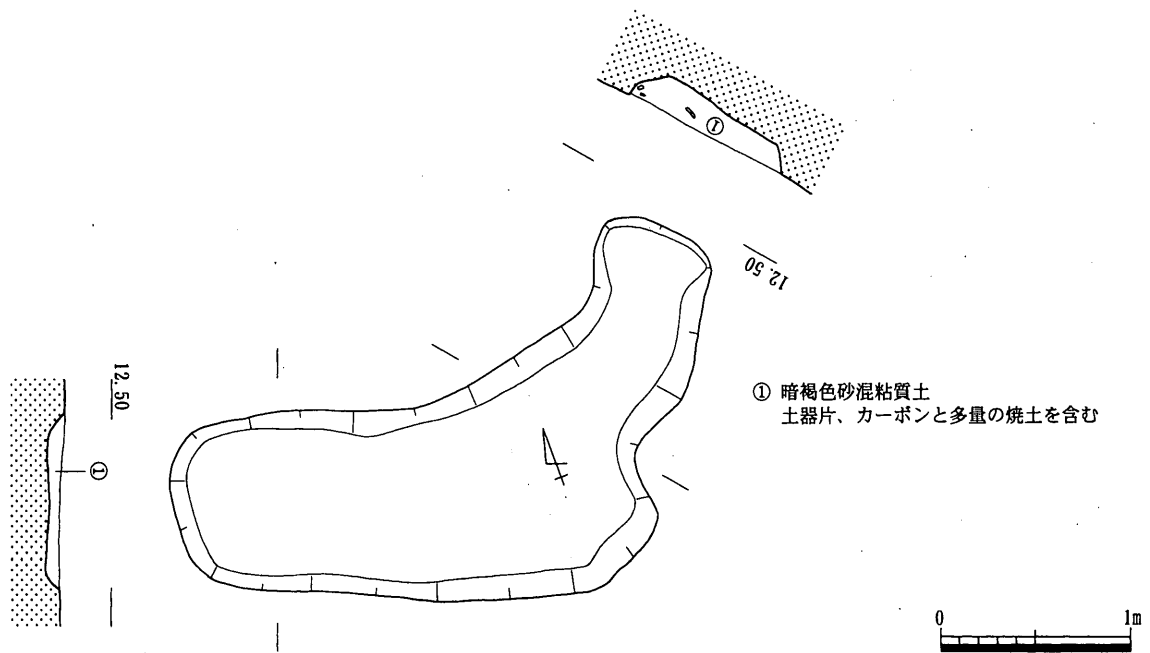
旧F1区の中央北部で検出した土坑である。平面形は隅丸方形であり、南側で丸味が強い。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径1.20m、短径1.18m、深さ20cmを測る。出土遺物は須恵器杯蓋(56)、身(57)がある。56は扁平なつまみをもつ。57は埋土上位で出土した。体部の器壁が薄い。ともに8世紀後半と考えられる。これらより土坑の時期は8世紀後半と考えられる。

SK 07 (第212図)

旧F1区の北西部で検出した土坑である。平面形は「く」の字状であり東西方向の土坑が東端で北部へ折れ曲がる。断面形は浅い皿状を呈する。SH 03、SK 08を切る。規模は東西方向の部分で2.57m、深さ12~18cmを測る。埋土は暗褐色砂混粘質土であり、カーボン、多量の焼土を含む。また出土遺物はビニール小袋2袋程度と少量であるが、半身程度残存するものもあり、共に廃棄されたと考えられる。図化したものとして須恵器杯身(58~61)、皿(62)、高杯(63)、土師器杯(64~67)、皿(68、69)、弥生土器甕(70、71)がある。58はやや器高が高く、薄作りである。59~61は底、体部境界に断面方形の小さい高台を貼り付ける。59は体部の外反が強い。62は口縁端部内面を小さくくぼませる。64は外面の口縁部直下を強くなで、端部を外反させる。65、66は口縁部、体部境界が屈曲する。67は底、体部境界に細長く外側に踏ん張る高台をもつ。68、69は口縁端部を小さく外反させる。68は底部を回転ヘラケズリする。土坑の時期は59~61より8世紀代と考えられる。

SK 08 (第213図)

旧F1区の北西部で検出した土坑である。平面形は隅丸方形であり南側で丸味を帯びる。断面形は

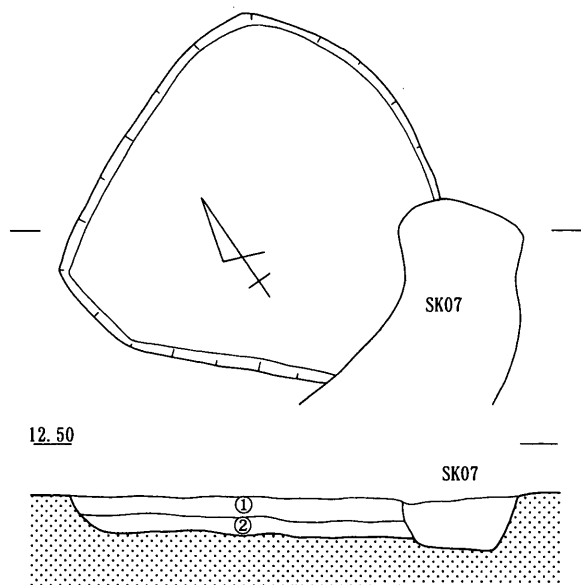


第212図 IV区 第1面SK07平・断面図(1/40), 出土遺物(1/4)

浅い皿状を呈する。SH 03を切り、SK 07に切られる。規模は東西 1.96 m、南北 1.68 m以上、深さ 22 cmを測る。埋土は暗褐色系土である。出土遺物はない。土坑の時期は切り合いと埋土より古代と考える。

SK 09 (第 214 図)

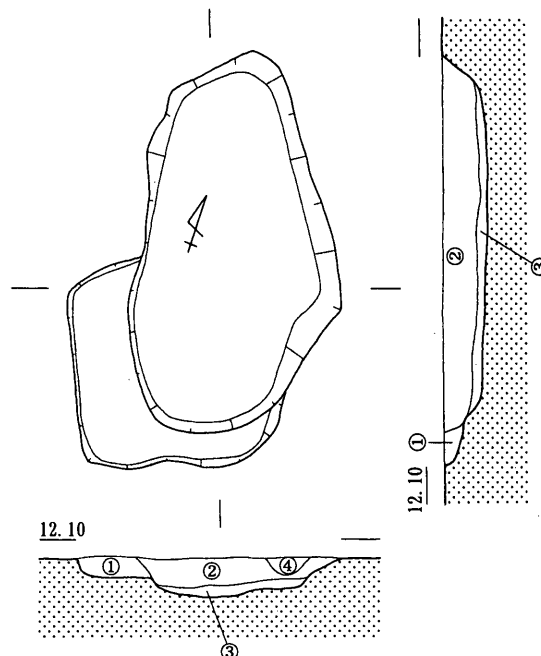
旧 E 3 区の西部で検出した土坑である。北東部を SK 10 に切られるが、平面形は正方形と考えられる。規模は東西、南北とも約 1.1 m、深さ 12 cm と推定される。主軸方向は N-21°-W である。埋土はオリーブ黒色粘質土であり、SK 10 と類似する。SK 09・10 からの出土遺物に古代の須恵器底部片がある。土坑の時期は SK 10 と埋土、主軸方向の類似から近接した時期と考えられるため古代と考える。



- ① 茶褐色砂質土
- ② 暗茶褐色粘質土



第213図 IV区 第1面SK08平・断面図(1/40)



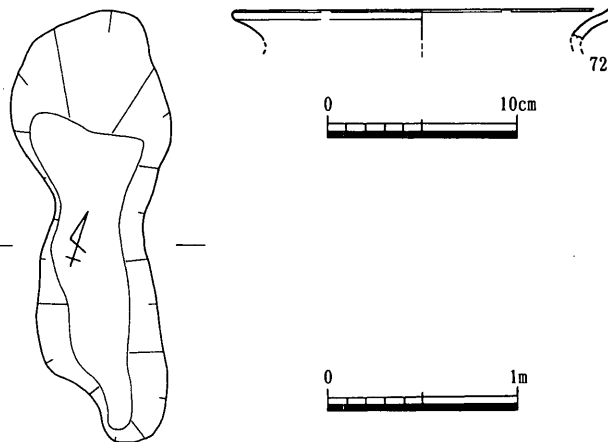
- ① オリーブ黒色弱粘質土 しまりやや強い 2~3cm大の灰オリーブ色弱粘質土ブロック、マンガンを少量含む
- ② 黒色弱粘質土 しまりやや強い 1~2cm大の黄褐色弱粘質土ブロックを少量含む
- ③ 黒色弱粘質土 しまりやや強い 2~3mm大の黄褐色弱粘質土ブロックを微量含む
- ④ オリーブ黒色弱粘質土 しまりやや強い 2~3mm大の黄褐色弱粘質土ブロックを含む



第214図 IV区 第1面SK09・10平・断面図(1/40)

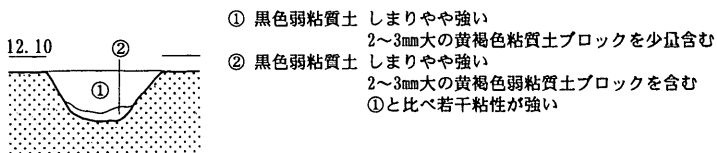
SK 10 (第 214 図)

旧 E 3 区の西部で検出した土坑である。SK 09 を切る。平面形は東側でやや膨らむ楕円形である。断面形は浅い皿状であり、中央に向かって緩やかに下る。規模は長径 1.92 m、短径 1.12 m、深さ 24 c m を測る。主軸方向は N - 20° - W である。埋土はオリーブ黒色粘質土である。出土遺物、土坑の時期は SK 09 で述べたとおりである。



SK 11 (第 215 図)

旧 E 3 区の西部で検出した土坑である。平面形は中央でくびれるいびつな楕円形である。断面形は壁が斜めに落ち、底場は東側に下る。近接する SK 10 とは主軸方向、短軸の端を揃える。規模は長径 2.26 m、短径 84 c m、深さ 26 c m を測る。主軸方向



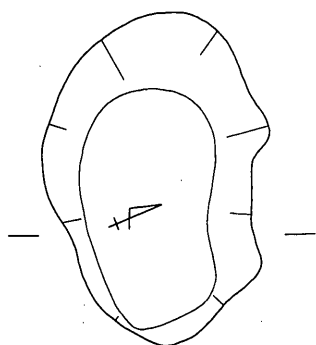
- ① 黒色弱粘質土 しまりやや強い 2~3mm大の黄褐色粘質土ブロックを少量含む
 - ② 黒色弱粘質土 しまりやや強い 2~3mm大の黄褐色弱粘質土ブロックを含む
- ①と比べ若干粘性が強い

第215図 IV区 第1面SK11平・断面図(1/40), 出土遺物(1/4)

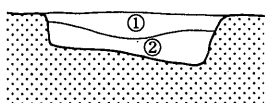
はN-22°-Wである。埋土は黒色粘質土であり、SK 10と類似する。出土遺物は弥生土器甕(72)がある。72は下川津B類である。口縁端部がナデによりわずかに上向く。土坑の時期はSK 10との主軸の一致、配置、埋土の類似から古代と考える。

SK 12 (第216図)

旧F1区の北東隅で検出した土坑である。平面形はいびつな楕円形である。断面形は逆台形であるが、底場は北側で深くなる。規模は長径1.74m、短径1.20m、深さ26cmを測る。出土遺物は図化していないが古代の須恵器の杯身小片がある。これから土坑の時期は古代と考えられる。



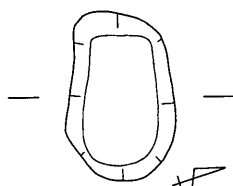
12.50



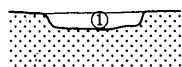
- ① 暗黄褐色砂質土
- ② 茶褐色砂質土



第216図 IV区 第1面SK12
平・断面図(1/40)



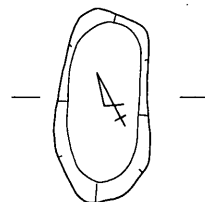
12.50



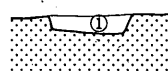
- ① 暗茶褐色砂質土



第217図 IV区 第1面SK13
平・断面図(1/40)



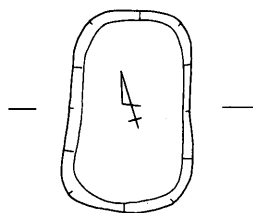
12.50



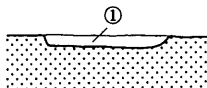
- ① 明茶褐色砂混粘質土



第218図 IV区 第1面SK14
平・断面図(1/40)



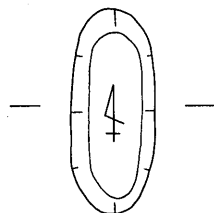
12.50



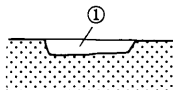
- ① 明茶褐色砂混粘質土



第219図 IV区 第1面SK15
平・断面図(1/40)



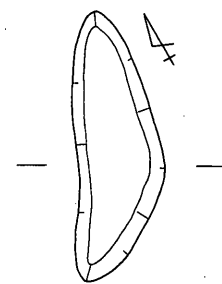
12.50



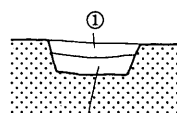
- ① 明茶褐色砂混粘質土



第220図 IV区 第1面SK16
平・断面図(1/40)



12.50



- ① 黄褐色砂混粘質土
- ② 茶褐色粘質土



第221図 IV区 第1面SK17
平・断面図(1/40)

S K 13 (第 217 図)

旧 F 1 区の中央北部で検出した土坑である。平面形は長方形である。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 88 c m、短径 60 c m、深さ 8 c mを測る。主軸方向は N - 73° - W である。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代と考える。

S K 14 (第 218 図)

旧 F 1 区の中央北部で検出した土坑である。東側に近接して平面形、規模、主軸方向、埋土が類似する S K 15、16 がある。平面形は長方形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1.03 m、短径 54 c m、深さ 10 c mを測る。主軸方向は N - 30° - E である。埋土は明茶褐色砂混粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代と考える。

S K 15 (第 219 図)

旧 F 1 区の中央北部で検出した土坑である。平面形は長方形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1.06 m、短径 70 c m、深さ 8 c mを測る。主軸方向は N - 20° - E である。埋土は明茶褐色砂混粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代と考える。

S K 16 (第 220 図)

旧 F 1 区の中央北部で検出した土坑である。平面形は長楕円形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1.10 m、短径 46 c m、深さ 9 c mを測る。主軸方向は N - 0、2° - E である。埋土は明茶褐色砂混粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代と考える。

S K 17 (第 221 図)

旧 F 1 区の中央北部で検出した土坑である。平面形は両端が狭まる長楕円形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1.44 m、短径 46 c m、深さ 18 c mを測る。主軸方向は N - 29° - E である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代と考える。

S K 18 (第 222 図)

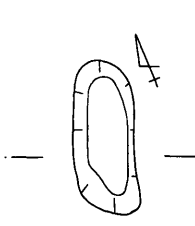
旧 F 1 区の北東部で検出した土坑である。平面形は長方形である。断面形は逆台形を呈し、壁がななめに落ち、底場が平坦である。規模は長径 76 c m、短径 34 c m、深さ 16 c mを測る。主軸方向は N - 22° - E である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代と考える。

S K 19 (第 223 図)

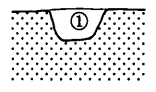
旧 F 1 区の北東部で検出した土坑である。平面形はいびつな円形である。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 1.52 m、短径 1.34 m、深さ 12 c mを測る。埋土は茶褐色粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代と考える。

S K 20 (第 224 図)

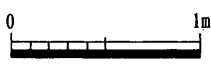
旧 F 1 区の南西部で検出した土坑である。西側が調査区外に延びるが、平面形は楕円形と推定される。



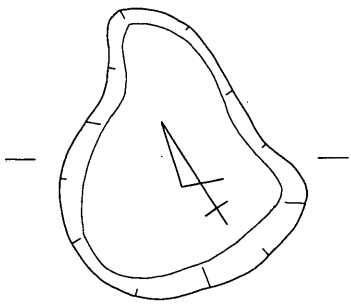
12.50



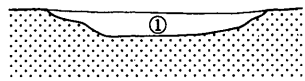
① 黄褐色砂質土



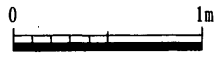
第222図 IV区 第1面SK18
平・断面図(1/40)



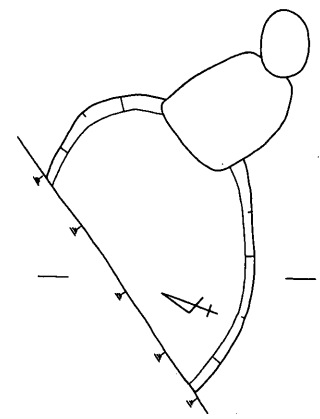
12.50



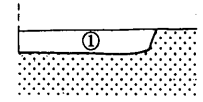
① 黄褐色粘質土



第223図 IV区 第1面SK19
平・断面図(1/40)



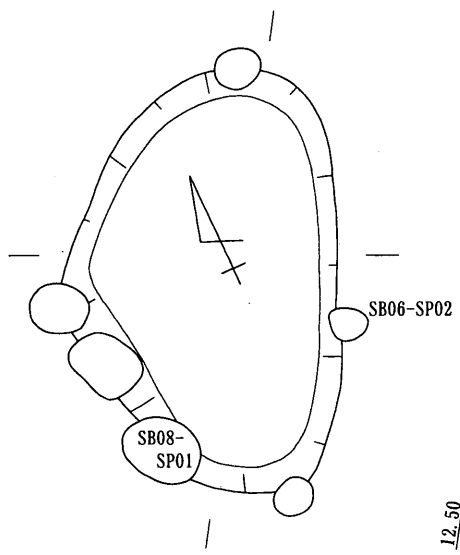
12.50



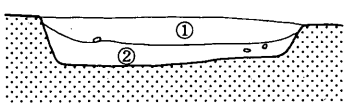
① 明茶褐色粘質土



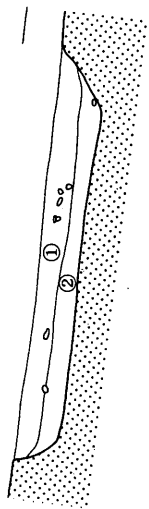
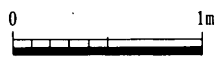
第224図 IV区 第1面SK20
平・断面図(1/40)



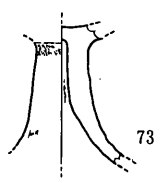
12.50



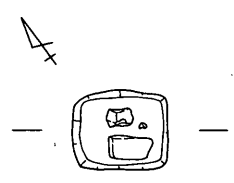
① 黄褐色粘質土
② 黄褐色粘土 (やや赤味を帯びる)



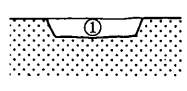
12.50



第225図 IV区 第1面SK22平・断面図(1/40), 出土遺物(1/4)



12.50



① 明茶褐色粘質土



第226図 IV区 第1面SK21
平・断面図(1/40)

断面形は逆台形である。規模は長径 1.40 m、短径 96 c m以上、深さ 12 c mを測る。埋土は明茶褐色粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代と考える。

S K 21 (第 226 図)

旧 F 1 区の南西部で検出した土坑である。平面形は整った方形であり、断面形は逆台形である。規模は長径 50 c m、短径 42 c m、深さ 10 c mを測る。主軸方向は N - 38° - E である。検出面で礫 2 点が確認された。ともに底が土坑の底までは達しない。これらは長軸を土坑長軸と揃えて、平行に位置しており、人為的に配置されたと考えられる。ここでは土坑としたが、柱穴と見れば根石の可能性はある。埋土は明茶褐色粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代と考える。

S K 22 (第 225 図)

旧 F 1 区の南西部で検出した土坑である。平面形は西側で膨らむ楕円形であり、断面形は逆台形である。S B 06、08 に切られる。規模は長径 2.22 m、短径 1.48 m、深さ 25 c mを測る。主軸方向は N - 27° - E である。埋土は黄褐色粘土である。出土遺物は弥生時代の高杯 (73) がある。杯部と脚部の外面境界にハケ目が残存する。土坑の時期は埋土より古代と考える。

S K 23 (第 227 図)

旧 F 1 区の南西部で検出した土坑である。平面形は整った方形であり、断面形は逆台形である。規模は長径 56 c m、短径 48 c m、深さ 11 c mを測る。主軸方向は N - 30° - E である。検出面で礫 1 点が出土した。底がほぼ土坑の底に及ぶ。礫の長軸は土坑長軸と平行になり、人為的に配置されたと考えられる。土坑と報告したが、柱穴と見れば 3 m 東に位置する S K 23 と同様に根石の可能性はある。埋土は明茶褐色粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代と考える。

S K 24 (第 230 図)

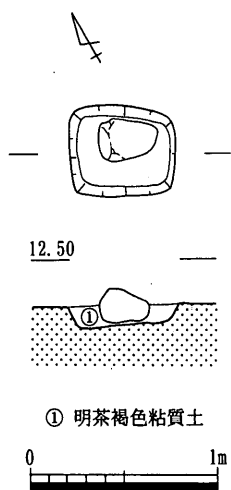
旧 F 1 区の南西部で検出した土坑である。平面形は長方形であり、断面形は逆台形である。底場はほぼ平坦である。S B 03 に切られる。規模は長径 3.46 m、短径 1.92 m、深さ 24 c mを測る。主軸方向は N - 50° - E である。中央部、北東隅で拳大の礫が数点まとまって出土した。埋土は黄褐色系粘質土である。出土遺物は弥生土器甕 (74、75) がある。土坑の時期は埋土より古代と考える。

S K 25 (第 228 図)

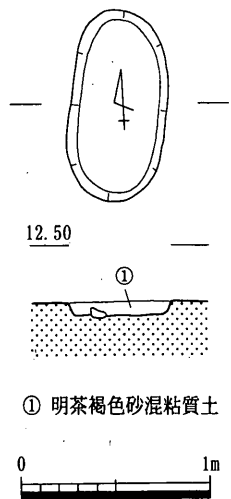
旧 F 1 区の南西部で検出した土坑である。平面形は長楕円形であり、断面形は逆台形である。規模は長径 1.0 m、短径 53 c m、深さ 8 c mを測る。主軸方向は N - 5° - E である。埋土は明茶褐色砂混粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代と考える。

S K 26 (第 229 図)

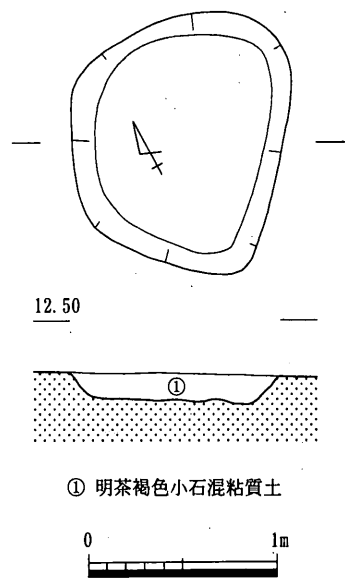
旧 F 1 区の南西部で検出した土坑である。平面形は隅丸方形であり、断面形は逆台形である。規模は長径 1.35 m、短径 1.16 m、深さ 15 c mを測る。主軸方向は N - 42° - E である。埋土は明茶褐色小石混粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代と考える。



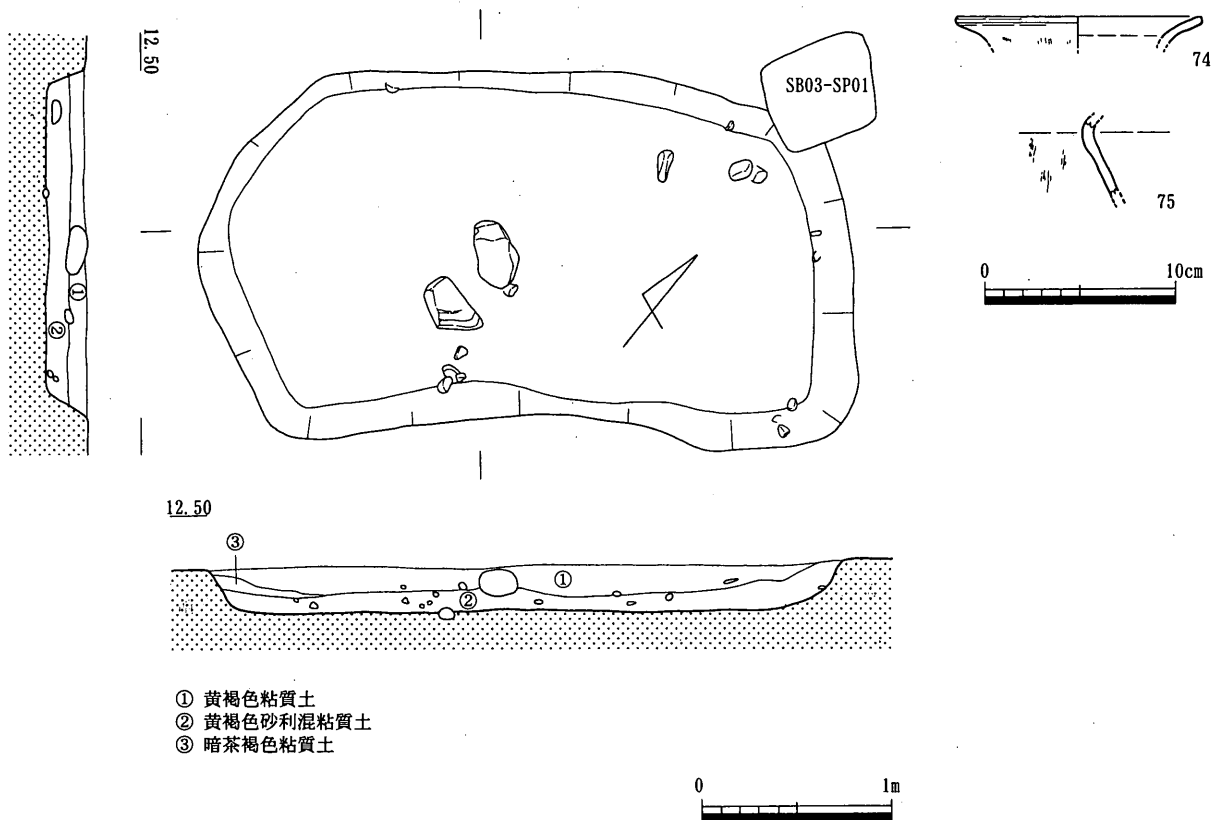
第227图 IV区 第1面SK23
平·断面图(1/40)



第228图 IV区 第1面SK25
平·断面图(1/40)



第229图 IV区 第1面SK26
平·断面图(1/40)



第230图 IV区 第1面SK24平·断面图(1/40), 出土遗物(1/4)

S K 27 (第 231 図)

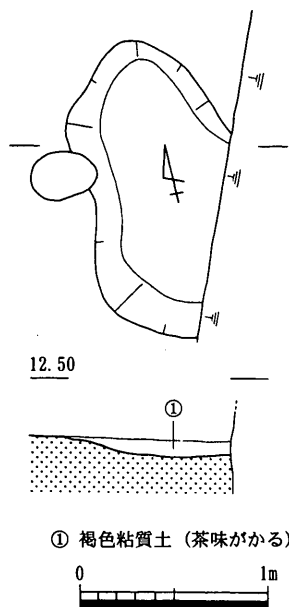
旧 F 1 区の南東部で検出した土坑である。東側が調査区外に延びるが、平面形はいびつな楕円形であり、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 1.60 m 以上、短径 80 cm 以上、深さ 9 cm を測る。主軸方向は N - 5° - W である。埋土は茶褐色粘質土である。出土遺物は図化していないが土師器甕の体部片がある。土坑の時期は埋土と甕の体部片より古代と考えられる。

S K 28 (第 232 図)

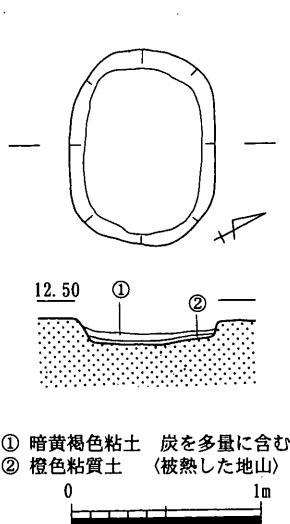
旧 F 1 区の中央南部で検出した焼成土坑である。平面形は整った隅丸方形であり、断面形は浅い皿状を呈する。土坑を取り巻くように S D 01 が位置する。規模は長径 1.03 m、短径 77 cm、深さ 7 cm を測る。主軸方向は N - 61° - W である。壁面及び底が強い被熱により赤化、固結している。このため検出時にも赤い帯が土坑周縁を巡るように見られた。また被熱面の上には炭が部分的に固まって出土している。埋土は炭を多量に含むが、暗黄褐色粘土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代と考える。

柱穴出土遺物 (第 233 図)

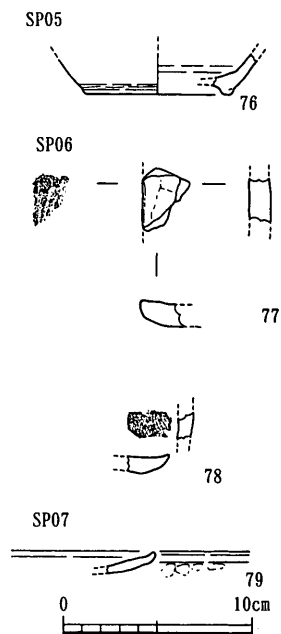
掘立柱建物、柵列を構成しない古代の柱穴出土遺物を図化した。76 は須恵器杯身である。外面の底、体部境界に断面半円形の小さな高台を貼り付ける。77、78 は器種不明であるが拓本を呈示した面には細い布目が認められる。布目は見られないが厚さ、胎土、色調で類似する遺物が S K 07 で確認できる。79 は京都系の土師器皿である。口縁部が「て」字状を呈し、端部は小さく隆起する。また器高が低く、扁平な器形である。11 世紀ごろと考えられる。



第231図 IV区 第1面 SK27
平・断面図(1/40)



第232図 IV区 第1面 SK28
平・断面図(1/40)



第233図 IV区 第1面SP05~07
出土遺物(1/4)

(4) 中世の遺構・遺物

建物

S B 04 (第 234 図)

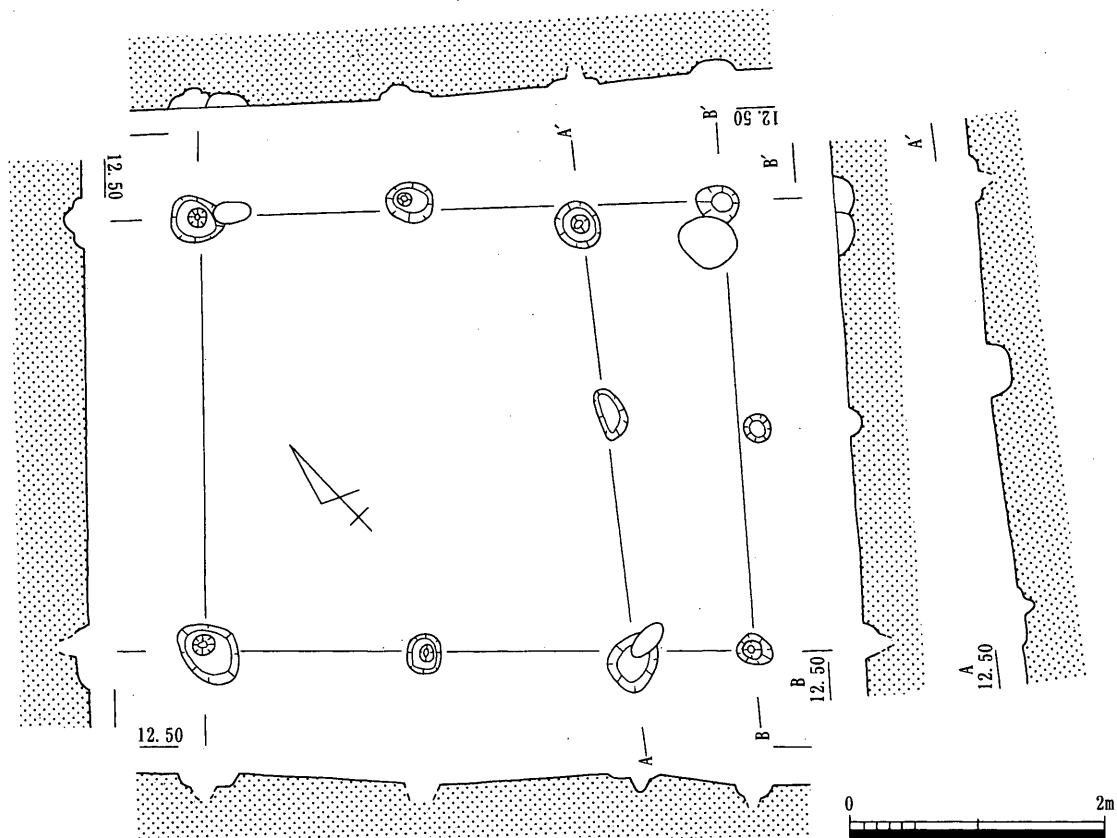
旧 F 1 区の北西部で検出した 1 面庇建物である。規模は梁間 2 間×桁行 2 間(3.5 m×4.3 m。15.05 m²)である。主軸方向は N - 42° - E である。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ 15 c m 前後を測る。出土遺物はない。埋土は黒褐色粘質土、茶褐色粘質土である。建物の時期は庇付き建物であること、埋土から中世と考える。

S B 05 (第 235 図)

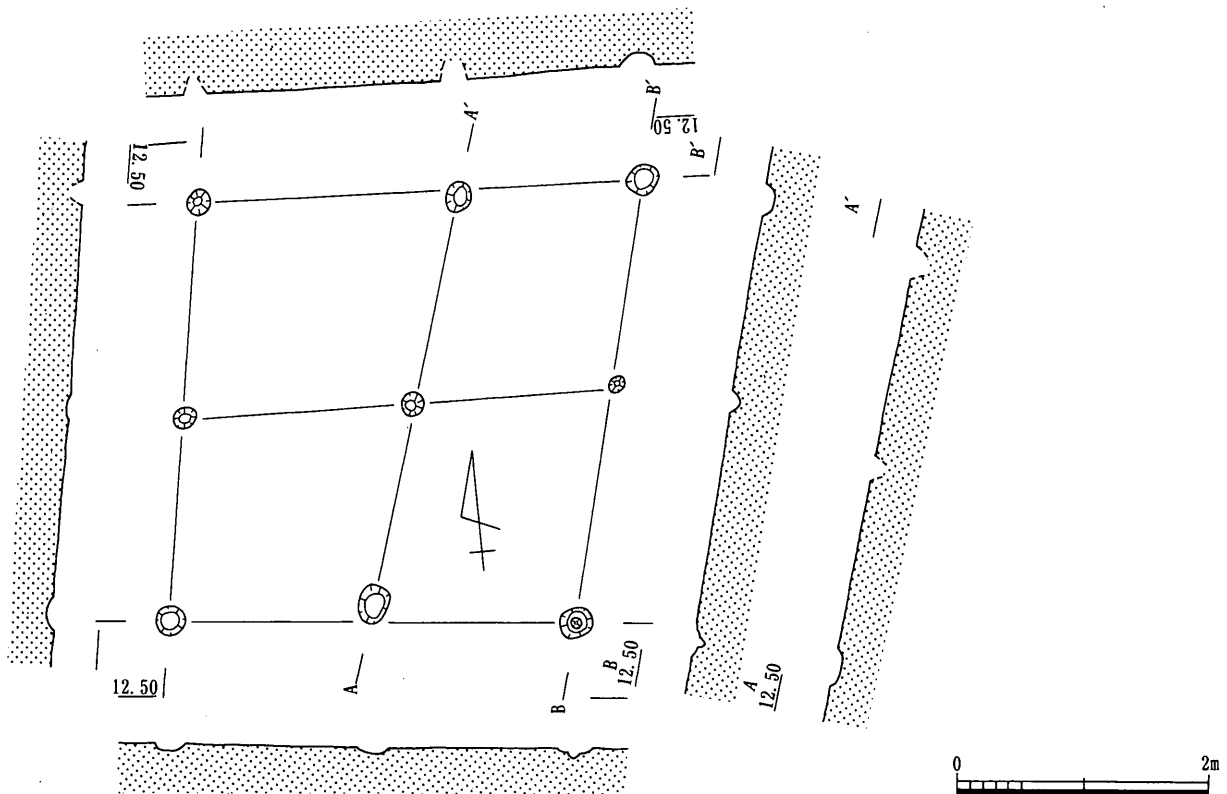
旧 F 1 区の南東部で検出した総柱建物である。規模は梁間 2 間×桁行 2 間(3.3 m×3.3 m。11.6 m²)である。主軸方向は N - 87° - W である。柱穴の平面形はほぼ円形であり、径 13 ~ 30 c m、深さ約 10 c m を測る。出土遺物はない。柱穴規模が小さいことから建物の時期は中世と考える。

S B 06 (第 236 図)

旧 F 1 区の南西部で検出した 1 面庇建物である。規模は梁間 2 間×桁行 3 間(4.2 m×5.2 m。22.3 m²)である。主軸方向は N - 55° - W である。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ 10 ~ 18 c m を測る。梁間中央の柱間距離は 1.2 m と狭くなる。埋土は黒褐色粘質土、茶褐色粘質土である。出土遺物はない。庇付き建物であることから建物の時期は中世と考える。



第234図 IV区 第1面SB04平・断面図(1/60)



第235図 IV区 第1面SB05平・断面図(1/60)

S B 07 (第 237 図)

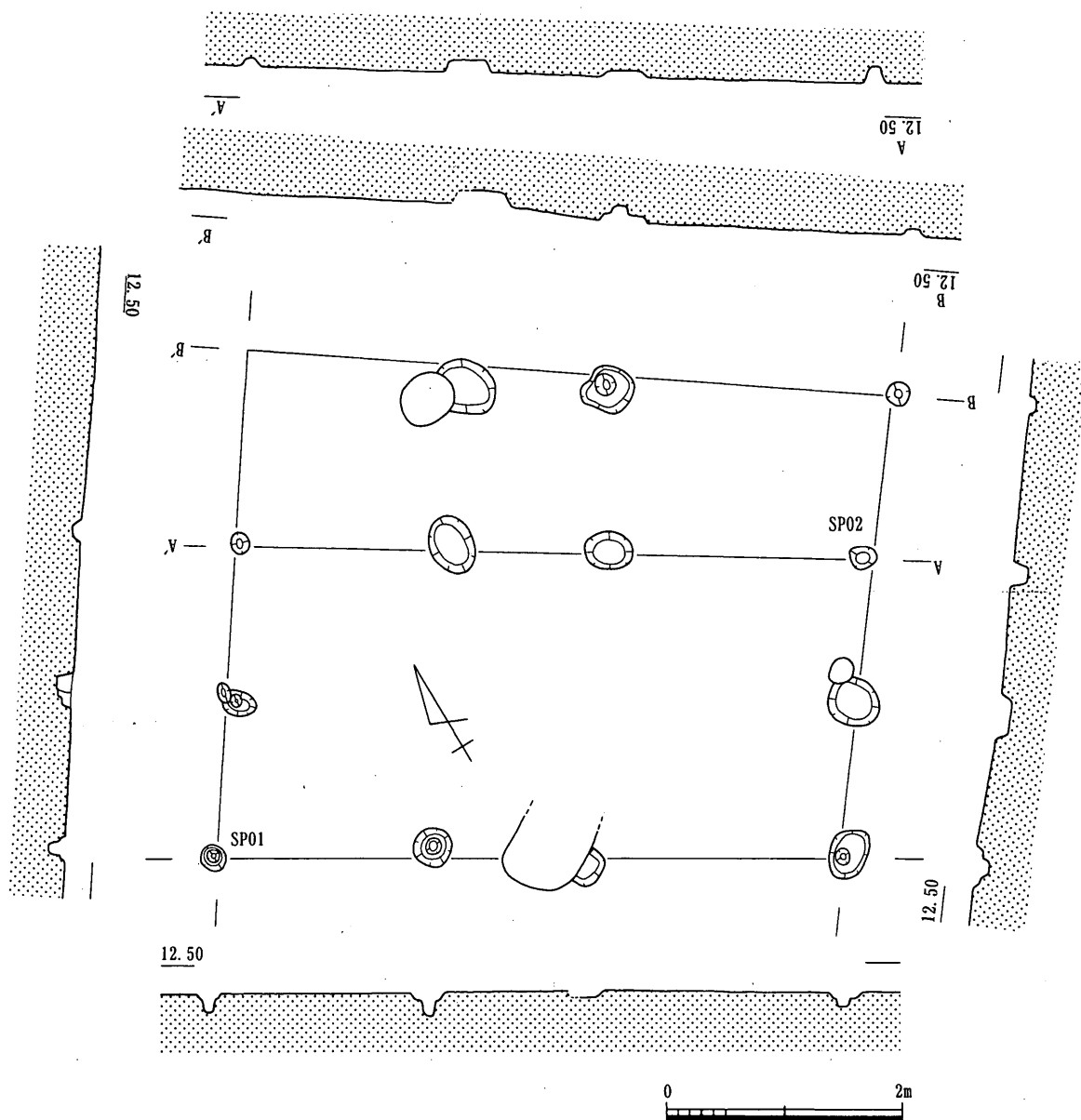
旧F 1 区の南西部で検出した 1 面庇建物である。規模は梁間 2 間×桁行 3 間(3.2 m× 6.6 m。22.2 m²) である。主軸方向はN - 33° - E である。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ 6 ~ 24 c m を測る。埋土は黒褐色粘質土、茶褐色粘質土である。出土遺物はない。S B 06 と重複する位置にあり、類似した規模をもつこと、庇付き建物であり、主軸も直交することから前後関係は不明だが、建て替えられた可能性がある。建物の時期は庇付き建物であることから中世と考える。

S B 08 (第 238 図)

旧F 1 区の南西部で検出した側柱建物である。規模は梁間 2 間×桁行 2 間(2.3 m× 4.2 m。9.8 m²) である。主軸方向はN - 35° - E である。柱穴の平面形は楕円形であり、深さ 7 ~ 18 c m を測る。埋土は黒褐色粘質土、茶褐色粘質土である。出土遺物はない。建物の時期は南側に近接する中世の建物群と主軸方向が一致することから中世と考える。

S B 09 (第 239 図)

旧F 1 区の南西部で検出した側柱建物である。規模は梁間 2 間×桁行 2 間(2.5 m× 3.6 m。9.0 m²) である。主軸方向はN - 40° - E である。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ 5 ~ 19 c m を測る。埋土は黒褐色粘質土、暗茶褐色粘質土である。出土遺物はない。S B 08 と重複する位置にあり、類似した規模をもつこと、主軸も類似することから前後関係は不明であるが、建て替えられたと考えられる。よって建物の時期は中世と考える。



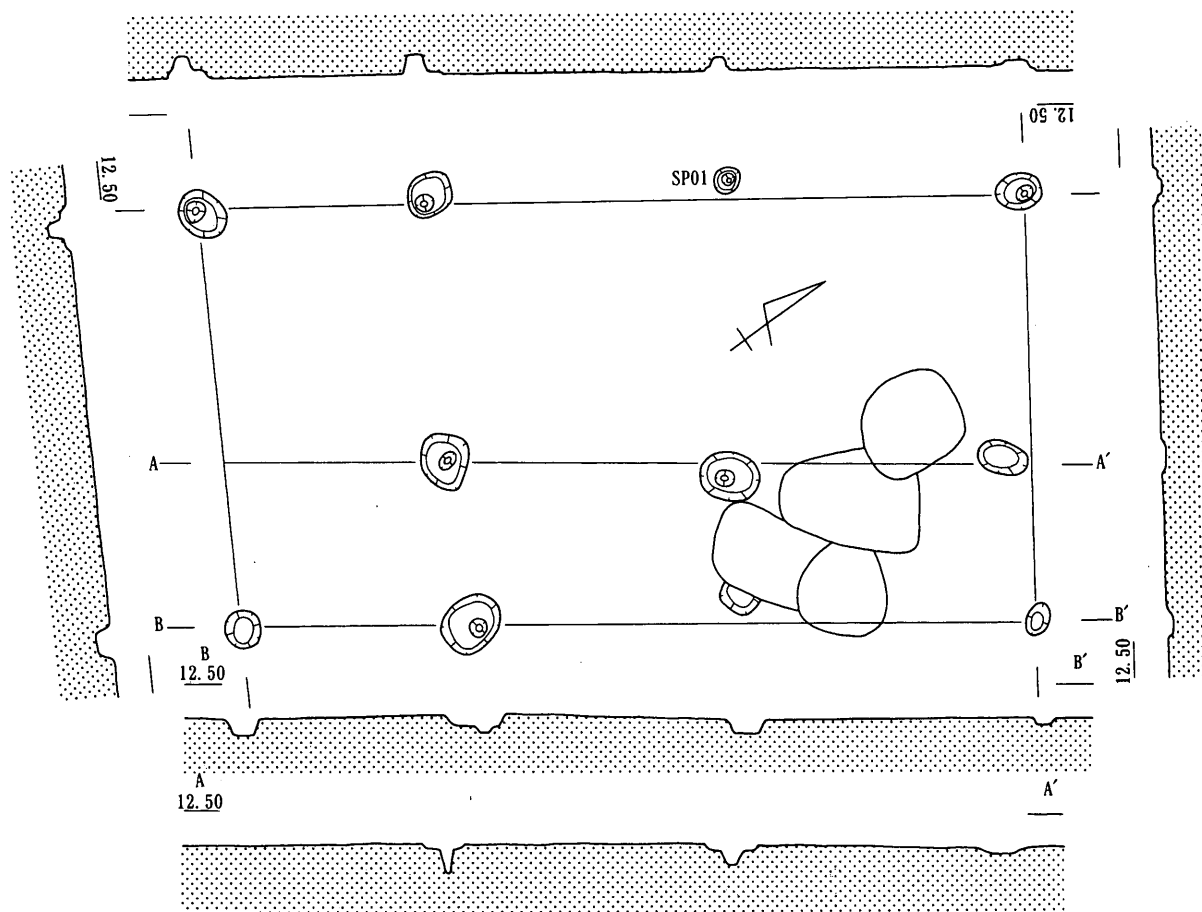
第236図 IV区 第1面SB06平・断面図(1/60)

S B 10 (第 240 図)

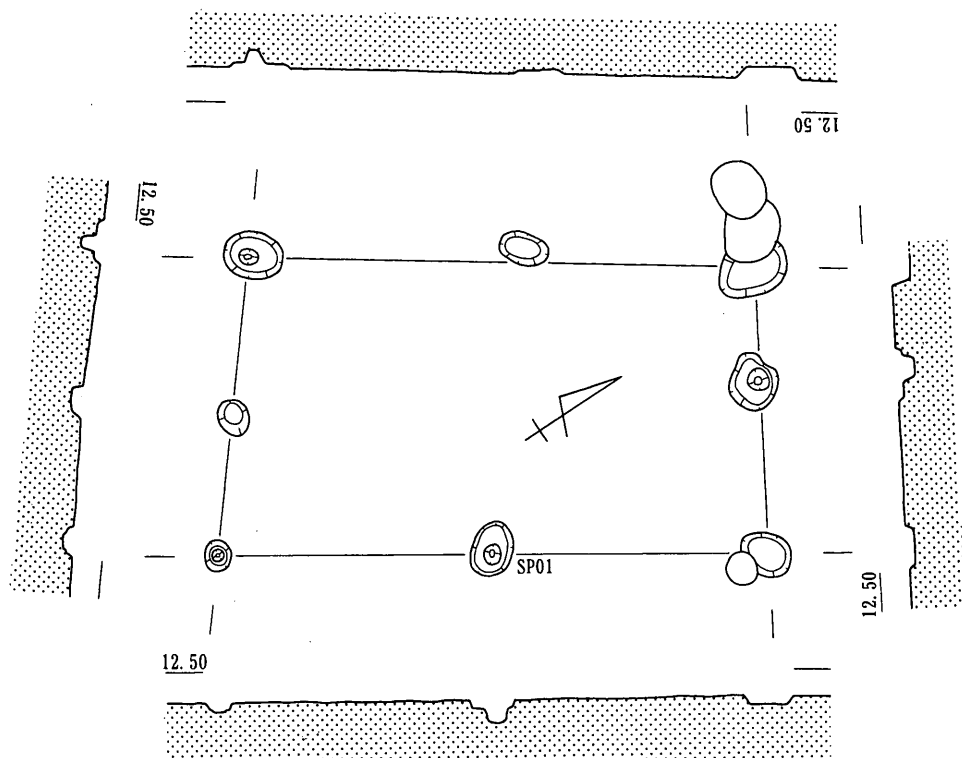
旧 F 1 区の南東部で検出した総柱建物である。規模は梁間 2 間×桁行 3 間(3.3 m × 5.4 m。16.9 m²)である。主軸方向は N - 67° - E である。柱穴の平面形は円形であり、径 11 ~ 27 cm、深さ 5 ~ 12 cm を測る。桁行北端の柱間距離は 1.2 m と南側の 2 間より狭い。出土遺物はない。建物の時期は柱穴規模が小さいことから中世と考える。

S B 11 (第 241 図)

旧 F 2 区(西)で検出した総柱建物である。規模は梁間 2 間×桁行 2 間(5.76 m × 6.96 m。40.1 m²)である。主軸方向は N - 72° - W である。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ 10 ~ 32 cm を測る。桁行の柱間距離は東側が 3.3 m と西側の 3.6 m よりやや狭い。埋土は黒褐色粘質土、茶褐色粘質土である。出土遺物はない。建物の時期は主軸方向がややずれるものの周囲に近接する建物の中世であり、これらと同じ埋土をもつことから中世と考える。

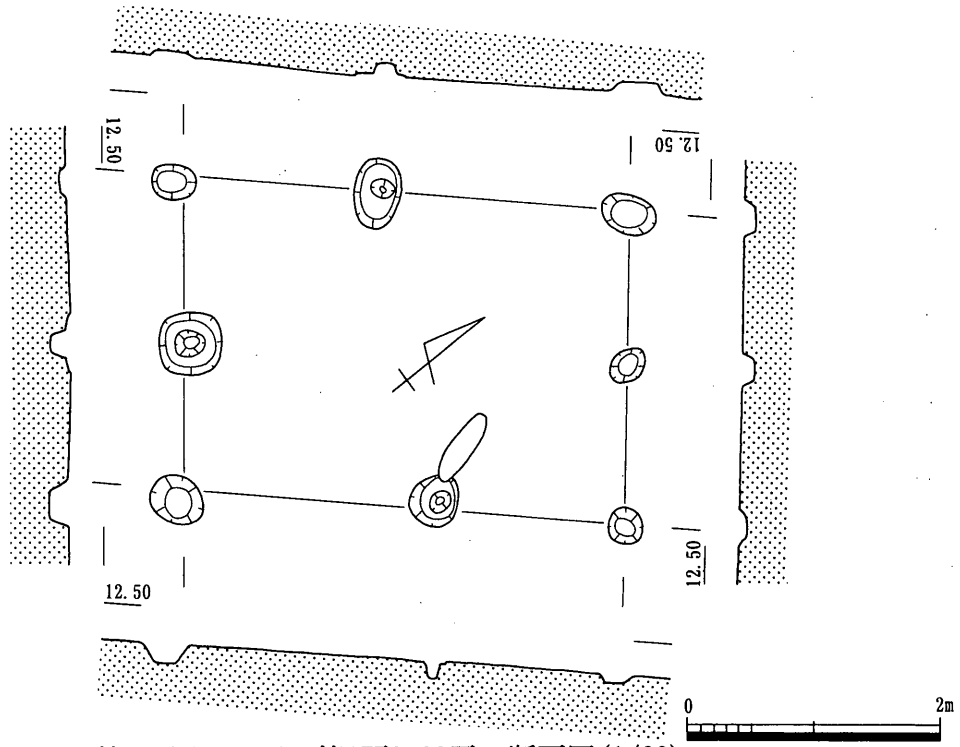


第237图 IV区 第1面SB07平·断面图(1/60)

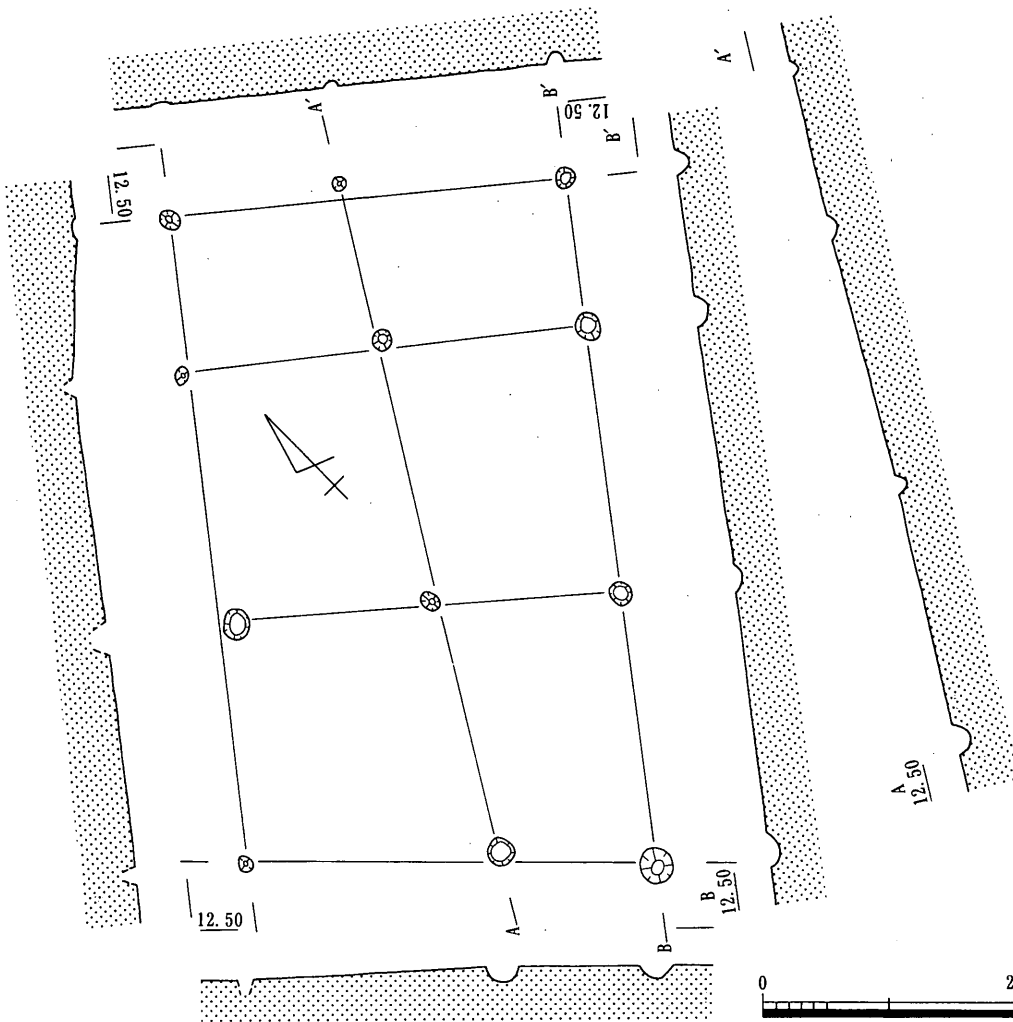


第238图 IV区 第1面SB08平·断面图(1/60)

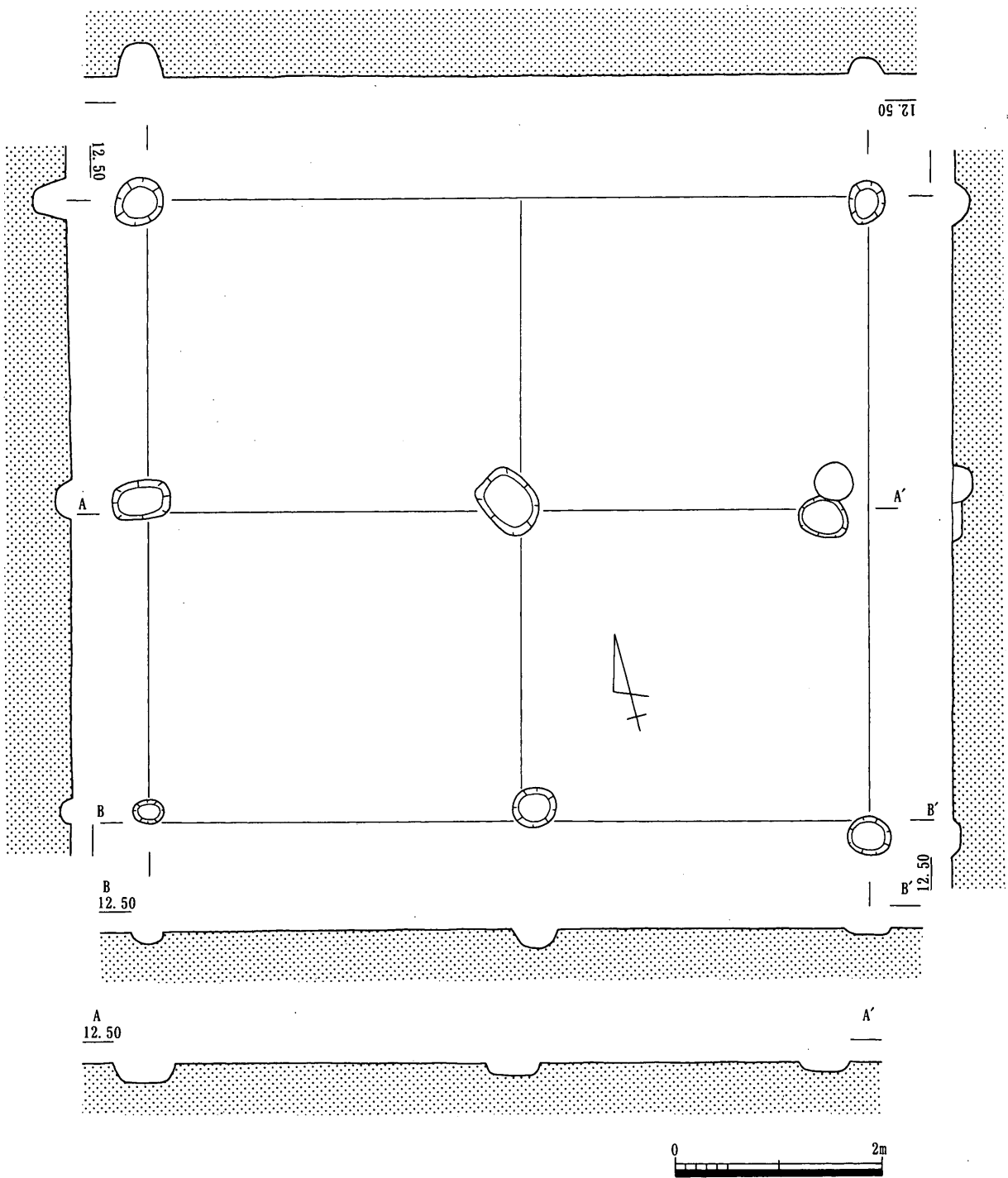




第239图 IV区 第1面SB09平·断面图(1/60)



第240图 IV区 第1面SB10平·断面图(1/60)



第241图 IV区 第1面SB11平・断面图(1/60)

S B 12 (第 242 図)

旧 F 2 区 (西) で検出した側柱建物である。規模は梁間 2 間×桁行 2 間 (3.30 m× 5.10 m。16.8 m²) である。主軸方向は N-63°-W である。柱穴の平面形は円形であり、径 21~41 cm、深さ 8~12 cm を測る。出土遺物は図化していないが土師器小皿片がある。推定底径 6.5 cm と小振り、口縁部が直立し、分厚く短い。14 世紀代と考える。これから建物の時期は 14 世紀代と考える。

S B 13 (第 244 図)

旧 F 2 区 (西) で検出した側柱建物である。S D 05 を切る。規模は梁間 3 間×桁行 4 間 (5.22 m× 8.10 m。42.2 m²) である。主軸方向は N-61°-W である。柱穴の平面形はほぼ円形であり、径 27~45 cm、深さ 6~21 cm を測る。埋土は茶褐色粘質土である。S B 12 と主軸方向が一致し、東梁間を相互に揃え、2.4 m 開けた配置から同時併存の建物と考える。よって建物の時期は 14 世紀代と考える。

S B 14 (第 243 図)

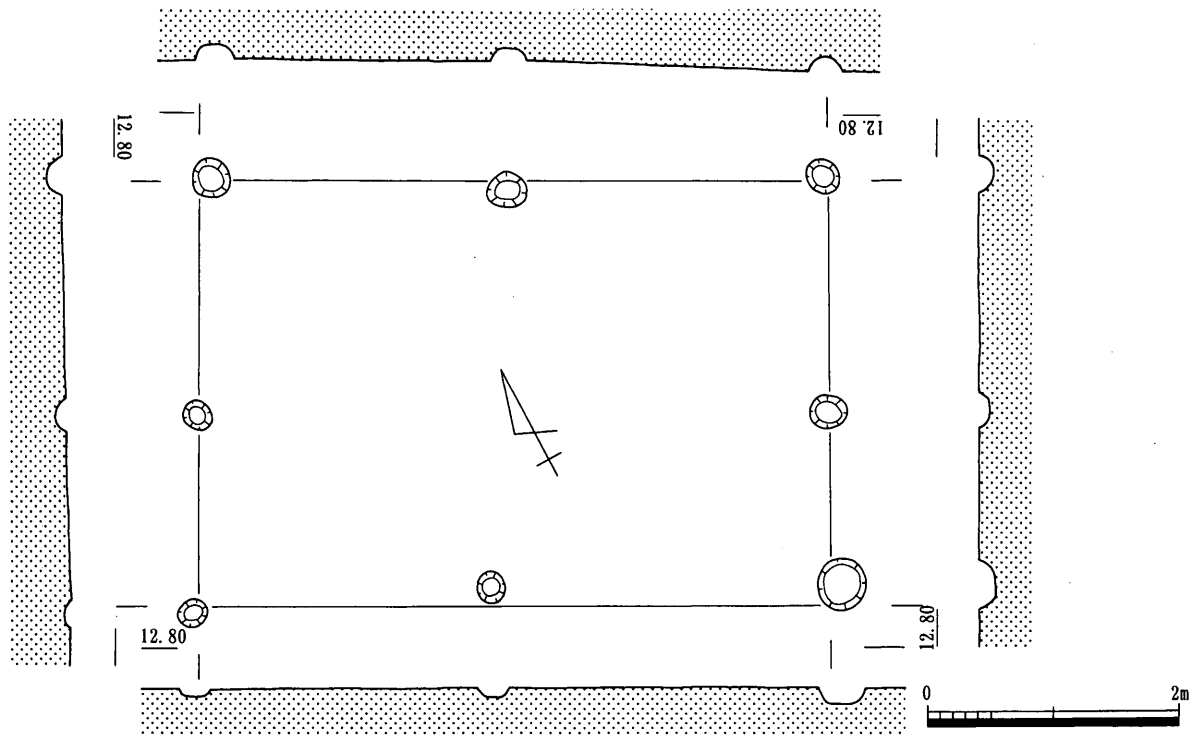
旧 F 2 区 (西) で検出した側柱建物である。規模は梁間 2 間以上×桁行 2 間 (3.48 m 以上× 7.20 m。25.05 m² 以上) である。主軸方向は N-63°-W である。柱穴の平面形はほぼ円形であり、径 27~45 cm、深さ 11~24 cm を測る。埋土は茶褐色粘質土である。S B 12、13 と主軸方向が一致する。建物の時期は S B 12、13 との主軸の一致から中世と考える。

S B 15 (第 245 図)

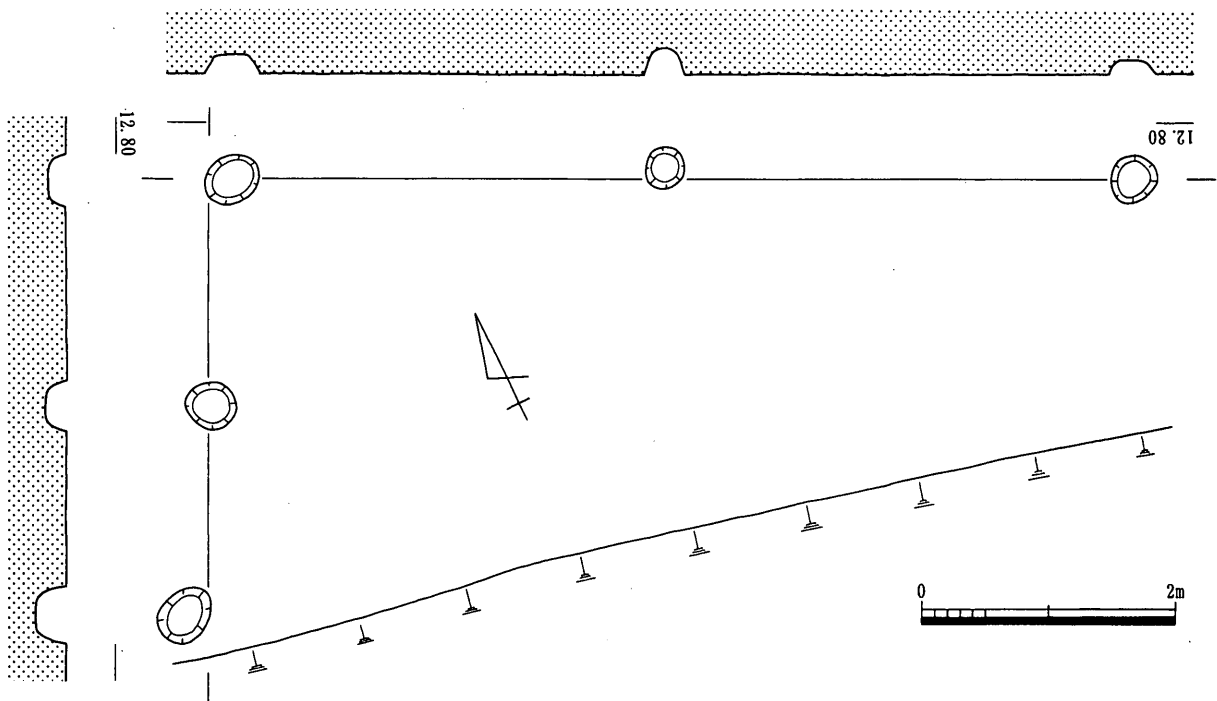
旧 F 2 区 (西) で検出した側柱建物である。規模は梁間 1 間×桁行 2 間 (1.92 m× 3.30 m。6.3 m²) である。主軸方向は N-18°-E である。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ 10~22 cm を測る。埋土は黒褐色粘質土、茶褐色粘質土である。S B 13 と主軸方向が一致し、北梁間が S B 13 の南桁行とほぼ同一線上にあるため建物の時期は 14 世紀代と考える。

S B 16 (第 246 図)

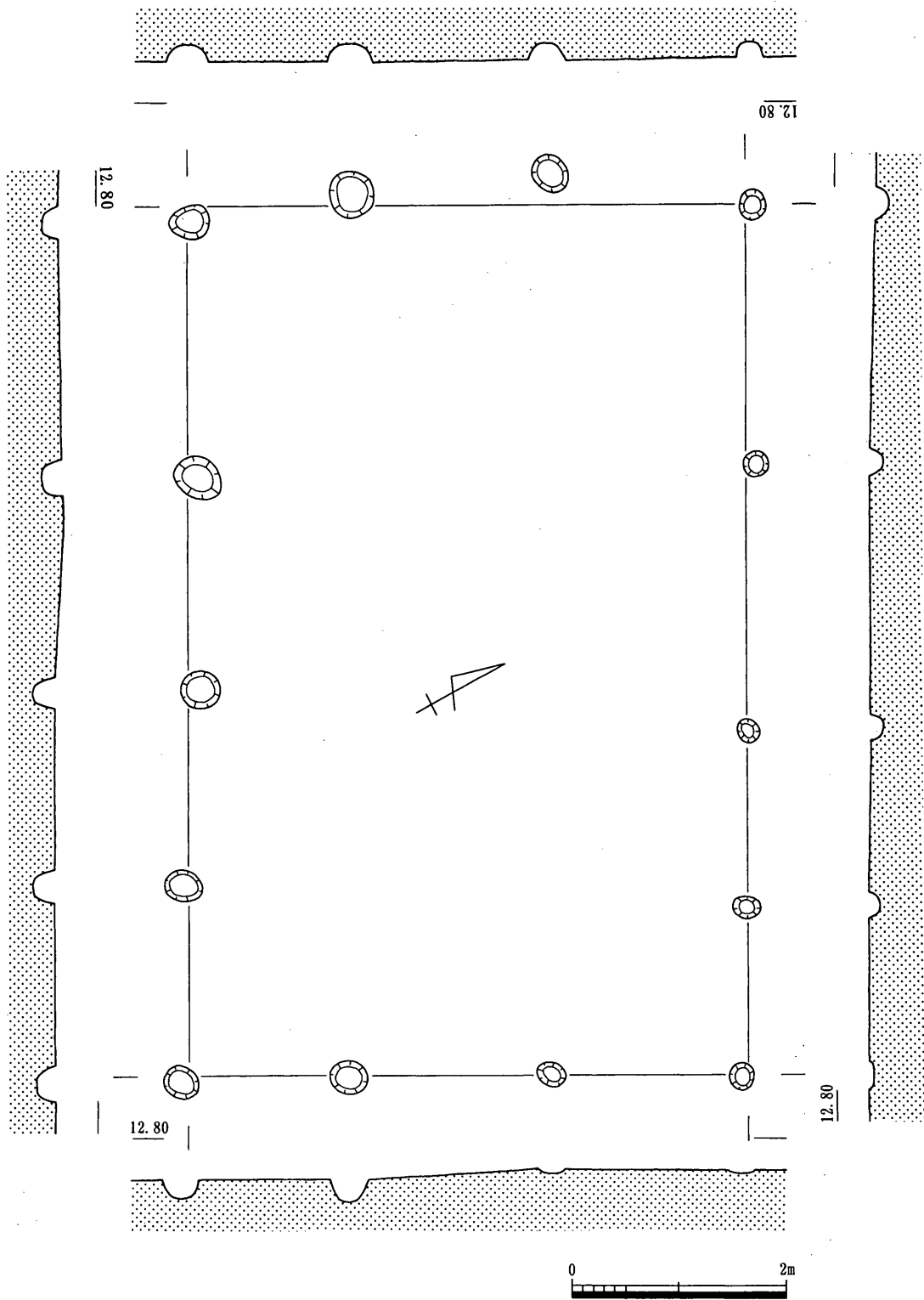
旧 F 2 区 (東) で検出した側柱建物である。規模は梁間 2 間×桁行 3 間以上 (3.96 m× 5.04 m 以上。19.96 m² 以上) である。主軸方向は N-32°-E である。柱穴の平面形はほぼ円形であり、径 15~33 cm、深さ 12~24 cm を測る。建物の時期は柱穴規模が小さいことから中世と考える。



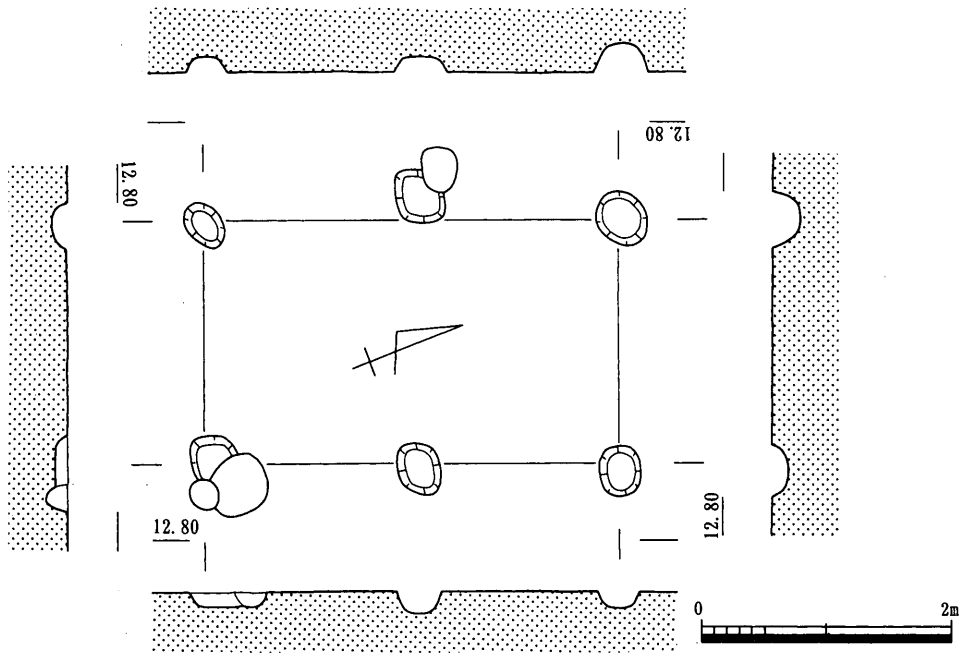
第242図 IV区 第1面SB12平・断面図(1/60)



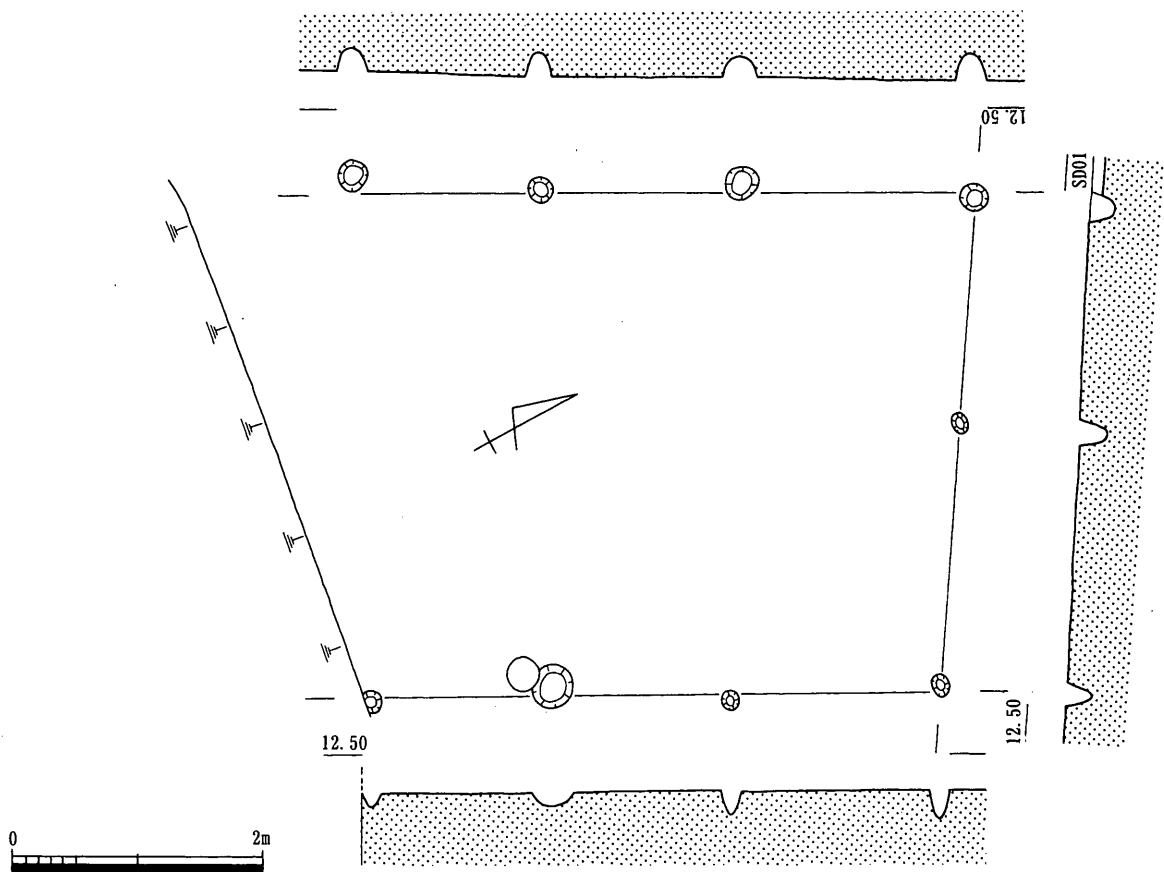
第243図 IV区 第1面SB14平・断面図(1/60)



第244图 IV区 第1面SB13平·断面图(1/60)



第245图 IV区 第1面SB15平·断面图(1/60)

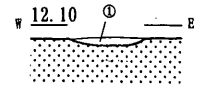


第246图 IV区 第1面SB16平·断面图(1/60)

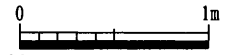
溝

S D 03 (第 247 図)

旧 E 3 区の中央部で検出した溝である。断面形は浅い皿状を呈する。幅 20 ~ 40 c m、深さ約 5 c mを測る。埋土は暗赤灰色粘質土である。出土遺物はない。溝の時期は埋土が灰褐色系であることから中世と考える。



- ① 暗赤灰色弱粘質土
- ② 黄褐色弱粘質土ブロックを少量含む



第247図 IV区
第1面SD03断面図
(1/40)

S D 04 (第 248 図)

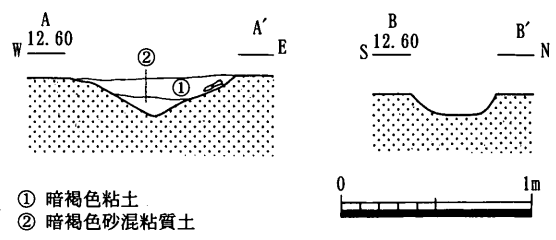
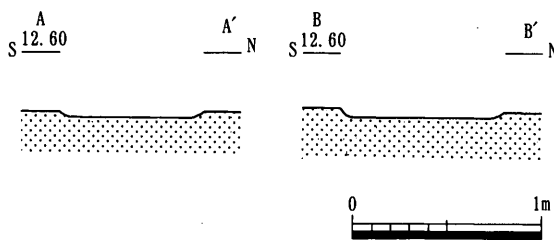
旧 F 2 区 (西) の北西部で検出した溝である。西側を土坑に切られる。断面形は浅い皿状である。幅 76 ~ 88 c m、深さ 2 ~ 4 c mを測る。埋土は茶褐色粘質土である。出土遺物はない。溝の時期は埋土と周辺遺構の時期から中世と考える。

S D 05 (第 249 図)

旧 F 2 区 (西) の南部で検出した溝である。南部が調査区外に延び、S B 13 に切られる。断面形は浅い皿状、逆三角形である。幅 60 c m ~ 1.0 m、深さ 10 ~ 18 c mを測る。埋土は暗褐色系粘質土である。出土遺物はない。溝の時期は埋土と周辺遺構の時期、これらと主軸が揃うことから中世と考える。

S D 06 (第 250 図)

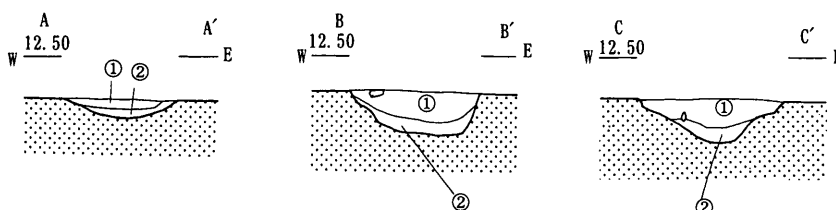
旧 F 2 区 (東) の中央部で検出した溝である。南北が調査区外に延びる。S T 10 を切り、S B 16 に切られる。北部が旧 F 1 区に延びるが、検出できていない。断面形は浅い皿状、逆三角形である。幅 60 c m ~ 1.0 m、深さ 10 ~ 18 c mを測る。主軸方向は N - 55° - W である。埋土は暗褐色系粘質土である。出土遺物はない。溝の時期は埋土と周辺遺構の時期、これらと主軸方向が揃うことから中世と考える。



- ① 暗褐色粘土
- ② 暗褐色砂混粘質土

第248図 IV区 第1面SD04断面図(1/40)

第249図 IV区 第1面SD05断面図(1/40)



- ① 黒褐色粘質土
灰色粘土ブロック含む
- ② 黒褐色砂混粘質土

第250図 IV区 第1面SD06断面図(1/40)

土坑

S K 29 (第 251 図)

旧 F 1 区の北西部で検出した土坑である。平面形は隅丸方形であり、西側が幅広である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 86 cm、短径 80 cm、深さ 24 cm を測る。出土遺物はない。埋土は茶褐色粘質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 30 (第 252 図)

旧 F 1 区の北西部で検出した土坑である。平面形は細長い長方形である。断面形は壁が直に落ち、床面が平坦である。規模は長径 1.12 m、短径 40 cm、深さ 16 cm を測る。主軸方向は N - 44° - W である。出土遺物はない。埋土は黒褐色砂質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 31 (第 253 図)

旧 F 1 区の北西部で検出した土坑である。平面形は整った隅丸方形である。断面形は壁がななめに落ち、床面が平坦な浅い皿状である。規模は長径 1.60 m、短径 1.08 m、深さ 12 cm を測る。主軸方向は N - 61° - E である。出土遺物はない。埋土は黒褐色砂混粘質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 32 (第 254 図)

旧 F 1 区の北西部で検出した土坑である。平面形は整った隅丸方形である。断面形は浅い皿状で、床面がほぼ平坦である。規模は長径 1.76 m、短径 1.28 m、深さ 10 cm を測る。主軸方向は N - 37° - E である。出土遺物はない。埋土は黒褐色砂混粘質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 33 (第 255 図)

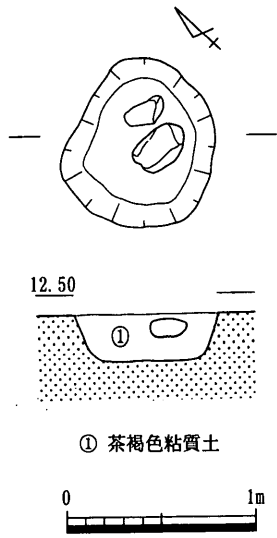
旧 F 1 区の北東部で検出した土坑である。平面形はいびつな楕円形である。断面形は逆台形で、床面が平坦である。規模は長径 2.24 m、短径 1.24 m、深さ 16 cm を測る。主軸方向は N - 47° - W である。出土遺物はない。埋土は黒褐色砂質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 34 (第 256 図)

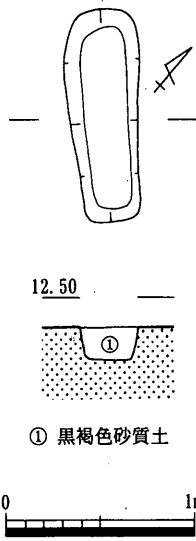
旧 F 1 区の中央北部で検出した土坑である。平面形は隅丸方形である。断面形は逆台形で、壁が緩やかに下る。規模は長径 1.04 m、短径 94 cm、深さ 20 cm を測る。主軸方向は N - 30° - E である。出土遺物はない。埋土は茶褐色粘質土、砂質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 35 (第 257 図)

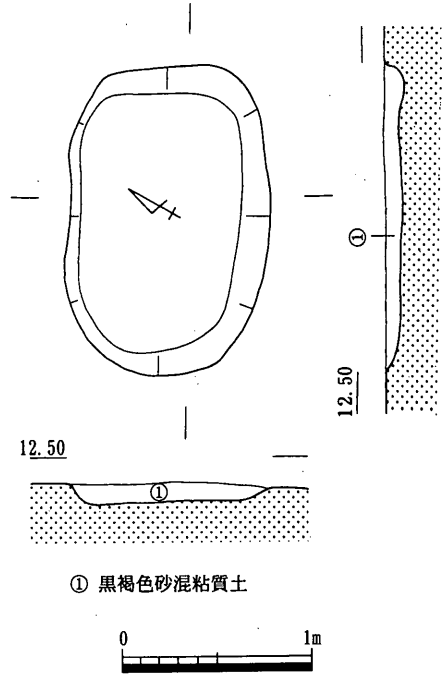
旧 F 1 区の北西部で検出した土坑である。平面形は東側でくぼむ楕円形である。断面形は逆台形である。規模は長径 1.16 m、短径 56 cm、深さ 8 cm を測る。主軸方向は N - 29° - W である。出土遺物はない。埋土は茶褐色砂質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。



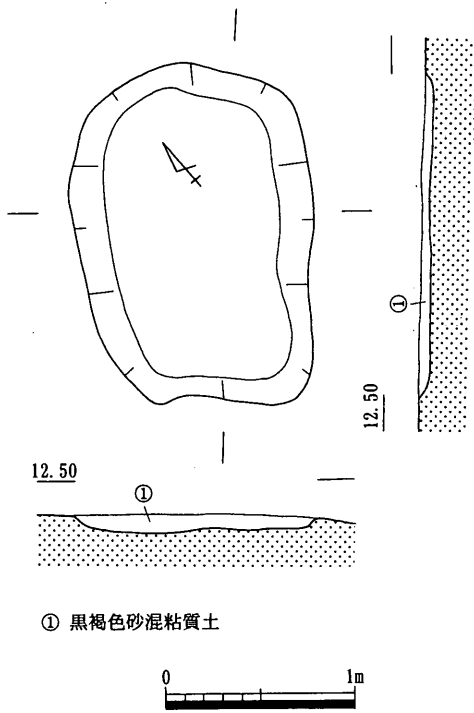
第251図 IV区 第1面SK29
平・断面図(1/40)



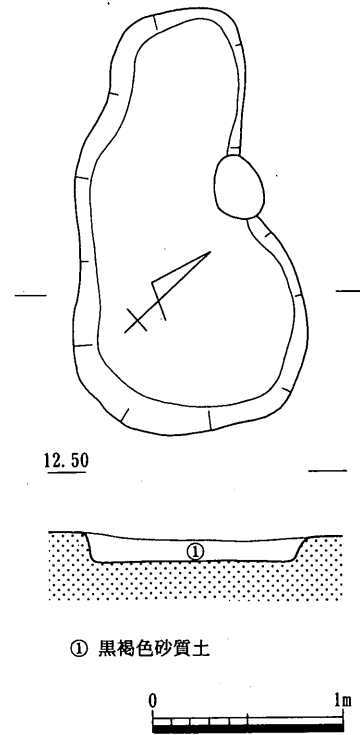
第252図 IV区 第1面SK30
平・断面図(1/40)



第253図 IV区 第1面SK31
平・断面図(1/40)



第254図 IV区 第1面SK32
平・断面図(1/40)



第255図 IV区 第1面SK33
平・断面図(1/40)

S K 36 (第 258 図)

旧 F 1 区の北東部で検出した土坑である。平面形は西側でいびつな長方形である。断面形は逆台形であり、床面は平坦である。規模は長径 1.76 m、短径 1.12 m、深さ 20 c m を測る。主軸方向は N - 37° - E である。出土遺物はない。埋土は黒褐色砂質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 37 (第 259 図)

旧 F 1 区の北東部で検出した土坑である。平面形は楕円形である。断面形は床面が北側に下る逆台形である。規模は長径 84 c m、短径 68 c m、深さ 18 c m を測る。主軸方向は N - 50° - W である。出土遺物はない。埋土は黒褐色砂利混粘質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 38 (第 260 図)

旧 F 1 区の中央北部で検出した土坑である。平面形は円形である。断面形は壁がゆるやかに下り、浅い皿状を呈する。規模は長径 96 c m、短径 92 c m、深さ 16 c m を測る。主軸方向は N - 31° - E である。出土遺物はない。埋土は黒褐色粘質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 39 (第 262 図)

旧 F 1 区の中央部で検出した土坑である。S H 06 を切る。平面形はいびつな隅丸方形である。断面形は壁が斜めに落ち、北側にやや下がる浅い皿状を呈する。規模は長径 2.80 m、短径 1.92 m、深さ 20 c m を測る。主軸方向は N - 30° - E である。出土遺物はない。埋土は茶褐色、黄褐色粘質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 40 (第 261 図)

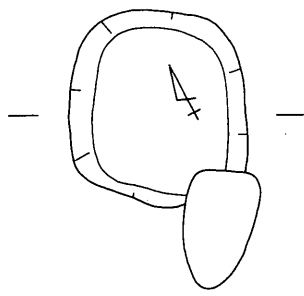
旧 F 1 区の南西部で検出した土坑である。平面形は東側が幅広な隅丸方形である。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 1.16 m、短径 84 c m、深さ 6 c m を測る。主軸方向は N - 55° - W である。出土遺物はない。埋土は黒褐色砂混粘質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 41 (第 263 図)

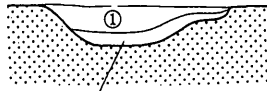
旧 F 1 区の南西部で検出した土坑である。平面形は整った長方形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1.28 m、短径 70 c m、深さ 8 c m を測る。主軸方向は N - 52° - W である。出土遺物はない。埋土は茶褐色粘質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 42 (第 264 図)

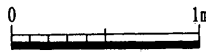
旧 F 1 区の南西部で検出した土坑である。平面形は整った長方形である。断面形は浅い皿状を呈する。床面は東側にゆるやかに下り、壁も傾斜が緩い。規模は長径 1.96 m、短径 84 c m、深さ 8 c m を測る。主軸方向は N - 15° - W である。出土遺物はない。埋土は茶褐色粘質土であり、地山ブロックを含む。平面形、規模、埋土からは墓である可能性もあるが、埋葬の痕跡は見出せない。土坑の時期は埋土より中世と考える。



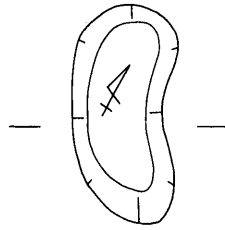
12.50



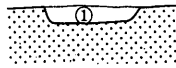
① 茶褐色砂質土
② 茶褐色粘質土



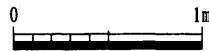
第256図 IV区 第1面SK34
平・断面図(1/40)



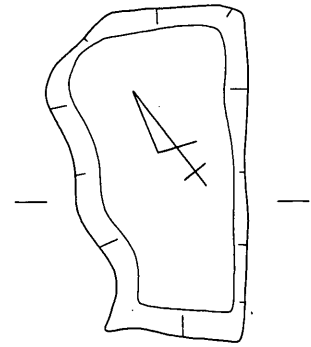
12.50



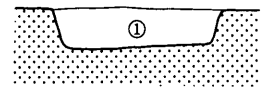
① 茶褐色砂質土



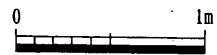
第257図 IV区 第1面SK35
平・断面図(1/40)



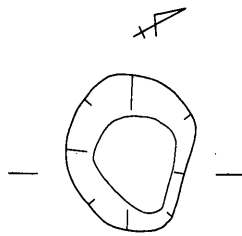
12.50



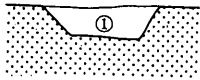
① 黒褐色砂質土



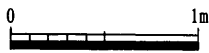
第258図 IV区 第1面SK36
平・断面図(1/40)



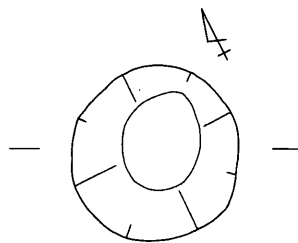
12.50



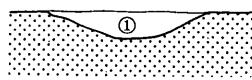
① 黒褐色砂利混粘質土



第259図 IV区 第1面SK37
平・断面図(1/40)



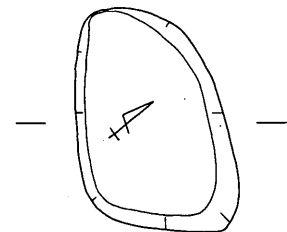
12.50



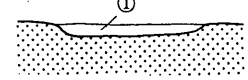
① 黒褐色粘質土(茶味がかかる)



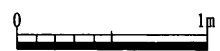
第260図 IV区 第1面SK38
平・断面図(1/40)



12.50



① 黒褐色砂混粘質土



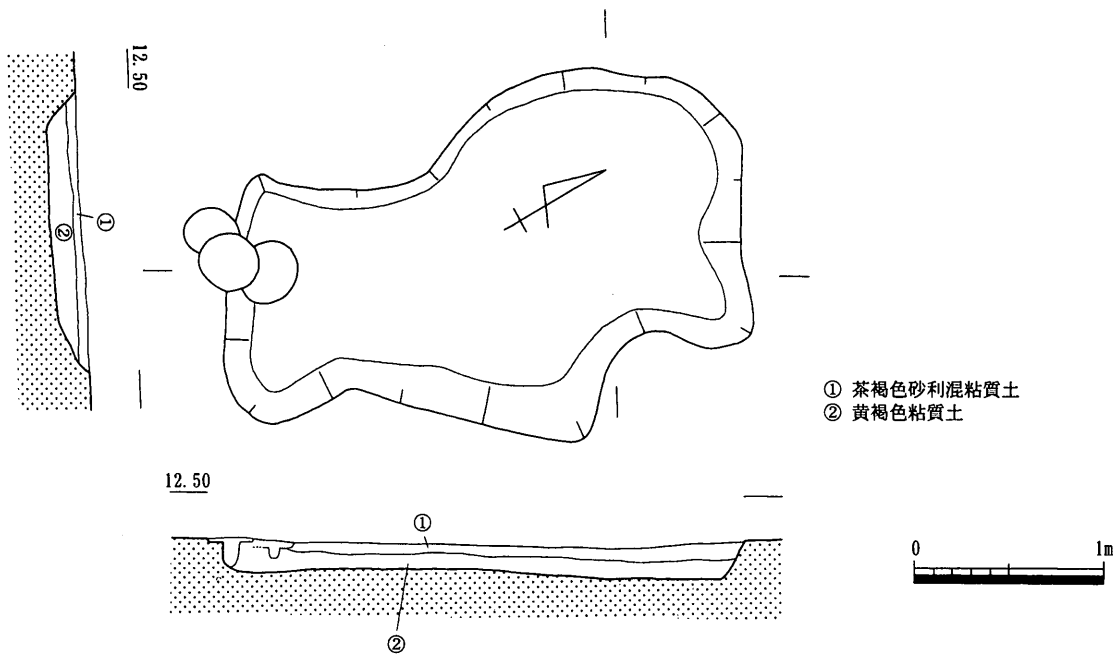
第261図 IV区 第1面SK40
平・断面図(1/40)

S K 43 (第265図)

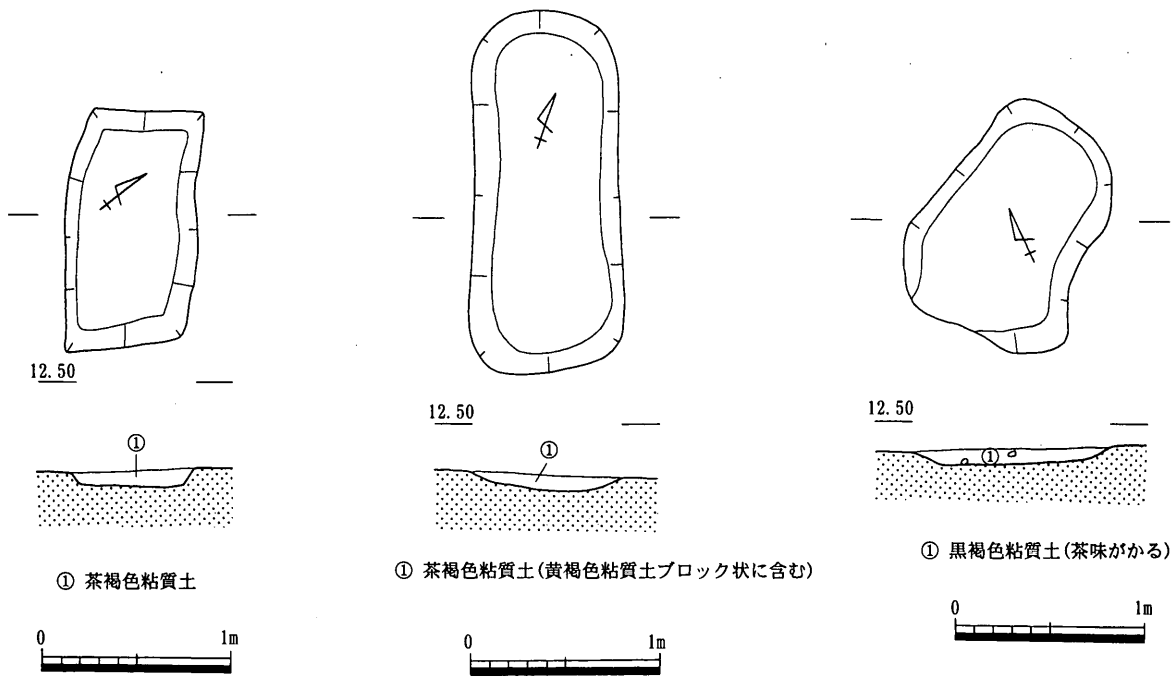
旧F1区の中央南部で検出した土坑である。平面形はややいびつな隅丸方形である。断面形は床面が西側に落ち、浅い皿状を呈する。規模は長径1.28m、短径96cm、深さ8cmを測る。主軸方向はN-52°-Eである。出土遺物はない。埋土は黒褐色粘質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 44 (第266図)

旧F1区の中央南部で検出した土坑である。平面形はいびつな円形である。断面形は逆台形を呈し、床面中央で一段凹む。規模は長径1.04m、短径96cm、深さ28cmを測る。出土遺物はない。埋土は黒褐色、暗茶褐色砂混粘質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。



第262図 IV区 第1面SK39平・断面図(1/40)



第263図 IV区 第1面SK41
平・断面図(1/40)

第264図 IV区 第1面SK42
平・断面図(1/40)

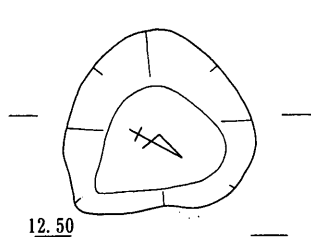
第265図 IV区 第1面SK43
平・断面図(1/40)

S K 45 (第 267 図)

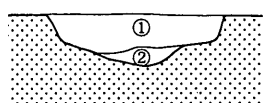
旧 F 1 区の中央南部で検出した土坑である。平面形は細長い長方形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1.04 m、短径 48 c m、深さ 14 c mを測る。主軸方向は N - 18° - E である。出土遺物はない。埋土は茶褐色粘質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 46 (第 268 図)

旧 F 1 区の南東部で検出した土坑である。平面形は整った長方形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 94 c m、短径 60 c m、深さ 12 c mを測る。主軸方向は N - 48° - W である。出土遺物はない。埋土は黒褐色粘質土である。土坑の時期は埋土より中世と考える。



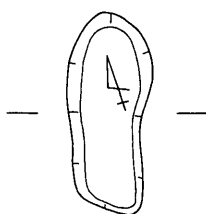
12.50



① 黒褐色砂混粘質土 やや茶味がかかる
② 暗茶褐色砂混粘質土



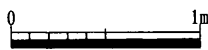
第266図 IV区 第1面SK44
平・断面図(1/40)



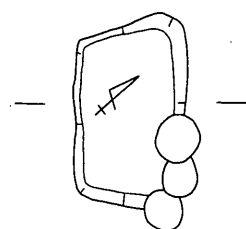
12.50



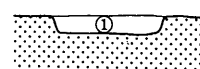
① 茶褐色粘質土



第267図 IV区 第1面SK45
平・断面図(1/40)



12.50



① 黒褐色粘質土(茶味がかかる)



第268図 IV区 第1面SK46
平・断面図(1/40)

柱穴出土遺物 (第 269 図)

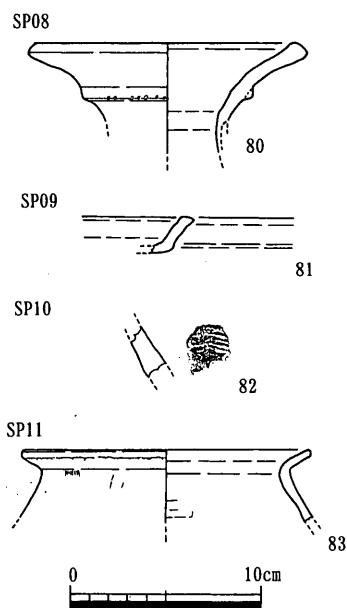
掘立柱建物、柵列を構成しない柱穴出土遺物を図化した。埋土より中世と考えられるが、図化遺物は全て弥生土器である。80は壺である。外面に断面三角形の刻目貼付突帯を施す。81は高杯である。82、83は甕である。

82は外面にタタキが見られる。83は外面の頸部上位にハケ目が残存する。

土坑墓

IV区東端部で11基の土坑群(S T 01 ~ 11)を検出した。これらは平面形が整った長方形であり、2 m前後×70 c m全後の規模を持つ。断面形は壁が直立ないし斜めに下り、床面がほぼ平坦である。埋土には多くが地山ブロックを含む。また主軸方向をそろえ、一定の間隔を開け、列状配置を示す。こうした特徴から人骨、棺痕跡、副葬品などは見られないものの墓と考える。

所属時期は出土遺物、遺構の切り合いからは判断できない。よって周辺遺構との関係から検討を試みる。



第269図 IV区 第1面SP08~11
出土遺物(1/4)

まずポイントとなるのがⅣ区 S D 06 である。溝であるが土杭墓と強い関連を持つためここで少し述べる。この溝は北に延長すると旧 E 3 区 S D 03 にあたる。距離的に離れ埋土も異なるが、Ⅳ区だけでなく東西に隣接するⅢ、Ⅴ区でも溝が極めて少ない状況で検出長が 10 m 前後を測り、主軸が一致し、延長上に位置すること、また底場レベルが S D 06 北部で 12.06 m、S D 03 中央部で 11.98 m とわずかながら下ることから本来同一の溝であった可能性が高い。(そう見れば 2 つの溝の中央にあり、主軸が類似する S D 02 も機械掘削の際に遺構面を下げすぎたため途切れているものの一連の溝であった可能性がある。実際に底場レベルは 12.08 m と S D 06 とほぼ同じである。だがここから混入と見るには大きい古代の須恵器片 (15 × 7 cm) が出土している。)

以上から 2 つの溝を 1 本と見るとⅢ～Ⅴ区で検出された中世建物のうちⅣ区で S B 06 ～ 09.12 ～ 14.16 の 8 棟、Ⅴ区で S B 03.13 の 2 棟に見られ、土杭墓群とも近似する。一方で古代に属する建物にこの主軸は見られない。よって中世に掘削されたと考えられる。(なお、これは白鳥町史で紹介されている“湊川下流左岸で見られる N - 35° - E の条里型地割”の方向と類似する。だが遺跡から北東に約 2 km 離れていること、遺跡内で坪界溝などが検出されていないことから現状では積極的に関連づけられない。)

もう 1 つのポイントはⅡ区の土杭墓群である。位置的に離れており、細かい地形的条件も異なるものの同様な土杭墓群が検出され、出土遺物から時期決定が行われているためこれについても触れておく。これらは調査区全体で検出されているが西側の S T 33 ～ 49.52 ～ 54 の 20 基 (以下、Ⅱ区西群。) と東側の S T 01 ～ 32 の 32 基 (以下、Ⅱ区東群。) では大きく様相を異にする。

まず東西 2 群について大きく傾向を捉えるとⅡ区西群については、

- ① 土杭下場長は 1.8 m 以上が 14 基 / 17 基 = 82.4% を占める。
(S T 35.38.43 が 1.8 m 未満。S T 40.41.42 の 3 基は不明であるため含めていない。)
- ② 土杭下場幅は全て 80 cm 以下である。
- ③ 墓同士の間隔は約 60 cm を測り、ほぼ一定である。また切りあいがない。
- ④ 主軸方向は近接する墓がなす墓群ごとにほぼ一致するものの群が変わると異なる。だが南北軸か東西軸に概ね統一され、帯状に形成される、といった状況が窺える。

すなわち同様に細長い墓杭が③、④で窺えるとおりに規制的に配置されている。また切りあいもほとんどないことからそれぞれの墓群が短期間に形成されたことが推定できる。各墓群は主軸方向のずれなどから時期差があると考えられるが出土遺物より中世の範疇に収まる。

一方、Ⅱ区東群は墓杭下場長が西群より小振りのものが多く、墓杭プランも細長いもの以外に幅広のものも混在する。また墓同士の間隔が墓群内で一定せず、主軸方向も西群ほど一致しない。このため列状をなす部分でもややルーズなまとまりになる。時期は出土遺物などよりいずれの墓群も 8 c 代とされる。このようなⅡ区西、東群の状況から中世墓が古代のそれに対し規制的である状況を見出せる。

次いでⅣ区の土杭墓群に見られる要素は以下のとおりである。

- ⑤ 検出位置から S T 01 ～ 04 (以下ⅣA群) と S T 05 ～ 11 に区分できる。後者は切り合い、主軸方向のずれから S T 07 ～ 09 (以下ⅣB群)、S T 05.06.10.11 (ⅣC群) の 2 群に細分できる。
- ⑥ 土杭下場長はⅣA、ⅣB群が 1.8 m 以上、ⅣC群が 1.8 m 以下である。
- ⑦ 土杭下場幅は全て 75 cm 以下である。
- ⑧ 墓同士の間隔はⅣA、ⅣB群では約 60 cm とほぼ一定である。ⅣC群では S T 10.11 が接する。

⑨ 主軸方向は各群内ではほぼ一致するが、群を超えると異なる。ただ東西軸に統一され、IV A、IV B群は整然とした列状をなす。

①～⑨を踏まえてIV A、B群とⅡ区西群を比較すると前者に見られる複数列埋葬という形態は後者で見られない(Ⅱ区ST 52～54は可能性があるものの不明瞭。)ものの前者は後者の特徴である①～④を満たし、規制的な規模、配置状況を読み取れる。またIV C群をⅡ区西群と比べると⑥、⑧で異なり列状配置も示さないため規制のとまで言いがたい。だが東西軸で揃い、埋土も類似するためIV B群より後出するものの近接した時期と考える。

Ⅱ区西群を構成する墓群については報告されているとおり、またこれにIV A・B群、IV C群を合わせても墓群ごとで主軸方向などに異質性が見える。このことは立地条件、ある程度の時期差、集団差などを反映していると思われる。だが、IV A、B群はⅡ区西群と共通する強力な埋葬規制から、IV C群はIV B群と近接した位置、埋土から中世に否定できると考える。以上のようにIV区土杭墓群については周辺に位置する建物、溝、土杭墓などとの関係から中世に属すると考える。

ST 01 (第 270 図)

旧E 3区の北東部で検出した土坑墓である。東側が調査区外に延びるが、平面形は整った長方形である。断面形は壁がほぼ直に落ち、底が平坦である。東側に向かってごく緩やかに下る。規模は長径1.90 m以上、短径68 cm、深さ26 cmを測る。主軸方向はN-66°-Wである。出土遺物はない。埋土は2層に区分される。どちらも黒褐色粘質土であり、地山ブロックを含む。土坑墓の時期は冒頭での検討より中世と考える。

ST 02 (第 270 図)

旧E 3区の北東部で検出した土坑墓である。東側が調査区外に延びるが、平面形は整った長方形である。断面形は壁がほぼ直に落ち、底が平坦である。東側に向かってごく緩やかに下る。東西方向では2段落ちとなり、西側で幅15 cmほどのテラス部がある。規模は長径1.84 m以上、短径70 cm、深さ38 cmを測る。主軸方向はN-65°-Wである。出土遺物はない。埋土は2層に区分される。どちらも黒褐色粘質土であり、地山ブロックを含む。②層は2段落ちの下位に水平堆積する。土坑墓の時期は冒頭での検討より中世と考える。

ST 03 (第 270 図)

旧E 3区の北東部で検出した土坑墓である。平面形は西側がややいびつだが、整った長方形である。断面形は壁が直に落ち、底が中央に向かって緩く傾斜する。規模は長径2.10 m以上、短径70 cm、深さ6 cmを測る。主軸方向はN-69°-Wである。出土遺物はない。遺構の遺存状況が悪いため埋土は単層である。黒褐色粘質土であり、地山ブロックを含む。土坑墓の時期は冒頭での検討より中世と考える。

ST 04 (第 270 図)

旧E 3区の北東部で検出した土坑墓である。平面形は中央でやや膨らむが、整った長方形である。断面形は壁が直に落ち、東西方向では2段落ちとなる。規模は長径2.26 m、短径80 cm、深さ38